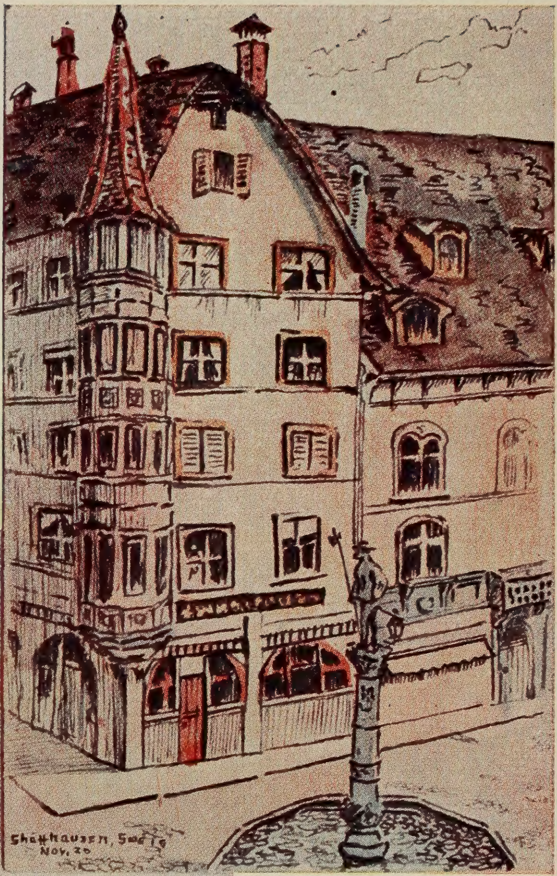


# 有島武郎全集　第八巻





（上）シャフハウゼンの
ホテル・シュワン
（ティルダの生家）

（下）ベネチアの
聖マリヤデラサルウテ寺院

——歐洲旅行スケッチから——

# 第八巻目次

有島武郎全集第八卷

# 書簡集

# 一八九九年

## 兩親宛――十二月二十六日於札幌〔一〕

拜啓三十二年も愈ゝ殘少く相成申候處、御多繁の間にも皆々樣益ゝ御淸適の筈慶賀此事に奉存候。小子亦幸に至て無恙に徂年し得申候段乍憚御休神奉願候。當地本年は降雪至て稀少に有之候處、一昨夜より昨夜にかけて非常の降雪有之、加之烈風地を捲き雪を揚げて其猛威當難く、一時往來は全く止み、天地は只風の荒るゝに任申候。近頃小子は、家の都合にて舊大島氏と共に在りし家に引移居候爲め、壁屋の振動は地震の如く、中々壯快とも云ふ可き光景にて有之候ひしが、今朝に至りて漸く靜まり、地上の積雪急に增加仕候て、初て年の暮の如き心地仕候。

先日海江田氏出札せられ、宮島氏と懇談被致候。實地檢査の儀は來年正月八日以後の事と決定し、猶海江田氏より同地に關する事情委細御話有之、略双方の事情相通申候。宮島氏は其後道廳に出入して、同地及其附近の地形狀態等取調べ、海江田氏は一先島津農場に歸られ申候。尙同氏には年末の禮として金五圓丈け贈置申候左樣御了承被下度候。

試驗は去る十八日結了仕候。成績は三十五人に對する六番に有之、總平均は八十五點七分に御座候。翌日より冬期休業と相成り申候。小子は此休暇を利用して靜寂なる處に讀書と保養とを仕度、用のなき間丈け幌別か登別の溫泉にて自炊生活仕度存申候。御許可の程奉願候。山崎老婦人は此度出京被致候へば既に御面會も被爲入候半と存居候。

街上の人は金錢の催促に、返濟に、忙はしき間に、机前に靜坐して世事を知らざるかの如く讀書に耽り得る書生の身の上は實に難有至極に有之偏に御高恩の程感體罷在候。

拙書御手許に達候頃は既に年改りて、雜煮の椀の數重なり、靄々たる和氣の間に新年を迎へ給ふ時なるべきかと奉存候。何卒美はしき明治三十三年を迎へ給はん事を奉翹望候。草々頓首。

# 一九〇〇年

## 兩親宛——三月十四日於札幌　〔二〕

先日は御玉章併に壬生馬行郎の寫眞御惠與に預り奉鳴謝候。

御擧家皆々樣には益〻御淸穆に被爲入候由大慶此義に奉存上候。壬生馬行郎共に驚く斗成人致され壬生馬は立派な青年に成られ行郎は甚隆三に似たる樣相見目前面會の機を得たる樣なる心地仕候。降て小生儀其後益〻健全に有之、去る五日より七日まで千歲と申候處に修學旅行有之、早朝橇に乘じて同行者三人と先發し、月寒（ツキサップ）と申候處に師團の兵營を見、薪炭を積みたる橇に出遇ふ事幾囘と云ふ數を知らざるに、毎日かく多く都會に出し都會はこれを需要しつゝあるかを見て其消費力に大に驚き、島松に中食し三時半頃千歲に着仕候。中途橇を轉覆せしめらるゝ事合せて四度、小生は先地に於て食すべき大菓子箱を預り居候爲め是を抱へて雪中に半身を埋め其都度大笑仕候。道の嶮惡これにて御推察可被遊候。但し平滑鏡の如き雪道を馬橇に乘じて長驅するの快は經驗なき人の到底解する所にあらずと存申候。千歲は落々たる小僻村　不過候得共往昔は室蘭札幌の通路にも當り隨分繁華を極め候由。主上も嘗て御通輦ありし處に御座候得共汽車開通以來全く衰頽し立派なる旅籠屋の見る影もなく荒れたるは昔を忍ぶに餘あり候。久振にて人間に遠く自然に近き幽地に來候事なれば實に心胸の豁如たるを禁ずる能はず明日の壯遊を胸に畫き申候。此夜同窓四人爐邊に相集り他者熟睡の後まで快談し一時に至りて就寢仕候。

五日に相成候。不幸にして天曇り折々降雪有之候ひしも早起して結束しつゝ出立致候。蓋し目的地なる孵化場は當村を橫流せる千歲川の上流二里の處に有之候。此道中甚だ幽邃にして殆ど太古の如く林樹を穿ちて河邊に出で河邊を去りて林樹に入り委蛇たる一道の小徑は小子等を屢々名狀すべからざる閑寂古雅の淸境に誘申候。折々人家ありと見れば是皆アイ

ヌの住む者に有之、勇悍なるアイヌ犬は異装の小子等に吠ゆる事頻りに御座候。正直にして朴敬、勇猛にして多情なるアイヌの遺民が長髯を振うて山中の「自然」と勇ましき戦闘を爲し、酷薄なるシャモ（彼等が日本人を指して云ふ語）の蛇の如き毒手を避け居る有樣は轉た愁痛にして淸新なる一篇の詩に御座候。小子は例の自然癖に不堪獨り後れて呻吟しつゝ心中無限の慰藉を得て孵化場に着仕候。

人工を以て鮭の卵を產ましめ適當の裝置を以て之れを孵化し他魚の襲擊に堪ゆるに至りて之を放ち海に下らしむる者之れ人工孵化大體の組織に有之、近來當道には處々設置せらるゝに至申候。當場に於ては年々二千萬粒餘の卵を孵化仕候由、赤色の美しき卵に眼を生じたるもの卵を破りて魚體の現はれたるもの等種々有之、中々の奇觀に有之候。此の說明を聞き採集を終りたる後再び前路を經て歸り此夜も千歲に一泊翌日步行して歸札仕候。

品川氏に次ぎて外山氏の死去あり共に一方の才能ある人を失候事惜怨の次第に御座候。

ボアーも追々風向不宜候由氣の毒至極の次第に御座候。長き物には卷かれるとは云ひながら何卒正義に由て立ちしトランスバールの面目を宣揚したき限に御座候。ヒリッピンも哀れなる狀態の由、世の中は强慾なる强力者の勝手氣儘の如く見え申候。然し正義に依るものは最後の勝利者たる可きを信じ彼等の上に祝福の加へられん事を祈居申候。

當月分學費冬の事とて薪代其他防寒の用意に平常よりは相掛り申候得共不足なく居申候間御配慮被下間敷願上候。但し小子儀袴非常に相損じ風通し大分澤山相出來申候間乍御面倒御新調なし被下度、丈けは二尺三寸許、柄は可成よごれの目立たざる黑色せる者に願上度甚恐入候得共宜敷奉願候。

尙御序の節左の書物丸善にて（中西屋にても可有之や）御買上げの上御送付願上候。（中略）尙眞狩別の儀宮島氏に於て未だ少々調付兼候樣子に有之候得共今兩三日御待被下度爾あらば兎角の御返事申上らる可く候。

乍末筆不順の候折角御自愛奉祈候。早々頓首。

尙去る四日にはわざ／＼小子の誕生御祝被下候由唯々感謝の外無之候。小生は自らこれを全く忘却し居り同月同日生

れなる森本と談話の際二人思ひ出し二人ながら大笑仕候。互に口上に祝し合ひたるのみ、赤飯もなく菓子もなく氣樂なる事に有之候。

## 母堂宛——四月二十七日於札幌　〔三〕

拜啓春暖の候に相成申候處御學堂皆々樣益〻御淸祥の段大慶此事に奉存上候。

次に小子亦幸に至て元氣旣に去る二十三日の體格檢査に於ては

身長　五尺三寸二分　　體重　十四貫八百目

胸圍｛常時二尺八寸三分
　　　盈虛の差略二寸

の成績を得、强健と注せられ申候。此頃は當地も氣候極めて宜敷相成申候間、朝は五時より五時半に起き夜は十一時頃に寢ね、コツ〱やり居申候へ共一向疲勞も感ぜず實に之れは小子一生の幸福と存じ、併せて幼時の衰弱と度々の御丹精とを思ひ實に感謝の念に堪不申候。

大重氏逝去の事實は或新聞にて一寸見候樣覺候も、多分人違ひなるべく、よもや大重氏には非ざる可しと存居候ひしに果して同氏にて有之候事唯驚愕の外無之、壯健に見えたる人も如露の命果敢なきものと存申候。短きものは人の命、人の命より長くして而かも至つて短きものは名譽高名、唯々人が其能を盡してなしたる仕事は、小石一つ動かしたるにさへ無限の生命あるを思ひ、小子同室の河野氏が飼へる小鳥の籠の中に閉こめられたるものに歌一首與へ申候。

よしや世は汝につらくもつらき世を歌ひ淸めよ其細き音に

御笑覽被下度候。

河野氏の件に付き母堂態々參邸有之候由乍例御懇心實に感入候。同氏も未だ十九歲なる弱年と申し殊には生來體格至て

不健の方にて、唯諸種の體育によりて僅に健全を得居る次第に御座候へば、此運動の好時期には却て適宜の體育を爲す方可なりと存じ深く勉學を忠告不仕候。然し氏は所謂江戸子の質にて、熱したる所には滿腔の力を注ぐ方故、今は遊びに殆ど寸暇なき有樣に御座候。時々は不及乍ら出來得る丈けの忠告を爲し又自ら其先導とならん事を勉可申候。
最早櫻も散り果て候樣子御庭前の佳香ある花も泥土に委し候か、當地も昨今は漸く春めきて嫩芽は未催さず候へ共、花曇りとも云ふ可き空に時々霏々たる細雨さへ致申候。今夜も蕭々たる雨の音靜かに机邊に聞居申候。
皆々樣の御高詠澤山御潟し被下實に難有、身其境にある心地仕候、小子も負けぬ氣となりて腰折一首
梅櫻散りしく中にうれしくも心の花の盛り久しき
眞狩別の件如何御運相成候や乍蔭御案申上候。證明書漸く下附相成申候間同封御送付申上候。御落手奉願候。
先は御返事旁右申上度草々。

## 兩親宛――六月四日於札幌〔四〕

拜啓御玉章拜誦仕候處御擧家皆々樣益々御健勝に被爲入候段奉賀候。壬生馬の病氣も左程には無之樣子に承知は仕候へ共、何分病症不善の樣に存ぜられ候。何卒充分保養仕候樣御傳聲奉願上候。
土地の儀確かに拜承仕候。早速坂本樣へ御傳言可申上參上仕候處、折惡敷上川地方へ御出張被致候由に付其儘歸宅仕候。小生等も水產學研究の爲め明日より三日間全級余市地方に修學旅行有之候爲、暫時不在と相成候間、若し其間に坂本樣御歸宅もやと存じ御仰の趣相認め同氏宛に差殘申置候。期日も愈々切迫仕候事に御座候へば何分速かに御措置の程御便利と奉存上候。拓殖銀行等も隨分繁忙の樣子に有之候へば、土地に對する熱度は當道に於て隨分高き事には有之候へ共、坂本氏より御紹介被下候人も東京に常住し居る人らしく、當地の事情にも餘り精敷とも存ぜられず候間、充分あてにする譯には參るまじく、久慈氏との御約束を御履行被遊候事と御豫定の事最も堅固に有之候半かと乍恐推察仕候。坂本樣の御話に

も「毎日々々土地の事を色々と取扱うて見れば如何にしても北海道の土地に有望なる未來ありとは思はれず勿論五十年六十年の將來は知らず、二三十年にして投入資本に對し滿足の利益を擧げん事は覺束なし」と申され候。眞に左樣らしく被考候。唯北海道に土地を持つは、利益以外に土地と申候强固なる不動の基礎を有すると云ふ點に於て着手すべき事と存ぜられ申候。

當地に參候電報によれば、トランスバールの首都プレトリヤも遂に陷落させられ候由、緣なき他國とは申ながら、亡國の恨み如何に長からんかと同情の至りに有之候。

出張中の二敎授も歸來せられ、學業も多忙となり、試驗も相近づき申候。結了出京膝下に高容を拜するも近きにある可く、亡祖母樣の御命日も早く旬日內に差迫申候事驚かるゝ計に御座候。

御兩親樣の御懷舊も乍憚奉恐察候。

先達靴の代價請求申上候處、昨年被下候五十圓中より仕拂へとの仰拜承仕候。同金額御送與被下候際、父上樣より、土地の件に用ゐて餘は小子に使用して可なりとの御仰有之候間、書物の購入其他必要缺く可らざる費用には相用申候へ共靴の如きは如何やと存じわざと御請求申上候次第に御座候。何れ使用の計算は書認め入御高覽申候。

尊地は既に暑氣中々烈敷被爲入候半と奉遙察候。當地は朝夕は未だ冷涼秋の如くに御座候へ共晝間隨分暖氣强く御座候。然し小子はメリヤス襯衣一枚あはせ物あはせ羽織を着居申候。四邊の新綠は新たと相成り實に快き時節に有之候。當年は貴地方には惡病時々發作の樣子、乍憚御自愛御事一に被遊度奉祈上候。先は右申上度、草々頓首。

# 一九〇一年

## 宮部金吾氏宛——八月二十五日於東京　〔五〕

拜啓其後御健康如何に御座候や。追て冷氣催來候得ば皆々樣御機嫌よく被爲入候半と奉遙察候。

去る二十日の夜麹町區平河町寶亭に於て內村先輩及び生等四人相會して晩食を共にし、談獨立敎會の事に及び快談慷慨交〻にて御座候ひし。內村氏の獨立敎會に對する意見は、甫め同敎會を創立せる時の靑年の心は實に大膽なるものにして同敎會の天職として世界に向ひ宗派的偏頗心の不可を宣傳せんとしたる者なれば、獨立敎會の存在を永久にせんと欲せば何處までも此主義を貫徹せざる可らず然らざれば同敎會存在の理由は消滅するなり。果して然りとする時は同敎會を牧すべきものは創立者と同境遇にありて最も創立當時の事情に同情を有し得べき札幌農學校出身者之れに膺るは至當の事にして、苟も他の敎會他の敎派に於て養成せられたる者は縱令同情ありとするも其程度に於て大差あるべきが故に、此の如き人を牧師とするは殆ど敎會の理想を沒了すると同一の結果に陷らんことを恐る故に今若し適切なる牧會の人を發見する能はずとせば敎會を閉ぢて他日の成立を期するも可なり。又當時敎會內には頗る曖昧の信者多き樣見受けらるゝが是れは一つ斷然たる處置に出で大淘汰を行ふは我が敎會の眞正なる復活をなさしむる上に頗る切要なる事なりと信ず。兎にも角にも氣候秋に入らば微行して札幌に至らん、而して窃かに數人の人を集め獨立敎會の成立せし所以を充分に述べて同敎會の眞天職を明かにせん。而して創立當時衷心より同情一致したる人々（黑岩、內田、大島、宮部、余）敎會の元老會議を開く事を見ば更に幸なりと申居られ其他敎會創立當時の眞事情等委敷伺申候。先生が獨立主義の爲めに十年一日の如く苦心奮鬪せられたる事生等に取りては實に多大の感謝と奮發とを植せしめ申候。

先生生等の思ふ所も不過之候。獨立敎會にして適當の說敎者牧會者なき間は講壇を閉ぢて謙遜にして眞面目なる感話祈

禱會を爲さば如何に御座候や。義務的なる同情薄き說敎を聞かんよりは確かに多くの效果あるやに存ぜられ候。何よりも在來の靑年諸君竝に九月より新たに來會する靑年諸君に充分の便宜を與へ給はん事を切に願上奉り候。田島兄の仰により昨日二本榎に北野氏を訪問致申候。生等の見る所を玆に忌憚なく申述べ候間何卒其邊御含みにて御推察願上候、北野氏は年齡三十二三の人に御座候。子供は四五人居られる樣見受け申候（少くとも同棲者）。明治學院に學ばれ橫濱海岸敎會を牧し後高知敎會に轉じ而して渡米二年にて去る六月歸朝致されたる由に御座候。氏の獨立敎主義に對する意見は諸外國の如く一の敎派の腐敗墮落等の爲めに已むを得ずして他の敎派を生ぜるが如きは眞に已むを得ざる者なれども、日本の如く未だ何等此の如き現象の必要なき國に於て直ちに諸外國に發達せる敎派を輸入するが如きは眞に無意義の極なれば、充分其撲滅の爲めに力を盡したしと云ふに有之候やに聞取られ申候。而して氏の敎派と關係を絕ちしは米國に航せる後にして退會願を日本基督敎會に出したるに日本基督敎會は放逐致申候由に御座候。而して氏は近々中本鄕なる櫻井女塾の近傍に轉居し同塾に設けられんとする敎會を牧する事と相成申候由に御座候。見たる處（固より初對面殊に生等の經驗少き凡眼を以て見し事なれば參考として御高讀願上候）寧ろ落付きたる溫厚の人の如くに御座候。而して云ふ處も決して不進步的には御座なく候。獨立主義に取りては賴もしき所も澤山有之候。然し家計の困難は人をして屢々思ふ所の外をも口走らしむる事をも思考の中に入るゝの必要もあるやに存ぜられ申候。內村氏の云はるゝ絕對的の同情者は眞に他人の間に求め難きの感有之候。尙獨立敎會の內情等に付きては內村氏に問合はされん事を云ひ殘して歸來候。

申上度儀尙多く御座候得共思ひ出したる節に讓申候。折角御自愛專一に遊ばされ度、主の祝福深く御全家の上にあらん事を祈上候。草々。

## 宮部金吾氏宛――十月二日於廣瀨河畔　〔六〕

拜啓。其後は御無沙汰申上候段平に御海恕願上候。小生一昨日夜東京出發森本木村の住居せる靜閑なる家に暫く同宿す

る事と相成札幌以來多得難く候ひし聖快を得たるを感謝致居申候。當地に參候前内村様を御訪問申上候て教會歷史の儀につき相談申上候處、大に賛成せられ書物として出版する必要あらば左様致可き事なれども「聖書の研究」に掲載せば讀者の數も從つて多數なれば都合よかる可しと云はれ、本月より十二月までの誌上に於て多大の頁數を與へらるゝ事に相談相調申候。斯様に相成候得ば内村様の札幌行も早く出來可申（若し君が夫れを書き校正の勞を取り吳るれば十月十日頃より出發する事を得ん非常に好都合なりと申され候。但し是れは誰にも祕密にせよとの事）旁ゝ好都合と存申候間獨斷の様に御座候ひしも夫れに決定致候様致申候。此地に來居候間勉强して執筆に從事致候考に御座候。尤も同雜誌へ掲載するものは一個の歷史家として獨立教會を描く可く成功も過失も善も惡も共に隱す所なく書けとの内村様の御注意に御座候得ば出來得る丈け其意を體する積りに御座候。又餘り同教會の報告じみ候ても一般の讀君には興味を與へ申間敷候間是も充分加減致候積りに御座候。されば委細の報告を聞かんとする遠地にある獨立教會員に向つては或は別に書物として出版するの必要もあらんかと存候。如何のものにや。尙御高慮の程御教示願上候。

尙明治二十二三年頃より最近に至る教會の閲歷は既出の教會歷史にも無之小生も一向存ぜざる次第にて記述に困難罷在候。何卒先生等其當時の事可成委敷御思出しの上田中稔氏にでも筆記願上候事相叶申候得ば幸甚に御座候。若又其頃の參考書有之候得ば御纏め御送付被不候ても宜敷と存上候。

小生、來七日夜まで當地に滯在の上歸京候積に御座候間、若し東京に御書面被下候際は麴町區下六番町十番地に願上候。東京にあり候ひし小生に取りては此地實に心地よく精神大に爽快を覺えて感謝多き生活を送居申候。此地の風光を思ふに付け尊地此頃の美しさ思出され三人集る每に尊地の事のみ申暮し居候。

井街にも面會致し家は賣却相濟み母堂及弟妹諸氏は近々の中に歸國有之様子、彼の苦衷思ひやられて同情に不堪候。

先生の御健康近頃如何に被爲入候や、何卒充分の御攝養被遊度、御學家皆々様の上に祝福の愈ゝ裕かならん事を切に奉祈上候。草々。

此度は森本よりは學校の方非常に多忙故御手紙頂戴せしにも不係御返事不致候故宜敷傳聲可致樣申出候。彼は矢張當地の所謂宣教師間にありて宗教上の意見は常に相反馳せる樣子に御座候得共充分愼重の態度を保てる由、殊に彼が獨立教會員たる事は彼等の中に於て殊に彼が光榮を感ずる所の由に御座候。

## 足助素一氏宛――十月十二日於麴町區下六番町　（七）

今朝兄の血と涙に滿てる手紙を落手し繰り返して見、今夜も二度三度繰り返して見、僕は喜悅と恐怖と悲觀の不思議に混合せられたる感慨に滿ちた。僕は兄が眞面目に其疑惑を透視せんとし是を忘却せんと務められざるを喜ぶ。第二には兄が其深く暗き疑惑の解釋を僕に求められたるを怖れる。第三には僕が恐らくは兄の衷心の要求を充し能はざるかを思うて悲しむものである。然し僕は僕の best を試みねばならぬ。

第一に僕は兄の寬大なる宥恕を求めねばならぬ。僕は札幌に居る時から兄は「Warmth」を得ないのでなく「Warmth」を失つたのではないかと思つた。若し間違つたら免して吳れ給へ。兄は失戀の人ではないか。兄は札幌に來らざりし前に於て靑年に取りては最も悲慘なる此苦き杯を味はつたのでなかつたか。是は僕が空想の空想より（但し心よりの同情を持てる）產み出したる當推量に過ぎないが、思へる事を語らざるは不德と思ふから敢て告白する。其果して然るか否やは兄の次便を待たう。僕は此苦味に就ては多少の同情を捧げ得ることが出來ると思ふ。

「暖さ」、兄は眞に人心の眞中に這入つた、是れが僕の切に喜ぶ所である。「暖さ」は實に人間が先づ何者よりもさきに求むる必要物である。世には眞の「暖さ」に代ふるに「溫さ」位を以てし「暖さ」を忘れんとする者がある。然し兄の如き人が「溫さ」位で滿足の出來ないのは僕が重々同情する所である。僕は兄に「暖さ」を神に求めよと勸めまい。（勸めたいは山々なれども）又兄の此頃の感想が一時の激情より若くは肉體上の關係より起つたものとは云はぬ。只兄なるが故に僕は一言言はんとする事がある。『世は兄に一の「暖さ」をも齎さぬとするも兄は世に「暖さ」を供し得るにあらずや』是れであ

る。世が兄に「暖さ」を齎らさずとて兄が「暖さ」を世に供する特權は失はれない。兄は横行濶歩して世に「暖さ」を供し得る特權が永遠に確立せられてある。世が擧つて兄を氷詰めにするとも兄は其身中の熱を以て若し全體を溶し能はずんば其一塊なりとも溶し得るではなからうか。是れは實際甚だ困難の事と思ふが、丈夫兒の事業として是程偉大な事はないと思ふ。ミルは無神論者であつた相だが其外出するや必ず衣嚢に菫の種子を蓄へて置いて路傍に散布したと云ふ話を聞いたが是れは兄にも出來る事であると思ふ。兄よ少しく透徹する眼を有する人にして如何にして世より眞の「暖さ」を得たりと思惟する人があらうぞ。世の中とは矛盾と誤解との倉庫であつて其處に醱酵するものは冷淡と死灰のみである。僕は近頃其兩親を失ひ(!)孤兒(!)となれる二人の少女(!而かも姉は僅に十六にして妹は九つ)を知れるが世が此二人に爲す所は氷よりも冷かで僕をして慟哭せしめたること幾度かである。然し弱き事「無」に等しかるべき少女等も尚世に「暖さ」を供する爲め働き得るを思ふ時僕は再び天に向つて感謝の涙を垂れざるを得ない。自ら省みて「暖さ」の極めて必要なること殆んど生命に等しきを感じたなら、己れは其の「暖さ」を感ずるの偉大なる歡喜に與り得ずともせめては「暖さ」を感じ得ずしてなやめる人に「暖さ」を供する事に滿身の力を致したい者ではないか。兄幸に少しく其周圍を見給へ。兄は此世界に於て最も不幸なる者であるか、否々此世には「暖さ」を感ずる能はざるの不幸なることすら知らざる不幸なる者がある。「暖さ」に缺乏せる兄は縱令太陽の如き「暖さ」を世界に供し得ずとも螢火位の「暖さ」は彼等薄倖なるものに供し得るではないか。兎にも角にも目前の事實は『世は兄に「暖さ」を齎し得ずとも兄は世に「暖さ」を供し得る』事である。先づ滿身の精力を是れに集注せられよ。前途に道は必ず開けると僕は堅く信じて疑はない。

思索は進歩せしむれば無窮に達し得べしと雖も、無窮に達したる思索は遂に豆大の安心をだに齎さざるは僕が近頃殊に深く感ずる所である。

兄のよく知り給ふ如く僕は神を知れりと稱する者の中最も缺點多く且つ弱き者なり。されど萬一兄にして僕が有する(若し有すとせば)「暖さ」を要し給ふならば、而して兄が是れによりて幾分なりとも兄の「冷たさ」を醫し得るならば欲する

如く僕を用ゐ給へ。されど僕は兄が眞に僕を知らないのを恐れる。僕は思ふに兄が僕に待つよりは一層下劣な性である。途中にして兄を失望させる事は僕の到底堪へ得ぬ處であるから是れは豫め充分兄の熟慮を仰ぐ。

兄が僕の如きものに兄の苦衷を打明け下されしは僕實に神の前に感謝に堪へぬ。

僕の机の上に菊の一枝が生けてある。此可愛ゆい慕しい花が一輪でも此世の中に殘る間、僕は失望しまいと思ふ。是れにはドーしても何物かゞ何物かを愛する深遠なる意味があるとより思はれぬからである。

思ふ丈けのことを書きたいが充分に書けない。此平凡極る手紙が兄の掌に落ちても兄の思想は何等の影響を受けぬかも知れないが、然し是れも靈魂を有する罪の子が出來得る丈けの能力と同情とを披瀝したものと思つて再讀を煩はすことが出來れば何より滿足である。

「惡に勝るゝ勿れ、善を以て惡に勝つ可し」

「冷に勝るゝ勿れ、暖を以て冷に勝つ可し」

昨日今日の札幌の秋景色眼に浮ぶ樣だ。どうか此自然の大病院中に充分攝養して兄の健康を一日も早く恢復し給へ。縱令兄の不健康は原因にあらずして結果なりとするも不健康の結果は決して美しき原因に立歸ることが出來ないと思ふ。

僕に一層の信仰があつたらとつく〴〵思ふ。義人の祈が出來たらとつく〴〵思ふ。

## 一九〇二年

### 末光績氏宛――十二月十六日夜更於東京　〔八〕

我が肉の兄弟にまさる愛の友よ。

君が手紙に現はされたる美しき情は余を泣かしむ。君は實に美はしきもの﹅中の美はしきものなり。

君よ君の價値なき友は去月參日を以て兵營を出で今は家居の生活を送りつ﹅あり。彼は在營の日常に自由を翹望せり、「我若自由を得ば大飛躍を爲さん」と。而して自由は彼に歸れり、而かも彼は依然として兄の價値なき友なり。

兄が今夏故鄕より歸北の節東京に於て相見て相語り相祈らんことは彼が渴するが如き希望なりき。而して彼は之を果す能はず。彼は永く期待せる處の空に歸せるを思ひて痛き失望を感ぜざる能はざりき。

兄よ筆と紙は互に熱したる心を結び付けんには餘りに無力なり。兄の形を見兄の手を取らんことは彼が兵營の寒さに於ける唯一の煖みなりしものを。

されど總ては主の御手にあり、相見る能はずして相思愈ゝ激せる時如何に强き祈を主は敎へ給ふぞ。

兄が家鄕の消息卒讀に不堪、兄が是に對して發せる火の如ぎ發憤は是實に兄が人類に注ぐべき發憤なり。兄よ着實に近きより始めよ、人類の救濟は就らん。生も亦思へば我が家庭に對しては悲觀の子なり、自ら確信の足らざるを恥ぢ實行の擧らざるを恥ぢ神に據るの足らざるを恥ぢしこと幾度ぞ。我等は到底今日の家庭と相納れざるなり。唯々眞の同情基督の如き愛が此難戰に打勝つ可きなり。我等をして尙一層眞面目ならしめよ、尙祈を續けしめよ。

兄の旗色を鮮明となせよ。農學校の將來に憂ふ可きもの尠なからざらん。兄等數人實に彼等の中に於ける光なり鹽なり爾り代表者なり。

今の中なり、兄願くは充分世に出でて戰に望むの素地を造れ。

世の誘惑の中最恐るべきものは人情なり羈絆なり、「然々否々」是我等が取らざる可らざるものにして而かも取るに困難なるものなり。

假面を被れる惡魔嗚呼我は其前に戰慄せんとす。

兄日曜學校の天使等は恙なきや。彼等に好意を傳へ給へ。クリスマス近づきぬ。

兄の居所好適の地ありしや、選擇を充分にして身體に害を釀すが如き位置に居る勿れ。

兄の書は獨讀みて獨藏するに堪へず兄の許を乞ふの暇なくしてそれを森本兄に送れり。兄願くは許せ。彼は我が半身なり。余の知れる所は彼亦知らざる可らず、余の歡喜は彼と共に分たざる可らず。彼が兄の書によりて如何に懽喜の情に溢れしかは余洵に想像に餘あるなり。

兄願くは哀みの中に喜べ。主も亦「哀しみの人」なりき。是我等に何等の慰藉ぞや。哀しみの人哀しみの人我等此中に無限の慈涙ありて我等の罪を洗ふを覺ゆ。我等弱し、されど地の總てよりは强し。

兄主にありて一體たる者よ、生の爲めに祈ることを願くは續けよ。同情の祈なくしては生の退步は屢々たり。生の足らざる卑しき祈亦兄の上にあらん。

時漸く寒し。あまり强しとは云ふ可らざる兄の健康に注意せよ。

生は早く兄に筆取らんとせり。然れども此頃生は憐れなる程筆すゝまずなりぬ。前後意味なき長文兄を倦ますのみなる可し、而かも此中に兄生が限りなき愛着の情を見得るや。

# 一九〇三年

有島壬生馬氏宛――八月八日於東京〔九〕

君が誠意に滿ちたる注意と感慨とを生は感謝を以て意味深く復誦しぬ。かゝる事を君等より聞かんは生が唯一の樂なり。誠に洵に總ては君の云ふ所の如し。生は君の書きし所を讀みて針鋋を身につくるが如く覺えし事甚だ多し。

されど君は尙多く生を憐まざる可からず。君が云ふ所の如く生は川氏傳に生の立脚地を示したるを忘れず。されども生は果して川氏と同一の立脚地に立ち得しや。生は尙多くの點に於て懷疑の子實行足らざる子なり。君は此點に於て生を憐まざる可からず。

されど君は尙多く生を解せざる可からず。君よ今の所謂宗教を見よ、そは宗教にあらずして道德教なり。人情の自然を顧みずして形式の不自然を偏重す。こは生が求むる宗教と何の關りもなきものなり。

彼等は弱者に同情すと云ふけれど彼等は今の時に於て眞の弱者に同情する事なし。意志の弱きものを見よ、彼は確に基督信徒の同情の中にはあらず。生は是を大なる恥辱なりとす。生の「草いきれ」一篇稍此悲痛を寓し得ざりしや。君よ彼は生が胎より出でたる鬼子にはあらざるなり。

君よ祈禱は如何なる形體をも取り得るものならざるか。君は此點に於て生を解せざる可らず。

生の宗教的經驗は眞に生の勉めて語らんと欲する所なり――嗚呼君よ生の倨傲を許せ。爾り生の所謂經驗なるものは無に等し。されど生は基督を思起す時此熱望――寧ろ野望――に驅られざるを得ず――而して此機會に臨む每に生の感ずる最大の障碍は生が嘗て爲したる經驗の尠なきにあらず、生が有する信仰の足らざるにもあらず、生の抱ける教理の不完全なる故にもあらず、生の有する智識の淺薄なる故にもあらず、唯生の今の齷々乎たる境遇の故なり。君は生の爲めに生の

强めの爲めに日々祈禱を與へ給ふなる可し。生は同情あるもの丶祈禱によりて他日必ず大膽に生の所信を宣傳し得るの時あるべきを信じて疑はず。縱令ば此地上一人の同情の祈なくとも生は爾くあるべし爾くあらざる可らず。君よ生の信仰あらば誠に此の如きのみ。君は生を解して而して憐まざる可らず。

君の宗敎に就て云ふ所一に生が衷心の同情を引く。「世に討究の精神なき生涯あらばそは生くるに價値なき生涯なり」とはプラトーが不磨言なりとぞ。生は是れを以て君に臨むの寬大心ありと信ず。されど生をして尙多くを望ましめば「信じて疑はざる生涯」なり。生は君が總ての彷徨の旅より歸りて此樂園に入り給ふ時を指折り數へて待つ可し。神を信ずる者孤獨にして足れり。されど友あらんは如何によきことぞや。

生尙多くを語らんとす、されど此辱暑は生の寢言をして愈ゝ寐言たらしむ可し。

若し許されなば他日を期して相語らん。

隆、行、源太健全なりや。彼等に好意を與へ給へ。此方皆元氣なり。

讀了の後火中を乞ふ

## 末光績氏宛――八月二十二日　〔一〇〕

兄の温書に接しては生は繰返して幾度か其温さを味ひぬ。兄の云ふ所の總ては生を泣かしむ、同情を以て感激を以て而して發憤を以て。

兄の生に對する第一の要求に生の答へ得るや否やは疑問なり。兄よ織人の歡點を看取すること能はざるなり。若し强て生をして謂はしめんか兄が一層强くならんこと是れなり。今の基督信徒は自らの弱からんことを危み、强て自ら强からんことを希ふに似たり。是れ彼等に眞正なる基督の力來らざる所以ならずや。世の眞面目なる觀察家は云ふ「基督敎徒は强し」と、而して基督信徒は自ら衷心の狀態を省て曰ふ「基督信徒は弱し」と。是れ世に最大なる Paradox にして最尊き Pa-

radox なり。然るに今の所謂信徒は強て此調和すべからざる矛盾を調和せんとす。彼等は眞面目なる者熱心なるもの品行方正なるものを捕へ之れに說くに信仰の道に入るべきを以てし、放逸なるもの冷淡なるもの操行修まらざるものを放ち、是れを罵るに彼等は到底基督の道に入り得ざる呪はれたるものとなすなり。是れ何によるぞ。彼等が自らの弱きを忘れ強て自ら強からんとするに依るのみ。基督教の誤解せらるゝこと此に至りて基督教には生命なきに至るなり。兄よ、生は敢て曰はんとす、兄自らの弱きを悲む勿れ、「若し強て誇らんとせば其弱きを誇」る可し。兄よ少くとも生の經路はかくなりき。生が短き過去を顧る時生の長所生の強き所（若しありとせば）生に何物をも與へざりき。生は屢々胸を拊ちて歎じぬ「如何なれば余はかく弱きや、着々實行を擧げんとするの意志力なく、他人の頑陋を破るに足るべき智力なく、感情は婦女子の如く劣情の爲めに其根柢より振ひ動かさるゝなり。此の如き砂上に信仰の堅き樓閣は立つこと能はざるなり」と。而かも兄よ生にして今芥子粒程の信仰なるものありとすればそは全く生の自ら弱しとせるものゝ上に立てられたる所なりき。生の信仰は唯感激の上にのみ立てり。生の總ては弱し。されども基督の爲し給ひし所は生の弱きよりも弱かりき。生は嘗て東京市を見て憮然たりしことすらあらず。されど主は「エルサレム」を見て涙を流し給ひつゝ「牝鷄の雛を其翼に集むる如く……」と云ひたりき。生は嘗て神余を護れりと云ひて安じたりき。されど主は血の涙と汗とを流しつゝ「主よ何ぞ我を捨て給ふや」と叫び給ひき。生は傲然として人の罪を定めて憚からざりき。されど主は奸婬を犯せる娼婦に向ひ「我も亦汝の罪を定めず」と云ひ給ひき。兄よかく思ひ來りて一片の涙なきを得るや。何の涙ぞ。何の涙とも知るべからざれども唯腸を抉らるゝ如き心地するなり。生は假に是を感激の涙と云はん。主は世に最も弱き人なりき。其小なる弟子たるを希ふ者焉ぞ己の強きに居るべけんや。兄よ安じて弱きに歩め強き者をして強からしめよ。我等は此世の弱き者を代表し得んことを祈るべきなり。眞に弱き者のみ此世と來世とを通じて強し。我等は生きて死するものにあらず。死して生くるものなり。生は兄の家事の煩累を聞き眞に同情の念に不堪、是れ實に暗く見ゆる恩惠なり。兄が云ふ所の如く人に信仰を與へずして是れに理想を逼るは殘酷なる事なり。生は兄の堅き信念よく彼等を導きて基督の道に歸らしめんことを祈

りて止まず。兄よ、憐め。生茲に基督の道に依らんとしてより既に四年而かも未だに生が家人の間に一點の靈火をも投じ得ざるなり。されども生は失望せじ。生は倦くことなく實行の傳道を續けんとす。生は今生の信仰の許す限り彼等老いたるものゝ意志に從はんことを勉む。されど若し生此家の主權を握るべき運命に立たば生は大膽に生の所信の如く行はんことを切に／＼祈りつゝあり。生は切に兄に望む、兄も亦一家の事に係る位置に達せば憚る所なく其所信を斷行せよ。是れ我等過渡期にあるものゝ家庭に處する最よき道なりと思ふなり。兄が送り給ひし菫の花は涙なしには手にすること能はざりき。誠に自然の裝ひは美しきかな。我等をして自然の兒たらしめよ。人の褒貶にかゝはりなきこと自然の如くにして我等は始めて人たり得べし。

生今此地を去りて北米に赴くに臨み生は更めて兄が生に賜ひし尊き同情と親交とを感謝す。實に我等をして永く爾り永遠に基督の前に手を握らしめよ。基督の僕たらんもの絕對なり。孤獨の地に置かるゝとも尙感謝の笑のなからざらんや。されど神によりて結ばれたる友あらんことは如何によきことなるべきぞ。

發足には三日を餘さゞるに至りぬ。故國を去るに臨み我が國土と民衆とを見るに嘗て經驗せざりし親愛の情を喚起せずんばあらず。我等若し此國と人とに盡すことを得ずんば災なるかな。兄が家庭の苦しき而して樂しき消光も軈て終らんとすらん。再札幌の靈鄕に笈を負はれん時全能の攝望及祝福兄の上に裕かならんことを祈る。兄よ兄も亦生の弱き信仰、主によりて勵まされ其卑しき一人の僕として尊き血と涙とを知り得ん爲めに祈を賜へ。

若し許されなば海を隔てゝ信を通ぜしめよ。

瀨川末女の件生今何を爲すべきかを不知。然れども彼女の希望は看護婦たらんとするにあり。兄願くは彼女の方向を導き彼女に宜しきに適したる suggestion を與へ給はんことを願ふ。

兄が健康を慮れよ、異鄕に袖を分つ殊に患とする所のもの是れのみ。サラバサラバ。

八月二十二日夜こほろぎの聲漸く聞えて雨後の氣水の如し。嗚呼秋至れり。

本船は今一時間十三ノットの速力を以て、シヤトルより約七百哩の海上を航走致居候。雲は半天を染め居候ものから、華やかなる秋の日輕く海波と戯れて快き搖籃の中に身は宛ら大江の間を行くの思ひに御座候、此時此處に一管のペンに托して小生の健在を嚴慈の膝下、並に愛弟等に御報知申上候は小生の最も光榮として歡喜とする所に御座候。

「遠く遊ばず」てふ古語に洩れ易き身の弱年の時より屢々家々離れて孤遊の阿蒙となり、皆々樣の御配慮を煩はし候事、勿體なき次第と決して愚かには存居申さず候得共、是れ自己の利益を計らんとする爲めにあらず、及ばずながら同胞の爲めに何物をか貢獻せんとする衷志、御高察なし被下何卒御許容成被下候樣奉願候。此度の遠遊に就いても小生の爲めに此偉大なる機會を與へ給ひし御高恩決して忘却致間敷、殊に出發の際に於て賜ひし種々なる衷情は感謝の辭を知らず候、只愚駄に鞭ちて希くば恩遇の萬一に負かざらんことを期し可申候。

彼日云ふ可からざる爽快の意氣を以て横濱埠頭を解纜致候てより船は埠頭を離るゝ少程の所に止り、此に三等船客の檢疫有之日没せんとする頃に觀音、富津の岬を後にし夜に入りて安房半島を廻りて驀直に北行して、二十六日には早白砂も青山も見えぬ渺茫たる大海原に進み入り申候、事務長に父上樣の御書面を示し申候處、色々心配致し吳れ大に好都合を感じ申候、御見送り被下候方には御覽なされし如く小子の室は右舷最端のものに有之、船窓二つ有之候て廊下の通行人少なく機關の音響も船體の動搖も餘り感ぜぬ所にて至極好都合に有之、殊に同室者は新潟日報の主筆なる猪股と云ふ人にて、年三十六新聞記者には似合はぬ無邪氣なる好意ある人にて、今に至るまで互に助け合ひて大に便宜を得申候。此外船中にて殊に知人となりし人々には中等客の中に久滿(スタンフオード大學卒業生東京にて一面識ありし人)氏及其の夫人あり、三等船客中には森本、柏井園(明治學院教師學者的頭腦と態度とを示し最も誇る可き人)及他の二牧師あり、何れも親切なる好意を傾けて吳れ申候。上等船客には西洋人多く日本人も四五人は居候得共、トラムプと棋の上手な人々の樣見受け

申候、此外百人足らずの支那人香港より乘込み來候。

却說二十六日朝、始めて陸を見ざる大海の日の出に接し、莊嚴雄大の光景に暫くは目も眩むを覺え申候。人々未だ船になじまざれば何となく手持無沙汰にて定まる仕事も手につかず、退屈のあまり我等の仲間（前申上候人々）の間に投票始まり候、其結果を御笑草と致候得者、小子に對する投票の結果は

（一）好める食物――鮭の腹子、オートミール、林檎、味噌汁、澤庵（此中最多數は鮭の腹子）

（二）愛讀の書――船中食堂案內（是れには註が必要に御座候、二十五日の夕食事の際小子は一等室の食堂に行く可きや、二等室の食堂に行く可きかを知らず、猪股氏と二人にて少々マゴツキ候が惡口なる彼等の目に止まりしにて候）エマルソン全集、名家文集、米國失敗豫防策、田園詩人バーンス（最多數　船中食堂案內）

（三）最近抱懷せる思想――一二等食堂合併策、食堂のありか、上陸後に對する諸種の豫想、余は米國より歸りて何をなす可きか（最多數、一二等食堂合併策）

人の直覺とは驚く可く銳敏なるものなる事を知り申候、此日又イルカの波間に浮沈して船を追ひ來るを見、夜に入りては日本人と支那人との綱引を見申候。急に爭へば日本人必勝ち、漸く烈しきに至れば日本人必敗れ申候、些細の事にも國民の資性は示され申候。（以上九日書）

是れより以下はシヤトルの旅館にて認むるものに御座候。

二十七日　半晴風あり。讀書の後三等室に到りて支那人（麗南と稱す、美しき名に候はずや）と筆談致候、其斷片

問　汝自何處來往何處

答　自香港來往嗖喇域

問　汝家有父母乎信何教乎

答　有三母在家

問　三母何意予不能解
答　一大母兩小母卽妾氏也
問　家三母得無不和乎
答　亦相和
問　君解英語乎
答　不能解
問　君猶富春秋前途多望請旃厚
答　志小無甚所望
問　君甚淡白君最所望何乎
答　所望者亦求財回家也

猶色々有之候得共、要するに凡てが甚消極的に御座候、一般に東洋人の通弊は此にありと思ひ、自ら顧みて恥づる所多く御座候。

二十八日　曇天、東北風烈しく時に雨をさへ下し申候。此日始めて船暈を感じ終日床に打伏申候。壬生君の送られし「一葉舟」を讀み「松島だより」に「萩の花さきこぼれて秋の色を示すが中にも」云々と云ふに至り、故國の秋景目のあたりに見らるゝ樣なる心地致候。昨日今日、日本內地も夏漸く老いて初秋の姿潔き事と察上げ候。

二十九日　曇天なりしかども、時には秋の日さして波濤に明暗の紋を畫き、時には小雨潛々として晩夏の北海を懷起せしめ、夕刻に至りては天の一角に虹美しくかゝりて忽ち消え、日の紘なるが薄くほのにほひて雲に隱れ申候。此あたり海上には浮藻の一をも見ること能はず、前目一碧と申すべき有樣に御座候中に、信天翁（あほうどり）と云ふ海鳥のみ我物顏に此寂寞鄉を橫行致居候。船の食事を捨つるを拾はんために隨ひ來るものゝ由に候が、翅の强きには驚き入り申候。此日同室の猪股及

他の一人と稍三時間に亙る議論を致候。隨分興味深きものに御座候ひしも永く相成候間止め申候。

三十日　冷氣非常に加はり申候て、白氣の鼻口より出づるを覺ゆる迄に至り申候。今日は日曜日、我等基督信者は互に集まりて靜かなる、眞面目なる時間を感話に過し申候。之れ幸福なることに御座候。

三十一日　此日八月は終はるにて候。霧四方に罩めて數間の彼方は白茫々たり。

種々なる用に取籠められ手紙を充分に書く暇も無之、遂にシヤトル出發の時と相成申候。其後の事申上候得ば、九月に一日を二度致し候。八日午後當地着、其後三日種々の事を調べる爲めに、又市中見物の爲め三日を費し、本朝八時卅分の汽車（大北鐵道）にて東部に向け出發致すことゝ相成り申候。亂筆亂文平に御用捨下され度、委敷事は費府着の上申上ぐ可く候。

時下折角御いとひの程祈上げ候　草々　（九月十一日）

## 家族宛――九月十五日午後一時半於シカゴ　〔一二〕

至極健全　昨夜當地に着し、親友森廣君の下宿せる家に投宿仕候。十一日朝シヤトルを發してよりカスケード山を越え、十二日ロッキー山にかゝり候處、飛雪紛々として來り高山の頂上壯快を極め申候。サムミットと申候停車場にて乘客の多くは下車し、日米兩軍の雪合戰致申候。是れより以東は滿目の荒原徐ろに行人をしてヨルダン河畔を想起せしめ申候。かくて一望漠々たる荒原を橫切るうち光景漸次多樣となり來り、赤き家屋の原頭林間に見ゆる樣到る處畫となる可きもの御座候。十三日有名なるミスシッピー河を經て十四日拂曉、セント・ポールに着し朝食を終つて又直ちに汽車に乘り、其夜十一時頃シカゴのグレート・セントラル停車場に着し、此に森君に迎へられ申候。

異鄉同語の人を得るさへ喜しきに、知己の人に遇ひ申候事に御座候得者無限の愉快を感じて、其夜は實に快く安眠致候。

（此日は長き旅行の疲勞餘程出申候て寐に入りしは一時半）

今朝は八時迄寐坊をなし、九時頃森君と共に朝食を食ひに至り森、森本三人にて唯今森君の事務所のある所に來居り申候。是れより彼の親切により市內見物に出掛け可申候。凡ては後便を以て可申上候得共、一寸御報知申上度皆々樣の御健康祈上候。草々。

## 家族宛――九月二十七日午後十時〔一三〕

シカゴ府より略書差上置き候後は打絕えて御無沙汰申上候段平に御海恕被下度願上候。

當地は例年にまれなりし暑さも旣に九月の下旬と相成候ては漸く冷氣に相成候半、最早櫻の黃葉も數少なに相成申候事と奉存候。其後皆々樣御揃ひ御健勝に被爲入候や、父上樣には不相變の御多忙に候半、曾我氏歸京の後は多少の御安息を得給ひ候や、母上樣の御病氣も追々好時期に相向申候まゝ順當の御經過に被爲入候半と察上候。壬生馬君にも例の如く瘦せたまゝにて强健なりや、實に此度シカゴにて鹽屋と云ふ人に面會致候處、同氏は嘗て純粹の肺病に罹り、北里氏の注射を想起して試むる氣に相成り二三ヶ月の間に藥量を漸次多量となして注射せしに其効能著しく顯はれ來り、今にては全治するに至れりと申候。聞く處によれば此注射は單に肺病患者のみならず通常の人にても其豫防の爲めに行ひて効力ある上體質を變じ、皮膚は黑くなり肉も加はるとのことに御座候。何事もためしに御座候が高木氏にでも相談の上試みられては如何や。出發の際混雜に取紛れ彼の海岸の繪を持參致候事を全く失念致候。何か其後傑作にても出來候節は好便にまかせ御送附願上候。日米間は不便な事には小包郵便無御座候。隆三君は旣に薩摩に向はれ候事と存候兎角勝れず勝ちなりし健康は囘復され候や、大なる不平は其人を大にすれども小なる不平は益其人を小にすると存申候。君が敢て小なる不平に執着するとにはあらねども、若し此の如き心が起つては大變故申上候。與へたる好意が酬いらるゝものと思ふは抑も謬なり。生は基督の生涯を見て好意てふものゝ如何なるものなるかを知申候。基督の與へたる好意にして正當に酬いられたるものと

ては一つもなし、甚だしき極點は世俗が彼の與へたる好意を十字架もて迎へたり、かくて是れが世に最も大なりしもの丶行爲なるを思へば、君よ我等は他人より一つの好意を受くることなきも感謝して好意を人に分つの生活が出來ると存申候。好意なき世の中なりと失望さるゝ事なく、好意なき世の中なれば己れ先づ好意の人となりて此世の中を光明界となさんと、其處は一つ樂天的に行かれんことを望み申候。英夫君は其後如何や大分有望に見えし身長は益々延びつゝあり候や。米國に來ると身長の低きが何より殘念に御座候。君は實に幸なることには生か嘗つて經たりし如きナマクラ生活をなさゞるにあり候得者此後とも意志を強くし、專心學業をいそしまれん事を望み申候。ハイカラ宗の如きは、米國にも流行不致候。行さんはイカゞ御座候や。毎日壬生さんにをそはつてゐますか、ひんのよい子供になれますか、よくあそび、よくべんきようするのですよ。すべて男は男らしくあらねばいけませんよ。

生儀シカゴに滯在致候間は一方ならざる森の厚意を受け、毎日市中を見物し夜は種々なる懇談に二時過ぎまでは何時も寐に就き不申、隨分疲勞仕候。此所は唯今人口二百五十萬御座候べし、製造業の最も盛なる處にて近く三十年以來の進步は驚く可きものゝ由に御座候。森に導かれてマーシヤル・フォールドと申候小賣店に參申候、シカゴにも珍しき大建築にて此建物の中に使へる番頭より小僧に至るまでを數ふれば七千人居ると云ふにて略想像が出來申候。圖書館の如きも立派なものにて凡て美しきモザイックの眼も眩ずる計りに御座候。美術館にも早速參申候、製作物は殆んど凡て舊派に屬し居り大して大作と思ふは見當らず候得共、參考品の彫像並に古畫の模寫はうれしく候ひき、バンダイク、ダウヰンチ、ルーソー、ミレー、バーン・ジョーンス等の模寫に初めて色彩の巧妙を驚き申候、壬生君共々あらばと回想頻りにて候ひき。一日は劇場を見舞ひ申候、題はトルストイの Resurrection にて此頃英國にて演ぜられたるものなる可く候、Welsch と云ふ女優が所謂スターと相成候て一座をなせるものにて、抱月氏が新小說に紹介したる所と殆んど間然する所御座なく候。唯生は嘗て此書を讀みたることがある故に興味は一層深く見物致候、夫れよりも何よりもシカゴ府を代表致居候ものはユニオン・ス

トック・ヤードなるべく候、是れは市の西方にある一大屠殺場に有之、米國のみならず歐洲の肉の需要も此處か中心となるもの丶由に御座候。周圍四哩なる一區劃は此大屠殺場にして場內には此場の爲めに特に銀行あり、鐵道あり、散髮屋、料理屋は愚かな事に御座候。場に入れば大なる柵ありて其中には羊何頭とも數を知らず、押合ひへし合ひ致居り候が、片端しより殺され候かと思へば哀れに御座候。羊を殺すところは餘りに慘酷(羊があまり柔順なる故)なりとて見物はさせず候。牛豚の屠殺場に到れば此には立派なる接待室あり態々會社に傭はれ居る一人の少年の案內者我等を導きて豚を殺す所に至り候が幸ひ午前に終りて實狀を見ざりしは何よりの仕合せに御座候。打ちもらされし豚のウメキつ丶場隅にかたまり居候も明日までの命なる可く候。夫れ／＼分業的にハム及ベーコンの製造を致候が行き屆きたるものに御座候。夫れより屠牛場に參り申候。唯見る滿室唯腥血、人は帽より靴に至るまで血まみれとなりて働き居候、機械車輪の音轟々として耳を聾する斗りなれば生き殘れる牛も驚愕して蹄も得立てず、半失神せる如く眼うるみて狹き柵の中にもがく樣悲慘とも何んとも申樣無之候。やがて撲殺者來り數頭づ丶を一團となして狹き柵內に追入れ、押合ひて身動き出來ざる樣なしたる後鐵槌をもて前頭をうち候に傍に友牛のハタ／＼と斃る丶に驚きて悶ゆる牛の命も亦忽ち電光朝露と消え失せ申候。

かくて數頭斃し畢れば床は自然に一方高となりて、死牛は長さ三十間幅十間もあらんと思はる丶大解剖場に轉り出づるにて候。茲に牛は脚を縛せられて高く吊り上げられ候得者、例の血にまみれたる男所謂牛刀を以て喉を刺すに血は瀧の如く流れて床をひたし、實に汗を流す許りに御座候。かくて十數頭の牛の血は常に混々として紅を染め、滿場の血臭は實見したる人にあらざれば例へて言ふに言葉なく、ダンテ地獄の卷にも此血臭は描かれざる可しと存申候。かくて見る間に牛は頭部を切り取られ脊髓より折半せられ腸をぬき出され洗はれて清淨なる肉の一片となり終るに候。日々殺さる丶牛三千頭、豚幾萬頭、人は此慘事をなして初めて其生命を繫ぎ居るにて候。慘酷なる動物にて候。トルストイが菜食主義を取るも實に道理にて候。然し我等が鷄一羽を殺す以上は此のストック・ヤードの攻擊は出來不申候。此樣なヤリロがシカゴ府の特色に御座候、星亭と申候人が町になつたらこんな町が出來可申やと存申候。是れより生は、フォラデルフォヤに、森本は、バルチ

モアに向ふ筈に御座候處、增田君より手紙をよこし申候間急に紐育を見舞度相成り、殊に紐育には此後何時行かるゝとも判らず候間、心を決して二十日夜紐育に着し、增田君に會逅し、絕えて久しき對面致候。樋口と申候日本人の下宿屋に至り此夜は殆んど夜を徹して語申候。かくて翌日は共にセントラル公園に至り露臺により秋日の麗かなる光の中に再び色々の事共語り申候。此公園には木鼠非常に多く遊び居候が人を恐れずして可憐至極に御座候。夫れより此公園内にある美術館を見申候が、シカゴの夫れに比しては遙かに上品にて製品も豐富に御座候。生が嘗つて購ひたる小畫「ジャヌダークの幻を見る圖」の如きは玆に原畫有之候、此日は月曜日なりし爲め美術學生澤山入り來り居りて模寫致居候。矢張り舊派の遣り口に御座候。兎に角製作品にゴマカシものなく、色彩も形體も忠實なるは感心に御座候、二十二日には他の公園に至り有名なる動物園を見其夜は又もや、ミセス・フォスケと云ふ人の劇を見申候。此女優は極品のよき腹藝の人の由にて外題は「マグダラのマリヤ」に御座候ひき。イスカリオテのユダ及マリヤを二個の中心として凡ての舞臺は仕組まれ基督在世時代の時代劇に御座候。マリヤの初めに可憐にして後に高潔なりし其動作もさることながら、ユダの煩悶にはホト〳〵感服の外無之候。委しく申上候得者永く相成り候間是れにて止め申候得共、立派なる高貴なる娛樂を有する國民は實に羨む可きものに御座候。此の如き劇を見て害を受くるものはあらざる可く、殘る處の感化は高尙なる趣味に御座候。

二十三日にはニュージャージーと申所に田島と申候友を訪ひて閑談半日、此は紐育人の別莊ある海岸村にて風光よく、田島君は玆の或る莊に働き居るにて候。裏庭の林檎樹下に坐して林檎葡萄を飽くまで食ひ、其夕方別を告げて紐育に歸り申候所新渡戶氏夫人の兄上なる、ジョセフ・エルキントン氏より手紙來り、學校は二十二日より初りしとの事に（新渡戶氏にて聞ける所では十月初旬よりなりしに）直ちに結束して翌日即ち二十四日夕、費府に着しジョセフ氏に迎へられて直ちに小賣店に至りて衣服、机、其他の小間物を買求め、再び汽車に乘りて五時四十分頃ハーバフォードに着し申候。豫ねて報知ありしかば學生三人生を迎へに來り居り、其人々に導かれて直ちに Barkley Hall なる寄宿舍に入り申候。彼等は親切にも余を助けて夕食を終らしめ、記名をなさしめ、又校長シャープレス氏にも紹介いたし吳れ申候。室は西面の二階に

有之廣さ十四五疊は充分に可有之、窓には壬生君の好きな蔦の葉靑く生ひ茂り、靜閑心に適し申候。勿論一人居るにて候。此夜ハリーと申す經濟、歷史の敎師の處に至り、生の撰ぶ學科を定め申候、學科は英國史、中世史、勞働問題及獨逸語に御座候。毎日大抵二時間づゝ出席致候割合に可相成候。

學校の廣さは五十町歩許り有之候由、高低ある美しき芝生の所々に楓、柏、樺などの大樹蔚々として聳ゆる間に、蔦にて蔽はれたる石造の堅牢なる城の如き建築の散在せる樣美しき眺めに御座候。停車場は直ぐ傍に御座候得共、田舍のことに御座候まゝ四邊も至而淸潔に御座候。

校長の人物と學生の品位高きには敬服致候。未だ深く見たる譯には御座無く候得共、よくもかく一粒撰りの學生が集りたるものと思はれる計りに御座候。のび〳〵としたる發達の樣、惡くひねくれにひねくれたる日本學生とは雲泥の差に御座候。

實用的英語の不自由は唯今最困難を感ずる處に御座候得共、不遠慣れ可申と存候。玆に來候得者生如き馬鹿ものにも矢張り愛國心とか云ふものが起り申候て、一つ競爭してやらんとの氣に相成り申候。此校にて大學院の科程を取れるものは生の外に二人あるのみに御座候。本日は日曜日に御座候儘、朝來閑暇を得て所々に手紙など認め申候。朝十一時よりフレンド宗の集合に出席仕候。老男老女の中には新渡戸氏の云はれたる如く古風の服裝せるものあり、式は至而嚴肅に行はれ申候。此夜は靑年會の會合ありて之れにも出席致候得共、生の初めての經驗にては左樣兩者とも感心不致候。日本の或る敎會の方が遙かに眞面目にはあらずやと存申候。

金の費途は大體を申上候へば、

收入之部

| | | |
|---|---|---|
| 爲替にて | 弗 | 二六一、七五 |
| 現金にて | | 二五、〇〇 |

計　　二八六、七五

支出之部

學資　　弗　一八〇、〇〇

費府にて買物　　三七、五〇

旅費　　三九、五〇

計　　二五七、〇〇

差引殘　　弗　二九、七五

と相成候得共、諸買物は未だ勘定書來らざれば拂渡し不仕、又旅費も未だ精算したる次第に御座なく候間、其中に精細御報告可申上候得共、一先大體の處申上置候。

書體例の如く亂雜には御座候へ共、何卒御判讀被下度候。愛子、志摩子へも御見せの程願上候。當分の間は多忙にて他には手紙を差上候暇なくと存候間御使の節は其旨宜敷願上候。

喜寛氏より御依賴の寫眞は兩家に間接ながら屆け置き候間、左樣御傳言被下度候。

此日夕方大風雨、其名殘尙止まずして雨滴點々として窓に逼る。

## 家族宛――十月十八日　〔一四〕

永らく御無沙汰申上候段平に御海容被下度候。先日は增田君より母上樣及壬生馬君の御手紙を回送致吳れ、餓者の食を得たる如く貪り讀み申候。

皆々樣御機嫌よく被爲入候由、父上樣には御餘暇を以て御轉地を被遊候由、殊に烈しかりし盛夏の候を日々御務め被遊候御苦勞、稍醫え給ひし事と喜悅罷在候。

當地に參申候てより不自由もなく、日々愉快に消光罷在候。此地も漸く秋深く相成申候。私居り候室の眞向に日本には見難き程の大なる楓樹有之候が、當地に參候節は緑翠滴る斗りなりし其梢は大かた黄葉となりて、日々の風に亂れ散りつつ青き芝生に落紅の色美しく御座候。畫にして見まほしき眺めは校の四邊にあふるゝ計に御座候得共、多忙の身には拙き畫筆取試みんは固より、心長閑かなる散歩すら致難きこと遺憾に候。實に中々多忙に御座候。日本にあり候節は英語の講義とては一回だに聞かざりし事とて、容易に聽き取りがたく、無據數多の參考書によりて其の缺けたる處を補はざる可からず候得者、人一倍の苦勞に御座候。論文としては「日本文明史の序論」とも申すべきものを撰み申候。日本の歴史を社會的に研究して日本の天職とも云ふべきが那邊にあるかを揣摩し見んとの希望に御座候へ共、果してよき結論を引出し得るや疑問に御座候。一寸壬生馬君に申上候、增田君に托言し二三册の書物御送附被下候樣願上置き候間、同書名同君より御聽取りの上は可成早く御買取の上御送附被下度願上候。

去る八日には增田君其歸朝の途を以て態々小子を此閑村に訪れ呉れ申候。而一夜を玆に過し、翌日出發致候、兩日とも非常なる大暴風雨にてたまさかなる珍客を景色よき野外に伴ひ出す術も無御座候ひしが、こは實に待ちまうけざりし偶然の事とて喜悦極まりなく、彼や是れや熱談に一夜を徹し申候。彼去りし後は寂寞急に此室を襲ひたる心地して孤獨殊に深く相覺申候。

越えて十日日本好きなるミセス・モーリスと申す老婦人每月の例に倣ひて此地方に滯在しつゝある日本人を其野莊に招き御馳走致呉れ申候。會する者男子十四名女子二名、異郷の僻村にかくも多き日本人の一堂に會し得るは全く彼の老女史の好意に御座候。男子の方には知人一人も無御座候ひしが、婦人は二人とも一面識ある人に有之候。一人は札幌にあり候節新渡戸宅にて二三度面會せし人、他の一人は華族女學校の卒業生にて、愛子さんと共に下田女史の塾にありし鈴木歌子と申す人に御座候。二人とも年も經歷も小子よりは姉に有之、親切に世話致呉れ候。鈴木氏より愛子さんに殊によろしくとの傳言にて候ひき。

今日は日曜日風の勁きが上に稍々寒く御座候得共、雨なりし昨夜の空は美しく晴れて、晩秋の趣殊に心地よく御座候。唯今十時五十分に御座候、是れより例の如く會堂に集り御座候間出席可致候。此校の取れる宗旨はフレンドと申候ものにて、基督敎の中にも大に趣を異にせる者若し强而例を取らば、佛敎中の禪宗とも可申候。安息日は長閑に御座候。此日は手紙をかくが何よりの樂しみに御座候。

山本にも高木にも多忙なる儘に全く御無沙汰致居候、何卒宜敷御詫び願上候。

御送附被下候「太陽」確かに落掌仕候雖有御禮申上候。壬生馬君は音樂學校の演奏會に御出なされ候や評判は如何に。日露の關係此地も中々喧しく御座候。色々と想像も畫かれて東洋の平和を祈り居り申候。是れが愛國心と申すにて候べきか、每日友に新聞に該記事なかりしやを聞く故遂には笑はれ申候。

時漸く寒く相成り候、御自愛之程奉祈上候。

## 兩親宛――十一月七日　〔一五〕

母上樣の御詠なつかしく相讀仕候。

去る三日は麗はしき空にて小春の如く美しき天長節を獨異鄉の學窓に祝し遙かに聖壽の萬歲を祈申候。小なる日本國の君主の御誕辰を地球を一回轉せる大陸の田舍の片端にて心より祝しつゝありとは我ながらそゞろに一種の快を感ぜざる能はず候。願はくは此小なる日本が眞天職を悟り、是れに向つて猛進し大なる貢獻を此地球に爲さん爲めに、犧牲の一人となり得んことは小生が心より喜び祈る所に御座候。越えて五日小子の窓前を例の如く黑人の郵便配達夫が郵書をうづ高き迄小脇に抱へて來るを見、今日こそは何か獲物ありげなるがと思ひ居候處に、室の戶を開きて入り來り待設けたる膝下に片々として落し行きたるは書信二通、太陽一册、松本、河野、田島よりの手紙、未だ此の如く多數の書信を一時に受けたる事なき小子は雀躍せん斗りの懽喜に滿たされ、雙頰のほてるを禁じ不能候ひき、實に萬里の異鄉にありて故鄉の書を

得る斗り嬉しきものは有之間敷候。

何より感謝すべきは皆々様の御勇健に御座候、併而小子の壯健に御座候。母上樣にも餘程御快方の趣、無上の義に御座候。偖而何事より申上ぐ可きかと迷ひ申候が、先づ片端より順序なく筆をとり試み可申候。

學科の方は若し是れが日本語もて講義さるゝものなれば、朝飯前位の程度に御座候得共、何が偖小子に取りては流暢極まる英語もて講義せらるゝ事に御座候得者、中々困難なる仕事と相成申候。三ヶ月講義を聞かば大抵は理解出來る樣相成る可きか、唯今にては一ヶ月と少しに相成り候。先日英國史の試驗有之英語の答案を書き候は先づ是れが始めて、又「日本の勞働問題」と云ふ題にて論文を命ぜられ兎に角十六七ページのものを書き上げ（糊と鋏には餘程御世話に相成り申候事と御察し被下度候）十二月末には教場にて其朗讀をやる次第に御座候。英語にて論文を書き候は是れが初めで、兎に角始めてのものは中々骨が折れ申候。勞働問題と申せば日本の勞働問題を大きな聲にて朗讀致候事、情なく相成申候。而かも米國の如く勞働者の爲めには上下擧つて適當の注意と保護とを怠らざる國に於て、工場法の一つも發布せられざる日本政府と「製絲工女も人間じやもの、責めりや泣きます病みや寐ます」と謠ふ工女を有する勞働者との狀態を語るは寧ろ面を赤くせざるを不得候。何故なれば日本はかく形式を輸入するに敏にして精神を納るゝに迂きやを怪しまるゝ斗りに御座候。いまに積り〳〵し積弊根柢よりひツくり返る曉ありはせずやと杞憂に堪へざる次第に御座候。中世史の論文としては僧庵制度を調べ居申候。是れも七八枚のものを書き上げざる可からず、然し是れは少し精密に相調べ申候間多少は滿足の結果を得ることゝ存居り申候。

壬生馬君へ申上候。小生の獨逸語は進步中々捗取不申候得共教場の方はドシドシと進步して唯今はレッシングの喜劇“Minna von Belheim”を初め申候。レッシングと云へばなつかしき名、其人が巨頭を擡げし最初の旗幟として佛蘭西流の影響より全然脫逸せる國民文學の產聲なりてふ此書興味深く讀み居申候。一年中に讀み終る可き書は Schller —— Wilhelm Tell.

Goethe —— Hermann und Dorothea.
〃 —— Goetz von Berlichingen.
Heine —— Buch der Lieder.
Buerger —— Lenore.

の諸册と自修すべき物としてはハウス、ズーデルマン、フォン・シエーフェル等の諸作物掲げられ申候。是れ丈けの書物を讀み終らば讀書力も獨逸文學に對する趣味も加はるならんかと心細き心頼み致居り候。

日露の關係切迫せる樣な、切迫せざる樣な是れは到底かくの如くにして永續するものとは存不申候。鼠小僧と辨天小僧とをこきまぜた樣な露西亞のごろつき方始末に負へぬ次第に御座候。召集に對する父上樣の御命旨拜承仕候、其折は何とか可仕候。

此十數日美しき天氣相續き、丁度月のよき頃とて云ふ可からざる愉快を感じ申候事幾度と云ふ事を知らず候。日曜日の午後には大抵散歩に出掛け、近郊の田園に名殘少き秋を探候を何よりの樂みと致居候。此前の日曜には二人の友と共に村の北方なる美しき谿谷を流るゝ小流に沿うて行人稀なる黃葉の道を辿り申候。瀧に沿ひ溝に從うて頹然たる古屋のあるに近づき見候得者、屋架の端などに其建築せられし年の 1690 なるあり、1719 なるあり見るからに頑丈にて質素なる石造の小屋にて煙突のみ太く大なるが屋棟の兩端に突出せる樣は正しく其建築の古きものなるを證し申候。思ふに當年淸敎の徒、故國の民に手痛き迫害を受け、遂ひに居るに不堪して其愛着の地を離るゝに萬斛の涙と衷心の祈とを以てし、小なる船に乘じて寂寞なる米大陸の北部に上陸し、水に從うて深く溯り此谿谷の汀にまで來りて、其蝸廬を營み自然と戰ひ、猛獸と鬪ひ、蠻族を干ひ、玆に其信仰の自由を完ふして新たなる宗敎の生命を開きし所に候ふ可し、と思へば油然たる回顧俯仰の情涙を誘ふ迄に止め難きを覺え申候。此あたり畫にせまほしき所は數かぎりなく候。

然し概して米國と云ふところは（是れはあまり口はゞつたき申分に候得共）景色が平凡に候。寧ろ景色が雄大に失し過

ぎ申候。山と申せば一所にかたまりて山斗り、野と申せば一所に廣りて野斗りと云ふ有樣にて、云はゞ直線的に御座候。曲線が思ふやうに布置して無之候。氣候も亦是れと同じく、一向直線的にて未二ケ月しか此地にあらざる小子にも、明朝の雨なるべきか晴なるべきか位は大抵間違なく判斷が出來申候。米國の氣象報告が正確なるも當然なる次第に御座候。日本の如く變化の不測なる所無之かるべく候。噴火山の如き、地震の如き、津波の如き、忽ちにして雨、忽ちにして風、自然は其美妙の半面をも日本の裏面にまざ〳〵と晦藏したるものゝ如くに御座候。是れは日本の歷史を論ずる上に其有力なる據と存申候。餘計な處に筆が走り申候。

此地の人の外國人に對する態度、少くとも小子に對する態度には島國魂の小子殆んど敬服の外無之候。その襟度は確に我々の一段上にある事は乍殘念いなみ難く御座候。彼等は小子を外國人とは見て居らぬ樣に御座候。尤も米國と申候國其者が各國人の集合團體なるもかゝる習慣を養成せる一原因なるべきも、外國人が立止まりて一寸何事かすれば忽ち周圍に人の黑山を築きて、宛ら火事場の樣な騷ぎは此地に於ては、やらして見たくも出來不申候。彼等の無頓着には時々腹が立つ位に御座候。

米國人の最大長所は公德心の發達(至而個人主義なるにも不拘)にて、其及ぼす所の勢力は偉大なるものと存申候。而して彼等の最大短所は誰も申す所には御座候得共、拜金宗と婦人の行動に御座候樣見受けられ申候。拜金的の毒氣より僅に逃れ居るは學術教育宗教藝術界の一部分なるべく候へ共、是とても亘潮となつて拜金の孤岩を衝くと云ふ勢にはあらずして、拜金の楚歌に圍まれつゝ苦戰苦鬪して餘日を造りつゝある有樣に有之候。夫故學校に於て適當に訓練されたるものも社會に出づれば滔々として拜金の波に押し流されざるものは稀なる由に御座候。婦人の事はもとよりよくは存ぜず候得共、恐るべき事は彼等が金を目懸けて結婚し、華美なる生活を以て此上なく望ましきものと心得居るやうに聞及申候。

或る諷刺家が "The Third Sex."(第三性)と云ふ書を著し、米國の未婚の女子は男性にも女性にも屬せざる第三の他の或る性なりと罵りしも、强ち無理ならぬ所も有之候樣存ぜられ申候。少くとも彼等の服裝は彼等の消息の一部を語るもの

にあらざる可からざるにしても、今少しさつぱりした風は出來ぬ者かと餘計なる心配まで致度相成申候。服裝は小子希臘か羅馬に歸り度候、單純と優美とを充分に包含せるは此服裝かと存申候、又筆が横道に入り申候。

本日メディアと云ふ所（汽車にて當地より二十五六哩）にエルキントン氏の長子（新渡戸氏夫人の兄上）を訪ひ申候。途すがらフィラデルフィヤを少し見物し美術館を約四十分程見物仕候。存外小さき者にて到底紐育のとは比較に不相成候には稍失望致候得共、繪畫は割合によく選拔せられありて見答へする者少なからず、殊に古名畫及其模寫には色彩と云ひ、活動と云ひ、布置と云ひ、永く其前を去り難き者も不尠、近世佛國流の筆もなきには候はねど、其色の中には依然として所謂舊派の面影を保てるは不思議に御座候。是れは小生がシカゴにても紐育にても同一の感じを持ち候所に御座候が、或は是れ米國其者の氣候に關する事には無之や、米國の空氣の乾燥せるは日本人には驚かるゝ一現象に御座候得者、從而水分の存在によりて空氣の變化の多端を察するの機會少なきによるにはあらざるか、其所に參り候得ば日本の風光畫家は幸福なりと存申候（是れは壬生君に）。

房子大きく相成候由、嘸かし可愛ゆき事にて有之候半、當地にて未だ小兒と親しみなきは物足らぬ心地致候。小兒は實に社會の樞要なる一分子と存申候。

今日は如何にしたものか凡ての事が忽ち理窟に落ちて實に堅くるしき、面白からざる手紙と相成申候。何卒幾重にも御容捨願上候。

此地三四日前よりめつきり寒く相成り、黄葉も大方は振ひ落され申候。秋の逝くは心細き次第に御座候。

壬生君には積日の素志を達して藤村氏に御面會の由、淸談逸興の程遙察申上候。君が送り給ひし藤村集は時々小生の疲れたる頭腦に一脈の淸風を送る介と相成り申候。彼は眞に今日の日本に尊敬すべき一人に候かな。小生は散文の中彼の「哀緣」を情深しと讀み申候。君が好み給ふと覺えし「秋詞」は其なだらかなる文の外小生には多くの感興を引かず候。どうも此文は其觀念の中に明瞭ならざる處あるを强ひて文章の美に晦したる所なきや、君の見を聞きたく候。君の痛く好み給

ふ一なる「葡萄葉の影」、是れは小生も至極の同意に御座候。

行ちやんには又々メタルを得給ひし由目出度存上候。此頃は學校の成績は如何や。

隆三君には委敷手紙不差出候間、御使の節は宜敷願上候。

山本、高木へはよろしく。

「成功」、「平民の友」は當分拜見するの暇なしと存候間御斷り申上候。

向寒の候皆々樣益〻御自愛專一に祈上候、今日は是れにて失禮仕候。草々。

## 家族宛――十一月二十八日午前十時四十分於アボンデール　〔一六〕

此手紙を認め居り候窓邊を假りに何處なりと想像し給ふ可きか、そはあまりに意外なる處なれば縱令千里眼の明あり給ふとも恐らくは能ひ給はざらん。

今日は感謝祭と申候日に有之、基督信者は此一日を他の日より聖別して特に天佑の無窮を感謝致すにて候。我等も今日より三日間休暇を得申候。學友の中なる一人の友は小生を誘ひて是非其家庭に伴ひ行かんと申出候。彼の家庭が人の聲遠き田園の中にあり、多くの小さき弟妹あり、其妹の一人は畫家なるを聞きて、小生の心は遂に動き其美しかる可き家庭に伴はるべく約束仕候。

昨夜卽ち二十五日の午下、學科を終へたる後小生は獨り費府に出で書店に到りて、レナンの基督傳（此休暇中に讀終り得可き格好の小册子）を求め、我友アーサー・クローウエルの學校より來り會するを待ち受け、共に六時十五分發の汽車に搭じ申候。車を同じうせるもの、アーサー及彼と共に我が校に學びつゝある彼の弟の外、彼の兄、彼の親戚なりてふ一人の少年及少女も加はりたれば賑やかにて候ひき。暗黑なる夜を走りて車のアボンデールなる彼の家ある可き停車場に着せしは八時半なりしなる可く候。費府より三十七哩西南方にある一個の小なる孤村に御座候。此所にも彼の弟一人妹二人待

受けたれば今は同勢正に九人と相成、小さき妹等の其兄の歸宅を勇み喜ぶ樣は見るからに美しく、其賑やかなる笑ひ聲は靜かに寒く暮れ果てたる田舍道の淋しきに殊更らなる對照をなして、宛ら小生自身が己れの家庭に迎へ入れらるゝが如く感申候。暗夜（星の光はさやかにて殊に地平線近く信愛望の三體尊くかゞやき出でたる參宿は秋暮れて冬の正しく來れるを告げ申候）にてさだかには認め難く候得共、道の兩側にブキッチョなる木柵をめぐらしたるによれば四邊は牧場なる可く、そをめぐりてなだらかなる小山連れるが如くに候。此道の極れる處かすかに燈の赤きを指して友は其家なるを示し申候。葉を振ひ落したる大なる柳の夜目にもさだかなるほとりに來りたる時、最も年幼き妹は其愛犬の名を呼び申候處、小なるが忽ち來りて彼女の裳に戯れ、若主人公の歸宅を迎へ申候。柵を越ゆれば二階造りの低き家屋あり、是れ友が家として獨り此廣漠たる圍閾の中に立てるものに御座候。階を上らんとするに豚あり低吟して其主人公の歸宅を喜ぶものゝ如くに候ひき。

父は煖爐の傍に、母は戶の側に、愛兒等の歸宅を待ちつゝあり候。何れも五十を越えたる頑丈の夫婦にて質朴正直の相は頭の先きより足の先きに至るまで現はれ、其親子の愛情の濃かなること側目にも羨しき計りにて候ひき。畫家なりてふ彼の妹も亦ピアノの傍に謹しく其兄等を待ち設け居候。小子は最後に室に入り候處皆々非常なる喜悅もて迎へ吳れ、家族の凡ては既に小むづかしき「有島」なる苗字を暗んじ居りて最も賴もしく覺え申候。

暫くして夜食は始まり申候、長男なる我が友は特に屠られたる大なる七面鳥を皿の上にて割烹し、各の皿に分てば、懽語笑聲四邊に起りて愉快なる食事を終へ申候。

父なる人は嘗て費府にて辯護士たりしが、健康の勝れざる爲め一家を擧げて二十七年前田舍に移住したる由に候。丈は小生よりも低く、白毛を交へたる髯胸を被ひ黑色の小帽を頭よりはなさず、一家の主人公として威權と慈愛とをたゝへたる樣は宛ら古牧民の父老を見る如く、母なる人は小肥りのニコニコと笑顏を常に頰邊に湛へたる老婦人に候。長男なる我友（丈低き頑丈なる彼の兄有之候得共我が友が長男の如く振舞ふより見れば彼は異母兄なる可く候）は痩せぎすの丈高く口下

手にして言葉少く、極めて眞面目なる男にて最も心から人に親切なるものに御座候。其次ぎの妹が卽ち美術家にて、丈は小生よりも遙に低く、髮も衣服も極めて無頓着年よりはふけて神經質らしき婦人に御座候。次の弟はトマスと申し、長兄よりは稍快濶なるも容貌も性質も大體は其兄に同じき一好靑年に御座候。其次がウヰリヤムと申し今年十五歲黃金の髮長く、廣く形よき額を覆ひ、面は寧ろ母に似て愛嬌深く、兩顎の稍堅きは缺點なる可く候得共、其他は美しく調ひてモデルとなさんには好適の少年、其次の妹はファニーと申し年は其兄より二ッ下なる可く候。此兄弟の中にて擇び造られたるが如きは此二人の兄妹に御座候。ファニーも其兄に似たる顏ばせ美しく無邪氣可憐なる其容貌は實に天國にも見まほしき計りに御座候。其次ぎがまだベビーと呼ばれつゝあるカザリンと申す九歲の末妹にて、其快活なる聲は常に其家庭を賑やかし居り申候。

偖是れより家の構造に御座候、階下は三室に分たれ、其客間とも云ふべきは窓小さくして暗き室にて、塑像、寫眞、畫額等雜然として配置せられたる中に、日本にては音樂學校にでもありさうなる立派なピアノ、オルガン、さてはヴアイオリンの處狹く据ゑられ居り候。其次の間が書齋と食堂とを兼ねたる所、室は南西に面して稍明るく、古き書架にはシエクスピヤーを始めとしブラウニング、コルリッヂ、より米國の有名なる詩人の集且つは聖敎にかゝはりある書類の集められ居り候のみか、小生には讀むことも出來ぬ佛國の文學書類多く有之候は一驚を喫すべき次第に御座候。其次ぎの一室が臺所に御座候。

食事を終り候てより老父と話始申候。色々の事共語り候中に聽て日本語の構造に談進み候節、彼は熱心なる種々の質問致候後申候樣、

「余歲既に六十に近けれども尙ほ余は勉强を廢せず、余は專門なる農學の外に興味を言語學に有す。余は希臘、羅典、英、獨、佛の諸語の比較研究をなして益〻趣味を增せり。余は余の研究を東洋の二大國日本と支那とに進めんことを希ふ。」と生活の餘裕左程有之とも覺えぬ農場主の言として、寧ろ亦驚くに堪へたるものに御座候。食事のあと片づけ終りて長女な

るマーガレット（畫家）我等が室に來り、小生の爲めに一曲ピアノを彈じ吳れ申候。

此夜寢に就き候は十一時半なりしなる可く、小生は二階の一室にアーサー、トマスと三人にて床に就き申候。寢前後庭に出で候處、滿天一點の雲なく晴れ渡り、星宿砂よりも多く、半月の光に裏枯れたる草野は雪を被れるが如く白く輝き、家を顧れば燈火赤々と灯されて平和と祝福宛ら此一家に集められたる樣に候ひき。物音一つ聞えぬ靜寂の夜を迷想は日本のかなた東都の空にまで走り申候。

二十六日午前七時起床凡てを措きてアーサーと共に家を出で、バーンのある處を見申候。朝寒の霜さへ置きて寒暖計は十二度を示し申候。バーンの右手稍斜坂をなせる處に羊の群うづくまりて朝陽の淡き光に浴しつゝあり。

バーンをめぐり候得者、石柵の中には數頭の牝牛及數羽の鷄及七面鳥あり。やがて昨夜見たりしジョーと云ふ小犬の外、犢の程なるが若主人公の前に來申候。猫も七八頭居候、中一頭のみは此犬と如何にしても交情溫まらずとアーサーは話し申候。言へば何事もなきことには候へ共周圍の光景の如何にも詩趣に滿ちたるに醉へる小生には是れさへ一種の詩味を帶びて聞え申候。アーサーは牛と馬とに牧草を與へ終り、家に歸りて朝食を終り申候。（十一月二十六日朝認）

朝食の後、美しき少年ウヰリは勞働服を着、毛絲の帽子をアミダに被りて、バーンに牛乳を搾りに行き候間、小生は又其見物に出掛け申候。猫は自ら其周圍に集り來り候に、ウヰリは乳房より迸りつゝある乳を其口に向はしめ候得者、彼等は嬉々として之れを味ひ申候。總じて家畜の丁寧に取扱はれ居候は日本の比にあらず候、此仕事終り申候後、少年等はアボンデールにフットボールの勝負に出掛けんとしたるに端なく此に其老父と意見の衝突が初まり申候。老父は笑を殺したる眞面目なる容顏もて頻りにフットボールの遊戲として不適當なるを說き、（實に小生も是れには同感に御座候、米國のフットボールは寧ろ野蠻的に御座候）其亂暴の極死者をさへ出すが如きは、是れ戰爭の可を主張するに等しと云へば、少年等は否さにあらず此の如き殺風景を生ずるは遊戲が規律を守らざる故なりと云ひ、一時は愉快なる談論風發致候が、遂ひに各其主義を固守し老父と老母とは家に留り、他は皆（娘等も共に）出て行き申候て家內は森閑と相成申候。老夫婦は此の

閑靜を期として小生の音樂を聞くを好むと云ひしにベトーベンのソナタをオルガン、ピアノにて合奏致し呉れ申候。假りに瞑目して此一場の光景を想像し給はゞ、其時の小生が感情は小生が拙き筆よりもよく現はれ可申候。古風なるストーブの傍、布破れたる椅子に身を埋めて謹聽し居る他郷の一青年に對し、頽齡の老父はオルガンに、老母はピアノに其熱心なる精力を集め申候。四周は森として針の落ちたるをも聞き得る靜けさの中に、世界に類を見ざる音樂家の樂は思はざる人の手によりて奏でらるゝにて候。寧ろ快濶なる曲には御座候得共、音樂には全く耳なき小生にも何とはなき天才の面影は感ぜられ候て涙をさへ催し申候。小生は老夫人に强てムーンライト・ソナタを彈ぜんことを請ひ、是れをも謹聽仕り候、「是れはクラシカルのものなれば一般の人は理解し難しと云ふものなり」との前置有之候にも係らず、聞き居る中に身は何時か月光光裡の人となりし如く覺えて、是れにも不覺涙ぐまれ申候。かゝるうちに少年等は歸り來りて寂寞は再び快濶なる歡語に破れ申候。

午後は裏庭にてフットボール始まり申候。小生も加はりて相試み申候。夫れより此手紙を認め、再び老父と日本歷史の中、維新の有樣など語り申候。彼は亞米利加に來れる最初の使節のことなどよく記憶し居り、其中の二人の姓名を暗じ居り候て、或る部分は小生よりも委しき位驚き入り申候。國民固有の美の沒了せしむ可からざるを說き、日本は餘りに外國文明を輸入するに過ぎたり、日本固有の優美なる衣服の外國風に變り、固有の繪畫を捨てゝ洋風に模するが如きは感服する能はずとて思はざる所にて國粹保存主義を說かれ候。流石は農夫だけに頗る保守的にて米國の服裝が歲々月々其流行を變ずる如きは寧ろ滑稽なり、余は嘗てフロックコートを着したることなしとて皮肉なる笑を湛へ申候。此夜老父とマガレットと共に煖爐を圍みて色々の話など致候節、談美術に歸り申候。小生はアムプレッショニストは如何やと尋ね申候處、若き美術家其派の企圖の極めて淺薄なるを笑ひ申候。さらばラファエル前派は如何にと相尋ね申候處、彼女は恰かも惡魔に對する如き口調もて是れを否定し、彼等は美術の特色たる可き「美」の發揮には毫も關心するところなく、單に小なる自己の小さき理想を表現せんと勉むるのみ、繪畫と詩歌との差別を混同せりと申候。彼女に乞うてワグネルをオルガンにて聞き

申候へ共、興趣は割合に少く候ひき。（十一月二十八日朝認む）

二十七日、溫度十三度、後庭の池氷りて氷滑りに可なりとて少年軍出掛け申候。小生も之れに交りて嘗つて北海道にて試みし所を再び試み申候。午後はアーサーと共に馬車を驅りて近隣の農場の見物致し候。パーマーと申候農場を訪申候。農場主の妻君は新渡戶夫人と同じき學校に學びし幼な友達なるを知りて、世界の如何に狹きかに驚き申候。トマスと申候人の農場はなだらかなる山の上にあり候へ共、アボンデールの孤村は宛ら眼下に畫圖を展きたる如くに候。折りたゝまれてなだらかなる小山ゆたかに幾團の枯林を載せつゝ蜿蜒として東北をかぎりて西南方の一面を殘し幾條の溪流山峽より出で、村屋參差たる所に一條の小川となりてやがては海に注ぐに候半、アボンデールとは小川多き谿谷と云ふの意なりと聞き及申候。水は米國の他方の夫れに似ずして澄みて美しく候。赤ペンキ赤煉瓦の家屋の赭褐色に霜枯れたる四方の林野に相映發したる美しき眺めに御座候。郡立の小學校の稍〻大なる建築の殊に目立ちて見ゆるはさすがに田舍に御座候。

百エーカー餘（我が三十町步位）の土地に働く勞働者僅かに二人より三人の平均にして、而かも裕に其經營をなし得るは勞働賃金の高値なると器械の精巧なると經營の粗放なるとを現はして餘蘊なく候。勞働賃金は一人一ヶ月三十五六弗の由に御座候。

此夜夕食後、皆にて連れ立ちて停車場に新來の客を迎へに參り申候。

小なる二人の妹ファニーとベビーの手をひきつゝ、色々の話しながら田舍道を步むの快比すべきもの無之候。ファニーは眞に貰つて歸りたきほど可愛き兒に候。微笑を湛へたる顏ばせなど溶け相に御座候。此夜彼女と組になりてカルタを致し大に勝ち申候。又彼女の作りたる繪人形を澤山見せて吳れ申候。十三の少女が描きたるものとは思へぬ手際にて「御身は繪と音樂と何れを好き給ふ」と申候處「繪を好むこと甚し、音樂も好きなれども、出來得べくは畫家になりたし」と申候。畫家にはふさはしき少女に御座候、確かに長女より上に出づ可く候。小生は彼女と相遇ふは――此地球上にて――此數日のみなる可く候。一度彼女と別れゝば再び會ふ機會は與へられざる可く候。何んとなき沈想を齎すはかく我等を會せしめ

たる運命の手にて、再び會はざる可く我等を別つ運命の不思議なる手にて候かな。
小生はマーガレットに請うて記念のスケッチを乞ひ申候、其兄と小生との寫生を致し呉れ候。誇張でも何んでもなく運筆は小生を寫生せる方少しく上手らしく候。
漸く過去は現在に追ひつき申候。今筆取りつゝあり候は十一月二十八日の午前十時四十分に御座候、室には今二人の少年がスケートを取り出して池に至らんとし、老夫人は外出服に着かへて村に買物に出掛くる處に御座候。小生は多分本日暇乞ひして校に歸る可く候。
御一家の御健康を祈り上候。
此書は日記のかはりにわざと委敷相認め申候ものに御座候間、何卒御保存の程願上候。

### 兩親宛——十二月二十七日於費府　〔一七〕

歳も相逼り申候。平河町通りには例の歳の市賑々しく候ひし事と存上候。餅切りにも肩をはらせ給ひし事と察上候。此冬は鎌倉にや、將東京にや、何れにしても皆々樣お揃なされよき年を重ね給はんことを祈上候。
其後は打ち絶えて委細の御消息不申上、失禮の程平に御海容被下度祈上候。彼感謝祭に友人の家に得易からざる田園生活の機會を擅にし、三十日歸校爾後學科は些かの變化もなく續て施行せられ申候。唯變り行きしは氣候に御座候。學校に參候節は初秋とは申乍ら、尙殘夏の俤木にも草にも雲にも水にも見られ候が、漸く秋景色調ひしと思ふ程もなく嚴冬天地に滿ちて、今は肅殺たる景色と相成申候。來校以來三閲月にして歳は今暮れんと致居候。回顧の想は此歳暮こそありあまるまでに裕かなるべく候。
人事に於ける只一の變化は英國史の敎師を失ひし事に御座候。此人は小子の論文に就き世話を焼き呉れ候筈の人にて御座候ひしが、人物は至て好適の人にて候ひしも、學力不充分の點ありしや、痛く學生等の輕蔑を受け、夜逃げ同樣に小子

等に一言の別辭も殘すことなく此地を去り申候。學生の教師をいぢむる有樣は隨分烈敷ものに御座候。是れはたしかに日本の學生以上に御座候。其代り資格ある教師に對する柔順敬服は誠に感ず可きもの有之候。

此冬休暇は去る二十四日より初り、學校は閉さるゝ次第にて已むを得ず諸所相尋ね候上ミス・リッピンコットとて新渡戸夫人の朋友の家に寄寓致候事と相成申候て、二十三日夕刻出府仕候。室は三階の屋根下なれば天井は床に對して斜線をなし、小なる窓一つ穿たれ甚だ以て陰氣なる室に御座候。寢臺は殆んど室一杯の大いさのがあり候へ共、椅子と机は甚だ不充分と云ふ有樣、畢竟室其者は滿足出來不申候へ共、ミス・リッピンコット及び其寡婦なる母の親切に世話致し呉れ候により我慢致居候。室料（三食を含む）一週間五弗には驚き候へ共、是れが此邊の相場の由なれば致し方も無之候。

先達は經濟學專攻の學生と共に、費府に出でゝ勞働を得ざる勞働者に對する設備を見物仕候。不景氣、天氣、氣候其他の原因にて勞働を得る能はざる勞働者は此組合に來れば此組合は三時間の勞働をなさしめ、之れに二食及一泊を許す組織に御座候。男の勞働者は薪を切りて其三時間の勞働を充し居候。又本部に至り書記長をなせる夫人より其組合の事業の有樣相聞申候。小生には其話は半分位しか聞き取ること能はず候ひしも、其婦人の容顏には殆ど敬服仕候。質素なる服裝をなせる瘦形の三十四五の夫人に候が、其顏には明かに勤勉と智慧と同情と希望との色が讀まれ申候。米國の婦人中には概して好ましからぬ輕薄の夫人多きやう見受けられ候中に、時々此種の卓越せる婦人を見出すこと有之候。兎に角此國に著しき現象は善惡高下の區別著しき事に御座候。リファインせる紳士淑女の中には誠に一見父母に遇ふの想せしむるもの有之候と共に下等なる者の容顏動作に至りては醜惡の狀殆んど人をして一嚮戰慄を覺えしむるもの有之候。概して今日の文明なるものは此傾向を社會の凡ての方面に齎らす樣に御座候。是れは祝すべき事なるか呪ふべきことなるか、容易に決し難かる可く候。社會學者の須く攻究すべき大問題と存申候。

此の度始めて米國に於ける大都會の生活に入申候。都會とは到底いまはしき所に御座候。半日步き候へば鼻の孔は眞黑に相成候。水源に降雨すれば水道の水は炭煙にて墨よりも黑く相成申候。其の上轟々たる輪聲は晝夜を捨てず。（十二月二

十八日）

往還の雜閙は晴雨を限らず、夫れは夫れは忙しきものにて、此大都會が一の活動物にて一刻一秒何とも知らぬ煩悶に休む時なきもの ゝ様觀ぜられ申候。殊に目を引き候は貧民の有樣にて、其程度の低き事は到底日本の比にあらざる可候。社會の僅少なる部分が贅澤三昧をなす間に、此下層の人民はかくまで烈しき苦痛を嘗めざる可からざるかを思ひ、此の如きが所謂文明なるもの ゝ理想的活現なるかを思へば、今の所謂文明とは眞に「片輪」文明に御座候。

小生當地に來候て以來、敎會にはフレンド派のにのみ參居候て、他派のものには一切出入致さず候ひし所、昨夜機會を得て浸禮派の大會堂に到り申候。御承知にも候はんが、フレンド派は稍佛敎に於ける禪宗に似たるものに候て、衣服から言語動作に至るまで出來る丈け簡易質素を尙び、會堂には別に牧師と申候樣のもの無之、集合の時は會集の中感ぜしもの祈り、又は語ると云ふ仕組にて、小子每日曜每に此に出席する間時には餘りに沈默の時間の永きに厭き果て、讃美歌位は歌ふ方よきにあらずやなど思ひ申候處、昨夜浸禮派の會堂に至り、初めて米國にフレンドある所以を解し申候。先づ見渡候處、一千人は悠に入り得可き大建築にて、四壁はモザイックもて聖徒の像や花形や眼もさむる計りなるに聽席は凡て蝦夷茶のビロードにて引きつめたれば、其の華麗は殆んど劇場に入りし心地に御座候。加ふるに正面にはパイプオルガンのパイプは東洋風の最も華美なる色彩を施し、其下の段には歌手として男子は黑服女子は思ひ思ひに花の如き裝ひをなして着席致居り候樣、慾界の天國に入りし思ひ致申候。やがてかのパイプオルガンに伴はれて謠ひいづる音樂は一揚一抑、樂色と肉聲と美しき調和をなして、趣味なき小子の耳にも難有聞え申候得共、是れが敎會かと思へば殆ど嘔吐三斗を催し申候。在國の時佛徒の儀式を見る每に三條とか五條とか、事々しき袈裟を眉白き老僧の恥しげもなく着するを見て、若し此の樣を釋尊が見給ひしならば如何に思はれ候ならんかと存候事有之候ひしが、是れは佛敎ばかりにては無之候。講壇に立ちて道を說く人は是程のこと解らぬ樣にも無御座候得共、依然として此の醜態に安んずるを見れば、肉智のくらまさる ゝ此の如きに至るかとそゞろ恐ろしくも存申候。

に御座候。兼ねて同氏の一友なる一日本人（當時同氏宅に滯在中の）と小子と同じくハーバーフォードの上級に在る一米人とが同居致居由聞き居申候も、未だ一面の機會無之候ひし處、副頭取なるウキング氏は是非小子に中食を共にせん事を勸め、小生を其家に伴ひ申候て、實に親切に馳走致し吳れ、一介の東洋の一書生に向つて勿體なき位の尊敬と好意とを表し吳申候、日本にては一寸見難き事かと存申候。（十二月三十日）

一昨日より毎日圖書館に通居申候。午前九時より午後五時頃迄、隨分强烈なる勢もて勉强致居候。明日は森本、バルチモアより當府に來可申、愉快なる時を得ることゝ鶴首罷在候。（以下明治三十七年一月六日夕歸校後）

去國の際傍何か仕事仕候樣申上置候得共、此一年間は寧ろ專心學事に從事する方利益と存申候、此夏季休暇は何處かにて適當の業務に就き、經驗と金とを得んと存居り候。セントルイス博覽會と存申候へ共、博覽會は勸工場の大きな樣なもの、寧ろ何處か大なる慈善的の硏究所に入り、精神と肉體とに利益を得る方勝りはせずやと思案致居候。

此手紙は十數日に相亙り、前後何やら矛盾の有樣に御座候得共、本日多休暇相終申候而、費府より歸校仕候次第に御座候。

此冬は當地方は七年振りの寒さの由に有之、或時は華氏寒暖計にて〇度以下四度に相成候事有之、實に不愉快に感じたる日も有之候ひき。費府を森本と共に見物（來米以來同地の近くに住みながら同地を見物致候は此度が始めてに御座候）致し、中々面白きものを見申候得共、手紙餘り冗長に相成り申候間、以下は後便に讓り申候。御送附爲被下候書物二册確かに落掌仕候難有御禮申上候。

來る十九日より試驗相始可申候間、暫くは多忙と存申候。

此手紙御手許に相屆申候頃は春陽の氣稍ゝ催し來る好時節と存上候。當地は只今全く積雪の中にあり候。氷滑り大流行に御座候得共、小子は試む可き暇も金も無御座候。當地に來りて心より「時は金なり」と言ふ格言を的確に感じ申候。

母上様には御入院なくして相濟申候由、大慶の至りに存上候。此地が寒く候得者、何やら貴地も今年は別けて寒き樣存ぜられ申候が如何に候や、格別の寒氣なきやう祈上候。
日露の間漸く逼れるが如く報道續々新聞紙上に相見え、日に心元なく凡てによき攝理あらんことを祈り居り申候。米國人は多くは日本人に多大の同情を拂ひ吳れ申候間、此國に居候而も甚だ心安く有之候。
此度はこれにて失禮仕候、皆々樣の上に祝福裕かならんことを切に奉祈上候。（一九〇四年一月六日認了）

# 一九〇四年

## 家族宛――一月二十二日　於ハーバーフォード　（一八）

何處にても新しき所に參り候當座は月日の立ち候事遲く、やがて暫く相慣れ候得者、目がまひ相に時間の早く立ち候が小子の經驗に御座候が、去る十二月の程より日が早くたち出し申候て、既に一月の末近く相成申候。來米以來數ふれば既に六閲月、今更らに何の得る所ぞと自ら責むるの外無之候。

今日は喜ばしき日にて候ひき、日頃來信の數漸く稀と相成候机上に四の雁信落ち來候。一つは札幌の同窓生一同よりの年賀狀、一つは御一同よりの、一つは喜寛志摩兩君よりの、一つは隆三君よりのにて候。不計も此日我が家の殆ど凡てより(愛子君のを得ざりしは殘念に候ひき)なつかしき御消息を得、而かも其御消息の凡て御健勝と平和との御消息なりしにはひとしほ感謝の念を高め申候。

頃來の天氣誠に甚だしき變化に御座候。二三日前端書差上申候時は寒氣膚を刺すが如く、電燈のなき爲めに停車場近き荒物屋に蠟燭買ひに到り手に持ちて寄宿舍に歸り申候處、五指は全く感覺を失ひ、翌日にいたりても指のシンの痛むを覺え申候位にて御座候處、今日は朝來蕭々たる雨、迷霧四邊に滿ちて咫尺を辨ぜざる有樣、氣候の爲めにや數日前より少々發熱、頭痛甚しく一時は困難致（恰も試驗中とて）候へ共、病氣に負けてはならずと存じ、友人よりスケートを借り受け後庭の氷上に到り、一時間程滑ると云ふよりコロビ申候處、少し汗ばみ申候處直ちに床につきて發汗し、今は大方氣分も舊に復したる樣には御座候へ共、此氣候の激變は隨分若き骨身にもこたへ申候、充分攝生致し可申候。

此試驗にて半學年は終る事に御座候。何分耳の慣れざる爲め講義を充分聞き取ること困難にて、ノートを十分にとり得ざりしかば、多くの參考書に據らざる可からず、又答案も他の學生の如く迅速に筆を走らすこと出來ず候得者、定めて不

完全の答案なるべくと存申候。來る半學年には充分の好果を表はす事は左程難事ならずと存申候。讀むこと丈けは稍習ひ覺えは致候得共、英文を書くは隨分困難なるに先達中より中世史に五千字の論文を課せられ、苦戰奮鬪して漸く七千字計りを書き責を果し申候。

嘸かし讀みづらき英文ならんと自ら憐むの外なく候得共、兎に角是れは小子に取りての初舞臺、今日より明日にかけ又二千字計りの論文を書く可き豫定に御座候。是れは英國史にて「英國々民の發達」とも可申課題に御座候。

冬期休暇後は再び單なる學校の生活に歸り申候。日々書を持ちて學室に通ふの外無之、何とて申上ぐ可き程のこと無御座候得共、近頃盛なるは氷滑りと橇滑りに御座候。（是れは行郎君の御質問に御答へ）小生の室の前下さがりに平かなる校庭にて、雪一面に降積みて其表面凝固致候に、年幼き男女の少年各手に手に小さくして色彩美しき橇を携へて來り、寒威の激しさを忘れ果てゝ、夕暮暗くなる迄遊び戲れ居候。其いでたちの可憐なることは言語に絕し申候。

時に書に倦み候節は、窓に倚りて之れを眺め居り候に、殆んど時の流るゝを忘れ申候。此廣庭を行き盡し申候得者、其處に氷池ありて玆には稍々年長けたる男女の嬉々として氷滑り致居候。母なる人の色彩の趣味深きにや雪に出でゝ遊ぶ少年少女は多く赤き色の帽やスカーツやを穿ち居り候ため、雪の白きとの對照目覺むる樣に美しく御座候。

先日の夜は當校のジムナジユムとて體操場に當校、ニユヨーク大學、フヰラデルフヰヤ大學、スワズモア大學聯合の運動會有之、一度の經驗は可致と存じ見物仕候。多くは器械體操にて、業の綺麗なるは我邦の學生以上、殊に腕力の强きには一驚を喫し、體格の均齊なる發達をなせるは見事にてスパルタ少年の昔も思ひ出で申候。されども是等は確かに我が國の擊劍柔道以下なりと見申候。輕業師の稍々品よきものなる可く候、敎育家の深く顧慮すべきは其子弟の智育德育と共に體育なるべきに、是れは又程度の餘程むづかしきもの至極研究を要するものと存申候。

壬生馬君の此頃の御境遇小子遙かに羨望致す斗りに御座候。君が君の好む處に從つて益々深く入られんは小子の何よりも賀する所に御座候。君は既に君の尤もよき所を撰ばれたりと小子は思ひ申候。而して小生の判斷は多く違ふまじきかと

存申候。願くは躊躇なく君の堂奥に向つて進み其處に人間死活の靈火を捕へ給はらん事を望申候。岩元氏には一面のみにて遂に再會を期し不能、多く氏の高致に接する事能はざりしも、窃に其人の薫容を高しとする念絶えず候。君の又氏に遇ひ給ひし時願くは生が深甚なる好意を傳へ給へ。世の戰は孤獨にてなす可きもの、他者の力によらんとするものゝ失敗蹉跌するは火を睹るよりも明かなる事に御座候得共、此涙の谷に於て同情同志の人に遇はんは如何に大なる快さか、而してそは又命にて候べき。生が最も氏に知り度きは氏が基督教研究の結果に御座候。そは命を得るは智慧を得るに勝ればなり。

母上樣の御入湯に是非御斷行なされ度存上候、父上樣の御壯健もさることながら、時には御休養可然か暫く御一緒に何處か閑靜の地に御出であらばと存上候。

洋館出來致候由、行ちやんより委敷圖を得て想像すれば室の樣より飾りまで凡て見る如くに御座候。中川君小生に輔仁會雜誌を送り吳れ候爲、壬生君英夫君の「天幕行」を見申候、彼事ありしは生が未だ日本にありし時なりしになど思ひ出で申候。成程藤村振りの品よき御作と拜見致候。壬生君には小生の鬼となりし夢を見られ候由、是につきよき戒めを得申候。「汝凡ての罪惡を捨て高く仰ぎて天國の幸を望む可し、彼處にパラダイスあり、彼所に平和あり、汝常に死の用意せよ、人ははかなきものなり、そは草木の如くに逝くものなればなり」

增田君より手紙無之由、小生へも彼が歸國以來一囘の音信もなく窃に心を痛め居申候（小生手紙出し度候得共彼の所書を紛失して尋ぬ可からず）。彼が米國にありし際、生は長く彼に書を怠りて彼を苦しめたれば其返報返しと思へば格別恨みは御座なく候得共、唯彼の健否を疑ふの念に不堪、壬生君よりにても御問合はせ被下度候。

來る夏休暇にはセントルイス博覽會に行く便を得んかとも存居候得共、考へて見れば御化粧した餘所行きの米國を見んよりも、家居の米國を見ん方利益多きやと存申候へば、他の方針を取候やも知れず候。博覽會に到り日本出品の偉大なるに肩幅を廣くするとも其爲めに醜小なる面を赤くするとも、それはあまり大したことには無之と存申候。舜三君には同地に來らるゝ由、面會の出來ぬは殘念に御座候。

日露の關係急なるが如く急ならざるが如く、身外邦にあるものには眞に之れ一喜一憂に御座候。祈らるゝは皇天の佑助此兩國の上にありて彼等が豺狼の如き私慾によりて動くことなく、眞に攝理の大に畏れ國民の血を尊敬し此尊貴比なき血と肉とを私慾の祭壇に捧ぐる事なからんことに御座候。

唯今少々多忙、喜寛、志摩の二君には別に手紙不差出候得者、何卒此の手紙の趣御披露被下宜敷御傳言爲被下候樣奉願上候。尙山本にも宜敷、先日山本兩君よりも手紙を得申候得共、例の如く筆不精の爲め家の外には遂々御無沙汰致居候。

草々。

風、雨に和して慘たる夕暮。

## 家族宛――二月二十八日日曜日朝於ハーバーフォード　〔一九〕

福壽草の花落ちて何の草とも見分け難きまでに綠葉茂り梅枝も漸く花に疎く嵯峨たる痩影ぽか〱と日當りよき障子にうつる頃と存上候。野には靑芽の三四寸霜解路を壬生馬君の筇漸く忙しかるべきか、明日を限りにて二月も逝かんとするに朝來蕭々たる雨、殘雪に濺ぎ、鉛色の空低く懸りて多時雨の樣すさまじく候。

先週の月曜日、卽ち二十二日の朝二時半頃何時になく目覺申候而身に熱あるを覺え朝に至るまで眠ること能はず、早速醫師の診斷を受け申候處、病室に移るべしとの事にて其日より學校内の病室に移り就床仕候。當日は熱稍四十度に相昇り、眠るともなく覺むるともなく色々なる夢やら現やらを交る〲見つゝ相過し申候が、醫師の手當よき爲めにや、翌朝は痛く快方に相向ひ熱度も遂に下向し、二十四日には早床を離れ申候。病名はグリップと申候傳染的流行病にて、當時此地方に患者數多く候ものに御座候。一種の風邪にて決して心配する性質のものには無之、且つ小子のは其經過至而よろしく、僅かに三日病みたるに不過候間何卒決して御配慮被下間敷候。此病氣の性質として回復後非常に疲勞を感じ候と尙咳嗽時時有之候爲め、未だに病室に閉籠居り申候得共、明日よりは教室に出席すること相出來可申と存居候。熱度高かりし爲に

や頭弱く相成り申候には何よりも閉口致し居り候。外國に於て病氣の經驗は是れが初めて、願くは終りなれかしと祈り居り候。

御擧家皆々樣御變りなく被爲入候由、異鄕にある身には何よりの慰藉に有之候。冬春の交には殊に色々のことども有之候もの折角御自愛御攝養奉祈候。

金百五十弗御送與爲被下候由難有奉鳴謝候。就而は御報知當日より郵便局よりの沙汰屈指相待申居候へ共、何等の報知もなく餘り不審に御座候間去る二十六日費府郵便局に向けかけ合ひ申候處、取調べの爲委細同爲替に關し申越せとの事にて再申遣し候得共、其後何等の返答に接不申候、途中多分間違ひなき事と存申候得共、餘りに相遲れ申候間心配致居候。

御仰越の送金方法は尙問合はせ御返事可申上候。

室蘭支廳より又々兎や角申來り候由、困つた奴等に候。御迷惑の段察し上げ候、何卒一日も早く其落着を見得んことを祈居申候。

日露戰爭の噂は當地に於ける凡ての新聞の第一面を始めとして、大部をふさぎ繪畫やら寫眞やら地圖やら夫れは中々大した人氣に御座候。一般の人氣は勿論日本方にて、殊に勝報の陸續掲げらるゝは海外にある身にとりて心地よきことに御座候。されども何しろ敵は大國、求源の多きは到底日本の比にあらねば、彼が持久の策に出で徐々として戰備の經營を初めたらんには最も日本に取りての頭痛なるべく候。元來米國は國家として露國に對し是れ迄一方ならぬ恩義を感じ居候者に有之、獨立戰爭の時も南北戰爭の時も、露國は常に友情的態度を以て米國を救けしは米國民の未だに忘れざる所に御座候。而かも今の時に於て此國民が翕然として日本の同情者たるに至りしは何に原因するやと云ふに其重なる者は、

一、露國が猶太人に對し大迫害をなせし事。

一、フイン人に對する露政府の大壓制。

一、日本の小。

是れ等たるべく候。勿論此度の露國の行動が東洋に於ける米國の高權を犯す事極めて大なるは米國政府をして今迄の友情を抛ちて嚴正中立を取らしめしのみならず、各國政府に通牒して支那の獨立を保全することに全力を盡し、暗に露國の底意を拒むの擧を爲さしめし原因なるべきも、是れ等は人民の同情を直接に動かす動機となり居不申候。又米國に於ける露國同情者の主意とする所は、

一、歴史的に露國は米國に友愛あり、これを無視する可からず。

二、所謂恐黃病。

三、基督敎と他敎との衝突なりと云ふ事。

其一に對しては多くの反對なきも、又多くの同情もなく云はゞ此說は强大なる反響を齎さず候。其三に對しては米國人の或者の如きは論じて曰く「外觀的に云ふなれば此說當を得たるに似たれども、日本に於ける敎育の進步道德心の發達に見る時は、日本は露國よりも遙に基督敎理的と云ふべく、露國の基督敎なるものは眞正の基督敎を去ること極めて遠し、又日本は基督敎國の新文明を輸入することに於て確かに露國の上にあり、さらば日本若し勝たばそは間接に新基督敎的文明の勝利を意味するものなり。」と是れは基督新敎國たる米國には隨分强大なる立脚を有し得る議論に御座候。其二に對しては露國の大、日本の小は米國民をして未だ此事を深く念頭にせしめず候得共、割合に寬大平等なる米國人の腦裡にも此恐黃的傾向の强きは著しき事實に御座候。人種的嫉妬心、是れ來るべき世紀の何時にか實現せらるべき大現象なるべく候に、此時に當りて黃色人種中の日本に案外進取の氣慨なきは誠に悲しむべき事に御座候。小子の思ふには日本のとるべき遠大の方針は日本が今迄の島國根性を續くることなく、大膽に進取的に其特長なる性質を利用して人種的觀念の打破を計るの外なしと存申候。白色文明と黃色文明との同化に成功して、白色人種をして黃色文明を同化せざるを得ざる樣なさしむる事に候。

今一つ米國民の日本に對する同情の著しき點は日本の文明的國民なるに信賴することに御座候。此度のことのみより申

候ても日本が靜肅に忍耐して露國の返牒を待ちし態度は著しく米國民の同情を喚起致申候。聯合軍が北京を攻めし時、日本軍は唯一の異教軍なりしにも係らず、最も大膽なる行動を爲し且つ敢て掠奪亂暴の擧なく、よく國民として軍隊として秩序を保ちしは米國民が未だに「實行に於ける基督教軍」と云ひて尊敬致居候所に御座候。外交と云へば正義や道德はものゝ數にもあらぬ樣思ふは矢張り間違ひにて、政府は所謂政策とか云ふ上から米國に於ても隨分ひどき事致申候得共、國民の判斷心は矢張り明瞭なる道德的基礎の上に築かれ居り申候。縱令此度の戰が日本の勝利となりて結着するとも、日本が堂々と××××を保全せん事は小子の日夜祈居候所に御座候。

先日バルチモアに大火あり（新聞にて御承知のことゝ存候が）、二億萬弗以上の損失とのことに御座候。森本の滯在致居候町に御座候得者、同人より委しき報知を得申候。凡てが大規模なる丈けに損失も大規模なるに驚入申候。あの石と鐵とより造られたる建築がいかにして燃ゆるかは不思議な位に御座候はずや、燃ゆること三日果ては消防夫も防ぎ兼ねてダイナマイトにて家々を打ちくづし申候由。

召集とあれば歸國致度くと存申候。さはれ、なるべくは當地に滯在勉强を續け度存居申候。

壬生馬君の御書委細披見仕候。小子に對する御心配は決してさる事に御座なく御察しの通り、身異鄉にある淋しさのかく顯はれ申候ものと御承知被下度候、君の向後の方針に對しては小子大に贊成に御座候。君よ、大勇猛心を振うて其道に勇しき途出(かどで)あらん事を祈り申候。增田君とも計り給ひしならん、彼の意は如何にありしや。吉田君より相撲に對する新聞送來り申候。小子興味なし、然し御芳志の程御禮願上候。

戰爭以來貴地よりの郵便物遲れ勝ちにて何よりも心細く御座候。

山本高木の皆々樣へもよろしく。英、行君共に健全にて御勉强の由、何よりも結構に御座候。

此夏休には或は森本と共に幻燈をもつて日露戰爭の話をして地方をまはるかも知れず候。是は然し猶以後便可申上候。

先は右のみ。草々敬具。

去る二月九日發の御書拜受難有繰り返し拜見仕候。御送金も恙なく落掌仕候段、不敢取端書を以て御報知申上候通是亦奉鳴謝候。早速委細之御返事申上ぐ可き筈の處、兎や角多忙に相まぎれ御返事延引仕候段、平に御海容願上候。

何よりも感謝致すべきは——海外にあつては殊に——皆々樣の御健康に御座候。母上樣よりも久振りの御書並に御詠歌拜見大に安神仕候。小子儀の病氣は固より一時的のもの日本のインフルエンザに當り候ものに有之、何の故障もなく快癒に相向申候間何卒御放念被下度候。當地時候の變化激しきは到底日本にては想像も出來ぬ位、此頃は風の都合にて天氣定まり候節はぽか〳〵としたる春日和にて、草も漸く萌み木の芽も見るがうちに大きく相成候心地致候處、昨夜は天候急に變り今朝は皓々たる白雪五寸ばかり相積候を見て驚申候。かやうの變化に候得者遂に打ち負けて病床に就き申候事、致し方なき事ながら殘念の至り、向後は一層之謹愼を相加へ可申候。

父上樣初め戰爭の御報知を賜はり、當地の新聞にて日々——恐らく日本にあらせらるゝ方々よりも多くの確實なる報道を得申候事と存候——相窺ひ居候ものゝ、御親報に接して一入之安意をも慰藉をも得申候。此度のことゝても何れは喧嘩兩成敗の語に漏れず、彼にも是れにも多かれ少かれ野望も無理も有之可くは候得共、餘りと云へば傲慢不遜なる露西亞の措置、日本が勘忍の緒を絶ち申候は決して事を好むにのみ出でたるに候はざるは明白にて、擧國が熱誠の一致をなせるも理(ことわ)りなりと存申候。此上は何卒時局早く收り我が國が事を擧げし其實——××××××を露國に承認せしむる——遂行せられ、極東の何處にも彼の豺狼等の跋扈を再びせざらしめんことを祈居申候。

是れは又餘りに轉ばぬ先きの杖的の老婆心には候へ共、戰爭の結果が彼の日清戰爭の時の如く影を捕へて實を捨つるが如き不體裁なかれと願はれ申候。此書中に封入致候米國新聞の切りぬきは米國民の日露戰爭に對する兩極の觀念をよく相寫し居申候事と存申候。恐黃病の一部の間に激しきも事實ながら、論說に顯はれたる日本へ同情の一文は——我田引水の

高慢なる條々は措て置き――堂々たる論文として見るべきものありと存申候。此の如き同情者を有するは賴もしく覺ゆると共に我國が益々眞文明の率先者――是れは決して達し難き野心とは存不申、米國なども裏面の非文明には驚くこと有之――たるの資格を養成せん事を期すべきなりと存申候。

山崎の老人出京せられ候由、益々年よられ候事と存申候。世の逢離ほど不思議なるものはあらず、思へば同老人との交際は愛子と其友との交りより始まり、遂には小子が永く同老人の介抱を受くるに至るとは眞に奇妙に御座候。同老人には非常に小子を愛し吳れ、己れの孫のやうに致し吳れ申候間、小子も亦忘れ難き或者を感じ居り申候。此手紙御手許に入申候節同老人尙在京中ならば吳々も宜敷御傳聲の程奉願上候。

山本、高木には永らく御無沙汰致居候、敢而忘るゝと申すには無之候へ共、偖て手紙かゝんと存申候得ば、彼や是れやの回想にて一夜を空ふする覺悟なかる可からず、實に手紙を本國に認め候夜は眠り難く候。されば寧ろ疎遠のとがめは得るとも其時間を勉强致候方と勝手なる理窟にかまけ申候、何卒是亦宜敷御鳳聲願上候。

先日太陽と共に壬生馬君の油繪相屆き申候。配達者の持來れるを見れば無殘にも三片に打破れ居候に不思數滴の淚こぼし申候。折角の御骨折の御志、云ひ樣なき心地致し候。而し兎や角工夫して漸く繼ぎ合はせ今は破れ目かすかに見られ申候得共、さして障りにもならず書架の上にかざられて日々無上の友と相成居申候、重々御禮申上候。實に此景色は心にありありと覺えあるもの種々なる回想を伴ふものに御座候。御苦心の明きをも暗く描き給ひしは充分の御成功とは云ひ難しとするも大膽なる御企圖と存上候。殊に濕度の裕かなるは此畫に著しき御手なみと存上候。雲の色に壁の光にうら寒き十二月の空氣も確かと拜見仕候。若し難を云はしめば、輪廓の不確にあるなきかと存申候。愈々畫筆握り給ふ猛心湧き給はゞ木炭畫の不撓なる御苦心偏にあらまほしと、是れは凡て盲目象を評する類に御座候。

御手紙の御覺醒潔く拜見仕候。小生も大に發奮仕候。實は明日の期待に迷はされず昨日の回想におもねらず、今日と云はず現在瞬轉の今を捕へて心の儘に思ひ心の儘に動かんこそ世に力ある生活なるべく候。何等の永き迷轉ぞ、今も心の中

常に這個の疑惑を絶たず候得共、愈ゝ身に沁みて覺ゆるは義と愛と獻身とを人の子に敎へて逝きし年若き導師の面影に候。是れをきけば愈ゝ堅く是れを仰げば愈ゝ高き超絶の人格神容は小生をして其小さき奴隷たらしめ候。此願を果し得ずば縱令世の凡ての物與へらるゝとも滿足は夢致間敷候。

先日行郎君の御依賴により畫端書一枚御送申上候、是はミレーの「晩歸」を心覺えの儘に摸描致候者に有之候。此畫は費府の畫堂に有之候もの、横三尺縱二尺五寸程の油繪に御座候、ギブソンと申す當地の富豪歐洲にありし時、彼の有名なる「エンヂラス」と此畫と二面示されたる中より撰び取りしものゝ由に御座候。ミレーの息子は父の遺作に就而彼が畢生の貢獻の中、傑出の作二つあり一つは「エンヂラス」にて、他の一つは此「晩歸」なりと申候由、縱令「エンヂラス」の崇高はなくとも此畫の價値御推量可有之候。實にや高逸の品數多ある中に、此畫嶄然として明星の如く輝き居候。時は收穫既に終りし晩秋か初冬なるべし、うら枯れたる野は、一面にすき返へされて、遠き彼方に老いたる犂の其儘捨てられたるが見られ候。

蒼然として日暮れんとする頃、音寒き時雨の漸く休みて密雲散じがてなるに團々たる月魄雲をすかして天地の廣を照す處、逍遙はるかに荒野を限る一連の疎林に通へる一路を拾ひつゝ、年尙若き男の帽子まぶかに一群の羊を牽て家に向ふ樣、何んとはなき深甚の詩意をひき申候し。悶に向ひて道の右なる畑中に一疋の犬、是のみは他の寂寞たるに引かへて、活氣滿ちたるが面白き對照を致居候を端書には描き落し申候——見るに從つて一物一事の措置配合にかなひ一點一畫をも增減すべからざるは老大家の巧まざるに玆に至りしなるべけれども、幾多の苦心もあるべしと尊く存ぜられ候。色彩の妙を傳へんことは遂に望みて得べからざる事に御座候得共、此畫によりて見れば、ミレーは饒多なる色彩を用ゐし人とは思はれず、よく練りよくきたへたる僅少の色をもて驚くべき自然の調和を得せしめたるにやと存ぜられ申候。バービゾン派の製作尙數枚有之候が、色彩の潤爛を企てしよりは調和に心を用ゐし傾向何れの作にも見られ候樣感じ申候。筆は軟くして丁寧に御座候。輪廓の正確なるは此人の特色今更申すまでも無御座候。最も驚異すべき色彩の發揮は月の光とそれに映じたる

雲の彩に御座候。當今當代の米國畫家の展覽會開かれ居り申候。Originality のなきは何處も等しく、鑑査の不當なるも免れ難き弊と見られ申候。此國の所謂紫派は哀れに候。此國の人は空氣を描くことは出來ぬげに御座候。空中に濕度少なき故にや。

橫濱出航の際の寫眞御惠送被下、色々なる囘想に打たれ申候。雲一つなく晴れたる暑き日のさるからに夏威稍〻退きたる心地なりし事明かに記憶に殘居申候。直良君によろしく御禮願上候。

此度は種々なる事の爲め案外の出費に相成候得共、平日なればかくは相嵩み不申、然し此以前に申上候樣覺え居候が一ヶ月五六十圓にて充分ならんとの見込は外れ七八十圓は必要の樣覺えられ申候。出發の際申上置候一ヶ年千圓の見込みは本年は過剩と相成、甚だ不本意に御座候得共、此手紙御落掌被下候はゞ可成早く百弗御送金願上候。其豫算は、

三十五弗六十仙　現在金

當日より夏季休業に至る雜費

百弗御送金の分

三十弗　　論文檢閱料

七十弗　　夏季休業中の雜費及移轉費

唯今當校に於てマスターオブアーツの學位に對する論文を書き居申候。一寸百二三十頁の論文と可相成、題は「日本歷史に影響したる外國文明」と云へるものに有之、入校當時は課業の方多忙なりし爲め手をつくる暇なく、漸く此頃論文の方に相懸り申候間、果して五月中旬（論文提出期）に間に合ひ申候や否やは相分らず候得共、右の豫算は間に合ひたるものとして申上候ものに御座候。

若成功不致候節は尙半ヶ年當校滯在の積に御座候。移轉費と有之候は學位を得申候はゞ此地を去り、ハーバード大學（ハーバーフォードにあらず）に一年を過し度き心算に御座候得ばにて候。

此手紙は日を隔てゝ相認め申候得者、其間に二月二十三日投函の御書も難有拝誦仕候。夏期休業の消費法につき御意見を賜り感謝の至り篤と鑑考可仕候。

壬生馬君が三月七日に認められし御書も確かに落掌難有披見仕候得共、御返事は次便に相讓可申候。

餘り長く相成申候故此度は是れにて御免蒙可申候。

尚乍末筆御擧家様の御健康奉祈上候。

壬生馬君へ。鳥谷惠吉より態々端書送り呉れ申候返事可致筈に候得共、多忙の爲め其儘に致申候段可然御傳へ被下度候。

草々。

此地も漸く春らしく相成申候。庭前の草漸く靑くして、日の光もやはらかに感ぜられ申候。先日來好機あり候爲め、費府の造幣所併にベツレヘムと申候所なる製鐵場參觀致候。確かに有益なる智識を得申候。

目と耳と口とを働かせて、何やかや消化せんとあせり申候樣、側目にはをかしかるべく候。

行郞サン病氣シタ相デスネ、ダケレドモ、モー全快シテオメデトウ。米國ノ印紙ヲ數枚御送リシマス。若シ此次ノ便ノ時、日本ノ切手ノスコシ珍シイノヲ送テクレルナラバ、此地デ外國ノ珍シイノト取リカヘテ又送ツテ上ゲマショウ。コンドノハツマラナイ、アタリマエノバカリデス。

## 足助素一、末光績氏宛——四月三日於ハーバーフォード　〔二一〕

今日は安息日なり、米國の天地にては我等が救主の昇天各所の教會にて記念されき。

此夜、今、生は急に兄等の事思出し又特に兄等に報ず可き何事もなけれども、兄等に筆取ることによりて生の渇は醫さる可し。

兄等健かなりや。兄等の書を豫期せるの洵に久しけれども未だそを得ること能はず。生は敢て兄等が貴重なる時間を盜ま

んとするものにあらず。されども兄等若し生に與へ得べき寸暇あらば願くは兄等が近況を報ぜよ。生是れを以て兄等を責むるにあらず、願ふなり希ふなり。健忘の生も兄等を忘れ去らんには餘りに健忘ならざればなり。二兄よ、安ぜよ。生は兄等がよく知れる如き價値なき生活を改むること能はざるも神は尙そを捨て給はざるなり。生は尙健かに生きて地の一角に存在を續けつゝあり。愚かしき心靈のなやみ、時に嚴しく生を責むることなきにあらざるも未だ望を失へることなし、神は永久に讃むべきかな。

例年になき激しさなりと人の云ひあへりし冬は今將に去らんとす。春信二分、草は漸く綠に梢は嫩芽を催しつゝあり。此地は「天然」の麗しき所なり。兄等の居る地に似たる景物時々眼を過る。其時兄等の居る地を想ひ而して兄等を思ふ。尙ほ淺き居留の日月を以て米國を評せんには早計なるべけれども生が今の思ふ所を其儘に云ひ出づれば、米國とは energy, commonsense, individualism, mediocrity の別名なり。小生の inclination は寧ろ此國のそれに遠し。生は一以て之を悲み一以て之を喜ぶ。

末光兄、生は我等の愛する敎會を思ふ。彼女は健かにして愈ゝ美しきや。其牧者は敬はれつゝあるならん。

足助兄、兄の其後の健康は如何。

二兄よ、兄等の心靈の苦痛は如何なる行歩をなせしや。心靈の苦痛とは如何に深くして遠きものぞや。生は思ふ、是れ人が其一生を通して負ふべき重荷なり。哀痛すべきものにして祝福す可きものなり。猶我等の負ひつゝある十字架の然るが如し。

兄等は森本兄の消息を聞かざる可し。彼は愈ゝ勇しき戰を闘ひつゝあり。彼の堅信と勇氣とは生の鞭撻なり慰藉なり。木村兄亦遙に西スタンフォードにあり。其忍耐と發憤は殆ど人を泣かしむ。人生誠に羨む可きものあらば此堅信と勇氣と忍耐と發憤とを羨ましめよ。兄等と生とに此友あるは卽ち人生を讃美す可き所以にあらずや。

土曜會の人皆健かなる可し。願くは彼等に生が衷心の好意を傳へ給へ。工藤君今米國にありと。されども生は未だ彼に

聞くこと能はず生は彼と互に相慰めんことを欲す。

眼を閉ぢて思へば札幌の春色幻の如く心に浮ぶ。過去の「隨感錄」を繰返し見るに三十四年四月二十一日の條に、

「午後より森本、井街、末光、工藤、宮部謙、良ちやんと共に丸山に遊ぶ久振りなり……池に近く來れる時沈鬱に沈める足助君に遇ひぬ……彼若し苦みて益あらば彼に一層の苦楚を授け給へ。……」

など記しあり兄等の日記をも繰返し見よ。過去とは如何に嬉くも亦悲しきものなるぞや。

兄等よ、生をして筆を擱くに當りて言はしめよ、總ては益なし、神を信ぜよ。兄等の總てを神の手に委ねよ。如何なることありとも人を對象として兄等の心を滿足せしむること勿れ。神の手づからなし給へる封印を heart の中心に與へられん迄は我等の武器を捨てざらしめよ。自己衷心の滿足(「自己」の滿足にはあらず)、人生の意義は唯是れのみ。

金木君の死を聞く。生深く彼と知らざりき。而かも其氣骨ありて正直なる一靑年なりしを記す、哀痛に不堪。

此書兄等の手に落ち兄等幸に直に生に書を送るとも恐らくは其書は生のあらざる Haverford に達せん。されど宛名は、

Haverford College, Haverford, Pa, U. S. A.

にて可なり。

別紙を夜學校生徒瀨川末君に與へ給へ。若し彼女返書せんと云はば兄等の中彼女の爲めに十錢の切手代と狀袋の表書とを惠み給へ。

## 家族宛――五月二十二日日曜日於ハーバーフォード 〔二三〕

今日は日曜日です。殊に米國は此の日は靜かな日で、汽車も往復の度が減るし、馬車馬も休ませてもらふのが多いし、人も室に籠つて讀書と手紙に時を費す有樣です。

朝食が七時四十五分、終つてから、友の誰彼四人と共に、稍六町程ある停車場まで無帽で(田舍の氣樂さ)手紙を取り

に行きました。(日曜には配達しません)美しく晴れた朝です。樹々の梢が漸く濃い綠となつて、ライラックスの香が宛ら蒸す樣です。日本なれば多分六月中旬位の氣候でせうか。停車場で母上及び壬生馬君よりの御手紙と、愛子君よりのとを得た時は非常に嬉しく感じました。楓樹の靑々とした蔭に陽の目をよけながら、一通り三通の御手紙を讀み終りました、室に歸つてからモ一一度、二度繰返して、急に筆が取りたくなつたのです。

暫く前にワシントン府からの繪端書を差上げたのと、御兩親樣の御手紙に對して簡單な端書の御禮をした後、頓と御無沙汰したのですが、實に此日頃は忙しくつて遂々打かまけました。何卒御許を願ひます。

兎にも角にも、一年間此學校の厄介となつた事であるから、何か働いた丈けのしるしを殘したいと思つて、論文に「日本歷史に影響したる外國文明」と云ふ樣な題で、論文を書き始めたのです。材料を蒐るのに去年の暮までかゝつて、今年の始から書き出したのですが、丁度其際グリップ(日本のインフルエンザ)に犯され、其後どうも頭が本統に直りません。夫れにもつて來て日露戰爭の獅子吼(姉崎先生獨特の)が驀直に殺到したので、一時は腦髓も心臟も平時より變調を來して、枯木寒巖に倚ると云ふ樣な學者的態度が取れなかつたのです。で一時は殆ど失望して、今年の十二月まで在學の期を延す事にしようと決心して居たのでしたが、丁度三月の中旬頃でした、カーラキル、エマーソン往復書翰集の古本を買つて讀んで居る中に、例のカーラキルが佛國革命史の稿本を、友の過失によりて灰燼となした時、失望して〳〵殆ど業を廢せんとしたが、ふとした事から大勇猛心を起して嚙り附く樣になつて、再び草稿を改めたと云ふ事を、エマーソンに書き送つた書翰に來て、其大事件が私の身に起りつゝあつた弱志を根本から破壞しました。私の仕事はカ氏の夫れに比すれば固より九牛の一毛ではあるが、夫れでも仕事は仕事です。一つ奮發してやり遂げようと決心して、夫れから遊り勝ちなる英文の筆を叱咤百番して漸く去る十六日稿を脫し、淨書したら二百三十頁程の論文になりました。英文の手紙一つ書くにも苦しみ苦まねばならぬ憐れむ可き英作文の技倆で、是れ丈けの長いものを書いたには他人の知り得ぬ苦心もありました。兎にも角にも當年の本校論文中では最長の論文で、內容もそんなに劣つては居ない積り、唯殘念なことは文體の拙劣です。

其後少々疲勞を覺えて、筆を取るのが非常に物憂くつて、遂々御無沙汰に打過ぎました。四五日中に試驗が來ます、尙二つの論文を書かねばなりません。少しくへこまざるを得ないが、モウ一奮發です。人生とは「モー一奮發」なる語の繰返しらしくも見られます。

一寸端書で御報知した通り、去る春休暇を利用してバルチモアと、ワシントン府の見物をしました。バルチモアは森本の學んで居る所で、四月十五日の午後彼と同府の停車場に會し、携へられてあの大火の跡の宛ら古城址の如きを見、ジョンスホプキンス大學附屬の病院を參觀し、其日を終へ、翌十六日には二人にてワシントン府に至り、名にし負ふ米國の首府を走馬燈の速力で見てまはりました。先づ公使館に行つて入口の金色なる菊花章に云ひ知れぬなつかしさを覺え、呼鈴を引く時は宛ら我が家に歸りついた樣な思ひをしました。何處に行つても優しく取扱はれる米國で、コンナ考が起るのはあまり女々しい樣ですが、女々しくつても仕方がないのです。國會と圖書館とが此地で有名な建築です。花崗石の數百段の階段を登り盡すと、大理石と、花崗石とで建て上げられた、山の樣な大建築。場內も總ての規模が壯大で、堅牢で、米國の精神が打こまれて居る樣です。開會中の議會も見ましたが、議事が花々しい問題でなかつた爲め、活動の有樣は目擊し得ませんでした。大統領も此日は缺席でした。偖て見物は圖書館です。是れが恐らくは米國で建築と美術とを調和させた最大最美のものでせう。見た處は國會と同じ樣な建築振りで、羅馬のキヤピトル風と云はうか、セント・ピータ寺の樣です。場內は凡て大理石、床はモザイク、壁は當國に於ける畫界の巨擘が各一區を受持つて、後代に名を殘すべき好機會を握らうと勉めた跡が見えますが、打見たる所ドーモ薄ツペラなのが多い樣です。然し中には裝飾畫として申分のないのがあります。肝心の讀書室よりも、是れを一通り見るのに、凡そ二時間かゝりました。讀書室は又華麗を極めたものですが、組織には別に新機軸も見受けませなんだ。兎にも角にも國家を飾るにかくの如きものを以てするは、羨む可きことゝ思ひました。軍費と監獄とに費やす多額の不生產費を、ドーカ可成減じてかゝる高尙なる趣味の養成に費したいものだと思ひました。

何しろ、さすがに町の一帶の空氣が、費府やバ府とは大ちがひです。何となくゆつたりとして居て、米國特有の銅臭が尠くあります。聞く所によれば、米國人は殆ど總がゝりしてこの一都府を裝ふ爲めに盡力して居るさうであります。夫れから、博物館を見ました。嘗てペルリが日本に來た時、彼からよこした贈物に對して、此方からも返禮をしたのですが、ペルリ一行は勿論、米國政府の役人も、日本からの贈り物の眞價を知らないので、邪魔物扱ひに此の博物館の地下室に荷造りの儘捨て置いたことが、つい近頃までだつたさうですが、此頃漸く貴い品々であることがわかつて、取出されたと云ふのです。米國が其時日本に送つた品物の中には、オモチヤの汽車や電信機があつたのですが、當時の日本人は殆んど魔法でも見せられたと云ふ樣な眼をして珍しがつたと、ペルリに附いて行つた一船員の懷舊談が此頃の雜誌に見えました。其の汽車や電信機は今何處に行きましたらう、面白い記念だと思ひますが。

宿賃にかゝると云ふので、此の夕方バ府に引返すべく疲れた體を汽車に投じました。

翌日、卽ち十七日と云ふが日曜で、朝は當地で有名な御醫者（一診察金五百弗と云ふ）の聖書の講義を聞きました。世界に名高い大學者が、町はづれの御爺さんや御婆さんや文字少き善男善女を相手にして、熱心に談つて居るのを見ると、淚が出ます。此大事實を忘れた人が、宗敎を口の先でほめて見たりくさして見たりするのでせう。

此日、一句非常な名言を同先生から聞きましたが、今一寸出ません。

森本の下宿して居る所は、出獄婦人感化院の幹事の官舍です。此日の晝は幹事なるキーン夫人から中餐の招きに遇ひました。菓子の中に入つて居た少量の酒氣に眞赤になつたのが私の此日の失敗です。

午後は當地の有名な公園に遊びました。可成自然を殘すと云ふ趣意である相で、――ゲーテをまねた譯でもありますまいが――中々趣があります。上野動物園の四分の一程の動物園があつて、夫れを此地の人は矢張り誇つて居ます。夕方まで散步して日の暮れに家に歸りました。

十八日が月曜日で、此午前は森本は學校に出る、私はピーボデーの圖書館で論文の材料を集めました。ゴンゼと云ふ人

の日本美術史は餘程面白さうな本ですが、悲しい事には佛文です。此圖書館の傍に美術館がありますが、憐れなものです。

午後はヂョンスホプキンス大學を見ました。町の眞中に建てゝあるので好位置とは云へませぬが、書物の多い事と、教師の揃つて居る事は、さすがに當國の大大學校です。校長に面會しました。校長は私等に殊に有名なるレムゼン氏です。氏の小化學教科書は先生の弟子なる久原氏によりて飜譯せられて、日本の學生で私時代のものは知らない者はありますまい。其人に遇つたので實に愉快でありました。がつしりした半白の眼の色のいゝ先生で、話は日露戰爭が主題を占め、興が乘つて來ると先生机をうち座を進めて議論せらるゝのでした。

此夕方又キーン夫人から招かれて、出獄婦人の前で森本と私と一場の講話を乞はれたのは少々閉口しました。――而かも不意に――が先づ難關を切り拔けて、夫れから、茶の御馳走になりました。令孃と院の取締なる夫人と三人で非常に親切にもてなして與れました。ピアノで美しい樂も聞いて、夜晩く辭し歸りました。此晩から冬が歸つた樣に氣候が寒くなり出しました。

十九日。私があまり都會の生活の無趣味なのをあざけつて、バ府も米國の京都と聞いて居た程でもないと云うたので、森本がやつきとなつて、靜閑な部分を見せてやらうと、電車で田舍に連れ出されました。レーキ・サイドと云ふ避暑場の一哩程手前で、車を降りて、色々なことを怒つたり、喜んだり、笑つたり、嘆いたりして心置きなく談りました。鳥屋から孔雀が野放しになつて出て來るのに驚いたり、遠方で教會の鐘が聖歌のふしにつき出されるのを停まつて聞いたり、吹きざらしの野原で風が砂を捲くのに稍ゝ閉口して歸思が動きました。町に歸つてから私は又圖書館で一心に勉強し、此の夕方再び暫時の間彼と別るゝことゝなりました。ヒドイ風で寒い日で、くたびれた樣な足取りで停車場を歸つて行く森本が憐れつぽく見えました。實に彼は非常な戰をして居るのです。さぞ苦しい時も事もあるだらうと、同情の念が頻に動きました。

此夕方アボンデールの、此前一度永い間厄介になつた友の家のある停車場に着きました。前々から度々手紙で招かれた

のです。老父と一番末の娘とが馬車で迎へに來て吳れて、再び溫かなる家庭の空氣を飽くまで吸ひました。

二十一日の朝は其村の小學校の見物に半日を費して、生徒から色々な質問を受けました。「日本では小學校で練兵をするさうだが本當か」と羨しげに尋ねた腕白さうな小兒もありました。何處でも兵隊さんは小兒の理想と見えます。

午後は二人の少女が花狩りに連れて行つて、林の中で兩手にあまる斗りの野の花を摘みました。米國に來てこんなことをしようとは夢にも思ひませなんだ。此日は此二少女に私の凡ての自由を賣りました。二十二日の朝、此家を辭して又ヱルウヰンと云ふ所で下車し、有名な白痴院を見舞ひました。內村氏の「警世雜著」に委しく書いてあるから此處には多く申しますまいが、實見によつて得た感じは容易に失せまいと思ひます。晝食の馳走になり、非常に丁寧に待遇され、樂隊までを聞いて、其夕方玆を辭しました。白痴の一人が私の荷物を停車場まで持つて來て吳れました。又キット來いと、幾度か親切さうに云つて別れて行きました。ドクトル・バーと云ふ人が醫師長で、內村氏と同時に働いて居た人です。內村氏が桃を喰ひすぎて腹下しをして、夜中廊下を往復するので、やかましい誰だと尋ねたら、おごそかに"A JAP!"と云うたなぞと腹を抱へる樣な懷舊の話を澤山聞きました。

夫れからメデヤと云ふ所で再び汽車を捨てゝ、新渡戶夫人の兄君に面會し、其夜費府に着いたのでした。

其後再び例の論文にかゝりきりで、つい此間まで寸暇もない始末でした。

稍ゝ三週間程前から此邊が非常に美しくなつて、櫻や、林檎や、木蓮や、菫や、蒲公英や、梨や、杏や、こゞめ櫻やが一時に咲き出して、米國にもこんな優しい姿があるかと驚きましたが、今は夢の樣に變つて、滿目の靑葉となりました。雲の色も形も漸く夏の夫れになつて、時々暮方に夕立雲も見ますし、遠雷の聲も聞きます。

戰勝を喜ばるゝ御手紙の屆いた此頃は、戰敗と云ふのではないが、色々と軍事の不幸を新聞紙上で見て心を痛めて居ります。「初瀨」の悲しむべき最後、「吉野」の沈沒など、實に意外の凶事哀悼に堪へません。

隆三が歸るさうですが、モー着いた事と思ひますが、病氣はドーデスカ。何卒一日も早く快復されんことを祈ります。

壬生馬君の感想は、幾度か味ふ積りです。是に對する意見も申述べたいが、隨分長く書いたので頭がつかれましたから他日に讓ります。君の爲めに一寸私の論文の中の文學に對する外國文明の感化を略述します。

| | | |
|---|---|---|
| 第一期 | 純日本思想 | 古事記萬葉集（勿論多少支那印度の感化はあるも） |
| 第二期 | 印度思想に對する日本思想の反爭 | 源氏物語（佛教思想と感情主義との衝突） |
| 第三期 | 印度思想（日本思想に對する印度思想の勝利） | 西行歌集、方丈記（絕對悲觀主義） |
| 第四期 | 支那思想に對する日本思想の反爭 | 近松、西鶴（儒教の道義主義・階級主義とロマンチシズム平等主義との衝突） |
| 第五期 | 支那思想（日本思想に對する支那思想の勝利） | 馬琴諸作（絕對道義主義） |

是は私が自分で作り出した時代の分け方だが、多少の眞理が拾ひ得らるゝかと思ひます。唯是等の書物が手許にないので、細い所々を摘發して、此論據を確めることは出來ないが、私歸朝したら此基礎の上に一層緻密な研究を重ねて見たいと今から樂んで居ます。君の意見も聞きたいと思ひます。

愛子君からも久振りで、非常に委しい手紙、實に嬉しく拜讀しました。御返事をする筈ですが、忙しいので此手紙を見てかんべんして下さい。しまさんは此春から餘りすぐれなかつたとのこと、吳々も大切になさいませ。

モー一ケ月とは此地に居りますまい。此後の如何は追て申上げますが、手紙は玆の番地に出してくだされば屆きます。

是れだけ書くのに四時間かゝります。それだから一つ手紙を書くのは大きな仕事です。

皆々樣の愈々御健勝ならんことを祈ります。私は大丈夫です。此地は夏は隨分暑いさうですが、東京のちり／＼日照りに慣れた身には、そんなでもありますまい。

一九〇四年

寫眞を寫しました。其中に御送りします。

直正、直光、房子、はしかに罹り候ひし由速かに囘復され、御祝申上候。直正に、兵隊の伯父さんは、直正が早く幼稚園に行つて、字が書ける樣になつて、手紙をくれるのを樂しみに待つて居ると、御傳言願上候。

壬生馬君に、增田君へも長く御無沙汰致居候。此手紙を御覽願上候。米國史の成功祈上候。

## 家族宛――六月十二日朝於費府　〔二三〕

快く晴れ渡りたる空に、朝風膚涼しさを覺申候。昨日當市當所に相移申候。

又々永らくの御無沙汰何共申譯無之、平に御許容奉願上候。

母上樣、壬生君よりの御手紙、並に金二百弗確かに相屆き、落掌仕候段、萬々御禮申上候。聖ルイス行の爲め態々餘剩の金まで御送附被下候て、いつもながら隈なき御眷顧の程、感佩至極に奉存上候。

本月七日總ての試驗を終り、十日に卒業式有之、三十人程の卒業生は理學士、文學士を授けられ、パシフヒック・カレーヂ校長、本校一昨年の卒業生、倂せて小生の三人はマスター・オブ・アーツの學位を授けられ申候。學位も一年の所學も聊か誇るに足るべき程の事には無之候得共、在米一年にして此學位を得たるは日本人には稍々珍らしき例に可有之、兎に角一年の間、小子が不肖の質を以て此地に爲したる一端を御報知申上げ、日夜眷々の御念慮を、聊かなりとも慰め得んことを祈るばかりに御座候。

當地の卒業式前後の模樣は一寸事かはりて面白く御座候。九日即ち卒業式前日には、卒業生の級會なるもの開かれ、卒業生主人となりて、教授並に卒業生の家族を招待致候。五時參集。式場には教授並に家族の人々、今日を晴れと着かざつてつめかけ、卒業生一同は正面にコッチ向きに着座致候。簡單なる挨拶終りたる後、級中にて最も滑稽と惡口とに長けたる一人進み出で、級友の批評を始むるにて候。抱腹絕倒の事共多くあばかれ候中にも、滑稽なる賞與をもらふ人々の樣を

かしく御座候。例へば許嫁ある學生には乳母車、鬚の多きには三尺ほどの剃刀など滿座笑ひこけ申候。批評終れば、級中選拔の一人、級を總代して演說致し、ヴオケーをもらひ、夫れより別室に於て晚餐の饗應あり、右終つて學生の音樂有之候後、クラス詩人一篇の詩を誦し、最後に大匙授與式と申もの有之候。是れは美しく彩られたる、大なるスプーンを全級中最も紳士（嚴正なる意味に於て）らしき學生に贈る式に有之候。其選に當れる學生は、是れを非常なる名譽と致申候。而して該スプーンは因緣附きのものにて、始め新入生入校する時は、第二學年生は此匙を造り、嚴かなる式を以て是れを新入生に渡すのにて候。新入生は委員を設けて、四年間是れを大切に保存し、かくて卒業の際是れを最優等の學生に授くるものゝ由聞及申候。些々たることなれども、學生同志の自らなる奬勵法と感心致申候。

翌十日は卒業式にて、午前十一時より式有之、其の模樣は日本のそれと大差なく、午餐の馳走以後は校庭に於ては、舊卒業生と新卒業生とのマッチ有之、講堂には有名なる辯士を招待し、其雄辯を振はしめて、來賓は何れなりとも見聞するにまかせ申候。

二日に亙る立ちづめの騷ぎにて、隨分くたびれ候筈なるにも不係、來賓は非常なる熱心を以て來會し、地方より來れるものは、費府に泊りがけにて二日に亙りて來校したるを見受け申候。例の米國魂の何事にも差出づる夫れが一の原因なるべく候得共、他方には又教育に熱心なる程思はれて賴もしく存申候。

住む事僅かに九ヶ月、何事もなかる可き筈には御座候得共、面識なき人の集合せる外國に九ヶ月一所にありて得たる親しみは、日本にありて得たる九ヶ年の親しみにも相當致申候。訪ひ訪はれして、去りし日の懇情を謝す中にも、品性學識離れがたなく思ふ友も有之、二人去り、三人去り、やがて物の屑のみ取散されたる寄宿舍に取り殘されたる時には、一方ならぬ淋しさを感申候。親しく交りし友の親なる人々卒業式の際に會ひ申候が、夏の間は暇なるべし泊りに來よと誘ひ吳れ候が三家まで有之候。呪ふまじきは人の心なり、其奧底には何人にも同じき形の琴潜みて、同じき音律奏でらるゝなりと存申候。

卒業式日即ち十日に舜三君より荷物相屆き、披き見れば美しき故鄕の品々御送附下され候を發見し、幾重にも〳〵感謝仕候。今日は此の地を去るには御座候得共、校長始め暇乞ひに囘らんと致居候際とて、早速あの芦舟と、月夜とのビロード織は、一を校長に、一を小子の論文に骨折り呉れ候教授に相贈り申候。二人とも非常に喜ばれ申候。

校長に別れ申候際には手を握りてよくも此の校に來り呉れたりとて、親切に別辭を爲され不思涙を垂れ申候。彼は何處とて取分けて目に立つ處も無御座候へども、渾然として何となく慕はるゝ人物に御座候。校長の器たるに負かずと申候べきか。

此夜は獨り寄宿舍の一室に眠りて、翌十二日我が城廓なりし此室に別れ、此校に別れ、汽車に乘じて費府に出で、一先此下宿屋に落付き申候。聖ルイズの義、誠に御親切に御言添爲被下、重々難有奉存候得共、夏中は非常に暑き處にて、殊に雜閙の街に御座候得者、小子の夏ぎらひはあまり行く氣にも相成不申、誠に此地に於て何か有益なる見習を爲す方實益あらんと存申候間、一先見合せ申候。(以下六月十五日)

去る十三日朝、同窓學生星野勇三、紐育府より來り、小子と共に昨日まで滯在致申候。彼は政府より派遣せられたるにて、此度聖ルイズに至る途中立寄りたるにて候。異鄕異人の間に舊友に會するの快は此國に於て有し得る最大なる快に可有之候。

停車場にて手を取りたる時の心地は經驗したる人のみが知り得申候。

此夏は如何に御消光被遊居候哉。鎌倉に御出掛け成され候や。

壬生君には目出度御卒業のことゝ奉察候。今後の方針如何なされ候や。御序の節御報知願上候。隆三君も既に着京被致候事と存上候。身體の不健全は萬已むを得ざることに御座候得ば、充分御攝養可然候。增田君は君のよき相談相手なるべきこと、小生信じて疑ひ不申、若し君にして小生に御相談ありたきことあらば、同君に御相談あるべく、彼はよく小生の思惟する所を思惟し可申候。

九日頃には舜三君來費せられ候由、而會を樂み居申候。
先日小子の寫眞一とまとめに致し、御郵送申上候間、御落掌被下候事と存上候。
小生が渡米の際涙を流して離別を惜み被下候ひしは、安藤大人と、河野夫人に有之、かゝる人々に小影を呈するは小子の痛く喜ぶ所、何卒其旨宜敷御傳聲奉願候。
德富蘆花氏の「不如歸」英譯せられ申候。暇あるにまかせ一讀再び涙を流さしめられ申候。
追々暑くも相成候得ば、何卒呉々も御大事に被遊度、父上樣の御精勤もさることには御座候得共、此夏は暫くなりとも御靜養の時あらむことを奉祈上候。日露戰爭も不相變都合よく運居候樣子、眞に天佑と申すべきか。
父上樣の御手紙は唯今飜譯中に御座候。何れ其中投書可仕候。
御注文にまかせ先日來時々畫端書差上候が、御受領爲被下候や、畫端書は途中にて取らるゝとの噂さ有之候得ば、一寸伺上候。
先は右不取敢得貴意度草々拜具。

## 山本愛子氏宛――六月十三日於費府　〔二四〕

白鳩の翼やかりし夏の夜を枕にかよふひんがしの夢

## 家族宛――七月十四日朝於費府　〔二五〕

吹き來る風のまに〳〵、黄塵堆き下宿屋の窓邊に、絶間なき電車のおどろしき音を聞きつゝ、一筆呈上仕候。
學校を去り候てより、此市に移り、心當りの處に參考となるべき仕事を見付けんと存候ひしも、當方の注文少々むづかしき爲め、適當なる處を見出し兼ね、且つは暑氣と喧騒とにて不快を極むる都市の生活に得堪へずして、心あつき招きの

まに〳〵、再びアボンデールなるアーサーの一家を訪ふべく、去月二十二日此市を去りて田園裡の人と相成申候。米國に來りてより眞に親しみを覺ゆるは此の家のみ。隔てなき老夫婦と幾多の小兒と、今は慣れ親しみたる二匹の犬と、四匹の猫と、共に心よりの懽待を致し呉れ申候。參り候節は正に牧草と麥との收穫時とて、男子は眼の廻るほど忙しき時、農事の觀察には此の上なき機會に御座候得者、破帽弊衣洗足となりて彼等と共に汗と砂とにまみれつゝ相働き申候。彼等の體力は到底日本人の比にあらず、よく働き、よく喰ひ、よく寢ね申候。然し小子も思ひしよりは腕力の勞働に堪へ、終日働き申候。而かも一夜の安眠は再び翌日の元氣を囘復し、屢々彼等を驚かし申候。淋漓たる汗となりて働くは、苦しき中にこよなく心地よく、暫時の暇を盜みて、臺所にかけ込み、冷水一杯を飮むの味は、格別に御座候。本邦の農事を此國の夫れに比較し候得者、實に驚かるゝ懸隔にて、其粗放なる事意外に御座候。一エーカーよりの麥の收穫二十五より三十ブッシエルと申候得者、日本の收穫は倍の餘に當り申候。日本の農況を語り申候處、唯々驚き居り候。午後の約一時間は、此家の老父小子の爲めに論文の訂正を致し呉れ申候。綠蔭に淸風を仰ぎつゝ牧草の香、人を吹く處にペンを取るも詩興裕かに御座候。夕暮の殘陽尙殘れる頃には少女等に伴はれ、野生の苺や櫻の實を取りに森の中に分け入り申候。小禽の雛をはぐくむ囀諸々たる間に、器に盛り上るばかりの收穫を得て、明日の朝食の膳には色鮮かなる果物を供するが少女の務めに御座候。夜は思ひ〳〵に音樂を奏づる者、棋を圍む者、新聞をひろぐる者、團欒の樂しみを爲し候中に、小子は書架より適意の書をとりて、甘讀時の移るを忘れ申候。此家に止まること略三週日、其間に讀み候ものは、トルストイの集、メーテルリンクの作、ダンテの地獄篇、ユーゴーの「九十三年」及び古きスクリブナー誌に掲げられたるミレーの傳、カーライルの「衣服哲學」、並にヘーゲルの「歷史哲學」等晝間の激働に係はらず、此處に來候てより頭腦非常にクリヤーとなりたれば、思ひしより夥しき讀書致申候。殊に所がら感興多かりしは、ミレーの傳にて、幾度か同情や感激やにむせび申候。彼が社會の「弱き者」に對する熱烈なる同情、否彼が弱き者其者の代表者なりし事、自然に對する無上の崇拜、二つながら純一の極、英國のバーンスと共に世界の双璧と存申候。玆に至りて學者とは如何に憐れなるものに候よ。口によらざれ

ば社會主義を稱ふる能はず、筆によらざれば信仰の極致を述ぶる能はず、身は實社會の實相と離れて眼鏡と美髯との後ろに煩悶紛雜せる一大頭腦を蓄ふるのみ。

去る九日、漸く論文の訂正を終り申候間、十二日名殘惜しき彼家を去りて再び此の地の客と相成り申候。市に入れば頭腦は忽ち盲し、氣力は減じ、不快の念のみ心中を組織致申候。到底田舍者として生れし身と、今更らながら獨笑まれ申候。去國の際高木氏より種々の有益なる御注意を受け候中に「偏屈者は大嫌ひにて親類づきあひは御斷りなり。彼處に至らばイブニング・コートでも作りて舞踏稽古すべし、如何なることにても心得置くべきが大切なり。余が伊藤侯其他の貴紳と親しみを結ぶに至りしも此舞踏與りて力あり」と仰せられ候を確かに覺え居り申候。實行は小生にとりては不可能に御座候。伊藤侯は愚か、ビスマークとヂスレリーが手を引いて參られ候とも眞平拜辭可仕候。

當國の日露戰爭熱も追々下火と相成り、新聞にも馬鹿々々しき報道はすくなく相成申候。これから彼等の中に眞面目なる、正當なる意見を見得る樣相成可申候。此間田舍に滯在中、一人の一寸大きな地主に遇ひ申候處、彼は一方ならぬ日本ビイキにて、生れてより此方、他國に對し此度程同情を持ちたることなし、日本の軍備は世界に冠たりと稱して差支へなしと申候迄は先づよかりしが、やがて尙稱讚の辭をつぎ、「産物も決して少しと云ふにはあらず、疊表提灯の如き則ちこれなり」と聲張り上げられ候には當惑仕候。殺人の上手と人に知らるゝはあまり難有きことにあらず、何か外のものにて世界の何處にも知らるゝに至るまでは中々自慢所か油斷がならずと存申候。

隆三君は既に歸京被致候事と存申候。其後の方針如何取定められ候や心に懸り申候。隆三君より直接の御手紙望ましく待ち居申候。

壬生馬君はいよ〳〵望まれし方針に進まるゝ由大賀々々、眞に御喜び申上候。世に最大なる幸福とは、己れに最も適したる生涯の業を撰び得ることゝ存申候。願はくは益々精進事の堂奧に入られんことを祈り居申候。

本年九月下旬よりマサチュウセット州なるハーバード大學に移り、玆に一年間選科を修め度くと存申候。同校は御存じの

如く米國二大學の一にして規模の大と、經歴の古きとは、一年の通學に價すと存申候。費用等の點は未だ充分に取調べず候得共、只今までとさして變りたることは有之間敷と存申候。此手紙御落掌被下候はゞ、何卒可成早く金三百弗御送附被下候樣願上度、これを以て本年中を支ゆるに充分なりと存申候。（來學年末までの學費も其中に含み申候）當地は（番地略）にて願上候。同夫人は新渡戸夫人の友人にて、小子屢々世話になる人に有之、確實なる人に御座候。小子何れに滯在罷在候とも同夫人より回送致吳れ可申候。

去月末旬當地にて遊學しつゝありし河井道子と云ふ婦人（札幌北星女學校の助教を爲し屢々新渡戸氏に出入せしかば在國以來面識あるもの）の歸國に托し五六枚の印刷畫御送附申上候。新築の洋館の裝飾にと存申候。遊學費にて此の如きもの買ひ候而御送附申上候事、甚不當ながら好便と思へば何物をも御送附申上げざるは何となく殘り惜しく覺えて、かくは取計らひ申候。同婦人は一寸おきやんの樣に見え候得共、心はよき人と存申候。小子の來たてには屢々世話になり申候間、相當に御會見願上候。

御手紙御膝下に屆申候は酷暑の候と存上候。蟬の聲聞かぬ此方の夏は物足らぬ心地致候へ共、貴地は之れに引きかへてかしましき頃にて候ふべし。萬につけて御自愛の程奉祈上候。

山本、高木には例の如く御無沙汰何卒宜しく御傳聲願上候。

森本は日露戰爭の演說をしながら地方の巡回致居候。木村は激働にて少々身體を害ひ候樣子、「時間がなくて充分勉强が出來ない、僕は勉强の方は斷念したから君等シツカリやつて吳れ」と可哀相な手紙をよこし申候。彼等を思ひ候得者何時も感奮致申候。

田舍に滯在中パンを燒くことを覺え申候。今朝彼等の小兒等より小子が調合して燒かずに殘し置きたるパンを、小包郵便にて送り越し申候。味ひ候に中々うまく御座候。無聊なればかばかりの親切も心より嬉しく御座候。

私の今手紙を書いて居ります處は、費府を去る約十九哩なるフランクフォード精神病院の三階であり升。然し、勿論、私が精神病をわづらつたのではありません故是れは御安神下さい。

アボンデールの田舍から費府に歸りましてから、一寸手紙を差上げて置きましたが、費府に歸ると市街の雜閙は再び絕間なく私の神經を刺戟しまして、果ては暑さと車の音とで神經がいら〳〵して終夜床の中に寢つかれないで困つたことが二晩も續きましたから、是れでは到底居たゝまれないと思つて、何處か閑靜な處で讀書の暇があつて、併せて何か觀察の出來る處に行きたいものであると、日頃親しくして居たハーバーフォード大學の協議員の一人に相談をしました處が、早速親切な紹介狀を此病院に宛てゝ書いて吳れました。但し此の病院は私が此冬見舞つて面白いと思うた處で、私から彼に玆に紹介して吳れる樣に賴んだのであります。（以下二十四日朝）

去る十九日にフランクフォード行の列車は、矮小黑髮の一靑年を精神病院に運びました。私の仕事は病房の監督をするのであります。患者が凡そ十四人居りまして、是れに監督者が五人ある。其一人となつたのであります。生れ落ちてから始めて試みる仕事を、毎日の樣に致します。先づ初日には食卓の給仕をしました。其次の日には患者に入浴をさせました。其次の日には患者の床と其室を掃除しました。日本に御出でゝ之れをお聞きになつたら學生にあるまじき仕事の樣に思はれませうが、此地ではそんな事は一切かまひません。私の外にも學生が二三人居ります。額の汗で食ふのが偉い人としてある米國では、學生が大威張でこんな事を致します。

私がこんな處を撰びました理由は、米國に於ける慈善事業の一斑を觀察したい爲め、且つは己れよりも弱きものに幾分の助力を與へて餓ゑたる心を滿足せしめんとの、申さば利己的の考もあつたのであります。

參ります前には色々な想像が胸の中に蟠つて厭な氣持にもなり、潔い心地にもなりましたが、第一に胸にこたへたのは

勞働時間の長いことで、朝の六時半から夜の九時半までと云ふので、讀書の出來ないことがひどく殘念で御座いましたが、來て見れば實に暇な仕事で、食事前後と掃除の時を除いては、全く閑散であります。患者と共に美しい芝生に出で、折々患者を看視しながら、ハンモックにでも露臺にでも凭りかゝつて、綠濃き木蔭で思ふ存分讀書に耽けることが出來ます。丸で何處かのサンマーレゾートに參つた樣なものであります。

早四日になります。院内の樣子にも追々慣れて、何も不自由は感じません。毎週四時間の自由なる休み時間が與へられます。私は今朝九時から午後一時までの休を得ましたので入浴してから、此手紙を書いて居るのであります。雨が降つて居ります。此三階は監督者の合宿で、大きな机の上に古い雜誌の表紙がなくなつたのが五六册、昨夜私が摘んで來たスウイートピーがコップに挿してあります。蠅がうるさい程居てあたりが靜かで、雨垂れの硝子窓を打つ音が、しづまつたしつとりとした空氣に、單調な響を與へて居ります。

六月に御出し下さつた御手紙を此院で受取つて大なる感謝を以て繰返して拜見致しました。此度は父上樣から、又隆三君からの御音信も得て、嬉しく存じました。父上樣には相變らず、母上樣にも日に增し御快方の趣、無上の事と存じます。御寫眞を待ち遠しく存じて居ります。隆三君の病氣は左程のことはなかつたさうで御喜び致します。然し此の夏を利用して充分に養生して再び强い立場に立つて、與へられた力で働くことが出來る樣にならんことを祈つて居ります。向後の方針はどう定められたか、きまり次第知らして下さい。

私は此の九月中旬まで居る積り、それからハーバード大學に入校しようと存じて居ります。此約二ヶ月間に得る給金が約三十六弗、實に御恥しい話でありますが、私が己れの手で金を獲る第二番目（第一番目は著書）であります。（以下七月三十一日）

大變に長くかゝつて書く手紙で、途中で色々思ふことが變りましてお分りにならぬかも知れませんが、己れの手で金を得る第二番目で、昨日芝生に居りますと迎へが來て、他の一人の看護人と共に事務所に參りまして、十三日分の給金をも

らひました、其時は何とも云へない心地がして泣いていゝのか笑つていゝのか分りませんでした。

看護人の頭(かしら)はライランド人で、太つて頭がはげて居て一寸福相に見えますが、案外依怙な人苦しめの人でありまして、私は"Tak"と呼ばれて時々劍つくを喰ひます。實に感謝すべき事には生れてから未だ人に使はれた經驗のない私には此人の擧動が時々癪にさはつて、怒が心頭から燃え立つことがありますが「此處だな」(新渡戸氏が余等に教へられました話です)と我慢して羊の樣になつてやつて居ります。其時は何か物足りない樣にも(頭の一つもなぐり合ひをすれば氣が晴れるだらうと思うたりして)自分が好んで人の下に立つ樣にも感じますが、時に暇になつてから獨り後庭の森の下道を散歩して、靜かに過した一日を考へますと、感謝の念が湧き出て、不思議涙を以て祈ることがあります。聖書を讀みましても、今まで左樣にも感じませんでした句が、ひし〳〵と身に答へて新たなる眞理を拾ひ得た喜びを感ずることも御座います。(以下八月二日)

今日は火曜日で午後から休みを得ましたから、更に此手紙を續けます。兎に角此度の仕事は私にとりましてはもつけの幸でありました。後來必ず是れが爲めに益せらるゝ事があるのを信じて疑ひません。

壬生馬君が愈ゝ其方向を決定せられたことは、何よりも目出度存じます。男に取つては一大事の決したことで、悲喜交至る樣で、處女が結婚した時の樣であらうと御察しゝます。今は其運命の上に堅く立つて猛進されんことを切に望みます。君が其後の消息は私が最も聞き度く思ふ所、此手紙が御手許に屆く前に君の手紙を得ることが出來ると思ひますが、若しさもなくば是非聞かして下さい。藤島氏とはよき師を撰ばれました。

此度の御手紙と同時の便で、愛子君からも端書を頂きましたが、特別に御返事をいたしませんから此手紙を御回し願ひます。

是れで失禮致します。此頃は日本附近の海が烏海(バルチック)艦隊の爲めに危險の樣子、此手紙がどうか無事に御手許に入らんことを祈ります。

## 増田英一、壬生馬氏宛——八月二十九日於フランクフォード精神病院　〔二七〕

静かなる夜なり。室の内には時計の時を刻み行く音、室の外には遠くコホロギの啼く聲聞ゆ。今日午後半日の休暇を得たれば費府に出で、メモリアル・ホールと云ふ歐洲より齎らされし若干の名畫を觀たり。始めてミケランジエロ、ムリニオホ十五十六世紀に光榮と冕冠とを加へし巨人が筆のあとを見る事を得て、心すがすがし。生が紐育に英一兄を見たりし時、慰みには畫をと云ひしを打ち消して、君は「汝其頑癖尙醫エズヤ」と生をたしなめ給ひき。

實に生が怪しき執着は繪畫なり。幼くて山手の英和學校に通ひつゝありし時、生は誘惑に堪へずして友の持てりし美しき西洋繪具を盜みて發見せられ、我より年長けたりし其友の爲めに、痛くたしなめられしことあり。叔父上の紫鉛筆（其頃生が眼には最珍かなるものなりき）の尖端を竊に打ち折りて紫の繪具に代へし事あり。是れ等の罪科（生の今に至るまで何人にも告げざりし）は凡て英一兄の所謂頑癖の爲めの故に犯されぬ。爾來歲月擅に移りたりと雖も、三歲にして享けたる魂は今も生が心の宮を離れず。今日痛く生を動かしたりしは、ヴワンダイクが「墓場の耶蘇」と云へる一畫なり。黝暗物凄き全幅の中に基督を圍みて泣ける二個の女性あり。かすかなる光は淡くさし入りて、主の全軀と悲嘆に沈める二人の面と肩のみを照せり。肉の美しさ云はんかたなし。我が日本の洋畫家は、十九世紀が產みたる新潮流に棹さんよりは、更に溯りて少くとも十六、十七世紀をねらふ可きなりと、ツクヅク思ひぬ。さはれこは生が事にあらず、今は凡てを壬生馬君が指呼に委ぬべきなり。

三週日程前なりき。英一兄の紹介狀を同封せる井上君の書を領しぬ。（生は此院にあるが爲めに彼を訪ふこと能はざりき。且返書をだに認めざりき。此書兄が手に達せん時、或は井上君歸國の途に就けるなるべし。兄願くは生の爲めに疎懶を詫びよ）兄よ、生が兄の書を見たりしは正に幾ヶ月目なりしとするぞ。生は嘗つてかくして兄を苦しめたり。されども兄が同じ手段をめぐらして、生に酬いんとは生の豫期せざる所なりき。兄は生が家信を常に讀ゝ給ふなる可し。

兄よ、生は今充分に如何に生が兄を苦しめたりしかを味ひ知りぬ。最早や充分なり。此上に兄は生を苦しめ給ふ可からず。生は夢なきを誇りし身なりしかど、此頃は夢多くなりぬ。三日前の未明に生は兄を夢みたり。何やらん悲しくなりて夜の明くる迄得眠らざりき。兄の××××さる可きは疑をいれざれば、敢て心を苦しめず。兄の米國史は如何に進行せしや。三年飛ばず鳴かざりし鳥の如何に特殊なる聲を放たんとする、生は鶴首して其刊行の日を待てり。

愛子君、生の寫眞を見て泣きしとや、實に君は鋭き直覺を持てり。彼の寫眞の生が手に入りし時、生は封を開きて稍々笑まへる己が肖像に滿足せしが、暫く見入りて其中に呑み難き悲愁の色を見たり。寧ろ危惧の容を見たり。願くは再び手に取りて熟視し給へ、かくて生を憐み給へ。嗚呼、光、我が暗きを照し始めてより既に五年、而して惠山には尙ほ拔き難き黒翳ありて潛めり。生が不邁の愚性も亦甚哉。如何なれば生は罪を厭ひて罪に居るや。如何なれば世の智慧をあざけりて世の智慧に居るや。如何なれば動かざるや。如何なれば搖ぐや。何故に「眞善美」と云ひ、「絕對」と云ひ、「眞理」と云ひ、「理想」と云ひ、「エネルギー」と云はん代りに、「神」と云ひ得ざるや。是れ生が憂なり。單純を罵りて乳臭脫せずと云ひ、直截を蔑みて世の情に長けずと敎ゆる學者は災なるかな。所謂老成達練の士とは何ぞや。世を嚙みくだき、嚙みくだきて、味も香もなき殘滓を舌の上に剩しつゝ、人世斯くの如きのみ、惡笑する醜類のみ、我等彼と何の干りあらんや。而して尙且つ其欺く所となり、自ら葛藤を明鏡の面に拈して煩絕し悶絕す。願くは我等をして「單純」「明白」の信者たらしめよ。我等のライフ・ウオークは茲にあり、人の複雜を囘らして神の單一を來らすにあるのみ。

生が此の院に於ける二ケ月の消光は、生をして嘗て知らざりし異土を步ましめぬ。實に面白きは此世なり。かくばかり狹き地球の面に、如何に多くの積載せられたるよ。此小なる精神病院の中にも數多き王國あり。同情の鍵もてるもの其中を旅し得可し。押しなべて云へば光少なき國々なり。患者にも勝りて憐む可きは看護人の人らしからぬ事なり。生は初めて米國の金に活くる人を見たり。彼等は金を得るが爲めに働きつゝあり。働くが故に金を得るにあらず。生は“Tak”と呼び付けにせられ、種々なる餘業は生の肩上に投げらるゝなり。他の學生にして生と共に此に勞働しつゝありしものは遂に

一九〇四年

其の無禮を忍び得ずして二週間前監督者と口論せる末玆を去りぬ。彼が負ひつゝありし凡ての重荷は皆生の上に來れり。生は幸にして彼よりも稍々忍ぶことに長けたり。此境遇に立ちて、患者の信用は生に多大の慰藉を齎すなり。看護人は凡て"Small Jap"の澁面と Too hard Working（彼等、生にかくすべく强ひながら）とを厭へども、患者は却て不思議なる直觀を有ちて、彼等の或る者は生にあらざれば其の郵便の投函を托せず、或る者は生と共に祈らざれば其床に入らず、或者は生を愛して其養子となさんと云ひ、或る者は生を稱して"Leader Worker"と云へり。感謝す。少許の同情は多大の慰藉もて酬いらるゝなり。夜九時より十時の間自由に散歩甲（以下九月一日午前一時半）

（生は此日、夜勤として午前一時より夜の明くるまで患者の眠りを守るべきなり。喈々たる蟲聲に眼を閉ぢて耳をすませば、宛ら彼世の韻あり。單調なる長廊下の一端に置かれたる机の上には昨夜の夕刊新聞二三と患者の睡眠表と置かれたり。一時間每に各室を點檢する間の時を利用して此書を認む。

君よ、君等が安く深き眠りにあり給ふ時にも玆には良心の呵責に遇ひて眼を閉づる能はざるのみか、秋の夜長を如何にして自ら殺す可きと案じわづらふ人の子のあるを思ひ給へ。痛慘嚴肅なる人生の底潮よ、其處に不言の傷あり痛あり。誰かは其不言の傷に代りて物言はずやと思はざる。誰かは其不言の痛を探り出してそを癒さんと思はざる。而かも顧みて己を見れば、見よ我も亦信仰足らずして同じき痛傷を心に負ふの人、涙の滂沱たるを禁ずる能はざるなり。）

乙を許さるゝが故に生は必ず後庭なる森の茂みを獨りさまよふを此の上なき樂しみとなすなり。森は廣くして深し。魔魅ありて住むと看護婦の懼るゝも理なれども、生にはこよなき休息の床なり。此は我が王土、玆に至る時生は生の無上威力を覺えて種々なる夢を夢むるなり。時には賴りなく淋しく覺ゆることあり。時には靈白灼するが如きを覺えて不思卒立することあり。茫然として何事をも觀ぜぬことあり。森はこよなく愛すべきものとなりぬ。

「他を欺く可し、己を欺く可からず」とは古人の言なり。されどもそは誤れり。「己を欺く可からず、如何にしてか他を欺き得んや、欺きたる人は自ら欺きたりと信ずるのみ、而かも欺かれたる人は聊かだに欺かれざるなり」と强き確信を得せし

められたるは此處なり。

壬生馬君の新しき境遇さこそと思ひやられる。君は生の如く幼稚なる時より家を離れて遠く遊ばざれば事變りたること最多かる可し。洋行と云ふこと左程重きことゝも思はねども君を伴ひたしと思ふは名畫のある所へなり。今更ら寫眞、版物の無意義を悲しむの外なし。寫眞と原畫とは全然別物なりと信じ給へ、其差は天と地との差よりも甚し。

此秋はハーバードにある可し。英一兄が繪端書を寄せ給ひながら旅せし跡を辿るはなつかしき心地なり。ボストンなる"A Quaker's Home" の著者に折あらば手紙かきて生を紹介し給はゞ幸甚し。彼所にては Special Course の而も特別のものを取らんとす。歷史に重きを置きて宗教と哲學との一班にも指を染めんと期しつゝあり。經濟と政治とは是非概念を有せざる可からずと思へども生の頭腦は全然之を拒絶す。必要に逼らるゝにあらざれば其研究は難からん。

愛子君再び男子を設け給ひしとや、隆三の書によれば最も男らしきよき子なりと、名もよき名なり。願はくばすこやかに生ひ立てかし。

愛子君、志摩子君、英君、行君の寫眞は費府にて、壬生馬君、行君の寫眞に併て一家の寫眞は此院にて領收しぬ。實に幾度か繰り返して感慨多し、英一兄の大禮服着け給ひしはなきや、さらずも一枚を送り賜はらば幸なり。

曉鷄聞ゆ、去年の今頃は我等を載せたる船、正に經百八十度を通過しつゝありき。船旅の十四日、翼長き海鳥の鳴く聲に朝の夢は破られしが。

さらば余が働く可き時は近づきぬ。筆は箒に代らざる可からず。祝福すべき他の一日よ來れ。此日此時、君等が夕餉の膳に喜びあれ。

家族宛――九月二十二日於費府　〔二八〕

電車の響すさまじき費府の一逆旅より此一書呈上仕候。一昨日新渡戸一家族よりの端書屆き來り、「皆々樣日光の遊を終

へ給はゞ鎌倉に來らるべしとの由」と報じ越され申候。今日は二十一日なれば學校も始り候時節最早夏の休養も終へ給ひて、夏のものと秋のものとの出しかへ入れかへなど、兎や角せはしく入らせられ候節と奉遙察候。果して日光鎌倉の御避暑被遊候はゞ、父上樣、母上樣とも日夜御多繁の御心身、少しは休まり給ひし事と心より欣喜罷在候。とうに手紙差上ぐべしと幾度か筆は取りながら、其儘に紙打裂きて御無沙汰申上候段平に御宥免奉願上候。御消息は度々相頂き其都度盡せぬ感謝致居候。殊に去る頃送り給ひし御寫眞は實に嬉しく朝暮打眺め居申候。皆々樣のすこやかげなる御容子——さはれ母上樣のやせ給へるは、尙全く痊え給はずと心痛められ候——は何よりの慰藉に有之候。又先度リッピンコット夫人宛にて御送附被下候三百弗も確かに落掌、難有奉謝候。母上樣の御手紙に書き籠められし、此の金子出途の御訓旨、涙もて拜見仕候。相忘れ申間敷候。

此前拙書差上申候は、確か七月の二十五六日頃の候にやと存居申候。かの精神病院よりと確かに心覺え居候。偖て彼院にあること殆ど一ヶ月半、本月十五日を限りに辭して費府に出で申候。小子事幼少より膝下を辭し、今に至るまで諸所にありて他人の中に交り、種々の事致居候得共、未だかくの如く苦しくして、面白き經驗には出遇はず候ひき。先づ異邦人の間に入り、知識も品性も左程我よりは勝れりとも見えぬ人々より、下し眼に見られて時には腹立しき罵詈の言を聞く時、心なき看護人が訴ふる所なき患者を遇するに、人にしてはあるまじき卑劣の事するを見る時、偖ては神學生と銘打ちて此院に働ける男の、希臘語と羅典語とに稍ゝ通じたる外は基督教徒の特色を何處の隅にも見出で難きを發見したるときなど、苦しさは胸をせめて獨り森の中に人生の墮落の如何に甚しきかを思ひたることも屢ゝには候ひしも、又一面に患者と云はるゝものにも、一かどの光明は消え失せぬ事、少許りの同情も多大の感應を引起さざれば止まざる事、全く異語異胞の人の中にも、やさしき心もてる人あるを見出でたること——かゝる境遇にては殊にうれしく感申候——宛ら無に等しき我が信仰も恩寵と試練とによりて、神を畏れ人を愛するの道に進むを覺ゆる事など、交々心に逼り候得者、凡ての苦痛、凡ての悲愁は跡なく消えて躍るが如き歡喜と感謝のみ胸の中には殘り申候。始めて基督教に入らんとして、皆々樣の御心

痛く苦め奉りしより既に六年、我ながら腑甲斐なき心の暗さに迷ふこと長く候ひしが、此の頃漸くうれしき光の彼方に白むを覺申候。今は神の導きによりて、此の不退轉の道を力に任せて辿り可申候。

、彼の精神病院の生活は確かに成功にて、小子は皆より信頼せられ、愛せられ申候。或患者は小子を養子となさんと云ひ、或る患者は小子と共に祈るにあらざれば眠りに就かず、或る富貴なる患者は小子を自家に伴ひ歸り、其會社の社員となさんことを主醫に申出で候由、何れも頭病める人の所業なれば、眞面目の沙汰には御座なく候へども、小子の些かなる同情も彼等を幾分なりとも動かすに足りしと思へば、心嬉しく存申候。日本人は思ひしよりは勉強なる忠實なる人民なりとの觀念は、小生確かに看護人役員等の腦中に銘し申候。小子は實際忠實と勉強とを以て、此の生活を一貫致申候。仕事は卑しく低き事には候ひしも、其仕事を此精神もて働き遂げしは、小子が感ずる最大の感謝に御座候。是れ程嬉しき報酬は無御座候。

十六日の朝、彼處を去り申候處、例のアボンデールなる田舍の友人費府に滯在して、小子を待ち設け居り是非にと、其夕方小子を其家庭に伴ひ去り申候。小子が此米國に於て得る唯一の隱れ家(眞に温き所)は玆に候へば、小子も強てはいなまず、其處に十九日の朝までを過し申候。林檎が花の樣に實り、麥刈りし跡には野菊咲き、川添の柳の葉漸く散るに近き秋の靜けさを唯獨り身にしめて、悠々たる思念に三日の日を暮し、過去二ケ月の苦しかりし戰の傷は跡なく痊され申候。

十九日、此家を訪れんことも今朝を名殘りなる可し。人の世の遘遇離散古より不思議は無御座候へども、名もなき一人の異邦人をかくばかり、心厚くいつくしみ吳れたる一家と、此世にては又遇はざる可く、別るゝと思へば堪へ難き悲痛も胸に逼り、殊に愛したる幼き二人の姉妹の學校に出でたる暇を、逃ぐるが如く再び費府の街の塵にまみゆるべく汽車に投じ申候。

二十日には當市ペンシルバニヤ大學に入學したる舜三君を訪問し、共に久濶を語り會ひ申候。君は例の如く至極元氣にて、克く食ひ、克く語り貴地の模樣など色々と傳へ給はり候。殘念ながら小子は君と同じく此市にある能はず、數日中に

別れざるべからず候。二三の知己を御紹介可致存居候。

小子事は當市及其近所に住せる三四の知人を訪ひて暇乞ひを爲し、二十五六日の交、新英州なるハーバード大學に向つて發足すべく心組罷在候。彼處には一年間滯在の見込み、松方乙彥君の修學しつゝある大學に御座候。

日露戰爭の狀情聞くも慘鼻の至り、國民の苦心今更に思ひやられ申候、唯々其一日も早く適當の終局を見んことを祈り居申候。鳥谷は名譽の負傷の由、誰人か訪問の御序も有之候はゞ可然御傳被下度候。（中略）

本朝はこれにて筆止め可申候。何れ新英州に相着申候得者重ねて得貴意申すべく、皆々樣へ祝福裕かならんことを奉祈上候。

## 宮部金吾氏宛――十月二十七日於ケンブリッヂ　〔二九〕

宮部先生。

其後は意外の御無音申上候段平に御宥免被爲下度願上候。御依賴申上候紹介狀は早速御調書被爲下小生費府に罷在候節確かに拜受、御懇切なる御注意と共に難有拜見仕候。Pemra の一年例の牛步的に相終へ夏休暇も割合に有益（小生には）に相暮し、先月下旬此地に罷越申候て早速 Prof. Goodale 竝に Farlore を訪問仕候。兩先生共に甚だ懇切に引見被爲下未熟の地に多大の力を得申候。Prof. Goodale に御面會申候節は容貌動作共に先生を想起することを禁ずる能はず。先生若し倚齡を加へ給はゞ Prof. Goodale の通りにならるゝ事ならんなど歸途獨り懷舊の情に打たれ申候。

Cambridge も先生御在學の節とは痛く相變り申候半。兎にも角にも一帶の atmosphere の學者的なるは直ちに看取せられ候。參候節は樅の黃葉美しく札幌など思ひ起し申候。小生は Kirkland Plafe と申候袋町の端れに立ちたる老いたる寡婦の一室を借り受け申候。御在學當時には或は木立ちのみなりし所にやと存申候。此にては別に degree を取らんとの心も御座なく候間氣儘に好める course を取り居申候。申上候得ば御笑ひ草となる計りなればわざと委細は記し不申。大學の大規

模なるには今更ら驚嘆の至りに御座候。自分の仕事に追はるゝやう、教授連に privately に面會するの機會少なければ未だ先生の御知己には多く面會する事を得ず候得共其中追て見當り申候事と存申候。高名の人の時に此處に來りて、高說は聞かずとも其顏だけにても見得るの機會多きは愉快に御座候。

當年は大學始申候てより最多く日本學者の集へる年に御座候由、總てにて十一人に御座候。高杉先生も government とかの course を取り居られ申候。圖書館にて時々御面會致申候。

先日星野勇三君渡歐の序を以て遊來し三日計りを小生と共に樂み暮し申候。一日一所に樹林園に罷越し買集めたる雜多の書辨當を Catulpa Speciosa と札打たる桐の樣な木の下にて相味ひ申候。君は紐育にて時任君に遇ひたる後直ちに渡歐の船に上りし筈。今頃は佛國にて隨分會話に困り居る事と存申候。

會話と申候得ば會話は中々上達不仕。遇ふ日本人每に小生と同じき歎聲を漏し居申候。半年も居れば大抵大丈夫なりとは小生在國の際諸人より聞きし處なれども、實際は案外至極誠に恥しき次第に御座候。之れに懲りて小生は渡米せんとする人に未熟の英語にて渡米する事を止めんと存申候。

森は St. Louis にて、働くより戰ひつゝあり候由。森本は此一夏を學資を作る爲めに Illustrated Lecture の旅行に出掛け、感ず可き成功致申候。木村は此處働きすぎて病氣になるやら何やら氣の毒に御座候。どうか方法はなきものかと存じ候事も屢ゝ御座候。田島君は再び Union Seminary に來候由。我等の爲す所兒戲に類したる事も多く候半なれども、飛廻るだけが愉快に御座候。玆まで記し申候て再び抛擲し唯今（十一月十七日午後五時五十分）再び書き續け申候。自ら己れの懶怠を憐むの外無御座候。

先日札幌獨立教會より會報御郵送被爲下拜見仕候處色々懷舊の情に打たれ申候。會計を助けよとの檄は特に小生の眼に大きく相映じ申候得共齡人生の半を過ぎながら自ら金を取りたるは Livingstone 傳の原稿料ばかりなる小生唯々慚愧の外無之候。どうか教會が益ゝ振ひ玆より眞の生命の生れん事は實に小生が衷心の祈に御座候。當地に參り候てより殊更に甚

督敎（現在の）が無力となりつゝあるを目擊耳聞仕申候。此具合にては爾後日本は宗敎の海外輸入を謝絕致候方日本將來の基督敎の爲めに得策かと存申候。

札幌に在學致居候節生意氣なる事申候を愧ぢ申候。小生如きが宗敎を云々するが如きは以ての外の間違ひなりと氣が付き申候。どうせ牛步的にゆつくりと準備致度存居申候。

當地の學生に呑氣な者の多きは驚き申候。此頃は football にて丸で夢中に御座候。本日は Yale との match 有之多數は其地に罷越申候が、殘れるものは Harvard Squre に集り時々刻々 New Heaven より來る電信讀み上げられる毎に例のラララを大呼致居候。

何なりとも當地に御用有之候節は出來得る限り盡力相試み申す可く無御遠慮御報知願上候。夫人並に謙ちやんにも何卒單に宜敷願上候。

本日星野より手紙受取申候。「ヴェルサイユ」園藝學校に入學致候由、着々進步の階にある事と存申候。

## 家族宛――十二月十三日於ケンブリッヂ　〔三〇〕

如何に致し候ひしにや、幾度も筆を取りては紙を破り、遂に今日に至り候迄永々の御無沙汰に及び申候。心の怠り平に平に御宥免爲被下度候。父上樣、母上樣、愛子、壬生、志摩、隆三諸君の御消息は悉く拜受致し、深き感銘を以て披見仕候。私事元氣は至てよく、當校の學科も先づ一通りの興味をもて勉强致居候。唯時々心を犯し來る諸種の疑問、即ち將來の立場、取る可き主義、其他の事柄に當惑致候事も有之、大器にはあらねど、至て晩熟の私には此頃漸く、かゝる問題きびしく感ぜられ候爲め、遂々筆取り候さへ物憂く相成候次第、御推恕願上候。然し決して是れが爲めに氣を腐らす如きことは致申す間敷、出來得る限りの智識を獲得し、信念を堅固にし、深く築き、永く生くるの用意致すべく候間、何卒御放念爲被下度願上候。

先日は松方君の渡米に際し、御心を籠められ候御贈物澤山賜り候段、難有御禮申上候。よきクリスマスの贈り物と相成可申候。愛子、志摩子君よりも同時に澤山の御土產被下難有、是亦偏に御禮申述候。私住み居候はメモリヤル・ホールと申候共同食堂の大時計の鐘音、風の向きにてはハツキリ聞え候程隔りたる横町の端しにて、老寡婦二人住ひ居候家の一間を借受け申候。電車の、けたゝましき嚙ぎしりの様な聲も聞え不申、至極閑靜にて霜解けのぬかるみ路に備ふる爲めに板敷きたるにても（其の板も今日は一面の冬に埋れ果て申候）場末の程推察せられ申候。室は廣過ぎる位、北と西とに一つゞつ窓有之、中央に机、壁際には寢臺と簞笥、窓に添うて書架、壁に掛けたる夥しき額の何れも品下りたる寡婦が御愛相に時々附加へ吳れ候。裝飾品の古くして無くもがなと思はれ候は、いさゝか堪へ難き心地に御座候へども、室は此寒さにも七十度近き溫度を常に保ち、燈は瓦斯の最あかるく、故國にては爲し得ぬぜいたくと心狹く感じ候ことも有之候。

戰爭は益々困厄に入り候趣、誠に悲慘の極云ふ所を知らず候。日々夜々幾多の父母は子を失ひ、幾多の子女は父を失ひ、幾多の妻は夫を失ひ、幾多の弟妹は兄を失ひつゝあるかを思へば、唯々此流血の慘害の一日も早く結局に至り、平和の克復を見るに至らんことをのみ祈居申候。當地人士の我國に對する同情は今日も渝ることなく、我等の上に有之候。然し少しく熟察致し候得ば、案外皮相の同情に有之、私事先日父上の送り給ひし御意見を英文に書き代へ當地某新聞に投書致候處、沒書と相成申候。私少々米國の惡口書加へ候が、編輯員の氣を損ぜしものに候べきか。何れ玆の新聞雜誌に歡迎せられんには、善くとも惡くとも人民の思ふ處を賛成し、稱揚し御尤千萬と申候にあらざれば承知は不仕、此地の新聞は日本の新聞の様にあること、なきことの惡口は致不申候得共、ある事なき事の稱讃致候には閉口に御座候。

以前のハーバーフォードと異り、當地の大學には當今十一人の日本留學生有之候。所謂富豪知名の士の子息多く松方君を始めとし、岩崎本家の息子、福澤先生の息子、名古屋豪商八木と申候人の息子等此に學び居申候。舞踏の稽古等に忙しき連中に有之候。苦學生も二三人有之候。彼等は多かれ少かれ私に教訓を與へ吳れ候。日本人との交際は敬遠主義を取居申候。

大學の講義と申候てもさしたる事は無之、私には圖書館の勉强の方迄に補益ある樣思はれ候間、其方に力を入れ居申候。學生多數のことに御座候へば、敎師と親密の關係に入るが如きは、中々困難に有之候。但し籍を大學に置き候事は、凡ての場合に於て好都合に有之、先づ多額なる學資を差出し置候方得策と存申候。米國人にして私の爲めに學資を給與せんと云ひ吳れる親切なる人なきにあらず候へども、私他日之れが爲めに心身上に何かの束縛を受け候が非常にいやに候間斷り申候。日本の政府若くは或學校より學資を受くることも或は困難ならず候へ共、他日の束縛を思へば胸が惡く相成り候次第にて、凡ての重荷を父上樣に投げ候こと何卒御推容願上候。然し私も一日晝夜書物と首引き致居候事は到底不可能に有之、腦を休むる必要有之候間、此の腦を休むる丈けの時間を他に利用せんと、何かの働き口を求め居候。多分來年初めよりは何處かによき口見富り可申、是れ一擧兩得の策と存居申候。（中略）

壬生馬君の白馬會への初陣御喜び申上候。色々と感慨も多くあられ候はん、不退轉の御精進祈上候。時々有名なるボストン美術館にまかり越申候。此處なる日本陶器の蒐集は世界第一との評有之候ものゝ由、見慣れぬ逸品澤山見受申候。繪畫にも一寸目を引くもの有之候 Corot が五六枚 Millet が五六枚、Manet が五六枚、其他極古い所と近代の Whisler や Sargent や Alexander 等のも有之候。私 Millet の傳を讀み候てより、其人の畫が慕はしく相成り其人の畫の前には魔力にて引き付けられし樣覺え申し候。Conot の暢和なる筆振りは又捨てがたき詩趣に滿ち候ものが此美術館に有之候。大額ダンテが森にて三個の猛獸に遇へる畫の人物、野獸の姿には閉口仕候。先生は風景畫家に候。平和なる自然を描きし人に御座候。平和なる春の自然を描きし人に御座候。平和なる晩春の自然を描きし人に候。さればダンテなどは門違ひにて候べきか、最も解らぬは Turner の畫振りに御座候。Ruskin 先生多少つまゝれたる趣きなきや。大膽と申さば申候べし、或人は無謀とも批評可致候。Whisler の日本振りなる色彩と瀟洒なる筆の跡とはさつぱりした想ひ致させ候へども（Millet とは丸で反對なり Millet は塗り直し書き直したる苦心の跡歷然たり）永き生命ある畫家と申されべきや否や、私は危み申候。御送り被下候白馬會出品の繪端書唯今迄に藤島氏の「蝶」と三宅氏の「夏の雲」とを手にし候。色がなき故十分の八まで

は其價値を殺がれたることゝて、私何とも判斷の致樣無之候へども、藤島氏の蝶は華やかなるものと存申候。其手と頸には悲しく相成候。全くあの版の通りに候哉、若しさうなれば骨と云はず、筋肉の解剖は全く度外視せられたるものと存申候。（中略）

先日來度々伏見宮、金子男爵等の御來遊有之、私其の度に招待相受け申候へども、是れは御斷申候。先日は横山大觀、菱田春艸の二氏當地にありて繪畫展覽會を開き候。岡倉覺三氏はボストン美術館に傭はれ申候。日本に關する書物は雨後の筍の樣に現はれ申候。何れも戰爭の人氣に投じたるものに有之、表紙には國旗を交叉しバンザイと英語にて書きある類に御座候。小泉八雲氏の死は當地の大新聞、大雜誌等しく哀悼の意を表し居候。

此地の一の特色は時々世界的に名を知られたる名士の來遊することに御座候。私此に參り候てよりグラッドストーン傳の著者として、特に日本人には知られたるモーレー氏來り、「羅馬帝國」「米國觀」の著者として博學の名あるブライス氏、其の他印度の大說敎家某等踵を接して來り候有樣、是れは中々愉快に有之候。（中略）米國に參り候てより二度目の降誕祭眉を燒くばかり近づき申候。此冬は費府に罷在候ひし時とは異り、彼のアボンデールの田舍に（尤も彼所より度々の書狀參り候へ共、わざ／＼出掛け候には少々遠過ぎ申候）無邪氣なる少年少女との間に伍して笑ひつゝ年を送ること叶申間敷、多分は圖書館の薄暗き机の上に書に對して浮世小路の歲暮の忙しさを白眼高視する位を關の山と可致候。此土地の人は凡て高く止り居候こと英國人の如く、未だに心合ひたる友をも家庭をも見出し兼ね居候。

此書膝下に至らん時は七草祝ひつゝあり給ふ頃なるべきか、豆粥に舌燒き給ふ頃に候ふべきか。今年は如何に寒く候哉。滿洲にある人々の爲めばかりにも暖き冬祈り申候。此地中々寒氣强く西北の風烈しく吹き荒れ候節は、冬に慣れたる私にも戶外に出づるがためらはれ申候。

さらばよき齡重ね給はんことを遙に祈り上候。今日は是れにて失禮仕候。

# 一九〇五年

## 兩親宛――二月十六日於ケンブリッヂ　〔三一〕

降誕祭端書差上申候てより又々永々の御無汰沙申上候段、何卒平に御宥免被下度願上候。正月二日筆取り申候て此紙に半頁程書き候處、急用出來て筆を擱くの止むを得ざるに至り夫れよりハタと御無沙汰申上候。

先日委敷御手紙頂戴仕り當方に於ても可成り久々振りにて、大なる喜びを以て再三繰返し拜見仕候。父上樣始め至極御健全にて御加齡被遊候趣、何よりの安神に有之候。小子事も再び雜煮なき正月致し、回禮の客もなければ、參賀の煩ひもなく半日を讀書に暮し申候。御地門松の賑はしさ、霜柱の下駄の歯にくだくる音の快さ、白梅の淸香などそゞろに思ひ浮び申候。

當地昨今は積雪滿地寒氣におぢて散歩も怠り勝ちに御座候。前便一寸申上置候通り、何か仕事を見附けんと存居候處、都合よく一ヶ所見附かり申候。當地に住ひボストンに事務所を有せる一辯護人、日本よりの學生を日用の手傳として欲しいとの事、大學の口入屋に通牒有之候趣にて、小生早速同人を訪問し其人と結約の上、先月十一日此處に引移ること〻相成申候。同人は妻君有之候へ共、何か事情有之候趣にて別居致居（米國にては離婚沙汰非常に面倒に候へば〔法律上〕往々此の如き例を見申候）、土曜より日曜にかけて九つと八つなる女子泊りがけに遊びに參り申候。仕事とては朝飯と晩食の手傳、一週一度の掃除丈けに有之、其報酬として室は無代にて貸し與へられ食事も只にて出來る次第に御座候。コロンビヤ大學（增田君の學びつ〻ありし大學）法科の卒業生にて讀書も廣く話も實のあること多く御座候へば、英語會話研究にも、知識の補充にも相成り一擧兩得に御座候。土曜より日曜にかけて女兒が遊びに來るも愉快に有之、一家を成せるも女つ切れのなきも難有く、唯今の處にては辯護士先生も小子も互に至極滿足致居候。されば多少の時間を毎日犧牲に致候へば日

用品、消耗費と學費の外には食料、室代等全く節約せらるゝ次第、今回御送附被下候二百四十五弗にて來る九月頃まで充分支へ得ることゝ存居候間何卒御安神願上候。去年の夏は看護の法を覺え、今年の冬は料理の法を覺申候へば、歸朝の際には西洋料理の上手な處を御覽に入れ可申候。

父上樣は非常に御多忙に入らせられ候由、母上樣、愛子、壬生馬等の手紙にて拜承、時節柄とは申乍ら御老體の御身奉遙察候。どうか御過勞無之樣幾重にも奉祈上候。眞狩別の土地又々何か紛紜出來候由、今更らながら道廳の行政の不整頓驚入申候。

先日來壬生馬より伊太利行の事申參り、小子も篤と考へ申候。洋行と申候ても色々種類有之候は勿論にて、舞踏術の卒業位にて歸國の鼻高き人より、刻苦辛酸傍見するにだに感に堪へたる苦學の人に至るまで、十態百樣に御座候へば、洋行は利益あるものと早斷致候は由々敷誤謬に御座候へ共、普通の青年にして洋行し得べき學資を得るものは、青年の時代に一度洋行すること至大なる利益たるを疑ひ不申候。壬生馬も洋行には適當の年齢に達し、多年心中にありし目的の途にも就く樣相成候得者、此際洋行致候は同人に取り幸福にして、且利益あることゝ存申候。唯學資の點に於ては小子既に多大の金額の御扶助に預り居候上に、又々の重荷を御老體に投げ候事到底忍ぶ可らず、此事のみ心懸りに御座候處、小子事當地に滯留既に一年半にて稍〻事情にも相通じ、當所仕事も薄つぺらなる交際に日を消すよりは、遙かに尊貴なる仕事なることをも了得致候へば、向後は學資及び小使として僅少の金額を御手許に仰ぎ候外は、自立にて勉强致し見んと存候。夫れ故小子へ御送附被下候金額を壬生馬の方へ御廻し被下候樣願上候事相叶申間敷候哉。壬生馬は繪畫に於ては一種の天才らしきものを有し居り、奮發心も亦强く候へば、確かに一かどの成功致候事を信じ居申候。何卒同人の志願御聞屆成被下度乍蔭願上候。壬生馬の企圖に就ては小子事不安心と思ひ候節も有之候に就き、別紙の如く同人に宛て所思を述べ試み申候。

心細かるべしとの御念慮よりにて候可し、皆々樣よりは何等の御報知も無御座候處、河野信子氏よりの手紙に山崎老婦人死去の事有之、一時は心を騷がし申候。他人にて小子を孫の樣に愛し與れ候人にて、男にては安藤の老大人、女にては

山崎の老婦人にて有之候間、其の死を聞きては多少の感慨なきにあらず候ひしも、かくあるべしとは二十六年の夏札幌にて御別れ致せし際期せし所、永別の涙は其時既に流し置き候間、二三日の後にはさつぱり致申候。亡くなられる前御望みの寫眞を送つて上げればよかつたなどくだらぬこと思ひ居候。所謂凡夫の愚痴に御座候べし。「我が生の盡くる時何處にてか、如何にしてか、又君に見ゆることあるの望みあり」と日記に記し申候。

來月の初旬若くは中旬頃、新渡戸夫人の兄上なる Joseph Elkinton と申さるゝ人、日本に遊來せらるべき趣きに御座候。此仁は小子の着米以來最も親切にまめ〳〵と色々なる世話爲被下候。先日小子事ワグナーと云ふ、佛國の牧師兼文士が著したる「單純なる生活」と云ふ書を讀みたる(ワグナーはエルキントン氏の友に御座候)感想を同氏に書き送り申候處、同氏其寫しを大統領ルーズベルト氏に送りたりし由、ルーズベルト氏より至極興味を以て讀過したりとの返事有之候趣申參候。斯樣に色々引立て被下候。一寸見た所にては輕口家らしく候へども、夫れ程でもなく博讀にして親切な人に御座候。多分訪問有之べくと存候間、其節は同氏より小子がペンシルバニヤにありし時の消息御聞取被下度候。

愛子、志摩子よりも新年の賀狀賜り難有御禮申上候。別に御返事致す筈の處多忙に付き此手紙にて御勘辯願上候。直良、喜寛の二君にも永らく御無沙汰何卒宜敷御傳聲願上候。(中略)

二三日前より眼に腫物出來、讀物、書物に難儀致居候間、今日は是れにて御免を蒙申候。是よりは必ず屢々御音信可申上候間、是迄での御疎遠何卒御許願上候。幾重にも御大事に被遊度候。

## 兩親宛――五月十六日於マサシューセット州ニューハンプシアー　〔三二〕

又々意外の御疎遠申上候段、平に御海恕被下度願上候。先日來は父上樣少々御病氣にて入らせられ候趣の處、最早御全快の事と遙察罷在候。時節柄益々御多繁に入らせられ候はんと是又御推察申上居候。壬生馬洋行の儀に就ては早速御許可を賜はり同人の喜びは固より私まで無上の感謝を感じ居申候。此手紙御披見の際には同人も既に歐米に渡り居候事に可有

之候。行郎入塾との御事一入御淋しく入らせられ候事と萬々御推察申上候。行郎の入塾も誠に賛成の次第此際御手放しなられ候御決斷の程感佩の至りに不堪申候。

私事依然元氣日々勉學と勞働と致居申候間、御放念爲被下度奉願上候。歲月の立つは早きもの既に當學年も末近く相成申候。此夏は二ヶ月程少年學生の天幕旅行に隨從し、自活の道を講ぜんとしほゞ契約も相調ひ申候。以前とは異り病院などには無之候故、身心共に暢々して保養にも可相成かと存申候。所は唯今居候マサチウセット州の稍々北方ニューハンプシヤと申候所に有之候。松柏の類富かなる山隈水廓に候由私には是れが何より難有御座候。

父上樣の「商法入門の鍼」拜讀仕り候。是れは單に商法斗りに無之一般の靑年に示して啓發の材と乍憚存申候。私事頂上の一針とも相成申候。エルキントン氏着京致され候由、同氏よりも私へ宛手紙有之、御兩親樣始め皆々の樣子細々と報知致吳れ申候。家の構造の閑直質素なること父上樣のよき家族持ち給へるが羨しかりし事、母上樣の丁寧親切なるおもてなしの事など尙委細に書き加へ有之快讀仕候。

志摩子にも出產有之候由、五人の伯父さんと相成候事寧ろ汗顏の至りに御座候。母子ともに元氣に有之候や。

バルチック艦隊の噂は當地にても一時やかましく候ひし所、近頃ははたと沙汰やみに相成候樣子、新聞紙なども一言も申さず候。此間に歐洲のさる所にて平和條約なりつゝありなど揣摩する何も有之、其事眞なれかしなどゝも存居申候。

此地昨今靑葉と花の盛に御座候。先づ春の魁として連翹(日本原種)の黃なるが咲き、次に木蓮、今は林檎、梨、杏、藤、山吹、其の外草花種々美しくは候へども、日本の春に比べては憐むべき程の差に御座候。春になり申候てより齒痛の相始り、止むを得ず醫者に懸り、先日來三四囘ボストン迄相通ひ申候。新しき蟲齒四五本發生、金のかゝる齒にて候かな。

飯田君上京勉學の由、他日の大成功祈居申候。

數日中に當大學に遊學罷在候ひし日本學生中の一人、病氣の爲歸京致候やも知れず、同人若し東京に參り候樣相成候はゞ、同人より私の樣子御聞取被下度候。但し其節は同人へ紹介狀相渡置可申候。

追々向暑の候、暑い方は皆樣には割合に宜しかるべく候へども、兎まれ御自愛遊され度先は一筆草々不盡。

### 兩親宛——七月二十四日於ケンブリッヂ　〔三三〕

遂々働きつゝありし家を去る事と相成申候、向にては非常に惜み是非引止めんと致申候得共、共に働きつゝありし友の一方ならず衰弱し、殊に厭はしき事誼其家との間に起り候爲め、不愉快なる夏期の消光は堪へ難しと思ひきはめしにて候ひき。一度決心致申候事の、かく途中にて變更候事小子には吳々も遺憾に御座候得共、是れも詮方なき次第、是れより他に方法を講ずるの外無之候。

前便申上候通、小子は此の冬はワシントン府に參り圖書館にて勉强致度心組の處、同地は非常に暑氣激敷土地に有之、夏期中の勞働を彼地にて取候は如何にも凌ぎ難く存候へども、懇意なる彼のアボンデールの農家（兼ねて懇切なる勸誘も有之候に付き）に參り同家に宿泊して、兎に角善後策相講ずべくとも存居申候。唯今は當地に滯在十ポンド程減ぜし肉の囘復を企て居候。

事前後致候得共、皆々樣には依例御淸榮の事と奉遙察候。此の夏は父上樣には隨分御多繁に被爲入候半、然し多少の休暇を得何處かに御保養被遊候事祈上居申候。母上樣始め皆樣には何處かに御轉地にても被遊候にや、此夏の暑氣御地にては如何、只管皆々樣の御健在ならん事をのみ顧居申候。

壬生馬よりも折々端書にて便有之、初旅の事ども色々哀れを感ずる趣報じ越し申候。然し萬事好都合に參居候樣子、何よりの事と存居申候、同國公使にも色々懇切の御世話になりし趣とか暫時を經候へば、やがて心も定り專心勉强するを得ることゝ存居申候。

隆三、英夫、行郎君には何れも一年の學歴見事なりしことゝ察候。（中略）

尙小生の今後の方針確定致候はゞ、詳細の御報知可申上、先は不取敢一筆御報知迄草々。

平和會議は愈々來月中旬頃當地に於て開かれ候樣子御同樣大慶の次第に奉存候。何卒適當の處置で事局一先決着相附き候樣呉々も祈居申候。此件に關して面白きこと聞込み候はゞ追て御報知可申上候。

## 末光績氏宛——十一月二十九日　〔三四〕

一金五弗　　瀨川末君へ

一金貳弗　　札幌獨立教會へ

甚乍御面倒該金額郵便局にて御受取の上夫々御手數願上候。

Ingersoll's Lectures 別封にて御送附申上候御受取被下度候。

自分の勞働で取つた金。瀨川君は總ての困難に失望せず同情者が世界の何處かに居るから心を強くして正しき道を步めと御傳言願上候。

# 一九〇六年

## 兩親宛──四月五日於ワシントン　〔三五〕

先日來度々優渥なる御教書賜はり御芳恩のほど心に沁みて拜讀仕候。且つ御惠送爲被下候八百圓、即ち三百九十五弗も早速端書にて御報知申上候通り、相屆き銀行に預け入申候千萬奉鳴謝候。

産れ落ちてより本年計り身を入れて勉强せし年は無之其故にや春來と共に激しき不眠症に犯され、催眠藥を用ゐ申候。而かも六時間以上の睡眠を爲すこと不能、神經は益〻昂進して爲すことよりも考へることのみ多く、遂に此の如き御無沙汰申上候段、平に御海容の程奉祈上候。此程は少しは神經も融和し適當に讀書することも心懸け候樣相成り申候間何卒御安神爲被下度願上候。時々血眼と相成候癖御承知の如く小子の病にて自分ながら恥入るの外無御座候。

高木先生の御來米を承はりてより日々華盛頓御着の日を相待ち居り候得共、何んの御沙汰もなく、傍々不審に存居り候處、去る頃不圖當地新聞紙の小欄に、日本公使館が同先生の爲めに一夕宴を張りし由承知し、偖は當地に御滯在なりしと其翌日公使館に罷出で候處、既に紐育に歸られ候あとにて御座候ひき。御承知の如く米國は廣く大きく、先生が何處に御滯在なるやは日本の樣に相知れ不申、遂に拜眉を得るの機會を得ざりしは殘念とも何んとも申樣御座なく候。尤も公使館の書記官に若しや同先生小子に御傳言もなかりしやと問ひ申候得共、何事の仰せもなかりし由の回答を得申候。御尊書によれば緊要なる御傳言有之候趣なるに不審の程いまだに晴れ不申、此上はと其儘に過し申候。

かくて御傳言の義は伺ひ不申候ひしも御親書竝に遙察申上候處によつて、略〻尊意のある所を拜察するに難からずと存じ申候。左に略拙意相述べ試み可申候御高覽奉願候。

一、米國滯在中上流社會の生活を慣ふ事。

是れはハーバード大學在學中に少々相試み申候へ共、何等特殊なる效果をも認め不申、結局十分の見識と廣汎なる智見と確實なる道念を得る事が最も確實なる地位を社會に造る基と思ひあきらめ申候。人の前に出てコワガラヌ迄には相成申候間これにて十分と存申候。

二、相當の學位を取り相當の教程を終る事。

小子渡米當初よりの意見は空名にあらずして學問に對する眞識を得んとするに有之候ひしも、在米の印までにと、渡米の初年一年にてマスター・オブ・アーツの學位を得申候。

ハーバード大學に參候際は豫め御報知申上置候通り學位を取るよりは好む所の學課を撰びて（學位を取るは必要も何もなきものに多大の腦力を費さざる可らず候）頭の養生致す積にて候ひし故學位は不得、金をかけて腦を用ゐる割合には得られ不申、茲にて初めて悟が開け、教師を通じて學問して居る齡にあらず、直ちに古人に至るに若かずと本年は圖書館にて獨學を始め候次第に御座候。此豫想は大あたりにて半年ならざるに滯在二年間に得しよりも多くの智識を蓄へ申候。是れで小子が學問の方針御尊察奉願候。

三、生　活。

は相當の生活致居り候間何卒御安神奉願候。

四、歸朝後の方針。

先日札幌農學校の校長佐藤氏より年俸千二百圓にて教授として農史、倫理、歴史並に英語の教授囑託し來り申候得共兎に角斷り置き申候。

つらつら小子の實力を相考へ申候に、第一實務的才能は殆んど無之と申候て差支無之、將又明確細密にして一科學の專攻に一生を費し得る程の頭腦をも有し居らず、政界に雄飛して淸濁倂せ飮むと云ふ所謂大度も無御座、唯小子が他人に稍々超越せりと相恃み候實力は兎に角自ら一個の思想を形成する力と、夫れを現示する筆の力に有之候、然し是れを以て生活

せんことは日本にては到底不可能に御座候得者、衣食を得る爲めには敎育に從事するを最適と存居申候。當地滯在間に既に一篇の創作と論文とを相草し申候、機會あらば歸朝前に出版し、よかれ悪かれ小子が社會に對する位置を確定致度と存居候次第に御座候。

五、歸朝後の生活。

社會に相立ち候までの御敎育（政府の補助、學校の恩澤にあづからず）の御恩は小子の身に取りて實に〳〵望外の幸福、御蔭樣によりて世に立ち候際誰の干涉をも指導をも受くる必要なく、獨立獨步するを得せしめ給ひしことは唯々感謝の外無之候。前項に申上候小子の企圖致居候處置の道は一向世人の注意を牽かざるもの有之、現今に於ては社會的の位置も高きこと不能、小子とても人目につき世人一般より承認を受くる可き位置に立つは羨しからざるにあらず候得共、自分が最得意にして、之れによりて多く貢獻し得ると信ずる事業を捨て名譽に代へん事は、到底忍び難く何卒斯般の衷情御憫察、小子に對する御期待遊ばし下され度偏へに奉願候。

筆をとりて世に立つには、何人の干涉も受けず、獨立して公平なる思考を世に給するが、何物にも勝りて急務と相信じ申候、是れが爲めには、根柢より徐々として自ら築くの外無之覺悟罷在候。此邊の所何卒御賢察奉願上候。

六、留學に關して。

此件に關しても實に有益なる御尊書を忝ふし奉鳴謝候。當地三年之滯在にて兎に角英語を操ることも一通りは相違し事情にも通じ勉學も自分丈けのことは致せし積に御座候得ば此上は歐洲を漫遊して歸朝致度心組みに御座候。此次には本國にて多少の經驗を得たる上二年程獨逸に罷越し度熱望罷在候。何卒此義御許容相成候樣偏奉願候。

當地退出は來夏七八月の交か又は少しく遲れて九、十月の交に致さんかと考中に有之候。七八月頃にては南歐の旅は隨分凌ぎ難き由承知致し居り候。此義は追而得貴意申候。

住所は一向變更不仕候。唯先日一寸小旅行致候までに有之候間左樣御了知被下度候。確然と御報知申上候迄は依然舊の

處に住居候事と御承知爲被下度奉願上候。

此地も愈〻春と相成り申候。林檎の花咲く頃と相成候はゞ一週間程田舍に出で其處にて論文の淨書にても致候得者病も輕快に相成り申候ことゝ樂しみ待ち居り申候。

本日の午後、釋宗演氏當地に參られ、市の大學に於て武士道に關する一場の講話有之候。參聽致申候が失望に終り申候。武士道の精神が米國人に對して最適當の敎訓と存居候處、師は依然として封建時代に行はれたる武士道の形體を說き居られ候。聽衆の中には老練なる哲學者宗敎家も多かりしに佛敎の深奧なる本義を聞き得ざりし爲め頗る失望の體に見受けられ申候。師は到底東洋、西洋兩文明をつなぎ合はすべき橋とはなり得ざる人と存申候。

東北の饑饉實に慘鼻の極、本年の農作のみ祈られ申候。救濟の道少しは相立ち申候ひしや。何分戰後一般の國民は重き負擔を爲せる後なれば困難のほど實に察し入り申候。

此後は時々御文通申上候。今日までの御無沙汰何卒偏へに御海容爲被下度奉願上候。

遙かに皆々樣の御健全を祈りつゝ。

## 兩親宛――五月十三日於ワシントン　〔三六〕

又々意外の御疎遠申上候段實に申譯無之平に御海容爲被下度奉願上候。先便一寸申上置候通り少々不快且つ不眠症に罹り勉强を妨げられ候事多く有之候ひし爲、斷然暫くの間田舍に入りて仕事を放擲する事に仕り、先月二十四日當市より電車にて四十分程相かゝり候ところの Chavy Chase と申候僻村のさゝやかなる下宿屋に移り每日二三時華盛頓に出でゝ事務を致し候外は決心して何事もせずに日を送り申候所、一週後より效能稍〻あらはれ略〻六時間は眠る事を得る樣相成り申候間、尙半週間滯在の上、遂に二三日前當市に歸り來り依然として舊の通り研究に從事罷在候間何卒御休神の程奉願上候。

Chavy Chase 滯在中文部省の留學生として獨逸にありし伊藤淸藏氏(小子よりも一年上級にありし秀才に御座候)來遊し、

三四日の間同宿致居候。同氏着京の上は小子の近況を齎して上宅せられ候事と存居申候。何卒同氏より大體の様子御聞き取り被下度候。

海外留學に關する決心は前便を以て申上置き候得共つら〳〵事情再應熟考仕候て前陳の事情に對して多少の變更相願度義も有之、猶勘考の上其内決意御披露仕度考へに御座候。何卒粗忽の段御容捨爲被下、開陳の際は今一度御尊慮相煩し度奉願上候。

當方の事のみ申上候段恐入候。追々氣候も溫暖と相成候處、父上様始め皆々様愈々御健勝に被爲入候半と遙かに奉賀候。鐵道國有と申す大問題も解決相成り候趣、是れに付きては父上様には頗る御多繁に被爲入候半、小子固より事の細密に亙れる邊は承知不仕候へ共、大體に於て鐵道國有が（父上様にも鐵道會議々員に被爲入候節は鐵國賛成者にて被爲入候樣記憶致候）國家劃一の方針上顯著の効あるは獨逸國の夫れに徵しても明瞭にて、日本鐵道がとりし營業方針の如きは實に大會社が國家國民の要求に應じたる處としては間然する所少きを思ひ欣喜の至に不堪候。

此手紙相着候頃は既に夏期休暇近く相成候事と存申候。此夏は何處に御避暑被遊候や、小子は此度は學校にて勉强致候事には無御座候得者當國を去候迄は夏休みなしに、尙出來得る限りの智識をつめ込み度心得居り申候。

靑木大使も着米せられ候由其うち機を見て參訪、愛國婦人會寄附金の事につき御相談致度心組居申候。但し當地はサンフランシスコ市震災の爲め全國の注意は全く同災事の方に向けられ或は義捐蒐集の十分に効果なきやを恐居申候。

山本家は酒匂に引移り申され候由、淋しく相覺え被遊候半、直良氏愛子よりも一度通信有之、御移動の皆々元氣になられ候趣承知仕り乍蔭喜び居り申候。

壬生馬よりは此頃一向音信無之、如何致せしにやと頻に心配罷在候。同國にもヴェスビアス山の大噴火にて慘害夥敷様子、近頃地球機嫌にても害ね申候や。

近頃は全く何方にも御無沙汰申上居候。高木家にては皆々様御元氣のことゝ存上候。安藤様は其後如何なる御様子に被

爲入候にや。新渡戸夫人には矢張東京に御座候や、同夫人兄君エルキントン氏は目下英國滯在中にて近信に接し申候處、御兩親樣始め皆々へ宜敷と傳言有之候

不遠中に再書差上可申、本日は是れにて擱筆仕候、追々向暑の候折角御自愛專一に被遊度、先づは御無沙汰御詫旁々。草々。

## 兩親宛——五月二十日於ワシントン　〔三七〕

拜啓

四月三十日附凱旋大觀兵式記念繪端書封入の御書狀本朝確かに拜受難有拜讀仕候。依例益々御淸榮の趣無上の義遙かに奉賀上候。小子事も爾後大に健康を囘復し殆んど常體に相成、日々圖書館にありて勉强罷在候段乍他事御放念の程奉願上候。本年は御地の暑氣は如何に御座候や。當市は近年稀なる暑さの由にて去る十七日の如きは午前六時室內にて九十二度(尤も小子の居り候部屋は四階の屋根下にて眞東に向ひ居候)を示し候には喫驚仕候。されば仕度もソコ〳〵に圖書館の讀書室に逃込み候に、此所は亦便利なる仕懸けにて冷却されたる空氣床下より入り來りて溫度槪ね七十度位にて戶外には目も開かれぬ程陽の光石疊にさし居候時にも心地よく勉强致候事相叶ひ申候。文明の恩澤は此邊に著しく有之候。

先便小生が獨逸留學の件に關し或は意向を變じ候事もあらんとの義申上候得共、歸朝仕り今迄得たる智識と力量とを以て成功するにせよせざるにせよ、實行の生涯に入り試み候方將來に取りても利益多しとの結論に到着仕候。小子事唯今迄父上樣の優渥なる御恩惠により自ら苦しむことなく平易なる生活を過し、思ふさまに勉强致候事を得申候は實に望外なる事にして、世の十中八九の靑年が望みても爲し得ざる處に有之、此事に關しては深く肝銘して御高配の程相忘れ申間敷候。但し此の如き生涯の結果としての小子の最缺陷は實際の經驗と、實際の經驗ある人が有する自己の力量を確信するの性情に有之、此惡癖を矯めんには一先準備を結了し斷然實際戰鬪の生涯に入り試みんとの決心に出で候次第に御座候。小子の

性情は年を經るに從つて益〻孤立獨往に傾き他人と種々なる點を讓合ひて事を爲すが如きは到底不可能に見え候樣相信じ申候間、此度歸國後の事業も斷然――固より經驗なきことには御座候へ共――自往自立の決心に有之候。事の困難なるも目前に瞭々たるもの御座候へ共、將來出來る限りの力を振つて人生最初の戰鬪に戰つて見んとするの念は胸中に燃え居り申候。事業と申候は筆を通してなさるゝ廣義に於ての教育事業に有之候。委細は歸國の上萬々縷述可仕、兎に角靑年時代の失敗は藥になる事と大目に御見捨て置き被下候樣伏して奉願候。

かく決心致候上は、來る八月上旬若くは中旬歐洲行の汽船に搭じて米國を發し、歐洲に參り先づ壬生馬と伊太利に會し、若し父上樣の御許容を得ば彼と共に獨逸、佛國、英國を經て本年末には歸國仕度豫想仕り居候。

隆三も中學を卒業致候由先づ御安神被遊候事と奉遙察候。英夫行郞は如何致居候や、双方共に健全にて勉强致居候事と遙察罷在候。

先日のサンフランシスコ府の大地震は、實に米國の歷史ありてより稀有の事にて、悲慘を極め居候得共、米國民が此慘害損失に對する態度の極めて樂天的なるには一驚を喫し申候。日本にて此樣なること起り候得者、新聞紙も講壇も共に其悲慘なる狀況を說き人心の惻隱の方面に訴ふる筈の所、當國に於ては人心は勇往の方面に訴へ居候。震災の數日目に敎會に參候處牧師の口調は此悲慘を悲しむと同時に大聲痛呼して此奇災が米國民の忍耐と勇氣と向上とを試驗すべき試金石なりと云ひ、米國民が共同してその灰燼の中より如何によく美なる、如何によく大なる、如何によく淸潔なる桑港市を建て得るかを望見すべしと申候。米國民の偉大なる點は此に有之候にや。彼等の中に大なる思想が起り候事は嘗て御座なく候得共、大なる行爲は日々に行はれて彼等の常識に富み希望に滿ちたる氣性を表現致居候。

桑港の近傍なるスタンフォード大學に學びつゝあり候木村には直ちに見舞狀差出申候處、返事參候て、無事に災害を免かれたれば安心すべしと申來り候。大學にては傭人一人學生一人壓死致候外に死者は無之候ひし由なるも建築物は殆んど破壞致し候とのこと、彼所は近來築造せる大學にて、殊に會堂は善美をつくし米國有數の建築物と稱せられ候に、此の度

の奇禍に會ひ候ひしは惜しみても餘りある次第に有之候。

母上樣には依然として婦人會に御多忙に被入候由御盡瘁の程奉敬服候。但し時下追々向暑の段に相成候得者幾重にも御自愛奉祈上候。

本日はこれにて失禮仕候、乍末筆皆々樣の御健康を祈り上げ候。

### 〔三八〕 兩親宛──五月二十八日於ワシントン

追々暑氣烈敷相成候處、益々御清穆の事と遙察奉賀候。下而小子事元氣にて勉强罷在候間、乍他事御休心爲被下度奉願上候。

此手紙相屆申候節は隆三には札幌農學校入學試驗終了の事と存候が成績は如何にて候ひしや。何卒同人に委細の樣子につき手紙送り呉れ候樣御申聞け奉願上候。

當國も震災後は議會にて多少の混亂有之候外は萬般割合に靜肅に御座候。歐洲にては又々土耳古に悶着持ち上り候樣な有樣、何故なれば世界の國々は年中喧嘩計り致居候はねば氣が濟まざるものにやと心苦しき事に御座候。

父上樣の日鐵の方の關係は鐵國法案の通過以後は如何成られ候にや。兎にも角にも前後有終の事務の爲め暑氣にも不係御多忙を極め被遊候半と奉察上候。幾重にも御自愛の程奉願上候。

エルキントン氏より母上樣への贈物は關稅等の面倒上未だに御送附申上候はぬ段平に御海容の程奉願上候。去年の冬小子の旅行致候土地竝に小子自身の寫眞、小なる寫眞帖に貼附し簡單なる說明を副へ御送り申上候が御落手御笑覽被下候や。又々最近撮影致候二三枚御笑草までに同封仕り置き候。

愛子には時々上京致候や、此頃は時々手紙を呉れ閑地の生活を樂しみ居候模樣、直正以下の爲めにも好良ならんかと存居候。

壬生馬君よりは消息打絶居申候。洋行せし知人小子に手紙をよこし、ホームシックにならぬ祕訣は故郷に度々手紙書かぬにありと書送り候。夫子夫れを學び居る譯にても御座なく候べきに。

新歸朝の伊藤氏には既に御遇ひ被下候や、同氏より小子が近況は委敷御聞取被下候事と存上候。

先日飯田より京都發にて端書有之候。如何なれば再び轉居する樣相成候にや。番地無之候ひし故返事差出兼居り申候、御序での節には可然御傳被下度奉願候。兒玉は如何致居候にや。

高木家よりは此頃音信全く打ち絶え居申候。喜寛氏志摩共々御元氣の事と存上候。五週間ぶり程にて昨夜初めて雨有之、熱したる地は直ちに雨滴を蒸して空氣の重く濕りたる樣五月雨時の如く頭を抑へらるゝ心地に御座候。此あとには又暑き天氣相續き候事と存居候。唯今午後七時半、丁度瓦斯に火を點し候處に御座候。窓を隔てゝ公共の廣庭の綠に雨にぬれてやゝ涼しく、二丁へだゝりたる往來には電車の音轟々と絶えず響き居候。

呉々も御身御大切に被遊度今日は是れにて失禮仕候。頓首。

兩親宛――七月二十日於ワシントン　〔三九〕

又々永々の御疎遠申上候段平に御海容の程奉願上候。

先日は小子歐洲行竝に今後の方針に付き優渥なる御敎示を賜はり、再三精讀御芳情の程偏に肝銘仕候。小子儀今後社會に立つてよりの行動に對し望外の自由御與爲被下候事、實に無上の感謝に有之候。此上は唯一身の力を盡し爲し得る事業を爲し深厚なる御高恩に負かざらんことを堅く相期し可申、何卒此義は乍憚御安神爲被下度奉願上候。

何やかや歐洲行の準備にて稍ゝ心定まらず候へ共、圖書館へのみは暇ある每に通ひ居申候。森本は多分尙一二年當國に相留可申、暫くの離別を惜む爲め市外なる田舍に下宿を見出し愉快に消光罷在候。彼は數日中に再び講演旅行に上り申すべく候、其後彼とは直接の面會數年間は出來難かるべくと存居申候。

友少なき身には候得共心厚き友を有すること何よりの仕合せに有之、彼が小子に對して與へ呉るゝ凡ての懇情は小子をして勇んで社會と戰ひ見んとするの勇氣を引き起さしめ申候。御手紙其他は舊の如く（番地略す）にて願上候、歐洲には多分八月の上旬か下旬に赴き申候都合に相成可くと存居申候。

時節柄御自愛專一に被遊度、當市郵便局にて一寸暇を得申候間夫れを利用して此寸書相認め申候。亂筆亂文平に御高免被下度奉願上候。頓首。

## 兩親宛――七月二十六日於ワシントン　〔四〇〕

御懇切なる御手紙と共に御惠送爲被下候金員は昨日確かに拜受銀行に預け入申候、感謝の程は言外に有之候。

御教誡の趣、逐一肝銘仕候。以御蔭米大陸を見得るのみか歐洲の舊天地に入り愛弟と樂しき旅行致し得るの快は何物にも比し難く御座候。充分に準備し出來得る丈け眼を張り耳を開き、智識と觀察との吸收に相つとめ可申候。汽船出航の都合により當國を去り候は多分來月の下旬と相成申候事と存居候、左候得ば氣候も餘程折あひ可申、伊太利の旅行には好都合に有之候。目下の計畫は先第一に伊太利に着し壬生馬と同伴瑞西を經而獨逸に赴き、佛國に入り英國に暫時滯在後歸國致度存居申候。壬生馬よりも再三書狀參り小子の着伊を樂しみ待てる趣に有之候。

母上樣の御寫眞到着久振りにて御肖影なつかしく拜見仕候。誠に難有奉感謝候。他の一葉は不敢取エルキントン氏に送附し置き候間、左樣御承知被下度候。同氏も唯今は歐洲（家族一同と共に）旅行中にて最近二三週間手紙無之候。同氏の母上樣への贈物はカシミヤか何かの肩かけに有之候間、品受取申候際には小子より篤と答禮致置き候へども、同氏の番地は御承知にも候半が（番地略す）に有之候。

當地に所持致居候荷物は必要物（歐洲旅行に）の外は取纏め直接日本に差送り申候心組に御座候。到着の上は可然願上候。森本多分歸國致候樣（十日以前に）相成申すべく、左候得者同氏の荷物と一緒に致候やとも存居候。同氏は札幌農學

校教授を承諾致候次第に御座候。養母篤病妹大疾、氣の毒至極に御座候。
先は右不敢取申上度、餘は以後便。敬具。

## 兩親宛――八月三十一日於ニューヨーク市（四一）

前便申上置候通、愈〻明日を以てノースジヤーマンロイド汽船會社のプリンセス・イレン號に便乘、直接伊太利に向け出發仕候事と相成申候。

永らく雨勝ちにて不快を極めし天候も昨日より快晴と相成り、風も穩かに候得者、快き船旅と喜び居り申候。滿月も海上にて眺むる樣相成可申復なき好機會と存申候。

船は一萬噸以上の大船にて、日子はネープルスまで十三日を要し申候。三年前の同月二十四日には米國のシヤトル港に上陸仕候事など今更らの樣に思ひ起され申候。伊太利にては壬生馬君と久振りの面會是れも樂しき期待の一に御座候。何んとなく心せはしく候得者此度は是れにて擱筆仕候。伊太利に着仕候迄は手紙も差上げ兼ね候得者此處暫く御疎遠申上候樣相成可吳々も御自重相成候樣偏へに奉願上候。小子事は唯今至而元氣。旅中は申すまでもなく健康を專一と心懸可申候間乍憚御放念爲被下度奉願上候。敬具。

尙、森本此度歸國に付きては兩人の荷物取りまとめ一箱となし、船便にて送附致候手續きに致し置き候。尙同船何處に何日頃相着候やは今日午後同會社に問ひ合はせの上、此手紙に書き添可申候間、橫濱より東京までの運送方、何卒可然御取計らひ奉願上候。

再　白

荷物運送の義は森本に依賴可仕候間御配慮を煩はし申すまじく候。

此月の初日、船をニューヨーク市に纜き候てより恰も十三日、其日の午後四時頃、單調なる海路も盡きて此港の懷に入り申候。

晴れたる空に、伊國南方の水殊に碧く、舷に群り來る小舟の樣、何となく故國の夫れを偲び居り候。程もなく、其一艘の中に打仰ぎてほゝゑめる壬生馬を見出で申候。其節の心は固より筆の限りには無御座候。

人中を打分けて小蒸汽船に移り、盲人のギタをかきならし、若き娘の歌ふを乘せたる端艇の纜にて引かるゝを珍しと打眺めなどして、稅關に着し申候。ネープルスにて人に遇へば泥棒と思へとは、米國にて再三注意せられたる所に候得者、初めより僻見は候ひしならんが、其混雜、其喧騷にはホト／＼肝積を起し申候。赤帽とも云ふ可きムクツケキ男、私のトランクを打ちたゝきて、稅吏を促がし、やがて稅吏と壬生馬との間に談判初り候を見るに、語は聞こえずして聾の喧嘩と云ふ有樣、兎角して荷物の上に白墨の印がつき、門の處にて黃墨の印がつき、軈て往來に出で候得者、又もや馭者との喧嘩騷ぎ、譯も判らずに引き込まれて、石疊の古き往還をゴロ／＼とバネの惡き車に搖られ、壬生馬がかねて取り置きたる宿に着し候時、初めてネープルスに着し候樣な心地致候。彼處此處に手紙端書など認め居候中、壬生馬歸り來り互に久濶の話題は途ぎれ勝ちにて候ひき。

夜に到りて、やゝ物心地つき候やう相成り、興に入りたる話も出で申候。夜床に入り候は一時、眠りにつき候は一時半二時頃なりしにやと存申候。

十四日、空晴れ候得者見物には恰好の日。朝は市の其處此處、午後はサンマルチノと申す僧院の丘上にあるを訪ひ、下瞰の勝景と院內の古物とにて、米國にて得來りたる物質熱を心地よく洗ひ去り申候。夜は靜かなる散策、床に入り候は二時近くにてや候ひしなるべし。何と云ふ事はなくて話つきず。床に入りて後も明朝の眠たさを思ひながら語り續け申候。

十五日には寢坊して、少しく遲く國立博物館の見物に出掛け申候。是れは當地にての見物にて、ポムペイ市の廢址より出でたる珍品を初めとし、伊太利にあらざれば見難き品種々御座候得者、此日見たる處は全場の三分一にも及ばずして歸宿し、午後は市の西に突出でたる岬巡りを馬車にて致候。長汀曲浦の藍よりも深き浦水を距てゝ、彼處より見此所より(是れより以後は二十日旅中の旅なるカーバの逆旅にて認む)見、バージルの岩莊と申候て、嶮しき岩の突端にかの大詩人が瞑想を凝したりと云ふ點より車を返し、市外なる貧民街の樣を車上より、眼も放たず打ち眺め、新成の隧道を經てバージルの墓に訪で、崖に被ひかゝれる蔦の葉を記念にと、案內書の間に收めて歸宿致候。

十六日、三度國立博物館に至り、繪畫並に彫刻の目覺むる計りなるを、數々觀覽致候。實物を見候得者寫眞模型の如何に不完全なるかを、ありくと覺え、歐洲美術の大觀に時の移るを忘れ申候。殊にチチアンの作は、初めての事に候得者渴仰ひとしほに覺え申候。午後は古き寺の此所彼所、新しき修復の厭味の中に、古香を偲び申候。

十八日、兎角のこともなく、明日打ちたつ可きネープルス東方なる半島の旅の用意などして、一日を暮し翌日、

十九日、霽れたる空の、風やゝ定かならぬに卵の城(累卵と云ふ字など、思ひ起さる可き名に候はずや)と云へるが、廢址になりたるほとりより船に乘りて、圓劇場の如きネープルスを跡にして、二時間計りの後カプリと申候て、歷史多き小嶼に參り候。其目的は、前日端書にて差上候、靑光窟を見んとてにて候。集り來る端舟に乘れば舟子手早く櫂を用ゐて、洞窟の口に達し申候。其高さ水より僅かに三四尺、寄せる波高ければ入りたる舟、風の靜まるまで出づる事難しと云はる所に候ゞ舟子の波の揚げ引きを見計らひて、掛ける合圖に首を伏すれば、舟はスルスルと、廣やかなる洞內に入りて、危きに我を忘れ、思はず眼を閉づ。再び開けば滿目の靑光、水、巖、人、舟凡てを包み、例へば銀河の水を水晶の岩にたたへ氷の舟に棹さす思ひに御座候。軈て本船に歸りカプリと申候村にて、中食をしたゝめ、面白き形の編絲の帽子など買ひ、步行して島の頂上に登り、四時と云ふに再び舟してソレントと申し、詩人タッソオが生地に一夜を過し申候。この夕樓上より眺むれば、眼下に續く海原に風起りて、而かも雨さへ加はり、夕暮雲の紅なるも、やがて消えて降りやみし暇に

町の見物にとて出でし、道は暗く、星疎らに候ひき。

廿日の朝食終りて、待ちくたびれたる馬車も漸く參り候間、ソレント半島の蜒路に一日の旅試み申候。伊太利のはれたる空を何に譬へ候べき。星見えずやと思ふまで碧きに、目も眩むかとばかりかゞやき渡り候。風やゝ強きに、例の馬車のガタ／＼とポッツオ・ピヤノ、カマルドリ、モルトラ、ポジタノ、ソッチレ、コンガ、ペチカ・ショーレなど申候村々の、峻峻たる海添ひの山道の彼所此所に散落せるを行く。面白き規模の大なる伊豆山道に妙義の怪奇を加へた橄欖、葡萄、無花果、アカシヤ、扁楓、梠、蜜柑、シャボテン等の草木、名知らぬ珍らしき筆草に似たる下生えを想像し給はゞ此所の概境稍ゝ思ひやり給ひ得べく候。馭者に歌ふべしと云へば、酒なくてはなど云ひて、長鞭に草の葉など弄びつゝ、馬をやりし事など思ひ合はせ給はゞ、更に興を覺え給ふ可く候。風をさけて日の光裕かなる山懷に四五の漁家、二三艘の舟、眞靑の波ザブ／＼と、打ちかけたるあたりには、人の運命よすぎも樣々なるかなと、心深く思ひ浮べられ申候。午に近き頃アマルフヒと申候眞珠の如き村にて中食し（ホテル・ルナとイブセン、グラッドストン、マッキンレーなどの宿せる所に御座候）、再び馬車を驅りて夕近き頃、カーバと申候（案内記にはスキッツル山上に似たりとある）宿に蚊多き一夜を過し申候。壬生馬が日本の鐘聲は寂滅爲樂と響けども此國の晩鐘は斷腸の響ありなど申候も此夜古寺を過ぎし折りの思ひ出に御座候。

廿一日空雲を交へて彼方なるベスヴィヤスの頂に煙夥く登るを認め申候。タスカニーより來れりと云ふ伊太利の一靑年ポムペイへ行を同じうせんと申出で候により、此朝七時半山氣うす寒きに昨日傭ひし馭者をして馬車を驅らしめ、畫の如き村家田園を過ぎて十時半ポムペイに着し、十二時まで忙しく見物致申候。書けば手紙には餘り多く、書かねば物足らず候得共、此には略し候方をかしかるべく候。中食後香ゆかしき野花を摘みなどして汽車に乘り、夕暮再びネープルスの宿に入り二人して故鄕に歸りしが如しなど申合候。旅なれぬ樣御推察被下度候。

明二十三日には羅馬へと罷越可申候。

偖己れの事ばかり申上候而、御許し被下度候。御手紙竝に母上樣愛子君の御寫眞はネープルスに着し候際宿に着くや否

や壬生馬に求めて拜見仕候。心殘りなき御芳慮のほど偏へに肝銘の外御座なく候。今日までの旅、智識なく頭腦足らずして見殘し聞殘したる所々は夥多可有之候。中にも旅ならでは學び得ぬ幾多の見學致候段自らの幸福を賀するの外なく候。

此地よりノース・ヂヤーマン・ロイド汽船會社に托しトランク一個送還仕候。船（ルーン號）横濱に着し候節は同船々長より父上樣に宛て通知書參り申す可く、其際は何卒人を横濱に御遣し被下、同會社横濱支店にて同通知書引かへに横濱稅關長宛ての該荷物引出證を得、稅關に到りて受取方相濟せ候やう、御取り計らひ爲被下度奉願候。稅關にては荷物內容の檢査有之可く候間、別封を以て同トランクの鍵送呈申上候御落掌奉願候。同船は當月二十七日當港出發印度洋を經て日本に至るものに御座候。尙トランクは褐色のもの大きさは長さ三呎二分の一、幅二呎二分の一。高さ二呎二分の一に御座候。小生の姓名黑にて書入れ置き候。

稍〻書きくたびれ候間本日はこれにて御免を蒙り申候。折角御攝養專一に被遊度當方二人とも今日に至るまで至極元氣、壬生馬は私當地に參申候てより稍〻肥り候樣申居候。頓首。

# 一九〇七年

## 末光績氏宛——六月十八日於麴町下六番町　（四三）

兄が好配を得しを報ずるの書は遂に生に達せずして終りぬ、遺憾。生をして更めて兄が好運を賀せしめよ。更に又生の爲めに彼女に生の好意を傳へよ。

兄が匆忙なる兵營生活の寸暇を利して生の爲めに筆乘られたる委細の書は生に多大の感謝を與へたり。

生は兄が兵營生活の經驗を讀みて恰も自己の經驗せし事を憶想しつゝあるが如きを感ぜざる能はず。生は今に於ても兵士を見る每に生が兵營の生活を思ひ浮べて憐憫と同情の念に燃えざる能はず。文明の進步に對して屢〻心よりの感謝を爲す我等も彼等の生活の苦痛を顧想するに及びては、眞正なる文明が如何に遼遠なる未來に屬するかを思うて轉々前途の尙甚遠きを嘆かざる能はざるものなり。聖書の所謂獅子羊と相伍して爭はざるの時は果して何の時なるべき。我等が忍耐と希望と共に確固不動の者ならずば我等は其憂に堪へざらんとす。

兄が所思と家事との葛藤は足助河內諸兄より聞き知りて、生は兄に心よりの同情を捧げざる能はず。されど希くば深く傷むことなかれ。我等の信仰僞ならずばやがて瞻望の彼岸に達するの日あるべし。忍耐と忠實是れ我等が武具たるべし、懼るゝことかは。

生は未だ適當の位置を社會に得而好む所に從ふの時に達せず。籠居して依然讀書と家事とに周旋しつゝあり。日本に於て長男たるの苦痛は唯其人のみ知る所なり。されど生は尙是れに滿足することを得るや否や。不平を他に漏す愚を爲さざるの決心を爲すことを得。生が時は未だ來らず。されば謹んでそれを忍び待つのみ。他日兄等の同情に償する時來らんことは生の深く期待する所なり。若し許されなば必ず東上し給へ。夜を更かして相語らん。年を經るに從うて友情は宛ら節

されたる如く稀となる。篩し出されたる少數は眞の友情もて互に相依固するの必要あり。

梅雨の時期は來りぬ。今日も朝來の霖雨、讀書によく瞑想によし。唯明日の兄が生活を思うて脚絆の泥にまみれ銃劍のさび易きを思ふ。身體も亦害れ易し。幸に自愛自重し給へ。

## 山本愛子氏宛――八月十三日於札幌　〔四四〕

六年の星移りては物變る事も不尠、舊農學校樓上の時鐘のみは依然移刻を報じてそれを聞く毎に無限の感慨に滿され申候。我れ若し詩人ならば詩百篇は愚かの事と存申候。

度々母上樣御病狀に付御通信難有、案外に早く御本復の御樣子重疊實に此事に御座候。今夏は當地も非常に暑氣にて旅行中々難儀に候得共父上樣を始小生も無事、御休神有之度候。みな〳〵樣へよろしく。

# 一九〇八年

## 兩親宛――一月九日於札幌　〔四五〕

拜啓。當地は氣候割合に暖和にて雪は多く御座候ものから寒さは東京程にも感申候はず。着札後愉快に消光罷在候處、錦地昨今如何に被爲入候や。永く好晴の續きし跡とて又一しほの御寒さにはあらずやと乍蔭御案申上居候。途上よりの略書並に着後の電報及端書にて得貴意候通、出發後途上至て無事、願ひてもなき程の好晴にて、船の夢も圓かに去る六日夜汽車の灯ともされてより稍ゝ一時半の後、札幌の假停車場に着申候處、森本君停車場に出迎居被下、昨朝以來五度迄來りたり、是非と云ふにて拒み難く、其家に參る事に相成り、一同より衷心の歡迎を受け申候。其翌日七日は即ち開校の前日なれば、校長其他重なる敎職員に面會し、其翌日八日は受持ちの生徒を引見致候。小子の受持ちは豫科、土木科及森林科の第一年級に一週十一時間に候のみならず敎ふる學科もさして豫備に骨折れ候程のものに非らず、自分の勉强には恰好の位置を得たるものと存居申候。敎授の外には小子も學長の主事として學生の德育の方面に於て學長を補佐すべき旨學長より申渡され、勿論の難事業ながら是れ亦肩身を入れて事に當る決心、其中寄宿舍の方にも仕事仕候樣相成可申やと存居申候。

兎に角此度は萬事心持よく心より働き見る積に御座候儘此旨何卒御休神被成下度奉願候。

宿の事も父上樣御敎示の旨も有之、早速知人に依賴し適當の貸家相捜居候へ共未だ無之、其中見當次第引越の心組に御座候。幸山田ひな氏唯今在札、小子家を見出さば同居世話致くれ候樣約束致置候。是れは好都合に御座候。

小樽の荷物は未だ取寄せ不申候へ共既に到着致居候事と存申候。

御避寒の御計畫既に御熟し相成候や、須らく急速御企圖返すぐも奉祈上候。

英行君にも此手紙到着の頃は開校の運に有之候半、第一義の御生活御活動切に祈上候と共に、時々學程の經過其他の消息御漏しの程願上候。行ちやんはよく英ちやんの云ふ事を聞いて勉强し、壬生さんに威張れる程の報告をせねばいけませんよ。

扨又、室蘭支廳長訪問の事は、汽車出發前僅少の時間を利用し、其私宅に參申候て御仰の三件の成行伺申候處、三件とも旣に道廳の方に廻送相成居候。最早廻送の日取なれば不遠貴方に通知出來候蓮に可相成、左樣御安神あれとの事に有之候間、左樣御承知置被下度奉願候。

時節柄折角御自愛專一に被遊度、先は右御報知旁草々頓首。

## 母堂宛——六月九日於札幌　〔四六〕

拜復。其後は又暫く御無沙汰申上居候處御平安に被爲入候趣御芳書にて承知安堵誠に此事に御座候。此度本官に任命相成候に就ては、早速父上樣始め御祝詞被賜却而慚愧の至に不堪候。然し是れに就きては學長にも隨分と御盡力下され候儀と存申候。

私程早く任官の命を受けたるものは無之候。偖本官に相成候而も仕事には別に變化無之、英語と倫理とを敎へ傍社會問題文學史等の講義致居候。其外、學長主事と申候名義の下に校務に關して研究の餘地を有し、是れは後來多少の便宜を得る事と存居申候。豫科と申候へば、他大學の高等學校に相當致候ものにて、敎育として見る時は最も興味多く、感化多き時期に有之候。私は寧ろ大學本科よりも此方を撰び申候。如仰森本も此度本科助敎授に任命せられ候へ共、是れは人員の都合上にて、多分本科の敎授は致すまじく依然豫科其他の特科並に校務に專從する事と存申候。彼は事務的の技倆を有すれば其方に重用せられ今にては敎務には缺く可からざる人物となり居申候。當人の爲め其友の爲めには祝着の儀に有之候。

何處に參候而も私の特性は沒する事不能、上長の人との關係は、或者は非常に信用し吳れ、或者には絕對的に並行が出

來ず、同僚に對しても二三の親密なるものを除く外には親交なく、學生に對しては接する程の學生には必ず親重せられ申候。私の最大の職責は彼等を愛重して彼等に出來る丈け我が知れるものを與へんとする事なりと信じ、且是れを實行致候故、彼等も亦私に對し異常の好意を酬い申候。是れあるが故此校の生活は愉快なるに御座候。どうしても此一本氣が私の特色是れで何處までも押通し度きものと存居申候。

英行よりも祝辭難有存上候。行君は其後如何にや、時々手紙下さる樣申上置候が、此度のも至而短文にて近頃の樣を知る事不能、一ヶ月に一度位は長いのを書かれ度候。英君に就きては此夏休暇を期し。

父上樣、水路一件にて宇野氏と談判の御手紙昨日正に落掌仕候。今日出向談合の積に御座候、左樣御承知願上候。先は右のみ頓首。

## 末光績氏宛――十月十九日於札幌　（四七）

永く消息を通ぜざりし生が怠慢の罪を許し給へ。兄が上は夢寐にも心頭を離れたることはなけれども何とはなき一種の心のおこたりよりかくは永く筆秉らざりき。

兄と最愛との寫眞、兄の弟を通じて賜ひし茶、共に確かに生が手に落ちぬ。生は是等の心厚き贈物に對し衷心の謝意を表せざる能はず。未だかの茶は飲み試みずして文庫の中にあり。他日何事か記念すべき折あらん時そを取出して兄の厚意を飮む可しと思ふ。

兄が校長代理としてかの校の教育に當らるゝは生の極めて喜とする所なり。兄は校長をいたゞかざるが故に束縛を受くること極めて尠なからん。兄が思ふ儘に施設せんことも亦甚容易なる可し。兄はその所謂理想的の事業を得たりと云ふ可し。唯窃かに懸念する所は所謂縣會郡會の愚論なるべけれどもこは兄の輿望が壓倒するに十分なるものあらん。生は兄が此事業に向うて精神を傾倒して彼所に於けるクラーク先生たらんことを切望してやまず。

足助兄等の勸告に從ひ生は立ちて少しく遠友學校に盡瘁する所あらんとす。 生は知る生は固より其人にあらざるを。 されど回顧すれば其人はありながら自個の事情周圍の事情の爲めに敢而身を挺して是れに當らんとするものなし。 生の立たんとするは是れあるが故なり。 皇天願くは生の弱きに鞭ち給はんことを。

生頗健。 北海の風光漸く秋に入りて四圍の靜寂例ふるにものなし。 北海の秋は兄既に知盡せり。 昨今の生が大歡喜を思へ。 十七十八日の兩日は寄宿舍生と共に定山溪に遊べり。

生は北二條東三丁目九番地に移れり。 來春妻を迎へ入れんが爲めなり。

兄の上に祝福裕なれ。 兄が愛するものゝ上にも亦。

# 一九〇九年

## 前田謙氏宛——三月十七日於札幌　〔四八〕

先日來折々の御細書委敷拜見。

待設け給へる以上に家の方々强硬の態度に出でられ候由御苦心の程乍蔭御察申上候。然し是れ結局君の爲には良善の運命ならずやと存上候。是れあるが故に君は家族主義てふ日本在來の陋習より脫却し給へり。今後は君の欲する所に獨立獨往の態度を取給はん事も自在ならんと潛かに御羨み申上候位に御座候。但し一の破壞を爲し遂げんが爲には君の所謂痩我慢の多大を要し候事に候半か。御苦心と申上候は此邊の御心情をお察し申上候次第に御座候。此上は不退轉の大威力もて初志御貫徹の程祈上候。

偖洋行の儀至極結構ながら差當れる困難は金、更に來る困難は渡米の許可を得る一事、之れに加ふるに彼地落着後研學の困難を以てして君には三大困難ありと存上候。其中第一二の困難に對しては旣に定算あられ候儀と存上候。御問合被下候は第三の困難に對してなりと存上候。

小生の思ふ所に於ては西部は當今の形勢上足を留むるの地にはあらじと存申候。さればとて東部の生活費のかさむ點に於て遊學難事にや。最上の地は中部卽ちシカゴ、ウヰスコンシン邊にやと存ぜられ候。如御承知此邊の地は新開の勢力すさまじく、學術界も裕に東部と拮抗するに足り美術の進步も或點に於ては却て東部を凌駕するものあるに見て、其新開の文明なるものも西部に於けるが如く根柢淺きものにあらざるを以て御承知可有之候。先冒險を試みんとならば半年の糧を續くべき資を懷にし彼地に至り、家庭に入りて働きながら徐ろに夜學校にでも通ひ（無償にて丁寧に敎ふる夜學校は澤山可有之候）、通俗語の使用に慣れるを待ちて大學の選科にでも入學し心肝を盡すの一事に御座候。社會問題の研究の如きには

シカゴは恰好の地なるべく候。かの邊の地には知己は一人も無之、御紹介には困難を感じ候得共（徹心あらば道は自ら開け行くべく候。例へば同地社會主義者の團體をたよりて君の意志のある所を漏すも可なるべく、出發前に通信を開き給ふも可ならん）若し高慢なる日本人を氣に留め給はずばシカゴ大學には一人の Lecturer ある筈なり。よく話し給はゞ働口位どうにか周旋致呉れ可申候。

何しろ彼地到着後半年位は自支し得るの貯財は缺くべからざる事に存上候。

先づ小生の存じ寄りは大略右の如くに御座候。尙細末に亙りて御助言叶候事もあらば仰越被下度、愚案もあらば可申述候。

此地去る十三日地震ありて日頃より寒氣相加はり申候。梅咲く春には尙餘日裕かに候。此二十日此地出發上京可致候。歸北は來月十日位にや。

君の健康を祈りつゝ。

## 志賀直哉氏宛——六月十七日於札幌　〔四九〕

拜復。御申越の夏期講習會風のものは當地には無之。郡君の爲計る處ある能はざるは殘念に御座候。然し何とか左樣のものありげとなして御來札あらば如何にや。當地には獨逸語の敎師も居る事なれば講習會はなくとも講習は出來る事に御座候得ば全の虛言とは申されまじく候。

右御答のみ草々。

## 前田謙氏宛——六月十九日於札幌　〔五〇〕

其後は當方よりこそ御無沙汰仕居候處益々御淸健の由大賀此事と存上候。徵兵の方も事なく御濟しに相成候由、是亦爲

國家大慶至極に存上候。

偖御出札の當時御用達申上候金子御心に懸けられ早速御送還被下難有確に落手致候。意志疎通せざる家庭の虜となられ候御趣、見れば小生も萬々經驗を有する事誠に以て御同情の至に不堪候。然し此頃は小生も大に悟申候。

此間蠣崎君が云へる、

「汝が抱懷する理想と是れを實行し得る實力、果して一家庭の平和を無視しても尚遂行するに足る程大なるかを思へ」

と云へる一語は深く小生に教訓を與へ申候。所謂人に使はるゝ事も人を使ふ事も出來ざる無用の人物たらざるを勉むべきなりと存申候。此邊は君も十分咀嚼せられ暫時雌伏して修養と精勵とを事とし他日の飛躍に資せられん事を祈上候。

此度御申越しの君が夢想は未だ夢想として承知致置き可申候。御去札當時の君の抱懷は自到底手足の勞働に適せず本分は寧ろ學者たるにありと信ぜられ候樣覺居候處、此度は反對に學者たるの心懸けを捨てゝ到底君の適所にあらざる勞働を選ばるゝ事なれば此間には中々廣大なる思想の gap ある事と存ぜられ、君が一片の御手紙にては到底貴意を酌み難く被存候。此邊は尙一層眞面目に御考慮の餘地十分と存上候。

實着の歩武にて應分の御活動祈上候。夢の國に入らんには石じきの街道を歩まざる可らずと被存候。

吹田君は此頃中々の精進に御座候。此頃は創作の外にヘッペルを譯し居られ候。近頃は暫く來訪無之候。大石君は此夏は北邊に遊ぶべく、田中君は歸鄕の由。逢阪君よりは如例熱列親切なる書を得申候。

唯今新渡戶博士來札中、餘り大した波瀾は湧起せず。唯小生は俗用多くなりて困切居申候。家庭を造り候得共何の感想もなく、唯家庭裡の人たらんには大なる勇氣を要すてふ一事あるのみ。

御返事まで草々。

木村德藏氏宛——七月二十三日於札幌　〔五一〕

愈ゝ華燭の典を擧げられ候由の御報知に接し歡喜此事、末長く御榮あらん事を衷心より奉祝納候。御新婦とは未だ半面の識も不辱候得共何卒今後とも宜敷御高誼賜度奉願候。郵便にて御送呈申上候粗品聊か祝意を表する印として御笑納被下度此段乍遲延御祝のみ。頓首。

## 末光績氏宛――九月八日於札幌　〔五二〕

信三君に託して長く記念すべき兄が衷情の惠贈多謝。我等は永く兄の眞情を忘るゝこと勿るべし。

信三君の報ずる所によれば、兄は今や町の問題に關し是非曲直を正さんが爲めの故に晝夜心身を勞せりと聞く。行け、其事は縱令微少なりとも世に一の善を榮えしめ一の惡を滅せしむるは偉大なる事業なり。生は兄が此實動の渦中に至りて活動せるを聞きて喜に不堪。口頭三昧は到底一の實賤に不如。生は兄が兄の地方の爲めに兄の學才と興望とを以て努力を續け一個の理想鄕を現出せられんことを望みて止まざるものなり。

兄に遲れたれども生も亦遂に家庭裡の人となれり。經驗する所未半年にも不及れば言ふべきもの更に無きも、生の生涯は確かに一の大なる囘轉を爲したることを自覺せざるを得ざるなり。生は喜ばしき責任を感じ荒蕪せる空想より醒めて實質ある思度を爲すべきの必要を思ふや切なり。此感想他日何の時か一の體を具へて現はれ來らば妻のわれに嫁し來りしは全く無益にはあらざる可きなり。

新學年は再び開かれんとす。書を講ずるものには新に入り來る學生の秀拔ならんことこそ祈らるれ。敎授の事に關しては多少の不平なきにあらざれど、生は不平を爲す代りに遠慮なく思ふ所を實行せんと欲す。さる上の衝突は誠に已むを得ざるなり。

幸に自愛して兄の業を全うし給へ。又兄の最愛に生の好意を傳へ給へ。妻も又未見の友に對して深き好意を致す。

## 木村德藏氏宛――十一月十八日　〔五三〕

寫眞四葉確かに落掌、多謝。兄は藪醫者の如く婆やは琉球の產婆の如く安子はヒステリー患者の出來損ひの如く生は亞米利加土人の如く松尾は還俗したガンニン坊主の如く大に振つたり。然し是れが兄が久振りにて札幌に來りスカンクの話を爲し、籐椅子上の居睡を爲し、仙臺からの艶書を讀み、科學者の夢と其附錄を講じ、尻つはしよりの上に外套を着用に及びたる記念と思へば實に思ひ出多き寫眞と云はざる可らず。迷惑にも亦嬉しきことなり。

早速第二世の出現を豫告せられ米國三界まで動物學の研鑽に出張せられし因果は爭はれぬもの靈驗神の如しと謂ふべきか。何しろ兄のみならず兄の半身のみならず實に兄の友一同の額手雀躍に堪へざる所なり。是に引かへ生と來ては未だに何の警戒もなく無事泰平なり。生來懶怠に生れつきたる生には其筋にても鑑照ましまして暫く惰眠を續けしめ給ふと見えたり。出來るなら生もモー暫くは惰眠を續けたく思つて居る。鈴木から手紙が來て札幌が駄目なら臺灣に參り度く申來れり。故に直ちに新渡戸氏に書を致したれども未だ返なし。兄の思ふ所如何。

兄が掌れる教育の狀態如何。兄が期待せるものは着々實現せらるゝや若しくは一々其意と違ふや聞かまほし。願くは兄の半身に生と妻との好意を傳へ給へ。兄等二人同寫の寫眞一葉を送れ。兄は我等二人のを拉し去れりとや。けしからぬ事なり。何だかまのぬけた顏なればまのぬけた人間丈けに拜ませ給はらんことを。草々。

# 一九一〇年

## 白樺同人宛――七月五日　〔五四〕

白樺六月號落掌多謝。
志賀兄は御入營と定まりし由、いつぞやの白樺にありし、同人中よりも一人二人の國家に貢獻するものを出し度しとの御趣旨貫徹はありがたけれども志賀兄の爲めには御氣の毒の至り、終末試驗には必ず落第をなされる樣、及第を致すと跡のたゝり實に恐ろしき斗に御座候。
然し二年の兵營生活は――高價には相異なきもたしかに兄に若干の新生活を示す事と存居申候。
白樺の此度の號は稍ゝ遊戲分子が勝ちしやに存ぜられ候は如何。然し兎に角我等の實力が產み出したる所と思へば他人の子ならぬ己が子を見るの心地に御座候。
小生此次の號には「も一度二つの道に就きて」と申す論文と、小品一題位の處かと存居申候。
此次の號には小生の題字の御紹介下さるゝ位なら表紙意匠者の紹介あらまほしく存申候。
展覽會は如何。入場者有之候や。見る眼さへあらば驚異に値すべき作品もあるを東京の人の眼は如何かと其結果に一種不安なる興味持たれ候。
小生今夜十時出發函館に向ひ岡田文部次官の來道を迎ふると云ふ始末。腰べんとかたる憂目にも遇ひ申候。されどそれも面白く御座候。
此地初夏の濕氣云ふべからず。草々。

前田謙氏宛――八月三日於札幌　〔五五〕

御消息うれしく拜讀、益御淸康眞面目なる空想なき御生活なし居られ候由結構至極に存上候。小生は不相變空想默思の奴隷。君よりの御消息にて稍汗顏を覺え申候。然し是れを止めれば唯今の小生の存在は一時あやしく相成候樣存ぜられ、生存慾の要求に應じてかくの始末に御座候。御憫笑被下度候。此度の白樺にも「二つの道」の說明の樣なもの記し置き申候。晝寢の御暇にても有之候はゞ御笑覽御批判願上候。

逢阪君當地へ參られ候由鶴首罷在候。同君就職の事實は氣の毒なれども小生は例の至て交際なきものにて、可然處は漁り盡し、宮部先生高岡先生の如きは御存知通り社會主義に恐れを爲してとりあはぬ體たらく、大にゆきなやみ居申候。然し君が自ら來らるれば或は案外にはかどるかも不知と存申候。

田中淸作君病氣稍おこたり候爲め今朝出發靑森縣あさむしに赴き申候。自然其中には熱海か茅ヶ崎かにて保養の由。早晩東京にて御面會の事と存居申候。

御尊兄の御著は未だよまず疎懶の罪自らを憐れむの外無之候。白狀する丈け取りどころありと御見逃し被下度、其の中――死ぬ迄――には屹度――屹度と云つたら屹度――拜見可致候。

暑さなれば殊に御旅行中は御用心なされ度、兄の此頃の御手紙によれば兄の今の態度は大に贊成、いよ〳〵凡人になりすまされ候御樣子祝着々々。

大内君によろしく。草々。

有島生馬氏宛――八月九日於札幌　〔五六〕

父母上樣と共に向北せらるゝやと其儀御音信も申上げざりしが、御出懸なき樣子なれば一筆しめし申候。

展覽會も上首尾に相濟み申候由の手紙と白樺にて委細承知、安堵もし會心の念にも不堪候。あれ丈けの反響を起し得たる事は藝術に對して冷淡なる日本にありては先づ稀有と云はざる可からず。加之君が新しき感能と性情とを提げて日本之讀書力に一新勢力を與へたるは君の總てに勝りて滿足せられし事と存上候。

世に少くとも今の世に全自己を人に與ふるより大なる慈善大なる事業はなかるべく、君は其方向に一飛躍を爲したるに於て自ら慰め人を羨ましめるの權あるものと申すべく候。カタログも氣に入りたり、入場劵も面白し。唯世は今君に期待するに君が佛國に於て拾ひ來りし色彩に對する又感じに對する鋭敏なる能力が、日本の風物に對して如何に發揮せらるゝかを以てせるは、僕の云爲を待たずして君の洞察せられたる所なるべし。日本の色彩の單調枯淡なるは君屢〻之を云へり。然れども光琳を出し俵屋を出したる風物は全く捨つべきものにあらざる可し。即ち君は第二の征服の門邊に立てりと申候も不當にあらざる可と存上候。此所何卒一所尊念の工夫祈上候。

又結婚の事かくばかり早くまとまらんとは僕も思かけず。先づ何んと申上候而宜敷や一寸困る次第には候得共僕の聞く所によれば信子氏はしとやかなる無邪氣なる處女なるが如し。其母なる人若し君が云ふが如くんば君の緣組は決して悲觀すべきものにはあらじと被存候。

我等は到底矛盾せる二時代の犧牲たるを以て滿足せざる可からざる可く候。決定したる目的の與へられざる所にありて百方摸索の間に死せざる可からざる運命にある樣被存候。總ての點に於て我等が眼に見耳に聽き頭腦の承認したる事實は我等の爲すを避けざる可からざる處なるかに被存候。我等の道は三あり、大謀叛者となるか奴隸となるか世をくらますか、即ち是れ。而して君も僕も大謀叛者たるには力未だ足らず、奴隸たるには心餘りに高く、默して云はざるの一事を選ぶの外なかるべく候。此點に於て僕は君が信子氏との緣組を上出來なりと申候ものに御座候。よき美しき而して高き結合を爲し給へ。夫は八分妻を形造り得る——特に日本に於て——ものに候得ば恐れ給ふには及ぶまじく候。

九月に行はるべしと云ふ結婚式には小生も參加致度ものと今より焦心罷在候。

當方兩人共無事、此夏休暇には何も計畫する所なく唯手あたり次第に多少の勉强致居候。
立秋も過候模樣やがて此地は秋なるべく候。
御多忙の際折角御大事に。早々。

## 末光績氏宛——八月二十日於札幌 〔五七〕

委しき兄の感想を讀むを得而生の慰藉は實に譬ふるに物なかりき。生が取りたる此度の step に對してかゝる同情ある辭を聞き得たるは實に生の至幸とする所なり。洵に兄の云はるゝ如く生の此度の態度は一層自己の根柢に立歸らんとしたる努力に過ぎざるにて、要するに生にとりてはかくする事が生を一層眞面目ならしめたる所以なりと思ひたればなり。而して此點に於て兄と生とは依然同一の道程を步めるものと稱せざる可らず。我等の友情が茲に結ばるゝ限り我等は樂しんで我等の交情を保續し得可し。願くは幸に更に常に教ふる所あれ。

實に人生の眞の行路は何處にあるべきやを思ふ時而して自己が其間にありて何等の貢獻を爲し得べきや沈思する時生は云ふべからざる寂寞を感ぜざるを得ず。菲才菲德而して徒らに非望のみ高き無爲の生涯を悲歎せざるを得ず。兄等が溫厚なる同情あるにあらずんば生は枯死するの外なきを知る。足助兄の消息を齎するを聞くに兄にも亦言外の潛痛あるに似たり。生は兄がよくそれに堪へて自ら人知れぬ苦悶を續けつゝあるに滿腔の同情を致さゞるを得ず。されど實働は空言に勝り、沈默は慟哭にまさる。兄が郷里にありて世に現はれざる靜かなる生活の中に恒久的なる實質あるを思うて寧ろ羨望に堪へず。是れ亦恐らくは生の踏むべき道ならざらんや。而かも未だ碌々として迷より迷ひて夢より夢を辿る時に自らを悔むの情に不堪。

此地秋冷今催せり。父母來りて家に投じ日々歡談す。爲めに兄に酬ゆるの機を失せるを恨む。秋に臨みて寂寞一味の情少年時にありて嘗て知らざりし味かな。此味恐くは亦兄にも悲しからん。幸に自重せよ。信三兄荒川兄にも幸に生が衷心

の好意を傳へよ。

## 有島生馬氏宛――十月八日於札幌　〔五八〕

御病床より度々の御通信御芳情御禮申上候。

去る一日は注射療法をなされ候結果御發熱の由、今頃は旣に御快癒とは存上候得共一時はおなやみなされ候半。當方御兩親樣御出發以來頓と寂寥を感じ加之每日の降雨秋冷もにはかに催申候て心細き事に御座候。御地は殘暑再發の由、被害地に惡流行病にても發生せずや乍陰御案じ申上居候。安子の腹は段々せり出し申候。其出方に比例して生之父となる度合も增し來候事に御座候處未だ其覺悟甚微弱乍自分困却申候。嘗てトルストイの家庭の幸福を見たる際赤兒の生るゝ所を記せる條の、父なる人の新生の來降に啻ならざる期待を爲せるを讀みてかゝるものかと驚嘆せし事も稍疑はしく相成候。出づるに餘り早く赤兒の世に出でんとする爲めにや、生の自己心が餘りに强過ぎ候爲めにや。但し赤兒生れ候後に來るべき生の心理狀態は今より豫め申上兼候。安子は頻りと英雄烈婦傳など讀みて所謂胎內敎育なるものに出精致居候間多分東西古今の英雄豪傑美人列婦を打して一丸となしたるが如きネーコーチを得申候半か。但しかゝる場合父たるものゝ迷惑は今より思ひやられて憐れに御座候。

ロダン傳其中小包となして御送呈可申上候。あの本は時々開き見て多大の敎訓を得居申候。餘り度々見候に而安子に笑はれ申候。

偉い人が出て候ものかな。あんな人間に生れて己れの苦心が續々形を取りて現はるゝを見るは何たる愉快の事に候半。生如きものゝ眼には夫れは人間以上の生活とのみ見え申候。

今日一寸公園まで散步の序林檎園を訪れ申候處、十四號と申候林檎の稀有に大なるものを見出で申候間一個なれども小包にて御送申上候。十四號の普通の大きさは〔圖略す〕の位のものに御座候。早生の林檎として北海道にても最も評判よ

きものに御座候。最早御退院の事と存じ林檎はわざと番町に送り置申候。
日韓合邦、合邦とはよき名を思ひつかれ候ものかな。當局者の苦心此名によりてもさこそと思ひやられ申候。問題が大きすぎる故か、稀有すぎる故か、生は何と云ふべき言葉を不知。草々。
信子樣によろしく。

## 有島生馬氏夫妻宛——十一月二十日於札幌　〔五九〕

先達來は御多繁の所毎々消息多謝。いよ〳〵蜜月の旅にのぼられ候由、人生の春此時より闌なるは無かるべく、至る所の山河ほゝゑみて君等二人を迎へけんと小生も歡喜の笑つぼになり申候。此間は君のできものゝ事につき聞出したる儘を申上置候處診斷を受け試みられ候や。未だなれば是非なされ度候。此度の事につきては御兩親樣の御よろこび實に非常の御樣子。昨日父上樣被歸御手紙は言文一致か何かで御よろこびの樣はちきれ相に拜讀。小生まで涙こぼるゝまでに嬉しく存申候。大なる御孝養なされ候事と存申候。
ロダン號も愈々發行。昨日一讀。木下氏高村氏などの寄書心深く讀過致申候。君の譯稿は實に面白く候得ば是非完成の上一本になされ度。あの樣な書き方でこそ始めて生きたる人の描寫は出來得べきものと感入申候次第に御座候。此國も雪と相成申候。久し振りに見れば故舊に遇ひし程になつかしきは此淸き白き姿に御座候。ワイマーにて得られし君が雪に對するよきイムプレッションも想ひ出で給へや。草々
信子君。壬生公は如何に御座候や。壬生公とは小生等の腕白盛に今の大美術家に呈したる尊稱に御座候。未だかんしやくの破裂には御遇ひなされず候や。其かんしやくが壬生公の特色なればおろそかにはなされまじく候。

# 一九一一年

## 木村德藏氏宛――一月十八日於札幌　〔六〇〕

先達御送付の五十五圓五十錢は確に落手しながら、御返事今日迄延引せり。多謝。五十圓五十錢はたしかにいただき置候。餘の五圓の仕拂につきては未だに致し不居候得共必ず其中 dispose して受取を差上候樣可致候。去年の夜學校奬勵會は新築校舍にて擧行し今は每日の授業も其處にて致居候。去る十三日午後三時小生方に赤子一人出生名を行光と命じ申候。結婚したる時よりも小生に取り小生の生涯に重大なる意義を敎へたるは此弱小なる mankind の與へられたることに御座候。本日迄母子共に至て健全に肥立ち居申候間幸に御安神願上候。學校を卒業したる時よりも、外國に留學したる時よりも、結婚したる時よりも小生に取り小生の生涯に重大なる意義を敎へたるは此弱小なる mankind の與へられたることに御座候。

南部の旅行は如何なりしや、定めて珍敷種々の經驗を積まれ候半。小生は此頃兄の生物學を修められたる先見を羨ましく存候ものに御座候。向後哲學も心理學も生物學の智識に負ふ所多大なものある樣に相成候は火の如く明かなれば兄の如きは人生の解釋上基礎智識を得られたるものと存上候。何卒向後益〻御發展新しき智識と思考の結果とを示されんことを祈上候。

## 有島生馬氏宛――十月八日於札幌　〔六一〕

當地寒氣仲々嚴敷候。先達は貴地のスイカンと申候ものを味ひ南方の氣象のしたはしさを感じ申候。くれ〴〵も御大切になされ度。乍末筆奧樣へもよろしく御傳言の程願入候。

先達は曉子君の可憐なる寫眞二葉御惠送被下拜見致處如何にも健全肥滿の孩兒、加之眉目淸秀美しき處女とも妻とも母ともなるべき面影まざ〳〵と窺はれて兩親の大誇想像に餘り候。何卒睛（ひとみ）の如く大切に御養育の程祈上候。

先日父上樣より君の件に關して御細書を得痛心の思に不堪、兎に角不取敢小生の所思父上樣迄申上置候。此破綻を破綻に終らしむるならば兎に角、老先久しからざる父上に御配慮をかけ候よりは、互に讓るべき處は快く讓りて圓滿なる解決を告げ度しとは小生の切望する處に御座候。詳細は二三日中に可申上、又原田御母堂の御意をも得度考に御座候。西洋梨少々番町より囘送の筈御笑味被下度候。草々。

## 村木德藏氏宛――十一月二十九日於札幌　〔六二〕

先達は御手紙被下候處打絶御無沙汰に相成恐縮に御座候。

兄が家の何ぞ近年多事不幸なる。其間にあつて八方難關を切拔け敎育の事業に心血を瀉げる兄を想像すれば乍憚御同情の至に不堪候。兄始め御病人等の御容體如何に御座候や。臺灣の如き地にあつて一度病氣を得ば痼疾となつて醫し難き事は兼て傳聞する所なれば、兄も此際斷然たる處理に出で一日も早く彼地を去り他に適當の位置ある迄は十分の靜養を謀る方得策なるにはあらざるか。東北學院の件の如き兄の經歷と是迄受けたる辛苦とより打算せば其報酬必ず滿たざるものあるべきも、若し財政上の點より論ずれば私立學校には自ら私立學校の餘裕あり、事業以外の敎授もなし得ざるにあらず、又著述と云ふが如きも可能の事なるべしと存申候。故に報酬の問題は少々讓歩するも時間の制限を十分に交渉し置き、保養旁と云ふ積りにて彼處に行き徐ろに善後を講ぜらるゝも又遲かるまじくと存申候が如何。小生の考ふる所を以てすれば高等程度の敎育機關に入り直ちに百三四十圓の報酬を得んとする事は不可能事にあらずとするも難事たるを失はずと存申候。而して殊に動物學の如き自然科學に於ては學閥の牆壁容易に拔きがたきものあるべく、同時に專門家としては其智識隨分高等なるを要する事と存申候。結局今の敎育界は兄が理想しつゝあるが如き敎育家の存在を必要とせざるに似たりと存申候。生の如きも英文學に何等他に誇るべき造詣あるにあらず、唯學生相手に相交るを得て何等かの貢獻をなし得んことを庶幾しつゝありと雖も、官立敎育機關の組織はかゝる餘裕を敎員には與へ申さず候。學生も可成正確なる專門智識を

要求するの外教師に對して求むる所は落第せざる點數位のものに御座候。生は自ら專門家たり得ざる自己の資質を笑ひつつある次第に御座候。

到底自己理想の教育を爲さんと欲せば現代にあつては自ら塾なり學校なりを開くの外なき事と存申候。然らざれば不平滿腔遂にそを披瀝し盡すの時はなかるべく存申候。若事情の已むを得ざるものあつて現在の教育機關に籍を置かんとならば、身の察々を以て汶々の侵す所とならざらん樣消極的の手段を講ずる外なき事と存申候。其邊に對しては兄の御意見も伺上度候。

乍末筆御令閨にも宜敷御傳言被下度候。生方は三人共至て頑健、頑兒はよく飲みよくあばれ居候得共癇の高き爲にや、一時間位づゝ夜泣きをされ候には途方に暮れ居候。吳々も御自愛專一になされ度。草々敬白。

## 有島生馬氏宛——十二月二十三日於札幌　〔六三〕

愈番町の方に御移轉になつた相で、遠方に居て此事件の成行を眺めて居た僕に取つては實に一安心でした。君の苦心や苦痛は重々御察しゝますが、さうして下さつたので眞によかつたと思ふ。處が信子君は風邪がまだ全く快くなつて居られぬとの事、是れは早速父上に御願して轉地なさる樣になさればいゝと思ひます。僕からも手紙の序に申上げて置きませう。我々がこんな時代に住むと云ふ事はいらぬ苦痛をするので無駄な精力を費やすは何れ程だか知れない。而かも夫れを僕は覺悟して居る。僕は散々迷つた末に其くびきに堪へる覺悟をした。或る時機までは敵に壓伏されて默つて居る積りにした。夫れだから僕の道が其爲めにはかどらないのは僕自身の責任で誰から憐んでもらふ必要もない。又自分で自分を憐む事は既に過去にしてしまつて居るから今では夫れを苦痛とはして居ないが(實際は中々さうでないとしても)、君にまで其迷惑をかけねばならぬのは心苦しい事だ。畢竟僕の仕方に足らぬ所があるのは自分はよく自覺して居ます。

夫れはどうか大目に許して置いていたゞきたい。其中僕も東京にでも出る樣になれば屹度どうかする。

信子君にも夫れはよく言つて置いて下さい。

曉子君は益元氣の由何よりの事。僕の所の坊主も鬼子の樣に父母に似ぬ體大漢で毎日惡戯のありつたけをやつて居ます。誰れかゞ「矢張り最大の傑作は自己の小兒である」と云つて歎息した。僕もそんな事を云はなきやならないかも知れない。

ロダンが肴いた相だな、祝肴。神田曰く「ロダンは屹度白樺の同人を大變な學者や詩人の集りで靑二才の團體とは思つて居ないのだらう。それから僕が洋行でもしてロダンに遇つてお前は誰だと聞かれたら、武者小路の息子の友達ですとでも云はねばなるまい」と。

僕の白樺の表紙は不便ならば沒書にして下さい。武者君からも色の加減が不安心だと云つて來た。左樣なら。

# 一九一二年

## 有島生馬氏宛――一月二十八日於札幌　〔六四〕

此間は御消息ありがたく、曉子少々病氣の處最早全快の由、大賀に候。僕の所の坊主は幸に頑の頑なるもの。此頃は手あたり次第に破壞虛無の不言實行を擅まゝに致居候には些か閉口に御座候。先達誕生日に寫し候寫眞其中御送申上候。

本年佐藤學長在職二十五年祝賀を擧行するにつき有志より記念として肖像畫を寄贈致候事に相成候由の處、例の連中なれば寫眞的の肖像を所謂名の知れた名家に囑託致度き由に御座候が、君に於而適當の人御紹介被下候儀相叶可申や、間合せくれよとの森本の依賴に御座候。こんな依賴はさぞ御困りとは存候が、若し仕事をさせてやりたしと思はれ候人はなきやと御相談申上候。御心當りも有之候はゞ其趣一寸小生迄御一報願上候。報酬は額緣送代共百二十圓と申すにて有之候由。

此間中は伊東の方に御出相成居候由、彼處は小生去三十四年入營中痔を起して入院の後二日程參候覺えのある所に御座候。何となく昔の香の分解して殘り居る所の樣心に感じ殘居候が、畫になる所の左樣に多かりしとは心付不申打過申候。御再遊にもよき獲物あられ候樣祈上候。

木の杢先生と山脇君との言論は痛快に思ひ居候。痛快に思へるは實を云へば山脇君の態度にて、木の杢先生の煩瑣なる言葉の綾の下に隱れたる破綻にはそゞろ哀れを催し申候。兎に角畫をかく人の思想が現在文士の思想に比し一歩十歩の先途にあるは文士の爲め齒がゆく畫界の爲めには嬉しく難有く存居候。ロダンも參り候由、彼の作品にいやと云ふ程接したる君等には左程の得失なかりしとするも、初面の人には神來の妙音なりしならん。君の如きも日本にて夫れを見たる感じは大に佛國にて見たりし夫れとは異りたるものなりしならんと存上候。

當地は正月に入りてより寒氣頓に加はれるを覺え申候。明日よりは積雪を犯して書生百餘人と共に七里を離れたる定山

溪に參候筈。三人につき一枚の布團を擁して眠るの苦は今夜より思ふも苦しく候。ソクラテスも此克己には一寸しかめつら致可申候。原田御母堂樣信子樣曉子によろしく。草々。
大石ロダン持歸り候由なるも未だ落手致さず。其中同人來訪のことゝ存居候。多謝。

## 木村德藏氏宛——五月二十二日於札幌　〔六五〕

其後は大變なる御無沙汰に相成候處御健康如何、少しは强健に向はれしや、切に其然らんことを祈る。臺灣はこれから堪へがたき暑さとなることゝ存上候處、當地は去る二十日に上川方面に於て七寸にあまる降雪ありと云ふ有樣なるにて春寒の模樣御推察被下度候。兄の此前の御手紙には遠の昔御答可申上筈にてあり乍ら延引申譯無之候。兄が內村氏のそれに等しき基督敎の信仰に入られしことは、生の意外とし且つ兄の所爲なるにより其貴きを見たる處に御座候。生は兄に告げる如く旣に信仰より離れたる迷羊に御座候。生は今の世は人を促がして懷疑的ならしむるの時代と信ずるものにして（自己の實驗より判斷して）其他に出づるの道を知らずと考慮する者に有之候へば、兄の入信は篤と兄の告白を聽きし上にあらざれば祝辭を呈することは出來ず候へ共兄に取りてはこは容易ならざる大飛躍なりしを思ふ時、生は兄の勇進に敬服するものに御座候。往け兄よ、兄の信仰を秉つて猛進されんことを切に望み上げ候。兄と生との進路は今後益〻離るゝことありとするも兄の誠意と僕の誠意とは常に渝らざる共通點を見出し可申候。信仰の區々たる現代にありては我々は誠意の有無によりて共通するの外なかるべく候。ヘルツエルの所謂「智慮なくして信仰することを得、信仰することなくして智慮することを得」る現代にありては我等の判斷すべき標準は「我等は如何なる點まで誠實なりや」といふことなるべく候。兄よ僕を鞭撻せよ、而して兄は更に飛躍せよ。

兄が生に讀むべく推薦されたる英國の某動物學者が著はしたりてふ「科學の聖書」とかいふ本御持合せなれば御送附を願はれまじくや、此頃に至り是非一讀したしとの念やみ難く候へば。

近頃會心の思ひを以て讀みたる書は Bergson の 'Tine and Free will' に候。佛國人の直覺的なる創意は聰慧と眞率の織り出したる抒情詩なりと存申候。

當地の同窓にはさしたる變化無御座候。唯蠣崎は尊農樂天會と申す道徳的見地より進む農會を創立したるは面白きことに候。又岩波は再歐米に派遣せらるゝことに相成候。他の連中には餘り遇ふ機會も無御座候。井口が遠友學校に金若干づつを每月寄附するやう向うから申出候、大に買へると思ひ居申候。石澤は靜坐法の行者と相成申候。

今日は是れにて御免被下度候。草々。

Baby は如何。僕の處は母ッ子になつて甘えて困る。おまけに人みしりといふものをする。自分の幼少の時が歸つたやうに思つて苦々しい。然し元氣は旺盛。天氣さへよければ一日家外でよち〳〵歩きをしてゐる。

## 有島生馬氏宛——五月二十二日於札幌　〔六六〕

又々堪へがたき試煉に遇はれ候由、度々の御苦衷御察申上候。然し兎に角君之熟慮と勘忍とにより再平調に歸りしは僕迄に滿足に存居申候。信子樣には依然完全なる全治とは申兼候由嘸かし御心痛の事と存上候。吳々も御保養專一に祈上候。

先達佐山氏來訪、上京中君に面會の期を得しとて色々伺ひ申候。快心の思致申候。創作難は藤島其他精進の畫家を襲ひて力ある沈滯の有樣にある由さこそと乍蔭存上居候。黑田氏等の一派が築き上げたる記念碑はくづされて他の新しきもの之れに代らんとするに當り、其責にあたるものが產みの苦痛忍ばざる可からざるは自然の數なるべく候。十分なる醱酵作用によりて成れる稀世の美酒が盃よりあふれ出づるの時を今より鶴首致居候。

學長の肖像は學長には存外氣に入候樣にて大に安心致候。最早訂正を乞ふの必要はなかるべく存居候。唯學長宅の室がいづれも十疊を出でざるにかの額をかくる事なれば折角之御苦心の效果も空しからんと恐れ申候。

先達來ベルグソン氏の「時と自由意志」を讀みて暗示を得る處多きを覺え申候間、共談會と云ふ神佛耶の宗教信者の會

の例時にて紹介相試み申候。英譯によりて見るも同氏の創意的なるは花の如くに候得共原文にてはさぞ力強きものと存居候。閑餘御一讀如何。

「或女」につき多大の御同情多謝々々。よかれ惡かれ兎に角僕は終局迄行く積りに御座候。一册としての出版は考へ物と存居候。あれはほんの筆ならしにて、僕はも少し自信あるものを提供し度しと存居候。自分獨得の領域を得能ふやう思はれ居候。又移轉致候(去る土曜日)。舊の住家の眞南にあたる處に御座候。化物屋敷然たる古池などある處に御座候。晝尙暗き室なども御座候。庭にはチエリー、梨、葡萄、カーランツ、グズベリーなど有之候。池にはおもだかの若葉哀れに水を挺きはじめ候。草々。

信子樣にくれ〴〵もよろしく。

## 志賀直哉氏宛——九月二日於札幌　〔六七〕

「大津順吉」拜見致候。强烈なる主觀の色彩夏の日の如く目を眩じ申候。讀了候まゝ、草々。

## 有島生馬氏夫妻宛——九月十一日於札幌　〔六八〕

此間は御端書をありがたう。此夏は大部分御留守居役で東京の腹の立つやうな暑さが身にしまれたこととお氣の毒に思つて居ます。おまけに病魔の御見舞を受けてはたまつたものにあらず。然し此頃は御回復で結構です。信子君よりの御手紙によれば箱根にも秋が來たので近々御歸京とのこと、成程さう思へば此地の寒いのも無理はあらで、時々はフランネルにあはせ羽織を引かけて尙涼しさを感じます。

作品はどうですか、此夏は出來ましたか。札幌には眞山孝治と云ふ人が來て少し描いて行きました。もがいて居るが、自然に向ふと自分と云ふものが死んでしまふので中々突破が出來ないと云つて嘆じて居ました。又君の滯歐展覽會を見た

時はドーしようかと途方に暮れ果てゝ手の出しやうもなかつたと云つて居ました。藤井と云ふ彫刻家も來た相ですが遇ひませなんだ。僕は此夏クロポトキンの著書に一通目を透して佛語に眼鼻をつけたいと思つて居ましたが、佛語は動詞の變化の處で駄目になり、研究は期待の半分も出來ませんかつた。いやになつてしまふ。然し佛語は學校が始まつてからも續けて見る積りです。本丈けが讀める樣になれば滿足します。

浦島の歌劇は未だ脱稿になりませんか。鶴首して居ます。

此間英までは頼んで置きましたが、此秋の大學の畫の展覽會には可成廣くいゝ參考品を集めて見たいと思つて居ますから、ロダンの彫刻を送つていたゞきたい。其方法は英に申してやつて置きました。又君の作品も出來るなら送つて下さるまいか。此前送つて下さつた畫と同じ大さのものがあれば額緣はあれでまにあふ譯です。開期は十月半の積り。

夫れはさうと信子君此間中又々御風邪なりし由、最早御全快とは思ふけれども、涼しくなりますから御用心を祈ります。此方は幸に此頃は平穩ですが、行光が大のあまつたれで母にばかり粘着して居るものだから母は夜二人に責められて碌々寢ることも出來ず、遂に一昨日一日たふれましたが、今日は元氣づきました。中々骨が折れて氣の毒ですが是非もない。此秋東京に出たら少しは樂が出來る樣にと祈つて居ます。僕は又明日から學究先生となつて生徒を相手にするのです。モー少しあきて來た。早々。

## 志賀直哉氏宛――十一月十九日於札幌　〔六九〕

大變遠い處に行つてしまひましたね。何んだか兄の事を想像すると哀れなやうな氣がします（馬鹿な空想だが多分「世間知らず」にC子の筆として兄が山の中の湖のやうだと書いてあつたのが頭にあるからでせう）。何んだか大變離れて心細いやうな氣がします。兄は僕の事を今までさう云ふ風に思はれた事はなかつたか。「世間知らず」はすつかり興奮して讀んでしまひました、今度は兄の集が早く見たいものです。僕は又引こして獨りで表記の小さな所にゐます。

## 有島生馬氏宛——二月二十五日於札幌　〔七〇〕

（前文缺く）或は君の外遊は此場合適當なるやも不知、大舞臺の空氣に呼吸すると申す事が（今の齡に於而）大切の事なりとも被存候。大に御熟考ものと存上候。

光風會、川村氏遺稿出版、雜誌其他にて中々御多忙に御起居の御模様先日信子君よりの手紙にて承知、結構に存上候。此度の展覽會も是非上京の上賞覽致度、今より非常に樂み居候。

安子及二兒は久留米三界迄參る事に相成申候。此春に上京の上は引連れ諸共に歸北の積りに御座候。英夫の事につきては寢ざめ眞に宜しからず、又隆三夫婦の事もあり、常に心中にわだかまりて困居候。何しろ上京の節にゆる〳〵御意見も承度存居候。

今の學校の教育なるものは益いやに相成申候。中庸と申し候事を——中庸が極動と云ふ熔爐を通過せずして成就し得るゝ容易なるものとでも思へるらしく——第一と心懸け兎角天下に事なかれかしと夫れのみを專念致居候有様は寧ろ憐れむべく候。學生全體の謀叛が起らざるが不思議な位のものに候。

此處にも春は催されて雪も著しく相とけ申候。降る雪も東京風の牡丹雪に相成申候。特殊なる春のよろこびはやがて見舞來るべきかと存申候。

信子君はおよろしき方にや。此間の寫眞は見あかぬものゝ一つ。

喜寛氏も快方なる事と遙察致居候。

原久米先生參上致し候や。草々如件。

有島生馬氏宛——五月三十一日於札幌　〔七一〕

長き假旅の折々彼處此處よりの御消息は興味多く讀みながら、君の居所常住ならざるに心ならずも其儘打過居申候處、先頃御歸京の由御消息にあづかり安心致申候。旅の末方の哀愁多かりし樣嘸々御推察申上候。實に君の世路には重々の試練相次ぎて起り、而かも其性質常に內面を犯し來るには君が心裡に人知れぬ傷を與ふる事と痛ましき限りに存上候。痛みも程々ならば其人を强くし高くすべしと雖も、過ぎたるは遂に其人を殺す。僕は君の根强く快爽なる性情に依賴し切に艱難君を玉にせむ事を祈りて止まず候。

此場合何よりも先づ定むべきは陳子君の態度を確定するにありと存申候。君が先にも云はれし如く陳子君は人心の汚濁なる方面には嘗て觸れざる純情の心を有するにて、强き世の風波に親しましむるは實に悲しき事には候得共、事情御申越しの如く切逼するに於ては斷然總ての事情を陳子君に打明けられ、同君に十二分考察と理解との餘裕とを與へ、少くとも當面の葛藤を陳子君自身の手によりて解かしむる樣なされ候事、最も合理的にして且つ正確なる過程ならんかと私考致居候が如何にや。御申越の如き難境は無解決にて續けば續く程益紛糾を極め來るべきを恐れ申候。君の家庭は君等二人の手以外には何人たるを問はず破壞の手を入れしむ可からず。そを敢てせんとするものあらば、君等二人が同心して拒絕せらるべきものかと存申候。此場合私は第一の處置として以上の事を御勸め申上度候。

君が君の藝術に對して一種の不滿を覺えられるとの報は意外の事として私の胸を打ち申候。君が漸く自己の藝術に對して地盤を得んとせらるゝ時此不安あるは私の何よりも心强く思ふ處——反語的の言葉を許せ、君の態度に於て私は君の精進を讀み得ればと信じたれば申せし處に候——には候得共、同時に君が暗澹たる心裡を察しては自分も黯然たらざるを得ず候。然し私は敢て君自己の生命を何處までも其處に繫ぎて努力奮鬪せられん事を祈り上候。こは唯君を一時に慰めんとして云ふ安價なる言葉には非ず候。君は確かと其處に不滅なるものを有するが故に申す處に候。君の努力は必ず酬いらる

べく候。躊ひ給ふべからず。ロダンの熱意とミレーの敬虔とミケランジェロの執拗とを以て進み給はれよ。君の生涯には輝きたる約束ある事を斷じて無にし給ふべきにはあらず候ぞ。私も運命を信じ居候。若し運命が私を必要とするならば私も何時か用ゐらるべき時機の來る事を信じ居候。或は用ゐられずしてやむやも知れず候。然し私の內部には一つの力を潜めつゝある事を自覺致申候。唯自己がそを愛重せざるより生ずる悔恨と運命の戲れを恐るゝの不安とが常に私を臆病ならしめ申候。君は私以上にかゝる力を自覺し居られ候筈に候。

若き力に鞭うち給はん事を切に切に祈上候。

若葉は札幌の荒野をも埋め申候。一年の中最も生命の饒かさを感ずる時、而して其生命の隣に潜む死の影を最も激しく想像し得る時期に候。林檎の花がくれにカッコーと鳴く郭公の聲は天地の空隙から漏さるゝ虛公の聲とも聞きなされ候。三人は幸に無事。草々。

五月最終日、北風吹きて急に寒濕を覺ゆ。

## 有島生馬氏夫妻宛——七月三十一日於札幌 〔七二〕

此方よりこそ永々の御無沙汰平に御海恕被成下度。然處御揃御元氣殊に曉ちやんは至而御健かにて益〻御成人、口も上手におきゝに相成候由奐々もおよろこび申上候。

段々仕事に對し神興を感ぜられ御努力の由承り何分もうれしく、西國御旅行以後の御消息にては御苦心の程茲御案申上居候處、此度の御手紙にて安心まことに此事に御座候。ロダン展覽會の事に關しても色々御盡力の由紙上などにて散見致居候。かの國民美術協會のやり方は見れば見る程變なものいやなものと存候得共、其主張の如く多少なりとも事業に成就せば功過相償ふに足るべくやと御奮鬪の程竊かに願上居候。

東京に殘置候敏行につきては毎々色々と御迷惑も御面倒も相懸け居候半と遙察罷在候處、御芳情の程奐々も御禮申上候。

去る初誕生にも御もちやなど頂戴致候由、親心よりありがたく御禮山々申上候。
此夏は如何御消光なされ候や、大磯にでも御出懸け相成候や。何しろ此頃の貴地の大暑御察申上候。此地も昨日あたりより夏らしく相成、此分にては御兩親樣御來遊被下候とも給物等の御註文なされ、障子をしめ切りて御蟄居なされる煩はなかるべく存居候。
新築は妙なぬえ式のものと相成候得共田舍の事とて新聞にまで歌はれ候事氣はづかしき極みに御座候。建具がたつかず多寒からぬ丈には相成候事と存居候。
「草の葉」御愛讀被下候由滿足此事に御座候。
御仰の、文章になり過ぎて晦澁なりとの御批評は諸方より被申候。どういふものか自分の感じて居る所を（思うて居る所にあらず）可成忠實に言ひあらはさんとすればあの樣な文章の形式によらざる可らざる樣相成候事殘念に御座候。畢竟自得未だ完からざるの致す所かと反省罷在候。
河村君の遺稿も愈御出來相成候由、序文はおもしろきものと存上候。夏休に相成、自分の暇と云ふもの少々出來申候間勉强致さんと存居候得共矢張中々出來不申、行光の奴は御相手の入る坊主にて閉口頓首に候。御兩親御出に相成候得ば又々何にも出來申さず候。こんな事では心細き至に候。家庭と申す事もある程度迄の問題なりなどつくぐ〵思ふ折も御座候。
今日はこれにて失禮致候。曉ちやんによろしく御傳言願上候。草々如件。

## 有島生馬氏夫妻宛——八月二十五日於札幌　〔七三〕

二十二日の晩身動きも出來ない程こんだ汽車に一睡の夢も殘さず函館に向ひました。二十三日五時雲の多い心細い空を見上げながら停車場を出て一寸宿屋によつて、其日の一時に着く船を待たうと思つたが、氣が落付いて居ないので尻も落

付かないで、湯の川溫泉に電車を驅つて藥湯に這入つて始めて一寢入りした。

此處は昔、父上母上行郎と四人で逗留した事のある所、六年の間に村が町になつてしまつて居る。眼に見えて變化の見えて行く植民地のさまも面白いものです。途中にはダリヤを五反步も六反步も栽培する花屋があれば、若い歷史の嫩葉とも云ふべき五稜郭への道の道標も立つてゐる。

一時に比羅夫丸が着きました。甲板に夫れらしい影もないので失望しかゝつた時に、鳥が敏を抱いてハッチから出て來た。見ると二人とも靑い病人のやうな顏をして殊に敏は頰がこけて居る。尋ね給はれた父上は先づいゝとして、最後の母上も一方ならぬ面やつれには豫想が背負なげを喰つた氣味で少しがつかりした。鳥は船に醉つて吐き、敏は風邪と蟲齒とでやつれ、母上は持病とお世話とで參られたのだ相で、大した事ではないと聞いて稍安心したものゝ、敏の腺病質に風にもあたらぬ風に見えるのには實際がつかりしました。殊に頭の上のぴこ〳〵が未だ取れないのは氣になる。御兩親にはい い加減を申して置いたが、是れは可なり失望した。

其晩は郵船の支店長の招きで一夕を谷地がしらと云ふ所の旅亭に過ごした。道學先生は何んでも十年振り位で藝者の侍る宴席に臨んだ次第だ。今まで彼等の前に出るとこつちから恥し味を感じて顏を赤くする。僕も何時のまにか冷やかな而して嗄い眼を以て彼等を眺める事が出來るやうになつて居たのには自分ながら驚いた。頰を赤くする事の段々すくなくなると云ふ事は人の生活に臨む一つの悲しい事實だと思ふ。

其夜十二時汽車に乘つた。而して二十四日の朝九時札幌に着いた。安子と行光とは停車場に居たが、行光は早速祖父樣の手を引いて人力車に同乘して家に入つた。彼の滿足は非常なものだ。但し敏行が、近くに氣味の惡いものでも來た樣にあとしざりをする。兎に角小ざつぱりする所に老親を迎へ得た事はうれしかつた。父上は獨り、母上は敏をねかしながら、僕は何か仕事をしながら、旅のつかれでぐつすり晝寢をした。安子は重いからだを抱へながら殊勝に雄々しく立働いて居る。荷物をあけて居る中から御託涘の大佛の柱木と芳舟遺稿とがあらはれた。大佛の柱木は何んと云ふ高雅なものだらう。

はたの御用心と全く調和しない程の美しいものだと思つた。芳卅遺稿は友情の香の高い記念碑だ、人の生活にあたゝか味を寄與する一種の護符だ。

陳子君から母上への御手紙は今朝屆いた。ぼんぼりに人形をかざつてお寺の中で御寺の勤行のまねをすると云ふ曉ちやんを想像すると繪を見るやうな幻像が起る。

朝天氣がよくなつたら高木の居る登別溫泉に父上と共に行くだらう。

## 原久米太郎氏宛——九月十七日於札幌　〔七四〕

八月の十日に新築家屋に引越しをする。越えて二十三日に東京より兩親が次男を連れて來札する。父に侍して彼處此處旅行する。八日に別れる。十一日より學校が始まる。十四日に高木の阿爺が御苦勞樣にも北海道くんだり迄頼まれもせぬに中等教育の視察を兼ねて講演にやつて來る。そのお伴をする。先づこんな譯で珠玉の如き日月が空しく過ぎてしまつた。兄が眞黑になつて働いて暮したのに比ぶればお恥しい次第である。

神戸の生活の單調であらん事は兼て想像はして居たが是れはあまりと云へば無調と云ふべきらしいね。然し專門に沒頭するとなつたら何處でもさうなんだらう。先づ專門家になれる人は宗教的氣分の多い人か馬鹿か何方かだ。兄が煩悶を感ずる所以は、幸か不幸かその何れのカテゴリーにも屬し得ぬと云ふ事を證據立てるものだ。先づ祝着と申さう。

札幌の洪水と申しても高が豐平の假橋が流れた程のものだ。然し鈴木庄君の所なども犯された。其隣の池田、木村も多少やられた。池田は子供が寢小便をした事と思つて其頭をどやしてゐると豈計らんや寢小便と思ひしは全くの洪水であつたとの說がある。吹田の所は家前の塀が倒れたゞけ、生の所の塀が傾いたゞけで他事なかつた。佐山、足助はさすがに市中だけにすましたものだ。吹田は目今名古屋に出張中。佐山は依例如例。足助は蝦夷富士に登つたお蔭で足を惡くしたり貧血を起したりして困つてゐるが元氣は旺盛だ。僕も亦頑健如舊だが二人の餓鬼には不尠時間を殺がれてゐる。大石は山

の中で苦闘其頂點に達してゐるらしい。其中尋ねて十分內情を尋ねて見たいと思つて居る。

近頃頓と本を讀まなくなつた。是れから然し奮闘する。年を取る每に若やいで行く覺悟で高木の阿爺などはさすがに元氣だ。十六日には午前に三時間、午後に三時間、夜一時間半の演說をやり、翌日も午前に三時間半、午後三時間半の長時間に亙りて三寸不爛の舌を振つてゐた。去年の九月から全國の中學程度の學校の視察を思ひ立つて既に一道三府三十九縣を經めぐつた相だ。

生の子供は兩人とも至て頑健だが每日の喧騷には閉口してゐる。十二月か正月には更に一人を加へる事になつてゐる。多産なりと云ふべしだ。

兄の所もお賑やかな事と思ふ。皆元氣だらうれ。

書いてゐると留め度がない。此位にして置かう。生も是れとて纒つた自足は感じない、然し希望は十分持つてゐる。而してその實現を待ちあぐんでゐる。

是れでやめよう。札幌はいよ〳〵秋になつた。朝夕は中々寒い。もう霜も來るだらう。

與さんにもよろしく。

## 足助素一氏宛——十月二十三日於札幌　〔七五〕

客はゐないだらう、あの母屋から離れた六疊の室に陣どつて默然として物思ふ兄を想像する事が出來る。

昨夜は實に會心の一夕であつた。平生心中に潜めて誰にも告げなかつた一事が兄によつて眞面目に聽取された事は僕にとつては唯ならぬよろこびだ。固より實行の疎い思慮の足らぬ僕が思ふ所であるから、夫れが兄の向上的一路に何の貢獻を爲し得たかは云ふに足らぬ程のことゝは思ふが、僕の云つた事は僕が云へばこそ無力であるけれども、僕は眞理を語りつゝあつたといふ自信から退くことは出來ないのだ。

兄の所謂「高望み」と「イージー・ゴーイング」なるものは僕と雖も兄の心中に之れあることを否定する事は出來ないが、篤と考へて見ると人間誰か夫れを持たぬものがあるだらうか、又それがどれ程兄の魂の生長をさまたげて居るだらう。僕も兄がもつと兄の魂全體に注意せられたならと思ふのだ。

兄が「高望み」と「イージー・ゴーイング」とを惡む其處には兄の魂の一部分のみが物皆と接觸し過ぎてゐる嫌はなからうか。

僕の生活は近頃非常な荒み方をしてゐる。僕は餘り外面的に忙し過ぎる。是れから又內向しようと思ふ。谷川にさしかゝつた楓樹は紅くなつてあのおんこと色の音樂をかなでてゐる事だらう。あの牧場の事務所には今でも汚いアイヌの合の子がゐるかしら。

淋しい氣の澄んだ所……兄の其處の數日が兄に best possible results を齎さん事を祈つてゐる。

## 足助素一氏宛――十月二十八日於札幌　〔七六〕

魂と自己との關係はベルグソンの意志の自由と不自由との關係に等しいと僕は信ずる。自由なる意志は純粹なる時間中にのみ存在するやうに、魂は絕對の境界、純主觀の世界にのみ儼存するし、束縛されたる意志とは空間に散漫した意志を指すものであるやうに、自己は魂の全部若くは一部分が個性と云ふ境地を出でて對人的對社會的境地に墮した處に生ずるものと見られると信ずる。

だから自己と云ふ以上は必ず對象を豫想する。魂が此世に生れ出でたる時其覺醒の曙光は自己なるものを通じて開かれるのである。卽ち魂が他の人に對し若くは社會に對して接觸した部分から魂の自覺は始まるのである。

而して自己の意識が早晚魂自身の覺醒にまで深まつて行くものである。卽ち客觀の世界に彷徨してゐた態度が純主觀の態度に納まるのである。卽ち對象の變化の爲めに常に累せられてゐた自己は遂に對象に超越して獨り生長し行く魂にまで

向上するのである。

恐らくこの向上は何れの人にも一生一度は來るものだと思ふ。少くとも死に面した瞬間、外圍の對象がその價値を失ふ事矢の如く速かなる瞬間、總ての人の衷にあつて魂は明かに目覺めぬであらうか。

自己の意識が漸く深くなつて行く時、魂の消息はやがて明かになつて行く。その時、自己が魂の事を云はんとすれば勢僕の「草の葉」のやうな表現を産んで來るのである。この時の自分とは、勿論魂の小なる一部分ではあるが、魂の全體が純主觀裡に住するに反して、魂が云はゞ突起してその觸角を現象界に挿入したその部分に相當するのである。而して魂の觸角と見るが如きその自分なるものが魂を憧憬し測量し讃美するのである。

魂は最後には全體の統一を全うする。夫れは前にも云つた。然し魂は純主觀から下つて物みな(「草の葉」の用語)に即する時がある。この時魂は分解し魂はその不合理と悲境とを哭するのである。

魂それ自身で自足せるものではあるが——想像が許されるならば——總ての魂は何等かの點で統一されてゐるらしい。魂の共鳴さういふものを我等が實際に味ふ以上、總ての魂の統一と云ふ事を豫想するはあながち空想に墮したものとは云へまいと思ふ。

凡ての魂を統一するものは何か、それを僕は大なる魂と假に云ふのだ。然しその大なる魂の僕に不必要なるは堯舜の民の堯舜が不必要なるが如くである。

魂は不時の災害に遇ひ得んとするも能はず。

一九一三年

魂の醜さを高調したのは今までの人が空想してゐた魂から區別せんが爲めだ。今までの人は魂といふものを肉體、情熱から切り放された、若し必要ならば甲の體を出て乙の體にも住みかへ得る淸淨無垢な不思議なものと思つてゐたのだ。これほど不思議な空想の所產は多くあるまい。

魂はそんなものではない。或時は肉に從つて動き或時は靈に從つて動き——此處で云ふ靈肉は勿論古い造語を新しい器に盛つたのだから方圓相容れざる所あるは承知して頂きたい——而して主觀的に生長しつゝあるもので、客觀的には罪も造るし惡念も起すものだぞと云ふ意味を高調したに過ぎないのである。

哀れなる僕は魂の經驗について是れ以上を語る事を知らぬ。僕は兄がこゝまで漕ぎつけて僕の經驗に更に推敲を打せん事を祈つてやまぬ。

香ばしい人格——それを兄が僕にあてはめることは僕の今忍びざる所だ。

札幌も今日から急に寒くなつた。カルルスの初冬が偲ばれる。此地では朝鮮人の人參飴賣りが白布張りの屋臺をかついで市中を徘徊する。それが物の怪のやうに札幌の秋を促がして急ぎ足に冬にすべり込ました樣に思ふ。

中根は二日前家を出て今夜まで歸つて來ない。僕はもだえながらぢつとその歸るのを待つてゐる、放蕩息子の歸來を待つ老父ほどの寛容な心を以て。是れは僕の近頃の內部生活の大出來だ。二兒共に頑健、母も亦然り。

兄の信仰の曙光の上に祝福あれ。

溫泉が氣に入つてよかつた。

## 一九一四年

### 足助素一氏宛――一月七日於札幌　〔七七〕

とう〱兄は行つてしまつたな。札幌は淋しくなつた。今朝は船の上で北海道に別れを告げてゐる事だらう。

### 足助素一氏宛――一月十日於札幌　〔七八〕

愈〻東京に着いた相だね。途中で安眠が出來たのは重疊。札幌では中根が殘して置いた遺書が机の中から出て來たので大騷ぎが持上り親許にも遺書風のものが發見せられたとの事で、捨て置く譯にも行かず、その爲めに沒頭してゐたが、今日東京で見つかつたとの電報を得て一先重荷を下ろした處だ。

ドーも兄が去つてから氣がゆるんだ樣な氣がする。店に行つて見ると鈴木先生と岡久が店頭の整理をしてゐるが、兄が見えないので店の魂がぬけがらになつた樣だ。

東京は一體全體どうだ。少し精神に變化があつたか、希望が湧いたか、行先によいヒントを得たか、近澄先生は如何であらう――明日行くんだな――ドーか兄が躍り上る樣な光明に接せんことを祈つてゐる。兄位掘下げて行つて金の茶釜を掘りあてぬ筈はないと思ふ。

御親父の事は承知した。

「お末の死」が氣に入つて嬉しかつた。花袋がかの作を見て災厄といふものゝ不思議な道行が自然に暗示せられて居ると云つてくれたのは嬉しい評の一つだと思つた。僕はあの晩あれを書き續けて朝の三時頃に恐ろしい樣な淋しさに襲はれてハンケチがずぶ濡れになる程すゝり泣いた。隣に寢てゐる大石に氣取られはしまいかと思つて心配した。それがあの作を

あれ丈けにしてくれたのだと思つてゐる。
札幌は此頃好晴が續いて居る。弟の病氣も癒え、行坊主の熱も退いて稍小康を得て居る。然し今年は兄にも僕にも厄年ではないか。困つたものだな。然しそれも面白からう。
今行坊主が眼をさまして泣いて居る。それを聞くと氣がいら〳〵して思ふ事がまとまらぬ。何れ又其中。草々。

## 寺田貞次氏宛――月日不明　〔七九〕

拜啓。本日は貴舍在舍の橋本一郞氏來訪の折同氏に託し一札呈上致置候處、果して右が御手許に達候や否や疑問に御座候間、重複は不厭、また前便には申上候儀さし控へ置候件にも倂せて玆に得貴意候段御了察奉願候。
實は當地大學豫科第二年に中根幸雄と申すもの有之、去年四月頃より酒色に親しむ事を覺え、漸く甚しく、暑中休暇はじめには國許より御親父も來られ一方ならぬ心配せられ候樣の事にて、立腹の餘り退學せしめて他の業務に就かしめんとせられたる程に候處、本人が悔悟を誓ひ候爲め再び就學せしむる事となり、九月開校以來は小生宅に於て世話致候都合に相成居候。
偖色々本人放蕩の誘因等相尋ね申候處、貴舍橋本氏は同國のよしみを以て兼て別懇に致居屢々缺席を共にしたる形迹歷然たるもの有之候につき、兩人共若氣の事なれば不爲とならぬ樣此際斷然絕交致候樣中根まで申渡候次第に御座候。
然處去る十月二十八日(?)橋本氏出札中根を訪れ外出、何處に行くとも申出でず三日間歸宅不仕其爲め痛心罷在候處、三日目に飄然歸宅、登別に參候結果旅費に窮し橋本氏が一人先づ歸來して中根の洋服を典し中根も纔に歸札する事を得候由申出候。其後も兩人の間には常に書信の往復又は個人的往復有之候樣子に御座候處、此度冬季休暇に際し中根を一旦歸國せしめ親父に面會の上詫を入れ、借金等も返濟致候上にて更に向上の一路を辿り候樣申聞け、先月二十八日夜當地出發爲致申候。

然處其後國許より何等の消息無之稍不安を懷き居候際中根の交遊する一學生訪ね參り、去二十九日橋本氏より飛電ありて中根が旅費を遺失したるにより調べくれよとの依賴有之候由申出候間奇怪に存じ、昨日早速電報を以て國許に紹介致候處當人未着の返電に接し驚き居候處に本日正午あたりに橋本氏出札拙宅來訪の上、中根は二十八日小樽の宿屋に一泊翌二十九日橋本氏に電話にて來宿を請ひ旅金遺失の一什を語りたれば橋本氏はある限りの衣類を典し七圓を得て是れを中根に渡し中根は同日再び汽車を以て歸途に登候由、而して其際中根は小生方に預りある衣類を橋本氏に着用致くれ候樣申殘候由にてその衣類を借用に來れりとの事に御座候。

小生はそれに對し、中根より書面と其他證據となるべきものでも有之候はゞ格別、一面の識に過ぎざるものに預品を渡し候事は絕對に相成がたき由相答申候。

去る二十五日小生わざ〳〵出樽し、中根の洋服の質札をもらひ受候際、橋本君には既に洋服はうけ出して返濟すべき筈の處、故鄕よりの送金は盡く舍監部に來り、舍監に於て先づ學校の收入を控除せられ候上、小遣は手許に受取る順序の處未だ其勘定を不得候間其中得次第返濟可致と申出られ候事と記憶致候間、本日中根の衣類融通致兼候につきては、小生より舍監にあて手紙さし上げ右金額の勘定君の分だけ特別に早く致され候樣願出候べしと申し、先便相認め候次第に御座候。

右の學資金の事は橋本氏の申され候通事實に御座候や。小生その事を申せし時、同氏の顏色は甚しき不安の色浮び候を認め申候が、若しこの事も虛構なりとすれば、此兩人は一再ならず虛構を爲しつゝあるものに御座候。現に登別に參候と申すも全くの虛事にして實は札幌に於て、服を典し三日流連飮みあかせしものなる事は疑ひなき事の樣總てを綜合して存ぜられ申候。旁橋本氏と申す人物は、中々油斷のならぬ學生と存ぜられ候間此度の事件概略申述べ御參考に供し候と共に學資金の事事實に御座候はゞ特別に小遣金を同氏に御渡相成樣被致度御依賴申上度、何分中根の所在不明の爲め事の眞相を捕捉しがたく、其中判然致候上にて橋本氏に融通願居候事確實なれば早速返濟の手續に及ばせ可申候間可然御了察奉願

候。

尙橋本氏は本日は中根の爲め犧牲となり居るものなりと申され候得共以前には少くとも十圓は中根より借金致居られ候樣申居られ候　（以下缺）

## 足助素一氏宛――一月二十二日於札幌　〔八〇〕

淸見寺と聞けばなつかしい幼年の記憶が浮び上る。父が虎列羅をやつて豫後の爲めに母と共に旅行をした時、僕は十三程の少年として夏休暇の終ると共に二人の跡を此地に逐うた。たしか旅館は阪口屋と云ふのだと覺えて居る。ある夕方東京からの客を迎へる爲めに停車場に行つてゐたら、田舍の爺さんが切られた財布の緖を頭からだらりと下げて列車を飛出して來て何か訴へると、停車場づきの便所に潜んでゐた「スリ」が苦もなく驛員の手で捕へられて踏まれたり蹴られたりするのをさすがに氣の毒だと思つて見た事も、阪口屋の二階の四角になつた窓から興津の山を眺めながら雨の降る眞晝ふと泣き出して母と書生が色々と慰めてくれたのだがどうしても泣きやむことが出來なかつたことだの、淸見寺の奧書院で宵嵐の中に和尙から欸珂の術といふ今の靜坐法のやうな長壽の法を聽いたことだのが暗い記憶の中から斷片的の閃きとなつて湧き上つて來る。

其處に兄はさすらつてゐるのだな。

兎に角に會心の師家を見出したと云ふことは、深く〳〵僕を安神させた。若しそれが不可能であつた場合の兄を想像すると、僕は隨分困るやうな心地になる。固より兄の思想が彼の考へ方の調子と和鳴することはあるまいが、彼の心持ちに兄が同情することが出來、彼も亦兄の心持ちを受け入れると云ふことならば、其內に又會心の一茶番も打てようと云ふものだ。まだ頭が惡いとは心細いが、あの海とあの山との間に挾まつてゐたら、兄の頑固頭もにこ〳〵し出さずには居られまい。

僕は死にはしなかつた。不圖した事から蟯蟲といふ蟲が肛門の近所に巣喰つてゐることが判つたので、それを殺す爲めに佐山國手を煩はして藥を盛つてもらつたのは確かだ。然し藥は盛り過ぎをされた事はない、盛り足らずをされて今だに蟲が屛息しないと云ふ迄だ。僕の命に別條はたしかにないが同時に病源も頗る頑健だ。こゝいらが佐山國手の眞面目と云ふ所だらう。兄の夢では先生少し買ひ被られて居るといふものだ呵々。

偖て僕の所の放蕩兒も昨日歸つて來た、いやはやと父なる人から云つて來たが先づ其所等が彼を評する適語だらう。今兎に角僕の所に居る。弟は既に昨夜病が治つて發足した。

松尾も昨朝歸札した。本屋の方も其中鈴木との授受をするだらう。鈴木、岡久は勉強してやつてゐてくれる。その外夜學校校外生の誰れ彼れ、夜學校教師の三人も、時々店に來てゐたやうだ。この間例の肉屋から肉を取つて鈴木、岡久三人で夕飯をやつた。鈴木は足助先生が札幌を去つた時は悲し（以上二十日）かつたが、先生は、自分達の行くべき道を一歩先に瀨ぶみして吳れて居ると思ふと非常にうれしくつてたまらないと本當に嬉し相だつた。（以上二十一日朝）

今月も一つ白樺に書かうと思つてゐたが成功しなかつた。どうも思うた程本も讀めず勉強も出來ないのが殘念だ。こんな事では老耄してしまふ。

此間橋浦が話しに來て少し話した。話頭は兄との話の外には出なかつた。會つて話して心持がいゝ。

何しろ話相手がなくなつてしまつたので困る。二十一日にあの「淋し」と書いた端書が屆いた。それは一片の短書であるが、僕の手紙の中には保存して置きたい程深く思はせる片信であつた。實に兄の心をよく思ひやることが出來る。

自重し給へ。

御親父から手紙が來て、委しいことを書いてよこせとのことであつた。宜敷書いて上げるからそんなことに心を煩はさすに置き給へ。干柿も頂戴した。

處々黑地の見えてゐた札幌も昨夜しつかり降つたので冬らしい光景になつた。今學校の窓からさし覗くと、夕日にはえて何んとも云へぬ美しさだ。興津の春も羨ましいが、此雪は中々捨てられない。

餘り長くなるから今日は是れで失敬する。（以上二十二日午後三時）

## 寺田貞次氏宛――一月二十三日於札幌　〔八一〕

復啓。先達は勝手次第なる御願申上候處以御好意御聞取被下候のみならず却而御鄭重なる御挨拶に接し汗顔實に此事に御座候。決して橋本氏のみを責めたる意にて申上候儀には無之、小生監督罷在候中根にも却て橋本氏を陷れたる事なども有之候事と危惧罷在候。何しろあゝ云ふ連中の擧動なれば一寸常識にては考へがたき事のみ多く誠に閉口罷在候段御諒察奉願候。中根は去月二十八日故鄕烏山への歸途姿を隱し父母に非常なる心痛を釀し、親父上京して漸く發見、今月十三日烏山出發の由申來候間十五日には着札の筈に待居候處歸來らず。放擲し置候處、十七日突然在京都の母上より弟病氣の飛電有之候爲め捨ても置かれず、一學生を小樽に走らし貴校を尋ねさせ候處、橋本氏は十五日頃より寄宿舍を無斷に出でたるまゝ歸舍せずとの事にて、要領を得ず其儘歸札仕候由の處、恰もその夜中根も小樽より歸札せし由にて翌十八日歸宅致候。小生方に於ては二十七日當地に着の筈なる親父に事情打開け候て、一先歸鄕致候心組に御座候間事荒立てず其儘に致置候。

然處昨日當大學賄方にて中根を世話致居候ものに小樽なる橋本氏より電話有之、中根の爲めに衣類まで入質して困却し居れば相談の爲め上京するとの申込有之候由承及候故、昨夕貴書接手の次第も有之早速今朝相尋ね申候處、昨日は遂に來札せざりし由に御座候故、多分は矢張り小樽に居るものかと推察被致候。尙同人札幌に來候樣の事もあらば、前陳賄方よ

り申出候様依頼致置候間其節は早速得貴意可申候。此度は多分中根の方より橋本氏に色々御迷惑をかけ居るにはあらずやと心許なく存居候處、若左様の事も有之候半には何卒御許願上度此段不取敢御返事のみ。早々。

## 志賀直哉氏宛——一月二十五日於札幌　〔八二〕

永い間の葛藤が遂に圓滿の解決に來た事は嘸快い事でせう。是れから兄の仕事に自由が伴つて大きな發展が遂げられる事とお喜び申します。

この間の「范の犯罪」はすつかり感心してしまひました。あれ丈強い主觀の根柢のある客觀的敍述が成立てばあれで最も自然な而して眞正な意味の象徴的作品が出來上つたと云ふものです。私は昨日モー一度あれを讀み返してモー一度感心しました。私もアヽ云ふ symbolism に到達したいと思つてゐます。

大井町は大森に行く途中かと記憶して居ますがはつきりした見當はつきません。田舍には思ひもかけぬ程さつぱりした家並のいゝ處に生垣をめぐらされた新しい一構へと云ふやうな感じがします。門札は兎に角書いて投函しましたが全く氣に入りません。その中こつちで札をけづらしてモー一度試みて見る積りです。

田舍の教師をして居てもちよい〳〵思ひもかけぬ刺戟に遇ひます。この間一人の友がなけなしの所有物を捨てゝしまつて雲水に上りました。私はそれを鎌倉の兄の叔父さんに紹介しました。然しその番地も名（姓は知つてますが）も判らなかつたので尋ねあてなかつた相です。

子供が三人になりました。お蔭で讀書が滅相出來ません。

「草の葉」は何だか譯が判らなかつたでせうね。それとも讀みませんでしたか。あの中には然し私のこの頃の感想が可なり懸命に投げ込んであります。私の進境はあれ丈けの事です。

今日は冬に似合はない大雨です。一月の半にこんな事は希有と云ふのでせう。冬の眞中に雨の音を聞くとはかない氣が

します。今室の中は暗くなつて陰鬱です。すぐひねれる電燈をひねらずに書き續けて居ます。この陰鬱な手紙は兄の新しい明るい室に影のやうに落ちるでせう。

今ひねつて見ました。矢張淋しい。

## 足助素一氏宛――一月二十五日於札幌　〔八三〕

昨日は電報で驚かされてそれ程長く手紙を書かなかつたかと思つて居る、と今日手紙が着いてそれにも僕が通信を怠つて居る事が書いてあるので大に面喰つた。

實際この數日は中根の事で多忙を極めたが明日か明後日は父なる人も愈〻來るから引渡を了する積りだ。中根には全く失望した。自分の自惚れの程が今更顧みられて一寸恥しい。

餘程淋しい様子だね。モ少し腰を落付けてかゝらなければ辛抱は出來相もないな。老師とはどんな話をして居るのだ。唯話が面白いといふ丈けか。それとも心底に徹する所があるのか。若し單に面白いといふ通り一遍の事なら尻に根が生えない中に帆をかけるに如くはなしだと思ふ。

興津は細長い町でその眞中を縱に鐵道が通つて居るから汽車の通る度每やかましかつたと記憶して居る。無人の境にゐて見ると兄も仲々の煩惱家だと云ふことが知れるね。話相手のないのを喞つ所から見ると中々山端(ヤマハナ)にも引込んではゐられ相はないぢやないか。

今やう〳〵の思ひで又御父上にこの紙で八枚程の手紙を書いた。こんなむづかしい手紙は近頃書いたことがない。向うからの手紙は一寸涙を誘ふやうなものだつた。僕は、兄が今まで兄の本性に背いた生活をしてゐたが今度稍それにかなつた生活が出來るやうになつたのだから、悲しむよりは寧ろ喜んで上げる方がいゝと云ふやうな事を臆面もなく書いて上げた。悧れて居られるかも知れない。

干柿も澤山送つて來て下さつた。毎々大變おいしく頂戴してゐる。

松尾が歸つて來た。歸省の首尾は上々らしい。二三年は何處で何をしてもいゝと云ふ許可を得て來た。松尾が何時か兄と僕と安子との三人の前で云ひたいと云つてゐたことの內容を聞いたら、松岡と自炊してゐた頃誘はれて藝者を呼ぶ席に臨んだことが四五度あつたといふことを自白する爲めであつたと云ふことだ。眞面目でそれを云つてゐたからそれならいいぢやないかと云つて置いた。

獨立社には橋本を入れることに矢張りなつた。

今夜はリンコルン會だ。この晩には何時でも兄を miss することが殊に強い。雨がどしや降りに降つて不快を極める日だ。

河內の父が死んだ相だね。破天荒の弔文を書いてやつた。實際僕にはさう悲しく思へないから仕方がない。

兄は感想（朋友に話さんと思ふこと）を書いてゐるだらうね。

行光の滿三歳の時寫眞を寫したから送る。マグネシヤムを豫想した結果僕の眼はあんなになつた。彼等二人はそんなことを知らないのでハツキリしてゐる。

安子からもよろしく。

### 足助素一氏宛――二月六日於札幌　〔八四〕

二月一日の手紙は受取つて置きながら又無沙汰した。

ドーも月日の經つのが早いのには驚き入る。

モー阪上老師は歸つて來られたか。其後の兄の進境は如何。少し高利貸の催促めくが何んだか兄の內部の鹽梅が知り度くていけない。

僕の所では五人共先づ無事だ。先づといふのは行、敏が矢張り眼で病院通ひをしてゐるのと、僕が蟯蟲の多寡を見る積りで大便を見たら腸類似のものゝ附着してゐることを發見したので、佐山氏に圖ると痔ろうかも知れないと云ふので今日病院でトウ〳〵尻をのぞかれることになつた。而してその結果痔ろうでないといふことだけは確かまつたが、肉が表皮を破つて露出してゐるから硝酸銀で燒くために是れから三四日通はねばならぬとのことだ。我れながら淺ましい第三等病をわづらひ出したものだ(第三帝國の類か呵々)。然し是れで尻の工合がさつぱりすれば積日の不快は一掃されるのだと思ふとやゝ頼母しい。

兄の獨立社への傳言は傳へて置いた。新聞は社から直接に送るとのこと。文明協會は先月は間違ひなく送つたとのこと。それから夜具類は兄が歸つたら新に造る積りで使用したらよからうと橋本が使つた相だがそれは全部此方に取よせて綺麗にして置く。兄の荷物はソー云つてあるが未だ持つて來ぬけれども其中に來ることゝ思ふ。林檎は後れて失敬したが明日送ります。六號は或はいゝのがないかも知れないと思ふ。それから白樺を發送する。

この間田中と小熊がやつて來たので一寸會心の話をした。科學といふものゝ領分をいくらか確め得た樣に思ふ。小樽新聞に文藝欄といふものが出來てその寄稿を頼まれたから何か書いて見る積りだ。載つたら笑草に送るから讀んで見てくれ給へ。第二月曜と第四月曜だ。

河内は兄の所によらなかつた相だね。河内と云へば水産の三年とは又喧嘩をやつた。要するに僕が辛辣な點を第一學期に與へたからだ。今日などは四十幾人の中二十人位しか出席しなかつた。その代り出る連中は喧嘩腰でやつて來るから授業が眞劍に出來て面白い。結局僕は不親切な事をしてゐるのではないのだから僕はその級に出て行くのが面白い。ヒヨツトするとモツトひどい結果が其中に來るかも知れないがそれも面白いと思うて平氣で居る。

河内から手紙が來た。それに書いてある兄に對する同情の言葉は彼の兄に送つた手紙とは反對に頗る適切な同情が動いて居る。矢張り彼は兄を知れるものだと思つた。卯之町の方は行き惱んで居るらしいね。

段々自分が表面に浮み出て來る、それが面白い。

## 寺田貞次氏宛——二月六日於札幌　〔八五〕

拜呈。先般橋本一郎氏處分に關し御尊書被賜難有拜受披見仕候處其儘疎懶に打過申候段平に御海恕奉願候。
此度橋本氏處分につきては中根の件大に力ある也と本人參られ候て申聞有之候處、實は其際中根の行爲に關してもけしからぬ件々發見致候際とて甚だ心苦しく存候處に御座候。然處同人親父參られ色々と打合せの結果此度願出退學致候事に相成多分は京都同志社に入學致候樣相成候半かと心得申候。小生の不敏よりかゝる生徒を出し累を他にまで及ぼし候段汗顏の至に不堪平に御寛容の程願上候。
尙是れを御緣に自然御出札も有之候際は御立寄御休息被下度、先は右乍遲延經過報告旁御挨拶のみ。草々如件。

## 有島生馬氏宛——二月十七日　〔八六〕

三笠の展覽會も最早閉會に相成候半。鑑賞者は好し少數なりしとするも君の天稟の發露を眞に appreciate せるものゝ尠なからざりしを信じてその結果をおよろこび申上候。然し團體にならざれば勢力なきこの國の習ひとして個人展覽會には君が期待以上の一般注意のそゝがれし事尠なかりしやに察上候。かくの如き民衆を相手に美の建設に苦勞せざる可からざる君等の心の不平は乍憚重々御推察申上候。
「心を起さんとするものは身を起さゞる可からず」との御覺悟潔き事に存上候。小生も其心は忘却致すまじく候。唯今は身を起し得可き機會の熟さん事を翹望致居候。四十にならば如何なる障礙も排して起ち可申候。
熱海よりの音信によれば信子さま曉ちやん打連れて御保養かたがた御出の由オヂーさまオバアさま無上の御滿足と存上候。信子さまにも彼處の氣候はよろしかるべく存上候。折角御攝養の程くれぐれも念上候。

御依賴申上候幕は三十圓位にて出來上り候はゞ幸に御座候。模樣はゴシック處にて草木願上度候。

この間の曉ちやんの寫眞は完全なる少女の容貌とか申候。多少燒け氣味には候得共他人に對しては自慢の程にて、その當座はよく取出して相見せ申候。如何に美しき乙女に育つらんと樂しみ待たれ申候。當方の三人は頗る健在なれども木强と云ふ奴にて家庭の中に優しみは加はり不申、終日喧嘩と頑泣の聲を聞き申候。第三人目の如きは全く放擲されて自然の如く健かに育ち居候。此頃は何か聲らしきものを出す樣に相成候て人の愛心を牽きそめ申候。

今年は小生の厄年の由、何しろ正月以來よき事はなく、行郎が來れば直ぐ病氣、滯在中には家の書生の事にて苦勞千萬、今度はもう一人の書生が猩紅熱にて入院、家內は大消毒、小生は痔にて時々困り居候樣の有樣にて何んとなく油が十分に行き渡らぬ感有之候。一生の一時期到來かと深く自誡致居候。

## 足助素一氏宛――二月二十四日於札幌　〔八七〕

今夜八時過平賀と階上の書齋で話して居ると兄からの電報を受取つた。平賀は倉皇歸り去つた。不審に思つて開封して見れば思ひもよらぬ凶報に先づ驚かされた。

電文の「マニアワズ」に兄の恨みの凡てが言ひ現はされて居る事を見る。是れが普通の場合であつたならば兄は寧ろこの老爺の他界を自然の定命と祝福したであらうに、今この際兄の心を領する唯一人を亡はれたる兄の心中は唯々推察に餘る。

兄の發心がこの度のことの原因の幾分を成さうが成すまいが、兄は勇敢にこの愛着の絆を心靜かに他界に送る用意が肝要だ。

心の據所を一つ失つた兄の孤獨を思はぬではないが、又同時に兄が勇猛心を振ひ起すべき機緣の一つが熟したとも云へよう。

何を云つて居るのか自分でもはつきり判らない。然し事の次第を追うて見ると、兄の上には兄を玉成すべき運命が臨んで居るやうに思ふ。悲しめ、然し悔ゆること勿れ。運命は斯くの如くして兄を最善に導きつゝある。

モー少し心が落付いてから又書く。

## 河野象子氏宛――三月十一日於札幌　〔八八〕

久しく御無沙汰申上居候處先達は福士への補助金御送付被下、本人より小生宛之受領證差出させ置申候間既に御落手被下候事と存上候。難有御禮申上候。

此頃は御病氣如何に被爲入候や。追々好時節とも相成候得ば自然御快適と察上候。拙方一同は幸無事健在に御座候間幸に御放念奉願候。

遠友夜學校生徒にして無智なる母之犧牲となり藝妓に賣られ候もの有之、未だ十五歳に過ぎざるに早一人前之妓として客に侍する不仕合せ憐むにたへざる事に御座候が、性質無邪氣に頭もさして鈍からず候間尙よく研究の上救ひ出さんかと存居候處、自由に致させ候上はその處置に窮し居候處、好き手段は無御座ものに候半か。拙宅は唯今學生二人をあづかり居候間同居面白からざるのみならず、札幌に置き候は不利益と存候が御一考なし下され候はゞ幸甚に御座候。該女は遂一週間程前より始めて座敷に出候ものに有之未だ墮落は致し居らざる事と存ぜられ候。

先は右内祕に御相談申上度。時下折角御自愛專一に奉祈候。拜具。

## 足助素一氏宛――三月十四日於札幌　〔八九〕

二度に書かれた兄の詳書は生の聞かんとする所の凡てであつたことを感謝する。あれで僕はすつかり安神してしまつた。而して兄が個性の最も深奥な部分で動いて居ることを思つて唯羨ましく思ふ。モー僕は兄の處置に對して何等の杞憂を抱

くことをしない。四面楚歌の裡に置かれた兄が「勇者は獨り立つ時最も强し」と云つたシラーの言葉を實現しつゝあるのを齒ぎれのいゝ大事件として瞻望してゐる。

人の情を以て動くことを知らぬ人の行爲の醜さかな。かくの如き人間こそは生きながらにして畜生道を行くものと云へよう。兄は永井に人間の如く生くることは如何なるものであるかを思ひ知らせることによりて至大の功績を施すことが出來る。

然しこの尖兵の次に控へたる本衜こそは曲者だと思ふが、兄の態度で進むならば若し彼に後めたい事のある限り彼等を顏色なからしむることは必然である。唯恐るゝ所は兄の直情徑行が彼等に乘ずるの機を與へんかの一事である。然し是れとても兄が皓々の心を淀ますことが出來ないとすれば要するに兄から見れば極めて皮相的な手傷を兄に與へ得るに過ぎまい。然し兎にも角にも彼等をしてその狐智を振ふの餘地をも與へざる丈けの冷靜なる準備も必要だらう。何事の方面に於てであれ彼等の意を通さしむるは本意ではない。

兄の今後の方針は自ら又熟考の期がその中に來ると思ふから今は僕の考を逃べないで置く。

第二番目の手紙は殊に僕には强く深く響いた。こんな緊張した心構へになることによつてのみ人は生き得るのだと思つた。僕に出來得ることは何んでもするから何卒言ひつけてくれ給へ。然し今度のことは僕には手を出す餘地は無さ相だ。而して兄獨り働くといふことに意味があり相だ。

兄が札幌を去るの動機を與へたものには僕が可なり大なる力として存在してゐると思ふ。この度の結果がそのことによつて大分紛糾せられたのは誠に遺憾の至りだ。然し是れによつて却て根本的の解決に達し得るとも云へると思ふ。さうぢやないか。

兄が亡父と別居された理由も僕には十分の同情を以て、うなづかれる。僕自身の行爲が裏書されたやうに思ふ。

伽藍のやうな大きな家に段々淋しくなりまさる喪に居りながら、一面死の彼方を思ひ他面實生活の葛藤を斷たんとする

兄を想像すると一寸日本の現在にあり得ることゝは思はれぬやうな氣がする。イブセンの藝術が髣髴として過眼する。

## 足助素一氏宛――三月二十二日於札幌　〔九〇〕

あの長い手紙をもらつてから早速出した手紙がまだ屆かないとは不思議だ。實際往復に長くかゝるのは厭なものだ。もう少し近くつてくれるといゝんだけれども。

馬越氏の返事が割合にわかつてゐるとは何よりだ。どうぞ是れ以上兄の心を焦立たせることなしに相當の解決もつく樣にと切に祈つて居る。實印と借證文とは遂に出て來なかつたか。然し馬越氏はまさかそんなことで苦情を申立てる程の人ぢやあるまい。

長文は早速河内兄の方に送つて置いた。兄の御手紙によれば末光が校長の座に就くやうになつた由、兄の思はく通りに行つた譯だね。

大學では又續け樣に二人死んだ。一人は林科二年の衣笠、他は同級の村井義一。衣笠の方はよくは知らないが村井義一は最も面白い人間の一人だと僕が竊に思つてゐた男だ。後事を委細書き認めた遺書を朝三時半に殘して、その朝六時に下女が其家に行つた時には袴をはいて仰臥したまゝ心臟痲痺で往生を遂げてゐた相だ。孤獨寡言鄉黨にも學徒にも曾て友を作らなかつた彼、醫學を無視して一度風邪の時藥を飮んだきり醫師の助を求めなかつた彼、寒中決して下着を用ゐなかつた彼、香を薰じて夜四更に及ぶこと屢〻なりし彼、獨逸語の文學百數十册英語の文學數十册佛語のもの十數册ラテン語の書籍若干を讀破して知らん顏をしてゐた彼、死ぬ四五日前の日記に死ぬ時は袴を着けて死ぬと斷つて置いた彼、角帽と金釦を極端にきらつた彼、齡二十四歲。

兄が雲水に出ると聞いた時彼は獨立社もそれ程えらくなつたかとひどく感心した相な。知己は妙な所に居るものだ。

ビリケンの將來についてては當人からも手紙が來たと思ふが、佐山の診斷では矢張激働には向かぬ相だから、工作場の木

工で型をやる方にでも採用してもらつたらと思つてゐる。兩親は彼を天理教の教師に養成する義務があるのだと云つてるが當人は一向乘氣がないらしい。

氣候が惡いせゐか――それでも雪は大分融けた。去年の靑い草の雪に埋もれたのがざれた綠色に地面に現はれ出た。煙筒には春のらしい煙が立つ――病人が多くて困る。今は試驗最中だが驚く程缺席者がある。然し僕の所は女中の末に至るまで健全だ。兵藤も立つて國に歸つた。

今月は白樺に短いものを書いたから、來月出たら送る。今度のものでは生地が出てしまつた。あれを書いてしまつたら泣きたくなつた。

## 足助素一氏宛――三月二十九日於札幌　〔九一〕

此間は地頭の兄の生活幷に其周圍、今朝は馬越氏との交渉の結果の御通信を受けて滿足と喜びとを同時に感じた。さすがに馬越氏は世の中から苦勞人と呼ばれて居る人だけあつたと見えるね。僕は兄を通してと及び其肖像とを見て彼を解釋し、欲情の强い人情の薄い戰鬪力の旺盛な實業家とのみ判斷してゐたが、それが案外の涙を藏してゐたといふことは案外の拾ひ物だ。兄の第一印象も僕の空想的印象も一寸此處に戶迷ひと云ふ體だね。然しこんな戶迷ひなら結構至極だ。無かるべしと思ふ所によき物を見出す喜びは凡そ天下無雙だらう。

三百金もたしかに落手した。早速ありがたう。

兄の覗るやうな描寫になる兄の周圍は僕をして目覩する如く兄を偲ばしめる。兄がかゝる境遇にあつて果して永く滿足して住み得るかと云ふことが僕には一寸今不審に思へる。然し若し兄が彼等の纒憬と惡癖と頑迷とを許容して靜かに實質多き生活を營む傍、村人に刺戟を與へて永い年月の間に村の改善を爲すの樂しみを感じ得るなら、兄の今にとつては先づ是れ程身を入れていゝ働き場所は他にないのではないかと僕は思ふ。僕も四十までは今の境遇に我慢するが、その年にな

つたら縱令親父存命と雖も狩太に引込み度いと思つて居る。僕は段々と心底からその必要と樂しみとを感じて來て居る。僕は謹んで內部から物の靜かに成熟し結果するのを待つてゐる。もう我々も所謂 Life Work に落付くべき時機が到來したと思ふ。地頭なら第一兄の健康に申分がないだらう。然しこの問題は大分大きい、尙よく考へさしてくれ給へ。

昨夜は奬勵會があつた。目立つたことは卒業生の來會の少なかつたこと(今度の卒業生にあらず)、父兄の來賓の非常に多かつたことだ。芹川が長々と一年の報告をし、加藤が式辭を述べ、僕が奬勵の辭をやつた(新島、鈴木、高杉皆ことわり)。一生の中この世の中に生れた時より少しでもいゝからよくして死なうではないかと云つた。

式が全部濟んで卒業生の懇親會に移つたのは十時、それがしまつたのは正に十二時二十分前だつた。席上兄を思ふのあまり一同が寄書きをしたのは兄の手許に屆いたらう。例の各自の志望を述べ合つた。卒業生は男五人女三人、その中で大森と云ふ男が一寸發展し相だ。

今日はおだやかな日曜だ。試驗の點數記入も濟んでやゝ閑を得た。今は獨立社の看板書きをやつて居る。あの上等の方の看板をけづり直してそれに油繪で裏表に描いて居る。一片の木でも描き始めると愛着が出てその木を珠のやうに綺麗なものにしよう、木から珠を造り上げようといふ藝術的創造の氣分が潮のやうに湧き上る。兄が五年奮鬪の記念碑を造るのだ。兄の上に祝福あれ祝福あれ。

昨夜おそかつたのと夜中何かやかましかつた行坊主を世話し通したので、今朝は眼が赤くなつて動もするとセンチメンタルになりたがる。

三月二十九日朝　晴れ渡りたる空の色を例の北向の窓より眺めやりながら。

## 足助素一氏宛——四月十一日於札幌　(九二)

何よりも氣にかゝるのは兄の健康が札幌のそれに逆戻りをしたと云ふことだ。また激甚な頭痛にさいなまれて居るのか。

無苦しからう。今頃は屹度色々なる回想が湧き來つて兄を苦しめることが多いと思ふのに、それに病氣まで手傳つてはたまるまい。小康にても得られんことを祈つてゐる。

それにしても兄の所は櫻花も既に散り盡してやがて若葉に杜鵑もなく時となるのだらう。然し此間の通信によればそんな所にも雪が降つたさうだね。何といふ天變地異だらう。昔から國が墮落すると天地にも凶徴があると云ふのは此等の消息か知らんと薄氣味惡く考へられることもある。實際神も惡魔も一所になつて何か希有のことを企てゝ居るやうにも見えるではないか。札幌も今日は朝來すさまじい西北の風で宛ら冬に戻つてしまつた。僕は今ストーブの側に身を寄せて此手紙を書いて居る仕儀だ。兄でもゐたら最も不快な日として此日を記憶するだらうと思ふ。

兄の向後の方針について兄が又鋭利な自己呵責をやつて居る樣子がありありと眼に見える。僕も兄の性癖と事業の性質生活の境遇等を考へて見ると眞に如何なる道が兄の擇ぶべき道であるかを知るに苦しむ――が此場合矢張り故鄕にあつて一先づ產を治するの方針に出るのが得策ではないかと考へられる。丈夫な正直な作男の一人も抱へて置けば兄はさう朝から晩まで仕慣れない仕事に努力せずとも濟むと思ふし、山林などを借りて仕事をしては間に合はないかも知れないが、さう高い地價でもあるまいと思ふから熟畑をもう少し買ひ足して何か特有作物でも栽培して收約的農業を營んだら相當に效果を收めることは出來はしないか。兎にも角にも兄の姉妹の二人は向後兄の責任の許に來るべきものだと思ふ。固よりお二人共相當に遺產の分配を受けられては居るが、金といふものは如何云ふ機會で烏有に歸せないとも限らない。さうなると日本の女は先づ足も手も出ないんだから如何しても兄が是れに對する生活の保證者とならねばならぬ。若しそれが出來ない場合には又々永井、馬越の連中から痛くもない腹をさぐられたり、柄にもない橫柄面を振廻はされたりしなければならぬと思ふ。それは側眼で見てゐてさへ苦々しい限りであつて見れば、殊にそんなことに潔癖な兄の遺憾は思ひやられる次第だ。其意地にかけても兄は豫め其備へをなし置く必要があらうと云ふものだ。此他、人から負はせられる屈辱を反撥せんが爲めには自分が自身に對して多少の自由を束縛して置く位は甘んじて忍ばねばならぬと思ふ。此邊の御考如何。

夜學校も段々の難産の末に漸く教師の數は揃つたが加藤、石野、金田、松尾が退いてその代りに豫科三年の近藤（金助、今僕の家に居る）福山、それから本科一年の秋野が加はり此處三日前豫科一年の福士が加はつた。近藤は高等科一二年、秋野が尋五六年、福山が四一年、福士が二三年といふ配合だ。兄は多少近藤は知つてゐるだらう。三年の特待生で性質は面白味は些かもないが眞面目で堅實だ。福山は知らないかも知れないが一寸小學校を教へた經驗もある相だし、夜學校に來て困る程惡い成績でもなく思ふ事はどん〳〵云ふ丈けの Frankness は持つて居ると思ふ。秋野――是れが一寸考へものだが融通は至つて利かない代り眞面目にはやつてゐる（女難の患は注意を要するが）。それから福士は嘗て兄が僕の所で見て何んだか煮え切らないと云つた男だが、段々見て居るとさうでないのみならず發達しやうによつては可なり面白い男になると見込みをつけた。頭は滅相いゝし苦學は骨にしむ程やつてゐる、どうかしてやらなければならない譯であるから夜學校に芹川と同住して報酬を僕が少し補つてやれば可なり樂に勉强が出來ると思ふので頼むことにした。まあ是れで樣子を見て見る積りで居る。

　四月號の白樺のものは厭な氣持ちで讀んだことだらうね。とう〳〵弱音を吐いてしまつた。弱いものゝ醜さがつく〴〵自分をいやにさす。もう是れから土を喰んでもあんな弱音ははかない積りだ。醜い自分を見るのは厭だ。生命のある限りは美しく生きて行く、生きて行く努力をする。あれにあつた長與善郎の「盲目の川」はえらい力ではないか。僕はあれを見て思はず興奮させられてしまつた。それに引きくらべると武者の「Aと運命」はみじめな程弱さが眼に付いて來た。本當に武者は今 Critical point に立つてゐるらしい。でも彼が「世間知らず」を書いた時には少くとも「盲目の川」に匹敵する位の力を感じさす箇處もないではなかつたが、戀愛に一段落がつくと彼はもう力を失はうとしてゐる。要するに善郎も生活の根柢にもつと培つて行かなければ、彼の戀愛が一段落を告げると武者の跡を追ふの運命にあると僕は思ふ。僕は其點から云つてまだ實際失望するにはあたらない。僕は善郎程緊迫した力を今茲に振ふことは出來ないが、彼等よりもモ少し生に密着した生活を追ひ得る立場に漕ぎつけてゐる。而して僕はそれに向つて益々生長すべき力と興味とを缺いてゐ

ないし、僕は自分の力の限りあるを自覺――他人の誹よりも――しつゝも尙進むべく餘儀なくされて居る內部が僕にそれを命ずる。

僕が死んだ跡に身の程知らずといふ譏りは被るかも知れないが、それは僕が寧ろ喜んで受くべき稱號だ。

今日はとんでもない氣焰を吐いてしまつた。こんなことを云ふと何んだか武者見たいだ。野暮と云へば野暮の骨頂だ。然し一生に一遍位兄に漏しても笑ひはすまい。

どうか身體を用心してくれ給へ、而して徐ろに善後を考察し給へ。序に云ふが獨立社は今日で全く整理が終つたさうだ。橋本といふのは熱心に働いてゐる。先月はとんく\に行つた相だ。をかしなものだ、商賣といふものは。――兄のやうな見かけのこはい人の居る方が商賣があると云ふのだから不思議だ――人格の力は思はざる邊まで働くと見える。

此間大島が來て話して行つた。彼奴は中々面白い傾向にある。

## 有島生馬氏宛――五月十四日於札幌　〔九三〕

藤井さんのタペストリーが損傷なく着しました。目も覺めるやうな模樣に先づ驚かされて早速二階の客間の一方につるして見ました。而して椅子によつてよく見ました。唯室の bare な事のみが目立つて困りました。あれに釣合ふ程の裝飾は如何したら出來るだらうと殆んど失望的に思ひ煩ひました。

それ程あれは此飾氣ない室內には美しい花々しいものでした。

君がお忙はしい所を色々御奔走下さつた事を感謝します。藤井さんにも是非手紙をあげて御禮が申したいから御序の節に番地を知らして下さい。又御禮は如何なる程度にしたらいゝものでせう。是れも御考を聞かして下さい。

明日大掃除をして客間を少し飾りたいと思つて居ます。

又此間伺つた繪畫の術語の譯もありがたう。あれで明瞭だと思ひます。それから額緣も其中送つて下さると思ひますが

御序にスケッチ板のばかりでなくもう一まはり大きい板に用ふ縁も御送りを願ひます。
札幌も春になりました。黒味を帶びない青葉が黒い木の枝を勿體ない程美しく裝ひ始めました。
此間の「ピサの少女」纏つた氣分のよいものを拜見しました。上品なローマンチックな氣分は君の獨擅場だと思ひます。
而して聰明な同情が人をうなづかせます。
此夏は出來る事なら一家打揃つて大きな船で旅行（東海道海岸より瀨戶內海、出來るなら朝鮮若くは上海邊まで）を三週間位やつたらと思ひますが如何でせう。郵船會社に相談をしたら、適當の機會が得られると思ひます、が――尙具體的な事は其中申上ます。
信子さん、ペーちやんにくれぐ\もよろしく。

## 有島生馬氏宛――五月二十四日於札幌　〔九四〕

御手紙委細拜見。英夫の事につき又父上と何か意見の衝突あられ候由誠に不幸の至御氣の毒にも存上候。何分一徹之御氣象とて困入る次第に候。然し何しろ御老年なれば餘り無氣に喧嘩はなさらぬ樣願上候。最早相對の喧嘩をなさんには餘りに老い給へる事にもあれば。偖而藤井氏への謝儀は御說の通四十圓差上度候間乍御面倒母上御保管下され候小生貯金中から御拂置被下候樣御願申上候。禮狀は御注意に任せわざと差出不申候。
此頃は仕事に大分身入られ候樣御手紙にても推察乍蔭御喜び申上居候。此秋の展覽會に付更に反響を呼起され候樣祈上候。
船遊の事北方に向ふも一興には御座候べけれども小生一箇としては熱さに苦しめられ度願に御座候。然し是れには贊成者一人も有之間敷、都合によつては大連より浦鹽の方固より贊成に御座候。尙父上樣とも其他とも可然御相談煩はし候。
信子さんには畫道に御發達の由お樂しみの御事と重々御察申上候。安子も何かたしなみと存候得共大抵は三日坊主にて

失望に候。連發的に三人の子供を持ちしが憐れに候。
今五月のよき季節毎々ふき慣れし風もやゝなぎて軟かくもまれたる空氣は絹綿のやうに候。草々。

## 有島生馬氏夫妻宛――八月十九日於東京　〔九五〕

不斷の淸風に包まれて夏知らず夏を過され候半。旅中は三兒にかまけ御無沙汰にのみ打過候。幸ひに一同何等の故障もなく二十四日の旅を終へて昨夕着京致候間何卒御安神被下度。
父上樣には今朝早々御出かけにて今に御外出その强健には驚入候。この度の旅行には三兒の中一人位は病人を出候覺悟を心竊かに致居候處、何等のこともなきのみならず却而三人共健康を增し多少人にも慣れて歸來するを得たるは何よりの仕合に御座候。母上にもさしたる御疲勞の跡も見えず候得共、其中には多少のつかれを覺えられ候半か。
九州の旅暑さはあつく御座候ひしものから何事も珍らしく面白く、北國に住み慣れたる身には嘗て覺えぬ愉快を覺え申候。平佐村の四日は殊に種々の感慨を覺えしめ候。特に吉井氏の病にて臥せるに村人一同父の病を案ずるが如き樣は一箇の哀史にて候ひし。更に歸來氏の訃を聞くに至りては昨是今非不思議なる生のからくりに御座候。
何時頃には御歸京にや。作畫は豐滿ならんことを祈上候。小生共は三四日休息し後早々北上の途につき可申候。
曉子ちやん緣より落ちたるにも係らずさしたることなかりし由大慶、よろしく御申傳被下度候。草々。

## 河内完治氏宛――九月二十二日於札幌　〔九六〕

其後は御無沙汰して居りました。實は先日來足助兄が來遊して居ました。而して僕は兄に手紙を書くべく思ひ立つて居ながら今日まで延引して居た譯です。其中に兄の手紙の方が先に屆いて昨夕拜見しました。
足助兄は相場に手を出して居た事は既に御承知と思ひます。又さうなる迄の經路動機も亦略御存知と思ひます。僕の樣

に君の生活の全祕密まで知つて居るものに取つては君の此處に至れる成行は最も自然の事としか思はれません。悲しく情ない事ではありますが、と云つて何も僕は相場の是非を論じようとする譯ではありません。そんな事は今の僕は何んとも思つては居ないが、足助兄が段々迫り迫つて此處にまで落付かなければならなかつたと云ふ事は僕を泣かせるに十分です。僕は此窮迫から君を救ひ出してやりたいと思ひますが、僕の力では到底駄目だと云ふ事を知りました。それだから當面の苦策として暫く君のするが儘に任せたいと思つて居ます。友達甲斐のない事ではありますが、誠に僕としては已むを得ぬのであります。

兄の處に遊びに行く樣にとも云つて見ました。然し兄としても恐くは今の足助を如何ともする事は出來ぬと思ひます。但しくれぐれも申して置きますが、足助兄は此困憊の今に達した際にも決して其性格の根柢に何等のゆるぎを生じて居ぬと共に却て他の何人にも見難き丈けの透徹な光を加へて居ると云ふ事です。此點は十分安心なさつて宜しいと思ひます。利慾から離れ、功名から退き、類縁から逃れ、健康から絶望した彼には深刻な露出した誠實が痛ましい程光つて居ます。僕はそれを包むべき適はしい布を欲します。

今月末には又上京すると云つて居ます。兄も時々消息して彼の孤獨な旅情を慰められる樣に祈ります。

今彼は隣室に目を覺まして痛ましい溜息をついて居ます。僕は僕の無力を恥ぢ且つ憤らずには居られません。

兄の健康の囘復せられたと云ふ事は何よりです。折角此上とも御養生なさいまし。お目には懸らないが御家族へもよろしく。末光、荒川の知らぬ間に其處に居る末公にも。

## 有島生馬氏夫妻宛——九月二十七日於札幌 〔九七〕

御無事御歸京相成候由の御報に接し居ながら其儘御無沙汰申上候段恐入候。此度は十分の御勉强、作畫も會心の出來なりし由、二科會の氣焰に更に萬丈の光彩を添へられ候半と是非此光景を實見し度く存候。處が陳子樣には非常にやせられ

骨皮的になられ候由御健康の勝れざる事實に痛心之至、切々御攝養專一に一日も早く御快復の程祈上候。家庭にありて妻の病む程かなしき事は無御座候。兩三日前より安子も氣管支にて發熱今に臥床致居候が、三人の幼兒には實に閉口、日頃の彼女の苦勞が始めて思ひ當られ申候。安子の病氣は然し御心配下され候程のものには無之存ぜられ候間何卒御放念被下度候。

カチユーシヤ劇見物の事お耳にまで達し候由而かも其元氣が驚くまで御賞辭を蒙候ては一寸面くらひ申候。兎に角甫めて須磨子と申す日本のサラなるものを見物致候。周圍がよき空氣ならば必ず一かどの才優となるべきものなるにと存申候。亞米利加に參候て一週間目にてシカゴにて始めて見し芝居の「復活」なりしも思ひ出され申候。

いつぞや御願申上候繪畫用語二三御序の節御敎示願上候。

獨逸軍の意氣はさすがに賞讃に値すべきものと存じられ候。かの最大の三ヶ國を敵として逡巡する事なく堂々として拮抗する態度は近頃痛快の一事と存じ候。草々。

## 白樺同人宛——十二月二十九日於札幌　〔九八〕

愈々歲晚と相成白樺の仙人連も色々と御多繁に被爲入候半とはるかに察上居申候。同雜誌の事務に關して一向に風馬牛にすましこみ仙人以上をやり居る小生こそ難有次第に御座候。例の金五圓御受納被下度候。

志賀兄に申上候。此間平田氏より御鄭重なる手紙頂戴、同氏も明治二十二、三年に於て札農に學ばれたる事あるを聞き驚きたる次第に御座候。

今うんく〳〵と「戰爭と平和」を讀み居申候。面白しく〳〵。草々。

# 一九一五年

## 木村德藏氏宛――一月十三日於鎌倉　〔九九〕

早速同情を籠められた御見舞を辱うし感佩の至に不堪、去年九月下旬發病札幌の病院にある事一ヶ月餘、行李を修め兒輩を伴うて上京せしは十一月二十四日、尋いで二十八日當地に移候が、爾來約二ヶ月病勢はさして進みたる樣子には無之候得共又さして衰へたる氣配も見えず、唯幸に本人の氣象至て健氣にして病勢に打勝つの決心强きものあるは聊か人意を强う致居候。おすゝめ下され候精神療法幷に肺治療法の新法を傳へたる書籍は早速購讀、本人の望によつて相試み可申候。御親切の段はくれぐも御禮申上候。

彼女が兄等家庭の祈禱の中に置かれ候事を多謝致候。小生は今祈禱し能はざる境界にあるもの、從て祈禱の功力を信ずる事も疑ふことも出來ざる男に御座候得共、御眞情に對しては本人もさぞ喜悅仕候事と深く肝銘罷在候。時下嚴多貴家に於ても折角大事に御自愛祈上候。

先は右不取敢御禮のみ。草々敬白。

## 足助素一氏宛――二月二十五日於鎌倉海岸通　〔一〇〇〕

愈々今日が一周忌だね、多事な一年を囘顧して此忌に遇ふ兄の心持はよく想像せられる。殊に馬越との葛藤を聞かされた兄の心情が思ひやられる。（此處まで書いたら用が出來て其儘にした）

一年經つた故鄕は又兄に新しい感想と感慨とを齎すことだらう。

兄の職業に就いては未だ纒つたものが出來上らぬ。丹羽からもまだ返事がない。何しろ鎌倉にゐたのでは萬事勝手が惡

い。明日は上京するから一つ心當りを尋ねて見ようかとも思うて居る。兎に角此方面の働きにかけてはドーかあまり僕をあてにせずにゐて呉れ給へ。

平塚の病人は幸に大變いゝ。此頃は少許の運動も許されて居る。（尤も本人は大事を取つて未だ決行はしてゐないが）此頃彼女の詠んだのにこんな歌がある。

白百合の如き子なれば其胸に露や置くらむ母病みてより
微笑と涙の外に言葉なき小さき心の母戀ふらしも
神かけて子等思はじと病む我れの誓ひし日より世はかはり見ゆ
水銀が柳の枝をつぎ〳〵に傳ひ行くやうな春雨の晝
病院の松原を行く看護婦の白衣に小雨ふる夕かな
駿河舞女神が海に遊ぶ夜を星より見たし春の願事
君か子かいづれをえらみ抱くべきわがこの頃の弱き心は

歌といふものは悲しいものだ。處で僕のを附錄にする（是れは病人の消光の料にしたものだから其積りで）。

髮かりて子供二人がくり〳〵と春の風吹く中をかけて行く
電車道電車が來れば腕の子は雙手をあげて合點々々する
水の落ちし河口の砂に十坪ほど雜魚の干してある春淺き朝
山靑く海原靑く空靑く靑きが中に出し一つ星
村膽の心の奧にいゆきつゝ二人手を取りひざまづくかな

とあてられるだらうから此位にして置く。

春が段々盛りになつて行くと云ふことの外に天下太平だ。日のたつのが殘惜しくもあり、ありがたくもある。かう人間

も散漫になつて行くと其處に一種の糞度胸が出來る。
「白痴」は恐ろしく面白く讀んだ。あれを讀んで鈴木限三を想到したから直に一書を飛ばして一讀を促した。草々。

## 足助素一氏宛――四月四日於鎌倉　〔一〇一〕

長く而してくだらなく忙しい旅から先月三十一日の朝歸京した。番町の家には行三が大きくなつて留守してゐた。何んだか母のゐない兒は影が薄い樣な氣がする。
一日は一んち東京にゐて雜事に奔走した。其暇をぬすんで太平洋と巽の二畫會を見た。而して二日朝松尾の細君と共に平塚に來て、出發の時に比しては稍やつれた妻を病院に見出した。其夜は病室に一夜を過ごした。
今朝院庭を散步すると春色は既に十分で何んとも云ふ事の出來ない柔かい空氣が顏と心とを撫でる。何だか一種物の盛りに感ずる哀愁を覺えた。
今朝七時五十分の汽車で鎌倉に急いだ。家の近所まで來ると兒等の緣側を走りまはる音を聞いて胸ををどらせた。然し行光はいやな顏付をしてゐる。格別何處が惡いと云ふのではないけれどもいやな顏付をしてゐる。急に心が暗くなつてしまつた。かくて雨が降り出した。妻の妹も哀れな顏色をしてゐる。其間にあつて出色の健康を示せるものは敏行だ。
兄の三月二十七日發の手紙は机上に生を待つてゐた。それから今又一日發の便が屆いた。金の事について兄が苦慮せられた事を生は寧ろ感謝する。御返送せられた債券は快く領收しよう。
小樽で眠柳氏に面會した。委細は札幌に歸ると直ぐ郵報したから既に御覽になつた事と思ふ。
札幌の滯在には一寸感慨をひかれた事も多かつたが、訣別に當つて心を殊にひかれたのは高岡教授と新島教授だつた。高岡氏は男性的に生の淚を强ひた、新島氏のは女性的に弱かつた。
吹田は生の爲めに酩酊した、而して中宵彼の家から歸る生を生の家まで送つて來てくれた。淋しさうな而かも落付いて

何處までも獨り行かんとする樣な態度は何時までも僕の眼底に殘ることだらう。

明日は上京して明晩か明後日再歸鎌する。愈〻浪人となつた。今後の事は自分でも知らない。勉強しなければならぬと思つて居る。

祈御健在。

## 吹田順助氏宛――六月十三日於鎌倉　〔一〇二〕

「十九世紀文學の主潮」書店の方より送付して來てたしかに受取りました。難有く御禮申ます。早速讀んで居ります。矢張り感心して居ます。失禮ながら譯文體も嚴正な明晰なものと感服しました。

英夫の方もやつては居る樣ですが、何分一身に關する事件に惱まされてる最中なので隨分苦心して居る樣子です。又僕が全部引受けようと思つてゐます。

平塚の病人は又惡くなりました。今度こそ或は囘復の見込がないのかと云ふ心細さを覺えます。而して彼女の一生を顧みて見ると一種の悲しい囘憶のみが殘ります。もつと何かしてやりたかつたと云ふ遺憾もあります。

白樺の七月號には何か書く事になつてゐて今半分書きましたが、かう心にも身にも餘裕が無くなつては出來上るか否かが危まれます。

安樂に始まつた僕の生涯に一轉機が來た樣にも思ひます。僕は恐ろしい然し屈しない丈けの氣力を持つた期待でそれを見つめてゐます。

雨期に入りました。毎日の雨で一般の人は弱つてゐるやうですが、僕だけは喜んでゐます。雨には段々親しみを感じます。

御學堂の御健康を切に祈ります。

## 佐藤繁井氏宛——七月三日於鎌倉海岸通　〔一〇三〕

哀れにも鈴蘭はしをれて病妻の手に落ちた相です。君のやさしき厚き御同情は活々と彼女を慰めながら、矢張百五十里の南に居て強て北海の春を樂まうとした事は私共の我儘であつた樣です。

然し妻は、貴女のお志を何よりうれしく思つて居ます。

雨期も過ぎたので、あの病氣には險惡の時節を免れた次第ですが、ドーも熱が不定で弱つて居ます。

貴女の御健康は如何ですか。此頃は又仕事のお出來になる程のお體になられた事を祈つて居ます。何しろ御大事になさいませ。

美しきもの皆もろし鈴蘭のとくしをるゝが美しきかな

空蟬のむくろとなりて鈴蘭は濤き情けを人にゆづりぬ

御一笑。草々。

## 吹田順助氏宛——七月十七日於鎌倉　〔一〇四〕

ブランデスの事、實に〳〵濟みません。英夫から今の場合到底執筆が出來ないと云つて來ましたから、僕がやらうと思うてゐますが、期日が遲延するので跡の方の出版に不都合のやうなら誰かにやつていたゞいて、僕はその埋草にクロポトキンの「相互扶助」の譯をさせて頂きたいと思ひます。然し若し期日に格別短い制限がないなら僕は責任を負ひたく思つてゐます。御一考を煩はします。

兄の譯出された部分の紹介は來月號の白樺に致します。

お子さんがお生れなさつた事は兼て佐山君から聞取つて居ましたが、御祝もせずに過しました。お強くないとか。御苦心

の事と思つて居ます。奥さんの御骨折に對しても深く御同情申して居ます。如何か over wrok になられぬ樣祈つて居ます。

妻は一昨日古賀博士の注射を試みて見ました。結果は判然致しませんが萬一それが効果を奏したらうれしい事だと思つて居ます。身體は極端に痩せましたが精神は驚く程たしかです。

札幌の夏がなつかしまれます。此地は昨今焦熱に變りました。其中に然し一味の快感は伴ひます。

足助は金に窮しながらも矢張り勞働の道を選ぶ事が出來ないで居ます。此間から二篇の小說が作られました。何れも强烈な特色を持つたいゝものだと僕は思つて居ます。

原の事は云ひたくありません。其中ウンと書いてやりたいと思つて居ます。祈御健在。

## 嚴父宛――七月十九日於鎌倉　〔一〇五〕

昨日は炎暑の處御會葬の爲遠路御出馬御疲勞に被爲入候と奉拜察候。昨夜八時半頃無事着鎌仕候處二兒は唯今就寢せる所なりと女中申居候。八時迄停留場に參りパパはまだお歸りがないかと待ちこがれ遂にはウソツキのパパと申し、行光は鼻聲に相成候由不便に存申候。

今朝は二人とも至て機嫌よく早速おつかはしの菓子いたゞき大喜び致居候。早朝行光を伴ひて海に參り海水浴致候。海に入れても全身を淸水にて洗ひ遣はし候へばかゆがりも不致、皮膚は丈夫に相成候事と存居候。兎に角少し試みばやと存居候。早朝か夕方がよろしからんと存居候。古賀博士の事又々御面倒願ひ置き〔三字不明〕恐入候。何卒宜敷奉願候。

今日も朝來片雲を認めざる天空やがては堪へがたき暑氣かと被存候。輕井澤御旅行早々お思立ち可然存上候。荷物の儀は御申越次第參上荷約致可申候。

先は右のみ。草々如件。

嚴父宛――七月二十二日於鎌倉海岸通　〔一〇六〕

御懇篤なる御親翰感佩して拜讀仕候。

本日小子平塚に參向候處神尾父上御心配の餘親しく御來訪、事情委細伺申候上二人病院長に面會、古賀氏の意見更に開陳仕候處、同氏の申條によれば、古賀氏は注射後の發熱の具合を見極め候必要もやあらんかとの院長の配慮よりわざと解熱劑處方さしひかへ居られしとの事にて、結局意志の疏通不十分なりしより起りし事と判明、直ちに其處方致候事と相成候間、今後は安子の容體も平常に復候樣相成候半かと存居候。何卒左樣御放念被成下度、然し數日發熱續き候結果病人の衰弱稍激しきを加へ候儀は遺憾千萬に有之候。

行光の發熱は今日に至り大分減少七度五分程に相成、元氣も平常とさして違はざる樣相成候へば兩三日にして本復致事と存居候。是亦御安心奉願候。

先は右不取敢御禮旁御一報のみ。草々拜具。

嚴父宛――七月二十三日於平塚杏雲堂分院　〔一〇七〕

毎日の旱晴尊地の孟暑さこそと呉々奉拜察候。折角御自護の程伏て奉祈上候。

昨日申上置候行光の發熱は武久氏の診察によれば單に暑氣中りの由にて解熱劑をくれられ、今曉下痢有之、今日は早少少は熱有之候樣なるも起床し元氣に致居候間左樣御放念被下候樣願上候。

今朝當病院を見舞申候處注射以來解熱劑を用ひざりし爲めにや熱度高く、昨日などは腹痛下痢相加はり夜間は睡眠を妨げられ候て稍困難を感じ候由申居候。當院の醫師と古賀博士との間に打合はせ候上行違有之たるにやにて、解熱劑もつかはざりし樣子に御座候が、昨日神尾父上博士に面會被致萬事明瞭相成候事と存候間、今後はかゝる事は無之かと愚考罷在

候。

先は右容體御一報のみ。草々頓首。

嚴父宛――八月二日於平塚杏雲堂分院　〔一〇八〕

昨日は行郎見舞くれ多忙且遠路の處安子大よろこび致居候。殊に其際は例の珈琲御惠與被下安子大好物とて難有受納仕候。

此四五日來安子の健康は驚く計り囘復致し元氣も旺盛に食慾も增進祝着此事に存居候。此機に乘じ身體全體の健康幾分なりとも囘復致候はば有望至極と存居候。是れと申すも一方ならざる御厚配の御蔭様と共に泣謝罷在候。昨日今日は便通も殆んど普通のものと異る所無御座候由に御座候。熱は今日最高七度一分に御座候。

困つた事には福田看護婦昨夜より下痢を起し心細く相成候而頻りに歸京致度旨申出候間先刻暇取らせ申候。至而律義に働き居滿足致居候ものを殊に殘念に存申候。早速代人の事藤澤看護婦會に申通置候間、明朝は番町邸に候補者可參、又々母上様の御面倒相煩候事と存居候。何分宜敷願上候。今夜は看護婦無之爲め小子來院手傳罷在候。留守中には神尾母上及治さん來られ居候事と存候。急に賑かに相成よろしき事と存居候。行敏共に幸頑健に罷在候。何卒左様御安意奉願候。

河野氏より依託の灸點の人の廣告同封致置候間御覽被成下度、お惱みの時一度お試み被遊候はば如何と存上候。

又看護婦使用の蒲團の事御願申上候處早速御送付被成下候趣に而安子より御禮山々申出居候。

當地方も久振りの雨と相成、畑のものなどは如何にも心地よげに見渡され申候。もう二三日も降り候而晴れ候はば無上の事と存候。

鎌倉は浴客蝟集、海岸には博覽會開催致され晝夜共雜鬧致居候。

明日は神尾母上御來訪と存居候間さし代り歸鎌可致存居候。

先は御禮旁御一報迄。草々頓首。

## 母堂宛――八月五日於平塚杏雲堂分院　〔一〇九〕

昨日は色々の面倒御願致候處、一々御世話被成下以御蔭無滯看護婦を得申候段難有御禮奉申上候。昨日歸鎌致候處折よく父上樣御來訪中に而お目に懸り御調理被下候れいし差上候處、神尾に而食味致候樣とて御殘し御歸宿相成候。或は小町園の方に御一泊相成候やも不知との事に、今朝神尾父行光と共に同園に參候處お出無之、暫くお待申上居候中かなめ山より御出に相成、折柄大雨とて外出も難相成同所に而一同中食をしたゝめ、小子は當方に、外の方々は神尾にお出相成候。安子は昨日より胸部に再び痛みを覺え、痰も出候由に而、今日は痰の方は少々よろしく相成候へ共痛みは有之、熱も相當に高く三時半には九度四分に相成申候。一寸驚き候へ共、この前の注射の時も一週間日程より熱昇候へば、或は同一の現象かと存居候。深く御案被下間敷候。胃腸の方は幸によろしく御座候間是れは御安意被下候樣奉願候。今晩は再歸鎌致心組に罷在候。其中又父上樣にも拜眉を可得存居候。

先は右御禮旁御一報のみ。毎日の淫雨折角御自愛專一に被遊候樣祈上候。草々頓首。

尙々分家よりつかはし候茶碗は大喜にて早速使用致居候旨宜敷御披露奉願候。

## 足助素一氏宛――八月十四日於鎌倉海岸通　〔一一〇〕

行坊主が敵に頭を割られて二針縫つたといふ報知を受け、昨日は草々東京を發して平塚に立寄り夕方歸鎌した。在京中に兄に會ひたいと思つたが其運びに至り得なかつたのは殘念だ。

安子は小康を得てゐる。行は多少神經に刺戟を受けて夜など安眠を妨げられて居るやうだが、さしたる事はない。今朝は絲を拔く筈になつてゐる。

里見の事件は彼自分から親に發表することになつてゐる。兩三日中には破裂することだらう。さうすると僕は又是非出京せねばならぬからその時には御面會が出來ると思つてゐる。

旗擧げはまだしないのか。何しろどん底に行く迄やつて見たらいゝだらう。債劵はお勸めにまかせお預りすることにする。

白樺の原稿にもまだ手を着けてゐない。かう事件が頻發して一寸手の着けやうがなくて困つてゐる。然し少しなりともつなぎに出したいと思つて居る。

獨立社の件は此頃松尾から委しい來信があつて、あれを引受けた吉田が是非に年一ぱいやり度いといつてゐる相だから、今年一ぱい丈けさせた上で處分するのが、吉田に對しても正當な處置だと思つてゐる。

モー秋だ。今夜などの涼しさはどうだ。夏は矢張一番心持ちのいゝ季節だと思つて名殘が惜まれる。何といつても一番心のよく働く時だ。祈御健在。

## 足助素一氏宛——八月二十六日於鎌倉海岸通　〔一一一〕

驟雨一到頭を壓し盡したる鬱氣一時に散ずるの快云ふべからず。

偖先夜は失敬。天候は不順を傳へて米價は騰貴すべき筈だと素人眼には思はれるが其後の戰況は如何だつた。關原の難關を見事に通りぬけられたことを祈つてやまぬ。

僕はあの後暫く東京にゐて二十四日に平塚に行き一泊。翌日鎌倉に立寄り即日歸京した。明日の午後には又鎌倉に歸るであらう。兄の其後の情況が何やら氣にかゝる。

原から手紙が來て、僕の手紙をまだ受取らない鹽梅で、やかましい尻をもつて來た。川崎に宛てたのだがあすこの門番か何かに不埒な奴がゐると見える。

平塚の方では從前通成績がいゝ。固より今は丁度反動時期で發熱はするが原因の判つた事だから心配はない。「サムソンとデリラ」といふ戯曲を白樺に投じて置いた。今度のものは戯曲的だといふ點に多少自信がないでもない。實演してもされるものだと思つてゐる。

今月の末には多分引上げて東京に來る。その上は又兄と頻々御目に懸る機會もあり得ると思ふ。兎に角其後の模樣を知らして吳れ給へ。

## 足助素一氏宛——八月二十九日於鎌倉　〔一一二〕

徹底した、感心によく徹底した。是れから出發する兄の思想と行爲とには本當の力が湧くことゝ思ふ。僕は寧ろ今度の兄の失敗を祝福したい。

餘程金は送るまいかとも思つた。然し考へ直して十圓丈けお送りする。是れ以上のことをするのは兄に對して失敬でもある、不親切でもある。

祈るやうな心になつて僕は兄が此二旬程の間になされる內部の戰鬪が最善の結果に落着するやうにと願つてやまぬ。

萬人の眼には失敗のどん底に沈める、而して兄の眼には——而して僕の眼にはと附け加へることを許せ——萬里開拓の門出にある。兄の上に神の、運命の、或は何者かの祝福裕なれ。

## 足助素一氏宛——八月三十一日於鎌倉海岸通　〔一一三〕

原から在封のやうな手紙が屆いた。僕は原夫婦の心根を思つて涙にあまる。矢張感化院がいゝのかしらん。僕にはどうも判斷が出來ない。僕が原の立場にあつたら總てのことを犧牲にしてその兒の爲めにもう一骨折つて見たい樣な心持になる。勿論こんな兒の矯正が片手間仕事で出來る譯のものではない。然しこの場合にはもうそんなことをする餘地はないの

か知らん。兎に角兄の意見を原にも僕にも知らせてくれ給へ。其上で僕も適當な處を探し得れば探して見る。
昨夕から平塚で泊つた。安子は今朝戸外で朝食が喰へる程になつた。

## 有島生馬氏夫妻宛――九月二十三日於東京　〔一一四〕

委細の御手紙ありがたう。
信子さんと曉ちやんが血色よくなられたと云ふ事は何よりの仕合せだ。然し君の弱つて居るのは心細い事だ。十分休養をされて朝鮮行までには本復せられる樣に祈ります。熱海は存分の暖かさらしいが、此地も今日は寒暖計が八十度を示した。(尤も器械がちつと怪しいやうだが) 今夜も七十三度、空は薄曇つて折角の十五夜も甲斐がない。古いなつかしい習慣なる供物と數株の薄が暗い緣側に淋しく置かれて在る。藤村會の事業もポツ〳〵進捗して居る。平會員からの出金が大部分五十錢なのは一寸心細い。君が去られてから十五六圓集つて居る。新會員も五人程增えた。送金に對しては無遲延受領書を出して居るから御安心下さい。
箕田から手紙が來て形勢觀望の結果此事件は到底破棄するに限ると力說して來た。夫れは當方では何んとも指圖が出來兼ねる。箕田と英夫との間に飽くまで理解の解決を結果させて欲しいと返事して置いた。
隆三の件に關しては昨夜伊達氏宅に增田隆三と僕と集つて會見を遂げた。其結果彼等の仲間に隆三が手を出すのは到底不利なる事を見て取つた。で殆んど斷りと同樣の事にして歸つて來た。其時島村孃の例の話も出た。伊達氏に於而は兎に角會見交際をする意志があるのだ。で僕は島村氏の性格については全然何等責任ある推薦を爲すことなしに二人を遇はせる方法を講ずる事にして別れた。
父上は二十八日最急行の汽車で出發される事に決定された。最急行とは何時の事かよく判らぬが貴方で調べられたらわかる事と思ふ。服裝は最正式の場合でもフロックと山高でいゝ相だ。

神尾にゐる敏は夥しい胃腸の衰弱に犯され、おも湯の外は全く食物を禁ぜられた爲めヒョロ〳〵として氣力と云ふものが無くなつた。昨日行つて哀れを催してしまつた。今日は父上が行光と行三とを連れて見舞つて下さつたが、舌の色も眼瞼の色も囘復したやうだから滋養物の攝取が出來るやうになれば直ぐ囘復するだらうと云つて居られた。何しろ今年は隨分たゝられる。

白樺の原稿は今夜書かうと云ふ譯なのだが果して出來るかどうか覺束ない。今月は全く氣乘りがしないで居た。

昨日神尾の父が見舞つた所によれば安子の方は益いゝやうな様子だ。

これから一つ本氣に勉强が出來相と思つて居るが果して如何だらう。先づ書齋も住み心地の惡くない丈けには出來たらう。

留守宅は至極無事平穩だ。何しろよく寢られるのが何よりも難有い。

折角御大事になさい。

## 原久米太郎氏宛――十月四日於麴町下六・一〇　〔一一五〕

御手紙ありがたう。里見の件は新規まき直しと云ふはめになつて、彼は今東京に歸つて來てゐる。葛藤が隨分面倒なので一寸手紙では書き盡せないが、要するに親の方から大々的故障がもちあがつた譯なのだ。

安子は大によろしい。是れは一寸奇蹟に類する、醫者が驚いてゐる有様だ。大分肉もついて來た。矢張寢たなりではゐるが、あの分なら命だけは取とめたと云つて差支なからう。およろこび下さい。

御妹の事で大に御苦心の由。隨分兄も trifle の多い男だな。御母堂が歸られてから都合よくなる事を祈つてやまぬ。

僕は先月八日東京に歸るやうになつてから多少勉强も出來るやうになつた。是れから一つ何かやつて見たいと思つてゐる。色々の點で自分の不足を痛切に感ずる。仕事はあり過ぎる位ある。唯自分の自信が不足なのだ。大きな conviction は

如何して得られるのだ。

足助とも二三度遇つた。何時遇つても心持がいゝ。何か仕事をと思つてゐるがドーモ思はしいのがない。然し其中如何かなるだらう。

東京にも要するに大した刺戟はない。一寸名の聞えた人でも遇つて深い處まで話して見ると存外いゝ加減な處で安心してゐるのを發見する。

僕は此頃人間を都會生活に適する人と田舍生活に適する人との二つのカテゴリーに分ける事が出來ると思つてゐる。而して僕は到底田舍人だと思つてゐる。唯僕は不幸にして都會で生れ都會で育ち都會で仕事した。僕は異常の努力を以ての外には自分の本當の故鄕に歸る事が出來ぬ、而して中途半端な人間となつてしまひ相だ。それが何だか恐ろしく思ひ出した。

御一家の御健在を祈る。

九月號の白樺に「サムソンとデリラ」と云ふ戯曲を書いて男女交渉の一面を描かんと試みた。兄の來書を讀んだら一寸共通する思想がありはしないかと思つた。

足助素一氏宛――十月二十二日於柴又川甚　（一一六）

愈〻御開業の由「露店日記」は面白からん。續稿執筆の爲今夕此地に來る、頗る面白からず。今夜中にも逃げ出さんかと思案中なり。二十四日歸京の筈なれば其節萬々可申上候。草々。（インキを買ふ店なく灯はランプなり）

足助素一氏宛――十月二十三日於稻毛　（一一七）

昨夜とう〳〵柴又に我慢が出來ないで此處に來た。靜かないゝ處だ。宿屋も居心がいゝ。今日は銚子まで行かうか夫れとも此處に落付かうかと思案してゐる。この淺間神社の一の鳥居は海の中にある、夫がいゝ。朝早く白袴をつけた騎兵が

澤山通つて行つた、夫れが大變心持ちをよくさした。

## 吹田順助氏宛――十一月十七日於東京　〔二一八〕

十一月二日に御葉書を頂きながら今日まで延び延びになつてしまひました、御許し下さい。幸に僕は例によつて頑健至極で居ます。浪人になつたら少しは纒つた仕事も出來る事と心頼みにしてゐましたが夫れも出來ずに蠢めいて居ます。而して父の膝下にゐると所謂俗事蝟集と云ふ有樣で氣分の害はれる事一通りではありません。こんな事で疲れる樣では駄目だと思ひながら又グータラになつてしまひます。其中魂を入れかへて一仕事したいと念じてゐます。妻は古賀博士の注射を受けて以來頗る順調でこの樣子ならば一命だけは取りとめたかと思つてゐます。然し今後幾日月を經たらば彼女が家事を見る事が出來る樣になるかは一向あてがありません。

東京では秋來一しきり展覽會が賑ひました。二科では安井と云ふ人の作品が重要視されましたが僕一己としては高い未來を期待する事は出來ない樣にも思つて居ます。唯技巧の正確と誠實に於ては實に拔群の良心を有する人である事は認めねばならぬと思ひました。院展では矢張觀山の「弱法師」が光つて居ました。文展では淸方の「はれ行く村雨」麥僊の「大原女」堀進二の「老婆」中村彝の「肖像」山脇の「比叡の雪」などが注目を値しました。然し噂は何時でも眞價以上の鼓吹者です。展覽會は新聞で讀むに限ると思ひます。

夫れから引續いて御大典の騷ぎと云ふものが來ました。東京の眞中に住む田舍漢なる僕にはその騷ぎは一種の亂雜な色彩となり騷音となつて感ぜられる許りです。

文壇の諸家に接し得る機會はかなりにありながら一向無交涉で居ます。白樺の連中にも餘り近寄つて居ません。自分の創作にも反古を作りつゝあると云ふ悔が常に伴つて心を苦しめます。今までの自分の生活――混雜した自分の生活もせめては創作と云ふフォーカスで焦點にまで達せしめ得ると云ふ自信がくづれる事は我れながらみじめな事だと思ひます。

兄の「ミケランジエロ」は譯了を鶴首して居ます。兄の御近況は如何ですか。周圍には何か面白い出來事は起りませんか。足助君は道玄坂の中腹に屋臺店を出して毎夜西京燒を賣つて居ます。「イポメヤ」（Jpomea）と云ふ屋號からして振つてゐますが、十一月の寒空を袷と袷羽織で寒風に吹きさらされながら來客のひま〳〵禪定三昧に這入つて寒さも感じないと威張つてゐます。彼の徹底的なやり口には殆んど敬服させられて居ます。

藤村會の報告は何れ致す事でせうが兎に角二百圓丈けを電送する事にしました。殘金が四五十圓はあるでせう。思ふ程には集りませんでした。あんな事をすると隨分人の心の裏表がわかる事もあります。

爲す事なき中に十一月も中ばを過ぎました。鹿兒島はまだ暖かでせう。東京は御承知のカラ風が吹き出しまして此頃は氣味の惡い程度に地震がします。大きな奴が見舞はねばいゝがと人々は恐れて居ます。

東京に殘された御家族は御無事なのですか。末のお兒さんも此頃は元氣になられましたか。御用がある時は出來る事は致しますから仰有つて下さい。

御大事になさい。

妻の歌なるものを少々御慰みに御覽に入れます。

死ぬと云ふ事さへ敢てふりむかず眠りてありや小さきわが魂
春追ひて乙女心は旅に出て歸らねばこそ我れは老いぬる
砂漠行く人の如くにわが心今日も渴きてさすらへるかな
我が心朝の寢床に流れ入る秋風の如今朝は冷し
かくて我れいつまであらんはかなしと思ふ夜などの人の戀しき
生きとしも生ける世の人悉く病めりなど思ふ淋しき夜かな
生も死も人のこの世の戲れと思ひ入るまで思ひ入りぬる

あはれなり瓶にさしたる秋の花枯れても散らず執着の如
臥ながら又栗喰み居れば野を分けて秋の風行く何處に行くや
我兒等に似たれどかなし人形のつぶらなる眼はまたゝきもせず

### 松尾修一氏宛——十一月二十七日於東京　〔一一九〕

御手紙ありがたく多謝。久子樣御懷姙の御模樣に承り候が色々御苦心とは存上候得共慶賀の至。結婚の伴ふ當然の負擔なると共に大なる慰藉に候。何分十分の御攝養御安產の程遙に祈上候。

年末には就業ロ御求めの爲め或は御上京相成候との事。殊に年末は四方多忙にてかゝる問題を提供するには不適當の時期と存ぜられ候が如何や。殊に近頃東京などにて口のなき事は豫想以上にて、拙宅に出入致居候もの丈けにても四五人は徒事に二三年も遊び居候もの有之候樣の次第、隨分御考へものと存上候。

當方は幸に一同頑健。平塚の方にても漸次快方には向居候間幸に御安心被下度、只囘復のはかぐしからざるは覺悟の前ながらもどかしき事に御座候。足助兄は澁谷道玄坂に於て露店の芋屋を開き居候勇氣には感服致居候。逢阪兄は救世軍に身を投じ申候。世相のさまぐをしみぐ味はせられ申候。

時下嚴寒折角御自愛專一になされ度、乍延引御返事のみ。草々敬白。

久子樣にもよろしく御傳言願上候。

### 足助素一氏宛——十二月二十九日　〔一二〇〕

端書ありがたう。僕は大事ないから安心してくれ給へ。今朝安子から手紙が來て正月末には屹度死ぬからといふ通知をよこしたので、今更ガーンと横顏をなぐりつけられたやうな氣がしてゐる處だ。あの晩はあれから又車掌を奴鳴りつけた。

# 病める妻へ〔三〕

○（二月十日）

昨日行、敏兩兒を伴ひ上京致、今日行は醫師に診てもらひ候處、外部的のものゝ由にて、塗藥をもらひ申候。明日は歸鎌の筈に候。祈御安靜。（表）

夕月がさやかににほふ海原に白い小さい帆が消えて行く。

空靑く海原靑く山靑く靑きがなかに星が一つ出た。（裏）

○（二月十日）

何をみる汝の眸に驚きの、南無や尊き驚きの色。（裏）（小兒の繪はがきに）

大笑一番底放下衆情而更有情。（小兒の笑へる繪はがきに）

○（二月十二日　朝）

行光は診察を受け候處、極外部的のものゝ由にて、聊かも心配無之由、手當致候處大分宜敷樣に候。（表）

昨夕父母上樣と一緒に歸鎌致し候。降暮したる陰雨に病室はさぞ鬱陶敷事に候半、惡夢に犯され給ふ由、催眠劑よりも何よりも心の安靜大事なりと存上候、其內又々參上可致候草々。（裏）

○（二月十五日　朝）

叢がりて空を閉ざせる雪雲をかすかに漏りて春の薄日射す。（表）

一昨日、昨日は御葉書いづれも面白く拜見致候。その日その日の出來心御遠慮なく發揮され度、要は心に祕め置き候事

のよろしからぬにて候。今日は母上樣御出掛被遊候間、樂しく半日を過され候半、其中又參上可蒙御叱候。呵々。（裏）

○（二月十五日朝　鎌倉）

電車道電車が來れば腕の子は兩手をあげて合點々々しぬ。

○（三月三日　於東京）

明日は誕生日に付、夫れ迄居よと母上仰せられ候まゝ、四日夕方歸鎌の積りに候。貴地には五日參上の事と存申候。今日は快晴、小供等も遊びに出さんと存居候。（表）

又しても保姆の事件は破れ候、左樣御承知願上候。（裏）

○（三月六日　於鎌倉）

春雨のあがりし朝の庭に干す白いからかさ紺のからかさ。

○（三月六日　於鎌倉）

昨日は御心地よげなる君の樣を見て、心慰み申候。歸來子供等はおとなしく待居申候。今日は朝來の快晴庭にて遊び居り候。

○（三月九日朝　於鎌倉）

太陽はかくやくとして世を照す君の病のいえざらめやは。

○（三月九日朝　於鎌倉）

昨日は失禮、今日は天氣も直り候間、熱も下られし事を祈居候。只今荷物仕度中、小供等も至極元氣にて僕の北海道行を承知致居候。

留守中は折角御自愛、何卒歸京迄にはよくなられ居候樣祈上候。さらば。

○（三月十日午後五時半　於東京）

昨日午後上京、今日は朝來用事にて奔走し、只今綿の如くつかれて歸り來候。途中にてもとめたるヒヤシンス、母上の到來なりし早生の苺を添へて、御送り致候。明日は午後十一時發の海岸線にて出發可致候。

〇（三月十一日　於東京）

今夜十一時の汽車で立ちます。天氣もおだやかに落ちついて居るから仕合せです。是れから松尾令夫人の處に行き、石川未亡人を訪ひ、新渡戸氏に面會すると用事はすみます。加減いかゞ御大事に。

〇（三月十二日朝　於車中）

昨夜十一時、飯田、戸川に送られて上野を發し申候。ぎごちなき旅寢の夢を五時半に破られて窓外を望めば、汽車は恰も伊達を過ぎて郡に入らんとしつゝあり候。雪はまだあらず。

〇（三月十二日午前十一時　於車中）

今汽車は花卷の停車場を過ぎ申候。雪はまだらに地を被ひ居申候。花卷の名さへ無殘に存ぜられ候。乘客は小生の外に厚着したる老人一人、祈御平靜。（表）

ヒヤシンスはしをれず御手に入り候やらむ。

向北の汽車中より（裏）

〇（三月十二日夕　於靑森鹽谷）

おそくあけて早く暮れ行く短か日や（あとが出ない）

陸奥に日はなきものか日ねもすを。かのあたゝかき日のめは見えず。（表）

地の果てとも思はゞ思はるべき陸奥の果てに着きました。沼久内あたりから横ぶりにふる雪が襲つて來て、山海共に模糊たる雲霧の中に隱れる有様は、見慣れては居るものゝ、梅の花さく鎌倉から來ては、異樣に感じられます。今夜十時風を犯して惠下山丸で此港を出ます。（裏）

○（三月十三日朝　於車中）

昨夜十時、雪と風との中を發したる惠下山丸は、途中稍激しき動搖をなしながらも、今朝三時半、無事函館に着致候。小樽の用達を先きにせんと思ひたれば、六時の汽車には乘らず、九時のに乘りて唯今大沼のトンネルを越えたるところに候。

○（三月十三日午後七時半　於車中）

病院の夕も靜かに暮れ果てゝ、寂しい程の靜かさだと、君の境界も想像して見ます。今度の北海道行には、いつもにない旅情をそゝられます。（表）

先便を投函した森の停車場から、段々と首蝦夷の風光は荒涼として來ました。大抵の家は軒まで隙間もなく雪に埋もれて、其間を行く人は雪の威壓から逃れる爲めのやうに、數人づゝ小さく固まつてうごめいて居ます。雪を冠にしたエゾ富士は地の靈が天に向つて莊嚴を競うて居るやうでした。今汽車は銀山の附近を通つて居ます。札幌も近づきました。札幌と聞けば恐ろしなつかしゝ汽車よはや行けためらひてあれ。（裏）

○（三月十三日夜　向札幌車中）

今日は車中阿部次郎と申す人の「三太郎の日記第二」を讀みつゞけ申候。又自分の將來につき、人なきまゝに耽思致候。心の奧底に醱酵せるものが、漸次形を取るかと存ぜられ候。何んとか致さねば生死ともに無益なりと存候。

○（三月十四日朝　於小樽トキ旅館）

汽車は二十分程おくれ、十一時近く小樽に着し申候。直ちに此旅館に投宿。旅に出でゝより始めて、眠りらしき眠を結び申候。是れより漆山氏を訪ひ、郵船會社に至りて直ちに札幌に入申可候。

○（三月十四日午後三時　於札幌）

其後御加減如何や、札幌にて御消息を得んかと樂しみ居候。

十二時四十七分、愈札幌の停車場に汽車は入申候。本橋君迎へあり。森本の次女病氣入院の由聞きたれば、直ちに病院に到りて夫妻に遇ひ申候。夫れより上田氏に至り、唯今歸宅して行李を解き、衣服をきかへたる所。

〇（三月十四日午後　於札幌）

是れより書架をさぐりて、面白げなるもの有之候はゞ、御送り可申上候。

今日は此所もさすがに長閑にて、庭前の芝生やゝ見え初め居り候。（表）

家は何等の變化なく、君の病床のありし二階の室に「婦人の友」僕の油繪などの置かれあるもなつかしく存申候。是れより直ちに荷物の取かたづけに從事可致候。

此處に着きたらば君の消息を知り得んかと思ひしは空頼みと相成申候。君の上變りなきやうに祈上居候。

婆やもすみも丈夫にて迎へくれ候。ポチも丈夫の由に候。（裏）

〇（三月十五日　於札幌）

唯今いつもの食卓に向ひて、朝飯に就かんと致居候。今朝書棚を求めて二三の書を漁り得申候間、御送附致候、「圓窓より」は持合はせ無之、思違ひいたせし事に候。何れも重き本なれば、寢て讀まれ候には如何やと、おぼつかなけれども。（表）

此高き匂ひとやさしき柔みとを見給へ、希臘は悲しんで傷かざる底の悲劇を生みたる所なり。此石像の表情にもさる面影は讀み得給はずや。（裏）

〇（三月十五日　於札幌）

御地の梅は早や散り果てや候ひけん。此地今朝は薄曇りてやがては雪とも覺え申候。昨夜は旅に出でゝより初めて我家に着きし如き眠を結び申候。蚊の夢に二度ほど目ざめ申候。

君の第一の消息は昨夜よみて安心致候。

〇（三月十六日午後一時　於札幌）

熱も下りて御平靜之由、重疊之至に存上候。昨夜は宮部、佐山兩家を訪れ申候。二家とも君の上種々配慮致被居候。朝は高橋、佐藤、ローランドを訪ね申候。今朝も快晴、午前散髪して唯今食後の少憩を爲せる所。

○（三月十七日　於札幌）

庭先の梅も早散り際に候半、佐々木氏よりは歌の訂正參り候や。自然なれども是れにては、など小生の歌に評せられずやと、危み居り候。今夜は竹崎氏を尋ねむと存居り候。昨夕はコーラーを訪ひ申候。

朝から上田のお婆さんも來て手傳ひくれ申候。他人は賴まずとも手は十分に御座候。

鎌倉の二兒も、思ひしよりおとなしく暮し居り候由、安心此事に御座候。行三も可愛がられ居候樣子。（表）

折々の御消息に御平靜の由承知して、何よりも喜び居り申候。今日は農場にまからんと存居り候處、朝來の雪やむべくも見えず、思ひ止まりて、荷物の片付方に專心致候。十の七ほどかたづき申候。

森本の子は退院致し候。昨夜は吹田、嶋崎の三人來訪、嶋崎とは一時過ぎまで夜學校の用談致候。（裏）

○（三月十九日　於狩太）

昨日、狩太に行かんとする札幌停車場にて、十五日付けの御手紙落手、熱も大層落付き候樣子なるに喜び勇み申候。車中は總選擧に關係せる陣笠の有象無象にて、身動きもならず、倶知安までは閉口致候。狩太あたりは雪殊に深く、折柄快晴にて日光の眼を射るに面を向くべからず。

○（三月十九日　於狩太）

今日は彼岸の入りなりと云ふに、朝より降雪霏々として、何處にも夫れらしき姿は見え不申候。吉川氏にては一同至而元氣、春雄は空知農學校の入學試驗を受け、妻君は今月末か來月はじめにお目出度事ある樣子に候。僕は至而頑健、御安心を乞申候。

○（三月二十日　於狩太）

昨日は一日吹雪續け申候。晝過より農大の卒業生にして、此頃製綿工場に奉職中なる、納富君來訪、夕方まで雜談。今朝は風はなぎたれども、霏々として雪ふりこめ居候。今日用事をすまし、明朝の汽車にて歸札之筈、祈御平靜。關氏にも宜敷。

○（三月二十一日　於札幌）

札幌は、又々雪の下に埋もれ去り申候。今日夕食後、南、橋本兩家に暇乞ひ旁々參り申候。南奥さんは入院の由なれどもさしたる事には無之由。（表）

昨日朝書きたるはがきは、その後つのり來れる吹雪の爲めに、投函することを不得、今朝歸札の汽車中より初めて投函いたし候へば、大分の御無沙汰になれる次第に候、御案じ下され候半。今日午後三時歸宅すれば、君よりの手紙端書うづ高きまでにあり、貪り讀み申候處、益々御快方の由、無上の歡喜を感じ申候。此勢に乘じて、あせる事なく、更に御養生祈上候。小生出發は二十九日夜と決定可致候。（裏）

○（三月二十二日朝　於札幌）

今日は朝來の快晴に候。昨夜はよく眠りて、今日は氣も晴々と致候。是れより、蠣崎に至りて獨立社の事につき一談判し、井口其他の所に暇乞ひし、晝は名殘の中食を有合亭でしたゝめ、午後はドーデー、新島、高岡其他を訪問し、夜はリンコルン會に出席の心組に候。家はドーデーさんが借りてくれ相に候。

○（三月二十三日　於札幌）

益々およろしき方の由、旅にある身にとりては何よりもうれしく存上候。毎々委しき御手紙、難有は存候得共、身にさはりはせずやと、心痛致申候。一言二言の御便にてよし、餘り長く筆とり給はざる樣おすゝめ申上候。（表）

「虹色の」歌心深く打誦まれ申候。今朝は曇り果て申候。朝五時半に目ざめ候而、六時起床、昨日蠣崎、井口、大島、高橋、松村、高岡、時任、半澤、新島の諸氏を訪ひ、夜は宮原、上田等の來客に時を過し申候。至而頑健、御休心を乞ふ。

今夜はローランドの家に晩餐に招かれ申候。（裏）

○（三月二十三日　於札幌）

市街の泥濘には殆んど閉口致申候。氣候は稍ゆるみ申候、御地も時々寒氣尙襲ひ來る由、切に御養生なされ度候。本橋君は晝夜を分たずよく働きくれ居り申候。

○（三月二十四日　於札幌）

希臘藝術の理解十分なる能はずとの事尤もに存上候、此ボッチチエリーの「春」の如きも旅寢重ねてフロレンスの畵堂に其實物を見候迄は想像にだも及ばず候ひしが、その原畵の前に立ちて雄大壯麗を極めたる畵家の想像力に接して稍文藝復興期の何物なるかを味識致し候。やがて持ち歸る寫眞は君によりよき理解をもたらすべしと存居候。

○（三月二十五日）

靑雲にそき立つ巖麓地に花咲く大野よきめうとかな。

○（三月二十五日朝　於札幌）

あたゝかき心にゆけば我れはしも雄々しく旅に幾夜經にけん。

○（三月二十五日）

雪の日をポチは歸らず十日あまりたてども馬鹿のポチは歸らず。

荷物はほゞかたづきたれば、今日よりは運送屋大工を頼みて上荷せしむべし。今朝は空晴れたり。ポチはまだ歸り來らず。（表）

昨日はひと日平塚よりの御消息絶えぬ。恙なくあり給ふやいかに。

昨日は朝、校内をめぐりて、知れる誰れ彼れに別れを告げ、午後よりは黒百合會の人と寫眞し、夜は有合亭の同窓會に列しぬ。岩波も亦來り會せり。（裏）

○（三月二十六日　於札幌）

昨夜、夜學校より歸宅すれば、諸方よりの御消息あり、色々貴地の有様を知り得而大に安心致候。信子君よりの御手紙によれば、氣候はいまだ羽織をぬぐまでにはならず候由、然し桃の花芽もめぐむ頃にや、折角御大事に御養生祈り入り候。

○（三月二十六日　於札幌）

今日は愈運送會社が來て、荷物の上包みを始めました。何んだか家の中がガランとなつた有様は心細う御座います。午後からは三年の送別會、夜は森本の晩餐。

○（三月二十七日朝）

晴れ亙りたる空を見れば、かすかに春の到來を思はするものなきにあらず。札幌もあと三日になりぬと思へば、名殘更にふかし。（表）

朝は接客、午後は靑年寄宿舍、夜は吹田君の家。

何一つしでかさずして離れ行くわが生ひたちの札幌の土。（裏）

○（三月二十八日　於札幌）

大杉は御社めぐり御社は御鏡めぐり神威を守る。

砂濱を傳ひ〳〵て砂濱は盡れど盡きず法悅の笑。

○（三月二十九日午後六時　於札幌）

愈々札幌の滯留も今一日と相成申候。朝來霏々たる雪、札幌を去るとしては却而よろしきを覺え申候。今朝は小樽に參候て足助君のことにつき用事を遂げ、晝頃歸札、土產物など買ひて歸家、今は心靜かに殘れるものを取りかたづけ致居り候。今、すみが參りて、夕餉の仕度致し居り候。今夜は一同食堂に而親子丼を食ふ筈に候。

○（四月四日　於鎌倉）

昨夕の春雨の音は、此六七年嘗て聞かざりしやさしの音と思ひしが、君の耳には如何に響きけん。夕餉は生馬の許にてしたゝめぬ。今朝は七時八分の汽車にて東京に行かんとす、正は昨夜も母上敬子ちやんと眠りしが、十時頃目ざめて泣き出したり、嘗つてなき事なりとぞ云ひたしなめられて其儘寢ねぬ。

○（四月六日　於鎌倉）

花の咲く頃となつて、兎角雨がちとなる事に候かな。東京の宅の隣の花も三分位は開き申居候。

吉川より手紙參り候。小作一同より御見舞の爲めとて金圓送りこし候。禮は早速申遣はし置き候。（表）

今日は朝から曇つた。然し雨は降らない。本當の花曇りらしい天氣だ。朝起きると行、敏と共に長谷まで散歩をした。

此頃行と敏とは實に見ちがへる程おとなしくなつた。

殊に行は云ふ事がよくわかる。もうパヽと一緒に寢るんだと云つて駄々をこねるやうな事はない。昨夜も春とおとなしく寢た。今はおもちや部屋に獨り居て、何かやつて遊んで居る。敏は新らしい女中と、外で大きな聲を出して遊んでゐるのが聞える。

庭の前の幾株の桃の中一本だけが重たすぎる程花をつけて居る。（襄）

○（四月七日）

明後日、即ち九日から泊りがけで行きますから、關さんが用事があるなら、その時東京に行くやうに申して置くといゝと想ひます。草の種子や藥やなんぞは、其の時に持つて行きます。御大事に。（表）

小さな書齋が出來てから、大きな天地が創られたやうな心持がします。額一つない、本箱一つない、素朴なガランとした部屋は今まで豫期しなかつた嚴肅な感じを與へてくれます。

晝後に札幌の學生が三人わざ／＼遊びに來ました。而して可なり眞面目な話をして行きました。夕方に大磯から歸つた壬生馬が來て、晩食を一緒にしてくれました。其間時間のある毎に閉ぢ籠つて讀書しました。

飢ゑた腦はスポンヂのやうに智慧を吸ひ込みます。（裏）

一昨日來は却而御邪魔、其夜の議論の如きは不撓感觸をそこね候事と御氣づかひ申上候。當分のところは男は馬鹿なものと致置可申候。歸來れば保姆は未だあらず。

〇（四月十一日　午後四時半）

母上よりの御手紙によれば、例の女中らしき相互の誤解を爲し居る樣子にて困入り候、然し兎に角再呼びよせ候積りに致し居り候。兩兒は共に無事、家には江崎氏の二男あり。鎌倉は不知案內との事に、雨の中を誘ひ出して、建長寺、半僧坊、壽福寺とひつぱりまはし、唯今歸宅せる所に候。古都の舊蹟を訪はんには申分なき春雨、二人は多く語る事もなくそこはかとなくさまよひ申候。

〇（四月十二日）

昨日は終日雨降り暮し、且つ寒かりしかば、少しは加減も惡かりしならん。生馬小生のあとより參り候由、關さんは歸られ候や、昨夜は十一時頃まで氣を入れて讀書もし、默想も致候。緊張したる力の歸來り候樣覺え候は、無此上快事に候。ブランドの事書きおこされ候際は冷汗を催候が、然し其人になりたく候。

〇（四月十三日）

綺麗に晴れましたね。昨日は雨の中を晝を返しに壬生馬の所に行つたら、あの荒になつて歸るのがものうい爲めに、晝食を食べて臥そべつて、英の作物を讀んだり、二人で話をしたりして居たら、札幌で同宿住居をして居た頃の同人三吉と云ふ人が尋ねて來たと知らして來ました。彼からシンガポールのソバにあるジョホールと云ふ小さな獨立國でやつて居る、南亞公司のゴム栽培の話を聞いて、八時過ぎになりました。異國的な情調がひどく自分の興味をさそひました。あんな所に行つて事業をして見るのも面白からうなと、思つて見たりしました。

今日は愈小兒達をつれて橫須賀の軍艦見物に行きます。關氏は歸りましたか。

○（四月十三日）

御手紙並に葉書二通受領。君のお心持はよく理解され申候。何れ御面會の上御話可申上候。多分明後日參上可致候。今日は折からの快晴。分家父子と共に横須賀に軍艦を見、追濱の飛行機を見て、唯今歸宅致候。子供等に誠によき保養と、學問致候。

○（四月十六日　於鎌倉）

野に行くと、麥の穗が目立つてのびる。院に行く道端の畑を見る毎に、自然の力の奇しきに感ぜぬ事はない。自然は嘗て同じ顔を見せぬ。

昨日は麥の間に立つて、手傳ひながら、肥を手につかんで麥に與へて居る少年を見た。その心の中にかゝる仕事がドー寫るだらう。

○（四月十七日　於鎌倉）

生馬の隣の女子は、可愛い〳〵女の子だ。年は敬子ちやんと滿一ケ年ちがひの十一だが、小柄な、華車な、何とも云へない美しい、うぶな愛嬌を持つた子だ。昨日訪ねたら生馬の家の側の井戸の水を汲んで居た。夫れでスツカリ戀をしてしまつて、信子さんに賴んで呼んでもらつた譯だ。皆が安子に似て居るといふ。濱で遊んで居る中に、偶然永山のお孃さんに遭つて話をして居ると、其子（名はつげ）を指さして、是れはあなたのお子さんですか、と聞くから、さうぢやない、と云つたら「あらさうで御座いますか、奧さんに餘りよくお似申していらつしやるから、此濱で御目にかゝるたんびにさうだと一人できめて、何時でも見返つて居りました」との事であつた。さう云はれて見ると、笑つた時が似て居た、あんな子を、行や、敏の姉さんにしたいと思ふ。昨日は一日戀わづらひをしてしまつた。

永山のお孃さんがよろしく云つて居た。

○（四月十八日　於東京）

昨日の豫想は全然空に歸して今朝は雨となり、冷氣さへ加はり候に、小供等の失望此事に候。されど思ひ立ちたる事なれば、父上樣是非にと仰せられて、十一時四十分の汽車にて小金井に出かけ候事に相成り候。雨中の花も取變りたる趣あらんか。山本、高木は未だ訪れ來らず。

病院は又一入の淋しさに候半。小供あらざればそちらに赴きて一日を靜かに暮し申度候。

〇（四月十九日　於東京）

今日も亦雨となりて、小供等は處在なさに西洋間にて遊び居り申候。朝は野村、有島を訪ひ、午後は石川氏に參らんかと存居候。ヂャンバルヂャンはさして熱いコーセットの一身を捕へんとは存不居候。

昨日は高木山本の同勢と共に市ケ谷より汽車にて小金井に參り候。雨は降らざりしかども混雜の中、子連れは何れの茶亭も狹苦しき所にて、小供の戯れ遊ぶ餘地もなく　草々三時四十分の汽車にて歸京、父母樣は歸宅せられ、殘餘は四谷門外の牛肉屋にて心ゆくまで騷ぎ申候。

〇（四月二十日　於東京）

今日亦雨にして、而かも冷氣多の如くに候。御地は如何。此寒さに又熱など狂ひはせずやと、御案じ申上居り候。

此方は幸に三兒共元氣、生馬は引越の爲め、一昨夜鎌倉に歸りて、曉子は昨日より神田に參り居候。昨午後は雨中、石川、尺、野村など訪れ丸善に參り候。

〇（四月二十日）

西洋文藝叢書の「虛榮の市」第一卷來居候。「哀史」よりは文章もくだけて居り、有情滑稽の分子も多ければ、今讀み給ふには都合よろしきかと存ぜられ候。

英夫は今日あたり上京致可かと存居候間、今一日は滯京の積に御座候。

〇（四月二十一日十一時　於東京）

新聞の天氣豫報とは反對の結果を現はして、今日も亦雨となつた。

昨日の御手紙の事は別に御返事はしない。遇つた上にするが、兎に角英の事は出來る丈けの事はして見ます。夫れにつけ愛子の歸京を待つ事になつたから僕は一先歸鎌する、多分今日するだらう。そしたらすぐお尋ねしよう。

今日は是れから高木に行つてかの件を相談して來る積りです。何日ぞや一緒に中食をたべた料理屋で、しまを御馳走する積りです。

○（四月二十四日　於鎌倉）

今朝も晴れ渡り申候。昨日の午後は子供を慰めんと二人を連れて久振に海岸に出で、風は稍寒かりしかども快く戯れ申候。夜は、是れも絶えて久しき原稿用紙にむかひて、少しく筆をすゝめ申候。今日は日曜なれば小供等を連れていづれへか遊びに參らんと存居候。

○（四月二十五日）

昨日は天氣もよし、日曜日なれば、一日遊び暮す積りで敬子ちやん、二子、三人の女中と共に大塔宮に詣で、江柄天神の前の茶屋にて辨當を開き、夫れより八幡宮を右に見つゝ要山と申す庭園に遊び申候。途々志賀の一子も誘ひ合せ申候。見晴しよき山を開きて處々に亭を立て、曲りたる道をきりたれば、變化多くして子供の喜ぶ事よのつねならず。鬼ごつこ、かくれんぼ、角力など思ふ存分の愉快を盡し、三時過家に歸り申候。夫れより僕のみ電車にて鵠沼に來り、武者小路君の所を尋ね申候。妻君もあり、小供もあり、犬の子もあり、淸談に時を移し、歸時には夫婦にて電車停留場迄送りくれ候。

今日は一日原稿紙に向ひ候て仕上げの上、明後日は君の所へ。

○（四月二十七日）

病院の事務所に立寄申候處、婦長さん出て來られ、「東京の看護婦會に一人、三十二三にておとなしき人あれば賴まんと存候處、只今派出中の由、然しながら可成都合して此方へ來てもらふ樣賴み置きたれども、更に申遣はすべし」との事に候。

○（四月二十七日　於鎌倉）

只今歸りつき候處、母上樣は既に御歸宅にて、久振りにお目に懸候樣存上候。小供等は敬子ちやんと何處かに參りてあらず候。茅ケ崎より眞に思ひもかけざる老夫人乘りこみ候。名は暫くおあづかり申置くべく候間、あてゝ御覧なさるべく候。君の上に非常な好意を有し、君もすきな人に候。一緒に鎌倉まで參り候。

○（四月二十八日　於鎌倉）

母上樣より伺ひ候得者、生馬、胃腸の熱にて臥床致居候由、信子君の苦心思ひやられ候。早速見舞致置候。其中回復に候半。

○（四月二十八日　於鎌倉）

今日は又雨に風さへ加り、淋しき事に候。注射の結果、熱などの高まり候にはなかりしや。三十日には又お尋ね申上可候。

○（四月二十九日）

昨日、何となく淋しい日でしたね。朝は隨分身を入れて勉強しました。晝から靑島から出張して來た、山田と云ふ參謀長が訪ねて來られて、お會ひして、父上樣の御樣子など伺ひました。六時頃まで家に籠つて居ましたが、我慢が出來なくなつて、雨の中を小坪の先まで散歩しました。ボンのクボが痛む痛む。

○（四月三十日）

今日は叔母上樣を御案內し、二兒を伴ひてカナメ山溫泉場に赴き申候、二兒は往復共よく步み申候。午後よりは、讀書と書き物に消し申候。愈々題目も定まりたれば、明日は八幡宮側の掛茶屋の一室に引籠りて、一日勉强致度存居候。夕刻より雨を催したれば、外套を引かぶりて散步致候。雨日の散步は心ゆくものに候。

○（四月三十日）

今日は散歩なされてもさしたる障りなかりし事が限りなくうれしく御座候。

明日も多分は晴れと存候故、又々御運動なされかしと祈上候。今日は大船にて母上樣に御免を蒙り、獨り歩して鎌倉に歸り申候。途中圓覺寺に立寄り其處の寶物を見、又座禪堂に參申候。森閑たる寺院の中、鶯のなき交ぜる外聞ゆる聲とてはなく、折からの夕陽に映えたる堂の腰障子の色もさびて相見え申候。小僧に山内の寺の數如何程と聞候に「中々澤山」、坊數如何と聞き候に「中々澤山」。

〇（五月四日夜十時　於鎌倉）

今日歸宅仕候。昨日は好天氣に乘じ、母上、信子君と三兒を伴ひ、家庭博に參申候。よのつねの雜閙と、さして異る所はなけれども、廣くとりたる運動場あるが爲め、子供等は有頂天によろこび遊び申候。隨分くたびれて歸來り申候。今日は又赤十字社の總會なりし爲めにや、飛行機飛行船共に東京の天にかけり、正、敏を驚かし申候。鎌倉も皆々樣無事、夕方小町園に立寄り候處、父上は逗子に赴かれ候由にて、御不在に御座候ひき。

晴天となつたれば、運動も可能にて、多少は慰み給ふらむ。明日の訪問を樂しみに入寢致候。

〇（五月六日　於鎌倉）

其後熱の具合如何や。あれより弦齋方を訪れ候處、主人殿は未だ睡眠中にて、代人出來り候間、御申聞の旨尋ね申候處「夫れは樽ではありませんたらです」との事に呆然として開いた口をふさぎ兼ね候。一笑、一笑。加之、タラを飮めば寧ろ利通する由に付、君には不適當と存じ、說明も委しくは聞かず辭し歸り申候。夫れより增田氏に至り話す中、急に隆三に云ふべき事ありし爲め、直ちに下澁谷に參り、隆三は番町に、小生は銀座玉屋に指輪の事を賴み、匆々歸鎌致候處、兒等も一同無事に歸來を相待ち居申候。

今日の暑さは又格別に候はずや。今日は或は運動を御ひかへなされしかと存候。然し多少づゝは矢張續行せられ候方よろしからずや。又二三日中に參上可致候。草々。

〇　（五月七日）

昨日は歸鎌致候處、急に東京に參り度なり候のみならず、或は神尾父上さま今朝貴方へでも赴かれ候はゞ、注射の事につき、打合はせの事おくれはせずやと思ひ立ち、六時の汽車にて當地に參り候。今朝早々神尾に參り、父上樣にも拜眉を得而、御相談申上候儀は、既に御承知の事と存上候。正午過佐々木院長御宅に參り、古賀博士往診の事御相談申上候處、何ら御異存なき旨の御返答に接し申候間、其中父上樣と共に博士を訪問可致候。

行は、昨夜神戶に一泊、至極元氣、他二兒も至而丈夫に御座候。今日は又細雨霏々として膚寒く相成候が、御加減は如何や。隔て居れば何となく御身の上不安に被存候。折角御大事になさるべく候。

〇　（五月七日）

昨日隆三の處にて、アネモネの花餘りに美しきを見候故、箱に入れて御送り申上候。お汚けなさる時根を燒かれなばよからんと、隆三申居候。

弱き花はめでたし淸し弱き花をめづべくなりぬ君やみてより。

今日より白樺の原稿に取かゝらんと存居候。午後は志賀を訪れ可申候。今朝も五月らしき空に候かな。御病おこたれとのみ祈居り候。

〇　（五月八日）

松尾久子からの手紙が來て、着札してから肋膜炎が再發したが、もういゝと云つて來た。吉川からは、四月三十日正午男子が生れたと云つて來た。上の子が何んだか可哀相な氣がした。四月三十日に、あの邊は風雪であつた相だ。今年も北海道は氣候が惡いらしい、困つたものだ。アネモネはうまく生きたか知らん。

〇　（五月九日　於鎌倉）

今歸りつきました。汽車の中で放蕩者らしい三人の若者を見て、胸糞を惡くしてしまひました。歸つて見ると早川から

手紙が來てゐます。うそでもまことでも、向うの女の事を書いてあるのを讀むと、二人を憐れむ心になります。一緒にさせてやつて見たいと思ひましたが、又例の弱い癖が出たと思つて考へて居ます。二人はおなとしく遊んで居ました。

○（五月九日　於鎌倉）

斂は行と喧嘩して倒されたとかで、又額にもう一つのたんこぶを拵へて、眞黒な藥をベツタリ塗つてゐました。大した事はないのです。大部氣分が向いて來た樣だから、筆が取れるかも知れません。然し、未だ題目は決定しません。靜かな夕方になりました。熱がひくいまゝであるやうに。

○（五月十日）

今日夕刻、江崎安子樣來訪致され候。斂は大元氣にて皆をよろこばせ居候。今夜は蕭々たる雨、晴天續きの後には快く感申候。殊に私にありては、眼がはつきり心地よく開き候事が、何よりの慰安に御座候。願くは此雨、今夜降りつくして明日は晴れよ。

靑島にある、神尾の馬丁より見舞狀參り候間、返禮狀出置き候。

○（五月十一日）

今五時十分過ぎだ。朝九時半頃から茲に來て書き續けた。而して原稿用紙で四十五枚書いた。僕としてはいゝ收穫と云はねばならぬ。僕は今晩も茲に居て書きたいと思ふけれども、子供が可哀相だから是れから歸る。

今日は嘸無聊だつたらう。明日天氣だつたら江崎安子さんが行くだらう。

○（五月十一日　於鎌倉）

久し振りで仕事に對する力が湧いて來た。生れ出る子が醜い事は知らないではない。然し、私にとつては是れ程うれしい努力は他に求められない。今日は心ゆくばかり筆を取りたいものと祈つて居る。病床にある君を、眞に慰さめ得るものは、僕の努力、甲斐ある事業だ、と云ふ事を僕はよく知つて居る。今までも夫れを知つて、努力しないのではなかつた。

唯、夫れが集中して一つの形を取らなかつた迄だ。結果が果して努力に酬いるものであるかドーか、疑はしい。夫れを思ふと、暗い心になる。然し幸福な僕は――眞に自分の價値を認めようとしてくれるやさしい魂を持つ僕は――努力をやめないであらう。兎に角僕の作物はよきにせよ、醜にせよ、君に捧げらるべきものだ。此畫は北海道を思はせるではないか――（雪の景色の繪はがき）こんな雪をけ散して歩きまはつた快は、他に一寸ないね。

〇（五月十二日）

今朝早起、濱邊を散歩致候處「イケス」四十程波の爲めに打上げられ居候。平塚も暴風雨なりしならん。損害無之候ひしや。東京はさしたる事なかりし由に候。

〇（五月十三日）

此地、昨夜はしと／＼と雨降り候ひしが、今朝は晴れ渡りて、すがすがしき日と相成申候。是より、山本直良君を誘ひて、喜寛君と中食を共にし、直ちに歸鎌致度存居候。母上樣、昨夜より咽喉を痛められて發熱なされたれども、さしたる事はなかるべく候。行三も少し風邪氣味なれど、さしたる事なく遊び居候。曉子も稍やられ居候樣子。

物置も大分出來上り申候。其中又荷物の一と騷ぎに有之候。

伊藤氏に依賴し、高木の方に時々參禮報知するやう被遊度候。

〇（五月十四日　朝）

昨夜は新渡戸氏を訪れて、直良、喜寛の二君と中食し、直ちに歸鎌の心組の處、偶然にも其料理屋にて、佐藤、新渡戸の兩氏に邂逅し、一寸面語致候處、佐藤學長の舊同窓にて、唯今來遊中なる米人夫婦、美術の事につき話相手を求めつゝあれば、行きてくれずやとの事に、帝國ホテルに參り、二時半程に亙り談話致候爲め、歸鎌は六時過に相成申候。今朝は君許訪はんかと存候得共、小供が一日位ゐ父の居る事をも望まんかと、躊躇致居り候。然し、或は出懸け候樣相成申候やも不被計候。不思議な事もあるものに候。君が懷中しるこを求め給ひしに、石川樣より一箱送り屆けられ申候。昨日は、信子

に賴み、柄を選びもらひ、君の爲めにネルの衣物を作るやう致させ候に、昨夜君の端書には同じき御注文有之候。

○（五月十五日）

今日君の熱は、全く僕の勝手な口のきゝかたが引起したのだと思つて居ます。一方には、病氣の故ではないと安心もし、一方には隨分亂暴な男だと、自分にも呆れて居ます。然し、僕の性質としては、理解のない狀態に居なければならぬと云ふ事は、心苦しい事です。君が、此邊の心情を酙み取つて、再び平靜に還られんことを祈ります。

○（五月十五日）

歸つて來て見ると、行、敏は海岸に行つて居ませんでした。昨夜は活動に行つて、面白がつて見物した相です。信子さんから端書が來て、母上の御病氣もよく、行三ももう全快だとの、消息がありました。御心配なき樣。創作の氣分が、また向つて來た樣に思ひます。努力して見ます。

○（五月十六日　朝十時）

今日小兒達は打揃ひ、コウ、ハツを從へ、敬子ちやんに伴はれて、建長寺に遊びに出懸け申候。僕は今朝讀書し、午後よりは建長寺の接心に參候心組に候。

其後、具合如何かと、御案申上居候。今日は少し曇りたれども、雨にならねば幸甚に候。指輪はまだ參候はず。參り次第屆け可申上候。

○（五月十六日）

日本の人が家を建候場合には、唯自分が住ひよき樣にとのみ心懸け候樣被存候。歐洲に於而は、建築が自然の一部にまぎれ入り候樣にと思ひ居り候樣被存候。裏の畫を見給へ、屋根の形と色とが、宛ら自然の榮を讃美し居るやうに見えず候や。日本にも昔の建築には、たしかにかゝる心組ありしものを可惜。

○（五月十七日）

昨夜、君の手紙が屆いた。明日多分平塚に行くから、その時御返事はする。

昨日は日曜なれば、行、敏以下は建長寺に行つた。僕が志賀と、一時頃そのお寺に行つたら、山門の掛茶屋の處の腰かけから僕を呼んで居た。僕は一時半から三時まで、管長さんの講義を聞いたが、わからないものだつた。歸途、河野氏に立寄つて家に歸つた。夜は菅氏を訪うた。

〇（五月十七日　於鎌倉）

僕は早くも君が、少くとも四日以前の君にならん事を祈る。僕は何んと云ふ馬鹿者だらう。然し、君は僕の心を知つてくれて居るだらうと思ふ。歸りついても二兒は居なかつた。部屋に入つて、原稿をいぢくりなどして居ると、歸つて來た。二日ともおとなしく、よく遊び暮したさうだ。夕食には鯛飯の御馳走をした。夫れから又、日の暮れるまで庭で遊んで、湯に入つて、おとなしく寢についた。今夜は又勉强する。

〇（五月二十日）

御手紙披見致候。又々稍々高熱にあられ候由、來訪者の爲めにかと存候得共、乍蔭御案じ申上候。本朝荷物着、半日を費して片付け方を了し申候。中には見當らざるものも有之候得共、兎に角出來得る丈け取りまとめ持參致可候。

三兒とも至而無事。昨日は增田、愛子、三兒及びベーチヤンと共に家庭博に參り候而、伊達氏に面會致候。その時鳥村氏も同道致候。MとSとの見合ひの意を兼ねたるものに御座候。うまく參らばよろこばしき事の一つと存居候。明日は北里養生園に、古賀博士を訪問致度心組みに御座候。而して、二十二日には多分歸京の事に可致候。二十三日には平塚へと存居候。

〇（五月二十三日　於東京）

一昨日は、一日丈け日をあやまつて手紙差上げ、今日は僕の來訪を待ち居られざりしやと、御氣の毒に存居候。實は、今日歸鎌の筈の處、朝來の雨日和なれば、一日丈け延引の事に致し、明日は午前中歸鎌可致候につき、午後より參上可致

候か。昨日は朝傳染病研究所に、古賀博士を訪ひ、夕食は、行を伴ひ、山本家にて供せられ申候。折柄酒匂の直正、直光の二人、尺氏のお子二人來られ候而、賑かに候ひき。

今日は父上能に行かれ、僕にも是非との事なれども心進まず、如何可致かと思案致居候。

雨にて寒さも加はり候得者、病院の日暮し嘸かしと御同情申上候。

○（五月二十六日　於鎌倉）

行三の事氣になりて、早々平塚を辭したるもの丶、歸來りて彼の頑健なるを見ては、又平塚の空氣遣はる。恙なきや如何に。今日は藤澤より電車に乘りぬ。夏の如く蟬の聲さへ聞こゆ。走る電車の起す風に面を吹かすれば、一味の凉氣淸爽譬へがたし。

○（五月二十六日）

是れより銀行に行き、志賀を訪れ、若し氣が向かば、原稿を書かんかと思へり。東京より信あり、行、敏も亦至極の健全にしておとなしき由、行三は今は誰にも慣れて、皆々に可愛がられ居れり。

さらば。更に加養し給へ。

○（五月二十七日　於鎌倉）

今日も凝乳は成功なされ候や。飲用後の腹工合は如何。

襦袢はたしかに御願ひ申上置候。

東京よりの來信によれば、神尾父上樣には六月上旬、御上京にもやと存ぜられ候。

昨日午後より夜に亙り執筆勉强致候。

○（五月二十七日　於鎌倉）

今日も又思はしからぬ天候になり申候。病院の中淋しき事に候半。行三は寢室異候爲めにや、夜分度々目さめ候樣なれ

ども、晝間は元氣至極に候。東京の二兒もよく慣れて遊び居候由。

○（五月二十八日夜　鎌倉）

明日は早朝東京に參り候間、停車場より電報致可、驚かれぬ樣と祈居候。夕方は多分參上致可候。少し胃を痛められ候由、御大事になされ度、行三も明日、母上、敬子ちやんと共に歸京之筈。

○（五月二十八日　鎌倉）

今日、母上病院に赴かれ候樣被仰候得者、日は短く過ぎ候半。はつは其妹危篤の由、申參候由にて、今朝歸國致候やも不被計。行三は境遇のちがひにや、何分夜寢つき惡く、度々眼をさまし候て、やかましき故、今日は返さんかとも存居候。

○（五月二十八日）

昨夕は獨り散歩して、松葉谷と云ふ所に、日蓮が庵を結びし跡、安國論を書かれし跡を訪ひ申候。偉人の事業は、生活を心强からしめ申候。唯一人なりければ、殊に曇日なりければ、山上の堂宇の欄干に腰をかけて、稍暫し考へつゞけ申候。

○（五月三十日）

歸りの汽車は山北より參候もの、久振りにて込み居り、藤澤より電車にて、讀書に夢中にて歸宅致候。母上樣は想像の通來客一泊被致候爲め、今朝八時東京にお出、敬子ちやんは、春が東京迄お送りし、春丈け昨夜歸來せしもの丶由に候間、御心配相成間敷候。夫れ故家内に、春とみやのみにて淋しき事限りなく、遂に堪へかねて、唯今停車場に着くべき、五時五十分を迎へに參候得共、夫れにてもお歸無之、歸宅致候處に候。君の斷食も一理あれども餘り腹をすかせては、根氣更らに續かざるべく、消化よきもの丶み用ゐられ候方可ならずや。

蒸暑く空氣濕りたるいやな日に候哉。

○（五月三十一日）

母上樣及敬子君は、昨夜九時頃御歸り相成候得共、二兒は假縫をすませ候上にて歸る方よろしからんとて、東京に留り候由に候。夫故今日は何となく淋しく候。朝は少々原稿を書き、午後よりは散歩に出で、バラの花を買ひて机上をにぎやかにし、夫れより身をいれて讀書致候。

今日は天氣よかりしかば、君の病も少しはよかりし事と存じ上げ候。

○（六月一日　於鎌倉）

今日は愈雨となり、寒さも加はり申候が、さしたる事なく、御暮し相成居候や。僕は今日は一日勉强。今夕から明日再平塚に至り、夫れより直ちに東京に出で、二兒を迎へて歸鎌せんかと存居候。

昨日買ひたるバラ、美しく孤獨を慰めてくれ居り候。

○（六月三日　於東京）

昨夜東京に着致候節は、八時過なりしが、夫れより銀座に至りて此端書を買ひ、家に歸れば飯田君あり、父上、母上とは十一時迄語りて就寢致候。三兒共至極元氣朝より庭にて遊び居申候。午前中は增田君來りて、三時過まで語り居り申候。夜は田所氏を訪れんと存居り候。胃腸も幾分か御快方にや、洋服も行の分、今夜出來の筈に候。餘は後便に草々。

○（六月五日　於鎌倉）

今朝十一時五分の汽車にて二兒を伴ひ、歸鎌致候。午後は、行は僕と共に海濱に參申候。母上はまだ御歸りなされず。

明日午後より參上致さんかと存居候。

○（六月五日）

明日より明後日にかけ、參上致候樣申上置候得共、神尾母上御上京にて、夫れまでには御歸り覺束なく、且明日は父上御來鎌にも候得者、明後日御伺ひ可申候。左樣御承知被下度候。

○（六月六日　於東京）

昨日は一日滯在の事になりたれば、三兒を伴ひて淺草公園に出かけ、砂塵と雜鬧の間を稍二時間程過して歸宅致候。三兒共電車の中にてよく寢ね申候。

夕方しまを尋ね申候。しま子も鼻の具合宜しからぬ由なれども、是れもさしたる事もなかるべく候。

今朝早く田所氏を訪ひ、可成早く歸鎌可致、平塚には明日參られ候半かと存居候。

○（六月七日　鎌倉）

明日は母上樣貴地に參られ候樣、御申に候。

信子氏の手紙に同封して、島村氏よりの手紙參り候。事は破綻に終るらしく候。

雨の中を藤澤に出て、二兒と敬子ちやんに土產を買ひ、電車に乘り申候。車掌はカバンを開きて、今朝より六拾四錢の收入ありしのみと申居り候が、車中はガラ明きにて、雨に曇る硝子窓よりは、七里濱の景色も眺めかねて歸鎌致候。二兒はおとなしく待ち居り候。

○（六月七日）

唯今二兒を湯に入れたる所に候。二人とも元氣に入浴し、行は旣に寢室に赴き申候。敏は晝寢せし故、まだ暫くは起き居可申候。

○（六月十日）

昨日は一日雨にて、淋しく暮され候半。今日は御見舞に參上致度存居候。今日も晴れげには見えず候よ。行光昨日より少々發熱の氣味なれば、出來る丈けの養生爲致居候。

○（六月十日　鎌倉）

昨日母上御歸宅にて、御樣子承はり安心致候。昨日は朝來執筆致候得共、何分氣進まず、思ひ切りて二兒を伴ひ、志賀の所に參候所、晝の御馳走になり、夫れより志賀の子をも伴ひ、要山に遊びくらし、三時半頃歸宅致候。行のせき激しき

樣子なれば、今朝は醫師に診察を乞はんかと存居候。今日は朝來の雨、執筆せんには此上なき日和なれば、又何處かに參らんかとも存居候。

祈御靜養。

○（六月十二日）

只今九時半、山本より歸來候處に候。高木、尺の一家も見えて賑はしく候ひき。園子の仕舞には感嘆致候。見せて上げ度存候。今日は母上樣御出でにて尉申候半。明日は御歸鎌なさるべきにつき其中又。

○（六月十五日　鎌倉）

天氣も全く晴れ渡り、子等の事も氣にかゝりたれば、今日はその儘歸宅致候。二兒共至極元氣なりし。今朝の汽車は失敗致候。八時五十九分と誤りし爲め、三十分待たされ、大船にて又三十分程待ち申候。家に歸りて直ちに淨書にとりかゝり、今（六時）まで勉强致候。

○（七月十二日　於東京）

昨夜は山内祖母樣及び叔父樣の爲めに、母上と御待夜致候。今日も又雨らしき空合、父上樣も御歸京相成候て、お淋しき事と存上候。朝は母上樣と本願寺に參詣の筈に付、晝の間には、石川、阪本諸氏を訪れんかと存居候。雨のやまざるに郵船の荷物取出しがたくて閉口致居候。やみ次第取よせ、處理致度存居候。

○（八月五日）

父上樣、せきに、厠にある赤き丸き箱持ち來れと命じ給ひ候處、傍にありし行三、取りあへず其處にありし林檎をつかみて父上に差上候由、中々の氣轉者なりとて大笑。

○（八月五日）

伊太利亞の碧き波際さすらへる旅人なりし我れも思はゆ。（海岸の繪はがきに）

瑠璃紺の草野に生ふる雲の花夏日照らせば赤に黄に映ゆ。

○（八月七日）

沈みたる船の帆柱くだけてもなほ天を指す夕暮の空。（難破船の繪はがきに）

○（八月七日）

ダキンチの心に似たる湖やシプラス黑く花ほのしろき。（湖の繪はがきに）

○（八月八日）

琅玕の色に染みたるさゞれ石は陽を知らぬげの夏の海かな。（海岸の岩出でたる繪葉書に）

○（八月八日）

潮ひけば醜き杭はあらはるゝ心沈めば湧くやかなしみ。（海岸に杭のあらはれたる繪はがきに）

○（八月九日）

はやち來と戸ほそに君の面見せず花のみ白し海の高樓。

○（八月九日）

大海原海の果てなる水くまの隅に小さき渦卷きか我れ。（渚の繪はがきに）

○（八月十日）

初秋は湖のほとりの橄欖の葉越しに寄せて靜かなるかな。（湖水の一隅とも見ゆる繪はがきに）

○（八月十日）

天地も祈る心や知りぬらしかの夕榮えの薄れゆく時。

今朝東京に參申可候。

○（八月十七日）

今朝は材木座なる野村氏を訪ねんと存居候。行も敏も至て元氣にてよく遊び居候。

○（八月十七日）

かう同じ樣な畫が續出しては、さすがの歌聖もはたと、詠嘆に困じ果て候。

○（八月二十六日）

昨日はとう〳〵御葬式に間に合はなかつた。敏を連れて參らなかつた。今夕か、明朝、鎌倉に參る積り、御輕快を祈る。

○（八月二十九日）

歸りには立派に汽車にまにあひ申候。夜は、敏と行との大活動に、一家腹の皮をよぢり申候。今朝は單衣にて膚寒き程の涼しさ、海岸に逢ふ人の少なくなれるは哀れに候。新潮は屆き候や。主人公の名だけが有島にて、事實は小生に關するものにてはないらしい。

○（八月二十九日）

兎に角、新潮笑草に御送り申上候。

今日は大和婦人會の規則書を書き、志賀、野村を訪ひて、別れを告げ度く存居候。父上樣に托しキヤラメルを御送り申上候。

○（九月四日）

昨日は札幌より野中、橋浦の二人來り候、案內の爲め、朝より諸所を廻り、晝頃建長寺裏の精進ずしを食はん爲め參候處、食事中白雨襲來、傘なき身の途方にくれて、漸く歸宅候處、父上樣東京より御來訪にて驚き申候。君にもあの雨の中にお出とは、思ひも懸けられざりし事と存上候。里見の件は別にお話無之候ひしや。同人より出京を促し參候間、今日電報來次第、一寸上京の心組に候。白樺到來致候。誤字の澤山なるには閉口致候。

君の熱は其後如何にや、看護婦も宜敷方に候や、御大切に。

# 一九一六年

## 吹田順助氏宛――一月四日於東京　〔一二二〕

先夜は久振にて大變愉快に存じました。

「ミケランジェロ」は非常に面白く讀みました。忠實な立派な譯をして下さつた事を御禮致します。あの內容と云ふ事よりもミケランジェロの性格を大づかみにあれ迄に理解し實現し得た作者の眼球に驚かされました。

金曜日御出發ですか。新年には又話材もお出來になつた事と思ひます。今夜足助、大島豐、外一名が話に來るのですが兄はお忙しいでせうね。奧さんやお子供達によろしく。

では御旅行の幸を祈ります。

## 足助素一氏宛――一月八日於東京　〔一二三〕

大島はどうも感じがしつくり來ない。先方でも僕に對してさう思つてゐたらう。

「洪水の前」は兄と僕と解釋が多少異つてゐるやうだ。僕はヤペテが方舟に乘つた事を妥協とは思はない。ヤペテのゐないノアの子孫を想像する事は僕には苦痛だ。あすこでヤペテに死んでしまはれてはいやだ。ヤペテがあすこで死ぬといふ事は却て容易な事かも知れないが、夫れは彼が運命の狂ひに對して妥協した事になると思ふ。運命の狂ひが本道に淚るまでぢつとこらへてくれる方が僕はうれしいのだ。

又一面に於て僕はセムに第十八世紀以前の思潮を、ハムに自然主義的の思潮を、ヤペテに到來すべき思潮を、代表させた積りである。ナアマといふ天才人の境界に對してセム、ハム、ヤペテが取つた態度によつて思潮の向ふ所を暗示しよ

うとした積りだ。

兄が自分をごまかしてゐたやうだと云ふのは、兄が僕といふものゝ價値に對して兄自身をごまかしてゐたやうだといふ意味なのか知らん。夫れなら僕は横面に一撲を與へられたやうな心地がする。失望はしない、然し十分の苦痛は感ずる。兄が兄自身の價値をごまかしてゐたやうだとの事なら、兄の自己反省のいつもに變らず鋭敏なのに感じ入らずにはをられない。ストームが來さうだといふ兄の言葉は何よりも僕を不安にする。夫れを如何に避け又は如何に突きぬけるかと云ふ問題に對する解答は到底僕の提供し得る所ではないが、兄がその難關を見事に切り拔けられるやうにと切に切に祈つてゐる。

生馬の作物についての兄の感想は大變面白く讀んだ。今月の太陽に書かれた「暴君へ」は第二者の手によつて自分を書き現はさうとしたものだ。夫れは兄に作者の面影について何等かの暗示を與へ得るかとも思ふ。

是れは率爾なお尋ねだが兄は今金に困つてはゐないか、若し居るなら僕に都合させ給へな。

明日は平塚に行く。昨日は草間が訪れてくれた。兄の上の事も色々心配してゐた。素直な性格が惻々として逼る。然しアゝ堅くなつてゐるのは氣の毒な氣がした。

## 足助素一氏宛――一月十一日　〔一二四〕

どうも運惡く會ひそこなうた。

注射の結果はもういゝのか、何しろ大事になさい。

「白痴」の最終巻は矢張安子の手許にはなかつた。

「夏繪」は英夫が自分の分だけ新小說から引きやぶつて持つて行つてしまつた。

其代り此に面白い畫集をお目に懸ける。三人純粹な心を持つた青年の所作だ。殊に恩地のものは光つてゐると思はれる。

平塚では淋しいゝ。此樣子ならうれしい事だと思つてゐる。今日兄がゐたら引張り出して冬の隅田川にでも行かうかと思つたのだが駄目だつた。仕方がなしに獨りで出かける。何しろ大事にし給へ。草々。

「或る女」はまとめて出す事にした。是から續篇を書く。

## 吹田順助氏宛――一月十二日於東京　〔一二五〕

御出發前にもう一度お目にかゝれなかつたのは殘念でした。御家族も無御恙お着きだつた事と思ひます。

一昨日洛陽堂の主人が來て色々話をして行つた序に、僕は兄のヘッベルの三譯文（マリヤ、ユーデット、ミケランジェロ）を一册にして出す氣はないかと云うたらよろこんで出したいと云ひました。夫れに藝文に載せられたヘッベルの傳を加へたら大層いゝものが出來ると僕は思つて居ますが、兄にはその氣はおありになりませんか。若しおありなら更に話を進めて見ます。兎に角御返事を願ひます。

昨日は足助君と隅田川を散策しました。淋しい冬枯れの景色には又一種の趣がありました。奧樣によろしく。妻も段々いゝ方です。左樣なら。

## 吹田順助氏宛――三月二十一日於東京　〔一二六〕

其後は大變な御無沙汰をしました。御許し下さい。先達の御手紙は大變感じ深く拜見しながら病人や何かの爲めに今日まで御返事を怠つて居ました。ヘッベルの戲曲を集めて出版される事については洛陽堂の主人の來宅を待つて相談しようと思つて居るのですが、主人は忙しいのかいまだに參りませんので埒が明かないで居ます。然し其中面會して何とか具體

的な御報告をします。若し今の飜譯中の一篇もお加へになる積りなら御申越下さい。
書きたい事はかなり胸の中に湧いて來ますが形態を與へるのに一種の躊躇を感じます。讀者に對して責任を感じます。この頃數多い雜誌の出るのを見ても、又その中に毎月幾篇となく所謂創作なるものが現はれるのを見ても、讀者が氣の毒だと云ふ觀念が愈〻深くなります。書いたものが屹度何等かの力に變つて行くぞと云ふ自信の持てる丈けの作物を提供しなければ濟まない事だと思ひます。さう思ふと自分の力の微弱が哀れまれます。
如何しても生活がまだ安定でありません、不安がついてまはります。こんな風で老いて行つたら僕の一生は一箇の徒事です。此處に僕のなし得る丈け大きな美しい深い生活を生活したい熱望は昨日も今日も離れずに居ますが、僕はつい惰力に引張られて一日一日と力を消耗して居るやうです。實に是れが情ないと思ひます。
逢阪君が「暗黒より光明に」と云ふ本を著しました。君は君として滿身の努力を爲した跡が見えて、近頃世に出た內部經驗の書物としては出色のものだらうと思ひますが、內村氏の「求安錄」と進路の餘りに一致して居るのは不滿を感じさせます。
僕も來九月頃からはどこかで教鞭を秉る事になるかも知れません。もつと僕に創作の自信があればこんな半チクな事はしなくともいゝのだがと殘念です。然し行く所まで行つて我慢の出來なくなるまで忍ぶ積りです。東京には今何にも心を牽くやうな事は行はれて居ません。昨日追濱から來た飛行機が墜落して將校二名が即死同樣に他界しました。そんな事に人が騷ぐ位のものです。然し僕自身も見て居たその機が二三分の後に微塵となつたと云ふ事は驚かれる事でした。昨日は一日その事ばかり思つて居ました。
妻の病氣は進退なしと云ふ有樣です。或は駄目なのかも知れません(かう書くのは恐ろしい事ですが)。不思議に切迫した心になります。
鹿兒島はもう暖かで櫻もそろ〳〵散む頃と思ひます。東京は今年は殊に寒う御座います。一昨日は雷鳴がして雪が降り

ました。この地の悪氣候にはつく〴〵愛想が盡きます。

## 足助素一氏宛――三月二十二日於東京　〔一二七〕

二度の御細書に對して今日までスッポかしてゐたことを許して下さい。この間から氣の落付く暇のない雜用を申付けられ、おまけに父の病後療養に一緒に大磯や熱海にも行つてゐて、毎日々々心を苦しめながらに御無沙汰してしまつた。先づは法事が濟んでおめでたう。

原との會見も思つたより平滑に面白く行つたことは祝着、會つて見ると憎からぬ男だね。

安子の病氣は注射の結果が此頃思はしくなくつて熱が出たりするので、今後一先中止することにした。矢張一進一退だよ。三子と僕とは幸に頑健だ。

「フランシスの顏」の批評はたしかに急所をつかれた。あれは筆が足りなかつた。作者があんな心を持ちながら少女の爲めに純化されて行き、それと反對に少女は何時の間にか處女になつたと云ふ風に書く筈だつたのだが、餘り頁數などに拘泥して其心地が少しも出來なかつたのだ。

責任を感じて見ると一の作品を出すと云ふことにも非常な苦痛が伴ふ。時間を浪費させる樣なことがあつても夫れだけで可なり心苦しく思ふ。讀んだ時間だけが實になるものが書けなければ、世に問ふことは考へ物だと思ふ。そんなことを思ふと、心苦しいことが多い。

兄の善後策は如何なつた。橋浦君に聞いたが兄から妙な質問が來たと云ふことぢやないか。何か目論見がついたのか。兎に角兄がゐなくなると何となく淋しい。東京でするやうな仕事が兄に目つかればいゝと思つてゐる。

僕は乘出した船だから當分創作に力を盡したいと思つてゐる。來月號には一生懸命で一つ書く積りだ。自分の心の休まる丈けのものを書きたいと思つてゐる。大膽なことかも知れないが、無謀なことかも知れないが、基督を舞臺に持出して

見たいと思つてゐる。

生活を如何にかしなければいけない、さう思ひながら僕は兄の十分一の開進もしてゐない。恥しいことだ。

健康は近頃如何だ。東京もまだ中々寒いから貴地が思ひやられる。痛む所はいくらかいゝのか。何にしても自愛を祈る。

今夜は借になつた手紙をすつかり書く積りでゐるから亂筆になつて失禮。

## 原久米太郎氏宛――四月十四日於麴町　〔一二八〕

昨日足助が來て呉れて兄の消息を委しく聞いた。兄からいたゞいた手紙は精讀して實に御同情をしてゐたが遂に例の筆無精から御返事をせずに居た。處が足助と色々話した結果兄に御無沙汰して居た事が非常に心苦しくなつて今筆を取つた。實に兄の御胸中を御察しする。是れが恐くは兄の一生の刺であらう。ドーか最終に於て愛兒が再び兄の懷に歸り來る日の一日も早かれと心から祈つてゐる。若し東京に於而僕がなし得る事があるならば無遠慮云つてよこしてくれ給へ。

不相變僕は閑散でゐる。傍觀者からは隨分氣樂な身の上だ。妻の病氣は四月に這入つてから面白くない。ヂリ〱と少しづゝ病勢は進んで行くやうだ。三兒及び僕は此頃は幸に頑健至極でゐるから安心してくれ給へ。勉强も心に描いた程には出來ないが兎に角やつてゐる。モー少し纏つた仕事が出來相なものだと自分ながらまどろこしい。

東京は昨日今日が櫻の眞盛りだ。貴地も嘸綺麗なことだらうが、目下お互に花などを賞美する氣はないねー。マー何しろ然し氣を腐らかせずに暮される事を祈る。僕も決して不幸に打捷たれはしない積りだ。

萬々一二十三日頃に一寸京都まで出るかも知れぬ。そしたら是非御面會したいと思つてゐる。夫れでは今日は是れで失敬する。

## 足助素一氏宛――四月十八日於東京　〔一二九〕

今朝吹田君から返事が來た。それを見ると僕の激烈な言葉によつて激昂もし失望もしたと思はれる事が胸に響いて一寸封を切りかねたが、開いて見ると彼が失望の中にも落膽せず最後迄牛の如く戰つて見せるといふ言葉があつたので、漸く胸を撫でおろした。

藝術家としての素質は十分だからもつと染浸してくれと云つてやつた。僕は或はおほそれた迷妄を彼に暗示しようとしたのではないかと云ふ恐れさへ感じないではない。然し吹田の最大の感興が文學に係り最大の嗜好が文學にある以上彼をして文學者たるの道を步ましむるのが一番いゝ事だらうと思ふ。誰が彼の將來を的確に語り得よう、彼の自我が本當に目醒めた曉の眞狀を豫言し得よう。畢竟我々は何等かの意味に於て理想の夢を追ひつゝ此世を過り去るものだ。吹田をして彼の夢を心ゆくまで夢ましめよ。

是はやがて始終自己を疑ひ通してゐる自分の上にもあてはめたい所のものだ。吹田は藝術を最愛すると敢言し得る。而して僕は？

宮原から手紙が來て吹田の作品を見たいと云つてよこした。然し是れは見すべきものでないと思ふから、兄から直接吹田の方へ送り返してくれ給へ。

末光の態度（僕の作物に對する）が兄の解釋するものの如しとすると、僕は末光が歷史や文學を硏究せんとするのは根本的に間違つた考へだと思ふ、是れは一つ末光に云つてやりたい事だ。

この次の日曜には出懸られるか如何かはつきりしない。日曜の晝に宮原が來たいとも云つて來てゐる。宮原は今夜外出の出來ない健康にあるのだから家に居ようかとも思つてゐる。同時に行光が二日前から發熱して臥床してゐる。タメクソらしい、今朝は通じがあつたから、大抵は日曜までにはなほるかと思つてゐる。兄等が出懸けるときまつたら何處に待ちうければいゝか豫め知らして置いてくれ給へ。

吹田の手紙はいらないから御讀了の上は破毀して下さつていゝ。

## 足助素一氏宛――四月二十九日於東京　〔一三〇〕

この間は御端書多謝。成程あの批評は肯綮を得てゐる。然し神と貧窮との關係についてあれ以上の解決を與へるには天才者でなければ出來ないことだらう。逢阪としてはあの儘で進んで行つて差支ない事と思つてゐる。僕はあれからまだ逢阪に書くのをおこたつてゐる、氣の毒だとは思ひながら。

露店日記は大層面白く讀んだ。あの中に兄の內の美しい光が瞥見されるのが殊に僕にとつては愉快だ。兄を知らない人には唯おもしろをかしいものとして映ずるかも知れないが、兄を知れる僕にはそれ以上の深いものに接着する。もう少し貸して置いてくれ給へ。

原から封入の樣な手紙が來たから御廻送する。

妻は來月二日か三日に愈〻病院の傍の借家に引移らす事にした。もう家も借りた。是れで又氣分が一轉してくれゝば難有いと思つてゐる。

毎日いやな風が吹くね。お障りないか。御大事に。草々。

## 原久米太郎氏宛――四月二十九日於東京　〔一三一〕

御手紙ありがたう。本間氏の事は成程僕も聞き及んで竊かに敬服してゐた。其奧さんと云ふのもえらい人らしい。學校の一年や二年は何んでもない、若し同氏夫妻が眞劍にあづかつてくれるものなら賴むがいゝと思ふ。唯こゝに心配なのは氏は出獄者感化を事業としてゐるその事が嘉憲君に如何なる印象を與へるかと云ふ事だ。もう一つは彼所には幾多の兇狀持ちがゐるにきまつてゐるが、夫等の人々と接近する事が如何なる結果を齎すかと云ふ事だ。兎に角依賴するにしても兄が一度同氏を訪問せられて彼所の樣子も熟察し、氏の人格と嘉憲君の性質との釣合も研究される事が必要かと考へるが如

何なものだらう。

兄の苦衷は實に御同情に堪へない。何卒最善の道が發見される樣にと祈つてゐる。

次に僕の妻は開花頃の惡氣候にやられて大分痛められてゐたが此頃は稍囘復した、何分一年以上病院生活をしてゐたので全く倦厭を來たしたらしいから、來月初旬には近傍に借家をして一先退院して養生させる積りでゐる。

來學年からは僕も慶應大學で文學の講義を持つ事になつた。どうせ十分な事は出來ないから僅の時間を貰つて一年間ホキツトマンの演習的講義をする心算でゐる。兎に角今度のは英語でなくつて英文學だから興味は非常に多い。

あの手紙は直に足助に廻送しよう。

御一家の御健康を祈る。不取敢愚考を申述べる。敬具。

## 丹治七郎氏宛——五月五日於東京　〔一三二〕

拜呈。其後は打絕御疎音申上候段平に御海容被下度候。

偖て承及候得ば此度は御好配を迎へられ新家庭を作られ候由、人生の一大事御成就の程慶賀の情に不堪候。希くは伉儷永へにこまやかに常に一家の春を占められん事を。

別封讀み古したる書物御送申上げ誠に恐入候得共、小生の經驗を以てすれば書物のみは贈與者の眼を通したるもの却て情味深きを覺え候得ば、已れを以て人を推すの嫌は有之候得共敢て机下に致し、小生が歡情の記念として御笑納被下候はば幸甚に御座候。尚未得拜芝且未筆恐入候得共新夫人にも何卒宜敷御鶴聲被成下度、此段不取敢御慶のみ。草々敬具。

## 宮部金吾氏宛——六月十八日　〔一三三〕

拜呈當地は連日梅雨にて鬱陶敷事に御座候處、尊地は清涼肌によろしき初夏にて御一統樣益〻御清適の事と遙察奉慶賀

候。

最早學年の末期も近きあの頃の緊張したる空氣もそゞろ感ぜられ候樣にて、兎角札幌の事念頭に浮出候。

謙二君には滿洲に赴かれ候樣噂に承及居候處、異りたる風土にもさしたる御恙もなく御勤務相成居候半、御留守になりては御居常に淋しく被爲入候事と奉存候。下りて拙方は妻事宿痾依然快方に不向依然平塚にありて治療を續け居候。然し病人も幸に未だ希望を拋ち不居、何とかして全治せんと努め居候間此に一縷の道あるを覺え精々看護に盡力罷在候。小兒輩は幸に頑健にて、母の手なくも兎に角育ち居、小子も頑健に消光罷在候間乍憚御放念被成下候樣奉願候。

在札中色々と御厚配を蒙り候事は忘るゝに由なく、時々妻なども御噂申上感謝罷在候。この拙書も何卒其意の萬分一を表明するものと御覽被下度、尚又東京に御用も候節は何卒無御遠慮仰せ越され候樣奉願候。

今後共折角學界の爲御自愛相成度、末筆恐入候得共夫人にも何卒小生共の衷心の好意御傳被成下候はゞ難有奉存候。

先は御左右御伺旁、草々頓首。

## 原久米太郎氏宛——於東京　〔一三四〕

千九百十六年六月二十六日蕭々たる雨。

原兄。

こちらからこそ非常な御無沙汰をして濟みませんかつた。嘉憲君の事も早速御報知に預り非常に安心もし喜びもしてゐながら御手紙も上げずにしまつた事をお許し下さい。

兄の基督教に對する御考へは今までのものとは全然ちがつた響を以て私の心に徹底しました。僕は兄が向上の一歩をしつかり踏みしめられた事を非常に愉快に思ひ、且つ祝賀します。而して心竊かに羨ましくさへ思ひます。而して僕は衷心から兄の信仰を尊敬します。僕の心にも徐ろに何者かゞ形を取りつゝあるけれども、まだ誰にも發表し得るやうな狀態に

は進んでゐません。

兄の仕事が益〻面白くなりつゝあるのも實に愉快です。兄の永年の雌伏が遂に酬いられる時が近づいたのです。僕の慶應の仕事はある事情の行違ひから當方から斷つてしまひました。病妻の病氣は此頃一段惡い方に進んだやうです。然し僕はまだ彼女を救ひたい希望に滿ちてゐます。彼女が死の方に引付けられるに從つて僕の彼女に對する愛着は增して行くやうです。彼女の中に見出される美點が擴大して考へられます。他人の美點に見る君子の心が段々僕の中に眼ざめるのを覺えます。兎に角「死」の力の大きさと崇高さとをしみ〴〵感じます。ホヰツトマンの「死の頌歌」にもうたひ盡してないと思ふ美しさを感じます。

今農大の入學試驗が東京で行はれてゐる、夫れに僕は臨時傭ひを命ぜられて早朝から奔走してゐます。二十八日にはすむでせう。この頃は色々な事情で作物も出來ず、聊か淋しい氣分になつてゐますが、その中には又力を得る事と思つてゐます。

足助は此二三日病氣で弱つてゐるやうです。盲腸炎だと思つたのがさうではなくつて仕合せでした。彼も年と共に美しい人になつて行きます。然し彼の眞面目さが彼に要求する深い煩悶には同情せずにはゐられません。而して如何して救ふべきかを知らぬ無能を僕は自分ながら遺憾に思ひます。

壬生馬は妻と離緣しました。悲しい事實です。一人の娘はあはれな顏をしてゐます。その事情は筆にするには餘りに繁雜です。八月にはゆつくり遇つてお話しませう。この間僕の長男と壬生馬の娘とは庭の小さな先祖の祠に行つて「マヽの病氣がよくなるやうに」と二人で祈つてゐた相です。（娘にはマヽは病院入りと申してあります）英夫婦は幸福です。僕の兄弟位感情の上で苦勞する奴等は一寸珍らしい樣です。苦勞を知らないと人から云はれてゐる奴等の間にこんな事で苦しんでゐる奴のあるのは妙です。

今日は心が急はしくて思ふ程書けません。唯〻御手紙の御禮丈にしてその中更めて書きます。八月を待つてゐます。

## 佐藤しげゐ氏宛——七月二日於麹町　〔一三五〕

唯空し五月雨の空打見れば果てしもしらぬ鈍色にして

毎日五月雨が降つて居ます。妻の病は段々重つて行くやうに見えます。札幌の方から私共の上を問うて下さる人の薄れて行く中に君が折々やさしくも尋ねて下さるのがうれしく難有く思はれます。君の上にもよい健康とよい幸福とが來るやうにと祈りながら。

## 吹田順助氏宛——七月十八日於東京　〔一三六〕

非常に御無沙汰してしまひました。お許し下さい。この夏休暇には御上京なさいませんか。原久米君も上京の由申して來ましたし、小樽の宮原君も今大森に居ますし、秋元蘆風君も東京ですし、足助は固より小石川にひかへて居ますし、面白い一夕の會合が得られるかと思ひますが如何ですか。

書物出版の事は一口もきかない中に洛陽堂が出す事にした相ですね。實にお頼まれ甲斐のない事で誠にすみません。然し大變結構でした。あの出版は必ず讀書界を補益する事が多いと思ひます。早く一册の形となつて現はれる事を渇望して居ります。

私の創作慾はかなり旺盛なのですが周圍の事情が其慾を壓抑して困ります。今も一つ手をつけて居るのですが來月號の白樺に間に合ふや否やが疑問です。

いつまでも空虚な生活をつゞける事が甚だ苦痛になります。私のやうにパンの問題に苦心を要せないものはもつと人生に對して眞實であり、勤勉であらねばならぬと思ひながら、今日々々のおこたりの爲めに何にも仕でかさずに居る事は考へる毎に苦痛を與へます。全く何と云はれても返す言葉がありません。恥ぢ入ります。妻の病氣は眞に膏肓に入りました。

食慾が全く枯渴して非常にやせた樣は見るも痛はしく思はれます。死が近くにつれて私には彼女に對する執着が强くなつて行きます。

彼女に對する是迄の態度についての後悔がむらがり起ります。

東京はかなり暑い事ですから貴地の暑さが思ひやられます。然し夜の八九時頃のあの凉味は今だに忘れられません。白のカタビラの殊にうつる鹿兒島の夜は强い囘想を今でもよび起します。

奧さんも御子供衆も御元氣ですか。赤痢は流行し出しはしませんか。東京でもぽつ〳〵はやり出しました。高熱を伴ふ下痢が起つたら應急の手當としてヒマシ油を與へ腸に灌腸を爲し溫濕布で胃腸部をあたゝめる事が必要で、醫師を迎へる前是非夫れ丈けの事をしないと駄目だと云ひます。發病の初期は實に三分四分を爭ふ相です。

御上京を心待ちにお待ち申します。

## 有島生馬氏宛――七月二十二日於麴町　〔一三七〕

無事に御着きだつたと思ひます。曉ちやんも疲れはありませんでしたか。先着の子供達は噪よろこんでお迎へした事と思ひます。行郎の云ふ所によれば手荷物は一汽車おくれたかも知れないとの事御不自由でせう。

象爺やが今朝地圖その外のものを荒木氏の所に屆けました。受取の手紙が封入してあります。爺やが云ふには地圖の間とかにはさまつて手紙があるとの事であつたが捜したけれどもなかつたとの事です。

「孤鴛鏡中影」は僕がモデルになつて居ると云ふ事が氣になつて面と向つて感想を述べる事が出來ませんでした。立派な作品だと思ひました。日本人で支那をあれ丈けに觀察した人は（縱令印象的にせよ）まだなかつたし、又容易に出る事もないと思はれます。北京に這入つてからも面白いが途中の叙景は僕には非常に印象の深いものでした。異國の風味が新鮮な果物のやうにさく〳〵と味はれます。辰雄は僕を恥しめます。あの作物によつて僕の心の鞭うたれた事は少しではあり

ません。自分の不徹底な性格が浮彫にされて反映する樣に僕には思へました。僕の性格が辰雄にまで達するには如何に努力多い精練を要するか。悲しい事です。

昨日は午後から鎌倉に書きものに出かけました。途中で園田のをぢさんに遇ひました。「南歐の日」を半分程讀んだと云つて色々云つて居られました。禁止になつた文章にも目星をつけて居られました。それが的中して居ます。兎に角がら〳〵して居る薩の先輩中にこの文明人のある事は珍現象でせう。

お千代さんにも遇ひました。僕なんぞが遇ふとそんなに變な樣子もありません。新宅は割合にいゝ處です。

霧と云ふ題は「潮霧(ガス)」と云ふ題にかへました。潮霧は一寸いゝ造語と思ひます。いくらか象徴的なものにしたい考へです。

滿足なる作品が出來ますやうに。

「孤鴛……」の中に陳子の家出の處があります。あすこは些か愚かも知れないけれども話者の第二者が第三者になつたり、第三者が第二者になつたりした混雜がある樣です。それが氣になりました。

## 嚴父宛――八月一日於平塚　〔一三八〕

前略。本日五時半當所に參候處折柄偶然醫長來診中に候ひし。病人は此四日見ざりし間に甚しく衰弱致し、激しき呼吸困難に陷居候處にて不思驚愕仕候。醫師は早速注射藥を取よせて注射を施し候處、稍々安靜を得候樣なるも脈搏なども不整を極め居候。歸時醫師小生を戶外に招き、容體著しく險惡なれば頗る警戒を要すと申して一先引取り申候。春の云ふ所によればかく激しき呼吸困難を來せしは今日がはじめてなれども、此數日來凡てに物憂く髮を整へ候にさへうるさがり居候由。一時の現象として過ぎ去るものにや、或は醫師の言識を爲し候ものにや、固より判りかね候事ながら一應容體至急御報

知申上置候。明日あたりの模樣によりては恐入候得共母上樣に御歸京を願ふやう相成候事かとも存居候。
小兒のことは醫師に相談致候處、病人自身の希望あるまでは面會は其儘に致當候方可然とのことに御座候。
先は右迄。草々敬白。

## 有島生馬氏宛――八月二日於平塚　〔一三九〕

子供の御世話を何共難有う。
安子からも何事も云はず僕からも何事も云はず二人は靜かに永訣しました。
僕は彼女の愛を虐げなかつた事をうれしく思ひます。愛のふみにじられなかつたものゝ死は美しいものです。今はもう悲しむべき時ではなくなりました。
安子が二月八日に書遺した文の中に、
子供達には私の死と云ふ事を知らせない樣にしていたゞき度いと思ひます。御葬式などには參列させないで下さい。小さな淸い子供心に死とか御葬式とか云ふ悲しみを殘させる事はほんとに可哀相で又惡い事で御座います。ほんとにどうぞ知らせないやうに、お葬式の日などにはどこかへ遊びにやつて下さい。女中達にも皆んなに云ひつけて決して私の死を知らせては下さいますな。必ず〳〵。大きくなつて知る時が參りませう。それまでは病氣と云ふ事にして置いて下さい。
と子供の事が書いてありました。
これは皆さんの前で讀んで贊成していたゞきました。出來る丈け實行したいと思ふのです。安子の希望は三人の子の上にあるのですから。それ故君が上京される共子供丈けは輕井澤に殘して置いていたゞきたいと思ふのです。山本の子達も居る事ですから可能の事かとも思はれます。然し餘り淋しい樣子なら連れて歸つて下さい。而して葬式の日には本當にどこかに遊びにやりませう。

安子は僕一人の介抱の許に逝きました。誰も末期には間にあひませんでした。それが不思議にも彼女の遺志であつた事を遺言の中に見出しました。

僕は悲んで居るのか喜んで居るのか分りません。多分喜んで居るのでせう。涙の出るのは美しいものを見て出る時の涙のやうです。然し遺孤の事を思ふと胸がさけます。

## 宮部金吾氏宛――八月七日　〔一四〇〕

先生。

先生の御好意と御同情とを感謝するの外何物をも不知候。永生の存否は小生の未だ窮め得ざる所に御座候得共、在天若し靈あらば故人は先生に對して滿腔の感謝を捧げ居可申候。老親兒輩永久に先生の御厚意を忘るゝ能はざるべく候。人生の苦味を變じて之を甘味となすの錬金術は難事なるに相違無之候も、不可能事にあらざる限り小生極力戰鬪を續け可申候間幸に少しく意を安んじ給はり候様奉願候。

葬儀を終へて歸家し、來弔者且つ減じ且つ去れば、屋下蕭條の秋の來らんとするを感じ申候得共、亡妻の記憶は淨化せられて一輪の白菊花の如く淸く胸中に香を放てるを覺え候。少くとも小生のある限り兒輩の生くる限り彼女は生き且つ愛せられつゝ可有之候。

感謝の意を表するに當り、愚衷妄りに披瀝御推讀奉願候。敬具。

八月七日妻を土に埋めたる午後

## 足助素一氏宛――八月八日　〔一四一〕

あれから家に歸り着いて見ると內が何となくガランとしてゐた。

弟妹等が歸つて來た時僕が挨拶しようとすると聲がつまつた。而して一同ははげしく泣いた。

何處か高い處から人間の活動をアミーバの動くのを見る樣に見てゐる眼があるとすれば、人間と云ふ小動物は幸福の時には集團が散漫になり、不幸の時には突如としてギュッと集團を堅くするやうに見える事だらう。我等兄弟も寒さに身を寄せ合ふ蠅のやうに心を寄せ合つた。是れが僕に淋しい熱い涙を催さしめた。

亡妻の上を僕はどうしてもさう悲しむ事は出來ない。彼女が生きてゐた時よりも彼女は緊密に僕の胸に結び付けられた。是れは悲しむべき事實ではない。信仰の向上？　悲痛を味ふ事が信仰の成立つ條件とするのは如何しても僕には判らない。悲痛とか不幸とか云ふものは僕の心を引きしめ益〻戰鬪的にするかも知れないが決して信仰的にはしない。

今度の事は僕の宗教心に何等の動搖をも來さない。然し僕の人生經驗には深い感銘と敎訓とを殘した。

子供の事を思ふのは悲しい事だ、僕は明後日彼等を慰むべく輕井澤に旅立つ。彼等はパパの來訪を一日千秋の思ひで待つてゐる。

弔歌

我子等よ御空を仰げ今宵より
　汝を見守る星出づらむぞ

三兒に代りて

母君よ我が母君よ母君よ
　わがはゝぎみよわがはゝぎみよ

八月八日安子の死より七日の後夜

足助素一氏宛――八月十日於輕井澤三笠山下淨月庵　〔一四二〕

午後二時某分輕井澤着。三兒笑つて來り迎ふ。風雨。涼冷。靜寂。彼女逝きて既に九日。或時は死せるにあらずと思ひ又ある時は彼女の死、世を隔てたる過去に起りし事の如し。

## 有島行郎氏宛——八月十一日於輕井澤 〔一四三〕

Dear Yukio :——

The kindness which you show me at my irreparable loss strikes me as strong as gratefully. Never have I felt such a strong relationship between us. Now that Yasuko departed from me never to come back, I shall cherish her dearest memory in my most sacred corner of my heart, and strive to do my very best to accomplish my aim in the world and to rear my children as ideal as possible.

I feel sad that I am not able to see you off on the occasion that you start for the accomplishment of your life purpose and personality. But I send you my best wishs and prayer for your success all the same. Go ahead with your brave and honest soul. There is no place or person to fear as long as you hold yourself upright. Take great care of your health, and study thoroughly whatever things which may serve you advantageously. Think that you study at your father's sweat and toil. Every cent you spend is born from your old father's work. Be extremely prudent in spending your money. But whenever necessity forces you, do not fair to loosen your purse so as not to make yourself a laughing stock. Do not also forget that it is a great sacrifice for your old parents that they allow you to go abroad in spite of their advanced age.

The following is what I wanted to ask you before I part from you, but I have neglected until now, encumbered by several hindrances. But now I ask you frankly if you have not any young lady in your mind whom you desire to take in as your half self. If perchance you have such, please tell her name to me If the circumstance was suitable I shall do my best to

get the consent of parents and her for your future wife.

Beside many petty things, I think I have said what I wanted to say.

Hope your voyage shall be smooth, and you may find agreeable aboard and surrounding when you arrive your destiny.

Whith best wishes.

Your loving brother,

Takeo.

## 吹田順助氏宛――八月十七日於輕井澤　〔一四四〕

端書で失禮。兄の尊い慰藉のお言葉を私は取りすがるやうに拜見しました。實に難有う。私は今三兒の住む當地に來て彼等と暮して居ます。三兒はまだ母の死を知りません。而して暢氣に遊んで居ます。私も毎日暢氣にして一心に妻の遺文を寫して居ます。死は人を遠くするよりも近くするものだと云ふ事實だけははつきり合點がゆきました。妻も私を今本當に理解して居るでせう。

## 足助素一氏宛――九月五日於輕井澤　〔一四五〕

原から手紙が來た。上京するとも何とも書いてない。兄の夢を見た相だ。兄が旅姿で松原の間を歩いてゐた相だ。大變無沙汰してゐるから宜しくとの事。故人の遺稿「松蟲」の初稿を了した今夜。この頃は輕井澤も何んだか暑い。然し薄の穗が白んで晝間でも蟲が鳴きつゞけてゐる。客はどん／＼歸つて行く。こんな所で客のゐるのはうるさいものだが、減るとなると何とも云へなく淋しくなる。原からは神に歸れと云つて來た。歸れるものなら歸つても見たいが……

## 原久米太郎氏宛――九月十二日於輕井澤三笠　〔一四六〕

神戸あたりも虎疫流行の由折角御要心の程祈上候。輕井澤にも珍ら敷外來の客より同病流行し、一時は人心恟々たる様に候ひしが目下は下火に相成居候。此に參り候てより小生も大に健康を囘復し、積日の困憊漸く癒ゆるも近きを覺え申候間幸に御放念被下候樣願上候。

信仰生活の事につき熱烈なる御勸誘感謝の外無御座候。敢て理智一片を以て人生を翫弄せんとするにあらず、出來得るならば不動の信仰生活を得度しとは存居候得共、目下の心境不許之、遂に不可解裡に彷徨致居候事遺憾ながら致方無之儀御了察願上候。物にあざむかれ易く而かも一度あざむかれたるを自覺する時には非常な猜疑心を以て之れに臨む、生來の痼疾の致す所に候半か。尙今後共御高示を煩度候。

足助にも相遇はざる事久しく御座候、この頃は餘程物淋しさを覺え居候樣時々の短信に見やられ申候。骯髒なる彼の生涯は一篇沈痛なる詩と可申候。

今月中旬頃には又山を下りて東京の住民と相成るべく候。今夏兄の來京を待設けたる事も無益と相成候にや。秋とも相成候はゞ御上京如何にや。燈下に一夜を明かして鼎座淸談せん事を望むや切なるもの御座候。

先は右一札迄。頓首。

## 佐藤しげゐ氏宛――九月二十一日於輕井澤　〔一四七〕

今夜は十五夜なるべく候。若し天晴れなば碓水峠の古驛舍に至り飽くまで中秋の月光可親候。

先達は委細の御手紙、この度は端書にて左右御尋ねこし下され難有御禮申上候。

例の件は小生未だこの地に滯在致居候爲め運び不居延引申譯なき事に候へ共、この件の落着は到底性急には參兼候事と

存候間御氣長に首尾を期せられ候樣豫め申上置候。尙小生の「宣言」一部分御讀み下され候て益々御決心を固められ候樣にも承り候處、此件は或る意味に於ては實際世俗の習慣を打破したる行動なれば、謂はゞ一種の戰爭に御座候。その御覺悟も亦豫めなされ置かれ度祈上候。

尙御暇の節小生の「宣言」は全部御通讀を煩はし度、事件の內容人物の性質等は全然モデルと異り居候へば、其邊も御含みの上御熟考の一助とも相成候はゞ幸甚に御座候。

何しろ君の上を思へば不思淚致し候。然し思ひ給へ、大事なる人生を享けながら土偶の如く生活の表面を滑りて死し去る人多き世に、世の眞味を嚙みて血に至りたる君は畢竟生きて甲斐ある生を成せりと可申候。君は或る意味に於てねたましきまでの幸福人なる事を忘れ給ふべからず。

幸に、東京のも輕井澤のも虎疫は家族に災する事なくして相すみ申候。本月末には再び都門に歸可申候。

札幌の朝夕は寒きまでの時も候半。殊におからだ御注意相成候樣祈上候。

當地の秋風は今頻りに候。

美しきお歌に候ひしかな。

## 佐藤しげゐ氏宛――十月一日於麴町　〔一四八〕

安子を記念する「松蟲」が出來ましたから一冊お送りします。お暇の節に讀んでやつて下さい。其處にも一人の生活がさゝやかながら窺はれると思ひます。偶然にしろ、知り合つたものは互に愛することを學ばねばなりませんね。人世は寒い。

## 八木澤善次氏宛――十月一日於麴町　〔一四九〕

拜復長旅を終へて歸京致候處貴書机上にあり拜見致し候。

リビングストン傳をお讀相成小生に對し御好意を寄せ下され候由恐縮の至りに御座候。

殊に農政御研究につきて指導を得たき旨仰越下されし事、身に餘る（一字不明）遇に御座候へ共、目下の小生の境地を御實見に相成候はゞ兄に幻滅の不快を與へん事を恐れ候ものに御座候。

小生は此傳を世に公に致し候頃は殆ど盲目的に信仰の生活を送れる節に有之、殊に同友森本君の熱意にかられてかの譯著を成せる次第に御座候が、其後小生は立脚地に疑惑を生じ目下も尙迷霧の中に彷徨致し居る有樣にて到底信仰生活に於て他人を指導することは思ひも寄らぬことに御座候。又農政問題は札幌農學校在學中專攻致し候所なるも元來の傾向は稍方面を異にし居り、北海道に農場を有し居るも其經營に於ては我れながら遺憾千萬なる事のみ多きを恥づるものにして、決して兄の模範たる事能はざるものに御座候。

右樣の次第御含みの上尙思召有之候はば一度御來訪下され度、小生の意中も誤解なき樣御話致度存居候。御訪問の節は豫め一應日と時間とを御通知下され度候。夜が一番都合よろしく御座候。先は不取敢御返事のみ。萬々件の如し。

## 吹田順助氏宛――十月三日於東京　〔一五〇〕

殆んど二月に達する輕井澤の滯在から九月二十九日に東京に歸りました。今年はもう氣候の變化などを案じわぶる必要はありません。それ丈け淋しい樣な氣がします。

兄の眞情に滿ちた御慰藉は今も僕の心の中に力となつて働いて居ます。かう云ふ場合に感ぜられる心と心との間の結果は平生の夫れを全く無視し得る程にかけはなれたものだと云ふ事を知りました。僕は淋しく悲しくないか、そんな事はありません。日が經つにつけて今まで豫想も出來なかつた、深刻な寂寞が心のどん底を襲つて來る事があります。而かもその同じ僕が妻の在世中は家庭を厄介視し妻の不在をさへ願つた事があります。妻の死を假想する事が僕の一種の自由と解

故の快感を與へた事すらあります。今でも眞實を告白すると僕の心のどこかにはそんな風な感じがたゞよつて居ないではありません。僕は一體獨りで居るのが好きです。然しそれは僕の消極的な退嬰的な性質がさせる業です。僕の積極的な一面は一箇の生命の盡滅に對して醫すべからざる痛みと渴きを覺えます。

別封の小册子は兄に如何なる感想を起さしめるかと聊か察せられます。

手前味噌の味のいやにきいた御馳走に兄は一寸胸を惡くされやしないかとさへ察せられます。然し其處には兎に角死に當面した一女性のいつはらざる生活の斷面があります。

さゝやかながら美醜蔽はざる人生を材料として御憫讀下されば幸です。もう何んだか氣がめいり出しました。失敬。

## 有島生馬氏宛――十月十九日　〔一五一〕

ヨロコビ　ココロオドル　タケオ

〔信子歸宅せし折受取りしもの、生馬〕

## 足助素一氏宛――十月二十一日於狩太村　〔一五二〕

收穫の終つた畑の淋しい農場から一筆。十七日に此處に着いた。僕にも子守唄が聞えるやうに思はれる。昨夜はまた不眠にかゝつたがこの頃は概してよく眠る。今日は早曉大地を轟かすやうな雷鳴があつてから寒い風の吹く曇日に變つた。而して枯葉がもみがらのやうに天にも地にも飛ぶ。

泡鳴の「筧博士の古神道大義」と云ふ册子を讀んだ。而して或點で感心した。兄も讀んで見給へ。暗示があるかも知れない。

## 足助素一氏宛――十月二十六日於札幌旭館　〔一五三〕

今夜宮部さんの所で竹崎と末光と一緒に晩食の馳走になつて宿屋に歸つて來たら、農場から廻送された兄の手紙があつて久し振りで消息を知つてうれしかつた。

安子が死んでから札幌の荒れ果てた家に入つた時ほど悲しく思つた事はなかつた。何といふ寒さと淋しさだらう。過去といふものが囘復の出來ない物凄い姿となつて僕の目の前に立ちふさがつた。僕は今日も朝から一日其處で過した。何人も何物も與へてくれなかつた深甚な交感が心の髓をわなゝかして襲つて來た。明日も其處で過ごす、明後日も其處で過ごす。

此處では黑百合會が開會中だ。一寸いゝ畫がある。岸田劉生氏の參考品は（僕が持參した）非常な强味を持つて光つてゐる。

原から手紙が來て、兄に須磨の例の詩人の集を送つたが住所不明で返送して來たとしてあつた。それで兄はひよつとすると僕の旅中にまた飄然として旅程に上つたのではないかと思つて實は心配してゐた處だ。この頃は靜かでさへあればよく眠る。安心してくれ給へ。

廿九日には出發する。直歸するから近い中に御面會が出來ると思ふ。

札幌の空氣のよさよ。祈御健在。

## 足助素一氏宛――十一月十六日　〔一五四〕

兄對宮原君の事に關しては是れ以上僕は何も云ひたくない。僕は宮原君が兄の處に行つて話をしたら誤解は誤解で解け理解は理解で出來る事と思つて宮原君にさう云つたのだつた。

宮原君の手紙も見た。氣に喰はぬ處もある。然し要するに彼も決していゝ加減なことを云爲する男ではないと思ふ。其處に相互の理解さへ成り立てば他は末事に過ぎないのではないか知らん。
天氣のいゝ時行くにしても行光は二時迄幼稚園があるから其後になる。其積りで願ふ。此頃の日曜日には子供達にせがまれて鎌倉に行くことになつてゐる(晴天なれば)。若し兄もお暇ならば來遊如何。來るなら八時半頃までに此處まで來て吳れ給へ。
父は胃癌になつた(幽門部)。死は彼の上にも動かすべからざる事實だ。然し彼はそれは知らない。漸次に衰弱して行くが今日明日といふことはない。今更父の死を希つた事などが逃るべからざる罪の如く考へられる。僕の上にも色々な運命がやつて來る。よろしい、僕は負けてはゐない積りだ。

## 足助素一氏宛――十一月二十二日於麴町　〔一五五〕

幸にも父の病氣は進み方がおそい計りでなく、炎症が癒ると共に食事も多少出來る樣になり相だから一先安心して下さい。
日曜日の遠足は快かつた。兄のゐない事が非常に惜しく思はれた。
又病氣の突發とは驚いた。脊髓などでなければと祈つてゐる。何しろ十分に用心して早くなほし給へ。父の病氣について二所から敎へられたが、牛込神樂坂下のかもじやの前とかに居る谷磯次といふ灸點師は中々えらいらしい。治療一度三十錢との事だ。僕もその中お見舞に行きたいと思ふが、母も疲勞のあまり病臥したので一寸動きがとれないのである。

ミレー傳を書くので中々一生懸命になつて居る。戯曲になる程緊張した一生だ。

### 佐藤しげゐ氏宛——十一月二十四日於麹町　〔一五六〕

かの時強くは云ひ給ひたれども其後君の上を思へば云ひやうもなく御氣の毒に存上候。然し宿世の事は致方なし、是れに打負けず御精進の程のみ祈られ候。名鐘は之れを撲つ事愈々はげしければ其聲愈々淸くしていよいよ高し。君の愛が一層擴張して包括的となるはこの機を措きて他になかるべくや。御自愛祈上候。

瀧の川の事は其後如何御考へに候や、話を進むべきや。もしさならば履歴書おつかはし下さるべく候。僕一箇の考へは先般も申上候通り、此際良緣を得られむ事に候。それにつきての御考へは如何。

さて小生は、淋しけれども強く生活致居候。父も先頃來胃癌の疑を受けて病臥し、母亦近來多病、不幸は無二無三に僕の身邊を襲ふげに候。それも亦よき事に候。强からん間にあらん限りの苦杯を滿引するはよき事に候。

寒く候半、御自愛を祈る。

御願ひ申上置候牧內菊野は其後參上致候や。彼女よりは何とも申參らず、參上の節は宜敷願上候。

### 原久米太郎氏宛——十一月二十四日於麹町　〔一五七〕

先般は御手紙多謝。嘉憲君の歸來は實に御一家の春來とも云ふべき事と人事ならず嬉しく思つて居る。竹崎氏とは札幌に行つた時話し合つたがまだ僕の腑には落ちぬ。宮部さんの所で一緒に晩餐の馳走になつた時、離れぎはに「有島君はソクラテスでも出て來なければ迚も駄目だ」と竹崎氏から引導を渡された。頑肯遂に度すべからずか。然し僕もガムシヤラを張り通すのでは決してない。道に對して謙遜な心は決して失つてゐない積りだ。歸るべきものならば歸つて行くから安心してくれ給へ。

行坊主に兄から送つて下さつた軍艦の畫を見せたら封入の樣なものを書き居つた。御禮の心だ相だ。父が胃癌の疑を受けて寢てゐる。僕の所にも段々不幸が矢つぎ早に押しよせて來る。色々な事が考へられる。然し僕はまだへこまない。僕は徐ろにえらくなつて行く、屹度行く。

## 有島行郎氏宛――十一月三十日於東京　〔一五八〕

My dear Yukio: ――

Yours of Sept. was duly received with a great pleasure. We were all very glad to have known that in spite of different climate and food you are getting along splendidly improving both in health and spirit. Your account of money expenditure was revised by father with appreciation, and we are thinking to send you money sometime during next January in order to meet your want in time.

Your folks at home are exceptionally well except our poor father who has been somewhat ailing with the intestinal trouble, which lasted until the last part of last month when it was found that the trouble was unfortunately the symptom of cancer which has been biting into his stomach ever since this summer. No one took notice of it. On the 6th of this month he returned home by the evening greatly troubled with vomitting sensation, and in fact he vomitted all he had eaten that day. He began to hold an apprehension on his ailment and two days afterward consulted with Dr. Hirayama, the Head-doctor of Icho Hospital in Hibiya. The result was dreadful. The doctor secretly told me that father's trouble was caused by cancer. My breath almost came to stop. Since then father's health went declining day by day because the acceptance of food by the stomach was e tirely denied on account of the swelling of 幽門部. Then at last in the evening of the 26th the last deadly blow was taken in shape of wholesome vomit of what he had consumed in the previ us days. The vomitting of un-digested

food lasted almost 24 hours, which was cruelly succeeded by the blood-vomitting. This ordeal was as good as beyond power for our poor old father. Every moment he eats food, he seemed to emaciate extremely. The night of the 27th was the climax of this crisis. All our sisters and brothers (except you) have gathered and clustered round our father and did what they could in order to save him (if possible in the least) from this deadly (以下不明).

Fortunately, yes indeed fortunately, father got through the trouble with valour and patience. Since yesterday his health seemed to turn out for the better, and there is not a member in our household who would not show fullest mark of joy (一字不明) this unexpected and successful result.

Of course the disease known as cancer is fatal, especially in case of advanced age as there is no possibility of operation and of medicinal cure. So the recovery of our father should be temporary. There is absolutely no hope to see our father in his former health, as long as the diagnosis which Dr. Hirayama, Dr. Honda and Dr. Takaki, have made holds good. It is with the extreme sorrow that I must announce you that you must expect his death not in very long future.

But at present, as I informed, his condition is turning for the better. We heartily hope that the opinion of the celebrated doctors may come false. But this is somewhat dreamy hope, and we shall have to submit to the fatal destiny which is going to fall on us all.

Now that the situation comes to this effect, we feel as painfully your sorrow, living in distance and unable to nurse or help him. But here you must stop and think. What your father expect on you is that you is that you should accomplish your study on abroad and return home equipped with necessary knowledge which leads you to your final goal. After a long deliberation that you should not come back.

Dear brother, we can so well realize what should be your disappointment on receiving this sad news. But if you think it

fit for you to come home for our father, you are free to do it. We leave the matter entirely to your consideration.

Be assured that we shall not deceive you by sending you false report of our father's illness hence now.

Hoping that this may find you in brave spirit and manly resignation, and wishing you the good health, with deep affection and sympathy.

Yours as ever,

Takeo.

This letter was written in haste at a side of father's bed. So you may not take this Enghlish as polished.

## 足助素一氏宛――十二月三日於麴町　〔一五九〕

御見舞ありがたう。二十六日から吐氣が起り、二十七日以來吐血頻繁衰弱一時に來り、今夜は恐らく彼が此世に呼吸する最後の日であるだらう。彼の死と而して生は一箇のストイックのそれだ。苦痛又苦痛が殺到する間に立ちて一言もつぶやく事なく、生死の境に處して悲觀せず樂觀せず、晏如として天命に安んじてゐる。草々。

## 有島行郎氏宛――十二月六日於東京　〔一六〇〕

四日の朝七時四十五分父上は安々と眠るが如く他界の人となられた。古のストイックを思はせるやうな崇高な立派な最後だつた。誰でもかくの如き父を父とするのを誇るにちがひない。立派な死であつた。

君が一番心配して居るだらうと思ふが、母上は見事な覺悟で此打擊に打勝たれた。今の處では氣丈夫にして居られるから安心するがいゝ。其中にお伴をして何處か子供と一緒に轉地をなさるやうにと思つて居る。

五日午前十時亡骸を棺に納めようとして居る時に君の電報が屆いた。一同は君の心根を察して涙をこぼした。而して電

報は君を永遠に父上に記念する爲めに棺の中に納められた。

人々が交る〴〵親切に通夜して今日に至つた。明日午後二時に青山で葬式が行はれる。一昨日も昨日も今日も美しく空は晴れて居る。父上のお好きな日和が續く。

御危篤が天聽に達して從三位に叙せられになつた。

君の悲しさ淋しさを十分に推察する。然しながら君が最善を盡して奮闘する事が父上の御遺志であらねばならぬ。努力したまへ。

## 足助素一氏宛——十二月十四日於麴町　〔一六一〕

最後のストイツクとも云ひたい程の最後だつた。父の死を見て僕は一段と彼を見上げざるを得なくなつた。二十七日の夜からの吐血と來てはすさまじいもので、カツと吐くとまはりで看護するものは不思面を伏せて仰ぎ見る事が出來ない程であつた。二三日すると肉體の衰弱が甚しくつて脚部には全く脈は感ずることが出來なくなつたが、病人の意識は益〻明確になつた。而して一度も苦しいとか痛いとか云を事を口にしないで、心地のよい時には非常に心地よさそうに物語つた。「死ぬのがこんなに樂なものなら極樂行きと云ふ事はたやすいものだぞ」と母に云つて聞かせたり、「俺は遠から死を超越してゐる、悲觀もない樂觀もない」と友に云つたり、「心は深い樂しみを感じてゐるが病氣が肉體を苦しめるので困る」と傍人に云つたりした。病苦がつのつて來ると「今度は何で戰つてやらうかな」と云ひながら、戰闘の準備をした。死ぬ前一日、卽ち十二月の三日には、山内夫婦とその親戚とを枕許に呼んで、二部屋も措いて聞える程の大聲で一時間餘も大演說をやつた。四日の朝七時母の顔を見せろとて熟視し、僕の顔を見せろとて熟視し、次に手まねで先帝の御寫眞を生馬に齎さしめ合掌してから、自分で北方に向きなほり、何時死んだか分らぬ樣にして七時四十五分に死んだ。

昨日は十日祭を執行して一片付け片付いた。二十日祭が濟んだら母は熱海の方に避寒させる。

兄の財政上に關する顧慮は一日も心から離れた譯ではないが自分にかまけてゐた。もう出來る丈けの御助力は出來る。ドーか遠慮のない要求をして呉れ給へ。僕の一身の事に關してはまだ具體的な處置を取るには至らない。まあ百ヶ日でも濟んでの事だ。

二十三日以後は僕獨り此家にゐ殘る事になる。さうしたらゆつくり遊びに來てくれ給へ。

# 一九一七年

## 佐藤しげゐ氏宛――正月一日於東京麹町　〔一六二〕

何だか手紙を怠つて居たのが大變氣になります。君の眞の悲しみを知る極めて少數の人の中にありながら、時々君を慰めないと云ふ事はすまない事でした。

この間は大吹雪が襲つて來たと聞いたが、お家にも君の身の上にも格別の事はありませんでしたか。隨分この頃は淋しい日が明けたり暮れたりする事でせう。心から察して居ます。然し僕は君がよくそれに堪へる力を持つて居る事をこの上なく喜び頼母しく思ひます。

一生だ、大事な一生だ、立派に君の上に勝利の榮冠が下る事を祈つてやみません。

母は孫三人を連れて國府津に休養に出懸けて、だゞつ廣い家には僕一人、たつた一人が殘りました。色々な悲しい記憶が力を倍加して逼つて來る事もあります。然し僕は結局、孤獨をさう惡みません。一人でぽつねんと考へて居る事は至上の樂しみです。門には「喪中缺禮」と云ふ札をはつて、戸をしめてしまひました。市中の雜鬧の中に此處だけは深山のやうな靜かさを伴つて居ます。

どうか體を御大事になさい。心を御大事になさい。君の同情者が全くないと云ふ事は、如何なる瞬間にも考へないやうになさい。左樣なら。

## 原久米太郎氏宛――一月三日於東京　〔一六三〕

新年には來ると書いた兄の手紙をあてにして兄を見るの日を待ちに待つてゐる。何日頃御上京か。

今夕は足助が尋ねて來るだらう、而して一夜を語り明すだらう。昨日今日はこのがらんとしただゞつ廣い家にたつた一人で住んで居る。母と子等とは避寒のため國府津に旅して留守だ。別に淋しいとは思はない。よく〳〵孤獨の好きな男に出來上つては居るが、時々はしんみりした話相手がほしくないでもない。兄の來京は眞に心待ちされる。兄のこの頃も可なり淋しいものと思はれる。是非出て來ないか。

寢られぬまゝに飛び起きて一筆。

## 有島行郎氏宛――一月十五日於東京　〔一六四〕

其後御無沙汰申上居候處益々御淸穆の事と存上候。當方亦幸に皆々元氣、母上樣は信子さんと四兒を從へ去る六日熱海に避寒せられ、東京は小生唯一人にて寂しき限に御座候。今年日本の寒氣は實に可驚、佐賀に二三尺の雪ふり臺灣にも雪を見候由、地熱が冷却せしかと疑ふばかりに候ひしが東京は一昨日より稍々暖氣を回復致候。

年改りて君の奮發心も一層激成せられ候事と存上候。語學力の發達するにつきかしこの生活も興味多くなられ候半、十分先方の智識を吸收せられ候樣惟祈候。舜三君は君の前途に多大の希望を有し居られ候。又同君丈け渡米せらるゝやの噂有之自然其運に可至かと存候。其節はよろしく賴むと母上諸共依賴致賞候間君にも同君と萬事御相談相成る樣致され度候。

先日鎌倉に千代子さんを尋ね候處不圖君の先生なりし四谷の山田氏夫婦に面會御噂など致候。君より一度葉書をいたゞきたいとか申居られ候。

東京にては議會の開會期も逼り居り候。此度は解散ならんとの說も有り、又新聞は相撲にて一頁を費すほど賑ひ居候。其他筑波艦の爆發、撫順炭鑛の火災などは悲慘なる近頃の出來事に候。お目出度の方面にては日本が恐しく富む事に候。その代り通貨の安くなりし卽ち物價の高くなれるは驚くばかりに候。

父上去り給ひてやがて五十日に垂んとするにつけ折にふれ思ひ出す事多く候。殊に海外にある君には度々の夢如何なら

んと深く祭上候。

十分心身の御養生祈上候。送金は本月末に致可申左樣御承知相成度候。父上在さずともその御惠により君の學費には事缺かず候間それ等に顧慮することなく專一に御學問可然候。

冬休暇中はボストンにて過され候や。

何しろ折角御大事になされ度、御無沙汰のまゝ。草々。

原久米太郎氏宛——一月二十八日於麴町　〔一六五〕

兄が去ると共に寂寥を感ぜずにはゐられなかつた。然し御來訪がどれ程の慰藉を齎したかは御推察にまかせる。昨日は足助兄が來て色々の御噂もした。三澤校長の事は承知した。早速手紙を出して見よう。父の五十日も過ぎて忌が明けた。それが却て物足らない心持もする。今は忌明禮まはりと雜用とに追はれて奔走してゐる。熱海から歸つた二兒がすぐ風邪を引いて臥てゐる、然し僕は元氣だ。毎日色々な事が頭の中で考へられる。人生の瀨戶際に立つてゐる樣だ。この上とも兄等の御助言を祈つてやまぬ。吹田君からも手紙が久し振りで來た。生活の變革を强ひられるやうな心の狀態にある樣だ。よく想像が出來る。生活の內容を神經質に始終思料して煩悶する事は馬鹿げた事のやうに思ふ時もあるが、これが病で仕方がない。

今日は是れで失禮する。何んだかまとまらない事を書いてしまつた。御大事に、左樣なら。

宮部金吾氏宛——二月七日於麴町　〔一六六〕

拜呈。其後は御無沙汰申上居候段平に御海恕被成下度、承及候得ば北海道の本年の寒氣は近來稀なるものゝ由に御座候處御學堂御健勝に被爲入候や、奧樣にも近頃は御健康御勝れ被遊候や奉伺候。下つて當方幸に一同無事乍憚御放念被下度、

母も悲しみに打負けもせず元氣にて目下熱海に避寒罷在候。毎度御同情を得候長男も今年は小學校に入學致候樣に相成、小生も初老と申す年に入り申候。何一つ仕出來さぬ中にこの仕合せ汗顔の至に不堪候。この上ともに鞭撻の程奉祈候。
時下更に御自愛專一に被遊度御無沙汰のまゝ御機嫌伺迄。草々頓首。

## 原久米太郎氏宛――二月十七日夜於東京　〔一六七〕

其後は又打絶て御無音したが不相變勇氣凛々として御勉强の事と思ひ慶賀に堪へぬ。海草中學校の方も引續き無事御勉强の事と思ふ。小生も幸に至而頑健で家事も稍々片がついたからこの頃は少しづゝ身を入れて勉强してゐる。教育者としての希望も捨てゝはゐないが決心までの間にもと思つて筆を採る積りでゐる。來月の新小說にはミレー評傳を出して置いた。そんなものを讀む暇があつたら讀んで存分批評して下さい。この間の御手紙の兄の議論非常に味のあるものと拜讀した。感謝する。足助はこの頃又胃を惡くして從つて頻りと喧嘩の相手を摸索して居る。海草の三澤氏から手紙が來て、傭入るべき人物の條件を申送られたから早速心知れる學生に夫れを送つて適任者を物色せしめて置いた。
二男が體質が非常に危險だと云ふ宣告をある醫者から申し渡された。さらぬだに死の爲めに頻繁に脅かされた所のもので度膽をぬかれてゐる。非常に結核に犯され易い體質なのだ相だ。若し夫れが眞だとすれば是非共海岸に居を構へねばならぬ。一體海草といふ所は海岸か知らん。其處で中學校の先生になるも愉快な事かとも思つて居る。御序の節其如何なる地なるかを御報知願ひたい。
今夜は夜も更けたから是れで失禮する。餘寒の折柄折角御大事になさい。

## 原久米太郎氏宛――二月末日於東京　〔一六八〕

いろ〳〵と心配して下さつて誠に難有う。丁度御手紙を受けてから一日たつた時足助が遊びに來て、御手紙を見て和歌

浦はよからうとしきりに云ふので、食指大に動かざるにあらねどつら／＼思ふにどうしても一寸動けさうにはない。

二兒は早速熱海に避寒させる事にして母に託して置いた。目下は先づそれでいゝが其後の事に關しては更に熟考の上或は又御配慮にあづかる時が來るかも知れない。其時はよろしく願ひます。

東京では昨日三十何日目とかに初めて雨を見た。甘露とも申すのだらう。雨垂れの音を聞いた丈けでも心はやさしいうるほひを覺えた。關西は雨や雪でうるさい程だ相だね。夫れにも皆さま十分御用心を祈る。

この頃から少しづゝ心が落着いて稍々眞味の勉强が出來相だ。もうほんとにぐづ／＼してはゐられない、どん底まで掘下げて行かねばいけないなどと思ひながら、凡人のかなしさ、まだ精進之度が足りない。

この間長與の「畫家と其弟子」が演ぜられた。中々感心して觀覽した。あの若さであれ丈の徹底と力とを現はす事は全く感心させられる。先づ今後も文壇に有望な地歩を占むるものは何と云うても彼だと思ふ。

三澤氏の委託に對してはまだ相當の人物を物色し得ないでゐる。然しその中に誰かありさうなものと思つてゐる。

どうか御大事に。木村にもお遇ひの節はよろしく好意を感謝して置いてくれ給へ。夫れでは左樣なら。

## 吹田順助氏宛――三月二十日於東京　〔一六九〕

この間は御手紙を下さつたにも不係永く御無沙汰をして居てすみませんで御座いました、許して下さい。

江南君の事は承知致しました。其中同君にお遇ひして色々御話をして見たいと思つてゐます。實は江南君の弟君の御身の上につき一寸おもしろい事が出來て居るのですが夫れは又御面會の時に譲ります。

兄の御境地は同情を以て思ひ上げて居ますが、實は兄を御同情する心は自分を憐れむ心に過ぎません。どん栗の背くらべのやうな文壇では私も出しやばつてどの雜誌にでも顏を出す事は出來ますが、一體顏を出して何をして居るのだと思ふといやになります、自分の死ぬまでも聲價の續かないやうなものを書いて一體何をして居るのだと思ひます。反古を作つて

暫く自分の淋しさをまぎらさうとして居るに過ぎないではないかとさへ悲觀されます。尤も世に問ふ以上は自分として最上の力を盡しては居るのですが、出してしまつて顧ると泣きたい位いやなものばかりです。

兄に若し創作がおありになるなら「新公論」でよければ必ず掲載の取りはからひをしますからおよこし下さい。目下同雜誌の文藝記者の顧問然たる事をして居ますから。而して兄の磊塊を吐き出されたら又胸のすかれる事もあらうと思ひますが御投稿を待つて居ます。兄の個性に觸れさしていたゞき度いとも思ひます。

來月號の同誌上で私は始めて妻の死を取りあつかつて見ました。駄目です。然し其處には多少の眞實が潛んで居ない事はないと云ふ自信丈けは持つて居ます。

今月の末には神戸女學院で卒業講演を賴まれましたから——その事は第二次的の目的として——そこの春らしい自然にふれる爲めと、原、木村等に遇ふ爲めに行つて見る積りです。原から手紙が行つた相ですね。同君も少なからざゝ試練を經て可なり强固な基礎が出來た樣です。

足助は胃を病んで困つて居ます。宮原は一寸した咯血をして引籠つて居ます、病氣は格別な樣子でもないが疳積が起つて困ると云つて居ます。

鹿兒島の春色がまた麗しく成つた事と思ひます。御上京は如何ですか。東京にも淺い春信が通はないでもありません。

成瀨氏の「笑の硏究」は有益に讀ませていたゞきました。

夫れでは是れで。

## 吹田順助氏宛——四月十一日夜於東京　〔一七〇〕

先月二十八日夜神戸を發つて本月六日の朝歸京しました。十日に足らぬ短日月の小旅ではありましたが、收穫の割合に多かつた事はよろこんで居ます。原君にも面會しました。神戸女學院の講演ははしなくも院長はじめ女宣敎師達の御機嫌を

斜にしてしまつた事は笑止の至りでした。京都は矢張一番感興をそゝりました。就中宇治の川添ひ、石山、三井の兩寺は深い印象を殘してくれました。大阪で見た人形は爛熟の極に達した藝術の醇味を提供しました。私は全く自己の所有せざるものを見せられた事即ち驚くべき未知の世界を披瀝された事に感嘆の目を見はりました。然し私の道は遂にあすこには通じ得ません。夫れを淋しい誇を以つて思ひめぐらしました。

「大谷吉隆の最後」は一昨朝落手して其日の中に讀み了りました。私は兄の創作を見ると何時でも悲しくなります。めんと向ふとあれ程人生に深奧な理解を有し徹底的な藝術的氣稟を有する兄が何故その作物の上には影うすくもあらはれるのでせう。あの作も兄の天分に比すれば實に悲しくも見劣りのするものです。私の直言を許して下さい、而して獨斷的な私の是非を許して下さい。兄の友情を感謝しつゝある私は思ふ所を言ふ外を知らないのです。

然し失望しないで下さい、どうぞ。こんな事を云ふ私は天分に於て兄の肩と肩を比するに足りないものです。兄がやがて創作上に本當の自覺をされる時は私は餘りに强き歡びを兄に見ねばならぬ事になります。夫れは嫉しい事です、然しそれは事實です。而して藝術の爲めには苦痛を忍んでも兄の天分を發揮する事をお勸めしなければならないと思ひます。

藝術的自己省察の努力を突發的にする事なく牛の如く忍んで續けて下さい。さうなればそこに兄を待つて居るものはたしかに兄のみが産出し得る特異な境地であります。兄は其境地を産出する天分をたしかに持つて居るのだ。夫れを疑ふ餘地はない。

私は兄の爲めにあの創作を世に問ふ事が正しいか正しくないかにまどひます。然し私の獨斷が誤つて居るかも知れませんから二三の近しいものに見せて其意見をも參考としたいと思ひます。而してその上で更に私のいつはらざる意見を申上げます。

自分の創作の無價値を棚に上げながらこんな事を云ふ私の傲慢を許して下さい。私は私のこの言葉に對しては更に自分を鞭つ積りです。

一九一七年

「死と其の前後」の校正を前にして。

## 原久米太郎氏宛——四月十二日於麴町　〔一七一〕

一昨日足助も來て遇つた。此頃は大分健康も囘復した樣子だつた。

大阪の人形も、京都の風物殊に宇治の沿岸、石山三井の兩寺は深い印象を與へてくれた。短い間に大分の學問をした。川崎造船所の雜鬧も僕には大きな一ツの學問であつた事を御禮します。兄の御存知の詩人には僕の講演がどんな印象を殘したらう。御序の節聞いて知らしてくれ給へ。東京に歸ると又俗用多端是れぞと云ふ仕事は出來はしない。マァも少し片づくまで我慢するより仕方があるまい。三澤氏の事は承知した。先日の人からは消息がなかつたから多分氣乘りがしなかつたのだらう。吹田兄の戲曲を受け取つたが、通讀した所では思ふ程のものではなかつた。あの藝術的な理解の豐な天稟を有しながら彼の作物はどうしていつでも力を齎さぬのであらう。未だほんとの道條をほりあてゝゐないのにちがひない。早く彼の本當の力のあらはれるのを見たいものだ。

奧さんによろしく。

## 足助素一氏宛——四月十二日　〔一七二〕

パイプはうまくしてやられたものだ。吹田の原稿を送る。讀んですぐ批評を僕に送つてくれ給へ、僕の考と照合して見たいから。「死と其の前後」の校正中だ。實感丈けは可なり出てゐると思ふが之れも自惚かも知れぬ。「大洪水前」の批評を末光に聞いた時唯笑つて答へなかつた、あれが僕を非常に淋しくさせる。

## 吹田順助氏宛――四月十八日於東京　（一七三）

今朝朝食のパンを喰つて居る所に兄の御返事が來た時は胸をつかれて一寸封を開く勇氣がありませんでしたが、思ひ切つて讀み終ると母の居る前も忘れて不知々々眼に涙をためてしまひました。

兄が僕の苦しい心をくんで下さつた事を御禮します。而して僕の無遠慮な亂暴な言葉の中からも好意を覓めて下さつて、力強く跳ね起きる決心の臍を堅められた事を兄の爲めにも、日本の思想の爲めにもこの上なくよろこんで居ます。

あの原稿は足助に送りました。彼が僕とは反對の印象を受けはしないかと云ふ事を期待もし恐れもしました。結果は大體僕の到着した結論と同樣でした。夫れは僕の兄に發した言葉が全く無責任なものではなかつたと云ふ或る安心を與へました と同時に兄に對して更に心苦しい同情を感じさせました。具體的にあの作の內容を披露する事もなく漫罵に近い言葉を弄した事をお許し下さい。今思ひ付いたまゝを蛇足ながら書かしていたゞきます。

一、兄が自ら云はるゝ如く、事件の進捗はあつても其事件の進捗に伴ふ人物の進捗がない。

一、吉隆と云へば石田方の最大軍師だ、即ち關ヶ原西軍の參謀總長だ。夫れにしては其眼の行き屆き方が淺くて狹い、從つて全體の悲劇的要素が悲しくも縮小される。

一、癈疾に近い彼と極端に明晰なその頭腦の間にはもつと葛藤があるべき筈だ。

一、物の表裡にかなり透徹し得る眼光を有し、一面小心に近い良心の所有者なる彼は、そこに複雜な深刻な綾を見すべきだつた。

一、技巧的に云ふとあれを舞臺にかけるとして後段の如きは殆んど斬り合ひの連續たるの觀を與へるだらう。

一、同じく技巧の上から云つて言葉遣ひの中に空虛を思はせる言葉のたるみがある、實感が伴つて來ない。

一、事件に對して戯曲全體が縮小され過ぎてゐる。

一、作者の感激的燃燒が甚だ不十分だ。

許し給へ〳〵。

こんな事を云つた僕の作物を兄が讀まれる時が非常に氣になります。兄もどうか僕のものを無遠慮に叱正して下さい。今度の新公論に出る「死と其の前後」では夢の中の事件の進捗がひどく氣になります。唯夢の場は夫の夢ではなく妻の夢だと云ふ所だけを注意して讀んで下さいまし。

## 有島行郎氏宛――五月五日於東京　〔一七四〕

今日は〳〵と思ひながら段々おこたり候て長き御無音に打過候段平に御海容願上候。是れまでの來信によれば君には至而勇健にて御過し相成居候樣子何よりもうれしく存上候。過日は園田君よりも來信有之、君の近狀を知る事を得且つ學校の成績も送來候得ば、近來の御勉强の有樣も窺れて一同非常に滿足に存居候。英語は未だ及第點に滿たざる樣なるも、何しろほんものと伍しての事なれば已むを得ざる次第、其中に御熟達の程祈上居候。

偖當方一同至て無事に御座候處、最近三子及び分家のベーちやん痲疹、水痘の如き流行病に犯され一時は難澁致候得共最早一同快方に相向候故御放念被下度、母上樣も一寸御風邪氣味なりし外は至て御壯榮なれば是亦御安神可有之候。「新潮」に出でたる生馬君の「父の死」を讀まれ候半。始めて父上の死狀を目のあたり見る樣に胸裏に描かれて感慨更に多端なりし事ならんと深く察上居候。然し父上が如何に勇しく如何に人間らしく其臨終を我等に示し給へるかも同時に御納得出來候て、一面無上の慰安を得られ候半かと存上候。

舜三君渡米見合せと相成候事殘念に候得共致方無之、この上は園田君にも御相談相成適當の所に御入學可然と存上候。若し小生の居りたるハーバーフォードにても御出相成度思召ならば小生より前校長に依賴相試み可申候。尙八十島樹次郎氏來十日出發紐育市なる堀越商店に赴任被致候。同氏に託し菓子少々、團扇七本、風呂敷若干枚及父上御所用金時計鎖御送

申上候間御落手被下度、尙關稅を請求せられしや否や御問合せの上、支辨されたる樣ならば其金額御返濟相成度候。何か必要のありし場合には同氏にも御相談可然候。番地は何れ同氏より通知有之候事と存候。英夫君に御送付の洋一君下着はたしかに落手致候。英夫一家は十五日程なる京阪の旅より今朝歸來し、午後訪問し來り候得共遂に其下着相渡候事失念致候。直に屆可申左樣御承知被下度候。

君の親友スミス君再來朝、東京の空に見事なるはなれ業を見せ申候。又芝浦埋立地には極東オリンピック・ゲーム開始せられんとし學生間の人氣を集め居候。

毅一君は大學卒業の上小樽郵船會社支店在勤と相成候。目下にても時々降雪有之候由にて大に閉口致居る樣子なれども、そんな事でクタバルやうでは駄目なりと申遣はし居候。

當地は梅櫻の花謝し盡して新綠したゝる如き好時節と相成、西洋館の塗り代へなどせんかなど話し合ふよき時に候。山本にても子供部屋の上に二階を上げ明日は新築祝有之候筈。上野に奠都五十年祝賀博覽會あり、繪畫展覽會も續々催され居候。政府は總選擧に於ける政友會多數を制し候爲め先安固の地位に立つ事を得るに至候。財界不相變貨幣だぶつき、銀行は閉口、事業は勃興の有樣に候得共、米國が開戰の結果軍備の爲め七十億弗の決議をなさんとしつゝあるに比すれば兒戲に等しと申すべく候。露西亞の革命は日本人の頭に强き印象を與へ申候。米國の開戰はこの後如何なるべきや、新聞の傳ふる所によれば愈〻出兵すべしとも聞き申候。夫れはくだらぬ企てなりと存居候。

尙この上とも折角御大事に御勉强相成度、好便にまかせこの段草々敬白。

月あつて靜か、母上隣室にてトランプを弄び居らる、分家には齋藤氏夫妻の客あり。

## 原久米太郎氏宛――五月七日於東京麴町 〔一七五〕

其後は御無沙汰。貴公の方からも暫く御便を得ないのでお忙しさの程を御察ししてゐる。不相變非常の勢力を振つて獅

子の如く働いてゐらるゝ事と思ふ。僕の方では長男が痲疹にかゝり他の二兒が百日咳をやつたので、隔離するやら看護するやらで一時はまごついたがもう難關は通過した。御安心を請ふ。

東京は靑葉の好時節となつた。この頃は腸胃を害して閉口してゐるので、時々郊外の散歩に出懸けて考へ物などをしてゐるが、所謂眞の靑春の氣は人の心をも靑春にせずには置かない。何かしでかしたい氣分になる。

足助も時々やつて來る。この間は同君と原田三夫とで帝劇に「桐一葉」を見に行つた。大阪見物の結果この劇を見る心持ちになつたのだ、而して存分失望させられてしまつた。

一昨日は武者小路の「惡夢」が實演された。是れにも失望した。僕が安子の死を甫めてとりあつかつた「死と其の前後」は新公論の五月號に出たが、兄はまだ見られまい、五日の日に發賣禁止に遇つたから（但し僕のが其厄に遇つたのではないが）。まだ書きたい氣分は頻りにしてゐる。その中又何かお目に懸けるものが出來るかと思つてゐる。

其後木村に遇つたかい。先生不相變臺灣以來のパナマ帽子を被つて元氣にやつてゐるかと思ふ。お遇ひだつたら宜しく願ふ。

御無沙汰のまゝ草々。

## 足助素一氏宛――五月十一日　〔一七六〕

腹の工合は今朝からなほつた。行坊主は腰がぬけてまだはかばかしく立てないが本病の方はすつかりいゝから御安心を乞ふ。敏と行三が今夕逗子から元氣で眞黒になつて歸つて來た。愈々「お末の死」と「死と其の前後」とを一緒にして單行本を出す事にした。是れが僕の文藝界に乘り出す最初だ。來月初旬には多分洛陽堂から出るだらう。君の腸胃は依然居すわりか。「新潮」の六月號に論文を一つ書く。

〔一七七〕

# 吹田順助氏宛——五月二十日朝於東京

其後は大變御無沙汰になつて濟みませんでした。精讀と熟慮から來たあれ程立派な批評を蒙る程の作でもないのに却て恐拙作に對する綿密な御批評難有拜見しました。然しあれからどれ程深い暗示を得たか知れません。作の第一のねらひ所もよく呑み込んで下さつた事を非常に入りました。然しあれからどれ程深い暗示を得たか知れません。作の第一のねらひ所もよく呑み込んで下さつた事を非常にうれしく思ひます。私信で三四の批評を受けはしましたがモーチヴが十分受け入れられてゐないので少し殘念に思ひ、又自分がはつきり夫れを表現し得なかつたのをあはれんで居ましたが、兄の御評を讀んで稍〻安心もした次第です。

死は平等に無容捨に人に逼る。其力强い壓力に抵抗し得る何物もない。人は到底夫れに絕對の服從をする外はない。服從をしないでも結果はさうなつてしまふ。然し玆に人の心の中〻愛と云ふものがあり、而して其凝集は人間をして不滅—死に對してさへ——であると云ふ幻想を持たしめる。而して夫れが不思議な事には幻想なりに一種人間をして死に打勝たしめる程の力を持つて居る。愛し得、愛され得たとの確然たる自覺に達したものは何處か死に對して對等の立場を取り得る、夫れを暗示したかつたのです。主人公の死者に對する煩悶の終に行くに從つて悲しみには變じても慘苦に變じなかつたのはその爲めだと作者は思つて居ます。舞臺にかけたらその感じは或はもう少し明瞭に出やしないかと思つて居ます。

前後しますが、兄のこの度の御作は私が今まで讀ましていたゞいたもの〻中にては、恐くは「橇」の一篇を除いて最も完璧に近いと思つたものです。私はあれを春陽堂の新小說編輯者田中純氏に送る約束をして置きました。足助君の所に行つて居て昨日返して來ましたから、今明日中に送ります。リ〻カルな醇味がある所には溢れ出で〻居ると思ひます。あれは存立を要求する作物ですと私は信じて居ます。又御作が出來ましたら見せて下さいまし。

東京も初夏らしくなりました。

一九一七年

金は多分今月末に落手するから、落手したら直ぐお送りする。

## 足助素一氏宛――五月廿日午後　〔一七八〕

志賀の「城の崎より」が左程の感銘を兄に與へなかつたのは不思議だ。讀んだ時の兄の心の狀態にもよるのだらう。原から久し振りで消息があつた。不相變愉快に不平を云つてゐる處がおもしろい。兄の原稿の見えないのは惜しい事だ。午後に宮原君が來た、大分元氣を囘復してゐた。左程耳にこまる樣な話もなかつた。

I・Kからは中々重い手紙がやつて來る。一寸そこいらの男にも類がない程頭も明晰だし情熱も豐富だ。手紙を讀んで居ると惡い氣持ちはしない。僕の將來に開展し來るべき生活には或は面白い伴奏となるかも知れない。

兄の苦鬪は十分お察しする。何しろ甘く行くやうに祈つて居る。

新しいものに筆をつけられる事を待ち望んでゐる。

何しろ生活をどうかしなければ駄目だ。この要求は日を追つて強くなるばかり、なるに從つて自分の怯懦と偸安とが情なくなる。

## 足助素一氏宛――六月三日　〔一七九〕

昨夜は來て下さつた相だつたのに不在で失禮。原稿書きでつかれた頭をやすめる可く妹を連れて日比谷の野外音樂を聞きに行つた。

こんな事を云つてはをかしいが、どうも今度は兄の揚言も危ぶまれたし、結果が面白く行かぬ樣な蟲の知らせだつた。さうだね、余く小局に眼がつき過ぎる樣だね。夫れに百や二百のはした金ではしこたまうかつた處で知れたもんだ。然し兄はまだ未練を殘してゐるのはわかる。又其中融通するからやつて見給へ。今度は或は運が向くかも知れないよ。そん

な氣がしないでもない。然し僕の直覺によると兄は畢竟あれでは成功しないよ。
今「惜しみなく愛は奪ふ」を新東洋の爲めに英譯して居るのだ。而して十五日迄には二篇の小說を書くのだ。可なり忙はしくなる。然しどうせ十五日迄には出來ないのは知れ切つて居る。
今日英譯が濟んだら兄の所あたりまで出懸けて見るかも知れない。

## 足助素一氏宛――六月十日　〔一八〇〕

實は原稿に取紛れてしまつて送金を一日忘つてしまつたので誠にすまなかつた。あれで商機を逸したら責任の大半は僕にかゝり、不運の大半は兄にあるとあきらめてもらはねばならぬ。
原稿は非常な嚴密な催促を受けて僕も原稿商人の悲慘をなめてゐる。出來るだけづゝひつたくられるのだ。途中まで書いて居るが今度のは筆を執る目的が稍〻中心點をはづれてしまつて困つてしまつた。十二日迄に新小說の方をしまつて十五日までには新潮の方をすまさねばならぬ。さうしたら嘸安樂にといいきがつけるだらう。而して七十圓そこ〳〵の金がまうかる譯だ。おやぢの遺產で喰つてゐるのだと思ふとこれだけ金の取れるのは然し惡い心地ではない。勞働者と一緒に勞働を分つと云ふことは何と云つても本能的に心的の滿足を齎らしてくれる。
橋浦に會ふ機會があつたら、批評をしてくれた事を感謝してくれ給へ。葉書まで書いたのだが住所不明の爲めにそのまゝに放擲してゐる。あの男が封筒に自分の番地を書かないのは惡い癖だ。

## 佐藤繁井氏宛――六月二十二日於東京麴町　〔一八一〕

よく忘れずに送つて下さる。
鈴蘭は美しいまゝで落手しました、難有う。早速靑山の墓前にも供へ、花の好きな妹などにも送つてやりました。あれ

を取るのを手傳つた小さい手の持主等へも御禮をお傳へ下さい。

毎日いゝ梅雨が降つて居ます。

今は文部省の二階で入學試驗を手傳ひながら青葉にふりそゝぐ絲のやうな雨を見て居ます。下の方では石屋の石を刻む音、隣室では檢醫と受驗者との小さな話聲が聞えるばかりで、東京も雨の晝は靜かです。

## 佐藤繁井氏宛――七月二日於東京麹町　〔一八二〕

御返事を受けてからそのまゝ打過して居た事をお許し下さい。この間の御手紙によれば、あなたの心持ちが二つの極の間に非常に苦しい動搖をして居る事を十分に察する事が出來て御同情に堪へません。然し僕はあの手紙を讀んだ時、あなたは結婚なさつた方がいゝと思ひました。其理由は直接あなたにお遇ひした時でなければお話が出來ません。兎に角、あの人に對してもあなたの態度は少し改められなければならない事になるのです。これは御面會の時尙ゆつくりお話します。

私は嘗て札幌に居て今は東京に來て居るある男にあなたの事を――名前は全く祕して――かなり委しく話して見たのです。處がその男は不思議にもあなたを云ひあてたのです。而してあなたを見た事があると云ふのです。その人の事についても御面會の節委細御話します。

私は決して他人の運命を操らうなどとするのではありません。唯さうなるべき運命ならば、その小さな一つの媒介者でありたいと思ふのです。總てはあなたとその人との胸の中から生れ出て來ねばならぬ事です。

もう札幌も鈴蘭は散つてしまひましたらうね。カツクーが淋しく啼く時でせう。林檎の實が小さな頭のやうに枝に出來ましたらう。

私は何時札幌に行くかまだしつかりは決めて居ません、あなたには成るべく早くお遇ひしたいけれども。

## 八木澤善次氏宛――七月十九日於北海道　〔一八三〕

封中のもの少々ながら御餞別に致したい、失禮ですが。

久しぶりで御家族と樂しい團欒をなされ愉快に休暇を過して居られる事と察します。僕は昨日母や子供と此處に來る事になりました。今月の末までこゝで過すでせう。爽快な高山の空氣は血を清めてくれます。こゝで九月の爲めの創作に從事しようと思つて居ます。

七月號のものに對する御評ありがたう。少しも滿足の出來るものではありません。會心の作がしたいものです。

北海道の監督の處から、細君が肋膜炎のために起居が不自由だから飯はたいてあげるが副食物は自炊にしていたゞきたいと申して來ました。如何かその積りでお出を願ひます。場所は膽振國虻田郡狩太村有島農場事務所吉川銀之丞。

倶知安驛の二つ手前の狩太驛で下りるのですが、狩太は途中下車驛でありませんから其積りで乘らなければいけません。又急行列車にのるととまりません。函館に着いたら狩太に到着される時間を吉川まで電報して下さると迎ひに出てゐる事と思ひます。顏に見知り越しがないから兄の服裝を豫め知らして置く必要がありませう。札幌に出られたら御紹介する人も二三はありますが、夫れは又その中に致します。

北海道の旅行が兄に利益あるものである事を祈ります。

## 吹田順助氏宛――七月十九日　〔一八四〕

こちらこそ大變御無沙汰してしまひました。鹿児島は隨分暑い事と思ひます。昨日からこゝに來たのですが、こゝから想像して見ると御難澁だと思はれます。然し御一同御壯健で結構です。僕も六月には「特賜前官禮遇」で東京の入學試驗

委員に引ぱり出されました。本月號の二作をお讀み下さつた相で綿密な御批評を難有う御座いました。足助、宮原の評によると「カイン」は僕の作物中の最大駄作だ相です。又「平凡人」は單なる皮肉に過ぎない相です。實際前者はもつと長いものであるべき筈だつたのですが、雜誌社に制限されて三分の二位にしてしまつたのです。あれでは駄目です。書きなほします。

皮肉の大嫌な僕が我慢がし切れなくなつてとう〳〵皮肉を云つてしまつた心持をお察し下さい。僕は皮肉屋が大嫌でした。それは何時でも劣敗者が優勝者に投ずる爆裂彈だからと思つてゐたのですが、優勝者が對等の言葉で adress するに足りない劣敗者に對して使ふ言葉として皮肉を見ると、或る場合には使用する事が必要になるとも思ひました。

九月には太陽と中央公論とに書く約束がしてあります。同月中旬には僕の著作集の第一集を新潮社から出します。最も長く世間から噂されなかつた一人の作家はこれから少し世間に出しやばつて見る積りです。

兄の作品は田中純君に依賴し、この間も一應催促はして置いたのですが、まだ何處に出すとも返事がありません。もう一度問ひ合せて御知らせします。

兄と御一家の御健康を祈ります。而して兄の周圍が早く兄を筆硯に親ましめるやうに祈ります。

## 足助素一氏宛——八月三日午後於麴町　〔一八五〕

昨日平凡人は午後の汽車で平塚に出懸けた。むかうに着いたのが午後五時。去年借りた旭館といふ宿屋の別館が今年も不思議に彼の部屋にあてられた。蝶を三羽あしらつて夢と一字書いた額だの、寒月皓々生積雪と書いた鐵舟翁の軸だのが去年の儘に部屋の飾りになつてゐた。夕食を濟ますとすぐ一本の傘を持つて宿を出て病人のゐた家の前を通つて見て、人が住つてはゐたが、その時は低かつた庭前の樹々が皆んな育つて、如何なる人が居るかを窺はせなかつた。

その夜は十五夜だつた、而して土用波のやうな波が眞直に須賀から大磯までに延びた砂岸一ぱいに打つけてゐた。その

すごさ、美しさ、大きさ。

平凡人は雨が來ると傘にかくれ雲がはれると月を浴びて人のゐない海岸を幾度か行つたり來たりした――波の中にどんどん這入つて行つてしまひたい衝動に驅られながら――而してとぎれ〳〵に一年の始終を思ひめぐらした。

その夜は寢られなかつた。板屋をうつ急雨にも寢かゝつた夢が破られた。早曉の微光にはもう眠を破られてゐた。嵐模樣の空が彼を迎へた。

朝病院に行つた。副院長に會つた。院庭を歩いた。病人のゐた部屋には若い男が仰臥して新聞を讀んでゐた。一人の看護婦は念入りに顏を作つてゐた。

もう是れで平凡人は至極滿足した。鎌倉にまはつて歸らうとしてた事などは忘れていそ〳〵と東京目指して歸つて來た。歸つて來てから按摩の手傳で午睡と出かけた。

目出度し〳〵。

## 足助素一氏宛――八月七日於麹町　（一八六）

劍ヶ峰をふみ外したのは腰が弱いからではない、一寸けつまづいたのだ。

彼女が今の境遇にある僕に對して要求すべからざるものを要求して居　のは兄も首肯するだらう。その要求を僕が理由を開陳して拒むことは、自己囘避でも無ければ、彼女に取つて夫れを理解し更にその態度を改めて僕に對する事も或は望み得る事だと思つたのだ。

僕はけつまづいた事を彼女の前に承認し、どこまでも其責に任ずる事を告白して、同時に夫れが一時的の意味しか持たないものである事をも主張した。而して今後の兩者の關係に就て提案した。彼女は第一の事件に對し、僕を卑怯者とする程には僕を誤解してゐなかつた。第二の提案に對しては情意的に自分を調節する事の出來ないのを以てした。

かくて二人の關係は少くとも一時的に斷絶したのだ。

戀愛關係以外の關係が成立ち得るものとすれば、僕は彼女にまだ寄與し得るものを有する自信を持つて居る。夫れは戀愛關係を作らずとも互に授受する事が出來るものだと思つて居る。然しこの事は事情前の通りだから旣に顧慮するの要はない。

兄の深切な懸念に對して是れ丈けの御返事をすれば足りるかと思ふ。兎に角僕と云ふ人間は脆い人間だ。自分ながらあきれる程だ。然しその後が無一物でないことだけが唯一の力なのだ。

兄の戰爭論は僕が竊かに考へてゐた事を兄に裏切られた形なので、答も何もしどろもどろであつた。あれは兄の言はれる通りだ。然し何んだかまだしつくりしない所がある。あゝ結論しただけでは心の底が何となく物足りない。兄も何かその物足りなさに氣付いてゐるだらう。其處に僕はテコがあると思ふのだ。夫れを考へぬいて見たいのだ。

執筆が進まないので困つて居る。

## 足助素一氏宛――八月十九日於輕井澤　〔一八七〕

今日までかゝつて漸く太陽と中央公論との原稿を了へて發送した。氣が淸々した。

十一日から原稿を書く爲めに碓氷峠に籠つた。草の葉會に來る澤田と今度知合になつた。大學生の合宿にころがり込んで久振りで暢氣な無邪氣な學生生活の氣分に返つて大に茶目振を發揮した。彼等は皆んな高文と外交官の試驗準備をして居るので、話が何んでも三段論法になるには閉口した。

十七日に輕井澤に歸つた。是れと云つて報告する程の事もない。母も子供も頑健だといふ位のことだ。涼しい事は誠に涼しい。

東京は矢張暑いさうだね。毎々奮闘してゐるかな。ドーダ景氣は。宮原にも會ふ機會があるかい。僕は或は二原稿の校

とく閉口したらしいのだ。夫れで御迷惑をかけたのだらう。ドーセ話してくれるなら兄の特異の筆で紹介してもらひたかつた。

十月號には文章世界と東洋時論がある。又その中に生みの苦しみをせずばなるまい。大家になるのはモー閉口しだした。

二三日母を連れて羽黒下から三里ほどある松原湖に遊び、あはよくば八ヶ嶽に登らうかとも思つてゐる。

御大事に。

## 木村德藏氏宛――八月二十日夜於輕井澤　〔一八八〕

今年も比叡の山中に御避暑の由、處が御令閨の御病氣とは御心配の事と重々御推察する。少しは御宜しい由ではあるが一日も早く御全快の程を祈る。私等先月の十八日から母小兒と共に此地に避暑して居る。この頃はそこいらの雜誌から執筆を依頼されて居るので相當の繁忙を感じて居るが幸に頑健で、母も兒等も至て丈夫で居る。此處も多少成金黨の惡影響は蒙つて居るが幸に他所程ではないから心持ちがいゝ。西洋人の心地よい生活振りを見るのも愉快の一つだ。獨逸の捕虜の家族の人達も澤山居るが、彼等の生活は殊に注意に値する。彼等の心情を推察すると更にそこに來る可き歐洲史の一頁を讀むやうな心地がある。

「新公論」は編輯者が變つたので御周旋は出來ないが、「大學評論」は如何だらう。あすこなら有川法學士も居る事だから必ず貴稿を歡迎する事と思ふ。東京に歸つたら僕が話をして見てもいゝが、兄から直接に御話なさるのも進捷かとも思ふ。

御注文の書物は歸京の上探して御屆けしよう。

兄の所では "New East" と云ふ雜誌は取つて居ないかい。その八月號に僕が一篇の感想を寄せてある。神戸女學院に於ける僕の講演の集約見たいなものである。暇があつたら讀んで批評してくれ給へ。

原からは近頃あまり消息を得ないが、不相變御言葉の通り蠻勇的正義を實行して居る事と思ふ。夫れでは今日は是れで失敬する。折角御大事に。奥さんにも御大事にとよろしく御傳言を願ふ。

## 八木澤善次氏宛――八月二十日夜於輕井澤　〔一八九〕

十七日の午前に澤田君等の居る碓氷峠から下山して輕井澤に歸りました。兄が最近の手紙はそこで僕を待つてゐました。兄が京都に行かれる樣になつた爲めに兄の上に來る色々な失望や負擔や生活の變革やを思ふと、又兄の手紙によつて夫れを知ると、何とも云ひやうのない御同情を感じます。然し兄が其間に處して最善の道を取り其中からよりよいものを收穫される事を僕は疑ひません。澤田君とも話した事ですが、京都には教を受くべき人としては東京には見出し難い特色を持つた人もあると思ひます。將來官界に出るとか實業方面に活動するとか云ふのなら京都へ行く事が不利益な事もあるかも知れないが、兄の如き目的を持つた方には却つて其方が御利益かと思ふのですが、如何ですか。

唯今後の草の葉會に兄の顏を見ざるに至るのは實に物足らない事です。然しあの會合に今後共何かの意義が見出せたら夫れは兄が主に寄與したものとして、いつまでも記憶されるでせう。

昨日まで僕は原稿と隨分激しい戰を戰ひました。三晩ほどは殆んど不眠に近い夜が過されました。結果は努力に對してみじめなものではありましたが、思想界に僕相當の寄與はし得たことを自信して居ります。來月のはじめには再都門に入るでせう。其時は再兄とお目にかゝる機會を得度いものです。

吉川の細君の病氣はどの位の程度のものですか。御序の時兄の見られた實際を知らして下さい。

札幌では十分の收穫がありましたか。その小さな都は兄に如何なる印象を與へましたか。

今は夜です、皆んな寢てしまひました。蟲の音の外には何の音も聞えません。山の上にはかなりゆたかに秋の氣が通つてゐます。御健在を祈ります。

## 佐久間政一氏宛――九月一日於麹町　〔一九〇〕

又東京も暑くなりました。熊本はさぞかしと思ひます。お丈夫で結構です。私も幸に頑健で二三日前輕井澤から歸京しました。

お尋ねの英字は生馬とも相談しました。

（一）Relief は御考への通り畫中に描かれた物體の面の隆起の感じを云ふので、「圓み」とでも譯したら如何だらうと申して居ました。

（二）Texture には仰の通り二樣の意味がある樣です。一つは明かにものゝ面の質の感じです。是れは「表質」とでも譯したらどうでせう。マネー作物の批評の所にあるその字は明かにこの意味で使はれてゐます。一つは物々の關係の綜合的感じと云ふ意味に用ゐられてゐるやうです。是れは簡單な譯語を見出す事は困難のやうですから、その場所に應じて相當の phrase にせられるより仕方がないかと存じます。セザンヌの所やルノアールの所では表質とだけでは譯意が不滿足と思はれます。私はマアから考へますが、夫れが何かの御參考になれば仕合せです。

一昨日原久米太郎君が神戸から出京したので、昨日は足助君も來て三人で一日語り暮し夜中の一時過ぎになりました。今日は何んだかぼんやりしてゐます。

今譯していらつしやる書物は私はまだ拜見しません。面白さうなものですね。この頃はドーモ思ふ樣に讀書をしなくなりました、恥しい事です。

この間汽車の中でミス・リデルの叔父さんとかにあたる矢張癩病人中に傳道してゐる老人と邂逅して、色々な話の序に私の "New East" に出した「惜しみなく愛は奪ふ」の英譯を讀んゞ批評してくれと云つて置きましたら、今日手紙が來て、あんな瀆神な議論は讀むのもけがらはしい。「新東洋」と云ふ雜誌は今後門內に入れず、此雜誌の一句も讀む事としな

いからさう思へと恐ろしい權幕で叱られました。

## 吹田順助氏宛――九月六日於東京　〔一九一〕

大層御無沙汰。おかはりはありませんか。休暇中に御創作は出來ましたか。出來たら是非拜見さしていたゞきたいと思ひます。

今度中央公論に書いた「實驗室」は私の今の處では少し自信を持つてもいゝものと思つて居ます。御暇の節に讀んで見て下さい。

「新潮」の印象記にまで引合ひに出されてしまはれた事を恐縮して居ます。あれは多分私の弟が記者に知らしたのです。何しろ文壇の交渉の更にない私の事ですから記者もてあましたものと見えます。この間原君が突然上京して足助と三人で一日語りましたが、兄の印象が最も多くを語つてゐるとの評判でした。大に男を上げた事を感謝します。

先月の末に輕井澤から歸つて以來引續いて東京に居ます。東京もいゝ氣候になりました。

「囘想の一節」はもう少し貸して置いて下さい。

御大事に。

## 宮部金吾氏宛――九月十二日於東京　〔一九二〕

時下晴曇不定の惡氣候に御座候處益〻御淸祥の段奉大賀候。偖先達は御旅先よりの御葉書に接し難有奉存候。久濶の御遠征にて色々おもしろき事もあられ候半と奉遙察候。下つて小生及兒輩も亦、幸に至つて頑健に消光罷在、都門の秋風と共に輕井澤より歸京し、是れより亦筆硯に親まんと存居候。この頃はいよ〳〵本當の小說作者と相成り札農出身者の種々相に異彩を放つに至候段御笑殺下され度、新渡戸先生も、有島もとう〳〵文學者になつて困つたものだと申されし由に御

座候。然し是れは高所にありし水がその本然の低所に落ち來りて安堵せしものに御座候。更に御笑殺被成下度候。札幌は秋既に闌なる事と存上候。追て冷氣も相加可申、折角御自愛專一に遊被候樣祈上候。御無沙汰のまゝ一筆拜酬旁。草々敬具。

### 吹田順助氏宛――九月三十日於東京　〔一九三〕

淫雨に降りこめられて居ます。今夜の明月も雲に蔽はれて見る事が出來ますまい。

貴稿を別封で御返却します。東方時論でも遂に受取つてくれませんでした。實に情ないやうな氣がします。駄作がどんどん發表されて相當の待遇を受けて居る間に、眞面目な勞作がかく取りあつかはれねばならぬといふ事は實に理不盡です。夫れについて何か書いて見たいやうな氣がして居ます。

來月號の中公に發表すべき原稿の準備で忙殺されんとして居ます。如何も此頃は讀書が出來ないで困つて居ます。

この間の御批評を難有う。藥になります。今後ともどうか十分に御批評下さい。無條件で感心していたゞくまで私も努力する積りですから。

### 中根駒十郎氏宛――十月五日　〔一九四〕

白樺が洛陽堂の手から獨立して再私共の手に囘收される事が企てられて居ます。若しそれが成立つたら兄を同人に推薦したいと思ひますが、豫め御意見を伺つて置きたいと思ひます。

御禮を兼ね御無沙汰の餘り草々。

○はし書の校正刷參らず。
○扉の次の頁に印刷さるべき英詩の校正刷參らず。

○「平凡人の手紙」は矢張略せられ候にや。
○カット出來候はゞ必ず校正刷一見致度。
○何處か都合よき所に「有島生馬裝釘」の六文字を入れ置かれ度き事、扉のカットの直下にては如何や。よろしく御見計被下度候
右用件のみ草々

有島行郎氏宛――十月十三日於東京　〔一九五〕

去る九日朝四時半永々病氣なりし有島千代子さん遂に死去致され候。近來病菌腸部を襲ひ下痢の生じ候爲め衰弱日に加はれる由は聞き居たれども、全く面會を忌まれたれば容體をまのあたり見る事も不叶、如何とばかりは案じながらまだまだと存居候ひしに實に意外の事に御座候。健助氏の失望淺膽察入候。遺體は十日夜鎌倉の火葬場にて荼毘に付し翌朝骨あげ今日鎌倉より持來、午後二時青山齋場にて葬儀の事に相成居候。去年本年は有島兩家に取りて不幸の重なる年と可申か、當家にては父上、安子、彼家にては母堂、お千代さん……然し是れからはよく相成行き候半かと存居候。君等一同の名にて金五圓香奠として送置候。

最早學校の方も始まり御多忙の事と存上候。益ゝ御元氣ならん。當方母上樣もこの頃は大層元氣になられ仕合此事に候。

二科會も今秋は賑々しく開かれ生馬の畫も至極の好評を得申候。

園田君もいよ／＼東京に着せられ候由の處未だ訪問は不致、多忙と思ひひかへ居候。其中面會御噂可承存居候。

去る一日東京には近來稀なる大暴風雨襲來、當邸は貸家の塀一圓潰倒、立樹などのゆがみたるもの多く候ひしがさしたる大損はなかりしも、下町は風に加へて大波、出水の厄に遇ひ、洲崎、深川、砂村等は悲慘を極め候て市内は上を下へと騷ぎ居候。春の家なども床上五尺の浸水を受け候由全體の復舊には幾日かを必要と致可申候。但し自家は勿論親類中にも格別の被害無之候間御安心被下度候。

山内の洋一大きく相成候。當方の子供三人も此頃は非常に丈夫且大きく相成毎日愉快に通學致居候。時々アメリカの叔父さんの噂致居候。分家は唯今一同にて伊香保に參居候。三四日中には歸京可致候。

米國の戰爭準備の大袈裟なるが傳へられ居候。米國の金力がこの戰爭を一日も早く平和に導く樣祈居候。學校の總長さんはこの頃も御多忙に候や。

追々冷氣と存上候。折角御自愛御勉强切に祈上候。

吹田順助氏宛——十月二十一日於東京　〔一九六〕

當地は毎日雨ばかり降つて居て、天氣の日といつては當月になつてから一日よりないといつて好い位です。不愉快です。そちらは如何ですか。今は鹿兒島は一年中の最好時節かと御想像申して居ます。

この間は又御親切なる御評を眞に難有う御座いました。何時でも無上の鞭撻になり慰藉になる事を信じて下さい。書物の形でする私の創作發表機關第一輯「死」が市上に現はれる樣になりましたから一册。お目にかけました舊作ばかりですから唯御納め下されば幸です。所謂景氣は大分いゝ相です。第一版千三百册は二日目に賣切れて今第二版に取かゝつて居

ます。

來月號の中央公論に長篇を一篇寄せて置きました。自分としては可なり緊張して書いた積りですが、市場では私の幼稚を笑ふ事と思ひます。

白樺は武者君の代名で、兄の寄稿は私から御紹介して載せる事にしたいといつて來ました。箇言すれば採否は私に委託するといつた調子です。私は不快を感じましたが、同人を增すのは不可能とも思はれますからそれはやめとして兄の御作物を構はず御送り下さい。私に採否の力などの勿論あらう筈はありませんからドシ〳〵揭載する樣に取計らひます。

折角御大事になさいまし。今日は是れで失禮します。

中根駒十郞氏宛――十月三十日　〔一九七〕

再版の御骨折厚く感謝致候。

再版のもの五册丈け購入致度候間出來次第御屆願上候。

本日書店にて聞く所によれば表紙よごれ易き爲め店頭に置くに適せず、庫の中に仕舞置きて顧客の請求によつて必要なる册數だけ取出居候由賣行きの上に多少の關係有之と存候が表紙の上をパラフキン紙にて包み候ては如何や。「宣言」の原稿おそく相成恐入候。八十枚淨書出來居候間若し必要ならば早速御屆申候。

校正は小石川區原町三十一、中戶川吉二宛御遣はし被下度候。

右用事のみ。草々。

木田金次郞氏宛――十一月三日於東京　〔一九八〕

御手紙を繪と共に落手しました。御製作には感心しました。弟生馬にも見せました。是れも感心して居ました。そこで

小生の意見を申上げます。

東京に出るよりも少くとももう暫くはその地に居られて勉强をなさつたら如何です。君の畫のやうに旣に立派な特色を備へた畫は餘計な感化を受けないで純粹に發達させた方が遙かに利益だと思ひます。東京に來た處が智識上に多少得る處がある許りで腕の上には何等の所得がないと思ひます。その地に居られてその地の自然と人とを忠實に熱心にお眺めなさる方がいゝに決つて居ます。唯夫れには時間と金錢とに餘裕が必要です。時間は金錢によつてあがなはれるから、結局金錢が相當にあればいゝと云ふ事になります。その事に關しては今考へて居ますから、其中具體的な事を申上げます。

二三日中に北海道に行かうと思つて居ますが、その時は手紙をあげますから、一度僕の農場に來ませんか。僕の所は狩太村ですから、岩内からは遠くはありません。

以下次便草々。

## 佐藤しげゐ氏宛――十一月九日於札幌旭館　〔一九九〕

今日も又くもつた。あなたの御心持はよくわかりました。然しあなたが松本君に對して深い同情を持つて居られるのを見るのは美しい。私もあの人の過去の苦痛が將來の幸福によつて償はれる事を心から祈るものですが、あなたを見ると少しその人を不平がましく考へずにはゐられないのだ。

昨日一柳さんが來ました。何といふ子供のまゝな天眞な人でせう。あなたと一柳さんとが豐平の川端にある家を尋ねて下さつた時の事などを思ひ出して夢のやうでした。

僕は十日の午後札幌を立つて小樽に行き、その夜はそこで文學愛好者の團體に何か話をし、朴旅館に一泊して札幌に歸らず農場の方にたちます。もう特別に御世話を御願ひしなければならないやうな事はないと思ひます。遊びに來て下さる事はちつとも差支ありませんが、客が來るのでしみ〴〵したお話は出來ないかとも思ひます。然しお話も大抵すんだのだ

から。

十日も午後からは大學で講話をする事になつて居ますから、宿には不在です。

## 佐藤しげゐ氏宛――十一月二十日於麹町　〔二〇〇〕

十六日の夕方に上野の停車場に着いたら、二番目と三番目の子供だけが迎ひに來て居ました。そこで一番目の子供は二三日前から發熱して床に居るといふ事を知らされました。家に歸つて見ると、熱のある子はパヽを待ちに待ち兼ねて居りました。私は十一時頃かなり旅づかれがして寢に入りました。

あなたの手紙は其夕方の食卓の上で私を待つてゐてくれました。

十二の子は祖母に伴はれて昨日大磯に轉地しました。もう大した事はありますまい。五つになる一番幼い兒だけが私と一緒に殘つて居ます。おとなしく獨りで遊んで居るのを見ると切ない涙が私の頬を流れ下る。

何んといふ悲しい手紙をあなたはくれるのだ。而してそれは當然の事なのだ。私はいふべからざるものをいつてしまつたのではないかと、後悔するやうな心持もします。然し結局はこれがいゝのだらう。どうか私のあれをいつた心持をよく理解して下さい。自分の tact のなさ加減が少し憐れまれます。然し結局はこれがいゝのだらう。どうか私のあれをいつた心持をよく理解して下さい。而して悲しみの後に――私はその悲しみを捨てろとはいひません――雄々しく起きかへつて下さい。健康のやゝ低調なあなたに夫れを望まうとする私は慾がよすぎるかも知れない。然し私はどこまでもあなたの誠實と勇氣とに依賴する。あなたの人生に對する暖い見方に依賴する。

酬はるゝも酬はれざるも、愛するものは愛せざるものより常に幸で、而して優れてゐる。あなたはその榮位を徒に抛つてはならない。

その翌日だつた、勝郎君が來て下さつたのは。勝郎君は私があなたに遇つた事を少しも知らなかつたので驚いて居た。この頃は大分元氣相です。

お父上は如何ですか。どうか宜しく御傳へを願ひます。御大事になさる樣に。

## 八木澤善次氏宛——十一月二十六日　〔二〇一〕

御手紙を受けて大變よろこんでゐます。兄のこの頃の態度も大賛成です。學校はその間に積極的に勉强して基礎を出來るだけ强固につくるのがいゝと思ひます。北海道からは十六日に歸りました。氣候は悪い最中でしたが旅といふものは矢張よござんした。旅をして失望したためしはありません。許されるなら世界中を放浪して歩いたら面白いでせう。生馬にはいつて置きます。大分永く「草の葉」會も休みましたから今晩から始めます。今晩は多分澤山集ると思ひますから、集つたらよせ書をして同封して送ります。この冬は如何なさるか、東京には歸りませんか。京都の秋色の美しさがほんとに思ひやられます。私の家の庭の紅葉ですらが愛すべき趙日の光を受けて美しく燃えてゐます。

「迷路」も愛讀して下さつた相で大變よろこんで居ます。十二月十日迄には「宣言」が單行本で出る積りです。内容もかなりなほしましたから出來たらお送りします。十分批評して下さい。是れから京都はいやに寒くなるのだと思ひます。折角御用心の程をくれぐ〴〵も祈り上げます。

## 原久米太郎氏宛——十二月七日於麴町　〔二〇二〕

こちらこそ大變御無沙汰してしまひました。御多忙は相變らずながら御擧家御健康の由大慶に存じます。拙宅でも幸に頑健でゐます。父の一年祭もこの四日にすませました。早いものです。

足助が結核といふ診斷を高田院長から下されて茅ヶ崎の南湖院に入院することになりました。今朝僕が送つて行くつもりになつてゐます。僕の周圍には何といふ不幸が續出するのかと思ふほどです。はじめその邊の醫師に見せたら右肺に濕

潤を起してゐて旅行に堪へないとの事だつたが、二木博士に見せたら左右肺尖だけが輕く犯されてゐるので自宅療養で回復すると云はれたので、足助は伊東に行くつもりにしてゐたのでしたが、僕がすゝめて高田氏に診察を乞うたら右の通りでした。尤も高田といふ人は病氣を誇大するくせがあるとの事だから一概に信ずる事は出來ないが、病旣に三期に入り右肺に空洞、左肺に濕潤を起し更に肋膜の氣味があるといふのです。それを聞かされた時は驚いてしまつて不思大聲を發してしまひました。身近にゐて彼の健康をそれ程までにする迄氣がつかなかつたかと思ふと鈍感が憎まれます。然し年齢からいへばさう進みはしまいと思はれますが、然しあの體格ではどうかとも危まれます。何しろ非常に氣にかゝります。

足助には傳染性を持つた程度に病氣が進んだといふ事丈けはいつてありますが、それ以上には打明けてないからそのつもりで願ひます。

東京は大分昨日あたりから寒くなりました。貴地は如何ですか。今度神尾毅一が郵船の神戸支店に轉勤する事になつたので兄にあて紹介狀を出して置きました。何分よろしく願ひます。

「迷路」の續きを新小說の新年號に出すはずです。ＰとＰ夫人との關係は本にして出す時もつと委しく書いて見ます。

## 中戸川吉二氏宛――十二月七日於東京　〔二〇三〕

「宣言」に對して深厚な好意をこめられた御手紙を難有う御座いました。あの作は僕も相當の自信を持つてゐるものですが、夫れが理解されたといふ喜びは他に比べるものがありません。

校正に就ての兄の御謙遜はさる事ながら、文法と假名遣には僕が第一絕對的に自信がないのですから仕方がありません。新潮では金子薰園氏が校正をしてくれられる相ですからこれは一番間違がなさそうです。假名遣は同氏に御願ひして、兄は植字の誤謬だけ見て下さればそれで澤山です。それだけでも私はどれ程助かつてゐるか知れないのです。どうかよろしく願ひます。

## 足助素一氏宛――十二月九日　〔二〇四〕

一昨日の寒さに引かへて今日は好晴になつたがその後變りはないか。室外の散歩は許されて日光浴でもやつてゐる事と思ふが、少し單調過ぎる景色だけれども何しろ雜司ヶ谷の墓地の石塔林よりは大分氣持がいゝだらう。同室者も質朴相な人ぢやないか。僕は水兵上りだと思ふがさうぢやないか。

僕は昨日朝からかゝつて夜の二時迄に新潮の原稿「小さき者へ」を書き上げて送つておいた。まだ書き足りないが筋書と思つてゐればいゝ――讀者の迷惑僕の方で我慢して置く――本にする時にあれ丈のものがあればしつかりしたものに仕上げて見せる。

例の藥が缺乏したら送るからいつてよこしてくれ給へよ。この間少し書いて見たらといつたが、あれは平熱に復するまで先づ放擲して置いた方がいゝな。熱のある時はあとの疲勞がひどいし囘復がおそいから。

兄の病氣は年が年だから――尤も登錄年齡は三十四であるにしろ――暫くの靜養で落付くにちがひないと思ふが、先づ禪堂にでも這入つた氣で暢氣にやるんだね。何んでもいゝ。兄の生活が又深まつて行くのだ。

「引かれものゝ唄」はどうだつた。いゝ思想がちよい〳〵輝いてゐるだらう。彼女の考へ方には氣持ちのいゝ獨創的な處かある。

## 足助素一氏宛――十二月二十九日夕於鎌倉　〔二〇五〕

寒さに追立てられて取るものも取あへず昨日こゝにのがれて來たらこゝにも冬は來てゐる。矢張り十分に寒い。おまけに來たて早々行坊主が怪我などをして一寸悲觀してしまつたが、その日は鎌倉に於て本年第一の寒さと聞いてやゝ心を安んじてゐる。萬事を抛擲して小兒の健康の爲に勉めてゐる。今日三兒と共に海岸に過した。正月を東京でしたら又こゝに

歸る積りだ。原が來たら一緒に土肥まで出かけたいと思つたが、それは行はれ相もない。殘念だが許してくれ給へ。

この間原田三夫と邂逅した時、明治館は單に高いのみならず不親切でいけない、ある商人宿にもつと居心のよい所があるが一寸失念したから跡から知らせるといつてゐたがまだ報知に接しない。接し次第お知らせする。其後の熱の狀態は如何なんだ。知らせてくれ給へ。

日本橋にもまだ出懸けないでゐる。恥かしいことだが一寸行くのが躊躇されるのだ。然しその中に行く積りだ。金が不足だつたらいつてよこして吳れ給へ、すぐお送りする。

兄の癇積もよく判るがまあ氣を落ちつけて熱を出さないやうにしなければ駄目だよ。氣候がよくつて寒くなかつたら成るべく散步でもして胃からよくしてかゝる事だよ。而して人間よりは自然を相手として癇積を起さない事だな。

僕等の今居る處は決して滿足な所ではない。左程邪魔にはなるまいと思つてゐた前方の山が朝の九時頃まで日の目をかくすんだ。是れには閉口して居る。然し一寸移るべき好適の處もない。まあ玆から海岸に通ふ樣にしてゐたら子供のせきもなほるだらう。

吳々も御大事に。

# 一九一八年

## 足助素一氏宛――一月四日於鎌倉　〔二〇六〕

三十一日に東京に歸ると雜用が輻輳してゐて碌々手紙を書く暇もなく今日に至つた。今日午後一時過の汽車でこゝに來るとすぐ家捜しをし、今やうやく疲れ果てゝ歸つて來た所だ。どうも今居る家は日あたりが悪いので閉口してゐるのだ。今夕食の膳が出たからすましてから又筆を取る。（四日午後五時）

土肥に落付いてから、兄の熱が幾分納まつたのは實に結構だと思ふ。あの發熱は多少兄の心持も手傳つてゐるだらう。若し兄の發病が岡山以來の事だとすると、縱令進行性のものとするも決して速かなものでないどころか極めて遲緩なものだといはなければならないと思ふ。S博士といふお話もあつたが、あの先生は昨今少々耄碌の氣味で話が煮え切らない事夥しい。わざ〳〵土肥から出て來て診て貰ふだけの效能はあるまい。それよりも靜閑なるまゝにその地に落付いて一ヶ月程樣子を見たら如何だらう。原田の描いた土肥の畫といふのは記憶にはないが、旅館からの眺望のないのは退屈だらうが、靜かなのが拾ひものだ。まあ腰を据ゑ給へ。自然を相手にしろといつたのは、理解が足りなかつたかも知れない。然し兄には何も自己にそれ程愛想を盡かす事はない。兄の生活は既に立派な意義をなしてゐる。兄はその儘熟して行かれればいいのだ。僕は確信を以てそれを明言することが出來る。此點では兄以上に僕の意見が確かだ。僕の實感に信頼し給へ。而してこの際靜かに自然と交吻して自然に兄の病痾を癒えさせる樣にし給へ。

岡山から送つて兄の裏書きした金は今日受取つて、麴町銀行に特別預金にして置いたから左樣御承知を乞ふ。岡山の方には兄の方から直接受取を送つておいてくれ給へ。郵便物も五六通廻送する。

行光の疵は幸にも膿も持たずに快癒したから安心してくれ給へ。東京に歸つてゐる間は隨分寒さが激しかつたけれども

三兒共幸に風邪も引かずにこゝに歸る事が出來た。十日まで滯在するつもりでゐる。
新年の作物に對する江湖の批評は既に落潮を示してゐる。文藝界評壇の無定見には惘れるの外はない。去年九天の高きにあげられた僕は今年に於て九地までとはいはずとも平凡者の領域に落される事だらう。今年は一つ白樺で「或る女」の續篇を完成してしまはうと思つてゐる。
兄が推賞して下さつた「小さき者へ」は二三の心からの推賞を受取つた。
吹田から送つて來た金でその中何か滋養物でも買つてお送りする。原は兄の手紙もあつたのと、家事上の都合で上京を見合はせるといつて來た。河内、末光はまだ出京の模様がない。
兄の御病勢の御快方ならん事を祈る。

## 足助素一氏宛――一月七日於鎌倉　〔二〇七〕

四日に書かれた兄の手紙を今朝うれしく受取つた。正月以來僕は大變に無沙汰してゐて、四日の夕方始めて書いたから、その間兄はさぞもどかしい思ひをして僕からの消息を待つた事だらう。濟まなかつた。
一昨日の晩には草の葉會の同人が二人やつて來て、十時半頃まで眞面目な話をして行つた。非常におもしろかつた。あゝいふ連中が段々社會に乘出して行つて、眞實な生活をさへしてくれゝば日本人の生活も面目を一新するだらう。たゞ困るのは日本人の大多數は、無責任な學生時代には一かどの覺悟をしてゐるが、實生活に這入ると段々圭角が消磨して立派な凡人になつてしまふ。つまり自分の生活を大事なものと思つてゐないのだねえ。そこに行くと、年を取る程色々な問題に眞劍になやんだトルストイなんかの生活は無條件的に尊いものだ。
「曉闇」に對する同情ある兄の言葉は僕を有頂天にする。今まで意見を聞かしてくれた誰でも「迷路」の方がおもしろいと評する。事件の推移にばかり興味を感ずる自分の弱點を告白してゐるやうなものだと思ふ。「曉闇」には始めて主人公

が主動的に現はれ出したのだが、それを見てくれたのは今まではは兄だけだ。
兄の考へがあの手紙に現はされた樣ならば眞にうれしい。どうかあれでやつていつてくれ。但し早計に東京に出る事は贊成出來ない。此際だから是非落付いてもう少し滯在して養生し給へ。東京は是れから眞に惡い氣候に這入るのだ。今歸るのは敵闔の中に乘込むやうなものだ。必ず再考し給へ。

入浴は餘りよくないといふ事を聞いた。毎日の入浴を廢して二日置き位にしたらいゝと思ふな。

今朝は三兒を從へて要山の山中をかけまはつて是れから中食をする所だ。晝からは理髮店につれて行つて、久振りで湯に這入らう。

そろ〱來月號の爲に苦しまねばならぬ時が來た。今日長谷に行くから吹田から送つて來た金で食料品をお送りする。

御大事に。

## 足助素一氏宛――一月十五日於東京　〔二〇八〕

兄が九日と十日に書いて鎌倉に宛てゝくれた書狀二通は今朝屆いた。僕の藝術に對して兄が與へてくれた奬策は何ものよりもうれしく難有く受取られた。自分が相當の價値を要求し得るといふ自信はないではないが、本當の理解を受ける事によりてどれ程心强さを感ずるか知れない。どうかして兄の期待を完全に成就したいものだ。

今の世の樣に道德も宗敎も敎育も形式ばかりに拘泥して生命を失つては、藝術によつて精神を、革命によつて物質を變化させる外に道はないと僕は思ふものだ。それ丈けの氣位で僕は藝術に行かうとしたのだ。生命を舊來の約束から解放して新しい方向に發足させたいと願つたのだ。それ丈けのことが少しでも出來れば僕は本望だ。其點に於ける僕の作物は少くとも眞劍だ。それを兄が承知してくれたのが僕は又なくうれしい。

この前に絶望するのは死ぬ時でも遲くはないと書いて置いた。偶然に書いた言葉だつたが本當にさうぢやないか。自分

の資質と精力と素養とを顧みると藝術家などといふのが自分ながら片腹痛い。然し僕の前には長いか短いか兎に角運命の與へた未來がある。その未來のある以上絶望せねばならぬ理由は更にない。死の來る前に絶望する人は大それた假定の上に絶望する外はない。絶望すべき理由が絶對に肯定さるべき事情は微塵もない。だから僕は生きられる丈け生きる、而して生きる間は努力して見る。生活の深みに沈潛して見る。僕は同じ事を兄にも要求したい。兄はまだ道を探りあてゝ居ない。然し一度道を探りあてたら兄の前には希望多き道が開けるだらう、而して兄は其道の上に十二分な勇士であるのだ。

切に／＼自愛を祈る。

「曉闇」の中で胎兒に對しての執着が純情的なものではあり得さうもないといふ兄の揣摩は一應理があるが、僕の描出法の不十分なのを度外すればあの感情は自然であり得ると思ふ。始めは窮狀から理智的に一種の義務觀念で胎兒の愛を要求しても、胎兒が世に出て來るのが近づくとそこに親として本能的な要求、卽ち愛が激しく働き出すと思ふのだ。然し僕の場合では其經路が恐らくは十分に說明されてゐないのだらう。

終末で問題が容易に解決されてゐるといふのはそれはちがふ。Kの死があまり悲劇的なので彼の心からは一時だけ胎兒やフロラに對する懸案が隱れただけなのだ。Kを葬つて數日を經たら屹度彼の心には是等の問題が再び炎のやうに燃え出すに違ひないのだ。問題が問題の儘で殘されてゐる所に僕は本當の一生の一斷片を現はさうとした。問題が總て解決されては小說になつてしまふと僕は思ふのだ。

兄だから自分の作物に對してこんな評釋をする。手前味噌は臭いもの、臭い所は見逃して貰ひたい。

昨日丸善から三田文學と太陽とをお送りして置いた。文章世界は品切れ、黑潮は發賣禁止といふ事になつてゐるが、其中搜して見よう。今日は多分早稻田文學を送る。

憲次は死んだ。十二月の九日から發病して十四日の午前七時には落命した相だ。去年の七月かに結婚したばかりで家庭も樂しいものだつたらしいが、可哀相とも何ともいひやうがない。宮部老教授の哀痛が察せられる。十一日に折から滿洲

から遺骨を携へて歸りがけに滯京してゐる宮部先生を小此木ドクトルの家に訪れて、全く同情してしまつた。恐水病との噂であつたが、歯を療治したら醫療器具に毒があつてそれが心臓を犯したものださうだ。四十一度九分といふ大熱を出して見る〳〵あの若い生命が打摧かれたのだといふ。十一日とかに自分で入院を決心した時に再起の不可能を覺悟したものらしく紙片に、

絶筆

我死するにあらず生くるなり。

月日　　　宮部憲次

とペンで認めて聖書に挾んで行つた相だ。若い奥さんの氣丈夫な看護の有様も涙を誘ふに十分だつた。彼女は愛人の斷末魔の耳許で最後までその好愛する讃美歌を涙ながら歌ひつゞけた相だ。

熱の出る兄にこんな事を書いちや惡かつたかも知れん。然しこんな心持のいゝ話は跡で兄の健康をよくするだらうと思つて書いた。

然し何しろ發熱はいやだな。一つ暫く入浴を中止して見たらどうだ。湯河原の方の事は、母が明後日熱海に行くから調べさせてお知らせしよう。今日あたりは原が來るかと心待ちをしてゐるが、うんともすんともいつて來ない。河原の鬚には氣がつかなかつたよ。呵々。

正月十五日朝、行坊主が一寸頭痛を起して臥てゐる、その床の側で。

〔二〇九〕

## 吹田順助氏宛——一月二十二日於東京

其後大變御無沙汰して仕舞ましたが皆樣お達者の事と思ひます。貴地は如何ですか。當地方は例年にない寒氣であるのに加へて、永く雨のない爲めに大分いためられてゐるものが多う御座います。子供なんかも數日前にやられました。あん

まり雨がないと實際人の心までが殘酷になる樣です。十二月の二三日以來から雨らしい雨は降らないといつてもいゝ位ですから。

足助は士肥に行つて以來も毎日夕方には微熱がある樣です。何んといつても本物らしいので、氣の毒でなりません。御送りの御金で先般滋養物の罐詰を送つてやりましたが、荒れの爲めにまだ彼の手許にはつかない樣です。隨分不便なので癇癪を起して本月末には上京するといつて來てゐます。そんな心地にもなるだらうと同情はしますが、東京の寒さで風邪でも引かれては閉口だとも思つてゐます。

又生活が少しだらけ相です。今年は白樺に精力を集めて「或女のグリムプス」を本年中に仕上げてしまひたいと思つてゐますが、甘く行けば仕合せです。白樺の一月號のロダンの言葉を讀んで打たれたり暗示されたりした事が頗る多う御座いました。あの天才があれ丈け働いたのだと思ふと自分が恐ろしくなります。然し一面から考へると天才は物が見えるから默つては居られないのでせう。その位物に對して執着せずにはゐられない心境を造る事が大事だと今更に思ひます。御近業はありませんか。折角御自愛を祈ります。

## 足助素一氏宛――一月二十四日　〔三一〇〕

少しでも兄のいゝといふ風評を聞くのは大きな慰藉だ。但し毎夕の發熱は如何にも氣がゝりだ。宮原がこの間來ていふ所によれば、結核菌は發熱の原因とはならないで他に發熱菌が存するのだ相だ。その菌を退治するには恰好の注射藥があるとの事だ。果してさうなら一度歸京してそれを試みるのも又一法だらう。

八幡の西洋人といふのは格別ヤソ臭い人間ではないらしいが、而して親切な人らしいが、至つて劣等な女らしい。人の前で紙をもみ〳〵厠にかけこむ女だ相だ。いくらさばけてゐてもかういふさばけ方は降參だと思つた。

山内の傍に一ヶ所貸間を見つけた。至て閑靜だと思つたからあたつて見ようとしたら他出か何かで鍵がかゝつてゐたか

ら山内に賴んで調べて貰ふことにしておいた。よかつたら借りて置く。此際少しは贅澤をする積りにして考へて置くよ。
昨朝唐澤博士の診察を受けたが行光も敏行も更に目今心配する事はない相だ。通知するのを怠つてゐたかも知れないが行光の熱はもう無くなつた。醫者のいふ事のあてにならないのは兄の場合で思ひ知つたが、兎に角さういはれると胸のつかへが下りる。
今月はさして働かなかつた。「新時代」のものも遂に出來ずにしまつた。
本莊可宗が「死と有島氏の藝術」といふ大學の卒業論文を書くんだ相だよ。而して卒業論文なるもの丶記錄を破るのだ相だよ。大變な事になつたものだと恐縮した。
明晩いよ〳〵秋田氏などが僕の所に集る。野村も伊東から歸るかも知れないとの事だ。
原はまだやつて來る樣子がない。末光から河內の跡がまをさがせといつて來たから、小池は如何だといつてやつたが、兄には誰れぞ心當りはないか知らん。丹治七郞なんぞも如何かと思ふのだが。
昨日は東京にもしるしばかりの雪が降つた、今日は曇りだ。而して恐ろしく底冷えがする。
祈御快方。

## 足助素一氏宛――二月三日　〔二一一〕

里見の病氣は辛うじて峠だけは越した樣だ。昨日から熱は漸く三十九度代まで下つて來た。然し餘病其他の可能性から一刻も安心は出來ない狀態にある。頭部一面に蔓延して見るも恐ろしい有樣になつた。人間はほんとに何時如何なる不運に遇ふものやら判らない。こんなになつて見ると彼奴は矢張もつと生かして置かなければならない人間だといふ氣がする。兄の疲勞が段々おこたつて來たのはよろこばしい。其中眼のあたり遇へるとの期待は樂しい。橋浦なども懸命にさがしてゐてくれるやうだから其中に何處かに見つかるだらう。いやになつたら出て來給へ。

内外共に忙しいので今夜などは可なりくたびれた。是れから一つ按摩を頼まうと思つてゐる。一月の小說の批評が大分あちこちで出てゐるがどれもこれもあんまり評判がよくない。馬鹿野郎奴、移り氣な彼等はもう僕といふものを飮み込んだと思つてゐるのだ。そんなに易々と飮み込まれてたまるものか。東京ももう大分凌ぎ易くなつて來た。今日は久しぶりで雨がしめやかにやつて來たその嬉しさ、風のないよい雨は戀人程になつかしい。夜になつてから滿天はまた星となつた。

## 足助素一氏宛——二月十四日於麴町　〔三一三〕

一昨及昨今の夜徹夜同樣にして原稿に向つたら存分疲勞してしまつた。今夜は按摩でも賴んで早く寢ようと思つてゐる。今度のものは相場師を題材にした皮肉なもので、專門的の智識は不懃兄から拜借した。どの位兄のいふ事を理解してゐるか試されるやうなものだ。

病氣の方が思ひ切りよくもないのが物足らないね。萬望十分自重して花の開く以前に堅めてしまひたまへ。あの時節は頗る警戒を要するのだ相だから。

里見は平熱に復してどん〳〵よくなつて行く。今度は隆三が痔の手術で入院してゐる。隨分惡くなつてゐた樣だがこの方は知れた病氣だから心配はない。

「宣言」の女主人公も加減が惡いので出京して佐々木博士に診察して貰つたら矢張思はしくないらしい、大した事ではない樣だが。この頃は弟と一緒に住まつてゐる。

大島が氣に喰はなかつたからその通りをいつてやつたら京都からわざ〳〵出て來た。で兎も角仲なほりをした。兄の病氣を聞いて驚いてその地を見舞ふといつてゐた。

ではまだ暫くゐるんだね。不自由なものは遠慮なくいつてよこしてくれ給へ。こつちも貸間を尙捜して置かう。

## 八木澤善次氏宛――二月十六日夜於麴町　〔二一三〕

何といふ突然な而していまはしい報知に接せねばならぬのでせう。然し決して失望してはいけません。而して早くよくなつておしまひなさい。僕の近邊には最近に兄までを加へて少くとも四人同じ樣な病氣にかゝつた人を見出します。然し是れは適宜の處置によつて必ず治るべきものである事を僕は知つてゐます。兄の體格の強い事はこの場合の非常な利益です。

河上さんに親炙されてゐる事は兼て谷川君などから聞かされてゐるので結構な事だと思つてゐます。東京に暮すのよりその點に於て兄は幸福です。あゝいふ人格と學識のある方に接する事は兄の將來を光明あるものにするでせう。僕は多分四五月頃に同志社に一ヶ月程講演しに行くやうになるでせう。何しろ大事になさい、切に祈ります。早々。

## 中根駒十郎氏宛――二月二十一日　〔二一四〕

「白樺の森」に寄すべき小生の原稿は二十四五日までには出來可申と存候得共もしそれにておそすぎ候樣に候はゞ「新潮」一月號に乘せたる「小さき者へ」を掲載致度候間左樣御取計被下度候。

生馬のものは「南歐の日」中にある「葡萄園の中」を採用被致度趣申來候間此書狀と共に御送申上候條宜敷願上候。

里見は本人より直接差上可申候。此段早々。

## 水野仙子氏宛――三月六日於東京　〔二一五〕

突然手紙をさし上げます、御許し下さい。

今朝、時事新報で私の「死をおそれぬ男」に對するあなたの御批評を拜見しました。一體なら私は自分の作物を辯解し

たり說明したりすることはしないのですが、川浪兄を御知り申して居る關係から同志のやうな心持になつて一寸この手紙を書く氣になりました。それにあの標題が讀者を迷はすと思つたものですからその訂正の意味をもこめて。

あれは當然「死を畏れぬ男」とせらるべき標題だつたのです。或は「死の畏れを知らぬ男」と申したなら更に適切かも知れません。是れだけ申せば現にあなたはお知りになつて下さつたでせう。卽ち人間の生活に正しい關係を造る事が出來ないで、見當ちがひな生き方で自分をごまかしてせめて得意を感じようとしてゐる憫れむべき男を書いて見たのです。私が一番嫌ひな男の典型を丸彫りにして見たいと思つたのでした。うんと皮肉をあびせてやりたかつたのです。然し仕舞まで來ると何ともいへずその男が憫まれて來ました。正しい生活から全く切り放されたその人に惡罵を浴せかけることが非常に悔まれて來ました。私は結末の處を書きながら不思涙をおとしてしまつたのです。であなたが拔萃なさつたあの文句を後から挿入したのです。――丁度あれだけの文句を若しそんな氣がおありになるならもう一度讀み返して下さるとうれしいと思ふでせう。川浪兄によろしく御傳へを願ひます。御病氣を御大事に。草々。

## 佐藤しげゐ氏宛――三月五日於麴町　〔二一六〕

御手紙拜見。今日私のいつた事が謬りなくあなたに受取られる樣にと祈る。弟さんからの手紙の言葉ちがひで、私があなたと結婚したい意志があるのだとあなたが思はれ、同時にあなたがその申し出になら承諾を與へてもいゝと思はれたといふ事實は、決してあなたの貞操をけがした事ではない。あなたは明かに僕によこした手紙に「自分の心はもう他に與へてあるのだから、それを承知で唯同情的の共同生活をしたいといつてくれる人があるなら結婚の形式を取つてもいゝ」といふ意味を書いて居られる。あなたの心が僕に傾いてゐるなどゝ僕が考へたら、僕は其瞬間からあなたに對する好意を失つてゐる筈だ。

あなたの純眞な高い貞操に對して僕は深い同情と敬愛とを持つてゐるのだ。この所をあなたが謬らない樣にと僕は祈る。

あなたも恐らくはそんな事は考へてはゐないんだらうが、唯「先生がその事について兎や角とお考へなさつていらつしやる」と書いたあなたの文句が氣になつたから書いて置く。

是れは僕の利己的な欲望なのだらうが、僕はあなたのこの貞操が生涯高い美しいもので何物にも汚されない事を祈るものだ。その爲めには縱令くだらぬ風評でもあなたの身邊に起らせたくないのだ。さういふ願望を持つた僕が、僕自身あなたの世評の對象となつてゐるといふ事を知るのは苦痛である事をあなたは察してくれるだらう。僕自身としてはどんな誤解を受けても平氣だ。寧ろ面白い位のものだ。汚ない心の澤山を持ち合はした僕には、讃められるよりもそしられる方が遙かにつらくない事だ。然しあなたが痛くもない腹をさぐられる事になると、僕は能ふ限りの力を盡してこの誤解を解く事の必要を感じて來る。それで今朝のやうな事をいつたのだ。それも判りましたね。

これで僕のいひたい事は大體いひ盡した。今後のあなたの方針はこの理解の上に作つていたゞきたい。僕の今朝いつた事を一圖に動機にしてあなたの身の處置をすれば、それは自發的でないが故にあなたは屹度いつか後悔に襲はれると思ふ。あなたが全く人からかくれてしまふ事を思ふのは世にも悲しい事實だ。然しあなたの貞操が眞實である限り、恐らくはそれが最上の道だらう。然しそこに行くとあなたの判斷者は獨りあなたあるのみだ。

淋しい悲しい運命をうけて生れて來た處女よ。

### 八木澤善次氏宛――三月十七日於麴町　〔二一七〕

昨日「出家とその弟子」を讀んで泣いてしまひました。何んといふ勝れた藝術品でせう。斯ういふ立派な作家が我れ我れの中にあるといふ事は心强い事です。私はその感想を少しばかり新潮に書いて置きましたから、御暇があつて雜誌が出たら讀んで下さい。あの本はも少し貸しておいて下さい。

兄の御病氣は如何ですか。御囘復になつた事とは思ひますが御案じしてゐます。四月の末にお目に懸れるのが樂しみで

す。

十二日に一高で「藝術についての感想」といふ題で講演をしました。隨分亂暴な事をいつたので、驚いた事と思つてゐます。明日は「草の葉」會ですから私のいつた事の反響がどんなものであつたかを聞く事が出來ると思つてゐます。

御大事になさいまし。左樣なら。

## 足助素一氏宛――三月二十日於鎌倉扇谷　〔二一八〕

志賀が來た。兄の話を一寸したら志賀曰く、

問　一物不將來の時如何。

師　放下着。

問　既に一物を將來せず何をか放下すべき。

師　しよつて歸れ。

といつたといふ古問答を記した。

こんな事がお役に立つかな。

## 木田金次郎氏宛――三月二十五日於東京　〔二一九〕

二回の御手紙拜見、益〻御健勝にて御生活の樣子を知り欣喜の至に存上候。小生亦幸に元氣、三兒も堅固に暮し居候間乍憚御安心被下度候。大阪每日に出したる「生れ出る惱み」は一應兄の御承認を得べき性質のものなりしならんも、專行致候事御許し被下度候。固よりあれは一箇の小說に御座候得ば、兄の傳記の一片には無之、兄によりて暗示を受けたる想像の所產なれば直接御迷惑をかけ候事は萬無之心組に候。其點御含み置被下度候。段々春めき來候得共、折角御大事に御

勉强祈上候。兄の道が最上の經路を取つて發展し行くやう遙に祈上居候。

御返事旁〻。草々。

## 原久米太郎氏宛――三月二十九日於鎌倉扇谷泉谷　〔二二〇〕

こゝでは雨が降つてゐる、氣候も稍冷たい。朝は近所の足助が宿つてゐる鑛泉に子供と共に入浴に行つて足助の處で暫く話をしてゐると、札幌から來た學生が結婚問題を提げて遇ひに來た。その中本莊といつて是れも元は札幌にゐて今は帝大文科にゐる人が矢張結婚問題を提げて話に來て、先程歸つて行つた。二週間以來衰弱した神經は痛ましくかき亂されて筆を持つ手もわなゝく程だ。それでも兄に書きたくなつたから書く。

每日夜までやむ時なく働き續ける兄から思ふと私の神經衰弱などは片腹をかしい事に違ひない。全く自分ながら少し恥しいが、事實だから已むを得ない事だ。

四間から成るこの小さな貸家では三人の子供が雨に降りこめられて亂暴狼藉を働いてゐる。先刻まではその中の最幼のものが僕の膝の上で一時間眠り續けた。來てゐる學生は夫れを見て大分感傷的になつてゐたが、他人と談話でもしてゐる時でなければ膝の上に子供を眠らす樣な親切はした事がないのだ。それでもさういはれて見ると我れながら我が身が憐れまれる。母なき子供の運命も亦。

第三輯に對する高評多謝。文章世界の四月號に江口といふ人が「有島武郎論」といふものを書いてゐる。惡意を以て書かれたものである事が明瞭に判る。

然し僕はもう元のやうにそんな事に躍起になつてはゐられない。僕の作物は見てくれる人にさへ見て貰へばそれでいゝのだ。少數ではあるが勿體ない程の理解と同情とを以て僕を見守つてゐる讀者のある事を僕は知つて感謝してゐる。それらの人の爲めに僕は働かう。この間も僕の英譯した「愛は奪ふ」を讀んで英國から unusual と呼びかけて僕に greet して

くれる人を見出した。僕はその言葉に flatter はされない。然し僕の思想と藝術とが全然見當違ひでないといふのを發見するのはうれしい、難有い。

足助も非常に心身が衰弱してゐるらしかつたが、一昨日こゝに來て以來稍ゝ快方だといつてゐる。

前に書き送つたかも知れないが、四月下旬から四週間京都同志社の文科で講演する事になつたので、二十七日の夜行で出懸けるつもりだ。その時は是非兄にもお目に懸りたいものだ。

三兒は今僕のそばでおとなしく夕食をやつてゐる。靜かだ。草々。

## 原久米太郎氏宛――四月二日於麴町　〔三三一〕

再三の御手紙に對して御無音を申上げてゐた。御諒恕を乞ふ。

足助は非常に疲勞した結果神經衰弱風な容體になつたと見えて無闇にかんしやくが起る樣子なので、自分にもそれに氣付いて先月下旬鎌倉に出懸けた。丁度僕の行つてゐる附近の宿で、その滯在の結果は多分よいらしい。僕も多少は囘復したが、どうも夜睡眠が薄くつて晝間ぼんやりする。妻の死以來張りつめた氣性がこの頃になつてゆるみかけたのではないかと思ふ。何しろ非常に警戒して養生には勉めてゐるから心配はしないでくれ給へ。

兄の僕等に對する友誼の情は勿體なさ過ぎるとさへいひたい。然し僕は謹んで頂戴して置く。而して不足ながら最上を盡して見る。

色々周圍には脅かされる事が澤山ある。一つの仕事を眞劍にしようと思ふと、今まで眞劍であつた人、ありつゝある人の姿が一層はつきり寫つて來て恐ろしい樣だ。第四輯の內容は僕のその人達に對する尊敬とおそれと理解を書き表はさうとしたものだ。兄が兄の祈の中に僕を加へて下さる事を僕は心から感謝する。人々の合力に遇はなければ僕は生長し難い。

毎日新聞のものはちよい〳〵反響がある。それを賴りにして書いて行かう。

御健全を祈る。

## 佐藤しげゐ氏宛――四月十三日於鎌倉扇谷　〔二二二二〕

人々のすゝめ黙しがたく一昨日近所の醫者に見て貰つたら、兩肺共背部肩胛骨の邊に容易ならざる故障ありとおどかされ一寸心配になつたので、昨日佐々木高興氏に診察を乞ひましたら、左肺に比し右肺が收縮してゐる氣味がある外別に心配はなさゝうなりとの事で、左樣だらうと安心しました。家人が餘り心配するので昨夕末子を伴うて又こゝに逃げて來ました。極度の疲勞をなほす丈けにでも效があると思つて。三度三度熱を計つてゐますが格別の度差もないから心配しないで下さい。

其節、佐々木若先生にあなたの容體を聞いたら、老先生がゐなければ判然せぬとの事。傍に居た醫者のいふには、私に宛てた返事の文案を作つたが、老先生が矢張口づからいふ方がいゝと云はれるので其儘にして置いたとの事。

明日まで東京にゐれば必ず先生に遇つて、あなたの容體を聞きたいと思つたのだけれども、こんな事情で此處に來たものだから、先生に遇ふ機會が一寸なくなつてあなたにすまない氣がしますが許して下さい。歸京次第伺つて樣子をお知らせします。

何しろいかなる惡い報知に接しても決して失望する事なく養生するだけの覺悟をして置いて下さい。僕もその中にお仲間入りをするやうなはめになるかも知れないが、その時には僕が模範を見せて上げますよ。

毎日雨で困りますね。然し春の雨の何んといふ美しい事だらう。春がぬれるのはほんとに美しい。

## 原久米太郎氏宛――四月十五日於鎌倉扇谷　〔二二二三〕

殊に鎌倉に來て下さつた兄の御好意は空谷の跫音と申していゝ。窓障子の外に立つ兄を見た時は實際驚喜した。それに

も係らず自分の體の疲勞に負けて碌にしみ〴〵と御話もしなかつた事を遺憾に思ふ。今日は又兄が思ひもかけない面倒な仕事で骨を打つて下さつた事を感謝する。若しその結果が足助に幸するやうな事になれば實にうれしい。兄も亦其勞の酬はれた事をよろこんで下さると思ふ。其結果を疑ひながら樂しみに待つてゐる。

兄の歸來を待ち佗びてゐた子女等の笑顏が思ひやられる。

今日は始めて花日和になつて行三の風邪もめつきりよくなつたし、僕も追々輕快に向つてゐるから安心して下さい。奥さんの方に僕なりに出來る用事があれば何んでも云ひつけて下さる樣に傳言下さい。

靜かな夜、蛙聲をきゝながら。

病む身にも一口ながら春の水。

## 八木澤善次氏宛――四月三十日於東京病院　〔二二四〕

今日から床上に起上る稽古を許されたから自筆で一札差上げる。

病中御懇情謝辭に苦しむ計りだ。幸にも足助から通知があつたらう通り、チブスにはならずに唯雜熱を起したものと診定され、昨日から固形物の攝取も許されたから御安心を願ふ。

是れから肥立つ事はわけはないと思ふ。多分晩春には京都にも行けるだらう、その時は是非御面會に出懸ける。

今朝奥さんと岡田氏夫人とが御見舞下さつた。

ひたすらに伏し拜みけり病室の窓より見ゆる七尺の春。

## 原久米太郎氏宛――五月三日於東京病院　〔二二五〕

## 木田金次郎氏宛――五月六日於東京病院　〔二二六〕

御鄭重なる御見舞難有御禮申上げます。最初はチブスの疑があるので、不取敢入院を餘儀なくされましたが、幸な事にはチブスでない事が判明し、熱も自然に下つて來ましたから、兩三日中には退院が出來ると思つてゐます。「生れ出る惱み」を中絶しなければならなかつたのは殘念ですが、全快の上は完成して著作集で發表しようと思つてゐます。御讀了の上で御心付きの點は遠慮なく知らして下さい。

御禮まで。草々。

## 水野仙子氏宛――五月二十一日於東京　〔二二七〕

あなたの痛切な御手紙は「叛逆者」が世に出た目的を確かに裏書してくださいました。あなたの瘦せた手によつて繙かれた一册であの輯はもうよろしい。あんな力強い反響を私は今までのどの著作からも得なかつた樣に思ひます。深く受け入れられた喜び、その喜びに比すべきよろこびはありません。こちらからこそ深く御禮を申上げます。

あなたの御病氣が重態であられることを私は深く縣念します。失禮ながら生活の上にも色々と御惱みがあるらしく察せられる御身の上では殊更におつらいことゝ自身の僥倖な身に引きくらべて胸が痛みます。

御主人の爲めにも讀者の爲にもあなたは御囘復なさらなければいけません。屹度御大事になさいまし。而して生死を出入したあなたの深刻な記念の中から人間に與ふべき強い力を生んで下さい。落膽しないで、容易にやけを起さないで、あせらないで、躊らはないで……

失禮、こんな出過ぎたことを申しますのを。何しろ早くよくおなり下さい。

## 原久米太郎氏宛――六月五日於麴町　〔二二八〕

候文か僞かで大に面喰つたよ。大變に御無沙汰してゐて相すまない。病氣は全く快方に向つたけれども新築検分かたがた先月の二十六日から熱海に行つてゐて一昨日歸京した樣な次第でつい筆無精になつた。御母堂が御病氣の由嘸御心配な事と思ふ。長い間の令妹の御みとりにも色々御苦心があつた事と思ふ。兎に角早々の御快方を祈つてやまない。一家中は大變元氣であるから安心してくれ給へ。昨日朝子供達はパヽの頑健な顏を見てよろこんだ次第だ。

昨夜は足助と新潮社との事について大に喧嘩をしてそれから仲なほりをした。新潮社からあれを引とる前にもう少し具體的に研究したらどうかといふ事と、足助があんな面倒な仕事を果して續けるかといふ二事を申し出たのが非常に足助をして苦痛を感ぜしめたのだ。然し結局僕がその事を申出た意味が判つてくれた。僕は近い中に社と直接談判に及ばうと思つてゐる。兄が足助の境遇を悲觀的に彼方に說明した事に對しても足助は反感を持つてゐる。然しそんな事は兄の好意をさし引きして考へる丈けの餘裕は足助も十分に持つてゐる。何しろ足助が僕の著作に對してこれ丈けの好意を持つてゐる事を知るのはうれしい。唯足助の所謂趣味なるものが彼の前途を累する事大なるものがありはしないかと僕は危んだまでだ。

東京も毎日雨だ。御大事に。草々。

## 川浪道三氏宛――六月二十二日於東京　〔二二九〕

又長らく御無沙汰してしまひましたが、お丈夫で御働きのことゝ思ひます。奥さんの御病氣は其後如何ですか。始終御尋ね申さねばと思ひながら自分にかまけてしまつてゐました。この日頃の五月雨は私にとつては――雨好きな――この上なく心持よいものではありますが、病氣を御持ちの方には御鬱陶敷いことゝ萬々御察し申上げてゐます。私も體の工合は

全然本復したとは申されません。矢張りつかれ易くなつてゐます。然し働かないと何となく自分が空しくなる樣に思つて少しづゝ原稿紙などにも向つてゐます。

この間は一葉の「濁江」の演ぜられたのを見ました。而して天才といふものゝ力の强さにつく〴〵感心させられてしまひました。二十五かで死んだ人の心にあんなものが宿るのですから、ほんとに人間の心といふものは恐ろしいものと思ひました。奥さんの御慰みに一葉會の總見の繪葉書をお送りします。これから度々何か繪の本を御覽に入れませう。おつかれにならない程度でゆつくり御覽下さい。

何よりも御二人の上に早く健康から來る幸福がほゝゑむやうに祈上げます。くれ〴〵も御大切に。草々。

## 足助素一氏宛――六月二十三日於麹町　〔二三〇〕

今朝新潮社主佐藤義亮氏が來訪して快く僕の申出一切を承諾してくれた、實に快く。

今迄出版した書物の印税を一切先方にやる事に提議して置いたのだが、夫れは貯蓄して置いて何か文界の仕事に使ふ時機を待つといつてくれた。私は聊かでも彼に對し疑を抱いたことを恥ぢる程心持よく總ての話を運んでくれた。よろこんでくれ給へ。

序文の變換は九月の分からにしてくれとのことであつた。

會見は來月に這入つてからにしてくれとのことだつた。四五日中に磯部邊に轉地する相だから。

今朝一寸參上したが御留守だつたから不取敢右だけを御一報する。

## 佐藤義亮（上州磯部溫泉）氏宛――六月二十九日於麹町　〔二三一〕

こちらは矢張毎日雨がふつてゐます。

そちらにいらしつてから御惱は少しは御快う御座いましたか。折角御養生一日も早く御快復の事を祈上げます。

この度の事ほど申出にくい事はありませなんだが又これ程快い解決を得た事は覺えがありません。あなたが御尋ね下さつて御話し下さつた時にはおぞましくも涙が出てしまひました。これは深くあなたの御好意を感謝する外は御座いません。足助のよろこびも無此上、急に元氣が出た樣に見やられます。友達として彼の悒鬱な顏を見ねばならぬ事は實に苦痛でありましたが是れで安心しました。

新潮社の商賣が何んだかんだといふ評判は可なり聞かされてゐました。然しこの度のあなたの示して下さつた御好情によりあなたに於て一人の畏友を見出した事は私の望外の收穫でありました。末長く御交遊を願ひます。御歸京の上更に御懇談の時を期します。

御大事に。草々。

## 原久米太郎氏宛――七月二十二日於麴町　〔二三二〕

この間は御手紙を難有う。あれから用事を濟ますとすぐ歸京したが、歸京して見ると足助が盲腸炎にをかされて臥床してゐるのには驚かされた。然し幸な事には慢性だといふ割合に輕症で、もう今日あたりは起床してもいゝ位にはなつてゐると思ふから、さして御案じなくてもよからうと思ふ。昨日は一寸見舞つて話をした。何しろ出版事業を目前にひかへてゐる事とて非常にやきもきしてゐる樣だが病氣では致方なし。一番こまるのは貸家の見つからぬ事だが、時々あるけれども長し短しだ。八月早々には着手しなければならない事になつてゐる。僕は明日子供を連れて輕井澤に行き、來月早々來るべき母と交代して夏は東京で過ごす積りだ。

いよ〳〵出兵といふ樣な評定も決つた樣だが僕には風馬牛だ、勝手にしろだ。何等の主義もなく主張もなく唯漫然たる帝國の膨脹といふやうな事の爲めに兵を動かさうなら勝手に動かせだ。國民をして政治に冷淡ならしむるものは政治家だ。

巾着切りの外に政治などに興味を持ち得るものがあるものか。
この頃の夕暮れのよさかな。一日の汗を行水にながして涼風に遇へば哀傷も不平も七里けつぱいだ。哀傷といへば妻の三年だ。

足助素一氏宛――七月二十五日於輕井澤　〔二三三〕

又悪いとは甚痛心すべき事だ。誰か他の醫師に見て貰つたら如何だらう。僕の著作集の出版が一度位おくれるのは僕は決して意としないから根本的に療治をして見たらどんなものだらう。
今朝の如きはこの地でさへ暑い位だから東京が實に思ひやられる。兄の癇癪も十二分に同情する。誰だつて腹が立たずにはゐられないだらう。醫師が許したらこちらに來て見たら如何だ。
僕の原稿は二百五十枚位と思ふ。用紙は此紙だ。即ち二十字二十行四百字詰めだ。僕の原稿は劃合に改行が少ないから出があると思ふよ。
今「生れ出る惱み」を百枚書いた。後十枚程書けば今まで發表した分は終る。それから結論を書けば切りがつくだらう。「石にひしがれた雜草」の方は原稿の訂正はあらかた濟んだが、是れも三四ヶ所書き入れをしなければならぬ。之れも二十頁位は書くやうになるかと思ふ。
くれ〴〵も御病氣をお大事に、そして早くよき家が見つかる樣にと祈つてゐる。

足助素一氏宛――七月二十八日於輕井澤　〔二三四〕

日中は百度以上の暑さとの噂を聞いたがほんたうか。何しろ今の兄の部屋は家相が悪いよ。姓名學は信ぜずとも是れだけは信じ給へ、而して出來るだけ早く引越し給へ。氣分が一新するだけでもいゝと思ふ。

暑さの盛りを東西から照りつけられては全くやり切れない。而して病氣の方は稍〻いゝ方なのだらうね。何しろ病氣になつたら大事を取るに越す事はない。くれぐ〵も御自愛を祈る。

仕事は割合に出來るが時にはあきあ〵して仕舞ふ。一體こんな事をしてゐて何になるんだといふ樣な氣になる。人里を離れると娑婆氣が薄くなるのかも知れない。而して今は仕事の外にメレジコフスキーの先驅者を讀んでゐる。よくは書けてゐるが、あの人は結局通俗小說家だと思ふ。人の心理に喰ひ入る力などは左程驚くに足りない。唯事實は興味の深いものだ。ロマンチックな中世紀末の味が味はれる。

「石に」は今日中に完成する。「生れ」は三十一日までに完成して送り出す事にしたいと思つてゐる。

今日は行光が少し暑さにあてられて頭痛がすると云つて床に居るが、大した事はないから、大分元氣が出て騷いでゐる。その頭痛が少し僕の方に移つて來た樣だ。今日は實際少し讀書し過ぎた。

この地の早朝の爽かさはない。鶯、山鳥、カッコー、山鳩の合奏で涼しい空氣の中に透明な朝の幕があがるのだ。くれぐ〵も御大事に。

## 足助素一氏宛――八月一日於輕井澤　〔二三五〕

とう〳〵豫定通り「生れ出る惱み」は去月中に書き終る事が出來なかつた。百十二頁書いてあるが猶十枚位は書かねばなるまいと思つてゐる。

「石にひしがれた雜草」は出來上つてゐるから兎に角それだけでも御送りする。御病床で假名ちがひとか脫字とかを見て下さるかとも思つて。然しこんなことは活字になつてからでも出來ることだから決して無理をし給ふな。

「迷路」は組が他の輯より一行づゝ多く組んである筈だ。今度のものもさうしたら或はいつもの五十五錢で賣れる大きさになるかとも思つてゐる。其方が買手も樂でいゝかも知れないと思ふ。

兄の病氣がはか〲しく癒らないのは全く困るね。一度歸京して様子を見たいと思ふが何しろ子供につきまつはれてゐるので一寸も動けないのだ。事によつたら入院の方が得策かとも思ふが、然し醫師がその必要がないといふのならどんなものか。但し兄がかゝつてゐる醫師の外の醫師は何んといふかも知れない。一つ誰か見てもらつてくれ給へな、是非。東京病院に野村といふ内科の副長見たいなものがゐるが、至て不得要領のやうな男だけれども、見たてだけは手に入つたものだと聞いた事がある。それでよければ紹介してもよい。

ほんとに一面から見れば兄は事業運がないとも思はないではない。然しもつと溯つて兄の獨立社時代の事を考へれば、兄の色々の難關はあの事業の爲に一先づ一掃された例もある。決して運命に疑をかけ給ふな。一つ兄の得意の氣魄を以て運命を壓倒してやり給へ。道は通ずるよ。「詛ふ」と聞くと旣に女々しい態度を聯想させられる。面白くない。無理するんだ。でなければ壓倒するんだ。決して〲御心配御無用。屹度道が開ける。心を腐らすといふ事が一番の毒だ。惡い事をするのぢやなし、心に染みない事をするのぢやなし、善い事で心を樂します事を考へるのに誰に憚り又誰に憚られる譯があらう。何を詛ひ何に詛はれる譯があらう。寸魔尺善だ。天下兄の道を妨げるものゝあるべき道理がないではないか。大道を濶歩する氣持ちで運命の上を乘り越し給へ。至囑に堪へない。

僕の著作の發表がおくれるなどといふことを氣にするのも殘念がるのもそれは馬鹿らしい事だ。愛讀者には多少氣の毒だが事情が事情なのだから致方がない。我慢して貰ふだけの事だ。著作集が二ヶ月や三ヶ月おくれて出ても僕の一生に比すれば何んでもない。僕はすぐ逐ひつく事が出來る。それだけの自信は十分に持つてゐる。兄は又兄が僕の事業に關係した爲めに僕の事業に支障が出來たといふやうな事を苦に病んでゐるかも知れない。そんな心配は天から無用にしてくれ給へ。兄が若し不運な男だつたら僕と繫がる事によつて幸運になるよ。本當だよ。

足助素一氏宛――八月三日於輕井澤　〔二三六〕

昨日は安子の三年忌だつた。格別の愁思もなかつたが、妹が心配して氣をまぎらせる積りだつたらう、炎天の所を子供もろとも午前中引張りまはしたのですつかり草臥れてしまつた。お蔭で今朝は七時迄おそ寢をして當地着以來の朝の散步を廢した。

二年前の昨日の朝は矢張晴れた天氣だつた相だ。兩親が安子の重體を聞いて東京に歸るのを送つて停車場に行く途中で死亡の電報を受取つたのだ相だ。山本は前の月の卅一日かに見舞に行つた筈だから、妹は東京から父母と入れ代りに着いて來べき良人を迎へて早く病人の樣子を聞かうと思つてゐたのださうだが、良人を迎へた時には眼を泣きはらしてゐなければならなかつた相だ。山本はどうしてもそれを信ぜず三十一日のまだ〳〵確からしい樣子ばかりを說いて間違ひに違ひないと言ひ張つた相だ。そんな事を一日の晚に妹と話し合つた。それを聞くと山本はこはい聲を出して妹に用事を云ひつけた。妹の心ない言葉をもみ消さうとしたのらしい。而して謠を歌はうといふので「井筒」を一番さらつた。總ての人が深い同情と心づかひをしてくれる。それが却つて僕を淚ぐませる。安子は僕に取つては死んではゐないのだから三周忌が來たからと云つて外の人が考へてくれる程僕には悲しまれないのだけれども。

二日の夕方には「淑女畫報」の記者が寫眞師を連れて寫眞を撮りに來た。普段なら斷る處だけれどもいゝ記念の寫眞になると思つたので、三兒と共にレンズの前に立つた。

「何卒」はどうぞか、だうぞか僕にも判らない。どうぞらしく思へるには思へるが。跡からは後が本當だらう。

「生れ出る惱み」は大變おくれたが一日と二日と一寸書き續ける氣がしなかつたので怠つた。今日は片附けたいものだと思つてゐる。

東京病院の野村氏には早速紹介狀を出して置いた。診察料は僕の方で片附けて置いたから御心配なさるな。藥は東京病院に取りに來いといふだらうが、あすこでは遠過ぎるから處方箋を書いて貰つたらいゝだらう。診察に來たら車夫に五十錢包んでやつてくれ給へ。

母が中々やつて來さうもないので何日に東京に歸るかと云ふ事は判然お知らせが出來ない。然し十日前後には歸りたいものと思つてゐる。

## 原久米太郎氏宛——八月三日於輕井澤三笠山下　〔二三七〕

亡妻の三周年の到來について兄が寄せられた同情のあふれた飛書は深い感謝と感慨とを以て受取られた。二日には妹が僕を悲しませまいとの心盡しから子供等と共に朝から僕を誘ひ出して散歩に出かけた。高原の太陽の直射には恐れをなしたが、好意を思へば無下にも退きかねて笑ひ興じながら薹まで散歩をし、午後は疲勞の爲休息、夜は獨りでそこはかとなく漫歩した。

彼女は僕に取つてはまだ死なないでゐるので格別悲しみを新にするでもなかつた。唯かゝる折に遇ふ毎に子供には氣の毒でたまらない。彼等は今でも毎朝毎夜「マヽ御機嫌よう」をやつてゐる。

彼女が死ぬ時僕に希望して置いた事業の成功といふ事を僕がまだ成就してゐないのは苦しい事だ。僕の今までの文學的生活は僅に緒についたといふ程にもなつてゐない。この頃メレジコフスキーの「先驅者」を讀んでゐるが、僕の今までの著作の全部を集めても一寸及びさうにも思へないのでウンザリする。尤もある部分ではメ氏の持たないものを持つてゐるといふ自信もないではないが。まあやるより致方がない。今月號には二三感想を書いた。其中兄に讀んでいたゞきたいのは文章世界の「大なる健全性へ」と新小説の「自己と世界」とだ。

新小説では若宮卯之助が白樺の人間たちを侮笑してゐる。彼の頭は存外すれつからしのスポンジ見たいな頭だ。

足助は牛込區神樂町二丁目十二番地に昨日あたり引越した筈だ。病氣がまだ本當でないので、東京病院の醫者に診て貰ふ事にして置いた。僕も一度歸京して見舞ひ度いのだが、子供が喰付いてゐるので思ふやうにならない。母が來遊したら入代つて歸京する積りでゐる。

神戸の而かも工場の中は嘸かし熱い事だらう。何卒十分自重して健康でゐてくれ給へ。兄といふ人間が僕等のサークルに頑健でゐてくれる事は大なるよろこびだ。兄がピチ〳〵と活きがよくないと全く心細いよ。

八月三日晝　涼風を右の頰に感じながら。

## 八木澤善次氏宛――八月五日於輕井澤　〔二三八〕

御手紙多謝。僕は東京には歸らずにまだ玆にゐます。二日の日には母や弟達が墓參をしてくれました。僕は此地で「松蟲」を讀んで過しました。もとの生徒の一人が松蟲を送つてくれたり、知らぬ人が妻の墓に捧げられた花びらの押花を作つて送つてくれたりしました。さういふ厚意に遇ふと涙ぐませられます。夏の間に十分健康になつて御母上や兄上の御厚意にお酬いなさい。昨夜澤田謙君が來てくれて滯在してゐます。今町の方に出懸けました。兄のお噂などして昨夜は十一時迄語りました。

## 吹田順助氏宛――八月五日於輕井澤　〔二三九〕

每年の事の樣ですが今年も東京地方は非常な酷暑だといはれてゐます。貴地は如何ですか。中々晝間などは御凌ぎがたい事と思ひます。お子さん方も別に御變りはありませんか。私共は今年もこゝに來て暮してゐます。餘りに暢氣過ぎて誰にともなくすまないやうな氣がするので、母が來て吳れ次第歸京して東京で夏を過し度いと思つてゐますがまだ來てくれません。輕井澤に出發前御送り下さつた「思潮」はたしかに落手して早速拜見しました。兄の此度の御研究は實に立派なものと敬服しました。殊に下篇のヘッベルの基督教に對する思想の御紹介には益せられる所が非常に多いのを覺えました。あの時代にあれだけ自由大膽な思想の表現を敢爲した詩人の心も尊い事ですが、その內容にはたしかに先蹤を脫した創見が含まれて居る。それを兄は存分に云ひ現はして下さつてゐると思ひます。ヘッベルには多分の基督的な所と同量の希臘

的な所とがあつてそれを調和がしたいとあせつたのだが、最後まで調和には入る事が出來ないで終つたのではないかと私には思はれます。そこにあの偉大な詩人の悲劇的な運命が裏づけられてゐるのではないでせうか。兎に角あれはもう一度精讀したいと思ひますからもう少し御貸し置きを願ひます。

「自己と世界」といふものを新小説に書きは書きました。然しヘッベルからヒントを得たとしては餘りに貧弱なもので、兄にお讀みを願ふ程厚かましくある事が出來ません。然し自己主義を徹底して考へて見たい其試みの第一階段にはなると思つてゐます。私は私の思想的方面の仕事として自己の考察を完成したいと思つてゐます。

目下は著作集第六輯の原稿を整理してゐます。九月の中頃に足助の手によつて出版される譯です。處が足助は輕微の盲腸炎で床に居ます。大した事ではないが大分神經を病んでゐるやうです。此度牛込區神樂町二丁目十一番地に居を構へました。暑苦しい所だといつて來ました。

暑さの折柄折角御大事になさい。皆樣の御健康を祈上げます。

## 原久米太郎氏宛——八月十日於輕井澤　〔二四〇〕

愈〻此山も降りて東京の黄塵裡にまぎれ入る事にした。十三日には母が來るから僕は十二日に歸京する。是れから夜食前入浴して東京特有の涼氣を樂しみながら勉强しようと思つてゐる。

足助の病氣も思つたよりは輕いらしいので一先安心はしたが、輕いと云ふにつけてはあいつが又盲動をはじめやしないかと懸念される。僕のものゝ爲めに彼の健康をすら害ふやうな結果になつては馬鹿氣てゐる。

輕井澤なんかに來て暢氣にやつてゐると、如何しても氣が緊張しない。人類全體の生活から切り放される文學者は、何か周圍に强烈な刺戟を持つてゐなければ本當に駄目だ。「生れ出る惱み」を、やうやくこの土地で完成した。足助が讀んでほめてくれた。兄も一部分だけ讀んでよろこんでくれたものだ。九月中には出來の見込みだから、その時十分の御批評を

願ふ。
日本も愈〻出兵をしたね、米國の屬國見たいな態度で――あれ位戰後に對するおべつかを取つて置かねばならぬとは哀れな國だ。札幌では僕が出兵したといふ噂があつた相だ。誰が出るものか。
祈御健在。

## 足助素一氏宛――八月二十一日於麴町　〔二四一〕

表紙と扉とは畫が連絡してゐるので扉だけの畫をかくのは困る。第一輯の扉の畫は活字と同樣の黑さだから判におこす事が出來ると思ふ。尤も明日生馬が輕井澤から歸るから賴んだら書くかも知れない。
校正の事は萬事承知した。
昨夜宮原が來て兄の噂をしてゐた。この頃は大分運が向いて來たらしい。
頭が痛いので午後から代々木の原に散步に出かけたら歸途に雷鳴を聞いた。雷には不思議に敏感だ。
腹を御大事になさい。
「死と其の前後」が愈〻九月に藝術座の手で試演されるらしい。國民座は須磨子に讓ることになつた相だ。

## 富澤美穗子氏宛――八月二十一日於麴町　〔二四二〕

この前輕井澤から手紙を上げましたがもどつて來ましたが、もう一度上げて見ます。とゞいたら幸です。如仰十三日にあちらから歸つて今は讀賣に出す「旅の心」といふ歐洲旅行日記にかゝつてゐます。おぼろげな記憶をたどる事ですから時間がかゝつて仕樣がありません。それがすむと京都行の準備といふ次第です。
東京も秋です。いくら暑くつても秋です。頭が痛むので午後から獨りで代々木の原に散步をしましたが、乘馬が二人原

の中を乗りまはしてゐるのを見ても秋です。その姿に秋が迫つてゐます。秋になつてしまへばもう觀念します。秋は秋なりにいゝなと思ひます。

その中御歸京との由、お旅行の話どもを伺ひ度いことゝ樂しんでゐます。「死と其の前後」は藝術座の手で九月に試演される事になりました。國民座の手からはのがれた次第です。少しはましな譯です。殊に試演ですから大分助かります。御安心下さい。

お大事に、さよなら。

## 原久米太郎氏宛――八月二十三日於麹町 〔二四三〕

足助は今例の書齋で第六輯の初校を見てゐる。僕は校了して一風呂浴びた所だ。涼しい南風が吹いてゐる。兄の手紙は食膳に向ひながら貪り讀んだ。

この間は兄の大眼玉をきかして大向をやんやと云はせた由、全く幡隨院は兄の御株にある。今度は一つ會社の重役を向うにまはして凄い所を見せる順番だ。書物も難有う。僕も矢張相當の緊張はしてゐる。今は白樺誌上で武者小路と喧嘩をはじめた。讀賣に旅行記が出だした。著書の校正をやつてゐる。先づこんな所だ。明日あたりから藝術座に出張して、九月に試演される「死と其の前後」の下讀みに立會ふ次第だ。これだけの仕事をすれば先づ手一ぱいだ。其割合に效果はあがらないが。

足助の方は心配のない所までこぎつけた。あのまゝで進めば多分損だけはしないで行くだらう。

兄の歌は滅相歌品をあげたね。この頃も足助と共に大に驚いた次第だ。僕はもう歌心は全くなくなつてしまつた。小說を書くと人間が散文的になると見える。

卓郎君が來たら僕も面會しよう。何の御役にも立ちはしまいが、これで兄も一安心と申すものだ。

この頃竹崎からは更に消息なしだが兄の所にはあるかい。不相變元氣でやつてゐるだらうね。今日は大島流人（この頃農商務省囑託）が尋ねて來た。

京都には十月半ばに行くつもり、その前兄の方で數日厄介になるかも知れぬ。草々。

## 原久米太郎氏宛——八月二十七日於麴町　〔二四四〕

不相變御健勝で重疊。河上氏の論文の切ぬきを難有う。熟讀して見よう。又此間は書物をありがたう。あれも面白さうなものだ。

足助の出版物の第一校正は結了した。順序よく運んで行くらしい。僕は「死と其の前後」を藝術座が九月に試演する事になつたので、今朝はそつちに出懸けて俳優共に趣意を云つて聞かせなければならない譯だ。どんなものが出來るか知らないが、兎に角僕の將來の作劇上の參考にはならうと思つてゐる。

東京も今朝などは大分涼しい。又不眠が少々襲つて來た、今朝は三時半に眼がさめてそれから寢付かれなかつた。一人だとむつつり考へ込んだまゝ默つて飯を喰ふので胃が惡くなるらしい。庭の掃除でもすればよくなるのだけれども、そこに行くと實にものぐさで、胃病で死んでも先づ當分はやりさうもない。

## 吹田順助氏宛——九月六日於東京　〔二四五〕

先日は御消息難有、御起居の御樣子を明かにして久し振にて兄の御書齋にあるの思致し申候。兄が中央に出馬せらるゝ日の一日も早からん事を祈上候。

昨夜招待せられて歌舞伎に「沈鐘」を見物致候節長田秀雄氏に面會致候處、貴譯ユーデイツトを臺本として藝術座に於て公演を致度との希望有之候由にて、其事決定致候はゞ同君より兄に御願狀可差上、未識の間柄なれば小生より一言紹介申上

置候樣との依頼を受け申候間一寸申上置候。長田、楠山、秋田、生田の諸氏が藝術座の相談役となりて今後公試興行の事に任ずるらしく候。小生の「死と其の前後」も九月二十日より第一回の試演にかけられ候筈に候。新劇の機運は段々向來の樣に候得共それにつけても日本の現代にすぐれたる脚本なきとは遺憾の至に候。

今度は何を考へたか筆取れる間にいかめしき候文と相成りました。多分この前書いた手紙が候文だつたからでせう。今の靑年連は候文などは書きたくつても書く能力を持つてゐない相ですが、それがすら〳〵と出て來る處を見るとこつちも大分用心をしなければいけないと思ひます。

東京も落付いた秋景色になりました。

第六輯が足助の盡力で十一二日頃には世に出ると思ひますから、その節は御覽を願ひます。

### 原久米太郎氏宛――九月六日於麴町　（二四六）

御無沙汰。

河上肇氏の論策は一々賛成だ。福田博士の議論は一種のつむじまがりとしての面白味はあるかも知れぬが、河上氏程の切實味はない樣に思つた。何しろ時世が順々に變化しつゝあるのは賴母しい。

この頃は讀賣の原稿で可なり多忙に暮してゐる。それに藝術座で試演される「死と其の前後」の舞臺監督で一寸忙しい。割合に氣持ちよく出來るかとも思つてゐる。

段々一人になつて行く。武者小路とも喧嘩をした。一人でやるのが一番いゝ。自分の專門に助力も何もいらない。自由といふことが我々の唯一の武器だ。第六輯は足助の手で愈々十二日に世の中に出る。

この頃は歌が澤山出來る相だね、而して御上達には驚く。

昨日は招待されて歌舞伎に「沈鐘」を見て失望した。日本人の演伎には意志といふ感じが最も微弱に現はされる。其結果

は安價なセンチメンタリズムだ。草々。

## 藤森成吉氏宛――九月十四日於麴町　〔二四七〕

文章世界を御惠送下さつて難有う御座いました。昨日小閑を得て拜見して「娘」に感心しました。失禮ながら私も童女から娘に至る間位の少女を書いて見たいと兼ねてから思つてゐましたが、あなたの御作を拜見して色々暗示を受けます事が多う御座いました。承ればあなたには今までの御勤め先きを去られて專心に創作に御盡しなさるのだ相ですね。是れから益〻いゝものが世に現はれる事を樂しみに致してゐます。乍失禮最近に出ました私の著作集を差上げて見ます。御暇の節存分の御意見を御聞かせ下さるとうれしく存じます。

乍延引御禮旁々。

## 吹田順助氏宛――九月十八日於東京　〔二四八〕

「小さき者へ」に對する存分な御感想を難有くうれしく拜見しました。あんな御言葉が私の事業の上にどれ程の勵ましであるかはあなた御自身想像がお出來にならないと思ひます。

この頃文壇の一角には私に對するかなり明著な反抗が起りかゝつて居るやうです。私が從來受けて來た評判は決して正當なものではなく、大分の誇大がある事は十分承知して恐ろしく思つてゐたのですが、愈〻眞劍の敵が出來て戰はねばならぬとなると兼て覺悟はしてゐながら自分の力量に對しては殊更ら不安を感ぜずには居られません。その際兄のいつはらざる御心から出たあの御言葉は力でした。

武者君との葛藤に關する御意見も難有う。一體私はあの論文を悔いてゐます。其内容は悔いてはゐませんが、自分ながら餘計な事をしたものだとそれが殘念です。武者君は兎に角私の友人の一人でした。少くとも互に信賴し得べき人として

互に感じ合つてゐました。それを失ふのは私にも相當の苦痛でした。私の論文がその素因をなしたといふ事は遺憾です。然しあの論文を書く以上は私は如何してもあの結論を與へない譯には行かなかつたのでした。私は今でも武者君が最初の感想通りの生活を企てゝ失敗しなかつたら寧ろ怪しむべきだと云ふ念を禁ずる事が出來ません。氏の仕事が一種の遊戯に過ぎなかつたといはれるのが私としても非常に殘念です。萬望氏が所信に徹底して仕事をやつてほしいと祈つてゐます。

然し氏の心持ちを考へるとえらいと思ひます。近來一寸得られなかつた好刺戟を私は氏によつて受けてゐます「生れ出る悩み」が出ましたから一册お送り致します。

足助の仕事も眼鼻がついて行きさうです。本は得が行く丈けには賣れて行きつゝある樣です。

東京もめつきり秋らしくなつてしまひました。

今夜あたり單衣では涼し過ぎます。雨雲は月光を受けて眞珠色に朧ろに光つてゐます。地は暗く蟲啼く。

原久米太郎氏宛——九月十八日於麹町　〔二四九〕

東京も此二三日全然秋になつてしまつた。今日は朝來の鈍曇で夜は雨雲のみが月光を受けて眞珠色に光つてゐる。

「生れ出る悩み」も漸く足助の容易ならざる努力によつて生れ出た。一本を足助からお送りしたさうだから御覽下さつた事と思ふ。私からは今度はさし上げない。

十月號の「中外」に一の新哲學を發表して置いた。序があつたら讀んで見て批評をして下さい。その中には人間の目論見と運命の目論見との窮極的一致を論じて見ようとした。

兄の詠吟は益〻振つて來る。大に有望だ。兄も今頃になつてあんな味をやるとは賴母しい。僕は歌心は何處かにけし飛んでしまつた。

この夏はメ氏の「先驅者」を讀んで大變面白い所があると思つた。この書は兄をも喜ばせるものではないかと思ふ。

二科と院展とが開けてゐる。忘れられない樣な感銘を受ける作には接しかねたが、一體に粒は揃つて來た樣だ。話は前にもどるが足助の仕事も大體は大丈夫らしい。發刊後こゝ一週間程三千部は出たさうだ。大丈夫損はないと思つてゐる。其點は安心してくれ給へ。健康もこの頃はいゝ樣だ。兄とゆつくり話し得る時も近づくので樂しみだ。十月の十五日には東京を發たうと思つてゐる。一二日御厄介になるかも知れない。

## 富澤美穗子氏宛――九月二十二日朝於麴町　〔二五〇〕

先日はお手紙で私の作物に對する御批評難有御座いました。あなたの小品も拜見しました。あれを書かれた御心持は想像されないでもありませんが、作中の人物が西洋婦人と別れを惜むあの煩悶が讀者に作者ほど合點が出來ないといふ憾みがあるのではないでせうか、作者の獨合點になり過ぎてゐるといふ嫌はないのでせうか。そんな事を勝手に思ひました。又泡鳴といふ人が地の描寫卽ち人物の顏や服裝の描寫、周圍の自然の描寫などは作中人物の心理過程と切つても切れない程度の緊迫さを有してゐなければならない、有機的な關係のない描寫は徒に作物を弱くすると申した事があると思ひますが、是れは私は敬服してゐます。どんなにかけ隔つた樣な事を書いても作中の人物とピツタリそぐつた描寫があり、その反對の場合があります。失禮ですが四―五―六ページあたりの室內の描寫には少しからうした空疎な心持があると私は思ひました。

この空疎な感じといふのは一寸適確に說明が出來ませんが、作者が人物の心地（氣分）を現はす必要からではなく一種の裝飾にしやうといふ目論見から描寫の筆を用ゐた所に破綻が起るのではないかと思ひます。繪でいふと人物を描くに必ず背景が必要となります。處が畫家は往々人物と背景との連絡を無視します。それ故背景は背景、人物は人物になつてしまつて畫がばら〳〵な印象しか人に與へません。本當は人物と背景とは離れない。人物が背景に融けこみ背景から人物が

しさが湧くやうです。

今朝は寒い雨になりました。然し氣が落付いて淋しいいゝ日です。淋しさのどん底まで沈んでゐるとやつぱりそこに樂

大に知つたか振りを申しました。この場合自分の事は棚に上げて申します。

生れ出て來なければ一の畫圖とはならない譯です。そんな心地ではないでせうか。

## 佐藤義亮氏宛――十月一日於東京　〔二五一〕

復呈　又々御宿痾の爲御轉地の由は兼て承知致居候處雜事に取紛れ不及御見舞打過居候段御許容被下度　秋涼にはかに催し此頃御起居如何に御座候哉折角御自愛專一に祈上候。

廣告の事は決して御關心被下間敷何か私の申上樣に粗漏ありし爲めあんな御考をお與へ申上候事かとも存じ候。

「死と其の前後」の試演は是非貴兄にも御一覽を願度存居候に折柄御不在にて遺憾に存申候。藝術座一座の事とて固より十全を期し難きは始めより承知は致居候得共座員一同の非常な熱心と十分なる下稽古の結果又日頃の技巧を思ひ切つて捨てくれ候結果思ひの外效果多き劇を見る事が出來候樣に被存候。脚本に對する學問もお蔭にて存分に出來仕合せと存居候。

十五六日には京都の方に參り一ヶ月程滯在の心組に御座候。暫くは御面會の期を得ざるべきか　吳々も御攝養の程繰返し祈上候。

先は御返事旁々御見舞迄。匆々敬具。

## 原久米太郎氏宛――十月三日於麴町　〔二五二〕

御葉書拜誦。この頃は藝術座の稽古に沒頭致申候。昨夜も山内と共に至りて今朝の四時まで火の出るやうな稽古を監督致候。やる以上は心地よく見られるものをやらんとし、殊に初めての事なれば人並以上に神經質となつてついこの仕儀に

相成申候。

御案じ被下候兒輩は幸にもこの秋は小恙だに致候事なく打過ごし申候間御安心被下度、札幌にては高松泰三の次女死によつて奪ひ取られ申候由氣の毒の至に御座候。

飜譯にて御多忙の由兩三日前足助にその話致し、兄が飜譯の動機日本の學者の化の皮をひんむくにある事に及んで兄のつむじまがりに哄笑致候。何處までも原式とか申候、御自重を祈上候。御成功を祈上候。

候文と相成候草々。

今日から「死と其の前後」のふたが開く。

## 八木澤善次氏宛――十月七日於麴町　〔二五三〕

御手紙多謝。そこには色々不滿な點もありましたが、「死と其の前後」の試演をあの劇團がやるとしては豫期以上の成功だつた事だけは明らかです。あなたにも見ていたゞき度かつた樣な心地がします。草の葉會の人達も一緒に來て喜んで見物してくれられました。何者よりも今度の試演で多くを學んだのは私です。而して鞭うたれたのも私です。私の背中を洗つてくれる女中が昨夜私が小さくなつた程やせたと云ひました。人は私の竊やかなこの悲しみを知らない。

## 中根駒十郎氏宛――十月九日於東京　〔二五四〕

是非弓術は御指導を願ひます。毎朝早く射場に行つて弓矢を取るといゝ心持ちです。人も二三人より來ません。是非とも御誘引致します。

「叛逆者」の印税の事委しく御報知下さつて難有う御座いました。明瞭致しました。早計に物を申上げた事をお許し下さい。領收書を封入して御返付申上げます。佐藤さんにも御無沙汰をしてゐます。御序の節宜敷願ます。

## 原久米太郎氏宛——十月二十日於京都四條上縄手あかまんや　〔二五五〕

同志社にあてゝの御手紙は昨夕落手した、多謝。御察しの通り出發間際になつてから色々の用事を片付け始めたのでとうとう開講前に兄に御目に懸る機會を失してしまつた。昨夜當地着、夕方からエラン・ビタル會員にまねかれて石山寺に十五日の月を見に出懸けた。全く日本趣味ないゝ月見をした。何しろ東京で雨にばかり遇つてゐた所なので、京都の日本晴れにはすつかり難有がつて仕舞つてゐる。

講義は月曜と火曜だけだからあとの曜日は暇な譯だ。二十四日頃に貴地に出懸けようかと思つてゐるが、委細はいづれあとから御詳報に及ぶ。

生馬も同宿、萬事好都合にやつてゐる。では餘事は皆々御面會の節を期する事にする。

## 足助素一氏宛——十月二十七日於京都　〔二五六〕

今日はイブセンのブランドをもう一度讀み返へして、大學の靑年會館で、野村愛正、生馬と僕と三人で講話する事になつてゐる。而して其入場料を秋田君に送つて、來月中旬に此地のエラン・ビタルでする同氏の芝居を見せるべく旅費として送るのださうだ。

「生れ出る惱み」は思ひ切つて千部刷つて置いたら如何なものだらう。その位は遠からず賣り切れると思ふがな。大阪に行く時電車の中で商人風の男が「生れ……」を讀んでゐるのを見た。往來で僕のものを讀んでゐる人を始めて見付け出したので僕は何となく嬉しかつた。その人は赤いエンピツを出して時々印までつけて熱心に讀んでゐた。天滿の停車場に着いて少し恥かしかつたが肩をたゝいて「私はあなたが讀んでいらした本の作者です」と挨拶したら、その人は憫れた様な顏をして僕を見やつてゐた。又その人と何時逢ふ事やら。

原方に廻送された手紙が今朝到着したので唯今拜見致しました。風邪大流行の節にも係らず皆々樣御健勝の由大慶の至に存上ます。

## 母堂宛——十月二十八日於京都　〔二五七〕

一角丸は眞に重寶なもの御蔭にて子供達も大助かり仕合せの至りで御座います。私共も心得て以後はあやしい時には服用致しませう。幸に生馬も平癒、私元氣充實して居りまして風邪の窺ふ隙もない程で御座います。宿屋の人達が私の活動には驚いてゐる位ですから何卒御安神下さいまし。女中の歸り去つたのは閉口の次第で御座います。兎に角こちらでも誰か一つ搜しては見ませう。

昨夜は大學の靑年會館で、野村愛正、生馬及び私が演說をさせられました。溢れる程の聽衆で御座いました。私の講演は今日で三囘目になる譯ですが、二囘目には一囘目よりは人が多い位で皆靜聽してくれます。來た甲斐があつたと氣込んで居ります。

京都は大分冷えて來ました。比良の山や丹波の山には旣に雪が降り始めたさうで御座います。今朝起きて戶を開いて見ますと一面の河霧で座敷の中に白いものが舞ひ込んで來ました。而してそれが今美しく晴れて行きつゝあります。

山本で病人の多いのは心配の至、早々皆々の快復を祈つてゐます。愛子も大抵の事ではありますまい。原も夫婦共臥つて居ります。

私の通帳の判は成程私が當地に持參して參つてゐました。然しその金は郵便局にある間は薄利ではありますが利子がつくので御座いますから、私が歸京するまで其儘にして置いていたゞきます。其中柿を少々お送り致します。御笑味下さいまし。佐藤、山内にも御福分け下されば仕合せです。山本、高木には當方より直接送ります。

御大事を祈上ます。

## 母堂宛――十月三十一日於京都　〔二五八〕

今朝頂戴致候二枚の御葉書に而行光流行性の風邪に犯され候由承知致し、さらぬだに御面倒相願居候處に、更に御配慮相懸候段恐縮に奉存候。然し以御蔭段々快方の徴候有之候事何より仕合に奉存候。何分共よろしく願上候。尤も此度の風邪は殊に傳染性嚴敷樣子に御座候へば御感染遊ばされぬ樣呉々も祈上候。承及候處によればキナ常服最も有效なるやうに御座候間、早速野田氏にでも御相談御常服被遊候樣致度、外傭人にもそのやう御勸め被下候はゞ可然やに奉存候。尙又此度の風邪は全快後もいつまでもはつきり致さず倦怠を覺え候由生馬も申居候間、全快後も行光は暫く學校の方休業爲致候方可然かと存申候。小子は幸にも至而健全、日々安穩に暮し居候間何卒御放念被下候樣奉願候。

二科會も今日にて愈々閉會に相成候趣にて生馬も重荷をおろし候事と存居候。兩三日中には歸京の途に就き候半。柿は同人歸京の節相託し可申候間左樣御承知奉願候。

今週の講演は去る火曜日にて結了仕候間、今日は淸水寺の裏山を獨りにて跋渉致候。稚兒が淵より將軍塚のあたり無人の境と思はしき靜かなるよき所有之、稍々色づきし落葉林の中を飽く事もなく逍遙致候而大に元氣付き申候。夕方よりは南禪寺永觀堂など若き學生に伴はれて散步し唯今歸宿致候所に御座候。明日は大學圖書館に至りて京都見學の準備をとゝのへんかと存居候。

## 富澤美穗子氏宛――十一月一日於京都あかまんや　〔二五九〕

京に參候節はまだ蚊が飛び居候ひしが、目下は朝夕の冷え方中々に候。さりながら紅葉は櫻の葉のみにて袷に袷羽織位が丁度に御座候。何卒々々御自護專一に被遊度此段不取敢御返事旁々草々頓首。

まだ紅葉は櫻の葉のみに候得共京の秋は何處の隅にもさだかに眺められ候。今日は晝より時雨模樣となつて對岸の遊所

の灯もあはれに候。

秋雨なれば秋雨なるまゝに京の灯の夕暮ごとのなつかしさかな

京を去り給へる時のお葉書は落手、多謝。

## 秋田雨雀氏宛――十一月二日於京都あかまんや　〔二六〇〕

新聞で見ると何か飜譯物をなさつていらつしやる相で御多忙な事と思ひますが、今日大島君が來て十五、六、七日に當地でやるあなたの演劇に御出席が願へると仕合せだから御便りをしてくれといつて來ました。御都合がついたらお出懸けなさいませんか。其頃は京も秋はたけなはで、一番いゝ時かとも思ひます。今日は朝からの雨で外出も出來ず謠でもうたつて朝の中は過しました。これから一つ讀書でもしようと思つてゐます。欄外の疏水には雨が落ちて小さい波紋をいくつも造り、緣先には點滴の音が瀧の水のやうに聞えてゐます。輕い旅愁が心を靜かに壓します。

## 足助素一氏宛――十一月三日於京都　〔二六一〕

昨日から京都も雨になつた。どしや降りに降りつゞけてゐる。疏水の水かさが增して家の土臺柱にひた〳〵上つて來る。寒さがました爲に今まで綠をつゞけてゐた土手の櫻も黄葉になりかけて來た。

學校の方は感冒の猖獗の爲めに來週七日間休業といふ事になり、僕の講演はまとめて來々週にやる事になつた。僕は幸に頑健如例だ。今朝は生馬が東京に歸り、大學生がホキットマンを聞きにやがてやつて來るだらう。

爲替は難有う。まだ局には行かないが通知書はたしかに受取つた。これで少し氣が強くなる。

兄の妻帶問題は近頃耳よりの話だが、お妹さんが岡山から出て來られないとすると、ほんとに考へて見たら如何だ。心當りはあるまいね。

柳には會つた事と思ふが感じは如何だつた。書物の事は甘く行きさうか知らん。ブレークを著はしてからこつち柳はその實質的な思索がしつかりした青年達の注意をも牽き出したのだと思ふから、今度出したら前のやうな哀れな賣れ方ではないかと思ふ。而して命も長いと思ふ。兄が損をするやうな事は萬あるまい。書物もそんなに大きなものにはなるまいと思ふが。

この間在京都の札幌出身者が僕をわらんじ屋に招いてくれた。それが一人々々見當違ひなのだから面白い。飯塚は醫學士、中江は工科在學、園部は齒科、川田は法科、谷村は住友のマンガン製造所、僕は小說と來てゐるのだから驚いてしまつた。大變心持ちのいゝ會をしてもらつた。一昨日は關西學院から平賀が二人の友達を伴れて來た。夕方から夜にかけて南禪寺永觀堂を逍遙した。これも一寸忘れられない境だつた。

昨夜は京都のある商人から麩屋町のある料理屋に生馬と夜食に呼ばれて始めて京の藝子はんに接して見た。ばばア藝者が處嫌はず猥褻なる內幕話を聞かせるのには、嘔吐を催しながらも謹聽した。この邊に來る藤山雷太も〇〇〇も華族樣も蟲けら同然だね。價値顚倒が思ひ切つてゐて一寸痛快だ。若い藝子はんには惚れて見たいのが不幸にして一人もゐなかつた。

この間は淸水寺の裏山かけて稚兒ケ淵から將軍塚の方を獨りで步き廻はり高臺寺に出て竹久夢二を訪れた。色々な事を思はせる逍遙だつた。

兄の風邪はもうぬけたかな。留守宅でも子供二人、分家では母子やられたらしい。然し大した事はない相だ。何しろ十分用心してくれ給へ。僕は幸に元氣充溢、歸京したら草臥るかも知れないが、今の所では活動に宿屋の主婦を驚かしてゐる。くれぐれも御大事に。

### 足助素一氏宛――十一月四日於比叡山宿院　〔二六二〕

宿願を果して今日寂光院三千院を訪れた後に比叡に登つた。中途でとつぷり日が暮れ果て、足さぐりで步くやうなしま

つ、仕舞には全く心細くなつて漸く宿院に着いた。まだ何處も見物しないが、其夜の寂かさには全く有頂天になる。その秋の空氣の淸さには淚さへ催される。明朝四明に登り阪本に出よう。曇り。

## 原久米太郎氏宛――十一月五日於京都　〔二六三〕

昨日一人の畫家と一緒に八瀨、大原から比叡山に登り山上に一泊。唯今歸宿して御手紙を拜見した。御病人續出御難儀の樣子が察せられる。東京の留守宅でも一通りはやつて退けたらしいが幸にも重いのは一人もないので安心してゐる。十日までは忙しい。多分十一日十二日十三日（今週は風邪の爲め同志社が休んだので）と續けて最後の講演をする筈だから、若しゆつくり來て下さるなら十四日に來ていたゞきたいと思ふ。十日は日曜で都合がいゝが先約がある。京都の秋はよくなつた。今日も大津から疏水を下つたが、兩岸の秋草と松との景色はもつたいないやうだつた。だが少し强行軍をやつたので思ひの外疲れた。今夜は島原の角屋に昔の女郎の風俗を見物に行く。比叡山では林相の神々しいのと根本中堂の建築とに感心した。然し思つた程ではなかつた。疏水のトンネルの神祕的な感じには大にうたれた。

神戶にはもう行きたくない。出來るなら兄が來て下さい。尤も週日の事であり今まで大分休んだ事であるから無理が行く樣ではいけない。十六日の夜は秋田雨雀の芝居もあるから十六日の晚から十七日にかけて來て下さつてもいゝかと思ふが、折返し御都合を知らしてくれ給へ。

皆樣御大事に。草々。

## 秋田雨雀氏宛――十一月六日於奈良　〔二六四〕

島村さんの死を知つて唯々驚き悲しむのみです。お知り申した間は近頃の事だつたけれども、あの劇の爲めに身をはめ

込んでをられる氏の態度には竊かに敬服して其幸福を祈つてゐましたのに、ほんとに悲しい。兄の御悲歎も御察しゝます。靜かな處で考へたくもあり讀書もしたかつたので、京都をのがれてこゝまで來ました。三四日滯在するつもりです。考へねばならぬ事は本當に多いのですね。默つてゐなければいけないやうな默つてゐてはならぬやうな。

## 佐藤繁井氏宛――十一月七日於奈良　〔二六五〕

この間は御手紙難有う。僕の著作集第一卷の合本したのをそちらにお賴みして置きましたが出來は如何でしたか知らん。風邪にかゝらぬ樣祈ります。院兒達にもひどいのが出ないやうに。

この佛像の尊さを見給へ。飛鳥朝卽ち推古期の製作物の中には、見ても〳〵いつまでも飽かぬ惚れ〴〵する尊い藝術が數多くあります。それが大抵本邦の匠人によつて造られたものではなく、朝鮮を經て來た隋時代の作物だといふに至つて情なくなります。夕方になると鹿が啼きます、悲しい聲で淋しく。

## 山本房子氏宛――十一月七日於奈良　〔二六六〕

あなたの好きな奈良に來ました。この頃は鹿がさびしい聲でよく啼きます。この間は三井寺に行つてあなた方が笑ひこけて聞いたといふ鐘の番人の說明を笑ひながら聞きました。先生不相變風邪にもかゝらないで達者でゐます。其後御祖母樣御父上樣如何、旅にまぎれてお尋ねもしません。よろしく願ひます。昨日と今日とはホテルに泊るが、奈良氣分を味ふ爲めに明日から日本間の宿屋に移ります。

正倉院の御物も見物する積り。讀書もしたいし、中々忙しい。

御母さんにもよろしく。

## 谷川徹三、八木澤善次兩氏宛——十一月七日於奈良　〔二六七〕

博物館にて推古期の觀音像を見、一見戀着。その堂守にするといはゞ一生を投じても惜しからじとさへ思ひ申候。古人の心唯驚かれ候。
來十日は晴天なれかしと祈居候。午前十時頃汽車停車場にて御待受け可申候。草々。

## 足助素一氏宛——十一月十日於京都　〔二六八〕

今夕奈良から歸り來て兄からの多數の葉書拜見した。又「小さき者へ」を難有う。御蔭で「小さき者へ」も世に生れ出る事が出來た。前景氣が非常にいゝといふ事も嬉しくない事ではない。唯この異常の景氣が僕の眞價に對する誤算から來てゐるか、僕の中に忌むべき通俗味がある爲から來てゐるものでなければいゝと祈ってゐる。
新聞の廣告の體裁はまだ〳〵不完全だ。足助らしい所が少しも出てゐないと思ふ。叢文閣式を何んとかして發揮したいものだ。
「小さき者へ」は兄も云はれる通り製本貧弱の感はあるがそれは仕方がないとして、表紙の題字の赤字はまづ第一にいけない。それから合本扉の青文字に至つては遂に我慢が出來ない。新潮社の分のには兎も角ブリュー・ブラックの色が出てゐるのに、あの綠色は全く閉口したよ。再版の時にはあれ丈けは少くとも是非嚴密な訂正がしていたゞきたい。「小さき者へ」といふ表紙の字も一體が太過ぎはしないか。
柳のものを出す時には表紙製本には餘程綿密な考慮をこらす必要があると思ふ。武郎著作集は前々の轍を履んだに過ぎないが、今度のものは叢文閣の裝幀の手腕を見せるものだから十分深慮の必要があると思ふ。夫れには兄が暇にまかせて既にある本の中から兄の趣味に最も適したものを選び、其圖案者の誰なるかを探り、其圖案者に依賴するか、又其圖案者

に似たる藝術家を選んで考へて貰ふが第一の策だと思ふ。是れは僕の趣味を提出するよりも兄の趣味に從ふ方がいゝと思ふ。固より及ばずながら相談には與るが。

奈良で見た觀音樣が忘れられない。歸りがけに名殘を告げようと思つたが暇がなくて殘念な事をした。京都に來て見ると京都が矢張りいゝ。いつの間にか僕も都會の人間になつてゐるやうだ。奈良では水がきたなかつた。膳部調度がきたなかつた。恐るべき鈍感が氣になつた。

櫻井鈴子女史が京都まで出かけて來るさうだ。僕は少し恐ろしくなつて來た。何か下心があるものならそれは僕を失望させ彼女を失望させるに終るばかりだ。僕は彼女に對して愛情を感ずる事が出來ない。友達としてなら一種の興味（全く違つた性格から來る）を感じない事はないが。

島村氏の死亡は僕を悲しませる。惜しい人を死なせたものだ。

## 足助素一氏宛――十一月十四日於西須磨　（二六九）

昨日朝俊子死亡の電報を受けてから直ぐ出發したが、原の所に着いたのは夕方だつた。二階に上つて原の顏を見るに忍びなかつた。それでも何かかにか話をすると彼を慰むらしく見えた。夜は原も奥さんも十一時頃から寢たから少しは休んだかも知れない。僕も通夜はしなかつた。夜になつて人が歸つてから俊子にあつた。少し水腫してゐる外は生きてゐる通りな佛顏をしてゐる。兩親の悲しみが本當に思ひやられる。而かも昨日はいやに知らぬ顏の晴天だつた。今朝五時半に起きて見ると空は曇り果てゝゐた。昨夜は雨が降つたのだ。それは又餘りに淋しい心持を誘ひ出す。全く今度はさすがの原も打くだかれたと思ふ。奥さんも氣の毒の至りだ。何んとかして後がさしたる事なく行くやうに祈つてゐる。嘉憲は脚氣足を引ずりながら僕の一寸前に歸家した。駿、健等は平氣で騷いでゐる。駿（お姉さん死んで悲しくはないか）健（悲しい）さういつて又直ぐ笑ひ興じてゐる。明日午後一時納棺。明日午後一時須磨寺敎會で葬式の筈。僕はそれをすますと京

都に歸る心組である。原の近くにゐた事がこの出來事に對して不思議な氣がする。兄と僕との名で花を靈前に供へたいと思ふ。

## 原久米太郎氏夫妻宛——十一月十五日於京都　〔二七〇〕

我が心おびえてあればかりそめの物の音にも打ふり向きぬ
十七の乙女一人が逝きしなりさばかりなりと思へどかなし
十七の年の瀨波は音絶えてこの世にあらず何處にもあらず
天津國に君はあなると人は云へどその天津國我れは得知らず
悲しみはこゝにも湧きぬ幾十里わが家をば離れたれども
瓦斯の火の暗くも靑き下にして物も思はず唯涙しぬ
ありといはゞ我は涙に宿るらむ君を思へば涙流るゝ

## 原久米太郎氏宛——十一月二十六日於麴町　〔二七一〕

遠に手紙を上げなければならないと思ひつゝ今日まで御無沙汰になつてしまつた。足助の處でも兄の御手紙を見ていろいろその當時の事まで思ひ起して涙を催した。俊子君の寫眞は僕の書棚の上に妻のとならべて飾つてある。物を云はんばかりのその姿を見るといぢらしい。奧さんはお悲しみのあまり耳さへ遠くなられたとか、眞にお察しする。兄の家庭は花の散り盡した冬のやうになつたらう。

東京に歸つて見たらかなり疲れてゐたが、こゝにも何かの雜用が待つてゐるので幸に氣もゆるまずにやつてゐる。三兒はうれしい事には健康相な顏をして迎へてくれた。母も先々兎や角やつてゐる、然し寒さに向ふので閉口してゐる。御家

族の移轉は何日頃になるのか、その日には又御面會が出來ると樂しんでゐる。兎に角今までの家には色々の思ひ出が多過ぎていけまい。この冬あたりは是非何處かに轉地でもし給へ。

東京も寒くなつたから須磨もさすがに時々は冷えこむだらう。病魔といふ奴は兎角類を呼びたがる。こんな時には殊更ら用心してくれ給へよ。俊子さんへの供養は兄等が丈夫でゐて外の子供のよろこびである以上の事はあるまい。御母堂にも小さな人たちにも好意をくれぐ〵傳へてくれ給へ。

## 原久米太郎氏宛――十二月八日於麴町　〔二七二〕

弱り目にたゝり目でひどい目にあはれた由は知つてゐながら遂に御無沙汰に打過ぎてしまつた。然し今朝奥さんから葉書經過好良と聞いて大によろこんでゐる。乾兒さんの風邪も順調で回復と聞いて是れ亦安心した。それにつけても奥さんの御苦心と御疲勞の程が思ひやられる。後々を十分御注意を願ひたい。僕も此兩三日風邪にやられたらしい。身體の具合が思はしくないので昨夜は早寢して發汗を試みた處がしたゝか汗をかいた。今朝は大分よろしい。然し正月號の原稿は全部ことわつた、而して著作集だけに全力を盡くす事にした。幸に母以下元氣でゐるから安心してくれたまへ。何しろ早く御快方を祈る。

## 宮澤美穗子氏宛――十二月十日於麴町　〔二七三〕

ほんたうに永い間の御無音になつてすみませんでした。折角お約束して置いた日も、近い家に不幸が出來た爲めに急にその方に行く事になつて履約が出來なかつた事を殘念に思ひます。それからの私は實に多忙に殺されさうでした。毎日客にはつめかけられ原稿の催促は受けその間に下らない家事上の俗事に追ひ立てられ落付いた氣分になれないので御出を願ふ心地にもなれませんでした。その中一昨日から風邪に犯されました。幸にも急いで發汗をした爲めに幸ひどくはなりま

せんでしたが、今は家の中に引籠り原稿も大體は斷つてしまひました。お蔭で少しは氣分だけは樂になりました。今は唯第八輯の執筆に專心するだけになつてゐます。お目にかゝる暇も出來た樣ですが、成るべくなら母が熱海に行つてからお出が願ひたいと思ひます。(それは十五六日以後)それまでは矢張何かと家にてわづらはされると思ひますから。

仕事がしたい、まとまつた仕事がしたい、唯それのみが願はれます。

御大事に。

## 灰谷やす子氏宛——十二月十三日於東京　〔二七四〕

病床の上で親しく筆とつて下さつた御手紙と一册の御著書とは數日前手もとにとゞきましたが、今日まで御返事もせず打過ぎた事をお許し下さい。御著書は今朝讀み終りました。而して度々涙ぐませられてしまひました。あなたの御生活の方向の正しさとその感得の淸純さを私はたしかに感じて涙ぐませられました。羨まるべく美しいあなたの御生活がこの地の上に永く榮えるやうに祈上げます。

御著書に勝手に朱線などを引いた事をお許し下さい。讀みながらついしてしまつた業です。殊に、

「死に面した時に生が赫く……」

の言葉ではじまる一章などは病の中にあられるあなたの筆を通じて伺ふと急にこの世が輝いて來るやうにさへ思ひます。御察しかも知れませんが私は二年前に妻に死別れた身です。妻を私は吸ひ取つてしまひました。妻が死なければこんな切な實感は得られなかつたかも知れませんが、然し今でも妻は矢張り生かしておきたかつたと思ひます。御良人や御子供達が祈り願つて居らるゝ所も亦同樣だと思ひます。許されるなら——永生きして上げて下さい。是れにつけても茅ヶ崎病院は、私のある經驗によればけしからぬ所の樣に思はれます。私の親友の一人はその病院でペテン同樣の目に遇ひました。私は何んだかあなたがそこに居られるのが心配なやうな氣がしてなりません。然しあなたがそこに滿足していらつしやる

ならその御心持ちを破壞しようとして申上げるのではありません。私の僅ばかりの經驗を申上げて見た老婆心に過ぎませんから。そこに本多といふ看護婦長が居りはしませんか。その人だけは院中でも光つて居る人のやうに聞かされましたが。

若しあなたの御心に反してゐなければ私にあなたの御著書（其題目は私はきらひですからわざと書きません）を一册下さいませんか。一册ではない二册。一册を私は見せたいと思ふ人がありますから。

あなたにホヰットマンを讀ませて上げたい。

こんな長い手紙を而かも始めての方にさし上げてお病氣にさはりはしませんでしたか知ら。さうない樣に祈ります。御大事になさいまし。よき魂に遇ひ得たよろこびの餘りに。

〔二七五〕

## 丹治七郎氏宛――十二月十四日於東京

其後は當方よりこそ御無沙汰申上げてゐました。あなた方の御生活に私の思想が何等かの貢獻を爲し得るといふ事は望外の幸です。而してあなた方が御自身の生活をよいものにする爲めには精進なさる有樣が御手紙の中に窺はれてこの上なくうれしく思つてゐます。つひに勝つものはいつでも人知れず深く生命と自然とに根を張るものですね。この頃「生れ出る惱み」のモデルに使つた青年から最近の畫作の寫眞を送つて來ましたが、そこに現はされた自然の姿を見て私は唯驚いてしまひました。何等繪畫についてアカデミックな教育を受けない人でも一心に自然を見詰めた結果はあんな力强いものを生み出す事が出來るのです。生活なり自然なりの上つらをさすつて死んで行く人はほんとに不幸といはねばなりません。

共に話す人もなく冬を迎へようとなさるあなた方の御境遇を御同情します。一度は御邪魔してゆる〳〵御話がしたい。然しそこには美しい沈默があるでせうね。毎日新聞や雜誌の記者にせめられる現在の私から見るとそれは美しい。

御義兄がお惡いのは御同情に堪へません、早くよくおなりなさる事を祈上げます。私の處では幸に三子と共に頑健で暮してゐます。三子はほんとに大きくよくなりました。今日も久振りで彼等を連れて三越に行つて歳暮を買つてやりました。

明日配達される品物を樂んで三人共今夜は殊に元氣よく歌つたりをどつたりして寢に就きました。それを彼等の母にも見せてやりたいやうな氣がします。では御大事に。

## 原久米太郎氏宛――十二月十六日於麹町　〔二七六〕

足助の話によると又々發熱された由、但し腫物からのではないとの事で安心はしてゐるが、嘸かし御不自由且御苦痛の事とお察しする。十分攝養して早く解熱せられん事を祈る。何んでも今度はいつもの蒸氣ポンプの輓馬風にやらずに木村を見習つて闇牛と出かける事だね。癒つてもうつかり早まつてはいけないよ。是れは今からくれぐ〜もいつて置くよ。一家と共に温泉にでも行つて大に成貧振りを發揮し給へ。

年末の雜用にまぎれて仕事が出來ないのが、つらくつていけない。こつちとらの商賣は氣分一つだもんだから、一度こぢらされると一日何んにも出來やしない。何んとか簡易生活法を案出しなければ愛讀者にも申譯がない次第だ。

正月の大阪毎日には十回程の小說を出す。保養がてら讀んでくれ給へ。生馬も里見も少し勉强した樣だ、何か現はれるだらう。

大に今日は亂筆を極めた。御判讀を乞ふ。少々仕事の出來ない不平も手傳つてゐると思ひ給へ。

奧さんによろしく、御大事になさいと傳へてくれ給へ。

## 木田金次郎氏宛――十二月二十一日於東京　〔二七七〕

先達の御便りと今度のスケッチとをたしかに受取りました。兄の御進境には感心してしまひました。然し私をして盲目なる勝手をいはして下さるなら、兄の自然に對する態度には間然する所は更にないと思ひます。あれ位大事に自然を取あつかはうとした人を私は今の畫家の中に見出し得ないやうな氣がします。然し表現方法に行くと兄にはまだ〳〵遠い道が

殘されてゐるやうに思へます。例へば兄が近景を描き終つて遠景に移られる時、畫の上で其區別をなさる事を忘れて居られないか。兄が近景を見る時と同一の執着を以て遠景を見られるのは至當の事でありますが、それを畫面に描き現はす段になると、近景の物象を顧慮する事なしに遠景を描きこんでは、畫が自然よりも平板に單調になりはしないでせうか。兄の畫には距離といふものは十分に現はされてゐるのに何か遠さを思はせないのが、筆致の單調によるものではないでせうか。もう一つは筆が少し自然に威壓され過ぎては居ないかといふ事です。もつと自然を輕く見たらと云ふ意味ではありません。もつと兄が自然に合致したらと思ふまでです。是等は然し私の素人考へです。御參考になるか如何か知りません。

茲に一つ御相談といふのは兄の畫を欲しいといふ人にあの畫の中數枚を分けて下さる事が出來るでせうか。それを許してお貰ひしたいのです。すぐ萬望御返事を下さい。

拜見後不取敢。草々。

〔二七八〕

## 原久米太郎氏宛――十二月二十四日於麹町

其後は益々御快方の事と思つて御全快の日を樂しんでゐる。昨日は森本が尋ねて來て兄の近況を語つて行つた。彼も兄に與へられたこの度の打擊には一方ならず同情してゐた。奥さんも別に大したつかれは來ないだらうな。

母は行光を伴つて酒匂の妹の家に避寒してゐる。急に暇が出た樣で大に勉强してゐる。實際兄の云はるゝ如く當分の家事の俗務も僕には藥だ。仕事が妨げられるのだけは不平だが、その外には決して不平は云はないから安心してくれ給へ。

元日から大阪毎日にのる小說を送つて置いた。七八囘程の短いものだ。僕を知つてくれられる兄には多少の興味があるかも知れないが、一般の讀者は呆氣に取られるだらうと思つてゐる。

それはさうと蜜柑を澤山難有、今朝箱を開いてその見事なのに驚嘆した。早速生馬、英夫に分配する事にした。くれぐれも御禮申上げる。

所謂年內といふものも餘日がなくなつた。來年は兄の所によい年が來るやうにと祈つてゐる。いつ頃退院か知らん。成るべくなら家で御正月が出來るといゝがと思つてゐるが。

## 久保正夫氏宛――十二月二十九日於東京　〔二七九〕

昨日小旅から歸つて來て御手紙を拜見した爲めにお返事がおくれました。御許しを願ひます。京都滯在中は失禮を申上ました。

「完全の鏡」を御譯了なされたについて何か書けとのおすゝめは身に餘る御厚意と難有く存じますが、實は私は一個の作家なので、學者として何等の素養のないものです。聖フランシスに關する書物なども二三は讀みましたが、學者の眼を以て讀んだ事はありませんので、御著に何か書く段になると全く閉口してしまひます。許していたゞく事は出來ないでせうか。柳宗悅君などは最も適當な人ではないかと私は思ひますが、若し御望みがあつてまだ御存じがないのなら、私から御紹介申上げてもよろしう御座います。

お譯しになつた「小さき花」は私の藏書の中にあつて感讀致しました本です。あなたの御立派な御仕事がよき種を人の心に植ゑつける樣に祈上ます。

寒いから御用心を祈上ます。御返事迄。草々。

# 一九一九年

## 足助素一氏宛――一月二日於東京　〔二八〇〕

御安着でこつちも安心した。波が荒れさうなお便りだつたから如何かと案じてゐた。禪僧のやうに孤獨で正月を迎へた。大きながらんとした家の中にゐるのは寒いものだ。兄がたつてから三十一日の朝坂田兄が見えて紙の相談があつたが、年内には買はない方がいゝだらうと云つた。坂田兄の意見を聞いて見るとその方がよささうだつた。

兄のあの手紙は兄と別れたその夜床に就いてから見てすつかり滅入つてしまつた。あの頃の兄の事を考へると、而して兄を如何する事も出來なかつた僕の事を考へると、全く海中に投げ出された二人の赤坊のやうだつたと云つていゝね。運命の一寸先きはほんとに分らない。あの手紙は珍襲に値する。兄があれを示して下さつた事を難有く思ふ。

昨日と今日は先づ廻禮に過してしまつた。明日から又仕事にかゝる。新年の雜誌も生馬と里見のものゝ外は芥川氏のものを讀んだのと志賀のものとを讀んだばかりだが、志賀のものには矢張感心させられた。表現に誇張がなくつて感じが深い。センテイメンタルでなくつて而かも潤つてゐる。そこが彼の身上かと思つた。

何しろこんどはゆつくり養生し給へ。僕も出來るだけの事はしてお助けをするから。留守の方にもたんと懸念なさるな。明日あたり一寸行つて見ようかとも思つてゐた。其中何か罐詰ものでも送らう。左樣なら。

## 原久米太郎氏宛――一月二日於麴町　〔二八一〕

正月になる前に退院が出來たか如何か遥かに御案じしながら年がくれてしまつた。其後御容體は如何だ。僕の處では母と子供等は酒匂で、僕だけは禪僧のやうにがらんとした留守宅で越年した。何事もなし〱。

何しろ早くよくなつて貰はないと何か心細い。九州行は何日頃になるのだ。足助は又舊躝せきが烈しいのに辟易して又又豆州の土肥にしけ込んだ。今度は十分體の囘復を得るまで二ヶ月でも三ヶ月でも居るといふ意氣込で出かけたが多分は一ヶ月も居たゝまらないで歸つて來るかと思つてゐる。何しろそこいらに病人が居るのは全く閉口だ。生馬もこの頃少々不健康で、明日から一家を擧げて熱海に出かける。

「或女」の原稿を早く作成しなければならないと思ふと氣ばかりあせるが仕事は思ふやうに出來難い。然し二月末頃までには版になつて讀んでもらへるかと思つてゐる。

何しろ大事にし給へ。姓名帖をあてがつて新年狀を書かしたから執筆先生無責任にも兄にも出したかも知れないがそれは許してくれ給へ。左樣なら。

送つて下さつた蜜柑は恐ろしく結構なものだつた。子供達は朝から賞味してゐた。

東京は度々去年末は降雪があつた、今年になつても中々寒い。第一あまり日の目を見ない、「朝晴雪」處のさわぎにあらず。

今年は小生の厄年だ、何かもちあがるか知れたものではない。元日の朝早く齒がかけた(尤も瀨戸ものの)。かつぐ奴なら大變だらう。紋付を着たら羽織の紐が眞黑だつた。葬式の時に着たなりを下女先生が着せ居つたのだ。母でも居ればそんな事はないのだらうが、これもかつぎ屋であつたら大變もんだ。そこは暢氣なものでかけた齒はかけた處にあてがつて兎に角間に合せ、黑い紐は黑い紐のまゝで悠然と禮まはりに出かけた。

有島行郎氏宛――一月六日於東京　〔二八二〕

災せられたる年逝きて希望多かるべき年來り申候。君にも健かによき歲を迎へ給ひけむ、大學の新しき課程にも興味多くいそしみ給へるならんと遙かにおよろこび申上居候。

母上と三兒とは酒匂山本別莊にて越年なされ小生のみ東京に留り申候處、三日以來發熱して今日漸く起床致候樣の仕儀遂々御無沙汰に及候。今日は何たる凶日にや朝來三軒の家に死者を弔ひ申候、一は安藤母堂二は命尾老先生三は松井須磨子、歳は八十三、八十九、三十四、須磨子は身を殺して抱月氏の後を追ひたる次第に候。

日本に於ても今年は思想上に動搖あるべきと共に實際にも何等か激しき運動起りはせずやと豫想致され候。維新以來のほんとの維新は是れからなるべしと存ぜられ候。我等思想界に籍を置くものは愼重の考察を要する事に候。

送金は舊臘內に御受取下され候半か、或は不自由なされざりしやと御案じ申上居候。

折角御無事にて御起居の程祈上候。此夏休暇には一度御歸休如何に候や。母上殊に翹望の御樣子に御座候。目下分家は熱海、佐藤は舊分家へ移轉、山內は四谷に新築出來舊臘引移申候。

先は新年の御祝儀旁草々敬白。

昨年末寫したる三兒の寫眞御慰みに御覽に入れ申候。

## 宮澤美穗子氏宛――一月六日於麴町　〔二八三〕

あなたのお手紙は私を恐れさせます。御文言を具體的に云ひかへれば戀といふ字で置きかへる事が出來る樣にさへ思はれます。そんな事は萬々ない事だとは勿論思ひますが若しさうだとすると私はあなたを絕對に失望させるやうになりはしないかと思ふからです。私の心は今枯れ果てゝ居ます、恐ろしい程枯れ果てゝゐます。それは餘り激しい噴火が齎らす當然の結果なる死火山のやうです。火がないんではない、火は今でも有り餘つて困る程ある。然しそれが地表に出て來る時は何時だか私自身も知りません。一生來る事のなかれかしと私自身は願つてゐる程この靜寂が恐ろしくもありなつかしくもあります。何卒それを御承知で私といふものを見て下さい。而してあなたの心の火が更に活々した他の對象に對して全燃的に働く機會のある樣に祈つてゐます。

友としてあなたを有する事を私はよろこびとします。それとこれとは私にははつきり區別が出來ます。あなたに御出來にならないとならば私達は今の中に好意を持ち合つたまゝお別れするのが恐らく兩者の爲めにいゝ事かとも思ひます。あまり露骨なあて推量をして失禮かとも思ひますが、思つた事は云つてしまひ度い質ですから、御懇意づくに判然申上ます。この言葉のどれもが萬々一にもあなたの悲しみとならぬ樣に。

## 足助素一氏宛――一月九日於東京　〔二八四〕

五日の朝には須磨子が死ぬ、その夕には命尾先生が死ぬ、六日の朝には僕の名付け親の老細君安藤の母堂が死ぬ。僕は六日の日に三軒死者の家を尋ねた、何んといふ凶日だつたらう。命尾先生の死は莊嚴だつた、須磨子の死は美しく悲しかつた、安藤母堂の死は平凡他の奇がなかつた、その代りその家には後嗣者に美しき許嫁の阿孃が來てゐた。一死三樣、人生の多趣も亦極め難い。

原の丹毒には全く驚いてしまつた。今朝僕の方にも細君から通知があつた。今度こそ原の奴も心から打擢かれてゐるに違ひない。何んとも云へない悲壯を感ずる。然し何んと云つても喪心は死だ、意地でも張りでも通し切る外はない。死ぬまではしぶとく構へて生きて見るより仕方がない。その上で人生といふものに血の極印を押すのだ。その極印のみが本當に人生をさばき得るのだ。つくぐ〵とさう思つた。

僕の風邪は先づ全快した。今日は二つの葬式に立會はなければならぬ。仕事の方のはかどらないのは察してくれ給へ。校正はそろ〳〵來出した。坂田君にはそんな譯でまだ正月以來會はないでゐる。

祈御恢復。

行光が一昨日歸つて來た、少しにぎやかになつた。母と行三とが少し風邪を引いてゐる相だ。

兄の筆硯は如何。筆を執つて見たか。

## 宮澤美穂子氏宛――一月十日　〔二八五〕

Dear Friend: ――

I understand thoroughly what you meant. We can be a good friend. Not only I have no objection whatever to it, I appreciate ever so much your implicit trust on me. I am worthless, but I shall try to deserve your friendship. Only I fear you dwell in a tower of ivory which you built on me, whom you perchance take for very solid and sound. Hope you shall not be disillusioned some day or other. Leaving the rest to the further interview, I remain.

truly yours,

## 川浪てい子氏宛――一月十二日於東京　〔二八六〕

時々は御見舞を申上げようと思ひながら遂に御無沙汰をしてしまひますが、この頃は少しおよろしき由、然しあの御手紙が御病床の上で書かれたものであることを想像して、この四五年來の御境地をしみ〴〵とお察し申上げます。運命とでも云ふものに對するあなたの強い御態度の底の御心持ちもおぼろげながら御同情が出來るやうに思ひます。傍で見てゐてもう試練も大抵でよささうなものとのみ思はれます。

而かもあなたが病に屈せず病に遇つて益〻頭の冴えるのをおもらしなさるのを伺ふと更に悲しみを感じます。

去年の秋京都に一ヶ月程滯在しました――話が思ひ存分飛びます。――その間に奈良に行つてそこの博物館に行き推古朝に百濟人が作つたと稱せられる丈六程の觀音の像を拜んですつかりそれに戀してしまひました。若しその御堂が出來て堂守を賴申されたら私はよろこんで私の仕事全部を抛擲して、その堂守となることが出來るとさへ思ひました。そんな心地をした時から思ふと今は私は我執の虜です。自分の著作に嚙み付いてゐます。中々出來ないで悲しんだり怒つたりして

ゐます。二月はじめに出るべきものが二月末にも如何かと思つてゐます。三日から發熱して三四日就床、それがよくなると子供の一人が臥てしまつたので心がいら〳〵して思ふやうに行かないのです。滾々とあふれるやうでなければ本當の力はあらはれて來ないのではないかと思ひます。然し私は同じ苦しむんでも怒るんでも他の苦しみ怒りに比ぶれば比較になりませんからこの道を捨てられません。

川浪兄にも暫くお目に懸りません、苦しんでゐられること丶御同情に堪へません。そちらの寒いしめやかな御生活も殊に思ひやられます。先達は創作を御發表になつたのでせう、私はまだ拜見せずにゐますが。何しろ御大事になさい、と申すのも月並かも知れませんが、さう祈るより外に道はありません。

## 原久米太郎氏宛――一月二十三日於麴町　〔二八七〕

木村からの來信で御退院を知つた。非常によろこんでゐる。嘸つらかつたらう、然し再家族一同の團欒を得たのは何よりだ。但しさういふ時に奇妙に淋しい感じもしようけれども、先づ當分は何事も考へずにゆつくり養生して捲土重來の素地を作り給へ。お互に是れからだからな。

文壇の有象無象の渦中に出るのが面倒だから總ての會から脫會して全く孤立した。氣が晴れ〳〵する。作品も孤立して發表が出來る、是れも氣持ちがいゝ。僕が元來文學を選んだのもこの境地を得たかつたからだ。然し自分の力を考へると稍ゝ閉口してゐる。

木村暗牛の大著は愈々警醒社から出る事になつた。一寸のぞいて見たがごく通俗的に科學の智識が澤山入れ込んであるから、一般讀者を益する事が多いと思ふ。竹崎の譯文も同社から出る事になつた。足助は士肥から歸つて來たが矢張り歸るとせきが出るとこぼしてゐる。あの體では先づ冬季間は海岸に住んで二三日に一度づゝ上京するのが最上策かと思つてゐる。

病をしてゐた行光が昨日から起床したから明日母と共に熱海に行かせると、僕は生活の上でも茲暫く全くの孤立になる。その間にゆつくり自分といふものも考へよう。

何しろ大事にし給へ。大病のあとは殊に大事だよ。

## 吹田順助氏宛――一月二十三日於東京　〔二八八〕

其後はこちらよりこそ御無沙汰してゐました。兄がヘッベルの譯を完成されたについて足助が出版すればいゝがと願つてゐます。尙乍失禮私も拜見させていたゞきます。

「小さき影」を認めて下さつた事を深くよろこんでゐます、あれは多くの人達からは見落されさうなものだと思つてゐましたが果してその通りでした。それに兄が認めて下さつたので非常に力強く思つたのです。

今は頻りに「或女」にかゝつてゐますが、なかなか思ふやうに行かぬので殘念です。讀者を滿足させるだけのものになればいゝと思つてゐます。兎に角、自由に働く丈けの地歩を占め得たことは仕合せです。是れからやれるだけやつて見ます。

風邪が流行するやうですから切に御自愛を祈上げます。

不取敢御禮迄。

## 家族宛――一月二十八日於麴町　〔二八九〕

信子殿よりの御來書により御一同樣御健勝の趣承知、大に安心およろこび申上候。當方も幸に至て元氣に暮し居候間乍憚御放念被下度願上候。昨日思ひ立ち足助君と同道千葉縣大原に參申候。（しづも其節同伴の事に致置候處お化粧間にあはず其日午後出發歸鄕致由、皆々樣へよろしくとの事）目的にして參候所は更に何の奇も無之失望仕候處、其附近に小生が

敎へたる農學士あり。村中の舊家大家にして驚くべき贅澤なる生活致居候が、其邊に土地澤山所有し居り今日一日見せくれ候處中一ヶ所非常に好適の所を見出し申候。西方に美しき老松の砂山有、南方開きの平坦なる砂地の麥畑に接し、一側には縣道走り一側にも相當の道路有之候處にて、町より七八町海より七八町離れ居、二階を建れば海岸も見え候處に有之、千二三百坪も可有之と存じ候。一つ買ひ物かと思案罷在候。沂き將來には必ず殷盛の避暑地と相成るべき所かと存じ申し今夕歸宅仕候。行光叔父樣の御後援にあづかり居候由法外の仕合せくれ〴〵も御禮申上候。よし子も大概平癒一兩日中に退院の事に相成候趣に御座候。

與謝野女史より櫻島到來とて茄子及び胡瓜の福分けにあづかり申候。餘り見事に候まゝ極少々には有之候得共入御覽候。先は小旅の報告旁ゞ草々如件。

行光へ

をぢさまにけいこをしていたゞいてゐるさうですね。そんなえらいせんせいはめつたにないからせいをだしてよくおつしやることをきいてべんきやうなさい。あなたのおともだちはみんながくかうでならつてゐますから、せいをださないとまけておくれてしまひますからね。がくかうはやすんでゐたがかへつてよくできるやうになつたとせんせいが云つて下さるやうにえらくおなりなさい。あなたがたがおるすの中にばばもよくべんきやうします。敏、行三さんにもよろしく。

〔二九〇〕

## 山村暮鳥氏宛——二月二日於東京

諸方から雜誌を送つて下さいますが、私は自分の懶慢から滅多に目を通したことがありませんでした。ところが「苦惱者」を頂戴して、計らずあなたの「眞實に生きようとする自分の詩」といふのを拜見して、思はず淚を流してしまひました。

詩の形式の如きは私にはよく解りません。あなたの詩に盛られた純眞な御心持ちは深く私に徹底しました。私の樣に實

生活に安易なものが涙を流したと申した處でそれは寧ろ滑稽といはるべきものかと思ひます。これは他人に申すべき事ではなかつたかも知れませぬ。然しあなたは私の心持をも全くお笑ひ捨てもなさるまいと思つてあなたの名譽の爲めに些やかながら一つの homage を呈したいばかりにこの手紙を書きました。

あなたの御仕事の上に祝福を祈上ます。

## 木田氏繪畫展通知狀――二月五日　〔二九一〕

「生れ出る惱み」と云ふ私の小說の主人公のモデルに用ゐた靑年漁夫木田金次郞氏から三四十枚の鉛筆の習作を送つて來ましたので、本人の承諾を得てそれをほんの同好の諸君にだけ鑑賞していたゞく爲めにさゝやかな展覽會を開きます。御暇がありましたらお望みの方をお誘ひ合ひ下さいましてお出で下さいまし。

場所――麴町區下六番町十番地、佐藤隆三方（泉鏡花氏宅向側あたりの路次を入りたる所）

期日――大正八年二月九日十日兩日午前九時より。

附記――金にも時間にも餘裕のない木田氏に少しなりとも餘裕を寄與する爲めにお望の方には同氏の作品をお讓りします。

## 山村暮鳥氏宛――二月十一日朝、憲法發布三十年記念の日於東京　〔二九二〕

御手紙と詩集とを難有く存じました。詩集は早速開卷して五六の御作を拜見して矢張感激致しました。私の書いたものを卷末にでも御のせ下さるといふ御好意は感謝致しますが、到底そんな資格は持つてゐませんので、どうか許していたゞき度く思ひます。謙遜なあなたの一人の讀者としてお認め下さる樣願ひ上げます。

御健康がお勝れにならない事を福士幸次郞氏から伺ひました。寒さの折柄ですから切に御自愛なさつて斯道の爲めに御

盡しなさる事を祈上ます。一昨日と昨日とは「生れ出る惱み」の主人公が描いた畫の小さな展覽會を開いてそれに忙殺されてゐる間に御作を讀みました。「父のおん手」を朗讀して皆を感心させてやりました。今日からは又旅に出ますので（自分の仕事の爲めに）五六日は熟讀の期を得ないと思ひます。御禮まで草々。

## 原久米太郎氏宛――二月十一日於麴町　〔二九三〕

どうも送りものは手紙だけで廣告しておいて忘れてしまつた樣だ。だから今明日の中に發送する。御笑味下されば幸甚。親切心は中々あるが實行のない所が藝術家の特色とあきらめてくれ給へ。

「生れ出る惱み」の主人公の描いた習作の展覽會を一昨日と昨日と二日行つた。一日三四十圓の收入があつた。本人はよろこぶ事だらうと思つてゐる。

今日は是れから「或女」の原稿を書く爲めに五六日旅行する。兄が本月末上京するのを樂しみにしてゐる。

東京は每々雪でせめられてゐるが貴地は如何。今日などは雪の上を吹く風で中々寒い。何しろ惡性感冐も流行する折柄十分御大事になさい。寸報草々。

## 木村德藏氏宛――二月十一日於麴町　〔二九四〕

僕は今日から旅行に出懸けて十六日の晝歸つて來る。警醒社の事などは書き殘しておくから兄が來たら讀んでくれ給へ。ゆつくり滯在してくれ給へ。

救世軍の演說といふのは逢阪信忢君（御存じの筈、今は大尉にして銀座小隊長）が大學普及講演の事業をやつてゐて、新渡戶、內村、大島、其他の人々も時々講演するので僕も旣に二三度した次第だ。逢阪君も是非兄にしていたゞきたいとの事だつた。兄は勿論承諾してくれることと思ふ（蟲がいゝがさう決める）。でどうか至急逢阪君に向けてその夜の講演

を知らしてやつてくれ給へ。（十五日「土曜日」午後七時頃からだ）どうか願ふ。
兄は僕の家に泊つてくれる事と思ふ。逢阪君が十五日には打合せに來る事になつてゐるからその積りで。
逢阪君の番地は、京橋區京橋際救世軍銀座小隊　逢阪信忢
それから十六日の夜新渡戸先生其他と會食することになつてゐるからその日は豫めあけて置いてくれ給へ。右至急。

## 足助素一氏宛――二月十七日　〔二九五〕

瀧田氏の所に行つたら內務省の圖書課長が知己だといふので紹介してくれ、今夜七時過ぎでなければ會へぬといふので七時半に出かけたら、話が長びいて御使に間に合はなかつた、失禮。矢張あの部分は問題になる相だ。直でなく側寫ならいゝとの事だが、その位ならない方がいゝから除く事にする。他の部分も二三ヶ所心付いた所は訂正して置いたからもう大丈夫だと思ふ。
藥がおそくなつてすまなかつた、御役に立てばいゝが。
明朝は九時某分の汽車で出發する。何か用があつたらそれまでに傳へてくれ給へ。御病氣は十分御大切に願ふ。
昆布は難有う。

## 有島行郎氏宛――二月二十一日於熱海　〔二九六〕

去る十八日當地に母上を御見舞致候。當地には母上、三兒、及生馬君一家（目下大島滯在中）あり一同無上の元氣に付御安心被下度候。この地にて一月十三日御差出の御手紙拜見致候。送金おくれ候爲め御迷惑相成候樣子誠に御氣の毒に存上候。
學科は每日御多忙の御樣子中々御骨折りの事と存上候。惡風邪流行の折柄この上とも御大事に御勉强可相成候。

舜三氏死亡の事實は意外千萬、君にもこの上なき御心痛に御力落しにも有之候半、實は同氏遺族歸京に同伴して君にも御歸朝ありたらばとの議當方に起り居候旨高木迄申通置候處、適當の同伴者有之候由にて夫れには不及との返事に候間御電報も不申上其儘に致候次第に御座候。高木母上の御悲歎は見るも憐れなる由に御座候。

當地にては目下御存知の植木屋市太郎泊り込みにて造園に參居り、日々庭に於て働き居候。每日々々面目を改め參候事中々の見物に御座候。母上にも御慰みの樣見受けられ申候。この頃は三兒も大分成長し三人にて喧嘩も不致おとなしく活潑に遊び暮し居候。母上の御世話は中々の事ながら當地にある御蔭にて風邪にも不被犯幸に存居候。小生は文學上の仕事には充分多忙に消光致居候。思ふやうなる仕事は不出來候得共兎に角努力は致居候。佐藤にては元分家のゐたる所に引移り來りにぎやかに相成申候。山内の新築はやがて完成の事と存候。宏大なるものが出來上り候は宜敷候得共中々入れ置き候もの夥しく不足の由にて困り居候。

平和會議の爲め日本よりは續々渡歐するもの有之、米國通過の向も多き事とて時には御存じの人にも御邂逅かと存候。新渡戸先生も本月末後藤男と渡米さるゝ筈、御近所に御出の節は御訪問可然か。當方の樣子も大體は御わかり相成候事と存申候。

先は好便にまかせ草々敬白。

## 木田金次郎氏宛　――二月二十五日於東京　〔二九七〕

二月九日十日の兩日に弟生馬の舊屋の畫室で開いた兄の展覽會は、若し盛大と云ふ事が出來なければ、非常に氣持のいいものでした。三十五面の額（一面を除く外は總て同じ大きさ）は順序よく二列に壁にかけられました。壁紙は暗綠のものに貼りかへた處が額との調和が思ひの外よう御座いました。畫室には五六鉢の植木鉢と二臺の大火鉢と長椅子小椅子が配置されて簡素な裝飾が出來ました。門の處には木田金次郎氏習作品展覽會といふ新札をかけました。

八日の日は東京は稀有な大雪で、九日の日は朝から思ひ切つた好晴になりました。二階になつてゐるその畫室から見ると家々の屋根の雪から洗つたやうに澄み亙つた靑空が續いてそゞろに北海道の冬の晴れた日を思はせました。女子大學の英文科の生徒で小樽から來てゐる辻きよといふ人を第一日に、尾竹越堂といふ日本畫家の末娘で尾竹紅吉といつた靑鞜派の同人なる人の妹に當る淺井みつゐといふ人を第二日に手傳に頼みました。二人とも私の處に出入してゐる人達で喜んで働いてくれました。それより前八十人程の人に出した招待狀の葉書は別紙の通りでした。

一番困つたのは作品を讓與する時に値段を如何したらいゝかと云ふ事でした。私が勝手に決める譯には勿論行きません。考へた末に額緣が一圓五十錢程かゝつた筈だから（實は額緣代はまだ取りに來ないのですが大體そんなものだらうと決算してしまひました。若し推定額より高かつたら私の損、低かつたら兄の損とあきらめる事）それ以上いくらでも觀る人が評價してくれるやうにといふ事にしました。さうすればどんな貧乏な學生の如き人でさへ兄の熱愛者は一枚を得て朝夕樂しむ事が出來ると思つたからです。

初日には五十人次ぎの日には七十五人來ました。非常に心持がいゝといつていつまでも居殘つた人もありました。

二日目の夕方薄暗くなつて電燈が點つてから總仕舞をしましたが、あんな淋しいいやな心持は、一寸經驗しない位でした。展覽會でも數日やつて見たらあんな心持はなくなるかも知れないが、私にはその時の感じは忘れられないだらう。

愉快に感じた一つはいつか兄が札幌で始めて私を訪ねてくれられた時、一緒に伴つて來たその人が突然二人の岩内の靑年と見に來てくれられた事です。多分その方から旣に通信は行つた事と思ひます。あれは「袴腰」といふ山だ、あれは硫黃山だと敎へられたのはその方からでした。その方達も非常に喜んで吳れられました。

兄の作品が一枚平均十圓にも足らずに買はれたのは兄にも不服かも知れませんが、それを買つた人が、多くは智的な從つて金錢上の自由を有しない人達だといふ事を知つて我慢してください。大家の庫中に塵を被つて藏せられるよりも、さういふ本當の熱愛者に常住眺められてゐるといふ事が兄にも滿足だと思ひます。

殘つた畫は額緣付きでその中御返送します。兄の收入は振替貯金でお送りします。

小さな旅行を二度程した爲めに御報告が遲れてすみませんでした。手傳つてくれた二人の少女達には私の專斷で額面を一枚づゝあげましたら、私から十分御禮をするやうにとの事でした。

兄の今年の御收穫を鶴首して待つて居ます。百圓そこ〳〵では何んのたしにもならないかも知れないが、兄が油繪を畫かれる何かの用には立つかと思ひます。

丈夫で御勉强を祈ります。私は幸に丈夫です。今日「或女」前篇を書き上げて書肆に渡した所です。草臥れました。然し自分の仕事が曲りなりにも一段落をつげる程愉快な喜びはない。この心持は何人にも解るまいと思ひます。

## 家族宛――二月二十八日　〔二九八〕

唯今信子君より熱海に御歸着相成候由の御消息に接し、皆々樣不相變御健勝の御樣子も承知安心仕候。

二十三日は命尾先生の追善會に赴き候處來會者殊の外多數にて賑々敷、私は宮永氏をシテに廻して蟬丸のツレを謠ひ大に喝采を博し申候。晝後は福島氏の葬儀に列しそれより猿樂町にかけつけ長の藤戶、治のシテ及び家元の大會を見物、從つて中野氏の鸚鵡小町は拜聽せずに終申候。小村樣への御狀は直ちに御渡申上候處其にありし弔辭命尾未亡人にお見せ相成候由にて老夫人は感慨にむせび落淚致居られ候。

昨日は東京帝國大學なる新人會と申すに獨り演說に出かけ、四人程の聽衆に對して一時間餘の話を致し其後吉野博士などと會食、若き人達の氣焰中々に御座候。同夜は三河屋でも文士學者の會合あり、主催者山本といふ鹿兒島の人（藤居御夫婦が世話になつて居る人）二度迄來會を促しに參候得共遂に參會不致、性質の面白からぬ會と被存候、是れは生馬君まで申上候（君も東京ならば招かるゝ所なりし故）。山本と申す人間は沒理漢らしく候。

東京も大分春めき來り此樣子にてはさして寒き日も來るまじく風邪も稍々下火に相成候樣なれば、行光若し希望ならば

敏と共に御分家に御願ひ四日歸京させ下され候樣願上候。尤も敏行は開校迄に歸來ればよき事なればもう少し後にても差支は無御座候得共、幼稚園卒業際に參居るもよろしきかと存候。

金百圓小切手にて御送申上候。銀行にて御引出しの節御印御持ち合せなきをおそれ裏に捺印致置候得共熱海銀行に御用ひなれの印御座候はばそれを御用被下度候。尙御引拂の節は御入用の額御申付被下度直に御送呈可致候。

幸に御留守宅一同元氣御安意被下度此段御一報旁々草々敬白。

## 母堂宛――三月十日於麴町　〔二九九〕

益〻御淸適の事と拜察奉大賀候。其後信子さんは如何に御座候や。昨日あたり御歸りかと心待ち致居候へ共、其事なく稍々御案じ申上居候。歸京早々生馬發熱、野田氏も一時は肺炎の手あてなど致候由なれども、昨日より旣に下熱相成候由なれば順次快方と存居候。

曉子、行光は至而元氣、昨日曜には曉子は山本に、行光は向井と花月園に出向申候。

一昨日より神戸木村君上京滯在中にて、昨夜は共に有樂座を見物致候。今朝は仙臺より同氏の義妹上京の筈の處着宅なき故、唯今木村上野に參候へ共、電話の樣子にては姿不相見當、紛失かと存ぜられ候。さすがに木村の妹に恥ぢざる次第に御座候。

昨日は午前十時、川添三次氏の葬儀に列し申候、哀れに御座候ひき。

三島男爵の薨去、この頃は驚かれぬる事のみ多き事に御座候。

明日は其葬儀に列する事に御座候。

右御一報旁々。草々頓首。

敏ちやん　コノアヒダハオテガミ　アリガタウ　モウヂキ　アヘルネ　兄サンハ　ガクカウニイッテ　キマス　行三ニ

一九一九年

ヨロシク。

## 母堂宛——三月十二日於麴町　〔三〇〇〕

信子さんが歸京してから御樣子も申上げませんでした。敏行は無事に着京して翌日から通學してゐます。信子さんは東京が思つたより寒いので少々閉口の樣子ですがさしたる事はないと思ひます。生馬も段々いゝ方ですから御案じ遊ばされますな。私は全快と申していゝまでになりました。戸川は依然引籠つては居ますが勿論惡い方ではありません。門番はもう大丈夫。

唯顏の色が非常によくありません。一人手傳の女の人も來てゐますから入院の必要はないと思ひます。

飯田は傭人の不足と仕事が忙しい爲め參上致兼ねる由です。津山の母堂は十二になる孫女が去る五日から盲腸炎の氣味で段々いゝ方ではある相ですが手が放せない相です。神尾母上にも今日山本でお遇ひ申しましたが女中の居らぬ爲め矢張駄目、御兩人共非常に殘念がつて居られました。其代り山内が十四日に夫婦で洋一を伴うて參上するとの事です。私は十八日頃に參上しませう。家の片付けは水谷の若いものを賴んでして貰ふのが一番便利かと存じます。子供はこの春休みに又々御厄介になるのもいかゞと思ひます。是れは然し母上樣の御心次第に御定めと願ひます。春休頃には此方の氣候も惡くはないと思ひますから東京にいらしても大した事はないかと思ひます。

御申付の澤庵は夫々分配致させます。難有う御座いました。幅物は頓と失念失禮、十四日に山内に託します。

今日は山本に出懸け晝飯を御馳走になり二兒も後から來り神尾母上も見え大分謠を稽古して貰ひました。山本も大分快活に見えます。同家母堂少恙にて御引籠り、然し是れもさしたる事は御座いません。

今日は春雨らしい雨が降つて中々寒い事で御座います。かう氣溫の變化がひどくつては全くたまりません。

先は右のみ。草々如件。

## 原久米太郎氏宛——三月十六日於麹町　〔三〇一〕

其後は大變な御無沙汰御容赦を乞ふ。毎日原稿を責め立てられてゐるので、兄ではないが全く負債を山ほど持つた樣な風で何時でも氣が氣でない。長生きをしようといふには損だと思ふが生來の怠慢致方なし。其代り怠慢の方で長生きが出來るだらう。

先般は須田氏が御上京の節態々御來訪土産物まで下さつたが、丁度不在で失禮したので早速御詫びの手紙を書いたには書いたが偖て番地を忘れてしまつて出す事が出來ない。心殘りで仕方がない。御序の節宜しく御傳言を願ふ。

木村も先日上京して二晩か泊つて行つた。あの骨皮道人が一入痩せて見えたのは氣の毒千萬だつた。出版の方の用事も略〻落着した。九月には市場に出る事になるだらう。

仕事といへば兄はまだ全快とは行かない中にあんまり齷齪し給ふなよ。兄のエネルギーは異常なものだが濫用は全く謹しんでくれ給へよ。然し色々の仕事に目鼻がついて行くのは結構な事だ。足助は活版印刷所が教科書の仕事か何かで少しも他の事に手をつけないので手おくれ勝ちなのでやきもきしてゐるらしい。この頃は暫く遇はないが健康らしい。明後日は滿洲から來た松島鑑と會食することになつてゐる。

「或女」もそんな事情で或は出版が少しおくれるかも知れない、もう然し遠い未來ではあるまい。五六日の中には兄の御手許にも屆ける事が出來ると思つてゐる。

京都には四月の下旬から出かける積りだ。神戸女學院で少數の女生に話をする事になつてゐるから一度は神戸に行く筈だ。その節は御厄介になるだらう。

高木舜三が死んだのを知つてゐるかえ。來二十八日が葬式の豫定だ、二十五六日に遺骨が米國から着する。この頃は年順などとは云つてゐられない、全く無常を感じさせられる。

それでは又其中。

## 佐藤繁井氏宛――三月十七日於麴町　〔三〇二〕

この間の月曜日には御葬式があつた爲めに行けませんで殘念しました。子供の爲めにお菓子まで用意して置いて下さつた御好意は難有く存じます。段々あなたの仕事が本道に這入つて行く事を私も嬉しく思ひます。あなたが眞實の幸福に向はれる事を唯々祈ります。

早稻田文學の三月號をお送りします。その中に、「有島武郎論」といふのがあるが、それだけは切り拔いてしまつてありますから雜誌の中にはありません。それは三月號に亙つて出てゐますがつまらないものです。平凡な事が平凡な筆でいつてある丈けです。二月號の新潮に載つた福士幸次郎氏のものゝ方が遙かに光つた觀察と、眞率な表現を持つてゐます。つぎ〳〵に用事が持ち上つて來るので、靑梅は今年も斷念しなければならないと思つてゐます。

御返事迄。

## 河崎夏子氏宛――三月二十日於東京　〔三〇三〕

今朝與謝野女史よりの御消息の序に貴女の御恙重き由噂し來候。幾度か拜接の機あらんとせし因縁をたよりにて一書を呈し上げ候、ぶしつけ御許し下さるべくや。

著者としてのよろこびは眞に自分の作物が相當に價値づけられて、アップリシエートせらるゝを知るに越したる事は無之候。ほのかに伺へる所によれば貴女はかねてより拙著を御愛讀下され候由、一度はお目に懸り候て御話をも承度と樂しみ居候も、因緣熟さず其儘に相成候事心惜しく存居候に、御引籠りの由承及候ては心淋しく感ぜられ申候。何卒十分御養生一日も早く御全快の程偏に祈上候。來月末には京都同志社に講演の爲め上洛、一ヶ月程は滯在の心組に御座候間、若

し尙その地に御逗留ならば御見舞かた〲御面會の折もあるべくや。又五月末より六月はじめにかけては東京女子大學にて講演の事約束致申候間若し御全快にて御歸京も相成候はば其節そこにて御目もじ可致候。

女の方の呼吸器病は惡くなるにつけても好くなるにつけても結果は早しと承及候。貴女の如くよくお分りの方は改めて申上候迄もなく候得共凡てを快く運命の手に委ねられ大きな心になられ候て時機を待たれ候はば御全快程あるまじくと堅く信じ申候。

よき世に候、悲しき事も苦しき事も結局はつく〲よき世に候。活き給へかし。

### 足助素一氏宛——三月三十日於鎌倉圓覺寺松嶺院　〔三〇四〕

宙揚庵は駄目で表記に落着く事になつた、山門を這入るとすぐ左にある構への二階だ。天井は低く疊は古いがたつた一人でゐられる嬉しさはない。默つて獨りで考へよう。この地は櫻の盛りだ。

### 有島生馬氏宛——四月七日於松嶺院　〔三〇五〕

御手紙今朝落掌御依賴の件は早速札幌の方に申してやりましたから不日返事を得る事と思ひます。昨日は思ひもかけず三人の子供達がやつて來て樂しく半日を過しました、例の要山で。

たんとではなけれども聞き知つて訪問人のあるのには閉口してゐます。然し仕事は豫定だけには進行してゐます。今年位ゆるやかな心で春の經過を賞翫した事はありませぬ。桐の葉一枚が開かれて行くのにも無上の心持を感じてゐます。粗末な食物がどれ程頭をよく働かせるかといふ事もわかりました。大島ではよい收穫があるやうにと祈つてゐます。信子さん其他にもよろしく。御返事のみ。草々。

## 足助素一氏宛――四月十四日　〔三〇六〕

昨日早朝洗面の爲めに井戸に行つてつるべをたぐつたら、つるべ槽に蛙が一匹胡坐をかいて上つて來た。平生なら飛び上つてしまふ處だが、場所柄は不思議なものですつかり可愛らしくなつて其奴を驚かさないやうにそつとそれを齒にあけてつるべ槽をそのまゝ井戸がはの上に置いてやつた。今朝も行つて見ると先生依然として元のまゝ喉をひこつかせて胡坐をかいてゐた。「やあお早う」と云つてやりたかつた。水をくむ爲めにやむなくつるべ槽をたぐりおろしにかゝると先生降り際に挨拶のつもりか井戸の中に向けて放尿一番した。僕は怒る心地もなく先生の小便のまじつた水を汲み上げて快く顏を洗つた。五時半の事だ。氣がせい〳〵した。めでたし〳〵。

今日の夕方から黎明會で沖野氏の例の話があると通知が來たから午後から出掛かける。今夜の中に歸るからどこにも寄らない。今までに二五五頁書いた。

## 原久米太郎氏宛――四月十六日大雨の後於鎌倉圓覺祥寺　〔三〇七〕

御手紙御葉書色々頂戴多謝。つい原稿の忙しさにかまけ御無沙汰した。俊子の思ひ出の歌は、歌は拙なれど心は悲しかつた。

　仇なりと名にこそ立ちき櫻花年に稀れなる人も待ちけり
年に稀れな人もあらず嗚呼。

山寺の籠居も今四五日になつた。寂寞境裡に起居すると偖て帝都といふものゝ塵埃が苦になる事夥しい。獨居してゐると話相手がないのでよくひとりごとを云つてゐる自分を見出す。

「さあ牛乳をあたゝめようね」

「面倒でも洗ひ物をしてお置き」

など、それが自分に對して發せられる丈けに情愛のこもつた可愛いゝ聲だ。人間不思議な處でロマンティックになるものかな。

著作は思つたより進んだ、多分四百頁を越す原稿を抱いて都門に入るだらう。二十日間の苦闘永しと云ふべからず、然しこの爆彈可なり炸裂力が強い積りなり。

二十七日夜京都着の見込。

祈御健在。

## 有島生馬氏夫妻宛——四月三十日於京都あかまん屋　〔三〇八〕

早速御手紙難有う。あかまん屋の連中は一同無事にて如例厚意を以て迎へてくれました。講演は二十九日からはじめました。今度は人數を制限したので大分やりよくなりました。晩春の京都は何んとも云へませぬ。燕がやつて來てゐます。天氣の節は日中にでもなれば單衣で出歩きたい位ですが朝夕はさすがに冷え〴〵とします。今日は朝來の雨で見るものがなごやかに思はれます。京までやつて來て一夜飲み明かした吹田、原、足助などの連中が退散したので昨夜は始めて安々とした眠を得て、今朝は長閑な心になつてゐます。留守宅の方何分よろしく御配慮を煩はします。昨夜は早速都踊を見せられました。

今日も是れから講演場に臨みます。粟飯かしぐ間の夢のやうです。御大事に。

## 足助素一氏宛——五月七日於京都　〔三〇九〕

いよ〳〵明日から何處かに引籠つて三四日續けさまに書き上げる、それまで待つてゐてくれ給へ。「野性の呼び聲」たし

かに落手、裝幀も相當にいゝではないか。この頃は天氣續きで難有い。もう蟬がなく。

與謝野晶子氏宛――五月十一日於京都　〔三一〇〕

洛南鳥羽離宮址に殘れる北向不動堂にこもり居て執筆せる所に御手紙相屆きうれしく拜見致候。小さき藤子樣まで御無恙に御過し相成候御事を知るはよろこびに候。この度の滯在中にもこゝかしこ珍らしき所を見まはり候。中にも光悅寺を訪れ醍醐の三寶院に詣でたる記憶などは忘れがたく被存候。殊に三寶院内の五重塔に描かれたる壁畫などはフラ・アンジエリコの遺筆さへ思ひ出でられ申候。國史國文學に精通し給へるには事變りて、その向きに疎き事なれば名所を訪れても其感興は遂に物の眞に徹入しがたきは恨めしきかぎりに候。奈良にては藥師寺と唐招提寺とを訪れ申候。佛足石の後方なる石碑の文字には尤も感じ入候。

こちらに參候てより高木家の不幸に遇ひ候外幸に事なく過居候。川崎氏には未だ御面會不致候得共御噂は去る學生より傳へられ居候。散歩なさる位お快き由重疊の事に存上居候。

月の二十三日頃には亦東京の塵にまみるゝ身と相成可申候、其上の拜眉を樂しみ居候。雨の中を不動堂より歸來りて不取敢一筆。草々敬白。

乍末筆御主人樣にも宜敷御鳳聲願上候。

足助素一氏宛――五月十二日　〔三一一〕

昨夜は徹夜同樣に精一杯書いたがまだ書き終らない。まだ中々かゝりさうだ。で一先づ出來ただけ原稿をお送りする。葉子は中々しぶとい。こつちの思ひ通りには死んでくれない。

### 足助素一氏宛——五月十四日　〔三一二〕

他の約束は大抵履行する僕である事だから原稿の約束だけは察してくれ。自分の仕事だから早くしたいは山々なれども、そこがさううまく行かぬので、全く葉子はしぶとい女だ。

### 足助素一氏宛——五月十九日　〔三一三〕

今第二回の原稿を送る。殘りは最後の一回約二十枚だがこれは今夜送るから明日の夜までには屹度届くつもりだ。こんなに長くならうとは思はなかつた。ほんとに心配をかけてすまない。挿畫は「書後」の前に。金受取つた。

### 足助素一氏宛——五月二十一日　〔三一四〕

奈良に行つてゐたり大阪に行つてゐたりした爲めに御返事がおくれて失敬。「或女」の末尾の所再考を促すと云ふ葉書は一面僕を失望もさせ奮起もさせた。それが爲め出版が延期されるのは兄に對してすまない譯だが、さういふ次第なら暫く印刷を見合はしておいてくれ給へ、二十三日には歸るから、歸つた上で讀みなほして見る。小說は總てどこで打切るべきだといふ點はない。人生が長いやうに連續してゐるもので、作者がいゝ加減の所で打切るのだ。昔ならうまい落ちになつてゐないと、まとまらないとか何んとかいつたのだらうが、僕一個の考へとしては小說が眞實味を持つたものであれば何處で打切つてもそれでいゝ筈だと思つてゐる。だからあの結尾は今までの考へからいふと物足りないかも知れない。然しそれには僕は頓着しない。唯恐ろしいのは眞實味が足りないといふ事だ。或はそれがありはしないかと思つて來たら、印刷にするのが恐ろしくなつた。兄の好意に甘えて見なほす事にする。今日で講演を終つた。先づほつと息氣をついた。明日は買物をして明後日にこゝを立つ。阪田君の病氣は眞にお氣の毒だ。どうかよろしく傳へてくれ給へ。

## 佐藤しげゐ氏宛——六月十三日於麴町　〔三一五〕

漸く講演も濟んで見ると胸の中が空しくなつたやうな氣ばかりします。少しはあなたのためになつた樣な事を云ひましたか知らん。云ひ現はして見ると、自分の空虚さがよく知れます。情けないやうな心持がします。

第二日目の講演の歸りに谷間の百合花はたしかに受取りました。早速瓶に生けて妻の寫眞の前にかざりました。三日程匂つた後に散つて行きました。いつかあなたに書いてあげた歌を又思ひ出しました。栃内の奧さんの來てゐたのも茶話會の席上で知りました。遠くに居たので挨拶は出來ませんでしたが。

あなたの顏色が惡いやうに思つたがこの頃健康は如何ですか。時節柄十分御大事になさいまし。石井御夫婦にも宜敷願ひます。草々。

## 原久米太郎氏宛——六月十五日於麴町　〔三一六〕

其後は御無沙汰してゐたが兄の方よりも御無音なので又何かはじまつたのではないかと心窃に案じてゐる。御一家に御障りはないか、拙宅は幸に一同頑健。この頃は僕も勞作の後の少閑を樂んでゐる。實際少し疲れ過ぎたやうだ。足助の手術は實に理想的に行つてどん〳〵恢復はしてゐるが、何しろ餘程退屈らしく可哀相だ。食慾も少しづゝついて來る。手術後退院迄四五十日はかゝる事と思はれる。然しもう少し手おくれをすると腹膜炎を引起すかも知れなかつたのだ相だから、誠に僥倖と云はなければならぬ。

漸く「或女」の後篇が世に出たから如例一部御送呈する。どうも少し急ぎ過ぎてゐはしまいかと心配になる。もつと客觀的に見た方がいゝのではないかとも思つてゐる。然しある女に起つた悲しい運命の流れは相當に書いた積りだ。御嚴評を煩はし度い。

高等女學校聯合同窓會なるものゝ講演も漸く三回をやつて終結した。聽衆の中にかなり頭の進んだ人のあつたのは愉快だつた。女が眼ざめて行つたら社會のアスペクトは變るかも知れないと本當に思ふ時もあるし、迚も女性は自立が出來るものではないと失望的な氣になる事もある。一つ本當にすぐれた女性にぶつかつて見たいものだ。

祈御健勝。

## 足助素一氏宛――六月十七日於東京　〔三一七〕

暗い雲が蔽ひかぶさつて來るやうな氣がする、何の原因があればか自分ながら判らないが、今日の午後から兎に角所も定めず小旅に出懸ける。多分箱根邊に行く事になるだらう。兄の身體も大事にし給へ。是から肝心なのは食物だと思ふ。いまに中々食ひたくなるから、其時克己しないと苦しい目を見るよ。それから煙草も度を過ごすとよくあるまいと思ふ。心の迷路を辿り辿つて漸く築きあげたやうな人生觀も、兎もすると自分の性格が崩して仕舞はうとする。是れから又新しい曙光を見るまでには一仕事だ。こんな事をして一生を過して仕舞ふのかも知れない。それでも頭を持つて生れた以上は考へないよりは得だらう。

御大事に。

## 淺井三井氏宛――六月十九日於箱根小涌谷　〔三一八〕

頭を惡くしてとう〳〵こゝに煩を避ける事にしました。來て見ても矢張非常によくはなりませんが、少しはいゝ樣だから二十日か二十一日には歸ります。

こゝは海拔一千尺からの處で空氣は大變よろしい。一人で幽靈のやうに處定めず山の中をさまよつてゐます。東京に歸つたら鼻を見て貰ひます。或はその爲めかも知れない。

あなたも餘りつめて健康を害しないやうになさいよ。

八木澤善次氏宛――六月二十九日於麹町　〔三一九〕

大變にいゝ御手紙を難有う。それが如何して他の書類にまぎれ入つたものか唯今迄私の目に觸れずにゐたのです。「或女」後篇に對する率直な御批評を難有う。色々思ひあたるふしが多う御座います。殊に作の後半がはしよつてあるとの御考へは私の胸をつきました。あれ丈の事件の中には如何に多く書かれねばならぬ事があるかとの歎は、書いてゐる時感じた事でした。而して自分の實感がそれまで熟してゐないのを齒痒く思つた次第でした。

執筆講演等の結果がとう〳〵輕い神經衰弱といふ形を取つて襲つて來ました。此頃は何んにもせずにぶら〳〵してゐます。

兄の道は兄の道でよろしいと思ひます。秋風のやうな蕭々たる一路も亦正しき生への道だと思ひます。私は「宣言」のAの父の生活が可なり好きなのです。兄には多くの廣い享樂は來まい。然し唯だ一つの深いそれが。

餘は御面會を期して草々。

木田金次郎氏宛――七月三日於東京　〔三二〇〕

其後は御無沙汰してゐますが御變りはありませんか。僕は少し頭を惡くして弱つてゐますが、今は萬事を抛擲して遊んでゐますから其中にはよくなる事と思ひます。七月末には子供達を連れて北海道に行かうと思つてゐますから、兄にもお目に懸る機會が與へられると樂んでゐます。其後御製作は御進捗ですか。御成功を祈つてゐます。

兄の展覽會の節手傳を頼んだ淺井孃から兄に手紙を屆けてくれるやうにと申込んで來ました、で同封してお送りします。お遇ひが出來たら色々御話する事もありますが、凡ての事は其時に讓つて今日はこれで失禮します。時節柄御大事に。

淺井氏の手紙には私の事が餘り大業に書かれてゐて少し氣がひけますが、其儘お送りします。

## 吹田順助氏宛――七月五日於東京　〔三二一〕

「或女」後篇について委しい御批評を難有う御座いました。毎時でも著作が現はれる時一番適確な感想を發表して下さるのを感謝してゐます。テーマがあれ丈けのものになつてももう私には大き過ぎるといふ憾みを感じないではゐられませんでした。さう思ふと自分の心の貧弱さに少し氣がひけます。

「戰爭と平和」などを泉から滾々と水が湧くやうな豐かさと心易さを以て書いたトルストイなどが心から妬まれます。

人生感に關する兄の前便の御意見は至極御尤もだと思ひました。キンデルバンドやリッケルトはまだ全然承知してゐませんが、私も何んとかしてその思想の內容を窺ひたいものだと思ひます。この夏東京に來られたら是非其片鱗なりとも御紹介下さい。それを樂しみにしてゐます。成瀨氏の上京暫く滯在との事を聞かされました。又一夜ゆつくり語りたいものです。

足助の病氣は追々よいやうですが、餘病とも云ふべき痔が痛むさうで大分閉口してゐるやうです。

昨夜は白樺劇團の試演がありました。中々よく行はれました。ストリンドベルグのパリヤと、武者の「二つの心」でして、前者は殊に氣持よく見ました。ス氏の心の複雜さに打たれました。二つ位のモチフが併立してゐて互に剋してゐないのが不思議でした。

## 原久米太郎氏宛――七月五日於麴町　〔三二二〕

今朝は久振りで靑空を見ます。是れから本當の夏らしい氣候に入るのでせうか。私は少し頭を惡くしてゐます。

永いい丶御手紙を難有う。梅雨も今朝から晴れるのだらうか、起き出て見ると空は眞靑に輝いてゐる。本當の夏らしい

時節になるやうだ。

兄の職業觀はまだ僕には十分の觀念が出來ない。僕達のものが創造で兄のものが創造でないといふあの理由は薄弱だ。唯兄のする仕事が徒らに資本主の私腹を肥やす結果になるといふお歎きには僕も深く同感せずにはゐられない。是れが科學者であつたクロポトキンをして社會主義者たらしめた所以だと思ふ。今の社會制度の下に住む人間は一擧一動直接間接に第二階級の利益を增す結果に仕組まれてゐる。殊に兄の職業などは其點に於而甚しい。僕のは其點に於て稍〻自由で便利だ。少くとも資產階級に訴へずしてインテリゲンチアに訴へる事が出來るからだ。一つ兄も金が生活を保障される丈け溜つたら兄の智識と經驗とを第四階級の爲めに用ゐられる御工夫があつたらいゝと思ふ。其點に關しては再會を期す。

卓郎先生は暢氣だなあ。

早く新築に移轉して氣分を一掃し給へ。僕の頭の工合は少々づゝはいゝ方だ。草々。

支那委員のつむじまげは近頃痛快事の一つだと思ふ。

## 寺田花枝、粂松よし江兩氏宛——七月八日　〔三三三〕

お歌を難有う、神經衰弱は依然としてなほりませぬ。この間少しいゝに任せて客に澤山接したらすぐ仇されました。今日から客も絕つて閉居する事にしてゐます。暗い氣持に襲はれて困ります。思想の上にも體質の上にも多少の變化が來ようとしてゐるのではないかと思ひます。然しやがてそれにも打克つでせう、打克たねばなりませぬ。

年頃はなつかしく今年ばかりはつらかつた梅雨も過ぎやうとしてゐます。是れからは囘復するばかりだと思ひますから幸に御休神下さい。あなた方の方ももう休暇になる時かと思ひます。よき休暇を得られるやう祈上ます。御禮旁〻草々。

## 足助素一氏宛——七月十二日　〔三三四〕

其後丹毒も起らない事と思ふ。痔の方は如何。九日の朝突然思ひ立つて生馬と水郷の小旅に出た。中々趣が深くてあきない。殊に釣好きなどには持つて來いといふ所だと思うた。凡ての上にあふれる閑寂さがたまらなくいゝ、秋にでも來て見たら涙千行とでもいふやうな思ひがするだらう。第一日の潮來の夜は下の座敷に騒ぐ客が來て藝者と女中のきい〳〵聲でとう〳〵一夜寢つかれないでしまつた。翌日は鹿島香取に詣でて佐原で泊つたが便所の緣戶につけた車が鐵の棒の上を走るので是れに又頭をなやまされて思ふ程は寢られなかつた。其翌日伊能忠敬先生の故屋を訪づれて其遺品を見物させて貰つた。五十から修行をはじめて、五十五で北海道の測量に從事し、七十三迄十八年間に日本全國の海岸線を測定し終つたのださうだ。隨分晚學で大功を立てたものだ。佐原の町は大阪の小人島見たいな所だけれど、この人一人ありしが故に何んとなく上品な所に見える。

家に來たら矢張り一番よく眠つた。然しこの小旅の爲めに氣分の方は多少轉換されたやうだ。疲れ易い事は依然たり。昨夜思ひ切つて雜誌の原稿は一切斷つてしまつた。御大事に。

宮崎安右衞門氏宛——七月十八日於東京　〔三二五〕

桃水和尙の傳感讀しました。難有う御座いました。茶園には露が繁くおりますとか、今日は風の模樣が秋を思はせます。

夏まだきふと行く風に秋思ふ我れの心はあはれなるかな

今野賢三氏宛——七月二十一日於東京　〔三二六〕

御手紙と御創作とを拜見しました。御手紙によつてあなたの生活が大變に意義のあるものである事を感じました。然し創作の方は人に示すべき程度には決して行つてゐませぬ。作物を發表する以上は自分の獨自性と文學者としての技倆とを、十分讀者にうなづかせ得るとの自覺がなければならぬと思ひます。自分によつて世の中の人が少しなりとも美しくなり、

考へ深くなるといふ確信を持ち得ねばなりませぬ。あなたはあなたの作物を現在の作家の作物と比較して、公平に考へられた上、發表しても差支ないと思つて發表されたのですか。若しさうなら、その御考は少し自分を高く買ひ過ぎ間違つてゐるやうですし、さうでないとすれば輕率の嫌は免れぬと思ひます。あなたの日常の仕事こそよい仕事と覺悟すべきではないでせうか。あなたはそれに十分の執着を持ち、工夫を凝らす事によつて十分效果を擧げ得らるゝと信じますが、如何云ふものでせう。御熟考を其邊にも煩はし度いと思ひます。思ひのまゝを勝手次第に申上げました。草々。

## 寺田花枝、兼松芳江兩氏宛――七月二十六日於札幌　〔三二七〕

住み慣れし家は古くて庭の樹の我がたけよりも生ひのびしかな
ありし日を夢かとぞ思ふ今の身を夢かとぞ思ふさだめの不思議

## 家族宛――八月四日於北海道狩太村　〔三二八〕

瀨脇氏の御不幸は誠に御氣の毒の至と存候。未だ御悔狀も差出不居候得共何れ歸着の上御悔可申上候。東京も大新聞同盟休業の大騷ぎにて中央の消息一向に知る事を不得、奇怪の現象と可申候。
來場以來晝夜降雨にて閉口此事に御座候得共、子供等歸心如矢に御座候得ば能ふ限り出發の事に致居候。今朝は行光私と同伴農場內を遍く觀覽致候、兄達は却て意氣地なき事に候。水田が少々出來居り候事珍敷見物致候。先は御一報のみ。御健康を祈上候草々頓首。

## 井上お初氏宛――八月八日於輕井澤三笠　〔三二九〕

子供等三人を伴つて北海道の方に企てた二週間餘の旅から昨日こゝに歸つて來て御手紙を拜見しました。御親切にも私

の言葉を忘れず大好物の京の唐辛をお送り下されたことをこの上なく嬉しく思ひます。母は私が歸るまで其儘にある樣にと鹽漬けにしてこゝまで持つて來て置いてくれました。食事毎に樂しんで賞味してゐます。この頃の京都の暑さの堪へ難からうと思はれるのに引かへて當地の涼味は秋の樣です。私はこゝで二日程の講演をする事になつてゐます。御宅の方には御主人始め御健祥ですか。何卒皆樣に宜敷御傳へ下さい。大島君は一緒に北海道に行きましたがまだあちらに殘つてゐます。早川君も今北海道にゐて大沼といふ所で邂逅しました。兩人とも元氣です。蘆田氏がお見えになつたら宜敷御傳言下さい。いつぞやはお尋ね下さつてゆつくりお話が出來て愉快でした。この秋にはまた多分京都でお目にかゝるでせう。まづは乍延引御禮迄。草々頓首。

## 吹田順助氏宛――八月十三日於輕井澤　〔三三〇〕

今朝落掌の御葉書であなたが既に鹿兒島に去られた事を知りました。如之それが奥さんの御早產の爲めだといふ事をも知つて驚きました。然し御母子ともさしたる御障もなかつたのは何より結構な事でした。今度あなたが齎して下さつた哲學上の思索は私には圖らずも深い暗示となりました。私の體驗がそこまで行つてゐないのを非常に不安に感ずるやうになりました。何んとかしてあなたが主張なさる境地に進達してそこに新しい景色を眺めたいとの欲求が強くなりました。然しそこに到着するのは何日の事かと心細い事です。同時にそれは私の心に根ざす深い欲求として絶えず私に働きかけてくれる事と喜んでゐます。

あなたがこゝに御來遊なさる事の出來ないのは本當に遺憾です。高山のこの頃の夜は秋のやうな月の光で冴えに冴えてゐます。今夜あたり月がよかつたら夜中何處といふ事なく歩いて見ようかと思つてゐます。講演は十五十六の兩日行はれる積りです。それが濟んだら一先歸京します。

子供と共にした十六日の南船北馬の旅行で幸に私の頭も略〻舊に復したやうです。この調子なら秋が來たらまた一人前

の働きは出來るかと樂んでゐます。

講演の準備に此頃又ホヰットマンを讀んでゐますが感心させられる事が多う御座います。兎に角あんな人が人類の中に顏を出したといふ事だけで人生の可能性が一つ確められたやうな氣がします、愉快です。

足助の胃腸はどうも其後もあまりよくないやうです。おまけにローマンスの主人公は東京に着いたは着いたが住所さへ知らせずに雲隱れしてゐるらしいのです。これがうまく發展してくれればいゝけれども、若し下手に行つたら足助は又一しきり苦痛のどん底に這入りこまねばならぬと大分不安が感ぜられます。

暑さの折柄御大事になさいまし、奧さんにもよろしく。左樣なら。

## 木田金次郎氏宛――八月二十二日於東京　〔三三一〕

御手紙を先日はありがたう。先達の御面會は私に取つても嬉しいものでした。あなたが周圍の如何に係らず元のまゝな素朴な忠實な自然の禮拜者であるのを見出すのはうれしい事でした。御作品についてはあれだけでは特に云ふべきものはありません。唯非常に不完全な筆路の中にあなたの敬虔な心持が覗いてゐるのを尊く思ひました。其中にあなたの自信のある作物の東京にとゞくやうにと只管祈つてゐます。

輕井澤からは十七日に歸つて來ました。東京は暑いけれども、暑いなりに美しい感じを與へます。夏はいゝと思ひます。子供達は輕井澤で留守してゐます。

御健康を祈ります。

## 原久米太郎氏宛――八月二十二日於麴町　〔三三二〕

その後の久濶を御寬恕願ふ。この頃の大暑で一日工場内で大童に働く兄の近況を御察し申上げる。然し不相變御元氣の

事だらう。僕も子供を連れての旅行から七日の日に輕井澤に歸つて來てから頭の悪いのは全然恢復したと思つてゐる。

輕井澤からは十七日に上京、昨日米國に出發した佐藤隆三夫婦と行郎とを横濱埠頭に送つた。母は大分淋しいやうに見える。是れで僕の家の兄弟の中、藝術にたづさはるものと然らざるものとは洋の東西に別れる事になつた。是れが成程お互に相當した運命らしい。

仕事は山程眼の前に見えて居る、然し中々手がつかない。其中に順々片付けて行きたいと思つてゐる。生馬も二科會で大分忙しくなり出したらしい。兄の葉書の注文はたしかに受取つたと見える。

足助は湯河原でもう大分よく、九月には健全になつて歸京する事と思つてゐる。其後手紙でも來たか知らん。

新築家屋の木の香はいゝだらう。

祈御健在。

## 足助素一氏宛――八月三十一日於東京　〔三三四〕

聞けば聞く程會ふのが恐ろしい氣がする。僕は此頃女には可なりつきまつはれていゝ加減いやになつてゐるので、これ以上あまり女の人とは交渉をつなぎ度くないが、會へといふのなら會つて見る。然しその事から餘り多くを期待しないでくれ給へ。僕は御承知の通り女の鑑定にはのろい方なのだから。

九月十日前後に歸京との事だが、それがいゝか悪いかは大分疑問だ。何しろこの頃の東京の暑さと來たらお話にならない。この暑さでは兄の體には必ず應へるに違ひない。九月の中旬末ともなつたら幾分涼しくなるのかも知れないが、もう少し我慢してそこにゐた方がよくはないだらうか。

小說の選讀が愈ゝ九月の十五日までと制限されたので、この頃は馬力をかけて讀みにかゝつてゐるが中々はかどらない。加之心を驚かすやうな作品がまだ現はれ出てくれない。中には小學校以下に小便臭いのがある。いやになつてしまふ。

「出家と其の弟子」は途中退場。

## 吹田順助氏宛——九月一日於東京　〔三三四〕

樺太などには行かなかつたのです。行つて見る必要があると云つた事が如何かして傳つた事と思ひます。札幌は矢張一種のなつかしさを持つた町でした。そこには四五日滯在しました。コーラー夫妻からも心からの歡迎を受けました、北海道に渡つて見るとそこの人間が何處か解放されてゐるのが夥しく注意をひきます。

札幌では然しいやな事共をそれは澤山耳にさせられました。殊に主任のWの不行跡には開いた口が塞がらぬといふ始末でした。變な奴だとは思つてゐましたがそれ程とは知りませんでした。

輕井澤では思ひ存分遊びました。二回の講演の準備をした外には何んにもせずに過しました。お蔭で仕事をしたいと思ふ氣分は旺盛になつて來てゐます。靑年時代の描寫は然し今から三回目位の著作集にのせればのせるものでせう。この間の晩は「出家と其の弟子」を有樂座で見物しました。實演して見ると役者の努力にも係らず少し概念的過ぎる處がないでもありませぬ。然し作者の力は矢張見物の涙をさそひます。そこで成瀨君に遇ひました。

今日は二科と院展の招待日、心をふるはせるやうな作には出遇ひませんでした。安井のものが中では光つてゐましたか知らん。

露國のオペラには多大の期待をかけてゐますが……もうこんな羨しがらせはよしませう。オペラ見物に文部省から東京まで留學を命じてもいゝものかと思ひますが。

東京も中々暑いから貴地は思ひやられます。奧さんや赤さんはおひどいでせう、御大事に。御母堂にも旅疲れはおありになりませんでしたか。

足助は女難にかゝつてもがき苦しんでゐます。細君の候補者に遇つて見ると氣に順はない所に、その女からはすつかり

惚れ込まれてしまつてゐるのですから厄介です。何とか甘く行くやうにと祈つて居ます。
御大事に。草々。

### 木田金次郎氏宛——九月五日於東京　〔三三五〕

農場に御持參下された唐絹は忘れて同所に取殘して來ましたから、こちらで求めて字をなすくつてお目に懸けます。絹の幅長がちがふかも知れませぬがお許し下さい。
他に一枚餘分をあなたの御笑艸に。
目下故關根正二君の遺作展覽會が開かれてゐます。近頃心を打たれたものゝ第一です。是れはあなたが見られても屹度損ではないといふ氣がします。出來るなら出京なさいませんか。開期は一日より二十五日までと思つてゐます。序に二科も院展も見られるでせう。
先は右用事のみ。草々。

### 黑澤良平氏宛——九月五日　〔三三六〕

爾後久濶、私の「或女」をお讀み下さつたさうで難有う御座います。實は出版になつた時是非お送り申上げたいと思ひましたが、御住所が不明になつた爲めに其儘にしてしまひました。寫眞は是非拜見させて頂きたいものです。
私はあの書物の中で、自覺に目ざめかけて而かも自分にも方向が解らず、社會はその人を如何取あつかふべきかを知らない時代に生れ出た一人の勝氣な鋭敏な女性を描いて見たまでで、信子さんの肖像を畫かうとしたのではありませんでした。木村といふのは森廣で、古藤といふのは私です。而かも是等のモデルも非常に remote なものである事を御

承知下さい。
後篇を一册御送り申上げます。御讀了後更に御敎正を下さらば幸です。
御註文のものは中々書けさうにはありません。それは私の實生活に改革を加へて後でなければ氣がひけて書けませぬ。
何とかして早く其境地に這入つて、心ゆくばかり胸中を吐き出したいのだと思つてゐます。
先は御禮旁々。草々。

## 黑澤良平氏宛――九月十四日於東京　〔三三七〕

この間は御消息と信子氏の御寫眞を難有う御座いました。私の遇つた頃のその人の面影とは別人の感があります。そのきかぬ氣だけは眉宇に溢れてゐるのを見ます。失くなさない中に御返却申上ます。著作集を色々讀んで下さる事をうれしく思つてゐます。
憲治の未亡人の事は宮部さんには云はずにおいて下さい。あんな若い人の先途には未だ花やかな運命が待つてゐねばなりませぬ。子供の三人もある髮のはげかゝつた人間はその人には用のないものです。この二十日と二十七日には東京女子大學で講演する事になつてゐますが、未亡人は生徒として私の亂暴な話振りを謹聽せねばならぬのでせう。雨くづれといつた樣な澁々の晴天が頭をひどく壓迫します。祈御健在。

## 原久米太郎氏宛――九月十六日於麴町　〔三三八〕

こちらこそ大變な御無沙汰になつて相濟まない。不相變元氣旺盛で働いて居られるのはうれしく思ふが、奧さんが弱つて居られるのを聞くのは心配だ。無理もない事ではあるが今奧さんがよわり込んでしまつては兄の家は眞暗らだ。大に奮發して氣を引立て病魔などは追拂はれる樣御傳言を賴む。僕は夏休中二度の講演の外には何んにもしなかつたので此頃は

元氣舊に復して仕事がしたくてたまらなくなつた。此頃は專心大阪朝日の懸賞小說を讀んでゐる。應募した人の氣持ちを考へてやれば決して輕々にして置く譯には行かないけれども、中にはよくもこんなものをのめ〳〵と人前に出したものだと思ふのがある。そんなのにぶつかると全く悲觀せざるを得ぬ。

ラッセルの事に就ては中澤氏の今月の論文を見て始めて其輪廓を知つた次第、其迂濶驚くべしだ。

中澤氏に云はせると其內容は專門家の哲學者にも解らない處があるとの事だから、僕などはお齒の立たないものとして棚に上げておくべきものと思つてゐたのだが、兄が先鞭をつけたのには聊か面喰つた。尤も兄には數學の智識があるから却て解り易いのかも知れない。ゲルフは黨名で、法王を助けて伊太利王家に反對した連中だ。從つて外國の勢力を借りて王家を壓過し法王の威を揚げようとした黨派で、ギベリンは其反對だ。此二派は殆んど伊太利の中世の各都市に存在して鎬をけづつたものと云はれてゐる。それを指すのだらう。判りさうなものなら僕も讀んで見たいが、中澤氏の說によるとラ氏の最近の言說は殆んどベルグソン氏の說の祖述に近いもののやうに思はれるが如何だ。

足助は手紙で婚約破棄の事を申送つたと云つて來たが、其後面會しないから結果の程は知らない。僕も一寸その女の人といふのに遇つて見たが、あれでは足助のマッチにはならないと僕も思つた。さらりとさばけた處が藥にしたくもない人らしい。一寸逢阪といふ感じを與へる。あれは此際破る方が雙方の爲め利口だらう。

何しろ毎日の雨には閉口してゐる。うんと荒れてからつとするのならいゝが、何時までも頭を壓しつけて氣が狂ひさうだ。こんな調子で眞綿で首でもしめるやうにいぢめられては稻だつて氣が狂ふだらう。

二科も院展も見るが程のものはない。故關根正二の遺作展覽會は近頃の見ものだつた。

兄の所の代表者は鈴木と共に連袂退場したぢやないか。駄目だ。要するにまだ飯事だ。

## 淺井三井氏宛——九月二十三日 〔三三九〕

よい秋になりました。毎日仕事においそしみの事と思つておよろこび申してゐます。この間柳君にある人がクララの出家の畫を描いてゐるのであの畫像を參考にしたいといふのだと云つた處が、クララの傳を持つてゐるから貸さう、その中にはクララの肖像もクララが出家の夜ぬけ出した家の戸の寫眞もあるとの事で、早速借り受けることにしてお送りします。多分色々參考になる事と思ひます。私の小説にはバルコンから逃れ出る事になつてゐますが、傳説が本當だとすると下からのがれ出たものと思はれます。他の寫眞にも説明をつけて置きました。

去る土曜の東京女子大學の講演をかゝげたいとて女學雜誌から筆記に來た人が雜誌を一冊送つてくれました。その中に圖らずもあなたの口繪を發見しました。あれは美しい繪だと思ひました。御卒業を祈ります。

檜山京子氏宛――九月二十九日於東京　〔三四〇〕

何を私が怒りませう。あなたが私の作物の動機を御理解下されそれを受入れて下さればそれでもう私はよろこんでゐます。尙云ひ殘した所を附け加へますれば葉子が祖先から本能的に傳へられた淫亂の血（男子を征服せんとする女の强大なる武器）を働かせる所には如何にも非人間的な惡魔性の心があらはれてゐますが、其他の方面に於て彼女が矢張人間であるといふ點です。人間の弱味と强味とを持つた人間であるといふ點です。あの書物の讀者は往々にしてその點を見遁してはゐないかと思ひます。自分の作物を自分で彼れ是れ申す程僭越な事はありませぬが、あなたの打開けた御手紙に對して私も打開けた勝手を云はしていたゞきます。

よき御生活を祈上ます。

足助素一氏宛――十月三日於東京　〔三四一〕

近來兄が射的に見えないので、如何したかと心配してゐるが、創作に沒頭してゐるので御見舞にもよう出ない。たゞ疲

勞がひどい爲と思ふが何處か特別に惡いのではないか。創作の方は割合に油が乘つて來て今「洪水」を訂正しながら書き進んでゐる。京都に發つ前には全部仕上げたいものと思つてゐる。御大事に。

### 淺井三井氏宛――十月五日於東京　〔三四二〕

畫を既に帝展にお送りになつたさうですね。或は新聞にその事が出やしないかと注意してゐましたがそれは出ませんでしたが、あなたの御手紙で非常にうれしく思ひました。殆んど一年に餘る御苦心の結晶が一つの形を取つてこの世に生れ出た事はあなたばかりの喜びとは云へません。帝展が採用するとかしないとか云ふことは全く問題外です。人間のさうした激動が集つて人間の生活といふものを本當の意味で豐富にして行くものなのでせう。

私も目下懸命になつて第十輯の內容を作り上げる爲めに勵んでゐます。この頃になつて漸く私の激烈な反對家が顯はれ出したやうです。文科大學の講師齋藤勇氏はその講演で私の基督教觀に對し、增田篤夫といふ人は「解放」誌上で私の藝術に對し非難の聲を擧げ始めました。かういふ聲が高まる事によつて假初な私の所謂愛讀者は私を見捨ててくれるでせう。さうなる事は私にとつてどれ程よい事であるか知れませぬ。

齋藤勇氏は昨日私の所を訪ねてくれられて、ゆつくり話しました。私の本當の心持を可なり理解してくれられたやうです。

さあそんな事はどうでもいゝ。お互に自分の仕事に精勵しませう。

### 原久米太郎氏宛――十月八日於麴町　〔三四三〕

勞働組合に關する參考書は持つてゐない。丁度昨夜足助が來たから、相談したら、一ヶ月程して先生の店から出るウエッブの「英國勞働史」は屹度最上の材料を供するから、資本家と云はず洋服細民といはず肉體勞働者といはず必一本を座右

に備へる樣傳言してくれとの事だつた。足助といへば近來又頭の具合を惡くして困つてゐる。肉體の疲勞から來た神經衰弱らしい。天氣になつたら少し旅行でもしたらといつておいた。

目下創作に沒頭中思ふやうに頭が働かないので癇積を起してゐる。一氣にやる癖は依然たりで困つたものだ。二十三日頃當地を出發して母をお伊勢さんに伴ひ、上洛しようと思つてゐる。

桝本といふ人は何かして來はしまいか知らん。兎に角本多、高野の輩から見ると心持がいゝね。

秋が十分に東京には來た。昨日終日大雨、今朝大晴、心のしんまで澄み透るやうだ。

ラッセル研究は進んだらう。今度遇つたらしたゝか聞かせて貰はう。

皆さんによろしく。

## 齋藤勇氏宛――十月十日　〔三四四〕

この間はわざ〳〵御來訪下さいまして難有う御座いました。一度だけのお話ではあなたの御考も十分には承知が出來ず私の申した事も彼れ是れ矛盾も多かつた事と存じますがそれにも不係あなたが虛心に私の申す事をお聞き下さつたのはこの上なく愉快に思ひました。深く御禮申上げます。

石山太柏氏は日本畫を描く人には珍らしい良心的な熱實な畫家です。單に熱實なばかりでなく藝術家として物を感觸する素質も潤澤に持つてゐると思ひます。御暇の節に見てあげて下さい。

## 木田金次郎氏宛――十月十八日　〔三四五〕

久しぶりで御消息をうれしく讀みました。あなたの御精進の樣子が思ひ描かれてうれしく思ひました。今は私も一日机の前に坐りつゞけて第十輯をまとめてゐます。而して二十三日には京都の方に發つて行きます。故關根氏の畫は五六枚札

幌の黒百合會の參考品として送つておきましたから暇があつたら見て下さい。今日本畫家の石山太柏氏の自作展覽會が開かれてゐます。深い感銘を受けるものです。

加藤氏の御手紙を御返却します。知己を得るのはうれしいものです。京都の講演は申込めば聽講が出來ますが、講演と講演との間に數日の休みが這入りますから遠くからお出での方には不便と思ひます。

御大事に。

## 石坂養平氏宛――十月十九日於京都　〔三四六〕

「帝文」の私に對する御批評を唯今拜見しました。御好意を感謝します。

あなたが或は私の作品、思想を誤解なさつてゐるのではないかと云ふ點を左に申上げて見ます。

「或女」について。

あなたは女性が男性の奴隷であるといふ事實をお認めになりませんか。勞働的奴隷が生ずる前から女性は男性の奴隷にせられ、勞働的奴隷が解放され出した現在に於ても尙女性は男性に對して奴隷の位置にあり、男性も女性もこの大怪事をさして怪んでゐないと云ふ事實をお認めになりませんか。若しそれを認めその女性の悲運とその事實から惹起される社會生活の破壞といふ事に潛入して考へてゐて下さる人なら、あの作品をあなたが御覽になつたとは異つたアスペクトを以て眺めて下さる事が出來るかと思ふのです。何物も男性から奪はれた女性は男性に對してその存在を認めらるゝ爲めに女性の唯一の寶なる貞操を賣らねばなりませんでした。生殖に必要である以上の淫慾の誘引を以て男性を自分に繫がねばなりませんでした。然しこの不自然な妥協は如何して女性の本能の中に男性に對する憎惡を釀さないでゐられませう。男女の爭鬪はこゝから生れ出ます。同時に女性はまだ女性本來の本能を捨てる事が出來ません。卽ち男子に對する純眞の愛着です。この二つの矛盾した本能が上になり下になり相剋してゐるのが今の女性の悲しい運命です。私はそれを見ると心が痛

みます。「或女」はかくて生れたのです。この立場からあの作品を讀んで下さる方があつたらと私は思ふのですけれども、男女の關係を根柢的に考へて見ようとする人のない爲めか、今まで私が受けた批評の多くは私の急所をゑぐらず、又假令賞讃であつても見當違ひな滿足を私に强ひようとします。是れは然し結局私の表現が十分でないから起る事でせう。と云つて私は敎訓的にあれを書いて私の考へが誰にでも分るやうに依怙ひいきに書く事は私の藝術家としての良心が許しません。私は最も公平な立場からあるがまゝの心理を描いたつもりです。いつかはあの作が女性に對する、從つて人間生活の悲運に對する眞相を讀者に垣間見せ、而してその點に對する考へ直しをして貰へる時が來るやうに祈るものです。私は藝術は已むにやまれぬ生の表現だと信ずるものです。私は自分の生の苦痛をあの作で叫んだのです。かう申せば「石にひしがれた雜草」のテーマも自ら御了解下さることゝ思ひます。

「惜しみなく愛は奪ふ」について。

奪ふために與へるのではありません。愛する事がそのまゝ奪ふ事であるが故に、與へる事も從つて奪ふ事になると云ふのです。愛すれば愛しただけの部分は外界から切り取られて自己の中に攝取されてしまひます。それに與へるのだから形だけは與へてゐるやうだけれども、それは畢竟愛するものと、そのものに與へたものと總て一緒に自己の中に奪つてゐるのです。この明かな事實を私は語らうとするに過ぎません。若し愛せずして與へる場合が起れば、その時こそは眞に與へるので、自己には何物も返つて來ません。然し愛せずして與ふるのは、その與へた人にとつて其生活の分散破壞であり、社會にとつては僞善の許認です。これはよくないことです。さうではありませんか。

その外の微細な點についてはもう申上げません。御面會の機會でもあつた時の事に讓ります。

私の申した事に間違ひがあつたら何卒御敎示下さい。失禮な言があつたら御許し下さい。

有島生馬氏夫妻宛――十月二十五日於京都あかまん屋　〔三四七〕

昨日朝名古屋で山本の連中と落合ひ伊勢山田に行きました。折り惡しく小雨を催して困つたけれども自動車で內外宮を參拜、山本母堂は案內者におんぶして行かれるさわぎ、珍景を呈しました。汽車中で對山樓廢業の事を聞きあわてゝ奈良ホテルに電報をかけた處が、津でホテルは滿員だとの電話に接し已むを不得其夜十時頃魚佐に參つた處が、部屋が汚いとの事で大分お冠が斜めになつてしまひましたが仕方がありません。今朝は幸に天氣もよかつたので老人連は鶯瀧の月日亭に送りこみ、若者だけで新藥師寺から博物館東大寺春日神社を參拜し大に若者共を奈良の崇拜者とさせてしまひました。月日亭では老人達も非常に滿足。唯今あかまんやお初さんの迎を受けていつもの下の座敷に投宿した所です。座敷には君の短ざくが掛けてありました。

子供達は其後さして淋しさうでもあるまいと思ひますがどんなあんばいですか。よく叔父さんや叔母さんの云ふ事を聞くやうにと御傳へ下さい。

留守中の事何分よろしく願ひ上げます。明日は多分桃山から宇治でせう。

## 足助素一氏宛——十月三十一日　〔三四八〕

今夜十一時漸く全部を仕上げた。今度のものには可なりな自信が持てると思ふ。讀んで見てくれ給へ。

著作集の題名は「三部曲」と決めた。これに附屬すべき詩や書後はいづれ其中にお送りする。

今夜久保に會つたら兄の好意を大變よろこんでゐた。

末光への手紙には溜飲を下げた。全く兄の彈劾文と來ては面も向けられないよ。何れ僕が兄より永生きをしてゐたら參考に供する。

僕の妹が占はしたら尙運館主占つて曰く、「この人子供三人あり、一人は女かも知れず。初婚は不幸に終る。職業は何か變つたものなり（著作なりとは知らざれば）著作も著作も大分えらい著作なり（是れは少々恐縮）（結婚の事を聞きたるに）

「この人表面は溫柔の如くなるも、一旦思ひ立つた事は決してあとに引かざる性分なれば子供の爲めを思ひて容易に再婚せざる可し」だとさ、これなどは中つてゐる方ではないか。但し兄の來年死ぬは滑の稽なるものだ。尤も兄が自分を占はせながら自身でないと云つたのはいけないだらう。

仕事が濟んだ喜び！

## 足助素一氏宛——十一月四日　〔三四九〕

今度の御手紙の兄の悲調は又度胸をつかれた。久し振りで兄の心の底の沈澱物が表面に浮き上つて來るのを垣間見せられたやうな氣がして苦しかつた。

「大洪水の前」の第三幕にある小歌の作曲を近衞に依賴して書後の中に載せたいと思つてゐる。昨日から講演をはじめたが聽衆は存外に多いけれども其中に減じて行く事と思ふ。

昨夜からの雨が今朝も降つてゐる。起きぬけに弓に行つてゐる。この頃は五分二三厘のものが可なり樂にひけるやうになつた。

祈御健在。

## 吹田順助氏宛——十一月五日於京都　〔三五〇〕

今日大阪に行く途中兄の御作品を携帶して行つて拜見しました。今度のものは乍失禮近來の御作と感讀しました。あすこには何等の誇張もなく自分をいつはる事の如何しても出來ない一箇の好人物と實生活との緊密なる交涉が素直にあらはされてゐたと思ひます。若し御差支へがなければ何かの雜誌に掲載したいものですが其れを指定して下さい。私の力の及ぶだけの事はして見たいと思ひますから。

もう二度講演をしました。餘り自信のないものであるのにも不係、聽衆は熱心に耳を傾けてくれます。彼等の要求が段々切實になつて來てゐるのを思はせられます。然し本當にいゝものを提供し得る實力のあるものは居ないのです。私は自分を省みて唯々恥しく思つてゐます。

「三部曲」を漸く書き上げて足助の手許までまはして置きました。十二月には上梓される事と思ひますが、如何しても自分の思ふやうに獨立した戯曲の書けないのが殘念です。然しその中には何んとかして自分の世界を切り開いて見たいと思つてゐます。

此地は紅葉には未だ少し早いやうです。然し雨の姿にも秋の十分に來た事は察せられます。今日は母と小雨を冒して大阪まで行つて來ました。

餘は何れ後便を期して。成瀬君（盲腸を切つて入院してゐます。それは御存じでせう）はまだ見舞はずにゐます。

## 石山太柏氏宛——十一月十三日於京都　〔三五一〕

秋もふかくなりました。お住ひの所などの此頃の樣御想像申上げてゐます。當地も此頃は秋の最中今朝などは夜來の雨がうつくしく晴れ互つて嵯峨、奈良あたりの秋色がしたはれます。至而元氣で日々營々としてゐます。秋なんぞに仕事を持つてこんないゝ所には來るものではありませぬ。机に向ひながらも氣持ばかりやきもきします。不相變畫筆に沒頭してお出での事と存じます。來る二年間のあなたの畫境の御進歩をひたすら樂んで待つて居ります。御交際を願へる樣になつた爲めに、藝術に對して眞面目な態度を示さゝれた事を私は難有く思つてゐます。かう云ふ態度をこの世に見出す事が私の第一の鞭撻であり慰藉であります。それを難有く思つてゐます。表裝した私の百合の畫が友達會の展覽會で百圓に賣れたといふ事を妹からいつて來ました。開いた口がふさがりませんでした。もう是れから決してあんな悪い事はしません。氣まぐれに出品した事でしたが、そんな罪を造らうとは思ひもかけませんでした。あなた方にお詫びのしやうもないやう

な心持になつてゐます。御大事に。

## 佐藤繁井氏宛——十一月十三日於京都　〔三五二〕

こなたよりこそ永々の無沙汰に打過居候處何の御障もなく御暮しの由御狀に接しおよろこび申上候。御實家に彼是御心配の事ありし由にて御痛心なりし事ならん、然し御兩親樣の御上京は御兩方にとり結構の事と存上候。茅ヶ崎の方「宣言」が累をなせりとは實に意外の事に候、御迷惑何とも申わけなく存じられ候。但し先方の人達も無理解の人々かなと存じ候。當地の講演は聽衆も多く候だけ責任の重きを感じ候へ共思ふやうの表現も不出來、不滿足を與へたる事ならんと恥しく被存候。たゞ當地昨今の風光の美はお見せ申上げ度候。今朝などは昨夜來の雨美しく晴れ亙りて何とも申樣なき心地に候。嵐山、宇治など如何ならんと遊意をそゝられ申候。向寒の節折角御自愛相成度。取急ぎ御返事迄。草々。

## 母　堂　宛——十一月十三日於京都あかまん屋　〔三五三〕

御無事御歸宅の電報並に御手紙落掌慶賀此事に奉存候。京洛御滯在中は乍思誠に不行屆なる事ばかり、片手間仕事の事とて思ふやう御慰め申上げ候事も不叶遺憾に存居候。東京は急に寒さ相催候由嘸御困りの事と察上候。當地は今日は又珍敷快晴に相成、再び小春日和らしき暖氣を覺え申候。

昨日は大阪に出張、ある婦人會に講演、明夕は又江崎氏の招待にて大阪に參るはずに有之候。

子供達のよろこび眼に見ゆる樣に御座候。鹿、氣に入り候や如何に。其中私も何か見つけ持歸り可申候間左樣御申傳へ置被下度、永々の間分家にて懇切に世話し下され候事返す〴〵も忝く、何卒宜敷御申傳へ被下度願上候。二十一日か二十二日は歸途につき可申候間何卒それ迄の處萬事よろしく願上候。

女中は參候や。參居候はばよきものにてあれかしと祈上候。

## 足助素一氏宛——十一月二十日　〔三五四〕

一昨日同志社の方をすまし、昨日はＰＬ會といふ會で貴婦人連を前に置いてしこたま御婦人の惡口をついて厨川夫人などを口惜しがらせ、今朝はこれから土産の買物に出懸けて夜は「出家と其の弟子」を見、明日午後から二回講演の上、明後日朝の汽車で歸京する。

今日は原が來さうなものだと待つてゐる。京都から行つた男が駄目なら勿論無遠慮斷つてやつてくれ給へ。別に適當さうな人が出來ればそれでいゝ。兄のあまり忙しい事を思つてあんな男でも何かのたしになるかと思つたまでだ。

野村の申出は成程兄としては考へ物だと思ふ。

京都も本當に寒くなり出した。餘は御面會の上、祈御健在。

## 有島行郎氏宛——十一月三十日於東京　〔三五五〕

御元氣にて御勉學の由先日の御葉書にて承知重疊此事に存上候。實は長らく御消息なき爲めいさゝか御案じ申上居りし處に有之候。學校の方も先づ好都合に御運び相成候由是れ亦結構に存上候。當方は母上はじめ至つて無事、この間中は京都に御出に相成少々御保養にも相成候半か。生馬はこの頃頻りに執筆にいそがはしき樣子、英夫は「人間」と申す雜誌の主幹にて是れ亦至つて多忙の樣子あまり面會も不致候。小生は京都滯在中もあちこちにて講演を命ぜられ歸京後もあちこちに出席致し、演說つかれの氣味にて閉口致居候得ば、來年からは斷然中止の積に御座候。著作に沒頭致し候得ば中々餘事は思ひもよらず候。第十輯は多分來月中旬に出來可致、其節は供御笑覽可申候。

いつぞや三井淸子氏渡米の節品物少々依託し置き候が御落手相成候半か。

雍一君もいよ〳〵明日東京出發、八日神戶發の郵船にて渡英の事に相成居候。

來月四日は父上御三周年なれば親類其他打寄精養軒にて晩餐の筈に候。頃來晴曇不定閉口に候。貴地も追々寒氣に向ひ申候半。折角御自愛專一に祈上候。山內樣に御序も候節はよろしく願上候。草々。

## 柳兼子氏宛――十二月一日於麴町　〔三五六〕

この間の問答の時女子大學の先生をして居られると思はしい方が、
「敎師としては時々思つてゐる事といふ事とが矛盾してゐるのを自覺しながらそれを通さねばならぬ場合があつて苦しいが」
と云はれた時私はそれが苦しければ敎員をやめる事ですとお答へしたのを覺えてゐます。これは明かに私の申し過ぎであつた事に後から氣付きました。
「その苦しみが忍べる間は而してさういふ態度である事が敎へ子の爲め必要であるとの自信がある間はそれでやつてゆく外に道はありません。二重の生活が耐へ切れなくなればそれは自然に破れて自分の位置を抛擲しても自分の眞實に生きずには居られなくなるでせう」
とお答へすべきだつたのです。この頃デモクラシーといふ言葉が唱へられますが、人々の多くはそれが政治問題社會問題にのみ限られてゐると思つてゐるやうです。そんな考へはそんな方面よりも先に敎育問題などにこそ這入つて來なければ本末を顚倒したものだと思ひます。敎育上のデモクラシーと云へば、敎師がえらいもの生徒がえらくないものと云ふ僻見を捨て去る事です。さう云ふ僻見を捨てゝ生徒に對したら可なり自分の眞實と思ふもの丈けで對する事が出來るやうにも思ふのです。乍憚これ丈けの事を御面會の折もありましたらその方に御傳へを願ひ度いと思ひます。
又其節はお菓子や人力車をいたゞいて難有う御座いました。これもどうぞ厚く御禮を願ひます。

## 足助素一氏宛――十二月八日　〔三五七〕

老婆親切を難有う。女にうゑてゐる程度は兄と略〻同樣位と思ふが、僕には其外に好奇心といふ惡いいたづらものが手傳つてゐるといふものだ。Kも男に近づかうとすると兄が見たやうな眼ばかりはしてゐないよ、呵々。而して堺君も云つてゐたが心の底には眞劍な純なものが潜んでゐるのだ。と云つて何も覆水を盆に返すやうな手品はしないから安堵してくれ給へ。

秋田は感心な男だねえ。

## 吹田順助氏宛――十二月十六日於東京　〔三五八〕

いよく歲の瀨になりましたが皆樣御かはりもありませんか。大分永らく御無沙汰してゐました。

唯今春陽堂の今村隆と申す人が來てあなたの原稿を來年五六月迄待つていたゞきたいと云つて來ました。其理由は本人から直接あなたの方に申して上げるでせう。お待ちになるならよし、それでなければあの原稿を他の雜誌社に交渉して見ます。或は又あの原稿はあのまゝにして置いて他に御近作があるならその方を他に交渉して見てもよござんす。其邊の御返事をこちらにおもらし下さい。

「三部曲」が出來ましたから別便で御屆けします。これが私の舊衣を脫する最後のものです。この次には論文、それから來年の六月頃「新小說」に何か長いものを書かねばならぬかと思つてゐます。その作では新しい衣裳を着て見たいと思つてゐます。

この頃になると貴地がうらやまれます。東京は可なり寒くなりました。文章世界と新潮の正月號につまらぬ感想を載せておきました。御覽下さる機會があれば幸です。

御大事に祈ります。

## 宮崎安右衞門氏宛——十二月十九日於東京　〔三五九〕

京都では失禮致しました。わざ〳〵御見舞を難有う御座います。私も一家のものも幸に至つて無事で暮してゐますから幸に御放念下さい。年も押つまりましたけれど過去を省みて見ると何とてまとまつた仕事の出來ないでしまつた事を恥ぢ入るばかりです。此頃少し讀書に沒頭せんものと籠居して見てゐますが兎角俗事に煩はされて思ふやうな事が出來ません。そんな時にはあなたの御境遇などが羨まれます。富田さんは旣に御歸京なさいましたか。若し御面會の節もありましたらいつぞや京都でお伺ひした件は片付きましたかと唯御傳へを願ひます。而してよく御禮を仰有つて下さい。あなたのよい御仕事の上には御成功を祈り上げます。

## 一九二〇年

木田金次郎氏宛――一月四日於東京　〔三六〇〕

いゝ新年をお迎へになつた事とおよろこび申上ます。僕も幸に頑健、子供達も幸福にこの年を迎へました。今年も力の限りの生活をして無駄でなく一年を過したいと念じてゐます。

兄の方は隨分寒くなつた事と御察しします。仕事には節季も正月もありますまい。忙しくお過しの事と思ひます。其後作品が出來ましたか。出來たら送つて見せて下さいませんか。

「三部曲」をお送りします。まだ〱物足りない處ばかりで恥しいものですが、段々いゝものを書いて行きたいものと思つてゐます。

惡い風が流行するやうだから御大事に。

小村直氏宛――一月六日於東京　〔三六一〕

昨日は突然參上して澤山の時間をいたゞいた事をお氣の毒に思ひます。然しお蔭で大變樂しい半日を持つ事が出來ました。

あの畫を持つて歸ると直ぐ額緣に入れて見ましたが、思ひ設けてゐたやうに引立ちませぬ。額緣が惡いのに相違ありませぬ。其中似合ふのに取代へる積りでゐます。私の所持してゐる畫では安井氏のと好一對の活き〱したものだと喜んで居ります。

「三部曲」をお屆けします。私としては物足らないものですがお讀み下されば幸ひです。而して惡い所を敎へて下されば

更らに幸ひです。
今朝もあなたは隨分寒かつたでせう。風邪をお大事に。

原久米太郎氏宛――一月七日於東京麴町　〔三六二〕

暫く兄からの消息を聞かず、「三部曲」を御送付して置いてもうんともすんともない所を見ると又鬼のカクランが起きたのではないかと些か心配になるが、別條はないのか。
幸に僕の所の一家は頑健至極で越年した。僕の外は皆熱海に出懸けてゐるので目下僕は山中にでもゐるやうに靜かな日暮しをしてゐる。可愛がりたい時に子供が側にゐて、仕事のしたい時にたつた獨りになれたらと暢氣至極な妄想を描いたりしてゐる。
勞働問題も恐ろしく下火になつたものではないか。是れだから日本人は全くいやになるねえ。
まあ自分に與へられた仕事を專一にやつて行くより外に仕方はない。僕は今月は朝日の懸賞小說に全力を集注する積りだ。來月からは「惜しみなく愛は奪ふ」だ。奪つたつて奪はなくたつてと皮肉るべからず。
足助は法事の爲に歸國したが兄には自然遇　事と思ふ。健康が惡いので此頃は又少々癇が立つてゐるらしい。冬になると彼は實際みじめだ。
まあ無事でさへゐてくれゝば安心する。無事なら近況を知らせてくれ給へ。

大島豊氏宛――一月十七日　〔三六三〕

兄が渡米以來の委細の御消息は度々耽讀して非常に嬉しく思つてゐます。兄が是れまでの無拘束な生活から先づ規則正しい生活に這入る事を目指ざしたのが、第一にいゝ着眼だと敬服しました。そこを立派に乘越してから更に自由な道が兄

の前には開かれる事と思ひます。御出發前に僕が怒りに怒つた事を許して下さい。それを兄が少しも怒らず靜かに考察してくれたのを僕は心から嬉しく思つてゐます。

十四日から發熱して玆二三日臥床しましたがもう宜しい。今朝は平熱に復しましたから此手紙を書きます。母も子供も元氣で暮してゐます。流行性感冒は恐ろしい熱です。米國もさうでせう。御大事になさい。

森戸助教授がクロポトキンの思想を東大經濟學科發行の「經濟學研究」で紹介した爲めに職を奪はれ告發されました。此頃重大な興味ある問題です。

祈御健在。

## 吹田順助氏宛——一月十九日於東京 〔三六四〕

私の拙い著作に對してあれまでに綿密な御感想を認めて下さつた事を勿體ない位難有く思つて熟讀しました。深く御禮申します。第一第二の戯曲の內容に對する讃辭は少し身に餘りますが其儘いたゞくとして、「聖餐」に對する御意見は色々の意味で私を十分に考へさせてくれました。基督は仰有るやうに悲劇の主人公たらんには餘りに圓滿過ぎるやうです。で私は中心點を寧ろマリヤに置いて書いて見た積りでした。基督を精細に描く事によつてマリヤを浮き出させようと試みたのです。然しそれにしてはマリヤの影が薄過ぎてゐます。あれは本當を云ふと如何にしても少くとももう一幕を加へ、マリヤを表面に置いて其生活を明らかにし同時に其幕にユダを點出してユダの心持も同時に表現しなければならなかつたものだと思ひます。前の二つの戯曲も書きおろしたものに一幕づゝを附加して漸くあれだけの體裁にする事が出來ましたが、それでもまだ事件が十分に具象化されずに說明に終つてゐる所の多いのを感じます。「聖餐」に至つてそれが一番甚しいと思ひます。それが劇といふより物語的な印象を與へる大きな原因の一つらしいのです。唯私はその當時の人々の心持や氣分が屹度さうであつたらうと思つたそれを描出しようと試みた。その試みは相當に成功してゐるかと思つてゐます。漫然

と聖書を讀むよりはこの戯曲を讀む事によつて當時の生活內容が明瞭に印象されるやうにと心懸けて見ました。今度聖書から題材を取つたらも少ししつかりしたものが書けるといふ自信は多少出來ました。

この三部曲で私は色々な事を現はし度いと企てました。實際この三戯曲の間には私なりにある關係を有たせようと試みました。

一、エホバ(義)より「父なる神(愛)」への推移。

二、兩性間の憧憬、爭鬪、調和。

三、生命の向上、生命の向下、及生命の自足。

其他です。而して私に眞に藝術家的な資性があつたら無自覺で他に何かの連絡をも附してゐるかも知れません。果してそれがあるかないかをも知りたいと思つてゐます。

言語上の御注意も難有く思ひました。この間大學生が四人で「聖餐」の本讀みをしてくれましたが、實際上可なり不便な用語を發見しました。

「お憐れみ下さい」

の如きは其著しい例です。それから聖書上の智識の不足な爲め顏から火の出るやうな誤謬をしてゐる事を竹崎牧師から指摘されてヘコたれてゐます。

御好意に甘えて餘り自分を語り過ぎて失禮しました。

今日足助のところから電話がかゝつて來て、今歸宅したと云つて來ました。あなたの方には遂に行かなかつたと見えます。

貴稿は大觀社にやつて置きましたが多分三月號には出してくれさうなものだと思つてゐます。

お子さんの御病氣が御全快で深くよろこんでゐます。東京は惡風邪猖獗で全く重圍の中に居るやうです。私も十四日から昨日まで輕い奴を食つて臥床しました。眼の前には大阪朝日の懸賞小說が山のやうにあります。いつかからこの事ばかり氣にしながらまだ片付けてゐません。困つたなまけものです。

牧山君は時々見えます。中々考への深いいゝ靑年ですね。今はスチルネルを譯さうかなど云つてゐます。

倉田君の戲曲が二月の新小說に出るさうで樂みに待つてゐます。

萬望御大事になさいまし。早速御禮旁ゝ。草々。

朱葉會を見て歸つて來てから。

## 大森眠步氏宛――一月二十五日　〔三六五〕

原稿を拜見しました。

一つの創意のある作品だと思ひました。然しこれも其材料と表現との關係から到底發表してくれる本屋はあるまいと思ひます。あれ丈けの內容でも發賣禁止を忍ばれなければならない御治世なのですから。最後に私としてはかういふ構想には妙におくれた心になります。兎に角原稿を一應御返却します。あれは岩野泡鳴氏などに見てお貰ひになつたら如何でせう。

## 吹田順助氏宛――二月八日於東京　〔三六六〕

御一家が風邪の爲めにおなやみになつた事をちつとも知らずに過してゐました。度々の御難澁嘸お苦しみだつたらうとお察し申上げます。然しもう御快方で結構です。然しまだ寒いから御油斷のないやうに祈り上げます。

あなたの御感想が讀賣に出てゐる事は足助から聞かされましたがまだ拜見する機會を持たずにゐます。弟の所から借り

て來て必ず拜見します。貴稿は大觀社にやつてありますがまだ何んとも云つて來ません。これも其中問合せてやります。此頃も矢張「大朝」の懸賞小說になやまされ切つてゐます。實際後悔先きに立たずです。中旬までには切り上げて論文の方にかゝりたいと思つてゐます。私の小さな感想をお讀み下さつて難有う御座いました。この頃は私は文壇には全くの異邦人となりました。作物でもなんでも全く顧みられません。私はそれを結句いゝ事にして澄まして自分の道を進んで行く積りです。倉田氏の「俊寛」を感心して讀みました。これから現在の材料から戲曲を書くと云つてゐます。結構なものが出來るだらうと期待してゐます。東京は今朝から降雪で今(夜十時)四寸程積りました。久振りの雪であるのに降り來る空は全く風もなく、實に靜かな寒い夜です。そちらにゐられるとこんな日もなつかしく思はれる事だと思ひます。私も何やら北海道の事など思ひ起して少し感傷的になつてゐます。くれ〴〵も御大事になさいまし。それではこれで。

## 八木澤善次氏宛——二月十一日於麴町　(三六七)

御返事がおくれて失禮。熱海の方へ子供を連れて行つたり何かして居たものですから。

愈〻兄の卒業後の方向もきまつたことは何より御安心と思ひます。日本の將來の社會問題の根本問題は都會勞働者よりも農民のそれだと思ひます。都會勞働問題は目に觸れ易く花やかなものだから人々が皆それに眼を向けてゐます。今の社會主義者といはれる樣な人達も重に都會勞働問題のみを云々してゐるのは少し山氣澤山過ぎる嫌がありはしないかと日頃から思つてゐます。問題を燃え上らせる爲めには都會勞働者の中に運動を起すのが捷徑かも知れないが問題の重大な解決は農民問題(或は地方問題——都會に對して)を忽諸に附したら由々しい誤算だと思ひます。而して此問題は早晚忽如として其重要さを露出して來るに違ひありません。今から十分に之れに備へて置くのは亦學者の大なる任務の一つではないでせうか。兄の農政問題を硏究なさりたいとの初志は或はこの邊と一致してはゐないかと考へますが一つ益〻この方面に猛進されては如何ですか。文藝に沒頭してゐる門外漢がかゝる生意氣を申すのは稍〻僭越の嫌ひ有之も河上樣などにも其

邊委細御相談御決定もあらばと祈つてゐます。
私は依然懸賞小説に苦しめられてゐます。實に災ひなるかな。新小説の藤村、武郎號の一件は斷つてしまひました。二月號の新小說に出た「三部曲」の紹介のだらしなさを御一見下されば、さうした私の心持も分つて下さると思ひます。ジャーナリズムには全くあてられてしまひます。
「我等」の三月號に橋本行の半日の感想を載せる事にしました。御序があつたら御笑讀下さい。そちらの私の友人達は風邪にも冒されず達者でゐる事と思ひます。御遇ひの節は何卒よろしく御傳へを願ひます。
九日に東京には可なりの雪が積んでゐました。今日は風があつて晴れてはゐるが寒う御座います。健康を御大事になさい。「俊寛」は感心して讀ましてもらひました。

## 木田金次郎氏宛——二月十六日於東京　〔三六八〕

畫を受取つてから大分永くたちます。實はあの油繪を額緣に入れてよく鑑賞したい氣持から今日迄その儘に打過ぎてゐましたが、額緣屋の奴はそんな心持は察してくれず、何時までたつても註文を果してくれませんから我慢が出來ずにこの筆を取りました。
あなたの畫が屆いて來た時には丁度生馬も部屋に居ました。僕は油繪を簞笥の引出しに挾んでつりさげて二人で見入りました。生馬は「立派なものだ」といつて感心してゐました。而して暫くしてから「物の見方に少し確實性を缺く嫌ひがありはしないか。前の方の樹木などは本當にいゝが」と云つてゐました。私も全く感心しました。あの落着いた表面にぎらぐと現はれ出てゐない底力といふやうなものに打たれました。殊に北海道の風景に接し慣れてゐるものにはそれは樂しい思ひ出であります。兄と私とは餘り近寄り過ぎてゐるので餘り確實な批評は出來なくなつてゐると云はれるのかも知れないけれども、私はそこに又思ふまゝに云へさうな氣がします。忌憚なく思ふ所を云へば空には全く一言も云ふ事が出

來ません。光と透明さとが色の外にあすこには在ります。樹木の描法には少し難が申出でたいと思ひました。力强さの中に少しばかりほんの少しばかりの空虚が――それは單純化が徹視から來ずに想像から來たといふ空虚が感ぜられるやうに思つたのです。殊に遠景にある枯葉をつけて立つ一本はもう一步でマンネリズムに落ちはしないかといふ危懼を私に抱かせました。土の色と質とは立派なものだと感じました。それに比べると草の色が少し毛絲のやうな色感を起させはしないでせうか。然しそれは尤めるに足らない瑕瑾かも知れませぬ。大體が與へる感じとしては作者の躊躇といふ不安定な心持が薄く感ぜられるやうに思はれます。自然の中に溶け込んで材料の事などは忘れてしまつたと云ふ感じがまだ力强く動いて來てゐないのではないか。さう思はれます。その代りに惡ずれと名附くべき汚點は何處の隅にも見出されません。總てが春のやうに新しい事を見ます。その快さ。

鉛筆畫に至つては只々驚異の眼を見張るばかりです。あんなのを澤山集めて兜畫堂あたりで今の畫かきたちに見せてやり度いと思ひます。いくら見てもあきる事を知りません。あれ丈けの徹視がそのまゝ油繪の方にも現はれ出たらどんなに其色は輝くだらうと思はれます。その時が早く來るやうに祈つてゐます。

本當にいゝものを見せて下さつて難有う。而してあなたのこの冬のスケッチが早く屆くのを一日千秋に待つてゐます。

僕は今懸賞小說の選評に沒頭してゐます。苦しんだ甲斐のない仕事なので閉口し切つてゐます。他の二人の選者は夙の昔に出來てしまつてゐるのに、僕だけはまだぐづ〳〵してゐるのです。而して餘計に苦しみをしてゐるのです。あれを承諾した時の心持が實際我ながら奇怪千萬な事です。

そちらは雪が深いのでせう。東京にも昨今少々づゝ雪が降つて、冬らしい景色を見せます。風邪などひかぬよう御大事になさい。私は幸にも元氣で暮してゐます。今檐端から、雲解のしたゝりの音が聞えて、晝の陽の光が障子にさしてゐます。子供は三人共おばあさんと熱海に行つてゐるので、家の內は森閑としてゐます。獨りでゐると色々なことを考へさせられます。

## 野村愛正、坂田泰雄、朝重美名子三氏宛――二月十六日於東京　〔三六九〕

菫の花が咲いてゐると知つただけで心がわく〳〵するやうに覺えます。東京は昨日も雪が降りました。今朝は晴れてそれが溶けて雨だけになつて樋を傳つて落ちます。萬望そちらで三人とも十分に體を强健にして仕事の素地をお作りになるやう祈つてゐます。

美名子さんは憮つかれ切つてしまつたでせう。然しもう光明は明かに認められた事だから靜かにお進みになればいゝのですね。井上君からも手紙が來ました。愈ゝ滿洲に行くのださうですね。

野村兄は著作、坂田兄は畫布、美名子さんは讀書、全く羨しいやうな生活ですね。僕は相變らず懸賞小説で苛責され、今日は午後から足助が來て「惜みなく愛は奪ふ」の原稿にかゝつたかなどと催促されると思ふと少し悲しくなつてしまひます。明日は私も子供を迎へに熱海に行つて十九日には歸つて來ます。力が這入り切るまで獨りで何處かにぢつとしてゐたいが、いゝ加減に踊らなければならないのは自分ながらいけないと思ひます。いけないと思ひながら思ひ切つて沈潜し得ないのが悲しい。一昨日は森戸氏の公判を聽きました。始めて法廷といふものをしみ〴〵見ました。あすこでやつてゐる事は皆うそですね。うそつきに限つて物々しい顔付をしてゐるものだ。法廷の顔付の物々しさよ。

## 粒良達二氏宛――二月二十一日於麴町　〔三七〇〕

（前文略）唯二十五日まではさし逼つた用事がありますから其後に來るなら來て下さい。

それはどれ程の苦しみだかよくお察し申す事が出來ると思ひます。然し攝理が何を兄に求めてゐるかを誰が大膽にも云ひあてる事が出來ませう。それを兄自身すら容易に定むべきものではないと思ひます。約百記（ヨブ）を讀んで御覽なさい。それが架空の戯曲であらうとも實感的な苦惱と解脱は濃厚に現はされてゐると私は思ひます。唯あの記事には神があります。神

を信じられない兄にとつてそれは一つのつまづきには違ひないけれども、何等の暗示をも兄に提供し得ないとは思はれません。一人として深い自省の後に棘を持ちつゝある事を感じないものはありません。兄よ、兄の棘は大きく痛ましい。然し兄のみが總ての人から全然特別な事情の下に置かれてゐると思ふのは誤りだと思ひます。

萬翆兄が絶望失意のどん底から勇ましく跳ね返つて新しい世界に生れ出て來られるやうに祈ります。

## 谷川徹三、三木清兩氏宛――三月四日誕生日の夜於東京　〔三七一〕

私の誕生の御祝を難有う。谷川兄の手紙も正に今日屆きました。誕生日の加はる事を寧ろ苦笑を以て迎へねばならぬ私ですけれども、その日に依つて私を思ひ出して下さる友のあるのを知る事は私の心を暖めます。兄等御兩人と二人の女性と一人の母とによつて私の日はしめやかに祝されました。何んといふいゝ祝福。

この頃ケーベル博士の小品集を精讀して數多き暗示を與へられてゐます。明治以來日本に住んだ最上最高の人格を彼に於て見出す樣に思ひました。

私の近況は八木澤兄から御聞取下さい。

## 原久米太郎氏宛――三月十一日於麴町　〔三七二〕

今日は春らしい曇日和で暖かだつたから、この頃胃を惡くして閉口してゐる足助をおびき出して、荻窪に石山太栢といふ若い畫かきの家を尋ねた。布袋さんのやうな克明なその人はさゝやかな然し氣持ちのいゝ家を新築して庭などを手造りにしてゐた。歸つて見ると、兄からの手紙が來てゐた。この前の長いいゝ手紙と共に、大きなよろこびを以て受け取られた。

竹崎は兄のいふやうに本當にいゝ男だ。男らしい男だ。主義の人とか信仰の人とかはあゝしたものかも知れないけれど

も、彼に於て只惜まれるのはもつと自分の把持する所のものに自信を持たん事だ。その自信が强ければさう一氣に人を說服しようとしないでも十分の安心が出來るやうに思ふのだが。然し兎に角彼の僕に對する友情に就いては一言もなく難有く思つてゐる。彼は離れて考へるよりも直面して談る時の方に遙かに深い親しみが感ぜられる。僕は今夜早速竹崎にも感謝の手紙を書いて送つた。兎に角僕があんな人々からあゝ暖く考へられてゐるといふ事は誇りにしていゝ事だと思つてゐる。

川崎の仕事の能率の偉大なのを兄から聞かされて一寸驚いてしまつた。僕が知つてゐる頃の事――この頃はその方に注意をしなくなつたが――から考へると夢のやうだ。英國なら英國に軍艦を注文したといふ事を聞いてから忘れ果てる頃になつて出來上つて來るといふやうなのが僕のそれ等の仕事に對し持つてゐた智識なのだから。然しその能率を實現すべく兄までが馬車馬のお株を僕から奪はねばならぬとは悲慘だ。然し同時にその間にもこつ〳〵とラッセルを論じ、文學を讀み、飜譯に從事し、徒弟を敎へてゐる兄の精力と來ては實際一寸まねが出來ないよ。

とは云ふものゝ二指がきかなくなつたなどは心細い話だな。僕が敎師をしてゐた時のやうにちつとサボる工夫はないものかな。松方幸次郞にその邊の呼吸を少し敎へてやつたらどんなものだらう。人間は馬車馬ぢやないつて。他人の爲めに生產する人間だつて矢張人間だつて事を。

これは足助には內所だが僕はまだ「惜しみなく愛は奪ふ」に取りかゝつてゐない。足助はなまけてゐて土端場になつてがんばるのがいけないと云ふけれども、仕事を始めるきつかけに喰ひつくまでの大儀さつたらない。見當をしつかり見定めて置いてよしといふ瞬間にかけ込んで行くその呼吸をはかつてゐるのは全く苦しいよ。取組んでしまへば負けても勝つてもそんな事は問題ぢやない。唯盲滅法に喰ひ下るなり突かゝるなりしてゐればいゝんだが、敵の奴がどしんと構へてゐるのに、仕切つたり立つたりして考へてゐる間は全くみじめだと云ふ事が出來る。山內なんざあそんな時になると毎晩芝居か何かに行つて一日延ばしに延ばす申譯を作つて自分の良心をごまかしてゐるやうだ。然し多分――佛樣が許して下さ

つたら――明日から斷然仕事にかゝるだらう。さうなると又無沙汰をすると思つてこの手紙を書いておくのだ。とか何んとか云ふが二三日してから長い手紙を書かなければいけないから今日は仕事は先づやめてなど〻自分に云ひ聞かせる時が來るかも知れないがね。

竹崎の奥さんによろしく。兄の奥さんも幾分慰められた事と思ふ。それがきつかけになつて早くもとの健康に復されるやう祈つてやまぬ。實際これは兄の友達が誰でも祈らねばならぬ事だ。

ケーベル博士小品集なるものを讀んで感心した。あの位本當の意味で上品な人は一寸ないと思つた。上品といふことはあんまり大した德ではないと思つてゐたけれども、あれ位洗練されると總てのいゝものと同じだけの光が添はつて來るやうだ。

今夜は地震でもありさうに暖い。のぼせ下げに頭痛膏でも貼りたい位だ。氣味の惡い事を云つてくれるなと兄が苦笑しさうだからこの位でやめておく。

淺井三井氏宛――三月二十四日於東京　〔三七三〕

度々の御消息にもかゝはらず用事にかまけて御無沙汰してゐました。お許し下さい。先日の御姉上と共々の會見で私の告白が御姉上に異常な不安を與へた樣であつた事を悲しく思ひます。然し實際をいふと私はあなたの十分な相談相手ではないかと思ひます。然し同時にあなたから今私が離れてしまつてはあなたは可なりお迷ひになると思ひます（これは私の自惚れかも知れないけれど）。であなたが私を信じ私に對して眞實を持つて下さる事が出來るなら私もあなたを何處までも信じてあなたの生長の爲めに出來るだけの事はするつもりです。

一枝姉上から御來書で（私も一寸會見のことを御見舞がてら申して上げたので）非常にあなたのことを心配してゐられるやうです。是非あなたから委敷事情をかくし立てなく知らせてお上げなさい。あなたはそんな時沈默してゐるのがいけ

ないのだ。ひがまない心と信頼とを以而姉上方に總てを御相談なさい。それでないと、あなたの立場はだん〳〵いけなくなる。

大事に〳〵あなたを最上に活かさなければいけません。

## 牧山正彦氏宛——四月五日於東京 〔三七四〕

自分をも信ずることの出來ない生活に於て人を信ずる事が何の足しになるのですか。少くとも人を信ずる事によつて何の力が得られるのですか。

そこに行くと私は極端なエゴイストです。私は獨りで歩いて行きます。又信じ切られる事は私には一種の苦痛です。私の自由がそれによつて妨げられる程私は弱い事のある人間だと自分を知つてゐますから。

何卒私をどこまでも單なる人間として見て下さい。その外のカテゴリーの中に私は自分をはめこみ度くありません。死ぬまで私はグル〳〵動いて行くつもりです。

## 牧山正彦氏宛——四月七日於東京 〔三七五〕

御手紙を見て私も涙がこぼれました。もう何にも云ふ事がありません。結局は私は言葉に引かゝつてゐたのです。言葉といふ奴は實際憎い奴です。あなたの方が人間としてはどうも一歩私より先を歩いてゐられるやうです。私がもう少し進んだら、あなたの境界に行きつかれるかも知れません。たゞ私の方は、あなたより其場々々の執着が強いかとは思ひますが。

スチルネルもたしかに落手しました。

兎まれ今度の御手紙であなたを完全に近く識り得た事は私のよろこびです。

いよ〳〵御出懸けの由非常にいゝ事だ。十分靜養して健康を囘復して來てくれ給へ。おくらさんにもよろしく。

書後は書くことにする。「餘錄」の方の頁數が本論から通してないから書き入れてくれ給へ。

「仙子集」は一周年以前に出すのがいゝと思ふが出來るか知らん。まだ校正が出ないので案じてゐるが。

## 大島豐氏宛――四月十六日　〔三七七〕

御手紙が非常にいゝので實に愉快でたまらない。兄を知つてゐる人には兄の噂をしてよろこんでゐます。その勢で十分に勉强を續けて行かれる事を切に祈つてゐます。島原氏も歸朝早々來訪して下さつて兄の御心入れの眼鏡の緣を渡してくれました。お志をうれしく御禮申します。僕は案外そんな事には timid で、あれをかけて堂々と外出するなどの勇氣はまだ起らないが、讀書用の玉を入れて書見の時に使はうと思つてゐます。屹度いゝだらうと樂しみです。

日本に是れと云つて特別に報道する事も起りません。相場が下落して立會停止をして蓋を開けてもいつでも下落ばかりする事、從つて成金の氣勢が段々そがれ始めた事、露西亞で日本軍がヘコタレ切つてゐる事、發賣禁止が頻々に行はれる事、變調の來る前の低氣壓を思はせます。私はそんな事には外面的は無頓着で仕事に沒頭してゐます。論文も出來上つたけれども印刷所の都合で六月でなければ出ないといつてゐました。家のものは皆達者です。時々兄が歩く樣子などを子供がやつて噂してゐます。

體を丈夫にして勉强なさい。僕の字が壁間にかゝげられてゐると島原氏に聞かされて、少々うれしく大いに恐縮してゐます。

## 橋浦時雄氏宛――四月十八日於東京　〔三七八〕

決して御心配なく又お出下さい。私に於て矛盾してゐるのはあの大きな家ばかりではありません。これから一生かゝつて統一しようとしてゐるのです。其矛盾が神經におさはりになるなら駄目ですが、さうでなかつたら御心配なくお話にお出下さい。

あの畫を枯川先生に見せましたね。少々油をしぼられたやうな氣がします。

## 足助素一氏宛――四月三十日　〔三七九〕

校正刷の頁數が毎回間違つて來る。第二に來た校正刷の最後の頁の通し頁數（羅馬數字の分）を見ておくのを忘れたので宅に來る頁數を訂正する事が出來ないから其儘（若し尙僕の所に來たら）にしておくからこれは何卒御調べを願ふ。

時事に賣貸家の廣告が出てゐたからお目にかける。

三部曲の音譜は中々いゝものらしい、昨夜信子に彈じてもらつたが素敵なものと思はれる。若しよければ作曲家の好意に酬ゆる爲めあのまゝ印刷して挿入したいと思ふが。

それでは今夜立つ。からだ大事に祈る。

## 足助素一氏宛――五月九日於京都あかまんや　〔三八〇〕

「惜みなく愛は奪ふ」の難解生硬な文章だといふ事を度々聞かされるので少し心配になつて來た。あれは兎に角僕が勢一杯に自分の人生觀を書き表はして見たもので、僕はあれで人間の生に對する態度をいくらかでも創りなほさうと思つてゐるものだ。僕は骨身を惜まず表現をした積りだ。無責任な事はしてゐないつもりだ。眞劍に讀んでくれる人なら理解の出

來るまで二度か三度は繰返して讀んでくれても後悔しないでもいゝといふ位な自信は持つてゐるものだ。然し兄の度々の言葉には僕も不安を感ぜずにはゐられない。まことそれほど生硬な文字ならもう一度讀み直して見たいと思ふから暫らく發行を待つておもらひすることは出來ないだらうか。出來ないだらうかではない、兄が斷然さう思ふなら是非待つてゐてくれ給へ。歸京の上十分兄の意見も聞いて考へなほして見たいから。他人の云ふのなら齒牙にはかけないけれども、僕の作物に就いて最も關心をつないでゐてくれる兄の言葉だとなると自分の作品については可なり自惚れの強い僕もぐらつくのだ。

それから阪田兄に送つた殘りの印税がまだ殘つてゐるなら御面倒ながらこちらに送つてくれ給へ。書生さんで金を貸せといふ人がゐるんだ、何に使ふのか知らないが馬鹿はしまいと思ふから殘りがあるなら貸してやりたいと思つてゐるのだ。風邪を十分に用心してくれ給へ。僕は幸に元氣。一昨夜から當地も降雨になつた。然しこれまでの堪らないむし暑さから救はれて却て甦つたやうな氣持でゐる。

## ケーベル氏宛――五月十一日於京都　〔三八一〕

外國語で文章を書くのは下手な英語より私には出來ません。あなたが英語のおきらひであるのは信子から聞かされてよく知つてゐますので、思ひ切つて自分の心を生んだ自分の言葉を用ゐる事にしました。それをお許し下さい。

先般「著作評論」にのせた私のあなたに對する小さな感想が計らずもお目にとまり、而かもさしたる御尤めを受けなかつたことは十分に私を光榮づけます。私は平常から一人の藝術家のはしくれとして、他人に對する批評などは絕對に出來ないことだと考へてゐるものです。而してあの感想は單にあなたに私をかすかながらにでも結び付ける所緣としたい爲めの欲求の滿足であつたに過ぎません。あなたの事をお考へ申すのが、私をあなたに結び付けることだと思つてしたことです。然るにあなたの御懇切な御言葉によつて、あなたに結び付けられた私の意外のよろこびを御察し下さい。

日本の人々はあなたに對して十分に忘恩だと思ひます。然しそれが凡てゞはない事を萬望御考へ下さい。あなたが此の地を永久に歐洲に向つて去られた後でも、あなたのお踏みになつた尊い足跡は、決して消えることなく或る人々の心の中には殘るでせう。而してそこから正しい考へ方と、よい生き方とが誤たず生れ出るでせう。私達の上にあなたの如く國土を超越した愛を、實踐的に示して下さつた方を、私達は忘れようとしても忘れることが出來ません。

御返事をさし上げるのが、却つてあなたの尊い瞑想の美を妨げる事になりはしないかと思つて、今日までさし控へてゐましたが、昨夜遭遇したあるきつかけからどうしてもこの拙い筆を執らずには居られなくなりました。萬望このぶしつけをお許し下さい。いくら書いても書き足らないやうな心持を云はずに殘して。

## 足助素一氏宛——五月十三日夜　〔三八二〕

御手紙によつて、それでは兎に角其儘で出していたゞくことにしようと決めた。校正萬端の御配慮を感謝する。御蔭で早く本が出るのは嬉しく思つてゐる。

近衞君の樂譜の事は如何決つたらう。「三部曲」はまだ中々重版になる見込みはないのだらうか。

秋田君（昨朝來京、おまけに鎌倉のおかみさんが昨夜京見物に來たとて來訪、昨夜は朝重孃入洛、千客萬來の有様で講演の豫習も出來ない始末だ。朝重孃はたつた三十圓の金を懷中して朝鮮を經て大連（そこに良人がゐるかゐないか判然とは判らない）に向はうとするのだ、健氣さに感心して、

　雨十日十日の後の青葉哉

といふ迯句をした。

お言葉に甘え金百圓丈け前借を願ふ。

十九日講演を終へたら神戸に行つて原の獨逸城郭式とかいふ新築を見舞はうと思つてゐる。

## 菊地正雄氏宛――五月十五日於粟津　〔三八三〕

去る十二日やゝ曇りたる夕暮獨り芭蕉翁の塚弔ひ申候。義仲の墓にはさしたる事なきも翁の塚のめぐりに記念の石碑など多く立てるを見て今更に藝術の尊嚴に打たれ申候。

芭蕉若葉して枯野の夢の塚古き

## 高山林太郎氏宛――五月二十九日於東京　〔三八四〕

其後はこちらからこそ御無音になつてゐました。おさはりもなく御勉强のことゝ存上げます。月はじめから京都の方に行つてゐました。深草に元政庵を訪れたこと、河上肇氏に面會したこと、倉田百三氏を病床に尋ねたことなどが色々な意味に於て深い思ひ出となつて殘つてゐます。あなたの御作品が大阪時事の懸賞に當選されたとは先づお目出度いことでした。先づお目出度いといふのは皮肉に聞えるかも知れませんがさう〔いふ〕意味ではないのです。あなたの自信がより多い朝日の分が落選して却而不得手なものが當選したといふ事實が語るやうに、實際選評といふやうなものは到底公平を得がたいものです。私自身が選者になつて見てその事を痛切に感じたのです。ですからあなたの御當選もあなたに取つてはさうよろこばしい事であつてはならぬと思ひますが、然しそれによつてあなたが文壇に自分の思想を發表すべき機會を摑み得られたといふ事が一つの獲得だと思ひます。そこからあなたはあなたの自信ある作品を世に問ふべき門口を得られたのです。其點でお目出度うと申上げたいのです。あなたのよい作品が世に現はれる時を鶴首して居ります。

今年も名古の浦には藤が美しく咲いた事でせう。奈良の藤の盛りを見ましてあなたの御國のことをふと思ひ出しました。然しいつそこには行けますか。日々を雜事に沒頭して暮してゐる俗人には容易に其時は來さうにはありません。

御健在を祈りあげます。

## 八木澤善次氏宛――六月四日於麹町　〔三八五〕

御手紙をいたゞきながら御無沙汰をして居りました。御上京の御用事は幸に大事な事でなかつたのが結構でした。いつぞや佐田のお嬢さんが尋ねて來て下さいました。是れといふ格別なお話もなくお別れしました。

あなたの將來の方針が益〻具體的になつて行くことを非常によろこんでゐます。私も段々ある時機に到達してゐるやうです。四十五迄にと思つてゐた事がかなり早く來るかも知れません。

人事は誠にはかり知ることが出來ません。

「惜みなく……」が漸く明日は出版される事と思つてゐます。あなたなどには其內容は大體お話し盡したと思ひますが兎に角一册お送りして見ませう。

昨夜からいゝ五月雨が降り出しました。五月雨を讃美すると、暢氣な生活をしてゐるからの事だと笑はれますが、でも五月雨はやはりいゝと思ひます。

河上さんは御元氣でゐられますか。お週ひの節はよろしく。折々あの夜の事を思ひ出して大變にうれしく思つてゐます。

## 河上肇氏宛――六月八日於東京　〔三八六〕

京都滯在中御訪問下さいました一夜の追憶を今でも私は大切なものに思つて繰返してゐます。

「惜みなく愛は奪ふ」といふ私の貧しい感想錄を差上げます。あなたの目下の御心境からいふとまるで痴人が夢を語るに等しいものとの一笑を請ふに過ぎないかとも危みますが、私には總てを始める前にあすこからそろ〳〵步いて行く外はないやうに思はれますので敢て御閑餘の御一覽を煩はす事が出來ればうれしいと存じます。私は今四十三ですけれども心の發達の未熟な點からいふと十年若い三十三位だといつていゝと自分で思つてゐます。從つてこの幼稚な感想の如きはあな

たが夙の昔に通過なさつたものを事々しく云ひ立ててゐるのかも知れないと思ひます。然し私として矢張一度は自分の力で通つて見なければ氣がすまないのです。

秋にでもまた拜眉の折に十分の御叱正を受ける事が出來れば誠に仕合せです。

御擧家の御健康を祈りつゝ。

## 石坂養平氏宛――六月十一日於東京　〔三八七〕

私の「惜みなく愛は奪ふ」が出版されましたから一册を御送り申上げます。私の愛に關する意見に就ての御批評を兼ねて帝國文學誌上にして下さつた時、私は自分の心持が十分にあなたによつて受取られてゐない事を思ひました。其處に不服を感じましたが同時に私の表現の仕方が不十分であつたに起因すると存じましたので、少し綿密な表現を試みた今度の本を讀んでいたゞきたいため差上げます。

私の思想に對する御興味がまだあなたにおありになりますなら御一讀の上存分の御意見を伺はしていたゞきたいと思ひます。

## 原久米太郎氏宛――六月十二日於麴町　〔三八八〕

又御無沙汰。梅雨時になつて少々兄の腹の蟲がごたくをならべ出した樣子が御手紙に見えてゐる。全く時々は破裂しさうになることだらうね。此頃兄が表面益々世なれて來た樣子を見るとそれ丈け底の方にかくされて行く兄の情熱の幽鬱を思ひやるよ。僕も東京に歸ると早速再婚問題になやまされる始末さ。何んでも留守中に母が大分泣事を弟妹に聞かせたものと見えて口を揃へて責め立てられた。處が僕には御承知の生活問題が先決として頭に在る。最近にそれを母に申出して仕舞はうか如何しようかと迷ひぬいてゐる所だ。一層今の中の方がいゝかも知れぬ。若し兄に御意見があるなら知らせて

くれ給へ。

兄の話を聞いてから末光が氣の毒にもなつて、與謝野女史の知人にあたるので、女史に高野氏に遇つて貰つて末光が彼女と結婚し宮部家を繼ぐやうにしてはと申出させて見た。今日は其返事を聞き得る筈だ。少しおせつかい過ぎたかも知れないが。尤も面倒だから僕は何處までもかげにかくれてゐるつもりだ。

「惜みなく……」が漸く出た。賣れる事は大分賣れるやうだが、買つて後悔する讀者も少くはあるまい。讀み返して見ると足助の申分ではないが物足らない所もある。然しあれはあれでいゝとして置く。生活がかはつたらもう一つ徹底的なのを書く。

いたゞいた干柿はまだ珍重してゐる。昨日晝食のパンと一緒に喰べた。

雨期を御用心。この頃に宮本憲吉氏の――子供を二人持つたことのある出もどり――妹さんがある緣で來て子供の世話をしてくれる事になつてゐる。大變いゝ人なのでよろこんでゐる。

## 吹田順助氏宛――六月十二日於東京　〔三八九〕

こちらこそ慮外の御疎音になつてしまひました。此頃は御揃ひ御丈夫で御過しの御模樣先づ何よりおよろこび申します。あの原稿は餘りの遲延にこの間催促をして見た處が五來君から手紙が來て事務取つぎの際（あれは此頃實業の日本社で經營することになつたのです）御返送したさうだが、揭出すべきものだからあなたの番地を知らせてくれといつて來ました。そこで早速御住所を先方に知らせてやりなほ依賴をしておきましたのに、御手紙で始めてやゝ具體的な樣子を承ることが出來ました。紛失などとはあり得べき筈でないと思ひますから、兩三日中に五來氏を訪ねて十分詮議をしてもらひます。而してその上で責任のある御返事を致します。

山形ではまだ物足らなく思ひますが、それでも鹿兒島よりは遙かにいゝと思ひます。北海道に行く時にお目にかゝるこ

とも出來るし、御出京の機會も多いことと思ひます。早く御移轉をなさる樣希望に堪へません。

「惜みなく……」が漸く出版されましたからお送り申上げました。書き上げて見ると物足らない所が出來て來ますが仕方がありません。牧山君が早速手紙をくれて、何んだかあれを讀むと淋しいといつて來ました。同君も其考への根柢にはあなたのそれ又は阿部次郎君のそれと共通したものがあるので、それを私のものに見出し得ない物足らなさからの言葉だと思ひます。

有島（進んでゐるが足りない）牧山（まだ進んではゐないがこの道が正しい）から牧山君は思つてくれてゐるやうです。阿部次郎君にも其中面會して色々伺ひたいと思つてゐます。

今度京都に行つてゐる間一番うれしかつたのは河上肇、倉田百三、二君にお目に懸つたことでした。兩氏からかなり强い刺戟を受けました。色々考へて見ねばならぬことが宿題として頭に宿されました。

この夏御上京を今から鶴首してゐます。本當に早くお出懸け下さい。七月には一寸足助と北海道まで行くかも知れませんが、其他は在京の心組みです。では御大事に。

## 牧山正彥氏宛――六月十八日於東京　〔三九〇〕

委しい御感想を難有う御座いました。私は元よりあれで總てが完全だなどとは思つてゐません。實にあれは幼稚な到達點に過ぎないと思つてゐます。然し現在の私があれ以外の所に平氣で乘出して行つたら危いと思つてゐます。あすこから徐ろに其先を積み上げて行く外ありません。あなたの道と私の道とは其發足點が別れてゐるにせよ、私があなたの道に立つといふ事は私があなたであり得ないやうに出來憎い事だと思ひます。だから一の思想と云ふものは結局暗示となりさへすればそれで滿足だとさるべきものではないでせうか。

いづれにしてもあなたの私に對する深い御關心にはよろこびを感じてゐます。餘はいづれ御面會の上。草々。

石坂養平氏宛——六月二十四日雨の霽れた朝於東京　〔三九一〕

私の「惜みなく愛は奪ふ」について二回に亙り御深切な御手紙をお惠み下さつたことを難有く思つてゐます。あんな不完全な感想を丁寧にお讀み下さつて早速御意見を與へて下さつた御好意は私を十分に喜ばせ勇氣づけます。御手紙に對して私の思ふ所を更に申述べて見るのは私の好もしい義務で御座います。

「然し私は容易に奪はず、偶ゝ奪ふことあるも、そは與へん爲めに先づ奪ふなりと固く信じてゐます」とあなたが「武郎論」で仰有つた言葉に對しては私は承服が出來なかつたので、私の著書が或はその點に關する私の考を表白してゐはしないかと思つてあれを差上げて見たのでした。愛は與へるといふ固定觀念が行はれてゐる間は動ゝもすると人は惡い意味に於て驕慢とならねば已まないと私は思ひます。心から喜んで與へてゐる時でも、それを本質的に考へると奪つてゐるのだと氣がつく時人は甫めて人生に對して本當に感謝し謙讓になる事が出來、同時に其生活が一元的な純一な方向を取つて進む事が出來るのだと私は思ひます。「與へんが爲めに先づ奪ふ」といふ事は言葉としては或は合理的に考へられますが實際に當つて見るとむづかしい命題だと思ひます。如何しても其人の生活が奪ふことと與へることとの二元に引裂かれねばなりません。而して一人の人に取つてさういふ生活は不可能だと私は感じます。

智情意の分ち方と、私の生命の動向の分ち方とは私はちがつてゐると思つてゐます。智情意は生命の働き方を平面的に分割したものであつて、其間には連絡がありません。然し私の習性、智的、本能的動向なるものは生命の緊張の度によつて延長的に分割したものであつて、三つのものは互に緊密な連絡を保ち、緊張の度によつて一つの動向から他の動向に移り得るものです。だからその區別は固より假定的なものであつて、普通智情意の場合に考へられてゐるやうに截然たるdemarcation line のあるものではありません。その點を御注意下されば本意です。

自由戀愛に關しては私は愛の持續性は主張しますが恒久性はある人が信ずる如くには信じないものである事を豫め御斷

りします。人間に一番大事は愛ですが常住なものでないと思ひます。

で若しあなたのお住ひの地方に起るやうな自由戀愛の悲劇があるとしたら、それを如何したらいゝのでせう。都會人の間に今まで行はれてゐたやうな結婚制度で束縛したらいゝのでせうか。さうしたら彼等の根柢的な戀愛道德は向上し完成するものでせうか。私は私としてさう思ふことが出來ないものであります。あなた御自身が持つてゐられるやうな戀愛に對する觀念をあなたの地方の若い男女が持つてゐない以上は、それを持たせるやうに努めるのがいゝことであつて、外面から都會人を萎縮せしめたやうな結婚制度を強ふべきものではないと私は思ふのです。私の主張が「矛盾を極め誤解を招き易い」と仰有る、其誤解を招き易いといふ點は私も首肯致しますが、矛盾を極めてゐるとは私は毛頭思ふことが出來ません。又誤解といふ事を恐れては私達は一言も物をいふ事が出來ないと思ひますので、此頃は私は思つた事は遠慮なくいふ事にしてゐます。どれ程まで prudence を勘定に入れるかといふ點で恐らくあなたと私とは違つてゐるのでせうが、これはお互が許し合つてお互を守るより仕方がないと思ひます。

　西田さんのお考へは大變有益だと思ひますが「自己をすてゝ」が私には分りません。佛教の所謂小我を捨てゝ位に解すれば分りますが、近代的な意味に於ける自己を捨てゝ、果して何が他に一致し得るのでせう。西田さんも「自己の私を捨てて」と後の方にいつてゐられます。即ち西田さんのいはれるのは小我であることが分ります。

「自己を捨てゝ」と「自己の私を捨てゝ」では大なる逕庭があると思ひます。西田さんによれば無私になる事によつて愛が生き且つ大きくなり深くなるのですが、私によれば愛することが自己を完成し（即ち自己の本體《大我》を小我から篩ひ分け）純粹にするのです。こゝに西田さんと私とに少し考へ方の相違があるのではないかと思ひます。（もとよりこれは引用なさつた文章だけを拜見していつた事で、決して西田さんの哲學的思索全體にわたつていつてゐるのではない事は勿論です。）

一、それでいゝと思ひます。唯私達の愛は未熟で總てのものを價値あるやうに見る事が出來ないだけだと思ひます。ロ

ダンが自然は總て美しい、人が如何に醜いといふものでも自分には美しいといつた言葉などを私は考へずにはゐられません。

二、それは私にも分りません。私にはそれが生の一番目覺しい奇蹟的現象と思へるだけです。實際さうなのだから、事實を事實としていふ外にありません。それに理窟をつける事は純理哲學者の考察に任せておけばいゝと思ひます。「創造本能は本能の作用の結果だ」とは私は申してゐません。愛が奪ふ。奪つた結果が創造だ（創造本能ではなく）と申してゐるのです。だから私に取つては奪ふといふ動向はそのまゝ創造本能であるのだといふのです。

第二信の御質問に對しては私は少し悲しくなりました。我利主義者と人道主義者との御質問は私の考へがあなたに僅かしか受入れられてゐない事を思はせます。我利主義者であらうが人道主義者であらうが自己の眞要求から奪つてゐるのならそれでいゝではありませんか。縱令我利主義と人目からは見られようとも、その人が最後まで自分の奪ふ行爲が肯定出來、死んでも悔なく喜びがあればそれでいゝではありませんか。（そんな事が出來得る事か如何かは別として）。兎に角私は純粹な本能の要求は（本能全體のです。即ち徹底自己によつて裏書きされた本能です）いつでも最上な意味で道德的なものだと思つてゐます。（それが習性的な既定道德と軒輊する場合はいくらもありませうが。）

表現と本質との御言葉は私を考へさせます。さうです。愛は奪ふといはずに、愛は常に自己に與へるものだといつた方がいゝかも知れません。然し自己を築き上げるには他から奪はねばならぬのです。奪ふといふ結果に實際なつてゐるのです。私のカナリヤの例をもう一度お讀み下されば其點ははつきりすると思ひます。

大變亂雜な表現になりましたが以上で私はあなたの御疑點にお答へ出來たつもりでゐます。どうぞ利他利己といふやうな既定概念からあなたの御考察を一度切斷してお考へ下さればうれしく思ひます。

色々勝手を申上げました。

御自愛を祈ります。

一九二〇年

この度の御上京については感謝の言葉がない。問題の解決の直接の結果は起らなかつたが、解決の爲めにどれ丈けの暗示と便宜とを得たかわからない。

純心生活をしてゐながらも漸々行くべき所に引きずられて行く自分を見守ると不思議な氣がする。何等の取柄のない自分が何かの寄與をしようとしてゐるのを見ると神祕な氣がする。自分の內部にゐるものゝ要求にいつはらず自分をまかせて何處までも行つて見よう。それが成就されたら僕の生涯は意味を持つし、失敗したら私の生涯には何物も殘るまい。何か殘すか何物も殘さぬか。かういふ態度で行つて見よう。

偕樂園で兄が支那の黑い扇子が欲しいといつたからそれを買つて去年の秋京都に持つて行きながら兄に屆けなかつた。今年の春も京都に持つて行き、神戶に行く時は側のカバンの中にちやんと入れて置きながら又兄に渡さずに持つて歸つて了つた。八ッ山に行く時も持參しようと思つてゐながら又胴忘れをした。よく〳〵緣のない扇だけれど試みに小包で送る。留守宅は無事だつたかい。皆さんによろしく。先は不取敢御禮まで。

## 原久米太郎氏宛——六月二十五日於麴町　〔三九二〕

## 足助素一氏宛——七月四日　〔三九三〕

胃腸は何んといふ診斷を受けた。別に心配な容體ではなかつたのだらうね。鈍行は祕結に過ぎなかつたのですぐよくなつた。山川氏の歡迎會は一種の運動といつてもいゝ位だつたさうだね。當夜は柳兼子さんの獨唱を聽きに行つた。與謝野夫人に對する第一印象には驚いたね。

いよ〳〵文壇では僕を默殺といふ事に方針をきめたらしい。是れは元より望む所だから僕としては難有いことだが、その代りこれから本は賣れ足が少しはとまると思ふ。その點は豫め御容赦を願ふ。

大分暑くなつた。餘り暑くならぬ中にいゝ借家が見つかるといゝがね。

## 石山太柏氏宛——七月十七日於麹町〔三九四〕

法外の暑氣に相成候處格別御障もなく御勉強の事と奉察候。拜借の幅物は時井氏に依頼致置候間御落手被下候半。永々に相成恐縮に存候。

恐入候得共兼而御願申上置候草花苗少々おすそ分け願度この使さし上候間宜敷願上候。葉鷄頭など御持合せも御座候はば至極に奉存候。なほ薄も少々ほしく御座候が自然生のもの得られ候處お示し被下候はゞ幸甚に御座候。

時節柄折角御自愛專一に相成度候御願のみ。草々頓首。

なほ〳〵副島産そうめん少々入御笑味候。夕涼の料にもなし下され候はゞ仕合に御座候。

## 吹田順助氏宛——八月三日於上總一ノ宮〔三九五〕

今日創作の材料の蒐集をしにこゝまでやつて來ましたが果して思ふやうに出來るかと思つて心配してゐます、明日一日を費して。

あなたのおすまひはどんな風ですか心が、御落付きになりましたか。こゝに「アグネス・ベルナウエル」を持つて來て讀了しました。さすがに老熟期の作だと感心しました。「ゲーテとハイネ」を拜見して妥當な御議論に敬服しました。然しあすこに……以上後便。

## 八木澤善次氏宛——八月六日於麹町〔三九六〕

一寸健康を害されたる由、どうぞくれ〴〵も大事にして下さい。こゝ暫く十分に養生されゝば屹度いゝ事と思ひますか

ら。

藝術家が民衆を如何に見るか。私が答へればかうです。藝術家はいつでも對象が自己です。自己が現代の生活の核心に徹底した時民衆の一人となり民衆として世に訴へなければならぬ。民衆にたり代つてなどいふしやら臭い態度を取つたりしてはそれは道德家、主義者であつて藝術家ではない。そこまで徹底しない間は輕率なことはいはないで今まで徹底し得ただけの範圍で眞面目に物をいつて居ればいゝ。それなら不徹底で不聰明であつてもうそはしないですむ。

濱寺の事は直に妹にさういつてやります。

今夕は佐田の奧さんが見えるとの事。

原との會合。その話。「惜みなく……」の御感想其他を樂しみにしてゐます。

女中の事を色々有りがたう。御家の方には別に御挨拶もしませんが御序の節何卒くれぐれもよろしく。

澤山書債を持つて片端から片付けてゐるので亂筆になつてすみません。

## 足助素一氏宛――八月十六日　〔三九七〕

いよいよ本晴れになつたね。これまでの氣候といつては全くなかつた。我慢にも勉強が出來ないでぶらぶらしてしまつた。おまけに行三が鼻を惡くして輕井澤から治療に歸つて來たので、獨坊ちでは淋しがるので机に向ふのは大體夜だけだつた。鼻はさしたることはない、小此木病院で見てもらつたら鼻粘膜を一寸たゞらしただけだつた。十八日には輕井澤に連れて行つて來る。二十日には歸京のつもり。この間吹田君が尋ねて來てくれて一緒に三河屋で食つた。兄のゐないのが物足らなかつた。湯ケ原に出かけないかといつたら、汽車が大嫌ひだから行く氣になれないとの事だつた。僕も一寸行つて見たいが十八日に輕井澤に行くのでは駄目だ。輕井澤から歸つて來ても兄がそこにゐるやうだつたら行くかも知れない。

近衞君から電話が來て、樂譜の版は今月中に出來るさうだ。一枚分十四五圓かゝつて五六枚になるだらうとの事だつた。

で表紙のデザイン及び印刷は如何するとの事だつたから、兄に相談してから返事すると申し送つておいた。

一、兄がいつぞや百圓位の經費なら無代配付はしてもいゝといつたのは迚も行はれないから、實費で賣るより仕方がないと思ふ。さうなれば十二輯の「書後」に僕が事情を書く事にしたらどんなものだらう。それまでは「三部曲」の重版を見合はせたらあまり延引になるか知らん。十一輯の書後にあれを書いたのは、あの事を相談した時兄が「それはいゝな、そんなら樂譜が出來たら本に入れよう」といつた言葉を漫然と僕が呑込んで書いてしまつたのだ。漫然と呑込んだのも惡いが、兄も少し漫然と物を云つたのはたしかだ。でこれは兩成敗とするより仕方がない。善後の良策を一つ考へてくれ給へ。

二、表紙のデザイン及び組版はこつちでしたがいゝと思ふ。即ち樂譜の版を君に買つて貰つて、あとは全部こつちでやるといふ譯だ。

三、それが面倒なら全部先方にまかせて先方に賣出させるかだ。

右についての兄の考へを今月中に知らして貰ひたい。

兄は又腸胃を惡くしてゐたやうだがもういゝのか。そちらは割合に涼しいとのこと、それに湯に這入りたい時に這入れるのだから凌ぎいゝだらう。

第十三輯は矢張自叙的にした。筆者がその不思議な記錄を旅中に拾ひ出して、それを印刷するといふ結構にした。其記錄を拾ひ出した因緣を小序といふやうな形ではじめにつける。其部分丈けを吹田君に讀んで聞かせたら、大變いゝといつてくれた。新しい形の合奏樂のやうな氣持が出せたら本望だと思つてゐる。今は事件の背景にあたるものを書いてゐる。前に書いておいたものは矢張あまり役に立たない。警句めいたものが使用にたへるだけだ。つぎはぎは矢張大した效なし。

この頃無理強ひにある女から戀愛を強ひられて殆んど閉口してゐる。僕は如何しても其女に同情が持てないし、少しも異性に對する感じを持つことが出來ないのだ。兄のいつかの事件を思ひ出して苦笑する外はない。結局氣の毒ではあるが

投げ出すより仕方がない。中年の女の妄執をつくぐ〵恐ろしいいやなものに思つた。一つは女が不運だつた。創作に頭が向きはじめた時そんな事を持ち出す奴があるものか。この際だから僕の頭は餘計むしやくしやしてしまふのだ。隨分ぽんぽんと彈ね飛ばしてゐる。

弟行郎の嫁さんの事で今日は鎌倉まで行つて來ねばならぬ。夜は著作組合。

東京も秋らしくはなつた。何といつてももう秋だ。曉方などは捨てておいた夜着を求めるために眼が覺める程冷える。此間大石、富田、八木澤等が原の處に押しかけたさうだ。「惜みなく愛は奪ふ」の批評が出たら、原が例の調子でだらう「何しろ有島はまだ臍の下で砂を嚙んでゐないや」といつたので一座が笑ひ崩れたさうだ。あの書に對して一つ大論文を書くともいつてゐたさうだ。そこで「臍の下で砂を嚙んだ兄の大論文といふのを大に期待してゐるよ」と書いてやつたら、少しまごついた返事をよこしてゐた。

では今日はこれで失敬。御大事に。

原田はまだ出て來ない。

おくら、お花、お玉の諸孃へよろしく。

## 木田金次郎氏宛――八月二十七日於東京　〔三九八〕

新聞にまで出てしまつたからもう何もかも白狀します。實はあなたの油繪を二科會に出品したのです。處がそれが落選に遇つたのです。ほんとに濟まない事をしたと後悔してゐます。然しそれがいゝ意志から出た事であるのを思つて我慢して下さい。あれが出たらあなたが畫を勉强する上に周圍の方々から都合のいゝ取扱ひを受けられるだらうと思つたのでした。當選だつて落選だつてあてにはなりませんけれども兎に角その點で當選すれば都合がいゝと思つたのでした。呉々も許して下さい。一應あなたの方に御返送します。

最近の作が（柳のでもよし）出來たら又見せて下さい。忙しいので一筆、
祈御健康。

木田金次郎氏宛――九日二日於東京　（三九九）

御手紙難有う。僕は決してあなたに失望などはしてゐません。たゞ要もない茶目をやつたのをあなたにお氣の毒に思つただけですが御手紙をうけて安心しました。昨日から二科院展が初まりました。驚くには足りません。たゞ院展附屬の泰西の作品の展覽會の方は是非々々あなたに見せたいやうな氣になります。ロダンのものなど素晴しい。「考へる男」、「鼻のかけた男」などの前に行くと全く頭があがらなくなります。作者の人格と自然とがぴつたり隙間なく溶け合つてゐます。

淺井みつゐ氏宛――九月十五日於東京　（四〇〇）

驛路の茅の軒端の草の花秋さりくればしをれ行くかも
草の花數はあれども鈴蟲の宿となるてふ露草の花
おのがつむましろき絲の中にして蠶の如くにもわれは死なまし

足助素一氏宛――九月十五日　（四〇一）

こちらも無沙汰ながら、兄の方からの消息もきかないので一寸心細いやうな氣がし出した。御堅固で御暮しの事とは思つてゐる。
創作は出來ない出來ない。今度位苦しんだことはない。而して今度位出來ないことはない。何んだか僕の力はもう終焉

に來たのではないかと思つて淋しくさへなる。原稿を燒却して旅に出ようとする誘惑に幾度か襲はれる。心持がすつかりぐれてしまつた。

新人會の講演は矢張承諾してしまつた。實際自分の弱さに呆れてしまふ。而して十月初旬に二つの講演。

新島さんが「惜みなく……」の評をして兄の所まで送つたといつて來た。此使のものに渡してくれ給へ。

## 足助素一氏宛――九月十七日　〔四〇二〕

他人に自分の作物の價値を判定して貰はうといふ心になつたその事が僕の創作力の退縮を明かに物語つてゐる。それを思ふと情けない。僕は又自分の生活の或は思想の變換期に來たのではないかとも感じてゐる。その渡しを渡つてしまはなければ此衰退は治らないのではないかとも思ふ。何しろ底知らぬ淋しさを感ずる。

では兄には誠に濟まないけれども「旅する心」を纏めさせて貰はう。明日からあれを原稿紙に訂正しながら書きなほす。その位のことは十分に出來ると思つてゐる。本當に濟まなく思ふが何卒推恕してくれ給へ。

兄の感想を讀んで大分安心した。全く自分では五里霧中になつてゐたのだから。あれは然し今晩完成する。どうも難有う。今日は母と子供とを連れて目黑に栗飯を食ひにいつた。

## 八木澤善次氏宛――九月二十一日　〔四〇三〕

私には depression が來ました。兄が聖餐に其徴が見えるといはれたが私自身はさうも思はなかつたけれども、それはより明かに讀者なる兄に映じそめたのかも知れません。兎に角私は半成の原稿を燒却すべき悲境に陷つた。「運命の訴」は將來出來上るか否かは知らない。

兎に角中止します。「旅する心」をつなぎに出します。今から讀みなほすと實に下らないものだけれども。祈御健在。

## 木田金次郎氏宛――九月二十五日 〔四〇四〕

素描十二枚一昨日落手と共に拜見、御進境に敬服しました。以前のものに比ぶればあなたの個性的見地が更に擴大され深められてゐるのを私でも看過する事が出來ませぬ。この秋に描かれるといふ纒つた御作品に對して待遠しく思つてゐます。北海道の柳――それを十二枚の畫が殘らず忠實に語つてゐます。裏白の葉が秋風にひるがへりつゝその梢がたわゝに起伏する樣は髣髴として私の眼に現はれます。又其樹全體に現はれる複雜な明暗もあなたは確實に捕へてゐられる事を知ります。ロダンが「一つの手なり一つの足なりを征服し盡すまで習作せよ」といつた言葉をあなたの態度に見ることの出來るのは友としてのよろこびです。

それに引かへ私はつまづきました。創作を中途で擲たねばならぬはめになりました。私には今何の力も感ぜられません。こんなみじめな目に遇つたことは生れてから無いといつていゝでせう。私は今何もしないでぼんやりしてゐます。

北海道には十月の十一二日頃に行くことになると思ひます。この間函館の山本行夫君が尋ねて來ました。初對面ではありますがいゝ靑年だと思ひます。では近い中の再會を期しつゝ。

## 吹田順助氏宛――十月一日於東京 〔四〇五〕

こちらこそ意外の御無沙汰申上げてゐました。全く今度といふ今度は打ちのめされました。今までの仕事に對する少しばかりの自信まで失はうとしてしまつてゐます。是れから先き甦生が出來ればよし、さもなければこれで私の生涯はお仕舞です。

北海道には十一二日に發ちたいと思つてゐますから多分行きがけにおより致すことになると思ひます。その節お目にかかつて萬事申上げることにします。あなたにも或る危機が臨んでゐることを知つておそれを持ちます。

萬望その難關を見事に突きぬけられるやう祈上げます。

## 足助素一氏宛——十一月十四日　〔四〇六〕

お蔭で「旅する心」は挿繪も豫期の如く出來たことをうれしく思つてゐる。唯獻本の辭の活字の組方はどうしても我慢が出來ない。獻げる人の名をあんなに下の方に印刷したのは如何してもいやだ。出來るならあの頁だけは刷り直していたゞきたいが、それが出來ない相談ならあの頁は裏表とも割愛していたゞく事にしたい。是れは是非お願ひする。僕の原稿にはあゝは書いてなかつたと思ふ。

長與君からは「三部曲」の印税寄附に對する挨拶が來た。

御面會の上お話するのだが母が臥床中であるのと、行三が今夜突然發熱して臥てゐるので明日は外出がむづかしいと思ふから右書面で貴意を得て置く。尤も製本出來の分に對しては訂正して下さらないでもいゝ。

行三の熱は一度吐いてから見る〳〵降下したから左程心配する性質のものではないと思ふ。

## 大島豐氏宛——十一月十八日　〔四〇七〕

こんな原稿用紙に音信を認めて失敬。

不相變御無沙汰をしましたが夏休暇中に書いて下さつた非常に綿密な御手紙で兄の動靜を知る事が出來て一方ならず喜ばされました。兄の米國行が愈ゝ徒爾でなかつたのを深く感じさせます。萬望その調子で十分に勉强して歸つてお出なさい。私は今までの中に兄に對してほどがみ〳〵と叱りつけた人を知りません。然しそれは畢竟兄との因緣を語るものだといつていゝと思ひます。

兄の讀んで居られる書物の種類から考へて見て兄は決して無駄な事はして居られないと思ひますが、同時に最も緊急な

現下の問題に觸れて居られる事が稍ゝ足りないといふ感がないでもありません。そちらで勉强して居られる間若し餘裕があるなら總ての餘裕を用ゐて社會問題を研究なさることが必要だと思ひます。社會問題がどれ程の程度まで進んで來てゐるか、それがそこまで來るには如何なる事情が働いたのか。その事情なるものは必至的なものであるのか、時代錯誤であるのか。將來の社會問題はどこに落付く先きを見出すであらうか。日本は此問題の渦の中にあつて如何なる位置を占め如何なる反應を呈するだらうか。……かゝる問題に對しては兄は十分の考案をめぐらし歸朝の日には一定の識見を持つ事が出來るまでになつてゐないと、浦島が白髮にして故郷に歸來した悲慘事を見なければならぬと思ひます。總ての混雜の中にも日本に於てはある眞面目な力が靜かに力强く働きつゝあります。而して其力は驚くべき進步した思想によつて導かれてゐます。少しでも油斷してゐればすぐにも其力において行かれるおそれがあります。米國に居ながら常にこの力の動き方につれて硏究を續けて行くといふ事は餘程細心な注意を要すると思ひます。洋行して歸つてとんだ馬鹿になつてしまつてゐるやうな人を私達は隨分尠からず見出します。この點に關してはくれぐれも自戒して下さい。

私の仕事をいへば先づさしたる故障なく進んでは居ますが、この夏に至つてある危機に臨んだことは爭はれません。私は自分の是れまでの仕事に對して妙に自信を失ひはじめました。將來に對しても果してどんどん生長して行く生長力があるか無いかを疑ふやうになりました。而して百枚程書きおろした創作を棄却してしまひました。私は今落潮に居ます。然し少々づゝではあるが恢復しつゝあるやうです。來年にでもなつたなら又仕事を始める機會も起りませうか。此秋の同志社の講演も休む事になりました。

あなたが洋行して以來の私の著作集は何等かの方面からあなたの御手許に行つてゐるのですか。私は贈らなければならぬ處が多い爲めに遂今日まであなたには送らずに居たと思ひます。「三部曲」と「惜みなく愛は奪ふ」と「旅する心」とを出しました。「愛は奪ふ」は割合諸方面から眞面目な反響を受けました。ある方面からは中々ひどい非難も被りました。然し私は今でもあれを書いた事を後悔しては居ません。あの書物はあれで何事をか爲しつゝあると思つてゐます。

一九二〇年

私の家では幸に皆が頑健な方です。私も昨今は健康を囘復しました。壬生馬が肺尖を犯されたがこれもあらかたよくなりました。その娘は疫痢になつて一時は危篤と警戒されましたがこれも奇蹟のやうに快くなりました。今私の處に早川君の友達なる河崎久輔氏(兄も御存じの筈)が子供の教育旁〻滯在してゐます。くれぐれも御自愛を祈上げます。草々。

## 足助素一氏宛——十一月十九日夕於湯ヶ原伊藤屋　〔四〇八〕

今朝「旅する心」をたしかに落手した。どうも難有う。子供の病氣を早く癒す爲め、母の看護疲れを慰める爲めこゝに來た。尤も母は二三日おくれて來ることになるだらう。こゝは紅葉はまだ三分といふ處だ。番頭君はじめ舊態依然。二十三日には歸京のつもり故會場でお目にかゝる。

## 原久米太郎氏宛——十二月十二日於麴町　〔四〇九〕

其後は慮外の御無沙汰をして相すまぬ。京都に來てゐられる間に奧さんが安產をなさつた事をお目出度事とは思ひながら遂々御祝ひも申さなかつたと思ふ。爾後御母子共御健在か。

嘉憲君は嘉憲君で先づ身がためも出來るし兄の所もあの不幸以來の暗雲を一掃されたといふものだ。全く兄も是れまで殆ど三人前位の奮鬪をした。而して一歩々々土臺をふみかためて來た。そのいきさつを知悉してゐるのは恐らく僕位のものではなからうか。それを囘顧して今日の兄を思ふと少し感傷的にさへなる。兄はよく自分の生活に對して不足を云はれるがその必要はない。男子としての仕事は立派に仕遂げつゝある。決してやきもきする事はないと思ふよ。

先月の京都の旅から歸つて來ると子供が三人共水痘にかゝつてしまつてそれが膿痘疹といふ事になつて中々腫物がなほらない。留守中母が氣苦勞をしたのでこれも些か弱り氣味だつたので一同を引つれて湯ヶ原に出懸けた譯だつた。幸に月末には一同快復したので歸京した。處が東京は何しろ急に寒くなつたので母は怪我を昔した脚が痛むやら、三子は交るぐ

風邪の氣味になるやらで何か愚圖々々してゐる。然しいづれもさしたる事ではないから御放念を願ふ。僕は至て頑健で日日來客や原稿書きやらに働いてゐる。講演の筆記を持込まれるのだが無責任な筆記なものだから創作と同じだけの手間がいるのだ。新たに書いたものとしては「改造」の新年號に投じたもの位だ。

倉田百三氏からいゝ手紙を貰つた。氏も大森に來てから思ひ切つて生活の改造をやつたらしい。奥さんと子供とは離居して今は妹さんと二人で暮してゐる。僕に折入つて頼みたい事があるとの事だがまだ訪問しないでゐる。兄との會見を好意を以て報じて來てゐた。白樺劇團でやつた同氏の「歌はぬ人々」は見ずにしまつた。

年內も餘日がなくなつたが兄の仕事の方は自然多忙な事と思ふ。寒さの折柄折角自愛してくれ。

竹崎君からあれ以來音信なし。兄が大に何かいつたさうだがそれには及ばなかつた。あゝ行くのは竹崎式だ。あゝ行かないと竹崎の面目は躍如としない。足助は無事。高松洋行の爲め上京中、二十六七日には兄を訪問するとの事だつた。

では失敬。

## 吹田順助氏宛——十二月十五日於東京　〔四一〇〕

御手紙をいたゞいて以來御無沙汰してしまひました。あれに書かれたあなたの御心境は悲しいものでした。然しそれは私のそれと甚だ似かよつたものであつただけ餘計感じました。要するに私も何等の仕事もなし得ず茫然と暮して來たやうなものです。人の生命に本當に喰ひ入るためにはもつとどうかした道を通らねばならぬことを此頃殊更ら思はされます。

この間淸水稅關の一下級官吏だと名のる人から「愛は奪ふ」の綿密な批評を受けましたが、肺腑を射ぬかれたやうに感じた所が澤山あつた中に「愛してゐる」といふ事と「愛するのはいゝ事だ」といふのとの間には大差があるといふ言葉は殊に強くひゞきました。私の體驗がそこに大きな不足を持つてゐる事を見貫かれたやうに思ひました。まだ〳〵駄目です。

この頃は殆んど何にもしてゐないといつていゝ位です。唯僅に正月の「改造」に一感想文を投じたのみです。

あなたの上を考へると何かしらセンティメンタルになります。この冬は東京には來られないのですか。もつとお話をして見たい氣持ちになつてゐます。皆樣は御無事ですか。あなたが家を出られる時泣いてあとを追つた二男君の事が思ひ出されます。足助は頭を惡がつてゐます。出版業がいやになつたともいつてゐます。無理のない事だと思ひます。
明日は倉田氏を訪問しようかと考へてゐます。あの人は生活に大きな變化を與へたやうです。その勇猛な姿は恐ろしい程です。もう雪がつみましたか。鹿兒島からすると暗い事だと思ひます。祈御健全。

## 有島生馬氏宛――十二月十九日於麹町　（四一一）

御細書多謝。御一同の清福を知つてこの上なくよろこんでゐます。仕事もそろ〱はいゝかも知れないが、十分用心しながらなさる事を祈ってやみません。母上は多分明後日貴家に參られる事と思ひます。今朝は敏、行三を連れて猿樂町に行きました。野口の橋辨慶でしたが、始めて見るものですが、牛若が舞臺の前方に出て五條橋の上で休みこんでゐる心持で、獨り月を見ながら佇んでゐる心持で、永く舞臺に佇立し（薄衣をかづけるまゝ）拍子のみが靜かにしてゐる情景は素晴らしいものだと思ひました。
仕事の事につき懇々の御意見は多謝します。毎年著作集を二篇づゝ出す位の仕事をして居たいと思つて、春には「惜みなく愛は奪ふ」を出しました。而して秋出す爲めに小說一篇をかきかけて失敗に終つたのです。來年になつたら何か書けるかも知れぬと思つてゐますが、目下の心の狀態でははつきり出來るか如何か判りません。
量に於てホヰットマンやイブセンの書いた程の物はもう書いてしまつたと思ひますが、質に於て何者を爲し了したかと考へるとつひ筆が重くなつてしまふのです。是迄の事を續けて盛名を博する位なら筆を折つた方がいゝかとも思ふのです。
少々がらに過ぎた事を云つてしまつたかも知れません。
何れは又其中御邪魔に出た時にゆづります。今日は東京でも往來を歩くと汗ばむ程です。

## 木田金次郎氏宛——十二月二十二日於東京　（四一二）

愈々年も逼りました。御地は嘸寒い事でせう。函館の山本氏からの通信によればあなたは御忙しい爲めに函館にお出かけも出來ない由。忙しいばかりでもなく御一家の生活を目前にしては出かけられる氣にもなれないのだとは思ひますが、それでも此寒空に海上に激働せられる兄の上を思ふと、かうして火鉢になどあたつて手紙を書いてゐるのがためらはれます。やうやくの事で御約束を果してあなたの畫を鬮場包子氏に郵送しました。電信柱が右側に近くある風景です。鬮場君から非常によろこんだ手紙が來て、私からも序の節御禮をいふやうにとの事でした。

私はこの頃本當に惡い生活をしてゐます。仕事に手がつきません。毎日悔の多い日が送られてゐます。仕方がないから機會のある毎にホヰットマンの詩を少しづゝ譯して發表することにしてゐます。而してその中に本當の力が歸つて來てくれるやうにと祈つてゐます。ではいゝ年をお迎へなさい。

## 有島生馬氏宛——十二月二十四日　（四一三）

先達の御細書であなたの御心持はよく分りました。染々仰有ることを感銘します。この半年は實際やゝ捨鉢の氣味で暮してゐたのです。

「美術之秋」も本屋から送つて來ました。難有う。あの中にはまだ讀まないものもあるので披見を樂しんでゐます。

昨日は母上と小田原に行かれたことによつて私は行くのをやめました。而して園田、山内、山本をたづねました。熱海からは安着の電報が來ました。仕事が段々御出來になる由重疊に思つてゐますが、過度に亙らぬやうに祈ります。

横濱からの御菓子も難有う。行光も今日から休みになりましたから其中御邪魔に出かけたいと思つてゐます。

信子さんから御手紙を難有う。

一九二〇年

# 一九二一年

## 森義雄氏宛──一月四日於東京 〔四一四〕

讀者からの同情と推賞とを常にある警戒の心を以て受けようとしてゐる私も、あなたからの御手紙には手放しに感激せずにはゐられません。本當に難有う御座います。あなたのやうな讀者に對して私が怠慢であることは濟まない事です。七八年前から親しい友には話して解決したいと思つてゐたことが私の下らない殉情的な躊躇から未だに解決されずにあるのが禍根となつて私は行きつまつてゐるのです。然しこの難關さへ切りぬければ私の傷口からは新たに流れ出る生きた赤い血がまだ相當に殘つてゐると思ひます。どうぞ其時の來るのを待つて下さい。多分私はあなたの期待に背かないことが出來ます。

而してあなたの御生活の上にも最上のものが實現されるやう祈上げます。

## 野口幽香氏宛──一月四日於東京 〔四一五〕

この間はよくこそおたづね下され又よくこそゆつくり話してゐて下さいました。あの日の小さい樂しい團欒は記憶に永く殘るものだと思ひます。妹なども常に顏をあはせながらもあれ程ゆつくり談りあつた事はたんとありません。人は仕事の爲めに餘りわづらはされ過ぎて暮してゐるやうです。

あなたは私の平凡振りから「或女」などの生れたのを不思議なもののやうに思はれたやうでしたが、お恥しい話ですが私には「或女」以外にも毒血がまだ〳〵拔け切れません。私の傷口はまだ〳〵色々なものを吐き出すだらうと自分ながらいやな怖しい氣もします。然し人生をありのまゝに實感せねばならぬやうに生みつけられた一人の文學者にとつてはこれ

こそ納めねばならぬ第一の貢です。人生を如實に見た上でそれに價値がなければ彌縫してゐた所が結局は無價値であらねばならぬのですから。

信子さんといふお孃さんの居られたのも愉快でした。あのお子さんにはたしかに何か力强いものがひそんでゐる事を感じさせられます。その方の將來が最上の道によつて導かれるやうに祈つてゐます。その方の御母上にも御序の節にはよろしく御傳へを願ひます。

長男と二人ぎりであのだゞつ廣い住居は淋しいものでありますが又極めてしめやかな樂しいものであります。「クオーレ」を十四五枚讀んでやつてゐる中に今は寢につきました。

## 吹田順助氏宛――一月五日於東京　（四一六）

とう〳〵この冬は御上京なさらなかつたのですね、多少期待してゐましたのに。次三男は母と熱海に行つてゐますので、私は長男と二人だけでこの地で靜かな正月をしました。用の客は每日二三人づゝ押しかけて來て困りはてる程でしたが正月になつて見ると一人として訪問して來る人もありません（足助は歸國してゐるのです）自分がわざと造つて來た孤獨の生活をしみ〴〵思はされました。遊び友達といふものを一人も持ち得ない私自身を少し憐んでやりたい氣持にさへなりました。主義の上の同志といふものも仕事の上の仲間といふものも一人も作らずにゐる自分を多少痛快に思ふ氣持も添はります。この孤獨の境地から私は力を得て行かなければならぬと思つてゐます。

恐ろしい理窟になりました。今朝御心入の筋子がとゞきました。兄が私の嗜好を覺えてゐて下さつた事が何よりうれしくつて早速開かして朝食の膳に上せました。北海道のものより小味でうまく賞味しました。御芳志の程殊にありがたく存じます。

山形の冬は久しく暖國にゐられた兄には可なりこたへるのではありませんか。御老人、御子供衆は如何ですか。皆樣折

角御大事になさるやう祈上げます。

## 茂木由子氏宛――一月九日於東京　〔四一七〕

この間一便をさし上げておきましたのにそれを御落手下さらなかつたのでせうか。その時五六通の手紙を同時に投函致しましたがそれに對してどこからも返事が來ないので少し心細く思つてゐる處でした。御配慮下さいました風邪は九日から鎌倉の弟の許に厄介になつてゐたお蔭で快癒して十一日に歸京しました。爾後至而頑健に暮してゐますから幸に御放念下さるやう願ひます。あなたには別におさはり御座いませんか。昨日は雪の面白さに學校をずる休みをした末子と共に下街を歩きまはりました。

仕事をし度くてたまらないのですが、何かと俗事にさまたげられて困ります。死亡だ、病人だ、結婚だ、就職だ、原稿の批評だ何んだかだ……ひいきにして下さるのは難有いが……尤も私も惡いのです。徹底的に仕事に忠實であればもつと人が惡くなつていゝ筈なのです。其權利がある筈なのですが。寒さの折柄折角おいとひを祈上げます。御芳情を感謝しつゝ。

## 淺井三井氏宛――一月十三日　〔四一八〕

年は來ぬ森閑として雪つめる家にこもれる親子の上に

子は獨り庭におりゐて球遊ぶ父は默して机に向ふ

物言へば脣寒し言はざれば心火となるあさましき身よ

二子が昨日熱海から歸つて來たので急ににぎやかになりました。正月がはじめて來たやうです。今朝は學校に行くのに泣くやら笑ふやら。

## 有島生馬氏宛――一月十六日於東京　〔四一九〕

趙旦の愛の朝に候。子供達は庭上にても子犬の如く戯れ居候。先日來おなやみの宿熱も既に御快癒に候や。御一周忌には寒雨にて信子君おさはり無之候ひしや。あき子君は其後如何や乍蔭御案申上居候。平安御起居の程祈上候。

今朝東京病院におまささん御見舞致候處大分やつれて見え候得共經過は順當の樣子に付御安意可相成、反之西居氏は解熱後頭の加減よろしからず觀念錯誤の事屢〻有之候由に而氣の毒に候得共一時的の事ならんと存候。おまささんは段々輕快の由重疊、御序の節は宜敷願上候。

今日午後は敏、行三と共に下町に散策相試候。行光は試合の爲近所に出懸け申候。

此頃は支那古代思想御淵源の由自然收穫多き事と存上候。何れお目にかゝり候節萬々伺可申候。

時節柄折角御自愛相成度。御返事旁〻。草々頓首。

信子さんに一寸御依頼申上たが小生の「旅する心」の畫稿（校正刷にあらず）御所持ならば其旨一寸御報知にあづかり度。田中方にては御所持なりとの御返事を得たりと申居候次第に候が不審に候間改めて伺置候。

## 鯉江もと子、谷川徹三兩氏宛――一月十七日於東京　〔四二〇〕

御姉上よりは大變いゝ御手紙を難有う。徹三兄からは何のおたよりもない事を少し淋しく思はないではありませんが、手紙の書けない兄の御氣持も私にはわかるやうに思へますから不平には感じません。兄はいつでも自分の言葉に壓迫されてゐる人だから、自分の言葉が少しでも自分の行爲を魁けたなと思ふともう自分をひどく責めてゐる人だから。然しもう兄の學校生活の單調も末近くなつたと思ひます。過去の苦味をかみしめてのみゐずに新しいほがらかな世界に出ていらつしやい。兄の生くべき世界は廣く遠く美しく殘されてゐるといふ事をしつかり意識して下さい。これは私の妄想でもなく

誇大でもありません。

御姉上のおくらしの模樣は御細書で知盡することが出來てうれしく存上げます。御姉弟の中に何にも隔てなくお暮しの程を切に祈上げます。御二人があのやうに暮されるといふ事は世にもめぐまれた生活だと思ひます。多くの人達の味氣ない生活を一寸でも考へて御覽なさい。

始終御無沙汰してゐる私も惡いけれども御二人の事は折々心の中を往來してゐます、而して幸福を祈上げてゐます。

この春休には多分三子と共に京都に參るでせう。三子の頭にあの靜かな舊都の有樣を見せておきたい爲です。其後私だけが京都に殘つて同志社で講演する事になると思つてゐます。その時は又ゆつくりお話も出來ませうが。而して其時は徽三兄は學府の或る種の桎梏から解放されて御自分の仕事のみに沒頭し得る境界になられるかと思ひます。

再び御兩人の上に幸福を。

## 山本行雄氏宛――一月十九日於東京　〔四二一〕

仕事に齷齪してゐた爲めに御返事を長々おこたつてゐた事をお許し下さい。武者君の下に居る人達が何んと申してもかまはぬ事、武者君は今頃は私の心がわかつてくれ、私は始めから武者君の心持はよく分つてゐる積りなので、私には何の問題も殘つてゐはしないのです。私の武者君の事業に對する意見はよくあなたもわかつてゐて下さると思ひます。新しい村の仕事をあなたが御助けなさらうとの御氣持も非常によいものだと私は思つてゐます。決して私に御遠慮なく續行なされん事を希望します。武者に行けば私に來るのは矛盾だといふやうな考へを持つてゐる人があつたら武者君はむしろそれを悲しむだらうと私は思つてゐます。少しも御煩慮なさる餘地のある問題ではないではありませんか。

もつと書きたいものですが不相變忙しく働いてゐますから必要だけの事を申して今度は御免を蒙ります。あなたの御仕事の上に最上の幸を祈上げます。

山内の所へあなたの畫はとゞいてゐるさうですが、彼も病人やら芝居の監督やらで此頃暫く遇ひませんからまだ私は落手してゐません。然しあらかじめ御禮を申上げておきます。

## 牧山正彦氏宛――二月九日於東京　〔四二二〕

又々御病臥の由折角御用心を祈上げます。私は幸にして如例頑健至極この頃は割合によく勉强してゐます。阿部氏の處は決して急ぐ譯ではありません。氏のダンテとニーチエの研究を新小說で讀みましたが、中々綿密な研究でちつと退屈しました。今月號の後篇で早く結論を知りたいと思つてゐます。小說なんかばかりやつてゐると、考證といふものは人に示すものではなく結論だけでいへばいゝものだと實にグウタラな考などを起して仕樣がありません。是は自分ながら惡い事だと思つてゐます。

吹田氏のものは Humor ではなく輕い Selbstironie と見たら如何です。さうすると吹田君らしいものが豐かに見えて來ると思ふのですが。私はまだ新たには讀み返しては見ませんが。

御大事になさい。而して早く御全快なさい。度々そんな病氣をやるのは全くよくないことです。草々。

## 井上智、美名兩氏宛――二月十一日於東京　〔四二三〕

度々の御音信を難有ら御座います。こちらからは慮外の御疎音になつてゐました。今日私の留守中にお妹御さんがお出で下さつて豆精をおとゞけ下さいました。「井上より」と紙の上に書いてあつたのであなたがたが出張か何かで東京に來られたのではないかと一寸驚かされました。實に美しいものですね。丁度三人子供が居たので銘々それを火であぶると燒けてふくらむので、食べて見ると餅のやうな味がするので、面白がつても一本々々といくつも食べました。

今日は此地は又冴えかへつて氷雨が降つてゐます。私も子供も今年は幸に一度も病氣をしません。私も忙しく働いてゐ

ます。唯仕事らしい仕事の出來ないのは心許なく思ひます。ホヰットマンの詩は一月號の新潮に出しておきましたが見てくれましたか。兎に角意味だけは分るかと思ひます。十四五日頃から一篇の創作にかゝりたいと念じてゐます。多分此度は何か成功するだらうと考へてゐます。

議會が開けて何かやつてゐますがあんな事に頭を向ける馬鹿は當世にないやうです。政治と民衆とがこれ位離れ〳〵になれば世話はありません。

その外何んにも心を驚かすやうな事中央にはなし。

お妹御さんがおみやげとして美しい花を下さいました。豆精の淸純と共に私を喜ばせた事無上です。御禮を申したいと思ひますがお名を忘れました。だからお便りの節是非忘れないで私の感謝を御披露下さい。

難有し何事も難有しわが身には過ぎたるばかり難有き哉

## 木田金次郎氏宛――二月十三日於東京　〔四二四〕

この地は稍々春めいて來ましたが北海道はまだ中々寒くて時には吹雪も見舞つてゐるかと察します。お變りもありませんか。漁事の方は如何です。先日の難船の事は今思つても戰慄を感じます。今後は再びあのやうな冒險が起らないやうにと祈つてゐます。

福田久道といふ未知の人から手紙を受けました。最近「ミレー」傳の詳譯を出版するのださうで、それがまだ白樺に連載されてゐた頃私が何かいつたのを傳聞して其書に挿むべき寫眞の複製を添つてくれられました。ミレーの寫眞といふものは私もはじめて見たので非常によろこばしく直ちに感謝の意を表しておきました。氏は同時にあなたにも一枚をさし上げてくれといつて一枚を封入して來ましたから御覽に入れます。何といふ立派な表情を彼は持つてゐたのでせう。生れながらにして人の先驅者たるべき顏形に加へて彼の素晴しい自己鍛錬の跡が素晴しい鑿のあとのやうに其額に刻まれてゐま

す。あの顏一つでも私達は一つの寶を授かつたといつていゝかと思ひます。

私も相當に働いてゐます。其中一二の創作をあなたにも見ていたゞく機會が來るかと思つてゐます。函館の山本君からも時々便りをもらひます。

御大事になさい。

## 吹田順助氏宛——二月十五日於東京 〔四二五〕

其後は一向御無沙汰してゐましたが皆さん御變りありませんか。貴地の寒さもこの頃は少しはゆるんだ事とお察しします。東京は今年は存外に暖いせゐか病人も至而少ないやうで私の所のものも一人殘らず元氣です。三兒は毎日ベースボールに餘念なく暮してゐます。

あなたの御作が「大觀」に出た事は新聞で承知しましたが今月は如何いふものか送つてくれなかつたので、讀んでから讀んでからと思つてゐる中に遂今日になつてしまひました。私の讀んだ二三の新聞はいづれも御作品に對していゝ評はしてゐませんでした。その評はどうも類のかはつたものに對してフオーカスが合はない所から來てゐると思ひます。全くこの頃の新聞評ほど蕪雜なものはありません。私はあまり腹が立つたから時事に少しばかり皮肉を書いてしまひました。私は思ひます。あなたは決して彼等のいふ所を顧慮する所なくどん〳〵創作を續けられるがいゝと思ひます。尤もいふべき事がないのに何か書かねばならぬといふ氣で書くのは間違つてゐますが、書くものがある以上是非遠慮なく書き續けていたゞきたいと思ひます。あの作品の中に殊に色強く現はれはじめたあなたの特色は幾篇かの習作の後に始めて成熟する種類のものだと私は信じます。是非失望する事なく働かれんことを祈つてやみません。

此頃讀んだものゝ中では中川一政氏の「見知らぬ人」が會心のものでした。あの純眞さは近頃類のないものだと思ひます。エルマンといふ人が來ました。東京の新人連は大騷ぎをしてゐるやうです。私も人並みに明日は見に行つて來ようと思

つてゐます。聞きに行くといふ柄でないから見に行くのです。この頃月に一囘づゝ西洋音樂の理論の大體を若い文學士から聞いてゐます。中々むづかしいが面白く思ひます。尤も其文學士にいはせると私の短歌一つを讀んだばかりで私には動的な神經がないのが知れるから音樂は到底理解出來ないといふ事です。少し悲觀してゐます。

東京の中でも所によると梅の咲きはじめた所があります。鎌倉あたりでは椿が八分です。蛙の鳴聲の最初のものをこの間一聲二聲聞きました。春が來るなと思つたら、貧乏人が借金取りの來るのを考へた時のやうにわくわくした氣持になりました。

でも此兩三日やうやく創作氣分に進み入つたやうです。明日あたりから本氣に試み始めませう。

足助は湯ヶ原に行つてゐます。近來每午後微熱があつたので出懸けたのです。轉地後は熱は殆んどないさうです。仙臺で學生が私の「死と其の前後」をやつたとかで佐久間氏と連名で葉書をくれました。東京の有樂座の聖餐は思ふ存分失敗したやうです。

## 與謝野晶子氏宛——二月十九日於東京　〔四二六〕

先夜は一寸御姿を見たと思ふ中にもうお見えにならなくなられたのは早々とお歸りになつたので御座いますか。御子様方の中に御病氣でもおありになつたのでは御座いませんでしたか。今朝は又御歌集をこの上もなく難有う御座いました。生馬があなたのお歌は此頃になつて今の世の誰もが云ひ現はし得ぬ境に谿ゝお進み入りになると感嘆した言葉を私もいふべきなのだと存じました。

何やら物に拘つて物の書けなくなつた此頃の私を憐れむにつけて泉のやうなあなたの御胸を殊更ら羨敷存じ上げます。

生馬夫婦は今朝發つて鎌倉にかへりました。

—三月三日　〔四二七〕

御無沙汰。御見舞を難有う。とう〳〵風邪が侵入して來たやうですが幸に一體に輕く無熱の狀態ですから咳の取れるやうに手あてをして學校を休ませてゐます。もう行三もよろしいし敏も明日あたりは恢復すると思ひますから御安心下さい。向井が少し頑固なのをやつてゐます。そちらも萬望御大事になさいまし。如何にも不順ですから。

「嘘の果」は白狀すると私には息苦しい氣がして讀み續けられないのです。此前の消息にも毒藥が來たやうだと書いたと思ひますが、矢張そんな氣がします。熾烈な芳芬の爲めに眼がくらむやうな氣持ちになるのです。田中氏があれを面白いといつて讀んだのが私には第一不可解です。もう少し年を取つて私の情熱が落付いてからならあれを樂しみ讀むことが出來るかと思ひます。

「廢屋」も拜見しました。文章に變化が來た事が第一眼につきます。立派なものだと感じました。唯あれにはスケッチとしては構圖があり過ぎ、小說としては平叙が多きに過ぎるといふ嫌はないでせうか。

藤森氏の評には思はず眉を寄せたり笑つたりしてしまひました。大に急所をつかれた氣がします。あの文から思ひついて一つ小篇を書いて見ようかと思つてゐます。「口の中の菓子」に鎌倉海岸の半溺死事件を對照させて。

この月はバイロンの硏究に沒頭するのです。あの人の時代は私が考へてゐた以上に日本の目下に似かよつてゐるやうに見えます。そこに一人の詩人を點出するのは相當興味のあることに思へます。

今日一寸「或女」の後篇を讀み返へして自分ながら今では一寸書けさうもないと思ふやうないゝ所を見出したと共に文章の下手なのには驚きました。實際書いて見たら是れからでも矢張あんなものしか書けないか知れないけれども少し此頃は上手になつたらうかと思つてゐます。

今敏の汗を見たら出て居ませんでした。發汗劑をのませて見たのです。これから寢ます。御機嫌よう。

## 佐藤隆三夫妻、有島行郎氏宛――三月五日於東京　〔四二八〕

昨日私の誕生日は過ぎました。今日は又冴え返つて寒い風が吹き、二三日前から流行風邪にやられた敏が少し熱を出して隣りの部屋に臥てゐます。戸川が今其部屋の破障子をつくろつてゐます。私は仕事に忙しいので敏の爲めに看護婦を頼むことにしました。其中にやつて來るのでせう。例の野田醫師も來るでせう。

午後からは愛子が來て子供を上野の動物園に伴れて行つてくれるとかいつてゐました。私は午後から阿部次郎氏を訪ねて思想上の意見の交換をする事になつてゐます。敏の部屋で蒸氣を立てながら火鉢の上で釜が鳴つてゐます。こんなもののおとはあなた方の心には可なり遠いものになつてしまつたでせうね。

行郎君からは學校の雜誌を澤山子供達に難有う御座いました。近頃運動事に狂してゐる彼等は大よろこびでそれを繙きました。

切に皆樣の御平安を祈ります。好便にまかせて草々。

## 有島信子氏宛――三月八日於東京　〔四二九〕

この間は折角お出で下さつたのにごた〳〵してゐまして失禮しました。誕生日の御祝をまことに難有う御座いました。其後壬生馬の熱は依然平靜なのでせうか。さう祈ります。

今朝は成城小學校に行つて朝の中を遊んで來ました。どうかして日本の子供にもつと自由を與へもつと快活であらせたいとおもひますが……

## 志賀直哉氏宛――三月十五日於東京　〔四三〇〕

永くお目にかゝらぬやうな氣がしますが皆樣御堅固の事と存じます。

「荒絹」をお送り下さつて難有う御座います。あの表紙の題辭は直方君が五十燭とかの電燈の下で筆をふるつたものだと本人から聞かされてゐました。あなたの名品が大變ふさはしい表裝を以て現はれ出たことをお祝ひします。

改造の「暗夜行路」を毎號拜見してゐます。世の中では色々な事をいつてゐるやうですが、私は全く感服してゐます。十分ないゝ仕事として完結なさらんことを祈上げます。私は今全く行きづまつて苦んでゐます。御禮迄。

## 吹田順助氏宛――三月二十四日於東京 〔四三一〕

其後は何やら大變遠い所に別れ〳〵になつた樣に御疎音になつてしまひました。許して下さい。あなたの事は時折頭の中に徂徠しないではないのですが、此頃の樣に俗事に忙しいと遂思ひ出した時にも執筆せずに過してしまひます。山形にも春は動きはじめたと思ひます。皆樣如何にお暮しですか。私の處は子供が時々輕い風邪をする位で私は又如例病的といつていゝ位健康です。仕事は矢張思ふやうには出來ません。然しこの頃はあせりもしなくなりました。で其間の暇つぶしにホヰットマンの譯詩など試みてゐます。あれを譯して見るとバイロン、シェレーあたりを譯する方が却而勝手がよくはないかと思ふ位困難です。譯は更に物になつてゐません。

來二十九日頃横濱から船で京都の方に行かうかと考へてゐます。例の同志社です。今度はバイロンを演題に選びましたが、どれ程のことが云へるか少し心配です。但しあの時代と現代とは思つたより多くの類似點を持つてゐるやうです。そこにいくらかの暗示を與へる事が出來るかと考へてゐます。

來月中旬に雜文を集めて著作集を出します。又單獨の雜誌も出さうかと思つてゐます。毎日日記を書いて出したら面白くはないかと思つてゐます。この春休みには上京はなさいませんか。新劇が稍活氣を呈したやうではありますが目覺ましい運動は更に起りません。

一九二一年

他の分野の運動と同樣の運命にあるやうです。全くこの頃は淋しい程力あるものが現はれませんね。

## 有島生馬氏夫妻宛――三月二十四日於麹町　〔四三二〕

(猫の名)ピーナ死去の報を昨日だつたか見ました。あきちやんのかなしみを見るやうに察します。宛名人ビユテーはスサノヲの命のやうに亂暴を働くので今は九丁目の角の果物屋に放逐の憂目を送つてゐます。若し悲報を知ることが出來たら今昔の感に堪へないでせう。

「人間」を難有う。訂正がしてないので少し失望しました。

二十九日出發の用意で多少忙しくやつてゐます。今日新人會の講演が本になつて出ましたから一册お目にかけます。

信子さんは今夕あたり御來京かと思つてゐたら來られさうもありませんね。

寛さんに行三を診察してもらつて差支なしとの事なら愈〻二十九日に鹿島丸で出發するつもりです。

母上歸京後寒い〳〵といつてゐられます。全く昨日一昨日は東京は冴え返りました。

## 與謝野晶子氏宛――四月二日於京都　〔四三三〕

とう〳〵何の御消息も申上げない中に京に來てしまひました。日々刻々其の事は氣になつてゐたのですが、くつろいで筆を執るいとまもない程雜事に追はれてしまつたのでした。而して心にかけながら二十九日夕方に橫濱から船に乘つて旅程に上りました。それから神戸に行きいつかあなたが暫く御滯在なさつたと聞く六甲ホテルの離れに一夜を過し、大阪を忙しく見物して昨夜この地に入りました。昨日までの日本晴れの好晴と引かへて今日は朝から美しい春の雨が降つたりやんだりしたので一同は少し休む事にし、私も寸暇を得ましたから直ちに此筆をとりました。

あなたの歌集について何かいへとの仰せではありましたが、私に何が申せませう。若しそれが出來るのなら私は末かけ

て忘れ得ぬ幸福の中にこの幸福を加へ得ることが出來るでせうに。然しその幸福の影をも追ふ爲めに或は其中おほそれた企てを致すかも知れません。其節私が若し低能兒のやうな事をいふとしても笑つておすまし下さる樣願つておきます。

佛國に行かれたいといふ女流畫家の畫會の趣意書も拜見しました。その方の仕事をよくも承知致さぬくせに其畫會に加はるなどは、少しその畫家に對してすまない事のやうに思はれますので唯今まで躊躇してゐるやうな姿なので御座います。これはも少し考へさせていたゞきたいと存じます。

京都の此頃はこの上なくいゝ時節かと存じます。櫻にはまだ五六日の間がありませうか。春はまだ聖龕の中に嚴しくいつきまつられてゐます。まだ其姿を垣間見る事も許されません。そのよさ。御幸福を祈上げます。

## 有島生馬氏宛——四月三日於京都　〔四三四〕

京に入りしその夜より雨になりました。御手紙は此宿で拜見、子供はわりに元氣で興味を持つて見物をしてゐます。自分の過去を顧みると幼い時した旅行の記憶とそれから得た智識がいつまでも強く殘つてなつかしくおもひ出されますから、今度の旅行もやがては子供等のなつかしい思ひ出となるかと思つてゐます。この二月雨の續くのには少し閉口してゐます。然し不遠雨がやむと共に春が一時に殺到する事でせう。

あきちやんもいよ／＼およろしき由吳々も御健康を祈ります。東京で讀んだ御手紙の趣は至極結構なことと思ひます。金はよろこんで御融通しませうから早速好適の地を御選定なさることに急がれるやう祈ります。然しその仕事の爲めに又熱を出すやうな事になりては虻蜂取らずの結果になりますからその邊は御兩人で十分に御注意の事。

## 佐藤義亮氏宛——四月三日於京都　〔四三五〕

其後は御無音申上げてゐましたがおさはりもなく御過しの事と存上げます。

目下私は家族と無事此地に滯在してゐます。京の春はまだ至つて淺いのですがそれが却つてうつくしく思はれます。

偖乍突然友人牧山正彦氏を御紹介申上げます。帝大の法科を出た人ですが將來を思想上の分野に於て働かれたい希望を有する篤學の靑年です。此度一つの飜譯を結了し其出版を企圖してゐられてあなたに御相談が願ひたいとの事です。御多忙の處恐入りますが一應御遇ひ下さつて事情直接御聽取下されば仕合せに存じます。

## 〔四三六〕　與謝野晶子氏宛──四月八日於京都

あぢきない程寒い風の吹く日が今日は來ました。外出の出來ない子供達は新聞紙の竹刀で戰爭をしてゐます。けれどももう春はふせぎとめる事が出來ません。宿の前の柳の萠葱の若々しさ。

## 〔四三七〕　足助素一氏宛──四月十四日於京都

其後暫く兄の消息を聞かないが健在か。抵抗療法の其後の效果は如何。一昨日から開講した。可なり身の入つた氣分で講壇に立ち得たのが愉快だ。當地の花も八分通りといふ所だ。毎日の人出は大したものだ。母も僕も幸に元氣で暮してゐる。僕は花どころのさわぎではない。「小さな灯」は何日頃市場に出るだらう。出たらどうか早速十部程こちらに送つてくれ給へ。僕の講演は二十七日が最終日になる。

十八日から二三日大和の方に母と行つて法隆寺に參詣するつもり。

## 〔四三八〕　茂木由子氏宛──四月二十六日於京都

先日は又御手紙を難有く拜見しました。外面的の御生活を縮小なさつて獨己の時を多く御造りになる御思立ちは重疊に存じ上げます。詩集がいよ〳〵御出版の運びに至つた事もうれしく存じ上げます。京都に居ても私は此頃のよい月をも碌

様見ずに通してしまひました。書物と首引きをしてゐねばならぬ自分を少し果敢なく思ひます。然し當時の熱狂詩人バイロンの熱情は今の私にもひし〳〵と響いて來て時々熱涙を要求します。今更に心熱の强さの恐ろしさを思ひます。私の惡い噂が御耳に這入ることがあるさうですね。その噂は多分本當かと思ひますから無御遠慮御信じ下さい。それでも私の持つてゐる價値は決してあなたの前に減少することはないと信じてゐます。始めからさう澤山ある價値ではありませんけれども。來月の四日又歸京の心組です。今夕散歩の時京に來てからはじめて美しい人に遇ひました。家の前を掃除してゐました。宿のお主婦に聞いたら知人の家の娘で十七位だらうとのことです。丈が高いから十八九に見えました。隱立のない晴れやかな眼をしたやさしい晴々しい人でした。

## 有島生馬氏夫妻宛――四月二十八日於京都〔四三九〕

先日は信子樣より詳細の御來信にて御消息は知悉する事が出來てよろこばしく思ひました。矢張つめて働かれると發熱ある由、當分は念にかけて何もせぬ事を祈入ります。

いよ〳〵家も御移轉の由此夏は子供等と家の一隅をお借りしたいと思つてゐた事も空賴みになつた譯です。前の家は然しあまりに海に近かつたが此度の處は適度の距離があるのでせう。其方が屹度御健康の上にも結構だと思ひます。京都滯在も永引いて來月四日歸京の途につく事となつてゐます。講演は會心の思ひを以て續けてゐます。聽衆も滿堂にて熱心に聞いてくれてゐます。ああやつて話しをしてゐると自分の中にはありながら形を取らなかつたものが段々はつきり現はれて來るのを見出します。それ丈けが私に取つての收穫です。こゝの春も早全く老いました。東山の若葉のみが美しく輝いてゐます。明日は奈良博物館に法隆寺に什寶を見物の心組です。

御自愛を。

お初さんは綿入れから一躍して今朝はセルを着てゐます。

## 與謝野晶子氏宛――五月七日於東京　〔四四〇〕

雨がふり續くので京都で得て來た氣分が持ちこされてゐるやうな心が致します。花もない中にあちらにいつて若葉もやや老けてから歸つて來たわけになります。歸つて見たらアルス社から送られた貴著が私を待ち受けてをりました。難有う御座いました。

御盡力の文化學院もいよ〳〵開かれました由、よき赤子をお設けになつたやうなおよろこびと存じ上げます。其中に校内を見せていたゞきたいと存じます。私の小著も世に出ました。雜多な文を唯取りとめもなく集めたもので御座いますが書架の一隅にお置き下されば幸です。いづれ御拜眉の上。

## 與謝野晶子氏宛――五月十四日於東京　〔四四一〕

使しておよこし下さいました御手紙を今朝もくりかへして拜見致しました。私の涙は安つぽい涙ですぐ出るのですけれども。御本も早速自分の讀みたいと思つた所々を讀ませていたゞきました。子供國有といふ事について私も亦あなたに罵らるべき一人であるのに氣がつきました。此頃私は人に遇ふと時々子供社會有と申すやうなことを說きました。それは勿論在來の親といふものが子供を所有物視し方便視する態度に反感を抱いて申出たことであり、社會有といふ意味が社會が其哺育にあたるべきものだといふ程の意味ではあつたのですが、社會有といふ用語の正しくないのをあなたの寸語によつて悟りましたのは何よりも難有い事で御座いました。私はもうそんな言葉を再び口にすることはありますまい。

歸京したら子供がよい翫具に對するやうな熱意で創作にいそしみたいと思つてゐたのは裏切られて、私は自分の頭が少し變調を來してゐるのを發見せねばなりませんでした。少し自分を悲觀します。それに周圍につまらぬ事で頭をなやますものがありますので餘計苦しみます。或人にとつては何んでもないと思はしい事が私にはたまらない障碍です。例へば

京都滯在中から四五通農場の用事での手紙が私の手許にとゞいてゐますが、封をしたまゝで未だに私は讀むことをしないでゐます。發信者からは執事まで、主人は一體如何したのかと催促して來ました。それが四日前のことです。それだのに私はまだこの用件を其儘抛擲して、こんな用もない長い手紙をあなたに對してしたゝめたりしてゐます。時には不圖愛著も何も打捨てゝ雲水の旅に出たいと思ふことさへあります。

書けばいくらでも！　然しそれが馬鹿らしくなりました。

これはまだ持つたことのない姉といふものに思ふまゝを訴へるやうな心持ちで。

## 成瀨無極氏宛――五月十四日於麴町　〔四四二〕

當地は私が歸つて來て以來日の目を見ることは殆どない位に雨がふりつゞいてゐます。貴地は如何ですか。東山はじめ若葉が燃ゆる美しい事だらうと御察ししてゐます。歸京して見ると何やかや用事が溜つてゐて閉口し切ります。早速取かゝらうと思つてゐた創作にもまだ手をつけてゐません。上海の講演の事色々仰有つて下さつて難有う御座いました。吉野、森本兩博士を通してもＹＭＣＡの依賴がありましたが、今年の夏は御免を蒙りました。何しろ子供達に適當な保姆が出來ない限りは一寸遠出をする事が案ぜられます。來秋は或は滿鐵の談話會からも呼ばれるかも知れませんから、其頃適當な人が見つかつてゐたら上海の方へも都合して出かけて見ようかとも思つてゐます。

今日吹田兄から寸信。來月は一寸上京するとかいつて來ました。その頃はあなたはお忙しいのでせうね。

仕事が出來ないで愚圖々々してゐる程いら立たしく物淋しい事はありません。少々神經衰弱の氣味です。

奥さんもお子さん方も御丈夫ですか。私の方は長男は全く全快しましたが、今は又三男が少しせきをして寢て居ます。

お大事に。

今日は晴れるかも知れません。

一九二一年

## 近藤七郎氏宛――五月十五日於東京　〔四四三〕

この度はゆる〳〵お目にかゝる機會を得たことを私も殊によろこばしく存じてゐます。只今あなたが持つて居られる色色な御煩悶も心から御同情の出來るものだと私は思ひます。私も四十に垂んとするまで何一つ仕事らしい仕事はせずに藻がいて居たものです。妻が死んだ時もかゝる意味に於て彼女に何等の死出のおくりものもする事が出來なかつたのを私は自身ひとりでつらく思つたものでした。然し考へて見ると要するにそんな事は何んでもないことだとおもひます。默つて死んでも偉い人もあり澤山仕事をしても恥を殘す人もあります。まあ凡てを運命にまかせて思ふがまゝをやり切つて死にさへすればそれでいゝとするより仕方がないのではありますまいか。そこに安住して落ちついてゐるより道はないものと思ひます。あなたの才分と熱心とはやがてあなたを自足の境地に伴れて行くであらう事を私は信じますがそこには重點を置きたくありません。あなたの發心と熱意、それが十二分にサムシングだと私は思ひます。

歸京してから仕事に取かゝつてゐると一昨日から三番目の子が發熱し臥る事になりました。かうなると私は落ちついて机に向ふ暇をなくしてしまひます。こんな時には可なりいら〳〵と內助者の無い事を殘念に思ひます。然しこれも私に與へられた仕事の一部だと思つてゐます。

東京は今日丈け晴れました。明日は又雨らしう御座います。何かにつけて貴地の靑嵐を思ひやります。

奧さんによろしく。お子さん方の御健康も祈上げます。

以上のおはなしには驚かされました。少しも知らなかつた事でした。

## 灰谷やす子氏宛――五月十八日於東京　〔四四四〕

度々御消息下されて難有う存じました。遂々俗緣の總てを擲つて端島にのがれたさうですね。そこの生活の會心なもの

であるのを筆端に御想像申すことが出來ます。

聖書の傍に私の書いたものをおいて下さるといふ事はこまります。最も悟りの惡いあくのぬけない心にあつて筆をとるものは私です。聖典に寫入される爲めには私の書いたものは無益な御邪魔にこそなれ何んのたしにもなりはしないと思ひます。他の書物とともに机邊より一掃せらるべきものです。尤も今度新人會から出た講演集「新社會への諸思想」の中の「ホヰットマンの事」は多少御考察の足しにもなるかと思ひますから其中送つて差し上げる事にしませう。槇山氏には其後更に面會しませんし、あなたの原稿をあなたまでお返しするやうにと云つた處がそれが氏には何等の力を以て響く事はあるまいと思ひますから、御申聞けですが何んとも申してあげません。又あなたとしてもそんなものは頓とお忘れになつてはいかゞですか。お忘れになる事は出來ますまい。唯それと地上の緣を結ばれぬ事が却而心安くはないのでせうか。それが縱令原稿一つでありましても。私は目下創作中、果して成就するか否かは疑問です。祈御健在。

## 有島信子氏宛――五月二十七日於國府津　〔四四五〕

御温情に滿ちた御消息を少し淋しく思つてゐる此宿で拜見して大變うれしく思ひました。

私は先程河崎氏につけて正行を東京に還し徹夜の準備の爲め晝寢をして眼をさました所です。

敏は家を出る前には全く平熱になつてゐましたが、出る頃から七度三分位でだるいといひましたけれども、今更彼だけ一人殘して行くことも出來ず、風邪だから先方に行つたら大丈夫だらうと祖母さんもいはれるので出て來ましたが、昨日の朝から發熱三十八度となり今朝は顏面から胸にかけて痲疹性の發疹がしたので、土地の醫者に見てもらつたらそれに相違ないとの診斷を受けました。その中熱度は三十九度六分といふ位になります。この宿屋には三人の幼兒も居て其中一人はまだやつてゐないといふ譯なので頓と閉口しました。おまけに閑靜な部屋のある所は目下改築中で、客の出入が中々やかましいのです。それで斷然萬事を賭して一同歸京するつもりで今朝東京に電話をかけて河崎氏に來てもらつたのです。

處が河崎氏が來て見ると敏の容態は可なり進んでゐて、自分でも動くのが大儀だといふので又考へをかへて敏は明日まで樣子を見る事にし、他の二兒だけは東京に還してやりました。幸に宿では非常に親切にして氣をつけてくれますからこんな傳染病的な患者をひかへて居ても氣が引けないだけは幸です。今動かすのは隨分危險ですが、餘病でも發した場合この宿に居ては如何する事も出來ないと色々苦心をしてゐる最中に此手紙が來たのです。それで遂こんな管々しい事を書いてしまひました。

あなたの御病氣段々御快方で結構です。あきちやんも中々長い事でしたね。又これからの引越しでは色々御骨も折れませう。一方に病人をかゝへてこの御苦心蔭ながら御察しします。どうか精々氣をつけてあなたは健康でゐて下さい。お忙しい中を來月五日平佐會にお出下さる必要もありません。私は平佐生れでもなし母も外國人なり籍は東京にあるのだから平佐には格別の親しみも感じません。先づ一會だけはしますが今後御斷り申しますと幹事にいつておいた次第でした。せせこましい事をし續けてゐるものです。こんな譯で成るべく簡單な事にしておきたいと考へてゐます。然し單に遊びにお出下さる御氣分なら午後からでも壬生馬の代理かたぐ\來て下さい。

仕事が出來ません。いらく\させられます。然し一人の子供の生命といふ事を考へると自分の仕事も一つの生命であると自信しながらたじろいでしまひます。自然の威力の大きさを思はされます。

壬生馬にくれぐ\もよろしく。あきちやんにも同樣願ひます。今見ると空の具合が大分よくなつて來たやうです。明日は天氣かも知れませんね。さうしたら朝の病人の樣子次第で直ちに歸京、私は敏を連れて東京病院に行つてしまひます。この上母上を煩はすことはこつちの方が苦痛を感じますから。それにしても二兒は矢張何かと面倒していたゞかねばならぬのですが、それも苦痛です。自分の我儘からの苦痛だから仕方はないやうなものの。今日は何かつまらぬ事を色々と書いたやうです。たまさかの泣言をおゆるしあれ。

## 足助素一氏宛——六月四日 〔四四六〕

其後お變りはないか。敏行は益々輕快、最早十分退院させてもよろしい事になつてゐるが、五日の例の會をすますまで置いておかうと思つてゐる。昨日は秋田君に引出されてエロシエンコの事につき大奔走、結果は水泡に歸す。橋浦、和久島のさし入れが盡きたら一週間分なり二週間分なりを僕からもさし入れたいと思ふ。よろしくお頼みする。

## 橋浦泰雄氏宛——六月四日於東京病院 〔四四七〕

昨日秋田氏に遇つたら今日は又第三(?)の公判がある日だとか聞きました。よい結果であれかしと祈つてゐます。昨日は秋田氏とエロシエンコのことにつき多少奔走して見ましたが、彼は既に其筋の命令で露國に歸還したあとでした。この間中は寒かつたので多少お困りでしたらう。

私は敏行がはしかにかゝつてゐるので目下この病院に來てつき添つてゐます。然しもう全快同樣ですから樂なもので少しづゝ仕事に精出してゐます。

## 古川光太郎氏宛——六月九日於東京 〔四四八〕

御申聞けの事童話童謠は人間はじまつて以來の出來事と存じられます。昔は口移しに傳へたものが今は活字になつたといふだけの事ではないでせうか。而して現代にあつては科學的研究の精神にもれず童話童謠にも色々な考察が加へられるやうになつたものと私は思ひます。尤も昨年頃から其氣勢が更らに高まつたについては一つの基因があるやうです。それは日本に於ては童話に文學的價値を與へようと最初の努力をした巖谷小波氏一派の仕事が先驅者としての功績はあるとしても、其仕事の性質は既に舊套に墮してそこから新生面が生じ得ないはめになつたのでいかなる方面かに此種の文學の新

生命が萠え出でなければならぬ事となつたので諸方で云々されるに至つたのでせう。これはさうあるべきことだと私は思つてゐます。私も童話を三篇ほど書きましたが、私の立場はいつでも子供の立場から子供の心理を書くといふのにありました。この立場には反對する人も贊成する人もあると思ひますが私としてはそれで通して行くつもりでゐます。これで御回答の結果になるでせうか。

## 成瀨無極氏宛――六月十日於麴町　〔四四九〕

おたまさんからの通信によればあなたもお子さんもおわるかつたさうですがもうおよろしいのですか。外遊の健康診斷はもうすんだのですか。私の方でも子供に代る代るやられて一寸困りましたが全快したので昨日退院させました。これから身を入れて仕事に取りかゝらうと目論んでゐます。

此頃は何やら頭の工合が變です。年齡が影響するのか神經衰弱といふものに犯されたのかとおもふ程です。困つてしまつてゐます。せねばならぬ事をしないでゐるのが一番わるいのかも知れません。吹田兄最近に上京との噂もあります。久しぶりの對面を樂しみにしてゐます。東京は時々氣違じみた人殺しが有るだけであとは平凡です。里見の「新樹」といふのも見ました。私のことですからうんと泣かされましたが、劇としては作者が見物を少し甘く見過ぎて居るかと思ひます。

御大事に。早々。

## 與謝野晶子氏宛――六月十四日　〔四五〇〕

あなたにいたゞいた書牋を用ゐて。

此雨をおいとひになりますか。私は毎日なでるやうに愛でてゐます。書きものの爲めにこゝに來てゐます。消印がそれをあかすかも知れませんが、私の筆はそれが何處であるかをお知らせせずにおきませう。全く獨りになつてゐるといふ意

識にひたりたい氣持から。先日は二組み來訪者をあなたの方におむけ申したのを亂暴過ぎた仕業だと後悔致してゐます。許して下さいますか。二度とも大山氏からあんな事を申して來たものですから遂その氣になつてしまつたのです。

仕事は相當にはかどつてはゐます。はかどつてはゐますが何處か氣に入りません。けれどもあなたにお願ひします。どうか今度のものだけで失望なさらずに下さい、私はもう少し高い處に昇る自信は捨てゝをりませんから。御健康を切に祈上げます。

## 母堂宛——六月十六日於千葉縣稻毛海氣館　〔四五一〕

昨朝おしたゝめ下さいました御手紙は晝の頃落手難有拜見致しました。御母上にも子供達の上にも御無事の由うれしく存じてゐます。每日の雨で他人は嘸迷惑と察しますが、私にとつては何よりの事でお蔭で仕事は大分出來ましたから何卒御放念下さいまし。晝は牛乳だけでやつてゐますがそれでも運動不足の爲めか祕結で困りますので、今朝千葉の町までリチネを飮みに行つて來て、唯今歸宿した所で御座います。芝居も久々で御見物少しは御氣晴らしになつたことと存じます。信子さんは遂に見なかつたやうですね。私は多分十九日に歸宅する事になるだらうと存じます。恐入りますが子供の儀何分宜敷願上げます。

當方は目下客少なで意外の仕合せをして居ります。午前十一時半。

## 有島生馬氏夫妻宛——六月二十二日於東京　〔四五二〕

雨にもかゝはらず先以而御無事の由およろこび申します。十三日から私は千葉縣の方にかきものに行つてゐて十九日に無事歸京しました。百五六枚の原稿をやうやく書きあげて持つて歸りました。それからは氣も少し落ちついてゐます。御新居は如何ですか。此間足助がそちらに出懸けたさうで、夏は暑からうが眺望はえらいものだとほめてゐました。其中景

色を見にあがりたいと考へてゐます。おくれはしましたけれども秋谷のあき子さんの紹介の小集を此月の二十七日か八日にしたいと考へてゐます。其頃上京が御出來になれば好都合だと思ひます。何れ確定次第お知らせします。
子供は漸く皆元氣になりました。富本氏の妹さんは矢張來ることが出來ないといつて來ましたから、適者を物色せねばなりません。
一層の事よい看護婦でも頼まうかと考へてゐます。尙御大事に祈ります。

## 足助素一氏宛——六月二十六日　〔四五三〕

一昨日から臥床した敏行今夕武山醫師の診斷によれば腸チブスの疑ひありといふので今夕僕が附添うて又入院させる事にする。少々度々の不例なので困つてゐる。是れも併し人間一生中の一挿話だらう。十分養生をさせてやる事の出來るのを思へば勿體ない事だ。
御申付けの原稿は小生方まで（番町）御返送を煩はしておく。御序の時でよろしい。

## 與謝野晶子氏宛——七月九日於東京　〔四五四〕

文化學院の讀本を御惠送下さいまして誠に難有う存じました。あれは先日頂だいした時一讀して自分の文章の不用意なのに愛想を盡かした事でた。あれを少女方に敎へるについては大分氣が引けます。一度河崎さんにお眼にかゝつて訂正すべき箇所を申上げたいと思ひながら遂今日に及びました。二男は本復して旣に退院致しましたが入れ代りに三男が入院して居ります、扁桃腺を切開致したのです。幸に經過は順當でもう三四日もすれば退院が叶ふ事と存じますから幸に御放念下さいまし。今年は旣に子供に附添うて一ヶ月ばかり前後病院に臥起きする事になりました。從て兎角の御無沙汰になつて居ります。此夏は伊豆山に御避暑の由伺ひましたが私共も熱海に參らうと考へてゐますので多分度々お眼にかゝる機會

も得られる事かとそれを非常に樂しみにして居ります。

新潮のもの御覽下さつて失望していらつしやるのではないかと氣が引けます。もう少しまとまつたものにするつもりでしたが、書いて見ると百枚やそこらでは本當の發端だけより書けない事になつてしまつて不體裁で御座いました。

つゆ小袖ともいふべき涼さになりました。皆樣御變りなきやうくれ〴〵も祈上げます。

## 山本行雄氏宛――七月十一日於東京病院　〔四五五〕

函館に歸られてからの御手紙を昨日拜見しました。私があなたに大なる落膽を與へたについては御氣の毒で濟まない氣がしますけれども、事苟も自分の關係のある仕事のことになると、私はいゝ加減なことをいつて濟ましてゐられなくなるのです。よく原稿を讀んで見ろといはれて私が躊躇するのはそれが爲めです。原稿さへ讀まなければ無氣にならずに濟むものを、讀んだおかげで色々な氣持ちに自分で苦しまねばならぬと思ふと、讀む前から氣が重くなつてしまふのです。

あなたの置いて行かれた原稿もいよ〳〵讀むことにしました。其結果は原稿の中の書き入れでおわかりになると思ひます。要之あなたは小說を書く上の常識に缺けてゐます。常識を無視してかゝるのはいゝけれども、無視すべき常識を持合はしてゐないとなると困ると思ひます。又非常識なら非常識で其缺點を十分に補ふ他の有力な要素でもあればですけれども、構圖といひ、表現といひ、思想といひ、前代未踏と考へられるやうなものは見出されません。これではいけないと私一己は考へます。私の意味する所は原稿の中の私の書入れを注意して讀んで下されば判つて下さる事と思ひます。

雌伏して勵み勉めること、これが今のあなたに最も強く要求されてゐることではありますまいか。大望を持つことはい い。然しそれを back up する丈けの實力が伴つて來なければ要するに滑稽な大言壯語に過ぎないでせう。

どうぞ私の意のある所を察して下さい。

處が私の方にはどちらからも具體的には何の沙汰もないのです。よし沙汰があつた處が私のやうなものに何が出來ませうかゝ思つてゐます。勿論英語で講演をするなどは思ひもよらない事ですし、格別これはといつていふ事も持つてゐません。尤も「愛は奪ふ」でも朗讀してそれを通譯して貰へればうれしいのですが、米國流の聽衆にはあんな話は三文の價値もないのですから、欠伸や居眠に責められるのも業腹です。そこいらを考へてゐます。そんな鹽梅で第一交渉はまだありませんし、交渉があつても私の持ち出すやうな條件では先方がおいそれといつて呉れるか如何かも判りませんし、全く未定の事實と御承知下さい。

## 成瀨無極氏宛——七月十二日於東京病院　〔四五六〕

お子さん御快方で結構です。私の方のは三男が六日の日に扁桃腺を切開したので經過は極めて良好ですから御放念下さいまし。兩三日中には退院が出來ることゝと思つてゐます。

先日は吹田氏來京、一會致しました。私は本月の下旬から子供を引連れ熱海に出懸けようかと企ててゐます。然し何んとかしてお眼に懸ることが出來ると思つてゐます。奥樣始め可憐な御子さん方によろしく。

## 北村英一郎氏宛——七月十八日於麴町　〔四五七〕

御懇書を難有う御座いました。野尻湖で二十一、二、三、四、五の五日間御開催の儀も承知致しました。しつかりは決めてゐませんが、そちらの御都合がよかつたら子供三人も同伴したいと考へるのですが如何でせうか。御相談の上御返事をお願ひ致します。なほ野尻湖までは東京を何時に發てば一番都合がよろしいのですか其邊の所も伺はして下さい。何しろはじめてのことで樣子が更に判りませんから。

ホヰットマンの詩集はまだ着いたといふ報知が丸善から參りません。尤も今月一杯はかゝると初めからいつてゐたので

すが。

五日間を樂しく遊び暮さうではありませんか。朝二時間位ホヰットマンをやつて、あとは閑談散歩の時を送るのはどうでせう。其間に自ら互の間に得る所があるかと思ひますが。

樂譜のことは門外漢たる私には判りませんから近藤氏から直接返事をしてもらふ事にしますから左樣御承知下さい。

先は右のみ。山本さんにもよろしくお傳言を願ひます。

## 有島生馬氏夫妻宛――七月二十二日　〔四五八〕

やうやくよいおしめりが來ました。私は雨に遇つて大よろこびでゐます。行三御厄介のことと存じます。しかしおかけで健康を恢復する事が出來、此上ない仕合せです。何卒便通のことだけお氣をつけ下さい。あきちやんも其後益〻良好のことと思ひます。明日は行光がベースのマッチに出るので多分二十四日に熱海の方に發たうかと思つてゐます。滯在中一度御遊來如何や。英は太洋丸といふので今朝長崎の方に遊びに發つて行つたやうです。聞いて見ると家庭雜誌ばかりではなく地方の新聞に三つまで同じ感想文が私の名前で揭出されてゐるさうです。困つたものだと思つてゐます。家庭雜誌のは筆者の名もわかりました。この人は喀血して今遠州に行つてゐるさうです。養生費に困つての出來心だらうと雜誌社から云つて來たので少し氣の毒にも思つてゐます。

八木澤君が一昨日突然少し喀血しました。然し今は大分よい樣です。足助の招待で調布に行つた歸途のことです。

## 灰谷やす子氏宛――七月二十五日於東京　〔四五九〕

度々の御來書を拜見しました。御作物を御出版になりたい御氣持ちもよく解りましたから、この上は何事も申上げません。先々不取敢原稿は私の著作集を出してくれてゐる叢文閣の主人まで廻送しておきました。主人が先づ讀むことになつ

てゐますので私はまで拜見しない譯なのです。主人が出版を思ひ立つたら版になつた上で私は拜見します。本にする價値があるかないかは、私より主人の方がより高い批評眼を持つてゐるかも知れません。彼は私の親友で而かも廣汎な讀書と鋭利な批評眼の持主ですから。私は天氣が回復し次第伊豆國熱海新濱町に參ります。池田といふ方が「三部曲」を庭に抛りなげられたとの御消息を讀んで不思ほゝゑみました。酒井道子といふ女子基督靑年會の大立物も、私がどれ程靑年男女を墮落させて居るか分らないから抗議を申込むとかいつてゐるさうです。これも惡意なくほゝゑませられます。可憐といふ感じを抱かせられます。祈御健在。

## 原久米太郎氏宛——七月二十七日於麴町　〔四六〇〕

大變に御無沙汰してしまひました。時々の御消息によつて御起居は知ることが出來ますが、此頃は川崎造船も遂に大事に至つて色々考へられることも多いだらうと思つてゐます。何しろ勞働階級の人々が自覺して行く有樣の早いことは今度の行動で可なり明らかに證明されたといつていゝとおもひます。指導者の役目をしてゐた知識階級からどん〳〵解放されて自主的になつて行く模樣が觀察されます。尤も今度の運動でも手近かで見てゐたら色々の不條理もブマも見え透く所があるかも知れないが、それは實際仕方のない事で、それですらも資本主側の不條理やブマさ加減よりは遙かに上手なものではないかとこちらからは推察されます。もう理窟ではなくなつて來た、動かすべからざる事實になつて來た。さういふ感じを與へられます。私はそれは恐ろしい事だけれど同時にうれしいことに思はれます。私は自分の生ひ立ちから考へてこの勢に先驅けすることが出來ない。然しながら人間の歩みが自然に行くべき所に歸しつゝあると思へば何ともいへないよころびを感じます。

田所氏の事では色々御迷惑をかけてすみません。あなたからの手紙を受けて同君も大に考へさせられたやうで、私に何んとかいつてよこせと手紙が來ました。あの人の事だから眞劍に何かを考へてゐるやうです。離婚とか。放蕩とか。自滅

とか。そこで私は奥さんが喜び勇んで君を養はうといふのなら甘んじて養はれるがいゝ。少しでも不滿があるやうなら矢張君がいかにいやな仕事でもして妻子を養つて行かねばなるまいとさういつてやりました。あの人は兄とも違ふ、私とも違ふ。然しある徹底さを持ちそれをつきつめて行く點に於ては足助と匹敵すべき稀有な力の持主だと思ひます。それを私は生かして見たいのです。

子供の病氣はやうやくよくなつて今は一同頑健でゐます。今年は一月以上子供に附添うて病院で暮してしまひました。それを左程後悔もしてはゐません。

海水浴をさせる爲めに子供達を連れて熱海に行かうと考へてゐますが、こちらは二十三日以來毎日驟雨めいた雨が來るので出かけられないでゐます。此頃は私も非常に元氣が出て何か仕事の出來る氣分がしきりに動きます。

此秋滿韓に行かなかつたら今年中に著作集を二册出すつもりでゐます。

兄の著書はまだ市場に出ませんか。早く出て學界に大石が投ぜられるのを待つてゐます。八木澤が上京してゐましたが、先日足助に招かれて皆で玉川に行つた歸りに喀血してまだ病院に臥てゐます。どうも可哀相です。

ラッセルが東京に來てゐますが改造社の帝國ホテルの歡迎會にも出席しませんでした。どうせゆつくり話を聞く事も出來ないだらうと思ひましたから。少し妙な失望を感ずるやうな氣がします。

來月中旬熱海から歸つて信州の愛讀者に招かれて野尻湖で五日程過します。これが私の夏のプランです。

皆樣の御健康を祈る。

吹田順助氏宛——七月二十七日於東京　〔四六一〕

「十九世紀獨逸思想史」を御惠投下さつて難有う御座いました。ウォンデルバンドのものはかねてから讀みませうと思つてゐたものの一つだつたので、飜譯の勞を取つて下さつた事を殊にありがたく思ひます。熱海の旅囊に携へて行きたいと

おもつてゐます。

二十三日からこちらは雨ばかりでまだ旅に出てゐません。子供は幸に目下頑健至極です。雨があがり次第出かけようと考へてゐますが其中にあなたが又御上京になるのではないでせうか。お遇ひが出來ればうれしいとおもつてゐます。

## 與謝野晶子氏宛――八月三日於熱海　〔四六二〕

こちらに來てから子供と共に八時には床につき晝は丸で野蠻人のやうに生活してゐます。私はやはりなまけることが一番好きなやうです。昨日も發動機のついた汽船に乘つて多賀から網代の方を一日遊び歩きました。得さんといふ殺生好きが章魚をつき、鯖を手捕りにしました。眞黑な老漁夫も一緒にゐました。古い木舟のやうな男ですがそれがしやれをいふさうです。いつぞや熱海から六七里の沖に出た時下駄が片一方流れて來たのを見つけて「世の中は何んといつてもおあしの事だ、下駄でせいがおあしに離れたら可哀さうにへえこんなことになるだあから」！

## 有島生馬氏夫妻宛――八月五日於熱海　〔四六三〕

八月二日には墓參下され候由難有。故人は私達が墓參した程におもひよろこび候事とうれしく存候。私達は其日水谷の得さんに誘はれ多賀より網代に船遊びに出かけ、子供達は何事も氣付かず嬉々として一日を過し申候。一昨日あたりより天氣模樣も恢復致候得ば海水浴もおもふまゝに出來、一同の體色羅漢の如く相成候。今度お眼にかゝり候節は一寸お判りになるまじき位に候。かね食事の時給仕をしながら私の顏をつく〴〵眺めて笑ひころげ居候。

其後曉ちやんは益〻およろしき事と存上候。御兩人にも母上よりの御手紙によれば至て御元氣の由安意此事に候。益〻御自愛祈上候。

この頃の生活は全く子供達とえらぶ所なく、就寢も七時より八時の間、結局私はなまける事が好きな男と見え申候。

## 原久米太郎氏宛——八月七日於熱海新濱町　〔四六四〕

兄の御消息は眞に萬服の淸涼劑、四尺の秋水を拔きはなつて四面を薙ぎまはすかと思はれる鹽梅全く胸が淸々する。勞働爭議に關する兄の意見は眞に肯綮を得たものとおもふ。私も全部同感だ。前には私も殉情的な考へから平和的解決の主張者であつたが、此頃は實にさうは思はなくなつた。如何なるものでも現はれ出るのがいゝのだ。勢ひといふものが最上のことをする。さう思ふ。

ラッセルには遇はなかつたが其講演は慶應大學に聞きに行つた。深いことは一つもいはなかつたが、あの調子でやつたりしたら英國あたりの保守的な社會から恐ろしがられるのは無理のないことだと思つた。然し私はあゝいふ學者肌の人からは煽動的なことよりももつと美しい論理を聞きたかつた。

この間田所が訪ねて來た。兄にもお遇ひしたといつてゐた。遇ふ度每に私はあの男を憐れにおもふ。あまりに純眞な、ごまかしてゐられない性格を持つた彼の境地を悲しく思ふ。唯あの境地を彼が一人切りで切り開いて行かないのが私には物足らない。私なんぞの所に來て慰安を求めるなどはいけないとおもふ。此間はそれを少し強く云つた。

天氣が漸く恢復したので盛に運動をやつてゐる。

吹田は九月の何日とかに出かけるといつてゐるやうだ。今頃は上京してゐるのではないかとおもつてゐる。

「白官舍」に對する感想をうれしく讀んだ。足助はあれを許して五尺の男の頭の毛だけより現はれてゐないのだから許の限りにあらずといつた。それはさうに違ひない。あの調子でうまく成功するか如何かは知らないが、今年中には書物にしたいものだと考へてゐる。園は有島ぢやないよ。有島は雲隱れをやらかすのだ。

足助が其中こゝに遊びに來るとかいつてよこした。

新御健在。

丸善からはまだ何ともいつて來ません。如何した事なのかとおもつてゐます。屆いたら直ぐ報告はしてくれるとおもひますが、兎に角一度催促して見る積りでゐます。

## 北村英一郎氏宛——八月九日　〔四六五〕

飛んでもないをかしな事を承りますが、或人が野尻湖には湖神として蛇が祀つてある處から蛇を大切にする爲めひどく蛇が多いとの事をいつたさうですが本當でせうか。世の中にはいやなものはたんとないが蛇丈けはどんなにしても好きになれない私に取つては可なりな大問題なのでお尋ねします。若し其處には蛇が特別に多いとならどうか他の所にかへていたゞく事は出來ないものでせうか。自分でも馬鹿だとおもひますが……

## 土岐善麿氏宛——八月十三日於熱海　〔四六六〕

ローマ字書き短篇小說集を御惠與下さつて難有う存じました。大層氣持ちのよい書物の出來たことをお祝ひ申上げます。又あなたが此書の出版に人知れぬ幾多の御苦心をなさつたのを乍蔭知つて斯道の爲めに尊い事だとおもひます。あれを拜見して感じたことはといへば、これまでの漢字を澤山使用した文章をローマ字になほすことの意義の極めて少ないといふ事です。ローマ字にする以上は日本の言語はどうしても漢字の要素を除去して改造されねばならぬとおもひました。吾にのみたよつて半ば眼に訴へる字を讀まうとするのは全く非常な苦痛だと知りました。茲に至つてローマ字の成立は文章そのものの根本的改造を自然に將來する事にはなりますが、それを待たずに創意ある文章家によつてかゝる文章が創造される事が要せられるとおもひました。是れが成就されなければローマ字の普及は困難だとおもひます。

右御禮旁〻偶感愚見を申述べます。

暑中折角御自愛を祈上げます。

有島行光、敏行、行三氏宛——八月二十一日於信州　（四六七）

こゝはえらい、はいかいし一茶の住んでゐた村です、「こゝがわがつひの住家か雪五尺」と讀んだ人です。「やせ蛙まけるな一茶こゝにあり」と詠んだ人です。今でも村の人は神様のやうに尊んでゐます。今ゐる野尻湖は美しい〳〵湖です。ゆうべ月の夜に船を浮べて遊びました。

有島生馬氏宛——八月二十一日於野尻湖畔　（四六八）

昨夕柏原驛に下車してから、この地で死んだ一茶の舊跡を訪れ、夜八時頃十六日目の月に照らされて、此湖畔につきました。
夜は十一時まで湖心にしづかな小船を浮べました。一二日滯在するには恰好の處です。湖中の琵琶島といふ辨財天女を祀つた島はいゝ島です。
海拔二千尺餘。黑髮、妙高の山々が西に聳えてゐます。人情の純朴なのは氣持ちが好う御座います。
一茶といふ人が大變知りたくなりました。
祈御健在。

山本武雄氏宛——八月二十六日於赤倉　（四六九）

この度は色々御懇情を忝く存じます。宿の亭主が書畫帖を持つて來たのでぬた二首。
しのじりの野尻の湖を遠見れば双の如し秋さびしかな
白き雲いたゞき去らず山々に先づさゝやくや秋のことしを

## 山本武雄、北村英一郎兩氏宛――八月三十日於東京　〔四七〇〕

この夏は私にとつて忘れることの出來ない年になりました。野尻湖の五日間、それは永い日ではありませんでしたが色色な意味で私には思ひ出深いものになるでせう。この機會をお與へ下さつた事を深く御禮申上げます。唯將來この集ひを續けるについて二つのことを御願ひしておきたいとおもひます。

それは、

一、あなた方が私を先生々々と呼んで下さらぬ事。

二、旅行費滯在費の外に御禮金などをして下さらぬ事。

その理由は極めて平明であります。私には如何考へても先生と呼ばるべき資格はありません。これは誰にでもいつてゐる事で、さう呼ばれる毎に內々心がおびえてゐます。第二は失禮ながらあなた方の御收入は、あんな報酬を下さるについて可なりの負擔をあなた方に負はせるに違ひないとおもひますし、東京でも京都でも私はあんな澤山な報酬を受けた覺えがありませんし、謂はゞあんな事は私の道樂で、ああした報酬を受くべき理由は全くありません。今度までは圖々しくいたゞく事にしましたが、將來は全然廢止にしていたゞき度くおもひます。

紙が無くなりました。もつと申上げたい御禮の數々はありますが不取敢御禮迄。

## 與謝野晶子氏宛――九月七日於東京　〔四七一〕

あなたも最早東京の雨をながめてお暮しになつてゐるとおもひます。私は先月の二十九日に歸つて參りました。この夏は信州をあちこちお旅なさつたことと存じますが、その爲めお頭の工合も少しはよくおなりになりましたか。私は山にゐる間はうれしいやうに快活になつてゐましたが、歸つて見ると東京の空氣は矢張り重いものだと感じます。

御良人様と思はれる手蹟で上書きされた歌集がたしかにとゞきました。氣の落付いた時拜見しようとおもつてゐます中に何處かにはぐれてしまひました。一寸した處に惡戯らしく潛んでゐるには違ひありませんが、拜見もせずに御手紙をさし上げるのもいやですから、澀尾夫人（と仰有いましたか知ら）の方へはまだ御挨拶致しませんが、其中尋ねあてたら直ちに拜見して手紙でもさし上げるつもりでゐますから、恐れ入りますが御序が御座いましたら其趣を不惡御傳へを願ひます。

十五日から私の「死と其の前後」がまた有樂座で演ぜられます。前の時の種々な思ひ出が今更ら繰返されます。あの時の御厚意を……餘は拜眉の上。御良人様にもよろしく。

九月七日夜　吉右衞門あての脚本を草しつゝある机邊にて

## 母堂宛――九月八日於麴町　〔四七二〕

其後は暫らく御無沙汰申上居候處御健勝にてお過しの事拜承重疊の事に奉存候。降て當方一同至て頑健、子供等は雨の晴れ間には素跣足にてボールに熱中し居り、淺井、吳の兩君も時には遊來致され愉快に消光致居候間乍憚御安意被下度候。私は執筆の爲客を謝して多忙に暮し居候。十五日より有樂座に行はれ候三日間の「死と其の前後」の稽古も大分形が出來候由にて今日は午後出向かんかと存居候。山內のあき子さんが自動車にて迎ひに來てくれられる筈に相成居候。分家信子あき子の兩人は昨日雨の中を歸鎌致候。それと共に木田君も見物かたぐ〳〵荷物の世話に出かけ候。一時は來客非常に多く女中達も困り入候樣子なりしが漸く平靜に復し候。壬生馬はまだ滯在中。今日が二科會の招待日に候。昨夜來大雨加之多少の雷鳴と風と有之今日の日比谷の歡迎會も二科會も如何と存居候處、九時頃より陽光を見るに至候事なれば其の向の人々のよろこびは一層の事と存居候。

十日には午前十時の汽車にて御歸京相成候由其節を樂しみ居候。東京も此頃は例年になき程冷氣に相成凌ぎよき事に御

座候得共、是れでも晴天に相成候はば多少の殘暑可有之候や。御歸京迄折角御靜養の程祈り上候。
先は右一寸御報知旁〻。草々如件。

## 田中周三氏宛――九月十八日於東京　〔四七三〕

御來書を難有ぅ御座いました。私がはじめあの脚本をおもひ立つた時は、和四郎と申す人がそれ程名を得た人とは思はなかつたので、諏訪の方の事はよく調べても見ずに取かゝつたのですが、其後藤森氏からは故鄕では中々高名な人であるといふ事を聞かされて、それから急に實錄をしらべる餘暇もなかつたものですから、ちがつた名で單に諏訪から出た彫物大工として脚色する事に致しました。それにしても御厚意は難有く存じます。他日貴地に一遊の機會でも出來ましたら是非和四郎に關する挿話を調べて見たいとおもつてゐます。乍延引御禮迄。

## 古川光太郎氏宛――九月十八日於東京　〔四七四〕

如何なる原內であるにせよ事實として女性は男性の奴隷となつてゐ、從つて或る意味に於て女性は男性を仇敵としてゐます。是れは勿論無意識に女性の心理に働いてゐた場合が多いのです。同時に兩性はかく仇敵の間柄にありながら本來の親和性を全然撥無する事は出來ないでゐます。この二つの反對した關係が兩性の交渉に色々な悲劇を生む種となります。私の「或女」は是れを主題として取あつかつたつもりです。

女性が本當に自分が男性の奴隷たる境界にあるのを自覺して讀んだら恐らくあの中から一掬の涙を求め出すでせうし、男性が自覺してゐて讀んだら、恐らく此恐ろしい矛盾に對して反省を持たずには居られまいと作者だけは考へてゐるのです。然し私の作物を讀んでそれが感ぜられないのは固より作者の罪でもありますが、一面讀者が兩性問題の根本相に對して本當に考へて見たり苦んで見たりしなかつた所からも來るのではないかと私は思つてゐます。さういふ人に對してはい

くら説明しても無駄な事だから私は敢てあの作に表現しようとした所を申わけはしないでゐたのです。委しくは「惜みなく愛は奪ふ」（拙著）の兩性問題の所、又は「小さな灯」（拙著）の『美を護る者へ』をお讀み下されば多少私の考はわかつて下さるかとおもひます。

## 有島生馬氏宛――九月十八日　〔四七五〕

先達は態々御來京の上「死」を見て下さつて難有う御座いました。昨夜で片づきました。第一日が最上の出來で二日目三日目へと段々悪い意味の芝居になつてしまつたのは悲しい事でした。弴は三日目にはじめて見て其墮落に憤慨してしまつてゐました。畢竟つけ燒刃によりがもどつたのです。それに引かへ見物は三日目などは大入滿員の盛況でしたから芝居は損だけはしなかつたでせう。

又くもつてしまひました。一昨、昨夜のそちらの月は美しいものだつたと察上げます。あきちやんは其後如何。こちらの子供達はあらかた囘復しましたから御放念下さい。

御禮旁々。草々。

信子さんにもくれぐよろしく。海老は實に結構御心入れ厚く御禮申します。山本のお母さんもよろこんでゐました。

## 藤森成吉氏宛――九月二十四日於麴町　〔四七六〕

この間は「妹の結婚」を御惠送下さいまして難有く御禮申上ます。「御柱」もいよく昨日本讀みをしました。二十七日には松本で御柱の祭があるさうですから其日にかけて吉右衛門、里見等が諏訪に出かけるさうです。就ては恐入りますが地方の古い風俗を知つてゐる人及び大工職をやつてゐる人に紹介狀を認め私の許まで御郵送下さいますまいか。御多忙の處を恐入りますが右御願ひ申ます。

## 里見弴氏宛――九月二十四日於麹町　〔四七七〕

「御柱」については毎々御骨折を難有う、御禮申ます。「吹きながしたぞ月の鯉を」は全然削除、放笑以て之れに代へることにし　した。何分御氣付きの個所は仰有つて下さい
藤森君の紹介の件は賴んでおきます。

## 江口渙氏宛――九月二十三日　〔四七八〕

先夜は失禮、足助君から電話がかゝり私の印税は彼處にはいくらもないといふ事及同君の懷中も今は寒いといふ事を聞かされましたので私の手から都合して百圓をお送り申上げます。可然おはからひを願ひます。

## 有島生馬氏宛――十月一日於東京　〔四七九〕

其後は御無沙汰。既におつかれも囘復された由でうれしくおもつてゐます。遠山さんからの來信によるとあき子は少々風邪氣だつたさうですが是亦快方との由、何しろこの天氣にはさすがに雨好きの私も閉口せずにはゐられない位ですから、この上とも御用心の程を切に祈上げます。

昨日と今日「死と其の前後」が再演される事になつてゐます。昨夜の演出は實に見事な成功といつてよいとおもひました。非常に自然な熱のこもつた演出になりました。影の人の假裝も御注文通りにする事にさせました。「御柱」の方は中々の難物らしくさすがの吉右衞門も困つて居るやうです。然し一週間やそこらで一つの脚本の本當の意味を形にするといふのは、する方が自體無理なのではないかと思つてゐます。里見が眼をくぼまして大事に監督してくれてゐるのには難有く思はずにはゐられません。幸に脚本がそれに値してくれゝばいゝとおもつてゐますが。

目下ホヰットマン詩集の整理にかゝつてゐます。夏の間萬事を放擲して遊んでゐたのが此秋は非常に效果を齎らしました。實際昨年は私も病體であつたといふことを感じます。

信子さんにくれぐ〵も宜敷。

## 有島生馬氏宛——十月五日於東京　〔四八〇〕

先日は折角御來京だつたのに不在で殘念しました。

小説と共に私は戲曲を書く衝動も感じます。小説では現はすことの出來ない材料があることを感じますから。處が戲曲を書いて居ると上演といふ事が結果として生じて來ます。それに時間を取られ過ぎるのは閉口だと思ひます。今度のものも吉右衞門後援會に託したのですが、矢張稽古を見に來てくれといはれると行きたくなります。是非もない心の働きだとおもひます。然し是れは餘程警戒を要する事ではあります。

今朝は實に久しぶりで晴れましたね。御同慶の至です。さすがの雨好きも今度といふ今度は雨好きを少し後悔してゐた所でしたから。

間島氏の處に來た畫もいつか見に行きたいと思つてゐます。

信子さんによろしく。草々。

## 藤森成吉氏宛——十月九日於麴町　〔四八一〕

其後は御無沙汰。先日は吉右衞門の爲めに紹介狀を澤山難有う御座いました。

先月二十七日に松本で御柱の祭があつたのださうで其前後に行くつもりでゐたらしいのですが、稽古が忙しいので其ままになり其中初日が五日になつたので蓋明きまでには行けるかも知れないといふので、私があなたにお斷りをしようとい

つたのをもう少しそれは待つてくれと里見がいつたものですから其儘にして今日まで御無沙汰した事をお許し下さい。
來十一日に御暇があつたら見物して下さいませんか。中川、秋田、足助の諸兄も來てくれる事とおもひます。而して御批評を願ひたいとおもひます。
開場は十二時。私のものは夜七時半頃にお出で下されば丁度よいとおもひます。座の前のさるやに行かれて有島の席をと仰有つて下さい。若しお出がむづかしいやうでしたら乍憚御寸報を願ひ上げます。

## 里見弴氏宛——十月九日於麴町　〔四八二〕

昨夜新富座に行つて見ました。何んだか一體の調子が誇張され過ぎて居るやうで深い味が殺がれたやうで殘念と思ひましたが、何しろ吉右衞門が氣を滅入らして苦心してゐる樣子を見ると氣の毒でなんとも物がいへずに歸つて來ました。
革羽織の事は久保田氏は却て前の方が自然でいゝとの事で一寸吉氏にはいつておいたが今朝取消しの手紙を出しておきました。お出の節親しく御相談下さい。
毎日の雨誠に困却。

## 木田金次郎氏宛——十月二十三日於東京　〔四八三〕

そちらは嘸寒くなつたでせうね。こちらももう火鉢がほしいまでになりました。其後仕事はどうですか。立派なものが出來るやうにと祈つてゐます。私も目下は新富座の芝居の方に大分時間を取られてゐますが、それが濟んだら存分に沒頭したいとおもつてゐます。
福田久道氏からミレー傳をあなたと私とにあてて送つてよこしましたからお屆けします。私は一覽しましたからあなたの方におとゞめ置き下さい。插畫にははじめて見るやうなもので而かも實に素晴らしいものがありますね。少し文學的情

調がかつて居るやうにも見えますが、畫としての自然の切取方からいつても見事なものだと考へました。
藤森氏に送るべき畫は私が額緣をまだ見付けない事からまだおとゞけしないでありますo 怠慢を許して下さい。これから面會日を金曜日にきめて少し暇を作りたいとおもつてゐます。
母はじめ一同元氣でゐます。あなたの方も御健康であるやうに。

## 末光績氏宛——十月二十三日於東京　〔四八四〕

この間も足助と兄の噂をしてゐたのだつた。折角お訪ね下さつたのに玄關拂ひを喰はせてすまなかつた。實は餘りに來客が多いので遂制限を餘儀なくされたのだが、玄關番は誰れ彼れの容赦なしだから失禮した事とおもふ。今度來られる時には午御面倒豫め御一報を乞ふ。さうすれば金曜日でなくてもお眼にかゝりたいとおもふ。殊に今度の金曜日即ち二十八日には朝から旅行に出るから萬望來ないでくれ給へ。
大學の方の講義は面白いか。靑年達さへつまらぬ〳〵と愚痴をいつてゐる位だから兄などにはあき足らないものが多いとおもふが中には硏究の clue をなしてくれる講義もあるかとおもふ。
二十九日まで新富座で吉右衛門が僕の「御柱」といふ一幕劇をやつてゐる。毎夕七時頃から五十分位だ。一度立見でもしてくれ給へ。吉右は可なり立派に劇を仕活かしてくれてゐる。
餘は御面會の上にて。草々。

## 足助素一氏宛——十月二十五日　〔四八五〕

詩の朗讀がそんなに不可解だとは少し悲觀したね。一人舞臺で朗讀會をやつたら僕の持たせようとしたリズムもわかるだらうし本もいくらか餘計賣れるかと思つたのだが兄のいふ如くんば却て反對の結果を來しさうだね。それなら考へもの

だ。

二十八日の朝僕は北信の旅行に發つから年譜の校正刷が其前に出るやう御催促を願ふ。

寒くなつた。用心をしてくれ給へ。

## 唐澤秀子氏宛——十一月八日於東京　（四八六）

先日は御電話であつたさうですが丁度不在で失禮しました。北信の讀者連にまねかれて戸隱山まで行つて來ました。別に鬼女には遇ひませんでしたが、中社の本陣に泊つた夜初雪が五寸近く一夜の中に降り積みました。翌日は日本晴れ、山又山の紅葉に積み積もつた其雪の白き樣を想像して下さい。歸りに諏訪にともおもひましたが歸心如矢で其儘歸京してしまひました。

あなたの御健康の勝れないのを御案じしてゐます。切に御加養を祈ります。病氣といへば無極氏の乘つて行つた船は稀有の嵐に襲はれたやうですね。可哀相だつたとおもひますが、其時の樣子を考へて見るといつでも聲を立てて獨り笑つてしまひます。「これやいけねえ」とか何とかいつてあの大頭にはちまきでもしたかと思ふと。

この間中三日程飯塚友一郎氏の家で「老船長の幻覺」が試演されました。今年演ぜられたどの私の戲曲よりこれは藝術的に演ぜられた氣持ちのよいものでした。それにつけてもよい小劇場がほしいものです。

寒さに向ひますから呉々も御大事になさるやう祈上げます。

## 牧山正彦氏宛　——十一月八日於東京　（四八七）

手紙をありがたう。

「御柱」の批評はあなたのものを最も暗示深く讀みました。殊に平四郎のはじめの態度が脂つこいとの御感想は適切です。

私もはじめからそれを知つてゐましたが、どうも私といふものにはまだこの脂つこさが可なり執拗にこびりついてゐるので此點は乍殘念今のまゝにして置くより仕方がないとあきらめてゐます。平四郎と嘉助との交渉については一つ十分に書き改めて見たいと考へてゐます。何といつても實演されて見ると長短が明確に判るのがうれしい事です。

あなたの御仕事が色々の事情の爲めにさまたげられてゐるのは仕方がないとして、學校の方がおもしろいのは何よりです。そんなに內容のゆたかな西田さんの講義は私も聞かせていたゞきたいとおもひます。あなたが自分の力で其講義の中から新しい力を育て上げてゐられるのが羨ましく想像されます。

此頃は私も精を出して讀書に沒頭したい氣持ちにもなります。兎に角こゝ暫らくの間は恐らく私には思ひ入つたやうな作物は出來ないらしく考へられます。實生活改造の機も近づいて來たやうですから。

先月末に北信に二三日の旅をして來ました。自然は矢張いつも若いと思はれます。

今日は十一月らしい荒い風が吹きすさんでゐます。天氣はよいのです。私は少しつかれてゐますが幸に無事です。

## 藤森成吉氏宛——十一月十六日於麴町　〔四八八〕

飛んでもない御迷惑をおかして誠は申譯が御座いません。倉田氏の方に手紙を出して廻送を依賴しておきましたから不日御入手下さる事とおもひます。

貴著御惠送下さいまして誠に難有う御座いました。どんどん御作が出來て行くことを羨ましく存じます。私は今年は「白官舍」と「御柱」との二篇が出來たばかりで心細い思ひをしてゐます。早く生活を何んとかして思ひ切つた作がしたいものだと願つてゐます。今のやうに實生活の上に疑ひがあつたり面倒があつたりしては心が萎えてしまひます。

其中又拜眉の折を期し御詫旁〻。草々如件。

こちらこそ大變御無沙汰をしてしまひました。論文においそしみの由いゝものが出來上るに違ひないと思ひます。それに題目が極めて有意義な而してあなたに適合したもののやうに考へられて一層その完成が期待されます。完成の上は是非發表なさるやうお勸めしたく思ひます。私は引續き會心の場合に遇ふ事が尠いのに閉口してゐます。自分をも一度凝視すべき時機が來たやうに考へられます。「白官舍」にしても毎日机に向つては見ますが、書いては破り、書いては破りといふ有樣です。今一寸その方を抛擲して喜劇を一つ書いてゐます。喜劇ははじめての試みですが、そんな氣持ちが變に動くのでやつて見てゐます。

御姉上も無事ですか。近頃暫らく消息を伺ひませんが創作の方もやつてお出でですか。先月から草の葉會が復活されてゐます。この前の時には珍らしい蠣山、市河、蘆野、といふ人達も見えました。昔私が無政府主義を主張した時蠣山君などは國家基本の世界主義を主張してゐましたが、この頃は大分あの人達も考へが變つて來たやうです。時勢といふものは不思議なものだと思はれます。前會には長谷川如是閑氏が來て盛に支那の無政府的實情を讃美しました。面白い會合でした。さういふ時には殊にあなた方を思ひ起します。

久保兄も御同居と思ひます。宜敷御傳へを願ひます。

ひよつとすると五六日中に歐洲から歸る弟を迎へに神戸まで行くかも知れません。然し貴地に立寄る暇はあるまいとおもはれます。祈御健在。

## 谷川徹三氏宛——十一月十九日於東京　〔四八九〕

## 足助素一氏宛——十一月二十三日　〔四九〇〕

風氣味であつたとの由この頃久しく會はないので一向に知らずにゐて御見舞もしなかつた。一昨日あたりからひどく寒

くなつたから折角御自愛を祈る。
禁煙は兄の健康上から考へて大贊成する。
シンプソン博士といふ學者の事は更に知らない。
ホヰットマン詩集は東京の新聞に廣告が出たが矢張賣れ方は同じか知らん。次版の時の校正は出來てゐるから必要があつたらさういつてくれ給へ。
末光は其後いたちの道だ。
仕事が出來ないよ。だから一遍抛擲して今「カラマゾフ兄弟」を熟讀してゐる。頭の中がしやちこばつてしまつたものか。

## 有島生馬氏夫妻宛――十一月二十八日　〔四九一〕

唯今遠藤に託された御供への御菓子と御手紙三通とを確かに落手しました。とう／＼御引移りになつた由、嘸御不自由なことと御察しします。殊に生馬君には多少の腸出血があつた由、無理をなさらぬやうに養生の程祈上げます。
信子君の御肯折誠に／＼御察しします。何卒健康を害されぬやう氣をおつけ下さい。
昨日錦水には二十三人あつまりました。父上の肖像と「神無二心」の幅とを欄間にかゝげ非常にうちくつろいだよい會でありました。今朝は又幸に好天氣であつたので墓前祭も不寒、今は子供連が十人來て食事をしたゝめてゐます。中々賑やか。夜は原田君が活動寫眞をうつしてくれる筈。
行郎の歸朝は延びて三十日の午前八時頃といふ事になりました。夫故私も迎へに行けるので明朝九時半の汽車で章子と共に神戸迄出向きます。而して成るべく早々一緒に歸京したいとおもつてゐます。
御手紙を持參して神戸に持つて行きます。大騷ぎな間から一筆草々如件。

## 木田金次郎氏宛――十二月八日於東京　（四九二）

東京でさへ北海道のやうに寒くなりましたから御地の寒威をはるかに御察してゐますがお障もなくおくらしの事とおもひます。母も私も子供達も無事です。近頃末の弟も歐洲から歸つて來て其中結婚するといふので何やらにぎやか立つてゐます。私の仕事は思ふやうにはかどりませんが是れは心配せずにゐて下さい。私自身は心配をしてゐませんから。原因さへ除かれゝば私は又前以上の仕事の出來ることを知つてゐるのですから。唯書き上げたら書き上げただけの甲斐のあるものを書かうとすると隨分躊躇されますね。あなたの仕事は如何ですか。此頃御手紙がないので漁の方がお忙しいのだらうと思つてゐます。然し是非あなたの畫の方も忘れないでお勵みなさる樣祈ります。するめとかずの子とを難有う。かずの子は毎日食事の時賞美してゐますし、するめは子供達が大好物で日毎おやつにしてゐます。「女」もとゞきました。ホヰットマン詩集の代本はあなたの方に送りましたらうか。まだ落手なければさういつてよこして下さい。

寒さを御用心。

## 原久米太郎氏宛――十二月十七日於麴町　（四九三）

どうもこちらは變な氣候が續く。今日などは微雨を含んだ南風が春先きのやうな暖さを送つてよこす。何んでも太陽に黑點が出てゐるさうだからその加減なのだらうか。兄の所では皆さんおさはりもないか。僕の方は幸に一同頑健でゐる。

今月の六日になつてから突然行郎の結婚談が持上つていよ〳〵十二日擧式及び披露といふ事になり實に天手古舞の騷ぎをして辛く事を終へて一安心した。兄の所にもお知らせすべきだとは思つたが、却而御迷惑をかけるのは心苦しいから事後に一寸お知らせする。唯よろこんで下さりさへすればそれで十二分だ。新夫婦は目下箱根邊を旅行してゐる筈だ。

露國の饑餓農民の爲金策の講演會が二十一日と二十二日とに大阪で開かれるので、秋田雨雀、藤森成吉及び僕が出向く

ことになつてゐる。何時こつちを發つことやら會場が何處だやら、まだ打合せがついてゐないが、多分今度は多忙の爲め兄をおたづねする暇はなからうとおもふ。社會主義者の連中が司會者だから中止を喰はないとも限らない。東京で催うとした諸家作品展覽會は絕對に禁止されてしまつたやうな次第だから。

今度の改造に書いた小文は暇があつたら讀んでくれ給へ。所謂主義の指導者なるものと主義藝術家なるものの態度があきたらないので少々つむじを曲げた所だ。

正月に御來京の時はアインスタインの講義をわかり易いやうに是非お賴みする。

以下次號草々。

## 河上肇氏宛――十二月十九日於東京 〔四九四〕

爾後御無沙汰に打過ぎて居りましたが御令息の御病氣は其後如何で御座いますか。寒さの折柄嘸御難澁の事とお察し申上げます。御快方の程祈上げます。

改造の正月號に「宣言一つ」といふ小文を投じました。その中にいつぞやあなたと始めてお目にかゝつた節の談話の一部分を揭げました。私の會話を公けにするのは如何かと一時は迷ひましたが、御迷惑になるやうな事はないと思ひましたので取入れました。然し是れは私だけの考へであなたの方からお考へになつたら或は御迷惑になつてゐるかも知れないと恐れます。若し左樣の際は何卒存分に御叱正の程願ひます。

自分と自分の仕事とを自分で明かにして置く必要からあんなものを書く氣になりました。多少他人にまであたるやうなことをいつたのはこの頃の中央文壇の空氣の中に私としては好ましく思はれない流行思想かぶれの議論を聞くのが乍生意氣氣に喰はなかつたからです。

あなたのお名前を出した事からこのおことわりをして置く必要を感じまして此手紙をさし上げます。

奥々も御健康を祈上げます。

## 川田順氏宛――十二月二十一日　〔四九五〕

其後は御無沙汰申上げてゐますが御健勝のことと存上げます。この間一寸大阪の方まで講演に出かけて警察の方から没義道な干渉を受けて苦笑せねばならぬやうな目に遇つて歸つて來ましたが、滯在があわたゞしいのでお眼にかゝらうとする心さへ動かずにしまひました。

「山海經」を難有う存じました。此頃になつて詩人の境界が羨まれてなりません。小說などを書いてゐると實際藝術家の賤民といふ氣がします。然し詩人となるべき天分を受けてゐないかなしさにはその境界は單に蜃氣樓を望むほどのはかなさです。拜讀していさゝかでも詩境にひたりたいと思つてゐます。御禮迄。

## 母堂宛――十二月二十八日　〔四九六〕

御健勝の御葉書拜讀安心此事に奉存候。ゆる〳〵御つかれ御休め相成候樣祈之候。此度は誠に彼是御多用にて積日のおつかれさこそと存上候。

昨日は章子振袖「よく似合ひ申候」行郎シルクハットといふいでたちにて私內大臣格にてつき添ひ、山本、神尾、有島、山內、高木、秋谷の諸家を歷訪囘禮相すませ申候間御安神可被下候。

向井はアモイに赴任する兄に面會の爲め今夜歸鄉致候由、しげは寒さにさはりて今日はふせり居候。其他一同無事奮鬪致居候間幸に御休神被下度候。もちもつき申候。

壬生馬、信子、あき子諸氏によろしく。子等にも可然御傳聲奉願候。左右御伺旁〻右のみ。草々敬白。

多忙亂筆御寬恕被下度候。

# 一九二二年

## 石山太柏氏宛――一月九日　（四九七）

この度の御決心に付奥樣の御心事お子さまの御境地まで推察申上げて、あなたの悲痛な御心中に對し他人事のやうには思はれぬ氣が致します。凡ての事情がそこまで行きついたのならそれを徹底して見るより道はありますまい。藝術にまれ何にまれ一事に捧誓するものに早晩來らねばならぬ事でもあるやうにも考へられます。私一身の上にも近い將來にさうした變化が起るかとも考へられます。何しろあなたの御仕事がこれを機にして益〻光りかゞやくものになりまさつて行くやう午蔭祈上げます。

頂だいした御畫に對しても代金をさし上げるのが至當と思ひますが目下手許には印税が全くはいらない有樣なので、心ならずも前々御融通申上げておいた金の中から相殺していたゞかねばならぬを遺憾に存じますが不惡。相殺の殘金については決して御心配下さらぬ樣願つておきます。餘は更に拜眉の上。草々頓首。

## 里見弴氏夫妻宛――一月十一日　（四九八）

此度參上の際は色々御芳情を御禮申上げます。あれから鎌倉に歸り生馬方に一泊の上今日一時頃歸京しました。病氣平癒。唯濱にての運動にて筋骨强直少々閉口。

「おせつかい」拜讀。あとを期待してゐます。少女憧憬の筆頭に拙名を見出した時には苦笑を禁じ得ませんでした。飛んでもない所で手痛いひき合ひに出されたものでした。不取敢御禮迄。

## 武者小路實篤氏宛――一月十三日於東京　〔四九九〕

こちらからこそ御無沙汰してしまつて申譯ありません。いつぞやは曠野社からあなたの書物がとゞいて來ましたがそれにも御禮を申しませんでした。それから「星の群」誌も毎號送つて下さるのに今度はこちらが不精をしてゐて寄稿もせずにゐるのをすまない事に思つてゐます。新しき村の爲めの選集は幸ひに寄稿人員はまとまりました。新潮社でもそれぞれ運んでゐることと考へてゐますが、最近には委しい消息を聞きません。私は旣に校正を送りました。近い中に出ることとおもひます。あの本が十分に賣れて少しなりとも村に餘裕をつけることが出來るやうにと祈つてゐます。

吉右衞門へのものはお書きにならぬ由、最近私は彼に遇ふと思ひますから一つ直接尋ねて見ませう。きつと喜んで御願ひするだらうと思ひますが、若し御願ひしたら書いてやつて下さるといゝとおもひます。あの人は藝術に對する或る純眞さと實力とがあると思ひますから、いゝものをやらせて其力を延ばさせて見たいと私は思ひます。

東京は非常に寒いことです。貸地は今はよい事とおもひます。

私に劇曲を捧げて下さる事、それは難有う御座います。私に取つてそれはいつまでもよい記念となり思ひ出となるでせう。

友情の囘復につけても私に忠告すべきものをお持ちでしたらどうかいつて下さい。

## 唐澤秀子氏宛――一月十四日於東京　〔五〇〇〕

あなたも少し御加減がよくなかつたのださうですね。私のは何んでもない單なる風邪でしたが何しろ病的に健全なものが病氣をしたのですから一寸頑健的な病氣でした。然しもうよろしくなりました。

さうです四十五になりました。四十五になつて見ると四十五といふ年齡は小僧つ子のやうな年齡だとより思はれません。

自分のして來た事からさう思はれます。あなたは二十八になられたのですか。どん／＼若くおなりなさい。成瀬君見たいに四十だ四十だといつてゐるのは藥にならないやうですね。

年なんぞはどうでもいゝとしてあなたの今年のプランは何ですか。私は今年は少し澤山する仕事があります。見て居て下さい。お暇の節は電話で前觸れをしてお話しにお出下さい。話は御承知の通り下手以上ですからあなたが澤山持參を願ひます。寒いから御用心。

## 大島豊氏宛——一月十四日於東京　〔五〇一〕

My dear Y. Oshima:

First let me send you my hearty greeting of happy New Year, putting aside all the short comings of my long silence.

The long tidings you kindly sent me frequently have been read with keen joy and interest. Those letters tell your life there full of effort and diligence. You must acquired many things which might slip from your grasp, had you lived otherwise. Still I can well imagine the suffering and care you have undergone, and which you never could and would unbosom to any person. Hard as they are, you must endure them however. Your native land is in tumult of rebirth. The surface of social life is yet going smooth; at least it looks so. But if you plunge a little its bottom, you shall be surprised to find that the numberless germs of revolution are in state to shoot up at any moment. And no man who is competent though to meet the occasion's demand seems to have appeared. The cause is at bay. Can you see that at the place where you stand? Other day you wrote me that the problem which occupied your mind is to level down the impartiality of race feeling. I know that really is one of the great problems the world must confront with. But greater problem, it seems to me, is surely the rapture between

Middle Class and the Mass people. Now the connecting bridge between those two classes has rotten entirely. Next thing to occur is merciless revolution. And there is help too. Since the last part of the former year the farmer people have begun to awake to their real situation and commenced to take the martial attitude towards the land-holders and their helpers. This is a great story. Anybody who would have any concern to the actual life of Japan must prepare himself with the clear, conscious view on the coming social change. I advise you to build your standhold before you come back to Japan.

As to my own life, I am doing my best to produce my work to my uttermost ability. But owing to some reason or other I have not done any credible work that I could show you with self-confidence. I am ashamed of it. This is the reason why I have not sent any book these days. But I won't stop short here. If happily I could pass over this inner crisis, I am sure to be able to proauce things of more worth than those I have produced till now. If I could not, then farewell to everything.

Other day I met Mr. Sonoike. He was complaining about your silence inspite of his frequent tidings. You have not written me rather long recently. I heartily hope that anything amiss has not happend to you. My mother was so pleased with your kind remembrance you sent to her. I also thank you for your considerate deed. I was also in receipt of your photo. You looks like a philosopher in it.

My three children are doing very well. They are grown up splendidly. You could not recognize them now.

Anyway I sincerely pray for your good apptitе and bright spirit. When do you come back? Come back anyhow with lot of おみやげ to expand my narrowed brain with the latest knowledge.

Mrs. Sakurai is in curious situation. She took headlong to the dance, and has lost almost whole interest about home life. Poor girl! She must be in wrong relation with her husband. 井上お初 had got a girl baby last year, and is very

happy with her husband. My youngest brother was back from abroad Dec. last year, and is living with us newly-married wife, 生馬 and 英夫 are in fairly good health, and are doing their work whith competence. My mother will write of her herself.

Whith best regards and expecting to hear from you before long.

Yours as ever,

Takeo Arishima.

I am going to give up to society all the inheritance from my father. I will live a naked man. This was my longcherished wish. May this do me some good.

### 長谷川如是閑氏宛——一月十四日 〔五〇三〕

Dear Comrade: ——

Thank you for your short note upon your perusal of my small essays in 改造 and 大觀. To know my petty thought was appreciated by a man like you is a great encouragement to me. I won't stop short with my thought. Wish very much to see you and be taught. Shall realize it in one of these days when your leisure time comes. Beside, I must carry out my duty of writing an article for your magazine. Please belive that I never forget it. Also I must challenge you a contest of archery before long. Be ready about it.

Looking forward to our meetting in very near future, I remain.

Yours as ever,

Takeo Arishima

## 吹田順助氏宛——一月十九日於東京　〔五〇三〕

十二月七日の夕方に書いて下さつた御手紙をなつかしいものに拜見しました。

あなたが海にある時起つた御母堂の御逝去のことを何よりお痛み致します。足助と二人で御留守宅に出かけたら、墓地に行かれて御不在でした。奥さんの弟さんかと推される青年が一人居られました。

林(倭衞)君から汽車の中であなたに遇つたとの葉書は、前にもらひました。同君が上海で既に外遊にあきて來たとの噂を聞いて面白いとおもひました。スペインの金儲けもうまく行かなかつたのでせうか。巴里及び伯林に於けるあなたの御消息は私にいろ／＼なことを思はせます。戰後のあわたゞしいそちらの生活の樣子が、あなたの御手紙の中にも看取されます。

思へば私達は實に千載一遇の時節に遇ひ得たといつてもいゝと云へませう。そちらにゐられると今後の人間の生活が如何向いて行くかが割合に明らかに見える事とお察しします。資本主義と共產主義との過渡期には如何なる生活が生れ出ようとして居るのですか。その過渡期には如何なる思想と藝術とが釀されようとしてゐるのですか。さういふ事について私の心の觸角は朧ろげながら或者にさはつてゐるやうにもおもひますが、それが果して眞であるが如何かは自分にも解りません。何しろ今年に於而私は自分の生活をいよ／＼少しちがへて見ようとおもつてゐます。人としての私は今危機に臨んでゐます。內部の生命が脅かされてゐるやうで創作が出來ません。これは單に怠慢からばかり來てゐるものとは考へられません。寧ろ內部のものが私に怠慢を强ひるのです。「白官舍」の續きなる「星座」に既に業に執筆に着手してあるべくしてまだ着手してゐません。此頃小說のプロットなどを考へてゐるのが變に氣がひけて來ました。もつと端的な表現に赴きたいといふ熱意が燃えます。矢張詩や音樂が羨しいとおもひます。

此春は出來るなら單獨に雜誌を出したいと考へてゐますが足助が躊躇してゐます。足助は商賣の方で少しつまづいてゐ

るものだから自重を餘儀なくされてゐるのです。
日本の生活ですか。何んにも變つたことはありません。ブルジョアの生活が全く行きつまつてゐるといふ事を總ての現象が明らかに語つてゐます。繰返しは行はれてゐますが發展といふものは何處にも見られません。藝術の世界が矢張その通りです。心をおどろかすやうな生活も作品も何處にも現はれ出て來てはゐません。何んだか世の中が殊の外淋しくおもはれます。
あなたに見ていたゞく事の出來なかつた「御柱」は割合に成功だといつてよかつたとおもひます。中日過ぎからは吉右の解釋は水ぎは立つて冴えました。而して十分に或る感動を見る人に與へることが出來ました。あの役者に若しよい coacker が出來たなら必ず一人のよい舞臺藝術家となることが出來ると信じます。一昨日も一條大藏に扮した彼を見てさう感じたことでした。
其後戲曲は一つ出來さうになりましたが出來ずに仕舞ひました。
この春は出來るなら朝鮮から支那に遊びたいと考へてゐます。支那人とその生活には、特殊な觀察が出來るかとおもひます。
御留守宅を御見舞すべきでありながら遂に御無沙汰をしてゐます。今年になつてから東京は思ひの外寒いのですが――今朝も雪が四寸程積みました――別にお變りないこととおもひます。
どうぞ御暇の節又伯林の消息を聞かせて下さい。あなたの消息を若し何にかにでも出せるやうな形式で送つて下さると、利益を被るのは私ばかりでなくつて大變によいとおもひますが……
封入下さつた葉書はおもしろいと思ひました。表現主義といふ事に關する感想を大觀の正月號に揭げておきましたが、それが若し御手に入つてその批評を與へて下さるなら幸です。改造の正月號にも一文を投じました。この一文は可なり反響を呼んで大杉榮氏などを怒らせたといふ事です。
一九二二年

御大事に。私も大事にします。林兄にお逢ひの節はくれ〴〵も宜敷。
此手紙御落手の節は成瀨氏にもお逢でせうか。圓山のおたまさんの家に强盜が押しよせたさうでしたが幸に息災だつたさうです。その事をお傳へ下さい。

## 有島生馬氏夫妻宛――一月二十二日　〔五〇四〕

其後は又御無沙汰しましたがこの稀有の寒さにも御障りありませんか。こちらでも母上などは全く閉口してまだ熱海行も思ひ立たれぬ仕儀です。私も數日前からまた珍らしく鼻かぜを引いて引こもつてゐましたが昨日猿樂町まで能を見に出かけました。
行郞に託してレコードを難有う御座いました。それを樂んで聞いてゐます。
隆三夫婦がいよ〳〵十三日頃の船で歸國するやうな事をいつて來ました。まだ船のやうすは會社の方に聞いては見ませんが……
社會問題硏究二册をお送りします。一つは河上氏と福田氏との行き方がおもしろいのと、一つは露西亞革命のよい一つの考へ方とがあると思ひますから。
子供達が成城小學校といふのに通ひはじめました。數日の事だからよくは分りませんがこれまでの所では格段に結果がよいやうです。自發的に自習などをやつてゐます。家庭敎師の必要もなきに至りさうです。
御健康を祈る。

## 八木澤善次氏宛――一月二十九日　〔五〇五〕

御手紙を拜見しました。例の公會堂の金が取れなかつたさうで御氣の毒をしました。市役所の方からはまだ何等の書類

も送つてよこしません。委任狀は早速捺印の上御返送申上げますから宜敷お願ひします。

兄との會見について河上さんからも葉書を頂きました。而して社會問題研究も。それを讀んで私は自分の事實に卽した知識の不足なる事を發見して恥しく思ひました。早速河上氏に御禮をしました。然しあれを讀むにつけても大杉氏が二月號の改造に出したバクーニンのやうな考へ方についてもう少し識者の說が聞きたいやうにおもひます。よい本でもあつたら敎へて下さいませんか。

私の言說が表面の熱情に似ず理智的な印象しか與へないとの御考へに對しては暫らく沈默を守ることにします。その中あなたに少しくうなづいていたゞく事が起るかとも思つてゐますから。

其後家は見當りましたか。あなたの方のその事も順當に行くやうにと祈つてゐます。

明日は又弟の隆三夫婦が米國から歸つて來ます。これで兄弟全體が日本に揃ふことになります。是れには一種の攝理を感じます。來月こそは創作に沒頭したいとおもつてゐます。今日「白官舍」をもう一度讀み返して見て少し勇氣を恢復しました。

河上さんが藝術家はエゴイストだから云々といはれた事は勿體ないやうな氣がします。それに堪へるだけの仕事の出來ないのがつらく感ぜられます。

右御返事旁〻。草々。

この間堺老と會食した時にも「宣言一つ」の話が出ました。それは「前驅」に出てゐるさうですが、まだ讀みません。堺老はあの感想は誰にも贊成されないといふ特色を持つてゐると評しました。それがいろ〳〵な意味で、私をほほゑませました。

あなたの用ゐられるあの封筒は硏究所のものなのですか。さうだとするとあれが私信に用ゐられるのは妙に私には忌まれます。山川總長のまねではないが勞働問題硏究に用ゐられる費が用あなたの私用に多少なり供されてゐるといふ事

が氣になるのです。

これは前から一度申さうと考へてゐた事ですが餘白を借りてこゝに認めます。餘計なつまらぬ事をいふのを許して下さい。而して餘り氣にせずに讀んで下さい。

## 牧山正彥氏宛――二月七日於東京　〔五〇六〕

再度の御手紙に御答もせずに打過ぎてゐた事をお許し下さい。あなたが私の人間及仕事に對して色々に考へ深く思索して下さる事を感謝してゐます。よしそれはあなたの安心の爲めだとするもその思索の結果は私にもいゝ意味の影響を與へてくれる事は確かです。只一點に於て現在の處あなたと私との距離が生じてゐるやうです。あなたは Sollen を普遍的な力として把摑しようとしてゐられるし私は自分一個の Sollen が何であるかを摸索してゐます。換言すればあなたは私よりも客觀性に富んでゐられるのです。實際の事に於ては或はあなたの方が私よりもより多くエゴイストであるかも知れないけれども、形而上學的の問題になるとあなたは私よりも遙かに客觀的であるといふ點に相異が生じて來るのではないかと考へてゐます。

「宣言一つ」の反響が新潮には片上氏によつて、前衞には堺氏によつて現はれました。三月號の我等に於て私はそれに答へるつもりでゐます。私が物を斷定し過ぎる嫌のあるのは自分でも承知してゐますけれども是れも生れつきなのでせう。やめられません。

金のことが大變おくれてすみませんが小泉鐵氏から六百五十圓お送りする事にします。それを家賃とあなたの學資とにお使ひ下さい。

あなたの結婚生活に對する惱みは多少夢想家的な處があるのではないかとおもひます。あなたが要求されるやうな妻は果して得られるものでせうか。

私は今星座に苦心してゐます。三月中には是非書きあげてしまひ度いと考へてゐます。

## 有島生馬氏宛――二月十六日於東京　〔五〇七〕

先日は突然參上致し御病狀が思つたより輕く見えたので安心して歸りました。診斷の結果もさうであるやうに祈つてゐます。行三を永々難有御座いました。昨夜至て元氣で歸宅しました。今日だけ休んで明日から學校に出るやうにさせます。藝術の事についての御勸告を難有く思ひます。然し目下押寄せつゝある生活の更新問題は百年二百年以上の問題だと私は考へてゐるものです。藝術家であらうが何であらうが此問題に對して自分の態度を決定するにあらざれば誠の仕事を成就することは出來ないと考へてゐます。考へてゐるのみならず私としては實際出來ません。今日の政治問題などにあれ程冷刻な私もこの問題には日夜考へこませられます。

信子さんにも宜敷。又寒くなりましたから御用心。

## 淺井三井氏宛――二月十七日於東京　〔五〇八〕

今日の御手紙を先程拜見しました。私が此頃手紙をさし上げないのは時々あなたとお目にかゝる事が出來るのでお手紙をさし上げる必要を感じなかつたからです。萬望惡くおもはないで下さい。

此度は御姉上樣方とゆつくりおあひになつてよくお話合ひになつた事を大層よろこばしく思つてゐます。實際御姉上方はあなたの長い未來について心から色々心配してゐられたやうですから、嘸安心もなされよろこびもされた事とおもひます。今後ともあなたはあなたの道を眞しぐらに進んで皆樣にこの上のおよろこびと御安心をおさせ申さる樣御精進の程を深く祈つてゐます。

畫の事については度々申上げる通り、唯見た眼の美しいといふ事ばかりに氣を取られずに、物の眞といふ事、一見醜と

見えるものの中にも見入つてゐると云ふべからざる美が潛んでゐるといふ事、自分の表現に他と混同すべからざるスタイルを創り上げるといふ事、夫等にも十分の注意と修道とを積まれん事を希望します。といつて實際あなたが作品を見せて下さると私には中々どこがどうとの判斷はつかなくなりますが、是れは自分の仕事から得た經驗を申上げるまでです。

私も毎日机に向つては居ますが原稿紙の白い場合の多いのは悲しい事です。然し今私は是れにさして不安は感じてゐません。私の生活が改つて來れば自ら作も出來るやうになるものと信じてゐます。只時々の雜誌記者などのつまらぬジャナリスティックな質問を以ての訪問は私を苦しましめる事並大抵ではありません。時には自分の仕事に對する凡ての感興が殺がれてしまつて、頭をなほす爲めに屋外に飛び出さねばならなくなります。

ブレークのもの今度あなたがお出で下さつた時御自分で西洋館を尋ねていたゞきます。私が尋ねるといゝのですが今一寸其暇が惜しいやうにおもひますから。ありさうな處を尋ねて見て下さい。

あなたの御仕事が益〻よく出來るやうにと祈つてやみません。子供達は先刻寢につきました。私は今其傍で此手紙を書いて居ます。子供についてのあなたの御同情は一人の親なる私を淚ぐませます。

## 牧山正彥氏宛——二月十七日於東京　〔五〇九〕

御送金が大變におくれて申譯がありません。實は小泉氏に融通した金があつたので其中から送金を依賴した處が、同氏は旅行中であつたので手紙を讀んだのがおくれ加之こちらから申出た金額はおくれないで三百五十圓丈けなら送れるとの事でそれを其方に依賴し殘金三百圓を不取敢直接に電送申上げた次第です。小泉氏の送金は既にとゞきましたか。

御風邪だつた由然しもう御起床で結構でした。然し十分御大事になさい。あなたは丈夫さうに見えてゐて割合に病氣には敏感な一人だとおもひますから。

諸家に與へる答を三月號の我等に書きました。暇があつたら見て下さい。今度（二月）の新潮と我等とに片上氏の弟なる

林竹内仁?(?)といふ人の書いた阿部次郎氏に與へる批評は中々讀みごたへのあるものと思ひましたが如何ですか。阿部氏の答へを樂しんでゐます。兎に角評壇も少し眞劍になり始めたやうですね。あすこがもつと眞劍になつて來ると多少なり創作の方にも其氣分か影響するでせうが。

春がいよ〳〵やつて來さうですね。僕は每日原稿紙を前にして書いては破り書いては破りしてゐます。

## 與謝野晶子氏宛――二月二十日於東京　〔五一〇〕

正月になつたら無沙汰をすると河崎女史に御言傳があつたのは心得てゐますがこちらからはこれほど御無沙汰する氣は更らになかつたので御座いますが、如何した心か自分にもよくはわからぬ傾きから遂に御年首から今日まで御左右をも伺はずに過ぎてしまひました。御起居の樣は蔭ながらお歌のはしに伺ひ得るやうに思つてゐました。學院には時々お出でになるといふ事を秋谷の娘から聞いて御丈夫なといふことも想像してゐました。私はこの頃やうやく創作の氣分になつて每日客を謝して机に向つてはゐますが自分の生活が惡いためか筆が思ふやうに動いてはくれません。全く視角を變へないまではどうにもならない事なのかと思ひます。力が枯れ盡したとはまだおもひませんが何やら心と身と思ひのおかれ處がちぐはぐになつたやうに感ぜられます。思ふまゝにどん〳〵筆を運ばして行くことの出來る人達をこの頃は少し羨ましくさへおもふやうになりました。

春がどん〳〵と近寄つて來るのが心を餘計いらだゝせます。御淸康を切に祈上げます。

## 宮部金吾氏宛――三月十一日　〔五一一〕

其後は慮外の御疎情申上居候處益々御淸祥の段大賀の至に奉存候。降而小生亦幸に碌々起居罷在候間乍憚御放念被下樣奉願候。偖而過日は故クラーク氏傳及同氏記念館の詳細御報知被成下難有、永々御苦心の結果宿志御貫徹の段乍失禮敬服

の至に不堪候。是れを機緣として同氏の芳名は永く日本の一隅に輝き可申と存候。小生も心ばかりなりともと兼ねてより存じながら今日に至るまで何の御手傳も不致汗顏の至に不堪候。其中寸志を寄せ候時期も有之候半か。其節は何分宜敷奉願候。

春めき參りながら今年は中々春來のおそきがかこたれ申候。折角御自愛專一に被遊度此段御禮旁〻。草々頓首。

## 井上みな氏宛――三月十五日於東京　〔五一二〕

ほんとうに御無沙汰のしつゞけで何んともお詫びのしやうがありません。度々のよい御消息又歌などをいたゞきながらこんなに沈默してしまつては濟まない事です。如何かして手紙を書かなくなり出すと、書かうとする方へは尙書けなくなる不思議な性癖から來た事です。あなた方に〔以下抹殺〕

あなた方の奮闘の御模樣は御手紙每に承知して乍蔭およろこびしてゐました。お子さんもおとなしくお育ちの由この上なくうれしく存じます。私の所も一同頑健至極です。〔三兒とも今は澤柳政太郎氏の經營する成城小學といふのに通つてゐますが、學校の方針の自由なのと先生に中々よい人があるのとで殊の外仕合せです。大變に元氣に快活になりました。私は今創作に熱中してゐます。自分でむづかしい道を選んだので期待のやうには出來ませんが、兎に角仕舞までやつて見る氣でゐます。私の實生活の改革もいよ〳〵今月中には決行する事にしてゐます。親ゆづりの資產はきれいに捨てゝしまつて自分の筆の先きでかせぎ出した所で活きてゆきたいと考へてゐます。家內では一騷ぎ起ることとおもひますが、もうそれを氣にして默つてはゐられなくなりました。〔一部抹殺〕

あなた方が段々生活に自由になられて、反對に私の子供達でも生活に苦しむやうな日が來ないとも限りませんが、そんな時には彼等にどうか一顧を與へてやつて下さい。それをお賴みしておきます。御妹御さんからは稀に御消息があるのでしたが此頃は頓と打絕えてゐます。どうなさつたかと思つてゐます。あなたの方からでもお便りのある際には何卒よろし

く。

今日は倉田百三氏が來訪するといふので今心待ちに待つてゐる處です。そのひまに此手紙をしたゝめます。智兄にもくれぐれもよろしく。

## 淺井三井氏宛――三月十九日於東京　（五一三）

この間は來て下さつたのにゆるゆるお話するいとまもありませんでおゆるし下さい。金曜日では迚も駄目です。あの日は割合に人がすくなかつた日ですけれども矢張十二三人の人が見えました。

原町の家は私が著作業といつたのでたゝつたものか斷つて來ました。今まで見た家の中では一番よかつたのに殘念しましたが仕樣がありません。引越しの節は是非手傳つていたゞきます。而して新家にも是れまでどほり遊びに來ていたゞきます。それから今からお願ひしておくのは母は今度は別に住居する事となるとおもひますが此方にも折々は尋ねてやつて下さいませ。今度の事で一番苦しむのは母だらうと思つて氣の毒におもひますから。

あなたに對する私の氣持ちははじめと少しも變つた所はありません。私はあなたの素直な性質を深く愛してゐます。あなたの優しさをうれしいものに思つてゐます。それは決して疑ふ事なく信じて下さい。

もう母上樣はお歸りになつたのですか。あなたも中々お忙しい事とおもひます。十分健康には注意して。御姉上方と本當に理解が成立つたのをあなたの爲めに此上なくおよろこび申します。

今朝は三子と共に私の勉强室の前に花壇を作りました。この家に他人が這入つた後に花は咲くやうになるかも知れないけれども、それもいゝでせう。小さい手が何かよい事をした結果になるでせう。午後からは葵館のデブ君、夜は銀座の散歩。子供達は久振りで銀座の夜景を見たやうです。

夜が更けました。それでは又。

故人と仰有つたことについてはその時にもよくわかつてゐたつもりで何とも思つてはゐませんでした故御心配下さいますな。其後御健康は如何ですか。あまりお忙しいので嘸おつかれの事だと㝡々お察し申上げます。萬望御無理をなさらぬ樣祈上げます。

## 與謝野晶子氏宛――三月十九日於東京　〔五一四〕

成城學校のすぐ近所に都合のよい貸家を見付けましたが、著作業と申したのがたゝつたのか貸してはくれませんでした。御宅の御近所に五間程の五十圓前後の貸家はありますまいか。若し御心當りがありましたらお知らせを願ひます。新見付の方に近ければなほ好都合で御座います。肴町まで參れば電車の便もありますから牛込見付邊でも大して通學に不便はないと考へてゐます。今はたゞ早く今までの重荷から解放されて創作に專一でありたいとのみ希つてゐます。生馬の健康が本當に囘復せぬためまだこの事弟等にさへ委曲は申出て居りませんが、これは相談と申すよりも宣言になることですから弟等に不服があれば私は身一つで家を出るだけの結果になるものです。

野依雜誌に主義についてのあなたの御意見が出てゐてそれに私の考へが一致してゐるのを見て會心を禁じ得ませんでした。本當にうれしく思ひました。

この頃の河上氏の態度も凉しいものだとおもひます。聞く所によれば福田氏の如くマルクスの所説を逆用してマルクスの牙城を衝かうとする學者を徹底的に粉碎するのが大切な仕事と信じ死に身になつて働いて居られる樣子です。論の當否は兎に角あの位眞劍な學者を持つといふ事は私達の誇りだとおもひます。現在の創作界の不振は如何です。實際私達の間には正しい內的生活がないといふ事を思はせますね。これ等の事についての御考へも十分承り度いとおもひますけれども今は暇を得ません。私が仕事を終へたら是非伺はせて下さいませ。何しろ破つて破つて破つて行くより仕方がないかと考へてゐます。ぐづ〳〵してゐると直ぐ厚い皮が張りかけます。もう私もいつまでもおとなしくしてゐられないやうな內部

からの衝動を感じます。只力を統べる力の足らないのが悲しまれます。

それにしても此頃は愉快です。この愉快がすぐ不滿足によつて蝕まれるのは知り切りながら矢張愉快です。私も夢見る事が好きだと見えます。

今朝三人の子供と共に花壇を築きました。晝からは四人連れでデブ君といふ人の映畫を見ました。夜の銀座を散歩しました。歸つて子供が寢てから河上氏社會問題研究の三月號を讀みました。而して今あなたに此手紙をしたゝめます。もう十時が過ぎました。あなたは未だお働きでせうか。繰返しお祈りします、どうか御大事に。

## 武者小路實篤氏宛――三月二十五日於東京 〔五一五〕

もう既に村の方に歸られたのだとおもひます。もう段々農事が忙しくなつて來るのでせうか。御健在を祈ります。「燃える林」を曠野社から送つて來ました。厚く御禮申します。今日は其大分を拜見してあなたの姿が益〻透明に正確に深味を帶びて現はれて來るのに驚きました。本當に不死なものが其中に潛んでゐるのを感じました。難有う。

男澤氏が尋ねて來られました。よい靑年らしく見えます。農科大學の附屬農場に依頼して見ることに約束しておきました。

昨日弟妹に私の意志を發表して一同の承諾を得ました。皆は快く私のしようとする處を認めてくれました。この次は母而して外戚。

倉田兄の「父の心配」を帝劇で見ました。立派な舞臺效果を持つた味のある戲曲だとおもひます。ストリンドベルグの「死の前」には大きな威壓を感じてしまひました。

東京には少し寒さがかへつて來ました。九州の暴風雨には村は損害はなかつたのですか。

## 唐澤秀子氏宛――三月三十日於千葉稻毛　〔五一六〕

私の行く道の事について深い御同情を殊の外難有く存じます。あなたがお若かつた時受けられた苦難についていつか承る機會のあらん事を祈つてゐます。新生活には子供をも伴ひ入れるつもりです。それが彼等の爲めにもよいとおもつてゐます。二十五日からこちらに來て書きものをしてゐます。毎日坐りきりなので膝頭がいたみます。煙草をのみ過ぎます。淋しさには隨分よく慣れてしまひました。くたびれると御存知の下手な謠をうなつてゐます。昨夜は犬が部屋の外に來て吠えましたからやめました。今曉またひどく吠えました。多分謠の夢を見てうなされたのだらうと考へたら犬に氣の毒にもなり自分に笑止にもなりました。

松を吹く風の行衞を追ひ居ればわれとしもなき我れに遇ひぬる

明日歸京。明後日また小旅に出ます。

## 足助素一氏宛――四月十日於東京　〔五一七〕

里見の事隨分癪にさはつたことと思ふ。昨日里見が來てから一寸その事に觸れて見たら、會つて話せはも少し誤解がなかつたらうが何しろ二度まで出版の材料を代へたのだから足助氏が不快に思ふのも無理はないが、新潮社が二百枚位の叢書風の創作の出版を企てゝゐるのでそれには潮風が一番適當だからそれを新潮社にまはし甘酒を取つて貰ひたいとおもつてたのだが足助氏が不服らしいので電話でそれでは矢張潮風をさし上げるといふとそこで足助氏の方から電話が切れたといつてゐた。いつそ綺麗に解約した方がいゝかも知れないと足助がいつてゐたと知らせたら、それなら話が全く新たになるのだからその中話をしようといふ風にいつてゐた。兎に角僕の趣味としては約束は約束で果したら、齒切がよくていゝだらうと思ふのだが、どうも他人の事にさう〳〵口も出されないから默つてゐた。

母は一昨日歸つて來た。熱海に行つてる間は子供もゐる事なり、ごたごたしてゐて話をしなかつた。創作を終ると同時に切り出すつもりでゐる。ひよつとすると不愉快な結着になるらしい。

## 勢田たま子氏宛――四月十一日於東京 〔五一八〕

京都の春ももう老いた事とおもひます。これからの葉櫻のよい時節が却而なつかしくおもひやられます。あなたの御家は廣くなるのですか。

東京は博覽會とかで人出が中々あるやうですが私はおそれをなしてまだその方に足を向けて見た事もありません。京阪らしい言葉の人も時々電車などで見受けます。あなたは中々遊びには出ては來られないのでせうね。

滿韓の旅行も如何なる事やら分りません。私が財產の整理をするのを聞いて滿鐵の重役があんな人間を賴んではたまらないといつてゐたさうです。神經質には驚きますが一方から考へれば無理もありません。かうして私は好んで自分から世間をせまくして行くのでせうか。

御兩親にもあなたにも恙なかれかしと祈上げます。こちらは一同無事幸に御放念下さい。川田さんは時々は見えますか。

御大事に而して幸多かれかしと

## 足助素一氏宛――四月二十日於東京 〔五一九〕

十七日に母に話した處が矢張り泣き出された。而して二十二日にもう一度弟妹を集めて相談をする事になつてゐる。今度は母が召集するので僕の知つた事ではない。

借家の方は先方で掃除中、或は同じ貸家中に更に都合のよい所が借りられるかも知れないので泊りに行つて貰ふことはまだ數日大丈夫と思ふ。

## 牧山正彦氏宛――四月二十日於東京　〔五二〇〕

其後こちらからもあなたの方からも消息が絶えましたが、あなたは別に御障もない事と思ひます。僕は不相變元氣です。「星座」も第一巻を書き終へて目下その校正をしてゐます。あと千枚ほども書いたら多少眼鼻のつくものが出來るかとおもひますが、ああいつたものを書く氣が少し退縮し始めましたから果して完結し得るか如何か疑問です。

改造で河上さんのものを讀みました。總てを生れつきに歸してしまへば大變簡單に事が分るやうです。而して實際はさうなのかも知れません。そこに「あらねばならぬ」を用ゐて來るのは作爲に墮した考へ方のやうにも思はれます。この邊は私ももつと考へて見たいと思つてゐます。この間一人の社會主義者に會つた時その人は僕のやうな人間は一種の變種だと評しました。成程と苦笑を禁じ得ませんでした。

御歸洛の節御紹介した飯塚氏には既にお遇ひになりましたか。まだ會はれないで其機會が今後一寸來さうもなかつたのなら乍御面倒僕が書いてお託ししたものを郵便ででも送り屆けておいて下さい。

これから又ホヰットマンの飜譯に取りかゝらうかとおもつてゐます。

昨日の地震以來この地は何ともいへぬ晩春らしい氣候になりました。

話を持ち出した爲めに母は暗い氣分でゐるので幾分この春は僕も暗いものを感じはしますが。

## 吳茂一氏宛――五月四日於東京　〔五二一〕

御手紙を拜見しました。今度のあなたの御手紙は私に深い思ひを與へました。本當にあなたの內部經驗の中には悲しい深かさが潛んでゐます。人生の諸相にはまことに世にありふれた樂天家が窺ふ事の出來ない井戸がうがたれてゐるやうです。

けれども私は現世に力一杯執着して見ます。何もかもを此世に於てなし遂げて見ようとしてゐます。償ふべからざるWrong を負うて死んで行つた人の爲めにも私は現世で何とかして償ひをして見たいとおもひます。

それが空しき夢であるのを悟る時が來るかも知れません。

その時には私はそれを私の智慧の足らない爲めとおもひませう。諦めませう。

この事については何やらまだ申上げたい事が殘されてゐるやうですが今日は心が浮き上つてゐますから又の時にゆづります。然しあの御手紙のことは永く私の心にとゞまります。

今夜は Zimbalist を聞きに行かうとおもつてゐます。あの人からは美しいものが得られさうにおもひますので。

## 吉川銀之丞氏宛――五月六日夕　〔五二二〕

度々のお手紙に對し御返事延引相成居候事、誠に申譯無之、先般來、著作に沒頭、餘事を抛擲候爲めと、去月三十日弟佐藤隆三の妻急病にて死去致し、小生宅より葬式を出し候爲めとにて、不計御無沙汰に相成候次第に御座候。

早速用件御返事申上候。

一、北海道拓植銀行より資金借入れの事、承知致し候。

一、吉川コト殿の事も承知致し候。

一、土地解放の儀に關し懇々御意見お漏らし下されよろこばしく存上候。小生當初の考としては全く農家に土地を與へんとの事なりしも、其後種々熟考の末、農家に土地を與ふるには相違なきも、一つの條件を附し、かの農場の地面を在來の農家全體の組合所有物となし、一同會議の上にて規約を設け、將來の發展をなすやう致し度き所存と相成申し、其方法は中々難事と存候得共、貴殿願くはその衝に當られ、十分の御熟考を以て、適當の案を作られ候樣致し度く、要は農家が讓與せられたる土地を最上に利用し、それが他の惡資本家の手に入らざる樣、又向後も生活が益ゝ安全となり、發展し行

くやう御取計ひ相成度願上候。札幌農大の森本敎授も、其方法につき學生等をして講究せしめ候由申出でられ候間、自然相談も可然と存上候。從來貴殿が農場の爲めに蔭日向なく熱心從事せられ候所は十分認めて感謝致居候次第、今後の事もお任せ申上候間、開拓者なる父の苦心も無駄にならぬ樣、小生の存意も徹底する樣、御骨折り下され候樣切望の至に不堪候。財產處分については、母及び弟妹の同意を得居り候へば、今年中には總てを片付け度存念にて、何れ貴地にもまかり越し、御相談可申上積りに候へば、それまでにお考へ置き下され候樣致し度く、尙內容については更に得貴意候事も可有之候。目前の仕事、即ち水田事業の完成までは、勸業との關係上、小生名儀に致置候方可然かと存居候。

旣に春來色々御多忙の事と存上候。水田の事何共可然御盡力、立派に成功致す樣御骨折被下度、家畜飼養の事もよき御思付きと存候。是亦十分の御計畫を以て事に當られ候樣祈上候。

拙家一同幸に頑健、幸に御放念被下度、貴家も益々御清祥ならん。此頃は賑々敷お暮しの事とおよろこび申上候。先は右用事旁々。草々。

## 牧山正彥氏宛――五月七日於東京　〔五二三〕

此度の御手紙は悉く愉快でした。殊にブルジョアは社會奉仕から出發して實は自己の爲めといふ所に落ちつき、プロレタリヤは自己の爲めといふ所から出發して實は社會奉仕の結果になるといはれるあたりは案を打つの思ひがしました。これはあなたの心の中に醱酵した大事な酵母の一だと考へます。而してそれは私に力强い啓示を投げかけてくれました。河上さんの言說の凡てよりもこれは私に强い力でした。平氣で他を顧みて居られない程自己に忠實であるといふあの境地も私には一番望ましいものに考へられます。早くあすこに行きたいものだと考へてゐます。

昨日別れに阿部兄の所に行きました。樂しく三十分程話しました。それから長谷川如是閑氏を訪ひました。あの人の謙遜なのには驚かされました。

飯塚君は如何思ひましたか。あの人は大分自分の事だけ考へる事の出來る人のやうに思はれますが。

## 有島行光、敏行、行三氏宛――六月六日於箱根(繪葉書)　〔五二四〕

あなた方をつれて來ようと約束した箱根にパパひとりで來てしまつてあなた方がかはいさうです。此度は勉强故ゆるして下さい。この次にはきつと連れて來ます。

(蘆の湖の寫眞の上に)これは箱根山の頂上にある蘆の湖といふ湖水です。今度はこゝに來たわけではありません。

## 灰谷やす子氏宛――六月八日於相州箱根環翠樓　〔五二五〕

私の男の友達に隨分徹底的な男がありまして其徹底的さから妻子の問題に至而動きがつかなくなり、よそから金を借り細君に貸本屋をさせ自分は其丁稚となつて歩き貸しをして始めて安定らしい氣持ちに達した男があります。抽象的にではありますが委しいことは中央公論の臨時增刊に書いておきましたから好奇心があつたら讀んで下さい。西行法師の妻子を捨てる位のことはまだ〱入門だとおもひます。捨てることも出來なくなる苦しい自己に對する超道義的責任感といふやうなものが生れて來るやうですね。それが本當の切羽つまつた心持ちでないかと私は思ひます。私なんかはそこに行くとまだ〱センティメンタリズムで動いてゐます。然しその男の氣持ちはおぼろげながら分るやうに思ひます。而して感心してゐます。あなたの隣人愛とかいふものは私には異邦の言葉です。あなたはまだ〱如何したら自分を一番立派な統一にもち來たすことが出來るかを考へるべき時だとおもひます。それが出來ない先に隣人の方に愛が動くなどとそれはうそだと思ひます。

良人や子供にも愛が動き隣人にも愛が動く。それはさうなのだから仕方がない。それらの愛の中から自己といふものも築き上げられ自己の姿が眺められるのではないか。何にもせずに戸棚の中にでもはいつてゐたのでは自己なんてものは消

えてしまふ。――一應尤もな考へではあります。然しそれぢや自己が餘りに唯物的に取りあつかはれ過ぎてゐます。さういふ風に愛が動く、その愛に矛盾があるとすればそこをぎゆつとひねり上げなければ駄目です。さうぢやありませんか。
私は今二三のものを書きにこゝに來てゐます。十日には歸京します。自分の仕事がつぎ〳〵に出て來てあなたの作品を拜見する暇を持たないでゐます。怠つてゐるからでもいやで讀まないのでもありません。梅雨の候お大事に。

## 里見弴氏宛――六月十二日於東京麴町　〔五二六〕

男子御出生の由十日箱根への小旅から歸宅して承知、おまささんにも至て御丈夫の由大慶に存じます。御兩人とも見事に御肥立ちの樣祈ります。
箱根滯在「潮風」再讀。事柄が拙著「星座」と多少の相似なる故殊の外身を入れて拜見、小句では「濱全體がゆれてゐるかと思ふほど蟹」「ちやりん〳〵蚊帳の環を涼しくならしながら」など感に入りました。
若い人の心の働きがぎゆつと握つてあるのにも敬服しました。
見失はれてゐた寫眞が出て來ましたから同封御送りします。不束おゆるしを乞ふ。萬事其中御面會の上。草々。

## 秦秀雄氏宛――六月二十三日於東京　〔五二七〕

御手紙を拜見しました。すぐにお答へにかゝります。阿部氏に對する私の不服の中に左樣な言葉があつたか如何かは今はつきり記憶しませんが、私の阿部氏に對していはんとする所は「自分も一個の精神的勞働であつて、苦しい生活の中に居るものだが其中に人格的な據所を有するが故に其境地にあつて靜かに自分の生命を樂しむことが出來る。正しい心の持ち方の下には總ての勞働者もそれが出來得べき筈である」と云ふ意味のことをいはれたやうであるがそれはちがつてゐると私は云はうとしたまでです。其理由についてはこゝに改めて申しません。

次に私の作品が活字になる以上諸君に思ひもよらぬ印象と影響を與へはしないか、若し人間に絶對の基準といふものがないとすると。といふ質問に對してはその通りですとお答へする外はありません。實際私の作品が飛んでもない解釋を受けてゐるなと思はせられる場合を私自身が經驗してゐます。實は私もこの事では可なり苦しみました。然し結局誤解を以て迎へられない生活といふものは人間生活の何處の隅にもあり得るものではないと感ずるに至りました。同じ色に對する感じでも甲の人と乙の人とが全く同一の印象を受けるだらうと考へるより違つた印象を受けてゐるに違ひないと考へる方が遙かに合理的です。何故なら各人は各人の異つた個性の上に生きてゐるのですから。それを考へると人間同士の間柄といふものははかない程離れ〴〵なものだといはねばなりません。況んや複雜な文藝作品の內容が人々によつてちがつて受取られるのは當然過ぎる事です。然しそれを恐れてゐる譯には行きません。何故なら人の生活そのものが多少の意味に於て絶えず喰ひちがつてゐるのですから。然しよい作品は、作者の意圖の深切に織り込まれた作品は、生活の上の誤解よりももつと輕い誤解を以て鑑賞者に受取らるべきものだと私は考へます。何故なら藝術は人生の exposition であるからです。それを目あてにして私は作品を發表します。私は私自身の生活よりももつと純粹に近い、卽ち誤解の心配の少ない形に於て、私の fellow-men に接したいと望むものです。

これだけいつたのでは或はあなたの疑問を解くに足らないかも知れませんが、兎に角これだけのことを申上げておきます。なほ御疑問が解けなかつたらどうか金曜日におたづね下さい。私でわかる丈けのことはお答へしますから。

御返事迄。

### 灰谷やす子氏宛——六月二十七日於東京　〔五二八〕

露國勞農政府に對し嬰兒哺育所のことを聞くと驚くべく完全な設備になつてゐるやうです。こゝに養はれてゐる赤子の中には勿論晝間父母が働く間そこにゐて夜は親の膝に引取られるものもゐるのでせうが、多くの孤兒若くは遺兒がゐるに

違ひありません。是等の子供が大きくなつた時彼等は養ふべき父母を持たぬ代りに養ふべき社會を持つこととなるのでせう。自分の仕事をよろこんで呉れる兩親はない代りにそれを喜んでくれる民衆があるでせう。かういふ動向が益々進めば親子の愛なるものは今日のやうな形からは變つて來て、親子の間に出來た愛の量の大部分が他の形の愛となつて人間の間に働き出すでせう。此方が多分人類の爲めにはよい事だと私は思ひます。親子の情が薄らげば人間の持つ愛の量はそれ丈け減ると思ふのは大きな間違だと思ひます。然しかくの如き變化は社會全體がそれを可能ならしめるやう變つて來ねば駄目です。現在に於ては哺育所の保護婦は金を得たいからなるので赤子が可愛いゝからなるのでありません。然しながら仕事が金によつて計畫されないで濟む社會が來たら哺育所で働かうと申し出る人は眞底赤子が可愛ゆい爲めに申出るやうになります。かゝる人は恐らく無學不注意な母以上の仕事をなすかも知れません。

兎に角親が居なければそしてその親が養はなければ他の人は自分の生活に多忙で他人の子などを顧みて居られないやうな社會狀態では私の考へは到底實行され得るものではありません。然しながら親が養はないでも子は暖い保護の下に育ち得る事が保證される社會が來たらいやでも親子の關係情合は今日と變つて來るのが當然です。私達が親としての本能だと思ひ永久不變な現象だと考へてゐる現在の親子の情も實は決してさう不變なものでなく生活の樣式と共に變化すべきものです。子犬の自衞力がない間は親犬は自分の死を賭しても子犬の安全を護ります。然し子犬が獨立してしまふと親犬は忘れたやうに子犬の保護から遠ざかります。それらを御考へなさつて御覽なさい。

## 足助素一氏宛——七月二日於新潟　〔五二九〕

淀の下流を思はせるやうな信濃川、それが雨に烟る。葦に枯葉まだ見えず、運河には柳茂れり。電車と自動車との行き來せぬ夜はしめやか。

〔五三〇〕

唐澤ひで子氏宛――七月四日夕於東京

今朝大雨の中を新潟からもどりついて御手紙を拜見しました。あすこの掘割にはまだ西瓜を積んだ舟は通つてゐません。その代り……ヘッダにレーブボルグのまことの死樣を報告するやうで殘酷に亙りますからお知らせしません。河添ひの柳は美しいと思ひました。殊に梅雨空の下では。太町通りの靑物市場の野菜の生々しい匂はまだ鼻についてゐます。海岸の砂山から佐渡を遠く望み見た時には涙を感じました、わけもなく。

砂に居て佐渡を見ゐれば涙しぬかそけくなげく我れにやは似る

佐渡ヶ島暗らき波路の末にしも顏打そむけひとりあるかな

駄目ですね歌は。

歌はといへばあなたの多產を羨ましくさへ思ひます。納さんがあなたの所有物の中のかなり下の方に數へられたものだと記憶しますが、あなたの眼と心とには何もかも戀の姿で立現はれると思ふとあなたの持つ世界がまた羨まれます。短歌製造會社監査役の報告によれば、

手を胸に。しづやかに人の泣くらむ。あるかなく。戀死なば。いとつよきジン。千筋なす。うつくしう。野に咲ける。さりげなく。

など胸に沁みました。其中最初の分は感銘に少し曇りが起るやうですけれども。

緋だりをの。われをのみ。

などの歌は監査役には空虛にひゞきます。

澤山樣歌を讀むと私も作りたいやうな氣分は出ますが歌にはなりません。唯の言葉にさへもなりません。

七日には私は有樂座に招待を受けましたから其方に行くかも知れません、氣が向いたら。帝劇のが見るに値する程によ

かつたら知らせて下さい。
北海道行きは十日頃まで延びるでせう。
よく降る雨です。いゝ雨です。

## 有島生馬氏宛――七月十日　〔五三一〕

北海道へ出發前是非一度御見舞を申さうと考へてゐましたが其機を得ないで殘念です。昨日はお出かけだつたさうですが折悪敷不在で是亦失禮しました。北海道に行つたらむかうの始末をしつかりつけて來たいと思つてゐます。森本君が農科大學の經濟學教室の人々と共に最上の方法を研究して見たいからと申出たので賴むことにしてゐます。多分農民全體の組合組織にして收利を組合全般の利途に用ふる事になることかと思ひます。
九月から出すひとり雜誌は「いづみ」といふ名にしました。毎月原稿を六十枚は書かねばなりませんが是れが爲め生活が却て緊張していゝかと思つてゐます。體が丈夫だから――肉體の健康が心的生産のいゝ條件であるか如何かは疑問としても――その位働いても續けられぬ事はないと考へてゐます。
二十日位までには歸京するつもりでゐます。
暑くなりますからあなたにも信子さんにもくれ〴〵御大事になさる樣祈ります。行光は十六日に學校から千葉縣に水泳に出かけ、他の二人は二十日から夏期休暇になるのでその上で處置を考へようとしてゐます。
それでは左樣なら。

## 足助素一氏宛――七月十三日於北海道狩太村　〔五三二〕

今農場に着いた。早速借り着をせねばならぬ程の冷氣だ。

ぶつ通して來たら矢張草臥れてゐる。飯でも喰つたら朝寢をしようと思ふ。滯在中雜誌の原稿も書いて行くつもり。祈御健康。

## 有島生馬氏夫妻宛――七月十七日朝於岩內　〔五三三〕

「生れ出る惱み」で想像にのみ描いてゐた岩內を見に昨夜やつて來ました。木田君等が岩內生れのものが歸つて來たやうによろこんでくれました。

## 木田金次郎氏宛――七月二十二日於東京　〔五三四〕

いつでもせはしない思ひをして旅をしてゐる故折角農場におたづね下さつてもゆつくりお話も出來ず失禮のみしました。殊に岩內行についてはあらん限りの御好意をあなたも町の總ての人々もお示し下され何とも難有い事に思つてゐます。一々御禮狀はさし出しかねますが序のあつた節は皆の方々に吳れ〴〵も私の謝情をお傳へ下さるやう願ひます。歸宅すると母はじめ總てを健全に見出しました。而して晩食の節あなたからいたゞいたあはびの罐詰を開いておいしくいたゞきました。母はあなたの贈物を大變によろこんでゐました。

東京はさすがに暑くなつてゐました。不取敢右御禮旁〻安着御一報迄。

## 原久米太郎氏宛――七月二十六日於麴町　〔五三五〕

この頃の暑さにあの騷音と煤煙との中にあつて汗みどろに働きつゝある兄を思ふと安閑としてゐるやうなこちらの生活に氣がひける。去る十一日から農場に行つてそこの片付け方だけは大體結了した。農民達は氣違ひじみた場主の言葉を解しかねてぼんやりしてゐるていたらくだ。それから岩內に行き札幌に行き小樽に行きかなり多忙に時間をつかつて漸やく

二十二日の朝歸京すると相當につかれてゐた。札幌では佐山に遇つた、兄のことを色々聞いてゐた。大分商賣は繁盛してゐるらしい。農民組合の組織を農科大學の經濟學教室に頼んだのだが其結果を採用するや否やはこちらの隨意になつてゐる。東大出の法學士が恐ろしく窮屈な組織にしようとしてゐるので多少不安に感じてゐる。獨行の雜誌は「泉」といふ名で九月の半ばに出す事に決定した。どれ程の仕事が出來るか知れないが兎に角精力の續くかぎり勉强して見たいとおもつてゐる。これから僕も本當に働くべき時が來たやうだ。

背水の陣を多少の犧牲をはらはせて張つた以上は、それに酬ゆる丈けのことはしたいものだと覺悟してゐる。

足助は此夏は貴地には出かけないのではないかと思ふ。鳥取に行く筈らしかつたがそれはやめにしたやうだから。もつとよく物を見たいものだ。徹底して僻見なく。

暑さの折柄御擧家の御平安を祈る。僕の方は幸に一同元氣。

## 有島生馬氏宛――七月三十日於東京　〔五三六〕

この頃の暑さはさすがに勉强でもして忘れる外には道がないやうです。然しさしたおさはりもなく、信子さんも誤診から全く解放されて食物の攝取も樂になられた由で實に〳〵安心してゐます。

私は今著作集の第十五輯「藝術と人生」を出すのに忙はしく（これは過去の感想を集めたもの）個人雜誌「いづみ」の創刊號を出すのに忙しく、更に「ホヰットマン詩集」の續き「星座」の續き等の仕事があとから〳〵と待つてゐるわけですが中々手がまはりません。これから十分多忙になるだらうが忙しければ忙しいなりに餘計仕事も出來るかと思つてゐます、然し健康には十分注意して長い間働くつもりでゐますから安心して下さい。

此の兩三日中には是非御邪魔かた〴〵參上しようと思つてゐますが。森繁夫といふ人から短册か何かゞ來たでせう。あれは大阪のある汽船會社の專務をしてゐる人で、氣持ちのよい歌人です。古今の短册を集め、それを寫眞版にして同好者

に分けてゐます。あなたにも何か書いていたゞきたいが如何だらうと尋ねて來ましたから、紙を送つて御覽なさいと申送つたのでした。何か書いて上げれば非常によろこぶとおもひます。どうぞよろしく。

暑さの折柄折角お大事に。信子さんからは御手紙を難有うとお傳へ下さい。

## 有島行光、敏行、行三氏宛——八月十七日野尻湖畔　〔五三七〕

三人とも無事ですか。パパも非常に元氣で木崎湖の講演を終り今日こゝに來ました。瀧のやうな雨の中を自動車でこゝに來ました。去年見たとほりの美しい湖水や島がパパを迎へてくれました。三人の遊びに來るのを待つてゐます。

## 唐澤秀子氏宛——八月十八日於野尻湖畔　〔五三八〕

あなたは何處にも行かずに夏をお過しでしたか。秋はかすかながら都門にも催したと思ひます。こゝまで來るとそちらの空の遙かなのを感じます。

信濃尻の湖の水底ににじみ入る雲の行手に物をこそ思へ

夜のひきあけに眼がさめて湖畔に行く。黑姫、飯綱、妙高の山々のすそを昨夜の雨がもやになつて走る。

信濃路は悲しかりけり眞夏にも妄執のごと雪の殘れば

## 母堂宛——八月三十日於秋田　〔五三九〕

其後お變りなく御起居被遊候事とおよろこび申上候。私事一昨夜八時如豫定上野驛を發し昨朝十一時秋田市に着き、市の舊家なる石橋といふ旅館に投宿致し候。折柄私の舊師大脇農學博士が象潟にて不慮の横死をなしたる其葬儀到着の日の午後に相當致居候間午食後早速その式に參列し不思議なる感慨を催し候。

大脇博士にはそこにある九人程の農學校の同窓生と共に私の來遊を待ち居り私が參りたれば是非一會をなさんと申居られ候由の處、私の到着致候節は既に世になき人となり居られ候事無常の至に御座候。昨夜は市の美術倶樂部にてホヰットマンといふ詩人の事につき長講席を辯じ、今日は市の記念會堂に於て午後一時より公開講話を爲す事に相成居候處、昨夜午前三時頃より稀有なる雷雨と相成降雨の大量物すごきばかり今朝も空はかき曇り居りて晴れさうなる模樣も見えず候。今度は失敗の旅かと存ぜられ候。此大雨にては途中の鐵道に故障あらずやと是亦氣づかはれ候得共何事もなければ明日便利なる時間の汽車にて出發、東京に立寄らず成るべく早く貴地に參上致度心組居候。

行光は歸京の翌日早速直武と中野に出かけ一日を過して歸家致し候。來月一日より二人にて彼所にて自炊致すなりなど申居候。行郎夫婦も無事息災にて、英夫も一寸訪ねくれ候が是亦至て元氣に御座候間御安心可相成候。

輕井澤は昨今如何なる天候にて候半。何しろ矢張二百十日の時節に候得ば多少の變調に可有之やに存ぜられ候。折角御自愛專一に祈上候。草々頓首。

## 大橋茂三郎、中川一政兩氏宛——九月二日於輕井澤　〔五四〇〕

土崎の半日は忘れがたい記憶となる事とおもひます。曇天の空の下に高淸水の臺から眺めた港の景色も町の中の一種の氣分も、池鯉亭により集つた人々の快活な力强い向進の氣象も一々あざやかに心頭に浮び出ます。私もそこに雨雀氏を見出し得なかつた事を大變に惜しく思ひました。

講演をすました晩は慰勞會に臨み其翌朝は大分澤山字を書き晝食は倶樂部といふ所で同窓生と會食し、それから城址を一見して五時三十何分かの上り列車に投じました。而して昨日晝輕井澤に着いた時には病的に健全な私も全く綿のやうに疲れ果ててしまひました。何しろ八月十二日以來の地方巡業なのですから。その午後は綿の如くになつて眠りました。さうしたら又病的に頑健になつてしまひました。明後日位は都門に入ります、秋風と共に。

皆さんにくれ〴〵も宜敷。

### 八木澤善次氏宛――九月十一日於麴町　〔五四一〕

若菜さんが少し御不快ださうでそれが多少なりあなたにも影響するとの事此際餘程大事になさつて早くよくなられるやう呉々も祈つてやみません。決して此の事に挫折する事なく大事御成就を祈ります。

此夏は木崎湖の夏期大學で佐田夫人と一緒になりまして靑木湖の方まで見物しました。樂しい二日でした。

例の學資の事がおくれて濟みません。四十圓ほど御送付申します。盡きたらまた御申出を願ひます。

私の作品についての御感想を難有く思ひます。私はトゥルゲネフの役目が完全につとまれば相當滿足しますが私にはあの人程の素直さがなく多分の負け惜しみと無いものほしさがあるやうです。これが害をなして私を殺すかも知れません。

櫛田氏が歸朝されましたね。靜かに氏の滯歐談を伺ひたい氣がします。兎に角しぶとく歩いて行つて見ます。

「改造」に室伏氏の紹介した勞働反對運動は何處まで本當でせう。若し大部分本當だとすると私は快心を感ぜずにはゐられません。早晩ああ行かなければならぬ筈だと思ひます。

### 足助素一氏宛――九月十八日於東京　〔五四二〕

昨日は色々難有う。山椒は早速賞味。鮎は今夜喰べる。末光から來信、兎に角出版したいから新潮社に話してくれとの事、僕の意見に從つて序文はやめるといつて來た。

「靜思を讀んで倉田氏に」を書いてゐる。表面は倉田に與へるのだけれども實質は自分の主張を明らかにする譯なのだか

ら中々長いものになりさうだ。多分三十頁にはなるかと思ふ。それを書き終へたら小說を一つひねり出さうと思つてゐる。仙臺から一昨年來やいの〳〵と賴まれてゐた講演、今年の秋田のがたゝつて是非來いとのつぴきならず二十二日の夜出發して二十三日にやる事になつた。出發までには全部の原稿をまとめておきたいと思ふのでそれまでは御無沙汰するかも知れない。

昨日は西村保吉の悔みに國分寺まで行つた。汽車がゴットン〳〵と隨分走らないので驚いた。西村の一人の息子が二十七で死んだんだ。

祈御快方。草々。

## 高山林太郎氏宛——十月二日於東京　〔五四三〕

御消息を拜し御健勝の段を知つてうれしく存じました。わたくしも幸に至て頑健で仕事に從事してゐます。この頃は個人雜誌を出した關係上かなり多忙な日ぐらしをしてゐます。然しその爲め却つて心が緊張してよろしいやうです。貴著をお送り下さつたさうで難有う御座います。大層御謙遜ではありますが落手して拜見するのを私は樂んでゐます。全く教育の事は一變革を經ねば駄目におもはれますね。今の小學校の教育などは教育ではないと思はれます。昔宗教から總ての社會活動が分離したやうに政治の桎梏からそれの分離する時機が十分に到來した事を思はせます。教育なども文部省の鼻息を伺つてゐる間は甦生は不可能かとおもひます。

「泉」御笑草にお送りします。祈御健在。

## 有島生馬氏夫妻宛——十月十六日於東京　〔五四四〕

昨日はあわたゞしいお尋ねをして然しその間に樂しい時を持つ事が出來て難有う御座いました。默り勝ちな親子は三等

の客席に向ひ合つて持參のおすしを喰べました。何んだかあの夜の私の向側の行三は母を亡くした子だといふ印象を力强く與へました。年とともに淋しい運命の影が彼等の心にもさしはじめるものか。さう思ひやつて彼を憐みました。
然し今朝は元氣で一同東中野に出かけて行きました。私は今日古雜誌を古本屋に賣つたら二十九貫目ありました。よくこんなに溜めておきましたねえと本屋が驚いてゐました。部屋が少々氣持ちよくなりました。女中のことわかり次第乍憚忘れぬやう御一報を願ひます。
土藏のつくろひは四十圓お出し下さい。やらせますから。それも御承知なら一寸御返事を願ひます。
あきちやんによろしく。御禮旁々。

## 茂木由子氏宛――十月十八日於東京　〔五四五〕

西川の奥さんなら一度お訪ね下さつてお眼にかゝつた事があつたと考へます。
「星座」の西山は西川氏をモデルにした譯ではありません。私は西川氏には一度もお眼にかゝつた事がなく單に枯川老から御噂を聞いたばかりでそれだけでは迚も同氏の輪廓だに髣髴する事は出來ませんからあの性格は全く私の獨創に成つたものです。其事は如何か御安神なさるやう奥さんに御傳へ下さい。

## 河上肇氏宛――十月三十一日於東京　〔五四六〕

在洛中は一度參上して色々伺度いと思ひながら多忙にかまけて御無沙汰してしまひました。然し大學で講演してあなたにも聞いていたゞく光榮を持ち聽衆諸君からも注意して聞いて頂けた事は私の滯洛中のよろこばしい記憶です。
今朝歸京して可なり疲勞した自分を見出しました。
乍憚講演部の學生諸君にお會ひの節もありましたら宜敷御傳へ下さい。殊に禮として頂戴物までしてゐます。其御禮も

萬望。

## 笹本寅氏宛――十月三十一日於東京　〔五四七〕

あなたが甲午さんの弟御ですか。お兄さんの事は噂で聞いて悲しく思つてゐました。今でも同君の面影は念頭に徂徠します。御愁傷をお察しします。とも子に對する理解は一女性の方のそれが不思議なほど私のそれと同一です。あの外に附け加へるべき事はありません。とも子が涙を流したのは若樣だけに對して流したのではありません。あの場合の全體の氣持ちに對して流したのです。とも子はおきやんな癖に妙に恥しがりやでまけず嫌ひです。それ故自分の氣持ちを吃又に傳へかねもし傳へるのをあの時まで敢てしないでゐたのです。おまけに吃又がまた頑固で自分のやうなものは女に緣がないと思ひきめてゐる所からとも子に對しても强ひて專暴な態度を示すやうな結果になつてゐたからです。若樣は總ての女に好かれたけれども命がけで戀される程度の人でないやうに作者は頭に描きながら彼を描寫したつもりです。親切な御批評を深く御禮申します。單に自分の考へる所のみを。

## 土岐善麿氏宛――十一月一日於麹町　〔五四八〕

作者別萬葉全集を御惠送下さつて難有う御座いました。實は私は嘗而萬葉集なるものを首尾一貫して讀んだ事はなかつたのです。而して是非一度精讀したいと願つてゐた所のものです。此書をお與へ下さつた事は私の特にうれしく感謝する處で御座います。これを讀了したら私の藝術上の心持に大きな影響の來る事を疑ひません。くれ〴〵も厚く御禮申上ます。

## 原久米太郎氏宛――十一月十日於麹町　〔五四九〕

本當にこの頃は何か遠々しくなつた程の御無沙汰になつて濟まない。兄の御起居は常に思ひやつてゐながら心にあるも

のが餘りに多い爲めに手をつけるのが億劫になつて却而御無沙汰してしまふ。
岡田家の事件はもうさつぱりと片付いたのか。あれには兄は中々の骨折りだつたらう。實際僅かのことでも他人の尻を拭ふといふのは自分の場合よりも餘程骨の折れるものらしい。此頃は僕の方は幸にもさうした面倒が生起しないので仕合せに思つてゐる。
先達の京都滯在は全くみじめな程多忙だつた。あの晩兄が大阪に來られたら中々愉快だつたらうと思ふ。大石、才江などと夜の三時過ぎまで宿屋で談つたので兄がゐ合せたらと思つた。
兄は矢張無性に多忙のやうだね。いゝ加減もう樂になつてもよい時分と思ふに兄の會社は死ぬまで人をこき使ふ方針だと見えるね。それとも兄自身の貧乏性で會社に行く以上は默つて煙草ばかりのんでゐられないのかね。それなら其貧乏性の方はちと手加減をして圖々しくなることだね。
僕も東京に歸つて來たら毎日稀有の秋日和が續くのですつかり怠けてしまつてどうも一日家の內にはぢつとしてゐられないのだ。處が外出しても訪ねる友もなければ通ふ女もない。しかたなしに駒場のオリムピック選手豫選競技會などを見に行つたもんだ。自分ながらをかしくなつてしまつた。
足助は病が重つてから二ヶ月の餘にしてやうやく病床に胡坐して二時間位は堪へることが出來るやうになつた。體力もやゝ恢復したやうだが全く氣の毒な樣子だつた。おまけに店員には逃げられる、本は不景氣を喰つて思ふやうには賣れないと來てゐるのだから腹も立つだらう。然しもう難所は經過してしまつたやうだ。乞御安神。
勞働運動が勞働階級全體の運動となる爲めには少なからぬ年數が必要とされるだらう。卽ち勞働者自身の自覺が運動を引き起すまでには長い年月が流れなければなるまい。然しそれまでこの運動は少しの動搖も起さずにゐられるとは考へられない。必ず指導者若しくは煽動者の出現が餘儀なくされる。それが已むを得ない事ならば彼等を働かせるもよい。而して彼等が彼等相當の働きをした潮時を計つて彼等から勢力を奪ひ取つてしまへばいゝ。どうも將來の運動の實際としては

さうするより仕方がないやうだ。彼等の勢力を適當の時機に奪ひ取る事は純勞働者の中に或る數の覺醒者がゐれば出來ない事ではないやうだ。

兎に角僕は資本主義制度の害毒が極端に近づきつゝある事を感じないではゐられない。是れは at any cost に地上から拂拭されなければならないものだと堅く信ずるよ。その爲めに私等の生活、社會の生活の上に多少の混亂が生じた所が仕樣のない事ではないか。

この間同志社で馳走になつた時竹崎氏も出席してくれたが其席上で、人間に所有慾がある以上私有制は無くならないし、其制度のある事が自然でよい事だと簡單にいつてのけてゐる。僕は餘りの事に其場で失敬ながら少しぴしりとやり返したがあれぢや彼も駄目だと思ふ。彼の神學は一體どこの邊をさまよつてゐるのだ。彼は神學を他の部門に入れ、他の部門の學問卽ち經濟學などを神學部に入れねばならぬとの意見を把持してゐるが、神學部に近代的の經濟學が入れられるやうになつたら其調和を如何しようとするのだらう。僕は心から竹崎が現代の社會生活について潛心する所があつてほしいと思ふ。竹崎の爲めにそれを願ふ。

昨日から東京は雨模樣になつて今日は一日降つた。もう寒雨といつてもよい奴がやつて來た。母が一寸弱つて枕についてゐる。

昨日はじめて雁次郎を見た。彼の紙治なるものを見た。而して感心した。紙治といふ戀のふぬけが英雄に見えた。なまなかな人間が心中などすると物笑ひだなとつくづく感じさせられた。ふぬけを英雄にまでしたてあげた近松を見て、彼の天分に感じ入つた。

こゝまで書いたら新聞記者が來て又僕の家產處分のことについてうるさく問ひたゞす。僕はどうしてこんな時にもつと腹を立てることが出來ないのだらう。腹を立てながら、記事の報道を上役から命ぜられて雨降りに尋ねて來た若いその記者に或る同情を感ずるのだからやり切れない。

### 唐澤秀子氏宛――十一月二十一日於東京　〔五五〇〕

冬らしい紙を買つたら子供らしくも急にあなたに手紙が書きたくなりましたから。

ホ氏の詩集を朝から譯して無闇に煙草をのんだせゐか頭がわれるやうになつて腹が少しもすかないので銀ぶらと出かけました。

話が前後しますがこの間の帝劇の西洋風舞踊には全く失望してしまひました。何といつても淺草藝だといふ感じが邪魔をしました。で話が前にもどり、暗らくなつたのに白木も三越も客が出入するので時刻が變つたかと思つて時計を見たら四時にはなつてゐませんでした。日が短かくなつたものだなあとしみ〴〵思ひました。

榛原なんかにはもう行くまいと思ひながらも紙が買ひたくなると矢張あすこに飛び込みます。惡いくせは脫けないものです。神田驛まで步き美しい人に遇はず電車の中も同樣、たゞ私の前に立つてゐた男の西洋人のゴロのやうな外套の地とひだのつけ方に感心し、家に歸つたら食事中。マグロの照燒き、湯豆腐。入浴。長男がアルキビヤデスの實驗をするといつて湯の中に頭からもぐり込む。

それから又ホ氏を譯する事十ページ、湯さめとあきたのとで又煙草、それから元氣づいて此手紙、何處に赤貧の求願！

あなたは今夜何をしましたか。

### 足助素一氏宛――十二月二日　〔五五一〕

河內からの干鮎ありがたう。今朝は御迷惑だつた。手紙をもう少し詳細に書かなかつた事を謝する。

創作の事御注意を感謝する、僕も兄の御意見を尤もと思ふが生活の過渡期に立つて見ると思想の混亂が來てゐて以前のやうに純一な創作氣分になれないのだ。恐らく僕は此の難關を乘越し得るとは思つてゐるけれどもこれは自分にも判明し

ない未來の事柄に屬する。或は生活の改造によつて創作が全く出來ない、或はしてゐられないやうな氣持になつてしまふかも知れない。又創作が出來ても到底賣高が減じてそれ丈けでは喰つて行けなくなるかも知れない。さう竊かに覺悟してゐるのだ。これは兄の仕事の上にも大きな影響を及ぼす事で本當に濟まないと思ふけれどもそんな運命が來たら兄にもあきらめて貰ふ外はない。然し僕は決して自分の仕事をおろそかにはしない積りだ。來年になつたら引越しやら家產の始末やらで多分の時間を取られるとは思ふがそれでも仕事だけは大切にしたいと思つてゐる。雜誌を第二位に置いて考へるといふ事も自分ではよく判つてゐるのだが三四號の分は仕方なしと見てくれ給へ。

金の事これも精々注意する。自分だけの生活は可なり切りつめてゐる積りだがいつの間にか無くなつてゐるのには苦笑せざるを得ない。先月もらつた六百何圓ももう百何圓になつてしまつた。弟妹子供等に歲暮を贈らうとすると少し足りさうもない。馬鹿だよ僕は全く。

今一生懸命でホ氏を譯してゐる。先月中に出來なかつたのは濟まなかつたが不日出來ると思ふ。もう少し待つてくれ給へ。餘は何れ御面會の上。

## 木田金次郎氏宛――十二月七日於東京　〔五五二〕

この間は委細の御手紙を久振りで難有くうれしく拜見しました。此頃畫をかく氣分が進んで來られた由何よりもうれしい事におよろこびします。こちらにあるカンバスに上塗りするのは何といつても勿體ない故文房堂でそれを少々と油繪具を少々送つておきました。あなたの畫二枚は私の書齋の兩方の壁にかけてあります。先達壬生馬があれを見て殊に靜物の方をよろこんでゐました。私は自分の鑑識が不完全でいつかあなたに勝手な批評がましい事をいつたのを後悔しました。家に遊びに來る一人の若い有爲な文學者は頻りにあれをほしがつてゐるさうですがよう申出ないとの事です。事によつたら上げてもいゝでせうか。必ずあなたの畫を大切に鑑賞するに違ひないと信じます。馬鈴薯も先日申した通り落手してまだ

箱は開かずにゐますが屹度おいしい事だらうと思つてゐます。殊に皆さんのお志をよろこんでゐます。どうか兄からも吳れぐ\もよろしく御傳へ下さい。私は雜誌で當分は忙しい事ですが三四月の後には仕事に慣れて長篇の創作も出來るやうになると思つてゐます。雜誌はどんなですか。何かをあなた方にもさし上げる事が出來てゐますか。私の生活の改革と共に思想生活の方も段々變化して行くと思ひます。この一二年はたしかに私に取つての囘旋期だらうと思ひます。どうか氣の付いた所は十分に注意して下さい。今月の末に新劇座といふ劇團が「吃又の死」を二日試演します。どんなものが出來るかと思つてゐます。時間の都合上大分切りちゞめねばならぬのが殘念です。

此頃は起きるとすぐ矢を六十本づゝひきます。色々工夫して見ると大變爲めになります。何事でも捨てるものではないのを知ります。居食ひをしてゐるものにはよい運動にもなります。

冬の空が時々實に美しい事です。殊に晴れ亙つて風のない午後の靑空の色、それに比べると雲の色などは甘いものだと考へます。

岩内の人々の事をよく思ひ出します。どうか私の心からの好意をお傳へ下さい。あなたはカムサッカ行きをまだ望んでゐられますか。知らせて下さい。

今私は奧の座敷に居ます。母がねてゐて子供達に新聞を讀んで聞かせてゐます。これから私がトルストイ物語を讀んで聞かせる所です。それでは左樣なら。健康でおくらしを祈ります。

## 唐澤秀子氏宛――十二月十日於東京　〔五五三〕

私は何といふ僞善者でせう。人ごみの中でおあひすると何だか顚倒してしまつて昨夜も譯のわからぬ事をいつて居たやうですね。私の義弟が神戶へ赴任するので母等と共に晝飯を竹葉で喰べ一人で銀座をぶらつき、餘り腹がすかないのでベークド アップルを食つたらなほ腹が滿ちて氣までだるくなつて有樂座に行つたのでした。あなたが誘つて下さつた時は全

くさうした狀態に居ました。それから次の幕間に茶がすゝりたくなつたのです。云はれた通り大混雜で三階まで押上らねばなりませんでした。

昨日は猿之助の素質のよいのを發見しただけでもよい收穫でした。久米氏の脚本も考へさせられる內容を持つてゐると思ひましたが取扱ひかたに不足があるのではないかと思ひました。かね子さんは時々矢張あの人の本質らしいものを見せてくれたのがうれしう御座いました。あの人は全く芝居は出來ない人、自分の性格にぴつたり合つたものなら懸命の力と自然さとで光る人だといふ事を知りました。あの人に何んでもふりあてるのは殘酷ですね。今度の役は役不足といふのでに萬々ないが全く多少役ちがひでしたね。都會的な放埒者と出來合ひさうな女には見えませんでした。……私には柄にない事です、批評などとは。

それにしてもあなたといふ人は……兎に角張りのあるあなたにおあひするのが氣持ちがよい。あなたは弱い弱いといふけれども、私はさうは思ひません。張り……それはあなたの身上です。ピンと來るやうな所が全く氣持ちがいゝ。あれであなたから都會人と感傷性とをマイナスすれば當然ソシヤリストになる人柄です。……といふと胸が惡くなりますか……又柄にもない批評をしました。

人ごみの中にはいると私は淋しくなります。

　　人なみの寄せては返す東京のちまたに立てば物のさびしき

舊錄です（吹き出しちやいけません）。歌は下手でもこの頃この心持が段々きびしくなつて行くやうです。

武子姬にあつたかと問はれましたね。あの人も可哀さうな人の一人だと思ひました。あの人がしみを打破るのも中々の力がいる事でせう。あの人にはそれが出來さうにもありませんが……人間といふものは如何してから矛盾をかついでゐなければ暮していけないのでせう。人が動ともすると厭世家にならうとするのも尤もだと思ひました。

あなたが黑を基調にする服裝を選むのは以前から氣づいてゐましたが、己れを知る者だと思ひます。黑と紫との諧調を

あなたの服裝に見て見たい（和服に於て）。黒は私の大好きな色です。
風邪は別に惡くなりませんでしたか。無理をしてはいけませんよ全く。私の暖は暖かい所から寒い所に出たので出たのです。心配しないで下さい。

## 望月百合子氏宛――十二月十二日　〔五五四〕

久しぶりの御消息をうれしく拜見しました。ずつと以前に私の方からもあなたに宛てて手紙を出した積りでしたが受取つては下さいませんでしたでせうか。其中には私はあなたが再び日本の地をふまれない事をおすゝめしてありました。然し今度の御消息で石川氏と共に土に親しむ生活に入られるおつもりであるのを知りそれならいい加減に佛蘭西を切り上げてお歸りになるがいゝと思ひました。歸朝以來の石川氏にはまだお遇ひしません。あなたの居られた頃に比べると日本の社會運動も隨分姿をかへました。私の知つてゐる處では石川氏は其渦中から遠ざかつて居られるのではないかと思ひますが……

私もどうやら此頃になつて實際の生活に多少の變化を加へる必要を感ずるに至りました。而してそろ〳〵それをやつてゐます。水の流れるやうな自然の氣持ちでやつてゐます。北海道の土地は農民にかへしました。あなたが時々訪れて下さつた家は其中賣拂つて母と弟妹との所有にします。其他の財産はある社會運動に出金します。而して私は身邊を掃除して出來るなら仕事に沒頭したいと思つてゐます。さうなつたら實生活に逐はれて却て仕事が出來なくなるかも知れませんけれども。アナトール・フランスの傍に私を置いて眺めようといふのは皮肉にさへ考へられますがそれでもあなたが私の著作を記憶から呼び出して下さつたのはうれしい事の一つです。そのうれしさにまかせて去る十月から出してゐる「泉」をお送りとゞけします。そんな暇があつたら讀んで下さい。

佛蘭西の一角に十二三の少女のやうにしてゐるあなたを想像することはたやすい事です。あなたのあの妙に愛くるしい

淋しい微笑が心眼に描かれます。あなたはもとのまゝに少女らしい姿と心との持主だと見えますね。私は來年は四十六になります。「まあ」とあなたは驚くでせう。然し氣分は依然として青年です。私は「ダダイズム」の氣持ちに味到する事が出來ます。さあもう十二時です。ガス・ストーブが不平を訴へるやうにつぶやいてゐます。書間から吹きあれてゐた空風は死にまで靜まりました。而して時計は夜半を指してゐます。寢なければならないでせう。あなたの上にはよい宵であれ。

## 中戸川吉二氏宛――十二月十四日於東京　〔五五五〕

先日は貴著の特製を御惠送下さつて難有う御座いました。あれが國民新聞に現はれてゐた時は偶にこゝかしこ拜見したばかりでしたが足助兄からは度々推賞の言葉を聞いてゐました。足助兄は實感的に讀んでゐるやうです。本をいたゞいてから拜見した上で御手紙を上げようと今日まで御無沙汰しましたが、自分の仕事に逐はれてゐて一寸暇がないのであまり御禮が長引きますから此手紙を書きました。それにしてもあなたと里見との交誼の斷絶は兩方に交渉を持つ私をして可なり殘念に思はせます。今のところでは感情としても如何する事も出來ないでせうね。兎に角機があつて私が何かの役に立つやうな事があつたら役に立てて下さい。

お子さん御丈夫ですか。寒さをおいとひなさいまし。御禮迄。

## 唐澤秀子氏宛――十二月十六日　〔五五六〕

この間婦人公論の波多野秋子さんといふ人（暫らく前からつきあつてゐる人ですが）からの手紙であなたと私とが「お仲よし」なのか、それならばそれでいゝけれどもといつて來ました。お仲よしには違ひないが特別の意味が其言葉にあるとすればその「お仲よし」ではないと答へてやつたら、特別の意味でのお仲よしであるとの噂さがどこかに立つてゐるのださうです。人間達のおせつかいにも驚くではありませんか。こんな噂があなたの方の御迷惑になると氣の毒ですから一寸

お知らせしておきます。私にとつてはそれは蚊の鳴いたほどでもありません。波多野といふ人は相當氣持ちのよい人だと思ひます。あなたのお歌が前から大好きだつたのでいつか紹介してほしいと手紙でいつて來ました。

あなたからの御使があるか〳〵と思つて待つてゐますがまだ有りません。御返へしするものはもうちやんと出來、それに北海道から來たおいしい豆までさし上げたいと思つて包んであります。一寸持つて行くといゝのですが何んだか忙しいので私の方からも御無沙汰してゐます。買物といへば其お女中は歸途には可なり荷が多くなつてお氣の毒かも知れませんが、そのつもりで寄つてくれるやう仰有つて下さい。

二十三日の入場券の事たしかに承知しました。その日までにはおとゞけします。房子さんは勿論來られないと思ひます。二十日に舞臺稽古がある由、大分變更せられてゐるので少し不安になつてゐます。

白薔薇とはたとへもたとへられたりです。あなたも茶人ですね。花の中には一寸私に例へられさうな結構な花はありませんよ。空でいへば晴れ際の雲、地でいへば湖の岬、水でいへば大雨の後の藪かげの水たまり、人で云へば即ち私です。今夜一人の男が九州に行くのを送りました。それが悲しい男なので今夜は少し氣が滅入つてゐます。歸りに其友の友達なる一人のすりの卵なる未青年者が一緒に飯を喰つたら男の去つたのを淋しがつて愛人が去つた後のやうに泣きました。いつでも人殺しの出來るといふすごい男です。其男がふつと懷中から母の遺骨を取り出して見せました。この寒空に。どうしても山茶花の主のことをあなたからしぼり出さなければ承知が出來ません。一度私を泣かせて見せて下さい。お休み。

## 吉川銀之丞氏宛——十二月二十二日　〔五五七〕

御來書拜見。森本君には先日面會しました。具體的な案は今年中には出來かねて、正月一杯との事でした。それを見なければ果して第一、第二兩農場を二組合にするか、合同するかは不明でありますが、多分二つにする意見だと思ひます。

財團法人となるか組合となるかも目下の所考案中です。氏の意見では矢張財團法人とする方がよくはないかとの事でした。村に寄附する土地と貴方にさしあげる土地との登記かへについては、まだ借金を返濟せぬ中は（幾分でも）控除して殘餘を抵當となす事には勿論反對すると思ひます。その事については私が斷じて責任を持ちますから、その事を村にも通じ、あなたも納得されて各々使用なさつて下さつてよろしいのです。その點如何か不安を抱かれぬやうに願ひます。

（四）小作料未納者の處置につきては、色々と困難のこととお察ししますが、それには御申出の矯正方法等もよい事かとも思ひます。然しそれ等の細目については森本氏の調査を待つて、はつきり定められたらよろしいと思ひます。組合員一同の決議によつて當面の處分法を講ぜられる事も、此場合よろしいでせう。制度組織が變ればそれに對して慣れるまでは色色の障礙が起るのは豫め覺悟せねばならぬ所と思ひます。それは成就するには非常の忍耐と誠實とが要せられるでせう。私は私の考へを實現する上に於て、それを貴君に期待したいのです。

（五）それにてよろしく。

（六）勿論。

（七）差支なし。

（八）大體それにてよろし。小生への御報告を必要とせず。

御出京の事は皆不明です。御暇が出來たら一度是非來京して下さい。森本君が正月中に一度出て來る由故其時機を見はからひ東京に於て、三人が會見出來るやう御上京下されば、一番よろしく思はれます。

豆三俵、米二俵たしかにとゞきました。豆については早速御禮狀を出して置いたかと思ひます。米も難有く頂戴しました。何卒組合員一同へよろしく御禮御傳達願ひます。餅をついて父の靈前に供へるといつて母はよろこんでゐました。

## 牧山正彥氏宛――十二月二十八日於東京 〔五五八〕

先達來御滯京の際は失禮ばかりしてゐました。此度いよ〳〵或る意味の降參をされた事は結局或る意味の勝利であつたと思ひます。學者といふ立場からいふと衣食の累を知らずに研究が續けられるといふ事は望ましい事かも知れませんが一人の人間になる事が何よりも大切だといふその點からすると更らに世智辛い苦勞を嘗められるのも強ち無駄な事ではないかと私は考へるものです。必ずそこから又生れ出るものがあるかに考へます。唯學校の教員としての生活がどれ程あなたを滿足させるだらうかと思ひますが是れは要するに考へやうです。私も丸七年我慢しました。今から考へるとよく我慢したと思ひます。然し考へて見ると其中から靜かな思索と讀書とが與へられてゐたのを今では感謝せずにはゐられません。而して若い人達と交際する機會の出來るのも素晴らしい事です。私が絕えず自分の年齡を踏み破ることの出來るのは其おかげだとさへ思つてゐます。

二十五日に母を熱海に送り今日歸京しました。子供も彼方にやりましたから是れから年末まで專心仕事に沒頭します。御健康を祈ります。

## 里見弴氏宛――十二月二十八日於麴町 〔五五九〕

先夜は「ドモ又の死」を見に來て下さつて難有う。大分せりふをぬかされたので私としては不服でもありましたが一同が車輪でやつてくれたのでそれには滿足してゐます。二十五日母上小兒等を熱海に送り本日歸京しました。一同至而元氣、さすがにあちらは暖かです。是れから獨居故年末まで仕事に沒頭するつもりです。それ故年内には參上しません。來年改めて。御一同の御健康を祈ります。草々。

〔五六〇〕

## 唐澤秀子氏宛――十二月二十八日於東京

簡單な御手紙で物足らなく思ひましたが年末御多忙と思つてゆるして上げます。偖而明後三十日の朝の中に遊びに來ませんか。波多野秋子さんも來ると思ひますから御紹介もしたいのです。波多野といふ人も近頃の知合ひでよくは知りませんが母上との間の事でかなり淋しい經驗を持つてゐる人らしいのです。今の夫婦生活は至而幸福らしいので又物質的にも困るやうな事はないらしいのでかなり暢氣なところもありますが人間としては何處かに美しさを持つてゐると思ひます。朝から出かけるのは少し御難儀かも知れませんが大切な買物を忘れてゐたんでせうあなたは。呵々。

では其時。母も子供も居ず家內が小廣く思はれます。伊豆からは今日歸つて來ました。

# 一九二三年

## 原久米太郎氏宛——一月十九日於麴町　〔五六一〕

本當に御無沙汰。御一統御健全ならん。私の方も無上に頑健、母は目下熱海に滞在してこれも元氣でゐるらしい。が足助の不元氣は實に氣の毒だ。此頃は又異常に不規則の發熱がして醫師は氣管支ではないかといつてゐるらしいがそればかりでもないやうだ。多少は神經も手傳つてゐるのだらうけれども蛔蟲でもゐるのではないかと思ふから檢便したらといつた。腰部のリヨウマチは矢張いけないので臥床のまゝだ。何しろ八月以來の永わづらひだからヤキ〳〵するのも實際無理がない。本當に氣の毒に思つてゐる。吹田兄には其後一寸會つた。其中一會したいと思つてゐる。獨逸くんだりまで行つて來たといふ風もしてゐないのが、あの男の面目を躍動させてゐる。

　僕があんまりお人好し過ぎるといふので今朝も素一から一撈が來た。そこで僕は好人物なるものを書かうとも思つてゐる。僕は自分のお人好しが順境から來てゐるので表面的なものと思ひ少しく恥しく思つてゐたが、つら〳〵考へるのに必ずしもさうではない。もつと根柢的なものらしい。それなら相當面白い。何事もずん〳〵見拔いて道理に叶つたやり方をするもいゝが、平仄が合はないでハートばかりで行くのもいゝ。永い修練の結果僕にはそれがチヤンポンになつてゐるのでいやになる。

　中々家の始末がつかない。母の住む家の方の監督に任じてゐた行郎が正月早々から腸チブスで寢こんだのでどうなつてゐるか分らない。然し二月末頃には引移りも出來ると思ふ。その上で僕が引越す。而して家產の始末をすればノー〳〵とするだらう。其ノー〳〵とした擧句また困り切つて逆もどりといふ事になるかも知れない。それは其時の事。

　昨日今日はこちらも隨分寒いが何しろ今年はからつ風が吹かないので大助りだ。よい冬だ。今戲曲を書いてゐる。

## 足助素一氏宛――一月十九日於麴町　〔五六二〕

又々異常の發熱の由不思議といふべし。何としても兩便の嚴密な檢査を先づして貰ふがいゝと思ふ。發熱は多少兄の神經もかゝはりを持つてゐるのだらう。高木を一度頼んで見たらどうだらう。若し必要があるなら一寸電話を下されば僕より頼んでもよい、但し彼は外科だからと思つて僕も今までいひ出さないでゐたのだが野村氏よりはいゝかも知れない。

鵜田の事は背負なげの形だがあれだけの事でもしないよりはいゝのだし僕はそんなに後悔はしてゐない。僕が言論で聲援するかも知れぬといつたのは事が十分具體的になつて本人の志がはつきりわかり而してその事件が僕の思想圏内に這入つて來たらしようと思つてゐた事だ。初對面で人間を見拔く事の拙なる僕はいつでもだまされる事を覺悟してゐる。だまされはしないかと用心し過ぎて尊いものを拾ひそこねるよりは其方が僕には難有いから。吉野氏などの此度の常識には不贊成だ。お人好しに出來上つた僕は其お人好しを徹底して行くより仕方がないと思つてゐる。然し時々けちツくさい氣持ちから其徹底の出來ないのが本當をいふと屢〻僕の悲しみだ。

使が來てゐた時は來客だつたので歸ると直ぐ此手紙を書く。

## 足助素一氏宛――一月二十八日　〔五六三〕

まだ感想の方が出來ないので不取敢「斷橋」だけお送りして置く。一昨夜は中々面白い會だつた。兄のゐないのが殘念だつた。酒狂が仕舞ひ頃に狂ひ出して櫻井八重子に喰つてかゝつた。女は生殖器を保護する事にだけ僅かに誇りを感ずるのだなどといつてゐた。あすこの女中のおひでさんが大分兄に氣があるらしい。是非おいで下さいとの傳言だつた。斷食は續けてゐるのか、結果のよいやうに祈る。

今日大學の英文學のニコルス教授夫婦を見能に案内する。

## 木田金次郎氏宛――一月三十日於東京　〔五六四〕

其後は御疎音をしてゐますが嚴寒の候にもかゝはらず强健に仕事に從事しておいでのことと思ひます。私もおかげで無事に仕事にいそしんでゐます。早く悉くの始末をつけて背水の陣を布いた上思ふとほりに振舞ひたいものと思つてゐます。然しこの頃は兎に角仕事に對する熱が再發しかけてゐるやうです。この間の「ドモ又の死」の實演は可なりな成功で、臺本を見たばかりでは不滿足であつた人も十分に滿足してくれました。三月號の一幕劇も市村座で菊五郎が演ずる事になるかと思ひますが、この方も相當自信を持つてゐます。

偖て福田久道氏から又別封の本と寫眞とを送つて來ましたから一覽の上廻送します。私はもう存分に見たもの故兄の方にとゞめて置いて下さつて差支ありません。あなたからも福田氏に禮をして下さい。大變よい本ではありませんか。倶知安の佐藤氏から葉書が來て白水會が大層よい集りを持つてゐるといつて來ました。其光景を想像して羨しく思つてゐます。

御大事に。皆さんによろしく。

## 足助素一氏宛――二月四日　〔五六五〕

行三の病氣はもう大丈夫と思ふ。明日あたりは枕を拂はせようかと思つてゐる。

三日程前から吉川が農場から出て來て 折柄來合はせてゐる森本と 農場の規約について 評議してゐるので 無沙汰してゐる。慶應病院はうまく行つたか知らん。

詩集第二輯の廣告文を同封しておく。

「斷橋」がいよ〳〵三月帝劇に於ける菊五郎勘彌合同の舞臺で演出される事になつた。三月に「泉」がこれを載せて出れ

ば好都合だと思ふ。就ては校正刷は何日頃出來るだらう。若しまだ長くかゝるやうなら原稿の轉寫一通を作らして下さる事は出來ないか。尤も稽古は二十四日からはじまるのだから、稽古にかゝる頃には「泉」が出てゐる事になつて好都合だが、それ以前に臺本だけでも讀まして置きたいと今日長田秀雄氏からいつて來たのだ。

岩瀨の事に關しては必要があるなら私が口をきくといふ事は當人に旣に云つておいた。岩瀨の作品に關する兄の考へと私の考へとの間には或る相違がある。尤も「足」などは隨分以前に讀んだもの故、今讀んだら如何だか知らないが、その時に得た感じからいふと十分な特殊性を有ち而かも多分な藝術的內容を持つてゐると私は信じてゐる。唯どんなものでもプロ文學とさへいへば、評判になり易い目下の形勢にあつて彼の作が認められるかについては、私も疑問に思つてゐるものだ。

私はあの位の作品は矢張り公けにしておくべきものだと信じてゐる。あの作品を闇に葬つてしまふ事はないと思つてゐる。尤も今、非常に自信のある戲曲を書いてゐるやうだから、その成績によつて彼も方針を定めておそくはあるまいが。今夜から急に嚴寒が襲つて來た。注意の上にも注意を乞ふ。明日は又吉川と農場の相談をするので仕事が出來ない。どうもこれは仕方がないが……

## 茅野蕭々氏夫妻宛――二月十一日於麴町　〔五六六〕

お二人からよい書物を御惠送下さつて本當に難有う御座いました。丁度風邪にかゝつた爲め學校を休んで臥つてゐる子がありましたので奧さんの御本を讀んで聞かせてやりましたら大層よろこんで聞いて居りました。御主人のお譯しになつた戲曲はどれもまだ讀まずにゐたものですから樂しみに拜見します。此頃は戲曲を書きたい氣持ちが强くなつてゐるので單にそれは樂しみなばかりではなく少なからぬ暗示となつてくれる事と存じます。深く御禮申上げます。子供はもうよくなつたので昨日後養生の爲めに鎌倉の弟の處に厄介になりにやりました。乍餘事御放念下さいませ。もう何やら春のかを

りが空中に漂ひはじめたやうに思はれます。御幸福にその樂しい時節を迎へられますやうに。

## 唐澤秀子氏宛――二月十四日於東京　〔五六七〕

何を書いてよこして下さつても私はさう神經にさへるやうな事はしませんのに。この間は御出かけのお忙しいところを失禮しました。田所はあれから大飛躍をして有頂天になつたり地獄のやうに苦しんだりしてゐます。昨日は彼が來て東京を落ちて行く名殘を惜しみましたが、夜の十時にまた電話で呼び出して來たので神樂阪の或る家に行き藝者をあげて飮み其藝者にキスしそれから待合にしけこみ相手の人と床の上で話をし悲しくなつて泣き出し指も觸れずに其家を出でビシヤモン樣の處で別れ二時半頃家に歸りました。「おめい歸るのか」と田所が隣りの部屋でいふ聲を聞きましたがこれが當分彼の聲の聞き納めでせう。

私が部屋にゐると襖をあけて二十五になるといふ痩せ形のその女が這入つて來ましたが、自分では意識してゐないのでせうが、私は寒風が這入つて來たやうに思ひました。田所は其女がよくつて私の所まで引張りに來ましたが應じませんでした。「あなたは私を嫌つてはゐないだらうね」といつたら「嫌つてゐません」と答へたから「それぢや話さう」といつて半時間ほどとりとめのない話をして今晩はあなたを買ひ切つたのだから何處にも行かないでゆつくりこゝで寢ておいでといつたら一緒に歸るといふので途中まで一緒したんです。全く無表情のやうな女でした。何しろ私にははじめての經驗です。人間の生といふものは悲しいものだと本當に思ひました。

子供はなほりました。お訪ね下さい。

## 足助素一氏宛――二月十九日　〔五六八〕

實は全く氣味が惡くおつかなかつたのだ。其場で斷然と云ひ放たうものなら玄關を出た所で猫いらずでものみはしない

かとさへ思つたのだ。全くそんなすごさだつたから。……十七日に手紙を書いて必ず其鄕里に良人と歸るやうに鋭く忠告してやつた。

結婚をしろとの兄の忠告も多謝する。あの人は去年の末に結婚してしまつた。訪ねて來ても會はず。手紙をよこしても返事をしない方針を取る事を其姉と談合して……それ切りさ。姉のいふ所によれば今は幸福な生活をしてゐるとの事……先づ今の處妻に貰ひたい女はゐない。何しろ僕は再び家庭を持つ煩に堪へない。心が荒んだのか、氣力が衰へたのか、愛情が分裂したのか。何んだか知らないが……兄が曾て踏んで來たあの捨鉢な經路を今度は僕が行くのではないかと恐れてゐる。唯三人の子供だけが僕の錨になつてゐるのだ。あいつらの事を思ふと泣かされる。而して總ての事を思ひとゞまる。

早く兄の對症處置が行はれて痛みだけでも直るといゝと思ふ。全くあれぢややり切れない。堪忍强い僕が傍て見てゐてもたまらない。早く健康だけでも恢復するやう祈りに祈る。

昨日今日の天氣ではいよ〱春が來るやうだ。明日から家を見に人がやつて來る。吉川は一昨日農場に歸つて行つた。「斷橋」いよ〱上演と決定、明日十一時から帝劇で顏寄せがある。午後からは怠つてゐた倉田を訪問しようと思つてゐる。

「泉」四月號は小說にした。

其中うかゞふ。

## 高村光太郞氏宛――二月二十四日於東京　〔五六九〕

お話はありましたが容易に滿されない希望と思つてゐました御制作も御惠與下さるとの御報に接して雀躍を禁じ得ません。殊に手の習作はいつか足助が拜見して推賞措かなかつたものです。私の拙書に對しては釣合の取れない難有報償とは知つてゐますが無御遠慮頂戴致したいと思ひます。どうか宜敷御願ひ申し上げます。

ものの發表された年月をみるがよい。夫人の死後數年の間である。しかも人の世の限りを、醜さの限りを『カインの末裔』で、淸さの限りを『クララの出家』で、さうして性の深刻な葛藤を『或る女』で見つくして居られるのである。この人世の可能の限りを試めしたその上に築かれた思想的の一建築が、『惜みなく愛は奪ふ』の一文である。

惜みなく凡ての人生の無駄を、人生の塵をふるひ落した先生が、その前後に亙つて、比較的統一ある意見を、例へば『イブセン研究』、『生活と文學』の如きを述べられたのも當然である。この集は、その意味から云つて、先生の偶像破壞の完成を告げるものであると同時に、偶像再興の機運を告げるものとして、再讀の價値が十二分にあるものである。

○

『惜みなく愛は奪ふ』について。

私として殘念な事は、內務省が發表當時不許可となした部分が、若し今日原稿が殘存したならば、發表し得るのではあるまいかと、思はれる事である。英文でこの論文の要旨は發表された事は解つて居るのだが、手に入らず、又先年エスペラントにも譯された筈である。

　この有島氏の認識不足は、たしかに淡海氏も云はれる通り、あの啓蒙期の一種のストルム・ウント・ドルンク時代に、その當時の知識階級者を波浪のやうに襲つた不安の所産であるに相違なかつた。それは勿論認識不足だが、しかし同時に、歴史的回顧を伴ふ、當時の知識階級全般に惹起した動搖の、たしかに代表たるべきものとも云へるだらう。『宣言一つ』は、其の意味で、歴史的所産と云ひ得られる。

　しかしこの見方を、『宣言一つ』に關する第一の考察とすれば、――或はこの見方こそ、再考と云はるべきかも知れない、何故ならその當時、廣津和郎氏などによつて提起された所謂文學の超階級性だとか、少くも一種の樂觀説などの、所謂ブルジョア文學觀をその第一の考察とすれば、淡海氏のそれは、たしかにそれ等を含めての再考とも云はるべきだから、――それならば、或は第三考と云つてもよい。兎に角、如上の認識不足説を、再び考察してみたとき、もしこの有島氏の社會觀を、文學觀に置換したら、どうだらうかと思ふのである。換言すれば、私は有島氏の社會觀を、彼の文學觀程に買はうとは思はない。が、その當時、所謂啓蒙期の知識階級の不安的表現といふ以外、更に、氏の社會觀が、氏の常に從事されてゐた文學的體驗から、自ら流露したのではないかと考へるときに、私は、そこに、思はずも一種の眞理を見る。即ち氏の社會觀に、淡海氏と等しい認識不足を感ずる私にも、もしそれが文學的體驗より出たものであり、その結果、もしその社會觀に、文學觀といふ三字を置換したら、……さう思つたときに、私は單に、認識不足を云爲する譯には行かない氣がするのである。社會學に關してまだ十分に勉強してなかつた有島氏、そして文學的體驗に於いて遙に優れてゐた氏、この二つから割出された、その『宣言一つ』は、單に啓蒙期の認識不足だけと見る以外のものを我々に提供してゐると考へられる。

　しかし、このことも、或は知識階級出のプロレタリア作家達から、既に論じ盡された問題として、鋭く反駁されるかも知れない。が、實を云へば、私の云はうとする所は、まことにそれ等のプロレタリア作家への駁論となるものなのだ。即ち私は次の樣に考へる。知識階級出のプロレタリア作家が、そのプロレタリアートの解放運動に、今日まで努力し得たその功績は明瞭に見出し得る、しかしプロレタリアートそれ自體の文學に、彼等は何程の貢獻をなし得たらうか。しかも事實、その前者の功績、即ち解放運動への功績とは、それは知識階級者のプロレタリートへの參與として、單に淡海氏の言説を繰返すだけのことではないか。それは勿論重大なことだ。一個の偉大なプロレタリア文學よりも、プロレタリア百萬の解放の方が重大であることは云ふまでもない。だが文學の領域に於いて、もし問題をそれ自身の領域のみに限るとすれば、そのとき有島氏の意見と共に、私はあらゆる文學作品を、その階級の内部に認めなければならないと考へる――恐らく絶對にと云はう。

　それは、まつたく、幾度か繰返さるゝ如く、たゞ文學と政治との相違のみであり、またそれ故であるばかりだ。それは私の創作的體驗による證明でしかない。が、この體驗こそ、私は絶對であると考へる、その獨斷から強く云はうと意志するのみだ。いやまた實例についても見よ、林房雄、前田河廣一郎、片岡鐵兵等々々、私はこれ等のインテリゲンツイアのプロ作家達に、結局彼の屬する階級の香氣を感ずるだけなのだ。恐らく彼等は、プロレタリアの戰線に於ける優秀な闘士たるだらう。かの淡海氏の云はるゝ如く。だ

は來意を告げる言葉に過ぎなかつた。先生は「さうですか」と輕く肯いてくれた。先生は靜かな口調で「どうぞ見せて下さい」といつて私が風呂敷包から一束の繪を取出す間に隅の方のストーブの所へ立つて手づから薪をストーブへ投げ入れられた。室は氣持よく春のやうに溫められていつた。先生は私が取り出す一つ一つを自ら壁へピンで止めたり、立てかけたりして默つたまゝぢいつと見つめて行かれた。——その時の光景は私がこゝへ書くまでもなく、先生によつて『生れ出づる惱み』の中に見るが如く完全に書きつくされてゐる——「個性的な見方をしてある」といつたやうな言葉で大變喜んで下さつた。やがて奧樣をもお呼びになつてやつぱり言葉少なに見て居られた。先生が私の繪について話される度にしとやかに肯かれて居た奧樣の姿もよく私の心に浮ぶ。それは行光さんが生れ出る三四ケ月前のことだつた。

又その日は私にとつて忘れることの出來ない劃期的なことが多かつた。畫といへばコローとミレエがすぐ頭に浮ぶ私の畫に對する見方をその時先生が示して下さつたセザンヌの複製が根柢から搖り動かして行つた。私は驚きの瞳を睜りつゝ眺めて居た。その時私は札幌へ來る前に東京の三會堂？ でバルツの靑いリンゴを三つばかり白い皿にもつて描いてあつた畫を想ひ出したのでそれを先生に告げると「ア、あれ、あれは僕の家ですよ」といつた。そのことも今でも忘れずにゐるがあの繪は今尙有島さんにあるかしら。

コローの話が出た。ミレエの話が出た。セザンヌにもまさつて私が聽きもらすまいとしたのはミレエの話だつた。「ルーブルにあるミレエの春の繪の草原はまるで木物の草が畫面に生えてゐるやうで手で觸れて見度い衝動にかられた」といつたあの話もよく思ひ出す。亦ミレエの鉛筆畫でもと犬塚？ といふ女の畫家に依賴を受けて巴里の畫の競賣に行つたところが小さな掌大の鉛筆畫が三百圓、豫定の三百圓を見る〳〵突破して手も出せなかつたといふ其時の話、話は一つ〳〵今も昨日か今日の事のやうに甦つて來る。

先生に門の所まで送られてその家を辭したのはもう夕方近い頃だつた。その門をくゞるまでの不安と心配とは跡形もなく私の心から拭はれてゐた。而して私は何とも言へない油然とした氣持を暖かく抱いてゐた。「何といふやさしいノーブルな人だらう」と、さう思ひ乍ら私は歸路についたのだつた。

——先生はその頃『惜みなく愛は奪ふ』の愛己主義の一元の道に生きる前の二つの道を惱みに惱むで居た頃だつたらう。然しその惱み！ その思想に觸れていく何の準備も少年の私には持ち合はさなかつた。先生の姿が次第にはつきりとして來るやうになつたのはその時からもつと後のことになる。それは稿を更めて書いて行くことにする。

# 『宣言一つ』再考其他

雅川滉

この全集の月報のたしか第三號であつたと思ふが、有島武郞氏の『宣言一つ』に關する批評の中で淡海氏がプロレタリアートの革命運動に、知識階級の參與を否定した氏の意見を認識不足として論じられたのを讀んだ記憶がある。

有島武郎全集月報

第八號　昭和四年十一月十五日

新潮社出版

# 先生を憶ふ

――其一、最初の訪問――

木田金次郎

有島先生の家が、札幌の東端をかなり大きく流れ去つて居る豐平川といふ川の對岸に在る或果樹園の内にあつた頃――當時上白石村二番地といつた――その家へ初めて訪ねて行つてからもう二十年も過ぎ去らうとしてゐる。

その年の十月に私は東京の學校を止して、岩内へ歸つて私の海の生活が始つて行く前一ヶ月ばかり、私は札幌の友の所に過して居た。私の居た友の家といふのも豐平川からはさう遠くない。その頃ローランドといふ舊教の宣教師をして居た人のライラックか何かで垣根をめぐらして居た一寸その當時の札幌でも異國的な感じのする家の裏手つゞきにあつて、そこから私は毎日の日課のやうに雨さへ降らなければ近くの豐平川の川筋を傳つて白石村の方へ行くとか、ずうつと西へ大學の裏手の原つぱや、森閑とした植物園の横を通つて見渡す限り茫漠と擴がつた石狩原野を北に眺め乍ら、ともすると輕川近いところまで夢中に畫を描きに歩いてゐた。底も知れない程よく澄むだ蒼空の下に遠く海までつらなつたその平原の眺め、そしてその平原のそこゝにすつかり黄葉しつくしたポプラの並木が枯草の堆積と共に點々と眼に映つて來る眺めは、其時代のいくらか感傷的な少年なる私の畫趣をそゝるに十分だつた。それは秋、といふよりも初冬と秋とをまぜこぜにしたやうな晩秋の眺めだつた。明日にも雪が來るかも知れない、雪が一夜のうちに見る影もなく自然を枯れ盡して行くかも知れない、その不安に「明日もいゝ天氣が續くといゝなア」と懸念し乍ら寫生から歸つてくる時の氣持！　あの頃の思ひ出は本當に私の生涯のうちでも深く忘れられない幸福なものになつて居る。

其頃の或雨の日の午後、朝から降り出して降りやまない霙まじりの雨の午後、今、朝鮮鐵道局に勤めてゐる瀧谷君が一人二人の友人と連れ立つて、私にも、黒百合會の展覧會があるから一緒に見に行かうと誘つてくれたので、共にその展覧會を見に出かけて行つた。――黒百合會といふのは多分先生等が中心に原田三夫さんや小熊さん等と共に創めた北大の教授や學生の洋畫の會で、それは今でもずつと毎年つゞけられて居る――會場は雨の爲めに薄暗い感がして居たが、皆どれも額縁にはまつて――畫に額縁が全部つくといふことは當時のアマチュアの會としては大したことだつた――多くの油や

ホ氏詩集についても過分の御奬辭をうれしく拜見しました。
餘寒折角御大事に祈上げます。假令小屋に移つても「手」は生涯珍重致します。

### 足助素一氏宛——二月二十五日　〔五七〇〕

この間の兄の詰問といふのは全く嬉しい事だつた。兄にはあたり前、僕にもあたり前には相違ないが、僕の事情についてあれまでの關心を持つてくれる心臟がこの世にあるといふ事は何といつても涙ぐませられる事だ。いやに寒く便りなくなつてゐた僕の心はあの日にはかに日光に浴した。

この先きどんな運命が來るかわからない。この頃は何んだか命がけの戀人でも得て熱いよろこびの中に死んでしまふのが一番いゝ事のやうにも思はれたりする。少し心が狂ひ出してゐるなと自分でも思ふが、自分の仕事を完成した處がそれは結局次ぎの時代には古典としてのみ殘れば殘る種類のものだと考へて來たりすると自分の生活の前途が妙に暗らく見えたりするのだ。この年になつて熱情が底深い所に動き出すやうになつてからは世の中のことが少し明らかに見え始めたらしい。子供のやうなよろこびを以て見つめてゐたものが存外中ぶらりんのものに見えたりして來る。もう一つ掘り下げてそこに更らに堅い地盤に出喰はすまではこの不安は到底安定に達しさうに見えない。一元生活を完成するに至るまでの煩悶に似て更らに迷路的な動搖が僕の上に來つゝあるのだらう。然し僕はそれを避けはしないつもりだ。崩れるものは思ふまゝに崩れさせて見る。そのあとに何が殘るか。殘るものがあつたら僕は今よりももう少し立派なものになる事が出來るだらう。

今までの僕の讀者は少しづゝ僕から離れて行くらしい。諸方でそんな聲を聞く。同時に他の種類の讀者を得つつある事もたしかだ。今度の讀者はたしかに前の種類の讀者よりも堅固なものであるに相違ない。唯僕はそれらの讀者にもつと積極的な訴へをなし得ぬ事を遺憾とする。

あれから久野氏の獨演會に行つた。ベートーフエンの晩年の作品四種の中三種だけを聞いて歸つた。さすがに四年雌伏

の甲斐があつて演者の熱情も技術も原作者を大して恥しめないものだつたやうに謹聽した。驚いたのはベートーフエンの感情の廣大さだつた。人間的なあらゆる感情――滑稽から崇美に至るまでの――は少しも損はれずにかの老音樂家――而かも悲運に閉された――の胸中に湧き立つてゐるのを知つた時、僕はたゞ驚くばかりだつた。僕はたしかに或る力を得て音樂堂を出た。それから弟が病氣全快を祝ふ爲め僕と子供とを夕食と活動とに招いてくれた。愉快に一夜を過した。兄の病源がまだはつきりしないのは齒痒い至りだ。早く適當な對症療法が發見されん事を祈つてゐる。何しろ兄が生きてゐるといふ事は僕に取つての力だ。自重してくれ給へ。

この間の兄の顏は美しかつた。

## 高村光太郎氏宛――三月一日於東京　〔五七一〕

今日は御制作「手」を態々お屆け下さいまして難有う御座いました。拜見して驚きました。手といふものがあんな神祕的な姿を持つてゐるものだとは今まで心付きませんでした。あれは又一箇の群像でもありました。見てゐれば見てゐる程それは不思議です。明日は面會日ですから早速部屋にかざつて見る人を驚かさうと樂んでゐます。「手」といふ題で感想を書いて見たいと思つてゐます。何しろ本當にありがたう御座いました。永く永く襲藏して御厚情を記憶します。不取敢御禮迄。

三月一日「斷橋」の公演第一日を見て歸りし夜十一時半。

## 足助素一氏宛――三月五日　〔五七二〕

また御無沙汰してしまつた。「骨」は八日頃から三日程外泊して一氣にかきたい爲め其儘にしてゐる。田所が仙臺に發つやら、後藤の退院したいといふ事やら、帝劇やら、無意味の訪問者やら、面會やらで寧日なしだ。今夜も是れからビヤート博士と晩餐をする事になつてゐる。明日は御見舞が出來ると思つてゐるが。

家が四谷寺町といふ所に見付つた。家賃七十五圓は高いがしつかりしてゐて位置が馬鹿にいゝし部屋數も適度だからそこにきめた。今度は健康によく、濕氣るやうな事は萬ない積り、先づ御安心を乞ふ。母の家が出來次第引移る事にし、今住んでゐる家は賣れても賣れなくつても弟妹に委託する事に取きめた。少しづゝ片がついてゆく。靈感は一度來て一度電話をよこしたが斷つた。少し氣の毒な氣がする。

兄の症況はまだはつきりとは決まらないのか。中々長いものだねえ。今度行つたら僕から一つ醫員に聞いてやつて見よう。

幸に一同無事乞安意。

## 唐澤秀子氏宛――三月五日於東京　（五七三）

昨夜はありがたう御座いました。何年ぶりかで誕生日らしい誕生日を祝つていたゞきました。

　おぼつかな幾年經なばおほらかに悔なき我れを尋ねあつべき

御出發の前必ずお會ひ申すとは申しましたが今になつて考へると必ずとはいへないかも知れません。あなたもおせはしい事でせうから。

若し修道のおさまたげにならなかつたら、御起居の消息を偶には漏らして下さい。御住所を知らうとはしません。強くない御健康をくれぐれも御用心なさい。私自身にも其中何が起るかわかりません。私も精一杯には生きて見ます。

## 波多野秋子氏宛――三月十七日於東京　（五七四）

十五日の御手紙大變にいゝ御手紙。これですつかりあなたの御氣持ちがわかりました。私の所謂ＡＢのことがあなたのつきつめた心に實感となつて現はれた事がよろこばしい。で今日あなたに約束した御宅に上る事を私はひかへました。五

分を待つのにもそれ程の苦しみをして下さるあなたに二時間を空しくお待たせするのを考へると私は自分が苦しく思ひますけれども強ひて自分を縛ります。それは私が次ぎのやうな結論に達したからです。

愛人としてあなたとおつき合ひする事を私は斷念する決心をしたからです。あなたにお會ひするとその決心がぐらつくのを恐れますから、今日は行かなかつたのです。私は手紙でなりお目にかゝつてなり、波多野さんに今までの事をお話してお詫びがしたいのです。あなたが私を愛し、私があなたを愛するその心持を如何に打破ることも出來ません。自然を滅却することが出來ない以上は出來ません。けれども純な心であなたを愛し、十一年の長きに亙つて少しも渝らないばかりでなく、益々その人をいとしく思はせる程の愛情をそゝいで居られる波多野さんをあざむいて、愛人としてあなたを取りあつかふことは如何に無恥に近い私にでも迚も出來る事ではありません。波多野さんの立派な御心狀が私の心まで清めてくれます。美しい心の美しさを私はしみ〴〵尊くなつかしく感じます。あなたも波多野さんの前に凡ての事實を告白なさるべきだと思ひます。而してあなたと私とは別れませう。短かい間ではあつたけれども驚く程豐に與へて下さつたあなたの眞情は死ぬまで私の寶です。涙なしには私はそれを考へることが出來ません。

縱令あなたが如何に私を愛して下さつてもあなたが波多野さんに對して持たれる好意と感謝は昔のまゝであるでせう。而してそれは年と共に增すとも減ずることはありますまい。波多野さんにその氣持ちがわかつて下されば巳むを得ないあなたの氣持ちはわかつて下さると思ひます。而してこれからあなたのあるだけの力の及ぶ限りあなたの眞心を以つて波多野さんの生活を幸福にしてお上げなさる樣祈り申します。

勿論誤解はして下さらぬと思ひますが、私は決して嫉妬や激情から此手紙を書いてゐるのではありません。心の中のほがらかな光によつてこれを書いてゐるのです。

あなたが自分では迚も死ねないと仰有る言葉なぞも私にはよく解ります。而してあなたのそのやさしい心をなつかしく思ひます。死んではいけません。

波多野さんの爲めに私の爲めに一日でも長く生きてゐて下さい。あなたとはお目にかゝれない運命に置かれてもあなたの此世に於ける存在を感じてゐられる事は矢張り私のよろこびです。さうです。私も私の子供に歸ります。三人の子供を私は戀人とします。全くあなたとの地上の交渉を絶つてあなたを愛し續けるのは波多野さんも憐んで許して下さるでせう。許して下さらなかつたところがそれを如何することも出來ない事ではありますが……

然し波多野さんが同情と理解とを持つて下されば私としては矢張りうれしいことです。あなたも如何か凡ての事を靜かに考へて下さい。

殊に私が波多野さんにお詫びをしたいといふ取りつめた考へを考へていゝ方法を示して下さい。

溺れ易く感じ易い私の心といふよりも行爲を（今までの）笑はないで下さい。私は私のこの弱點を矢張り憐れみ愛せずにはゐられません。私は生涯かゝる弱點に苦しみぬく男でせう。戀愛事のみならずすべてのことの上に。

私の戀愛生活は恐らく是れが最後ではないかと思ひます。この次ぎに若し來るとしたらそれは戀愛と死との堅い結婚であるでせう。

つまらないことを云ひ過ぎてゐたらすべてそれを無視して下さい。まだ書けてそれがいつまでも書き續けさうです。然しそれにはきりがないから。

## 里見弴氏宛——三月二十日　〔五七五〕

用事から先きに。

四谷右京町の私の所持地になつてゐる分に目下材木置場に使用されてゐる土地を戸川が用ゐたい希望を持つてゐますのでそれを叶へてやりたいと考へてゐますが一つあれを明けて下さる事は出來ぬものでせうか。至急御相談申上げます。

この間要山の香風園踏の寮に三日程行つて書きものをしてゐました。靜かで仕事がよくはかどりました。「斷橋」は脚本もいけないのかも知れないが小屋の不適當なのと演出の曲のなきとで失敗したらしいのが殘念でした。
それからこの間の夜二人の男と丸梅に出かけお內儀さんを驚かせました。勘定の段になつたらあなたの帳面に書きこんだから拂ひに及ばずとの事にて其儘蟲をよくして歸りました、御馳走になつたわけです。濟みませんがよろしく。
足はもういゝのですか。御健在を祈ります。草々。

## 足助素一氏宛――三月二十二日　〔五七六〕

今日は話が變な方にそれて兄の休養の時間をそこねた事をお詫びする。然し兄の方にも僕に云つておきたい事があるのだし僕も岩瀨の言葉から彼の爲めに少し述べておきたいと思つてゐたので大體お互に話してよかつたとも思つてゐる。兄の僕へのお話はよく分つた。信任といふものに對して忽諸な態度を取つた事を殘念に思つてゐる。こゝいらに僕の子供らしさがこびりついてゐるのは自分ながら腑甲斐ないと思つてゐる。
岩瀨に聞いて見た上で或は兄と岩瀨との間に誤解があつたのではないかと思ふところだけは今日いひ盡した積りだから其の以上は僕は岩瀨について釋明しようとも思はないし、又兄の岩瀨觀について首肯する點も僕には十分にあるので、僕の意見として從來の交誼上岩瀨にいふべき事はいひ置くつもりでゐる。
これで今朝のいやな話の事は打切りにする。どうか不惡。

兄が今日一寸僕に漏らしてくれた社會對個人の問題の發展については僕も多大の關心を感ずるので兄の考へが發展したら差支ないかぎり知らせて頂きたい。僕も思想的には或る落付きを得て居るやうだけれども實際生活の問題としては考へなければならない事が有り餘る程あるので兄自身の意見などは殊に聞きたいと思ふのだ。

今月末か來月のはじめには母も熱海から歸京するだらう。母の感情と僕のそれとは段々離隔して行くやうに見える。母は此頃滅切り弱氣になつた。僕の頑固が一部分母をさうさせたやうでもある。それを考へると母に對して氣の毒なといふ感情が起る。然しもう乘りかけた舟だ如何にも致方がない。其中には母も新境遇に慣れてくれるだらう。僕と子供も亦さうなるだらう。或は此月末に母を熱海まで迎へに行くかも知れない。

幾忙しさに紛れて今日行かうか今日行かうかと思つてゐる中にいつでも無沙汰が長くなつてゐるのに驚く。これからはもつと頻繁に出かけるから許してくれ給へ。

では其中に。

## 里見弴氏宛——三月二十五日於麴町　〔五七七〕

四谷土地の事お知らせによつて私の思ひちがへだつた事が判りました。一時地租を分擔してゐた事があつたので半分は私のものと思ひ込んでゐましたが其後全體をあなたの方に併合なさりたい御希望があつてさういふ事にしたのを思ひ出しました。率爾おゆるしを願ひます。戸川は私の大原の土地を檢分に今日出かけて行きました。

「直輔の夢」を御惠送難有う御座いました。あれは後半だけ拜見して見事なものだと思つた御作品でした。樂んで全體を拜見します。

『斷橋』は二十二日で樂になりました。

足助素一氏宛――四月十日於東京　〔五七八〕

書けないで苦しんでゐる、十一日の晩まで待つていたゞく。昨日は天氣がいゝので晝から燒け半分上野に出かけた。今年の唯一の花見。祈御自愛。

足助素一氏宛――四月二十六日於汽車中　〔五七九〕

今船上山、伯耆大山を左に見、隱岐につゞく海原を右にながめて米子に向ふところ、雨雀は鳥取に下車し橋浦と二人なり。少し疲れたが景色は珍らしい。中々よいところがある。

足助素一氏宛――四月二十七日於米子町　〔五八〇〕

昨夕七時頃當地着。夕食後涌島君外に案内されて錦海の夜色を賞味し城山址に登り折柄突發せし市中の火事を遠望して帰宿す。半月天心にあり。

足助素一氏宛――四月二十八日於松江ときは樓　〔五八一〕

今朝雨中を大社に參詣おみくじを兄のために貰はうとしたら「そんなものは一切出しません」と神職の手間取りのやうた老人に叱られてぎやふん……

午後二時此地着。雨雀氏がまゐつて寢てゐる間に城に登る、美しい景色。松江は兎に角實にいゝ所だ。

## 足助素一氏宛――五月一日於城ノ崎油筒屋　〔五八二〕

昨日鳥取高農の講演を最後として山陰の仕事は濟んだ。午後から海岸の砂丘を見物に出かけた。夜は有志の歡迎會がありそれから汽車に乘つて夜半過ぎ當地に着く。秋田、橋浦は直路東に向つた。今朝温泉寺に參詣した。ひどく氣にいつてしまつた。今原稿用紙を買はせにやつてこれから又仕事にかゝらうといふところ。境地からいふと落付いて書けさうだ。三日の朝神戸に向ふ。天氣は幸によい。此地はすつかり若葉になつて山の姿など云ひやうなく美しい。

## 秋田雨雀氏宛――五月三日於城ノ崎温泉　〔五八三〕

もう既に御歸宅なさつた事と思ひます。嘸お疲れでしたらう。然しこの度の旅行がお蔭で非常に快いものであつた事をあなたに感謝します。私はこゝで二日働きましたが十五六枚しか書けませんでした。明日は早朝神戸の方に立つて行きます。而して五日には歸京するでせう。船は四日には出ないのでやめました。こゝの温泉場と玄武洞とは見ものです。

## 木田金次郎氏宛――五月八日於東京　〔五八四〕

山陰の旅行を終へて去三日神戸に入ると狩太村の木村氏から吉川の件に付き大體の報知に接し驚愕した次第です。あの事件は吉川が農場の爲めよかれかしとの奉公心から起した事ではありましたが、薄々情を知りながら默過してゐた私の不行屆御申譯なき事にて、是れが爲め吉川に思はざる迷惑をかける結果になつた事を氣の毒に堪へません。それにつき岩内に於てはあなたから實に一方ならざる御懇情を蒙つたさうで吉川は書中に於て特にそれを感謝して居ります。吉川に取つては其際百萬の援兵を得たよりも嬉しかつた事と私からも深く謝意を表します。

東京には六日の夕方歸着しました。母の家の方が完成しない爲めにまだ移轉も完了しないといふ有樣で中有に浮いてゐ

るやうな氣持ちで閉口してゐます。其中に然し諸事解決に至ると思ひます故さうしたら少しはまとまつた仕事も出來るだらうと考へてゐます。

御健康を祈上げます。

## 吳茂一氏宛――五月九日於東京　〔五八五〕

昨日の御手紙拜見致しました。仰有る事はよくわかりましたが萬望さういふ御遠慮は御無用になさつていたゞき度いので前通り繁々御遊來下さると難有いと思ひます。遂事の繁い爲めに私はいつでもゆる〱お話も致さずまご〱してゐますがそれにもかゝはらずあなたを友人として持つことは私に取つての大きなよろこびであるばかりでなく子供達には此上ないよい事であると確く信じてゐます。あなたの御時間をお取りする事を不本意に思ひながらもあなたのやうな方が子供に近づいてゐて下さるなら實に安心で難有い事です。此上とも何卒何の御遠慮もなく彼等の爲めだけにでも私の家をあなたの御家同樣にお思ひになつて御遊びにお出で下さる樣御願ひします。殊に祖母から離れ彼等が四谷に住むやうになればあなたのやうな方を彼等が必要とする程度は益々强まつて行くのです。さう私は感じてゐます。

右不取敢御返事迄。餘は拜眉の上。草々。

## 河上肇氏宛――五月十五日於東京　〔五八六〕

先達は突然推參してお妨げ申上げました。其節お話申上置きました事柄早速御熟考下さつて態々御返事を難有う厚く御禮申上げます。乍失禮萬一御聞取下されば仕合せの至と考へて申上げた事ではありましたが御來示の次第で御座いましたら勿論强ひて申上樣も御座いません。第二の方法なるものは些かも考へては居りませんでしたが改めて熟考致して見ます。今になつて見ると餘計な事で御懸念を煩はした事を恐縮します。

然し今後萬々一にでも御來示のやうな御考へを飜してあの金を利用して見ようかとのお考へが浮んだ節はどうか無御遠慮其旨をお聞かせ下さるやう懇願します。私としては出來得る限り初志を貫徹したい欲望は捨てかねてゐるので御座いますから。然しあなたの御自由を寸毫でも束縛する結果になつては堪へられぬ事で御座いますから其邊は御了解下すつて御自由になさつて下さるやう御願ひ申します。

不順の節折角御自愛を祈上げます。乍筆頭御詫びに御禮をかねて。

唐澤秀子氏宛——五月二十九日於東京　〔五八七〕

あなたがつんけんと意見をしてくれるのがうれしい。全く少しづゝあなたは偉くなつて行く。然し此日頃何處にも出ないのを女の生活の物いたらなさに持つて行くところは少し駄目だ。早く世話女房になり切つておしまひなさい。そこの小さな世界で大きく威張ること。

全く私は此頃淋しい。今度の淋しさは容易につきぬけられさうもない。ひよつとすると共倒れだ。過ちを犯すのを恐れるより其過ちを拭ひ取り得る大きさの人が賴もしいとのあなたの言葉は涼しい。けれども拭ひ取ることの出來ない程な大きな過ちも犯すかも知れないね。其人が一番幸福なのかも知れないと此頃は思つたりします。

此梅雨時には水鄉になどお話してゐたが實現は出來さうもない。

何しろ暫らく目でお會ひしてうれしかつた。この手紙があなたの出發前にお手にはいるやうに。

唐澤秀子氏宛——六月一日於東京　〔五八八〕

すぐ手紙をありがたう。

男に取つて女の人のよさは、その人が戀人でない限り、母にも姉にも妹にも友達にもなつてくれられる事です。こんな

事は朧ろに感じてゐたのだつたが今度のあなたの手紙を讀んではつきり知りました。うれしく思ひます。

今朝も雨です。いやだ〳〵と人にはいひながら何故私はかう雨が好きなのか。點滴の音を一人で默つて聞いてゐると倦きるといふ事がありません。雨には苦手の乞食になり下るとも、此道樂だけは捨てられまい。西洋にゐた三年間はこの音の聞けないのがおいしい香の物の食べられないのと共に物足らない隨一だつた。

朝食を食ふ前いそがしく机に向つてあなたが祈りに旅立つ前にこれを落手するやうにと認めます。あなたの祈りの十日間によき收穫あれ。可哀さうな秀子。

## 石原純氏宛——六月七日於東京　〔五八九〕

まだお眼にかゝる機會を得ませんが思想の爲めに立派なお働きをなさつて下さつてゐる事に對して蔭ながら平生感謝してゐるもので御座います。此度は貴著「人間相愛」を御惠送下さいまして誠に難有う存じます。其中には私の小さな感想に對して敎へて下さつたものも含まれてゐると存じますが實はあれに對しても公けにお答へ申すべきが至當だとは思ひましたが、自然といふものに對するあなたの御考へと私のそれとが可なりかけ隔つてゐまして其詮議に亙ると最後は結局互ひの主觀に落付く外なき事故枝葉の論議は結局無駄だとわざとさし控へた次第です。決して貴論を無視してゐた譯ではありません。機會があつてゆつくりお話でも伺へれば仕合せだと思つてゐます。御禮旁〻右まで。草々不盡。

## 有島生馬氏宛——六月七日於東京　〔五九〇〕

久保夫人から封入の手紙と共に紹介の名刺が來ましたから早速お送りします。それでうまく行くやう祈ります。

一身上に一寸した事件が持ち上つてゐます。何れ御面倒を願ふ結果になるだらうと思ふと心苦しい事だが、これが先づ私に對する面倒の燒き納めとお許し願ひます。何れ委細は其中。

# 遺書

弟妹諸君。
弟よ妹よ長いよい共和の生活に存分私を與らせてくれたのを喜びます。嬉い想い出丈けが殘つてゐます。
秋子と識り合つてからだん／＼暗らくなりつゝあつた人生觀が一時に光明に輝くのを覺えます。××××××××××××××××××××××××××。
私のあなた方に告げ得る喜びは死が外界の壓迫によつて寸毫も從はされてゐないといふことです。私達は最も自由に歡喜して死を迎へるのです。輕井澤に列車が到着せんとする今も私達は笑ひながら樂しく語り合つてゐます。どうか暫く私達を世の習慣から引離して考へて下さい。たゞ母上と三兒の上を思ふとき涙ぐみます。三兒は仲のよい三人です。三人で仲よくしてゐなければ寂しくてたまらない者共です。向後も三人がどうかして常に一緒にあり得るやう、さうしてあなた方の愛に浴することが出來るやう合力して下さい。親愛なる甥や姪にも私の變らざる好意を傳へて下さい。あなた方すべての上にいつまでもよい世界が展らけてゐるやう。
六月八日　夜列車中にて

○

母上、行光、敏行、行三宛
今日母上と行三とにはお會ひしましたが他の二人には會ひかねました。私には却つて夫れがよかつたかも知れません。
三兒よ、父は出來る丈の力で鬪つて來たよ。

かうした行爲が異常な行爲であるのは心得てゐます。皆さんの怒りと悲しみを感じないではありません。けれども仕方がありません。

どう闘つても私はこの運命に向つて行くのですから。すべてを許して下さい。

皆さんの悲しみが皆さんを傷けないやう。皆さんが弟妹たちの親切な手によつて早くその傷から斷ち切るやうたゞそればかりを祈ります。かゝる決心がくる前まで私は皆さんをどれ程愛したか。

六月八日　汽車中にて

○

波多野樣

この期になつて何事も申しません。誰がいゝのでも惡いのでもない。善につれ惡につれそれは運命が負ふべきものゝやうです。私達は運命に素直であつたばかりです。それにしても私達はあなたの痛苦を切感せずにはゐられません。あなたの受けらるゝ手傷が少しでも早く薄らぎ癒えん事を願上げます。私達の取りかはした手紙の斷片は私達が如何にあなたを感じてゐたかを少しく語るかと思ひます。然し私達は遂に自然の大きな手で易々とかうまでさらはれてしまひました。今私達は深い心から凡ての人に謝し凡ての人に同感します。現世的の負擔を全く償ふ事なくて此地を去る私達をどうかお許し下さい。

六月八日夜　列車中

○

森本厚吉兄。

永い厚誼を謝す。私たちは愛の絶頂における死を迎へる。他の强迫によるのではない。
（この間約五行削る。これは財産に關する問題。）
靜子さんにも小さい人たちにもどうぞ吳々もよろしく。兄等の健康を祈る。

六月九日午前二時

○

素一兄
永い〳〵暖い思ひ出のみが殘る。
今朝は難有う。兄の熱烈なる諫止にもかゝはらず私達は行く。僕はこの擧を少しも悔いず唯十全の滿足の中にある。秋子も亦同樣だ。私達を悲しまないで吳れ給へ。母子供等の事他所ながら見守を願ふ。僕の著作の印稅全部は將來三兒にやつてくれ給へ。
原、吹田、秋田、藤森、其他の諸兄にも手紙を書くべきだけれども此際だから略す。兄より宜敷。
山莊の夜は一時を過ぎた。雨がひどく降つてゐる。私達は長い路を步いたので濡れそぼちながら最後のいとなみをしてゐる。森嚴だとか悲壯だとかいへばいへる光景だが、實際私達は戲れつゝある二人の小兒に等しい。愛の前に死がかくまで無力なものだとは此瞬間まで思はなかつた。
恐らく私達の死骸は腐爛して發見されるだらう。

# ティルダへ

兄の日記「觀想集」千九百六年(明治三十九年)十一月十七日を開いてみると、瑞西ルツエルンから、シャフハウゼンの古都へ到着した晩のことが書いてある。羅馬で識つた私の友人達がそこで吾々の到着を待つてゐてくれたのである。その藝術家のグルプのうちに三人の若い女性が居た。その中のティルダ・ヘックといふ野歌などを唄つた金髪靑眸の一處女が兄の心を惹いた。二十三日そこを辭した時の日記には「涕涙を垂る」と識してある。この僅か一週間の交遊から二人の文通は始まつて、實に十八年間の長日月に亙つた。兄の殉情、友愛はその半生の外面的推移と共に悉くこの書簡のうちに告白されて居る。

私は昭和三年九月、三度目にシャフハウゼンを訪問した。ティルダは兄の死を勿論知つては居たが、改めて生前死後の詳細な事情を物語つた。ティルダの室は兄の記念物で充されてゐて、尙ほ生ける人に對するが如き感情を抱いてゐた。十二月彼女は全書信のコピイ百二十一枚を携へて巴里へ到着し、日本でそれを發表することの許可を與へた。こゝに掲載するものはその書信の一部分である。(有島生馬記)

## ミュンヘンにて——一九〇六年十一月二十四日(端書)

昨夜は一睡もせずに今朝七時此處へ着きました。まるで魂も力もぬけた死骸のやうです。何一つ興味をひくものもありません。一週の間の樂園の生活は終りになりました。一片の同情さへも見出し得ない暗闇に蔽はれたこの憐れなアダムを見て下さい。

然もなほ私は、あなたが私を思ひ出して下さるのを望んで居ませう。そしてあなたの御便りを一心に待つて居ませう。

弟からもよろしく申添へます。御母上と弟さんにも一同よりよろしく。

## ワイマルにて――同年十二月（端書）

偉人が人に與へる感興は素晴らしいものです。私は此處にまるで美しい夢でも見てゐるやうな氣で滯在してゐます。ゲエテ、シルレル、ヘルデル、ヴヰラント、リスト、ニイチエといふ名前を擧げる丈けでも、十分です。あなたが一緒に此處にいらしたらと本當にそれを殘念に思ひます。この惠まれた町は、天のおとづれなる雪によつて、今二重に惠まれてゐます。その雪に戲れてゐる子供達の樣も可愛いものです。御便りを待つてゐます。お寢み。

## 巴里にて――一九〇七年一月十日（端書）

隨分長く御便りがありませんが、御達者のことゝ思ひます。今朝はギメー美術館に行つて立派な日本物の蒐集を見ました。阿彌陀佛の像もその一つです。これは同年代の歐羅巴の物のどれと較べて見ても少しもひけを取らないだらうと思ひます。御便りを待ちかねてゐます。私達はもう二三日此處にゐませう。

何卒ブフマンに、昨夜ベルト氏にお逢ひしたと御傳へ下さい。悉しくはいづれ壬生馬からブフマンに御便りしませう。

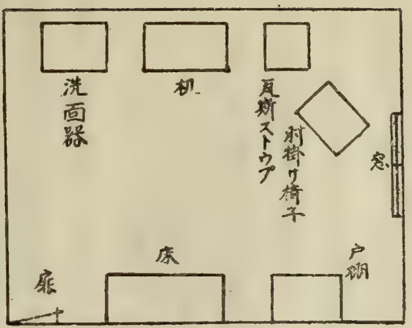
## ロンドンにて――同年一月十九日（書簡）

巴里で親しい弟と訣れて、獨り旅をアミアンに向ひました。其處にある本寺とピュヴヰ・ド・シャヴンヌの壁畫が見たかつたのです。二時間ほど其處に留り、其れからカレーに行き復び海の素晴らしい光景に接しました。

船はなほ穩やかな水面を鋤いて行く。古臭い言分ながら、海洋といふものは如何によく處女に似てゐることだらう。靜穩な水の面には抗し難い愛撫がある。漣波はみな卽ち笑靨だ。深さと神祕とを指示する濃藍はお前の船をかこんで、處女

の意味ありげな眼光のやうに船をはこび進める。なみ滿ちた愛の杯を飮み干した若者の魂を運び去る。其の中には恐ろしい魅力がある。お前はそれを憎んでも、逆らふことは出來ない。それは聲も高めずに、だが、致命的な微笑をちらりと見せて、お前に命令する。――其の微笑には深み――そこひの知れぬ深みがある。（以上亞米利加より歐洲への旅日記より拔萃）

船は海峽の穩やかな水を鋤き進んで、日暮れ方にドオヴァに着きました。大陸をもう去つたのです。あなたの住んでおいでの國と私のゐる處との間を廣い海が隔てゝ居る。――一度は私もあなたの直ぐ近くに行つた。それから遠い處へ！――夕方は晴れ渡つて涼しくその上に、空には新月がおぼろに輝いてゐました。それを眺めてゐるうちに、不圖憂鬱な氣持が私を捉へました。斯くして無情な汽車の動搖に、亂れた心を抱き乍ら私は倫敦に着いたのです。




到着の晩は夜どほし夢に過し、さて次の日――即ち昨日――は元氣を振ひ起して、落着かぬ氣分をすつかり拂ひ落さうといろ〳〵やつて見ました。市の端から端まで一番手頃な寢室を見つけようとして歩きつゞけました。殆んど何十といふ家を漁りたづねて、結局その一つに決定しました。それから商業區に駈けつけてフランスの貨幣を兩換し、次に手紙を受取りに日本大使館を訪ねました。二三の音信を獲ましたが、あなたからのは一つもありませんでした。それから大急ぎで、市のずつと端にある停車場に行つて荷物を受取り、復び勘定と、手廻りの物を取りにホテルに戻りました。斯うして到頭私は自分の暫しの寓居――六米の奧行に三米半の間口、肘懸椅子も動かし得ないやうな――に住むことになりました。（此處に室の平面圖（上圖）あり）

昨夜はひどく疲れてゐたので、ぐつすりと眠りました。

今日も亦、船舶會社や美術館を訪ねて忙しい日を過しました。夕方近く歸つて來て、自分の心とまでは行かずとも、自分の室を暖めようと煖爐に火を入れました。それからあなたの寫眞と御手紙を取出さうとトランクを開きました。肘懸椅子に腰

をかけ、あなたの顔に見入りながらあなたの手紙を念入りに繰返しよんで私は泣きました。私の憐れな魂をいためました。

それが當爲であるか否かは知りません。唯々知つてゐるのは、事實吾々はめぐり逢ひ、そして訣れたといふ事です。誰か、この帳の降りる前に、吾々が復た會ふ時を知つてゐませう。あなたの音づれはその度毎に、親しげにまた再びあなたの許に歸れと私を誘ひます。たとひそれがほんの愛想であつたにせよ、あの心を牽きつける平和と、懇ろな人々のところに戻る理由は十分にあるのです。然し、あなたがそれを書き送るに本心をもつてすることを私が信じ、又私がそれを讀むにも本心を以てすることを知る故に、あなたの誘惑にみちた招待をうけ入れることを私は強ひて遮つてゐるのです。如何にも、私はあなたに復た會ふのを望んでゐます、然しどうしてまたあなたに、しかも永遠に訣れることに耐へ得るでせうか。この苦しさの經驗は一度で十二分です。ティルディ樣、人の一生には、心臓の一部を自ら斷ち裂く時があります。そしてそれを、その止まらうと欲するところに殘しておく。そしてその心臓の傷口は恒にその苦痛を訴へかける。若し彼が強ければ、その傷ついた心を「沈默」といふ黒布で包みかくし死に到るまで勇敢な戰を戰ふ。その死を知る者は天にある父の外誰もないでせう。

私のやうな無價値な者に對するあなたの優しい、ふかい心遣ひを、私は自分の最も幸福な、又最も悲しい廻り合せと思ひます。そして忘れようと務めても、決して忘れることはないでせう。あゝ、若し來世に於て、總ての男も女も、その抱く感情を殘らずありの儘に打ち明け得る國があつたら、又、國民の別も、社會の偏見も、不合理た傳統もなく、人の才賦はその眞實の價値に從つて判斷される處があつたら。その時こそ私は其處であなたに御會ひしませう。

加之巴里で、あなたに關して大變にいゝ報せを聞き込みました。といふのは、あなたも大變によく御存知のある藝術家が、あなたの人柄に強く引きつけられてゐるといふ事です。

その人は早かれ遲かれあなたに求婚することゝ思ひます。もしも御氣に適つならそれを御承引なさい。それは啻にあなたの誇りと仕合せのみならず、又私の誇りと幸福です。あなたは既に心の優しい處女でした。ですから今度は愛に滿ちた

妻に、慈母におなりなさい。

萬望あのチユリヒ湖畔を消遙した時に、私の言つた言葉、とつた行ひを宥して下さい。あの晩にあなたは、エルフのこと、金星のこと（いつも月下に輝いてゐる）あなたの夢、春の印象、それから外にも色々のことを聞かせて下さつた、その時の言葉や行ひに、昂奮のあまり私は度を超えたかも知れません。

私は二月（來月）の二十三日に此處から日本郵船に乘つて發ちます。此の手紙は處々であなたの御機嫌を損じはしなかつたかを虞れます。その折は、萬望私のかくも亂れた心を憐んで、私を蔑まないで下さい。あなたからの一語は、渇いた草の葉に注ぐ一滴の露のやうに私を祝福しませう。あなたの御健康と幸福とすべての惠みとを祈りつゝ。

夜も闌けました。ぐつたりとした氣持に、きつと隨分意氣地のない事を御書きしたと思ひます。それを恥ぢはしても詮方もありません。御讀了になつたら火中するか、又決して他人に見せぬ樣に願ひます。これを書いたのはあなたの爲なのですから。私の假住居はロンドン西中區ブルームベリ街六十五番ですが、直きに更へるかも知れません。

## ロンドンにて——同年一月三十日（書簡）

寫眞をいろ〳〵御送り下さつて繰返し有難く御禮申上げます。其等は次々に、あなたの許での追憶を喚起して、夢を見てゐるかのやうに感ぜられました。その思ひ出は未だ明かに、生々としてゐます。がその時は永遠に歸して終つたのです。この世界は何といふ不思議なところでせう。

また御手紙は念入りに有難く拜見しました。全く今日までに十遍もそれをよみ返したでせう——それも物好きからではなくしんみりとした氣持で。先づ第一に御禮を申上げるのはあなたの祕密を固く心の中に押し蔽んで、誰にも洩らさず、唯私を信じて下さつたといふことです。この樂しい御婚約を御祝ひすることを免して下さい。私の心からの御慶びを申し上

げ、あなたも亦末々まで仕合せに御過しになつて、この悲みに滿ちた世界に樂しい家庭といふもの丶美しい實例を一つ、お加へになるやう祈り上げます。又私が何處に居ても、あなたの「婚禮（ホッホアイト）」の御祝の仲間に入れる樣に、式の日が極り次第すぐと必ずその日附を御知らせ下さるといふ事を今から約束して下さい。たとひ私がその時多分は一人で居ようとも、歡喜に溢れる心には何の支障もないでせう。この一事をどうか是非約束して下さい。

この前の手紙で申上げたある藝術家についての御尋ねは、その人を明らさまに申上げる要もないと思はれます。勿論私の弟ではありません。弟は巴里にはゐません。その人の事、この前申上げたことは巴里で耳にし、其後になつてあなたにもう御婚約があるといふ事を知るやうになつたのです。その事を申上げたのも、あなたとチュリヒ湖畔を逍遥したあの時に御言葉から判斷してまだ御約束はないものと思ひ込んで居た故です。（その時に仰つた言を御思ひ出しならば、私がさう思つたのも左右なく御咎めにならないと思ひますが）その話はもう打切りませう。

あなたが、御自身を私と比較して仰ることは、全く恥かしさの限りです。全く私には、何もあなたに優るところはありません。たゞ恐らく今迄のところ運命が幾分か私に都合よく事を運んだといふに過ぎません。然しさうとしても、何故あなたはそのやうに冷たいことを仰るのですか。たとひあなたが學者で私が愚人であつたにせよ、憎む時には私はあなたを憎みます。又あなたが乞食で、私が王者であつても、愛す可くばあなたを愛します。その境遇が如何あらうとも吾々の間の交誼をへだてることは出來ますまい。若し私が乞食にならうと、罪人にならうと、狂者にならうと、私が正しく生きてゆく間は、あなたは私に同情を注ぎ、私を高め引上げて下さるでせう。その事を私は確かにあなたの爲に果すでせう。私はかたくあなたの信實と純潔と同情に信を措きます。

たとひ如何樣な噂が立たうと、私があなたに繫ぐ信頼をたち切ることは出來ません。決して。

御手紙を讀んで後、私はます〳〵再び御訪ねすまいとの覺悟を固めました。その事を復（ふたゝ）び云つてはいけません。さうすればあなたを私に對して無慈悲な方だと思ふでせう。

私は至つて丈夫で圖書館での勉强に可成り追はれてゐます。思ふのを避けるには本を讀むことです。御健康と御元氣を祈りつゝ。

追伸　巴里に寫眞をおいて來ました。いつか御送りする機がありませう。一番お氣に入つてゐるあなたの寫眞を送つて下さい。殊に私にと贈つて下さい。(私のこの前の手紙をどうか火中して下さい。結構燃えるでせう)

## ロンドンにて――同年二月十一日（書簡）

暫らく御使りしなかつたことは何とも御詫の致しやうもありません。片時もあなたのことは念頭を去らぬながら、それにも拘らず、否それ故にいよ〳〵御手紙を差上げかねてゐました。

人には洩らさぬあなたの心の奧底を腹藏なく打明けて下さつたことは繰返し御禮申上げます。

今は御心を隈なく明らかに理解することが出來ます。そして又若し萬一にもあなたを傷つける言葉や行ひが私にあつたならば心より御宥しを願ひます。あなたは決して――決して――私を傷つけたことは有りません。――確かにあなたの心づくし、あなたとの友誼はこの世に於て、又其後に於ても、最も貴い私の所有として私の心に殘りませう。とり分け御願ひし度いのはあなたとの深い交りをいつ迄も續けてゆくのを許して下さる事です。如何。

あなたに倣ふとすると打明けて申し上げねばならぬ事が私には一杯あります。けれども、一旦過ぎた事は眞率な友情の外は忘れようとするのを恕して下さい。この樣な事に就いてあなたに斯くばかりの御心配をおさせしたのは本當に濟みませんでした。が今は御心もすつかり靜まつた事と思つてをります。歐洲を發つ前に再び御眼にかゝる事が出來なかつたにせよ、私は衷心からあなたの望と心中とを理解し、明らさまな御心遣ひに感じかつ御禮を申上げる外ありません。

あなたと伯林においでのK君との愛情に少しでも陰影を投ずる事程、恥づ可き事はありません。それ故、私とあなたとの間の音信をなほ續けるといふ事が、少しでも他人の疑惑を引起すとお考へになるなら、私はあなたに御手紙を書くのを止

めて、端書で文通する事も出來ます。それとも何でも最上策と御思ひになることを敎へて下さい。

私の唯一の欣びといふのは、此の前にも申上げた通り、あなたとK君との人知れぬ交情がいよ〳〵親密となり、いつか近い内にあなたが人生のもう一つの輝かしい圈内に入られるといふ事です。

扨またいつもの雜談を暫くさせて下さい。この四日に弟が巴里から來て喜ばせてくれました。そのあくる日、卽ち五日にはあなたの御便りが屆きました。若しあなたや其他のシヤフハウゼンの友達と今迄にもう一度一緒になつてゐたら、どんなであつたらう！　此頃は見物に大變忙しくしてゐます。ある日は繪を見に行つて、すつかり違つた型の繪に接しました。初期の英國肖像畫やラフアエル前派のものです。ロセッティや、バアンジョンス、クロオム、レイノルド、コンスタブルなどはあなたの趣味にどう映るでせうか。ロセッティの浪漫的熱情、バアンジョンスの憂鬱な美しさ、クロオムの超絕な風調、レイノルドの手堅い共感、コンスタブルの新鮮な氣力は全く人を引きつけるものです。他の日は、テムス河畔を歩きました。滑らかに流れ下る濁つた水面を、鷗がそこゝに點々と白をうつてゐました。一度は又、ウエストミンスター寺院に入りました。あの陰鬱なゴシックの尖頭をもつた骨組、その中では怪しい幽靈が人目を驚かしもしよう。時には又博物館に行つて自然の精緻と美しさの限りないことに驚く。又は敎會に入つて過去の世紀の信仰が、更に進步した信仰の形式を消し盡さうとして、ぼんやりと燃えてゐるのを見る、等々。

若しあなた方が皆こゝに來て、筆紙の盡し得ない澤山の事柄を話しあふ事が出來たら、如何にいゝかと思つてゐます。

さあもう紙がないので終ひにしなければなりません。どうか私の眞似をしないで直ぐに御返事を下さい。

再伸、御寫眞を出來る丈け早く送つて下さい、こちらからも、他のでも、お送りします。

## ロンドンにて——同年二月二十一日（書簡）

今朝までに御手紙と寫眞とをまだ落手しないので出發前に頂戴の出來る見込がまづ無くなりました。あなたからの御便

りをさう度々戴かうといふのは、全く私の我儘ですが、それを除いてもあなたの病氣がまた惡くなりはしないかと頻りに氣遣つてゐるのです。多分は御加減がわるいかどうかも判らずに乘船を餘儀なくされることでせう。それが心にかゝります。しかも殘念至極ながら何とも致方もありません。それで今「御機嫌よう」を告げるため筆を取つた次第です――この本當に厭はしい言葉を。私は繰返しシヤフハゥゼンでの心からの御もてなしと、其以後の深い御心遣ひに御禮申上る外ありません。眞實の友誼を獲るといふ事は、勝利を得ること、もつと適切に云へば、發見をするといふ事です。あなたの御蔭で私は自分の一生に、今迄曾て知らなかつた國土に入り得たのです――そこで私は人生の二つの礎である信頼と共感とを收穫することが出來たのです。

吾々の船はロンドン埠頭を二十三日の早朝に出帆する筈です。英國海峽ではこの二三日强風が吹き捲つて、ロッテルダムの近くで一艘の汽船が難破しその結果數百の生靈が海に溺れました。今はやゝ下火になつたものゝ私の出發際が大して穩やかなものではないといふ事は察せられます。巨大な湧きたちかへる水の山の中で、私が船に暈ふ樣子をあなたは今から確かに思ひあてることが出來るでせう。それも亦考へ方では面白いことですが。でもこの永い航海の中にはいゝ天氣があるでせう。でぼんやりと腰を下してこの海路の有樣を手紙に御報らせすることも出來ようと思つてゐます。あの地中海の紺碧の水や、紅海の思ひ切つた陸、印度の鮮やかな綠の森林、等々が見られようといふ待望はたしかに人の心を魅惑します。他の方々が日本へ來るとお決めの時は、あなたも是非共々來なくてはいけません。あなたはたしかに「富士山倶樂部」(註、シヤフハゥゼンなる藝術家の團體をかく名づけてゐた。カムペルが「富士山幻想曲」といふ立派なセロの曲を作つて以來のことだ。)の歷とした一員なのですから。是非、是非とも來て下さい。どうかそれに同意して下さい！

終りに心から祈り上るのは、あなたとK君との樂しい交りがますます固められてゆくことです。それは大切なことでもあり、同時に美しいことです。もう、私の狹い知人の間だけにでも見聞した不幸な戀愛事件は多すぎる程あります。その上に今私が心から望むのは、その榮光のうちにあなたを見ることです。何の歡喜が、之に優るでせう。

萬望御母上と弟さんに心からの御訣れの言葉をお傳へして下さい。私にお便りを下さるのが後れたのは御病氣の所以ではなくて何か他の些事の爲であることを切に望みます。この世での最上の生活が御身の上にある事を祈りつゝ。

再伸、私の寫眞については御詫をしなければなりません。壬生馬が到着した時、差上げることの出來る寫眞はみな置いて來たことが判りました。萬望いまに日本からどれか他のを御送りするまで御待ち下さい。その折はもつと良いのを差上げられる氣が致します。私の日本での住所は麴町區下六番町十番地です。もし日本宛に直ぐ御便りを下されば、日本の土を踏むや否やそれを受取つて欣ぶことが出來ると思ひます。

## ポートサイドにて――同年三月七日（書簡）

御手紙と寫眞を受取つた時の私の言語に絕した喜びを想像して下さい。日本へ着くまでに御便りを頂くことは全く不可能だと思つてゐたのです。そこへ今朝事務長が外の通信と一しよにあなたのを渡してくれました。

今し方ポートサイドの見物から歸つて來たところで、私の心はすつかり顚倒して何を申し上げてよいかも分りません。唯明かなのは、あなたの手紙と寫眞が快い夢の樣に私の心を和めてくれた事です。只今は私の下らぬ譫言で御煩しせぬ樣に何も申上げますまい。この次に此の船の寄港するのはコロンボで、三月の二十一日、その次はシンガポールに三月二十八日に着きます。最後は香港の四月四日です。併し其等の港へ宛てゝ御便りを下さるのは、恐らく私の手に入らぬことゝ思はれますからさし控へて、直接に日本へ送つて下さい。あなたのお書きの日本語は大變に上手でした。結構私にも讀めました。其、意味は「佛說」といふ事です。

酷い暑さ。石炭をいま積込んでゐるので埃の入らぬ樣に窓をすつかり閉めなければならないのです。窒息しさうな空氣、耳も聾せん許りの騷音、みながのこらず重苦しい感じです。あなたは御自分の惠みに滿ちた樂園に暮していらつしやい。外部の世界は詰るところ、見えるほどに良いものではありませんから。もう筆を擱きませう。書き續けるほどいけません。

地上に於ける總ての惠みがあなたの上にある樣に。

再伸、また、自分の意圖に反して何か申上げます。御寫眞のうちで、頰杖しておいでのが一番結構です。たゞあなたが何も仰つて下さらないのが心殘りです。すつかり云つて下さい。大切に護りませうから。

## コロンボにて——同年三月二十二日（書簡）

あなたを思ひ、あなたが忘れられません。私の日記からの書抜きを少し御目にかけませう。

「三月七日　稍涼し、ポートサイド、

船がポートサイドに近づくとスチュワードが隣室で告げてゐる聲で目が覺めた。船室はひどく蒸暑い。多分暑氣が增してくるだらう。……船客はみな甲板に集つて陸の片影をも見逃がすまいとする。皆一生懸命なのだ。際涯もない大洋の寂しさを知らない人には、吾々に生を與へ、食糧を與へ、吾々を養育して與れた陸の甘美な引力を理解する事が困難だ。大洋は冒險の部域であり、陸は家（屢々樂しいと云はれてゐる）である。前者は魅力をもち、後者は引力をもつ。

船が碇を下すや否や、ボートの群がその傍を取卷いて集り、その光景はいよ／＼興深くなつてゆく。それらの——快い淺黑の皮膚のやせ骨だつた——アラビア人型の人々は、緩い衣を着け、トルコ帽を被つてゐる。程もなく石炭船につゞいて、行商人が群をなして押し寄せる。その一人は一枚一片づつで埃及切手を賣りつけて、それを一枚貼れば何處にでも端書を出せるといふ。が後で聞けばそれは半片切手で、もう一枚づつ貼付しなければならなかつた。酷い奴等だ。嘘や泥棒はありふれた德なのだ。船を去る直前に、此處へ轉送されて來た手紙の一束を受取る。その中に壬生馬からの端書が一通あつた。

ティルディは端書と手紙を一通づつと寫眞を三枚寄越した。涙……私は心の底ではそれを容しながらも、自分の涙を罪惡に感じた。私は全く救はれ難い愚者だ。友人！　それは何といふ虛僞の言葉だらう。「友人」といふ言葉は屢々卑怯の隱

れ家なのだ。それを十分に知り盡しながらもあなたを友人と呼ぶ！……

吾々は上陸した。その中で一番主な建物は郵便局だが、それも巴里や倫敦の光景に慣れた眼には平々凡々に寫る。街路は汚く狹く、家屋は小さく、住民は乞食の群のやうに見える。而もなほ此の半熱帶的都市にはある人を蠱惑する力があつた。……想像は一極端から他へ人を追ひ遣る。時には即刻にも此の忌はしい町を立ち去らうと思ひ、時には復た全く異つた世界に入つた樣な氣がする。その世界も結局はあの在り來りの世界よりはましかも知れないのだ。三時頃に船は動き始めて間もなくスエズ運河に入つた。夜中の略十一時頃まで三艘の船を通過させる爲に吾々の船は繋留を餘儀なくされた。その船は各々サーチライトを檣頭に掲げ、星月夜の濃い靑空を太陽の殘光のやうにその光は明るく照らした。周圍は靜けさそのもので、時折穩やかな漣波の寄せてうつ音が聞える許り。私は、水夫等が音もたてずに仕事をしてゐる最上甲板に佇んでゐた。その樣子は、彼等がこの靜寂の神祕的な閑けさを亂すまいと懼れてゐるかの樣であつた。運河そのものも電燈の強い光に燐光を放つ流のやうに見え、物怖ぢして飛び立つ鳥のあとも瞭きりと光の隅にかくれるまでつけることが出來るほどであつた。舷側の小さなボートにはアラビアの舟夫が乘つてゐて土語で互に何か語り交はしてゐた。この折ほど此の樣な奇異な感じをうけた事は今迄にもなかつた。自分は何であるか。それは何處の事であるか。宛らにアラビアの物語の主人公ででもある樣な氣持がした。

『夜は可成り冷え冷えとした』……

三月八日。

未だ運河の中だ。舟が進むにつれて景色は段々面白くなつた。輕い赤砂ですつかり出來上つた堤のむかうには、微妙な薄紫色をした影をひいて、露はな山なみが連なつてゐる。

八十九哩の運河を經てスエズには十時頃に到着した。日は高く昇り萬物は強烈な光に燃えたつてゐた。マネエのみが此の素晴らしい光景の微かな槪念を傳へ得よう。……』

もう書き續ける暇がありませんので、こゝで止めて置きませう。時には憶ひ出して御便りを下さい。時空は決して私のあなたに對する愛情を裂くことは出來ません。「菩提樹」の葉を一片同封して置きます。その木蔭で、佛陀が眞理に到達したといふ神聖な樹です。それと花を一つ、其の名は知りませんが、それでも私の尊敬の心からなる記念として。御機嫌よう。

此の午後から、また大洋のさ中へ入ります。トリトオンに身を委せつゝ。

## 因幡丸にて――同年三月二十七日（書簡）

今は殆んど申上げる事がありません。實のところ餘り申上げようといふ事が多すぎて、書き送ることが出來ないのです。三月の二十日にコロンボを出帆してからも、航海は以前の通りに穩やかでした。夜毎に北極星は低まつてゆき、日のたつに連れてます〳〵熱帶的な感じがします。大印度洋はアジアとアウストラリアの連島によつて狹められて今や海峽の狀を呈し、我々の船は水道の靜かな水を裂いて進んでゆきます。綠樹に蔽はれた一帶の陸、其處彼處には土人の小屋から立ち登るらしい輕やかな煙もちらほらと見えます。もう現在はあなたから遙かに遠ざかつて終つたのです。時空は力です。時にはそんなものは虛しい影にすぎないとして無視しようと努める。けれども今ははつきりとその大きな力を感じます。彼等、無慈悲な怪物はあなたを私から切り離したのです。

あなたは御機嫌如何。あなたは不思議な方ですね。日となく夜となくあなたが忘れられない程、私を捉へていらつしやる。今でも一週に三度づゝチユリヒにお出掛けですか。他にも音樂會がありますか。時折は湖の畔にもおいでですか。ウルリクさんの方々は御達者でせうか。あなたの音樂の御稽古は隨分進步したことゝ思ひます。何か御好きのいゝ音樂が見附かつたら寫して送つて下さい。誰かに彈いて貰ひませう。さうすれば一番あなたの身近に居るやうな氣もするでせう。

K君はどうです。私の心から御願することは、K君がいつも達者で、又いつもあなたの歡びと幸福との源泉であることです。お母上と弟さんは如何ですか。あなたのロルフも丈夫ですか。あの人は未だ不相變お說教をやつてゐますか。あなたのジエラニヤムの鉢や、他の花はどうなりました。本は、ピアノは。それからあなたのものすべては？　私はあなたに關した事は何でも知りたいのです。ほんの些事でも私に書き送つて下さい。否、私の願は度を超えてゐます。然しもしお暇がおありでしたら、何卒何かあなたの樣子を報せて下さい。家鄕に近づくに從つて肩に重荷のかゝるのを感じます。家に歸つてから何をするか、漸々に御聞きに達するでせう。――苛々しますから止めにしませう。御身體を御大切に、御母上と弟さんによろしく。

音樂、やさしい聲の絕えた時、
憶ひ出のなかに鳴りさめく――
香り、匂ひすみれが萎むとき、
よびおこされた感覺の中に巢ごもる（シエレー）

## 東京より――同年五月二十五日（書簡）

四月七日附の御手紙を數日前に嬉しく拜見致しました。手紙をお書きになる積りだといふ御端書を受取つてから、私は每日あなたからの委細の御便りを待ち設けてゐたので、今度のねんごろな御手紙を頂いて大變に喜びました。先づ第一に、御近親の方々にそんなに澤山の病人がおありだつたといふ事は心から御氣の毒に存じました。御母上や義理の御兄上や、御姉上の二人の御子さんは其後如何ですか。漸々お宜しい方でせうか。伺上げます。斯樣にいろいろな災難が續いて身邊に御起りでは、隨分御心配だつたことゝ思ひます。云ふ迄もなく人の世は明日を定めず、誰が何時死の道程を辿つてゆくかといふ事も測り難い事です。私の方でも、一人の婦人が思ひがけなく歿くなりました。その人はまだ年も若く見込も有り、

輝かしい將來が待つてゐたのです。そして又私とは幼年の頃から極く親しくしてゐた人でした。その人の葬式は昨日執行はれて、その二人の幼兒は永久に片親のない子になつて終つたのです。この出來事は私の心を酷く落膽させ、ふさぎ込ませ、人生に對して極めて陰鬱な思想を何うしても抱かざるを得ない有樣でした。然しこれも結局死す可きもの――人間の避け難い運命です。唯々信實な愛情と心からなる同情のみがこれに打ち勝つ許りです。この手紙が其方へ着く頃には其方の御病人達が、すつかり御快癒になる事を心から祈りながらも、もし不慮の事があつたにせよ、私にはあなたに同情し、あなたを慰める理由が十分にあります。萬望確かりとあなたの信念の上に立つて人生の有爲轉變を怯めず臆せず、御迎へになる事を切望します。又、少くとも、此の世には、常にあなたの幸を欣び、あなたの不幸を悲しまうとしてゐる者が一人は居ることを記憶して下さい。

若しあなたの心にさへかなふならば、あなたの悲しみを共に頒つのを許して下さい。あなたの生活はすべて私の關心とする所です。萬望それを忘れないで下さい。

あなたが實際に日本の土地を踏む前に、もうずつと私と一緒に來たとお言ひですが、私があなたの極く身近に居る樣な氣がする所より見れば、成程それも本當に違ひありません。折にふれて心に浮ぶあなたの憶ひ出は驚く程生々しいものです。あなたとお訣れしてからの種々樣々なことを御話したいと思ふ、併しさう爲ようとすると、情なくもあなたの姿は見えず、海を隔てて遠い遠い處においでなのです。でも何くれとなく申上げませう。私の兩親は私の歸國を大變に喜んでくれました。二人とも大分年をとつて、私が國を發つてから後、胡麻鹽の髮は白髮に變り、皺の數にも年月の辛勞の跡が讀まれます。兄弟たちも非常に大きくなりました。そして大した期待を以て私を迎へてくれました。斯くして私も今や祖國に住む事となつたのです。自分の一生の事業にも取り掛らねばなりません。若し自分に最も應はしい仕事を摑むことさへ出來たら！自分の爪先から血が迸るまで働きませう。私はつまり何か仕事が爲たい許りにぢつとしてゐられないのです。仕事だ、仕事だ！　三十歲の若者にとつては如何に誘惑的な言葉でせう。然し自分に最も相應した仕事を見附けるには、十分な用心と

辛抱が要るといふ事を私は知つてゐます。それ故私は温順しく、靜かに始まるのを待ってゐます。今の處、いくらか暇があるので、イブセンの散文劇「ロスメルスホルム」の飜譯をやつてゐます。あの劇を如何お思ひですか。私の印象では、あれは決してイブセンの最も深刻な劇の一つではありませんが、その内には現代に於いて取り分け重大な問題を分明に取扱つてゐる點が澤山にあつて、それが非常に私の注目を惹いたのです。その劇の一行ごとに何か私には意味が籠つてゐる樣に見えます。世間では高遠な理想と呼ぶところの者を高く掲げ乍ら、實際は矛盾した偏見だの、死んだ傳統などに縋りついてゐるよりも、人類の最も手痛い缺陷を指摘し、それを改造にまで、心ある人の考察に供へようとする者となるのは、如何に貴く、また美しい事でせうか。私は、イブセンについてのあなたの遠慮のない批判を伺ひ度いと思ひます。あなたのイプセンに就いての御考へを殘らず仰つて下さい。序ながら大變に面白いと思つた本を一つ御薦めしませう。それはミス・フランシス・スウキニイ著の「婦人の覺醒」（ロンドン、リーヴス社發行、紙綴正價一志）です。

まだ御讀みでなかつたならば、まあ一册お購めになつて讀んでごらんなさい。私には一つの啓示でした。そして眞面目な興味を以て通讀しました。吾々は皆穩やかな革命のさなかに生活してゐます。――一般社會の叡智に於ける革命の。吾吾は仕合せではないでせうか。萬望吾々も、各自の天賦に從つて何かを其の道程に寄與したいものです。此の思想に熱情を煽られて、私は希望と期待とで一杯になります。扨、煽動的な話はこれで打切りとしませう。

前便で私の素人寫眞を數葉御送り致しました。アメリカに居る時寫したものです。萬望御受取りになつて御一覽下さい。口髭を生やしてゐる私の寫眞も澤山ありませう。笑つてはいけません。生きた人間なので、これでも「立派」に見えたいといふ虚榮心があります。それから、私の同窓である岩波氏の御厚意によつてあなたに日本の「きもの」を御託けしました。岩波さんは日本政府の委員として歐洲に行かれるので、その途中チュリヒに立寄つてその「きもの」をウルリク孃の許へ留いてゆかれる筈ですから、序の折にお訪ねになつて私のさゝやかな、然し心からの記念を受納して頂ければ結構です。そ

して其れを御覽になるにつけて、又あなたを絶えず忘れずにゐる私を思ひ起して下さい。「富士山倶樂部」の方々やシヤフハッゼンの女の友人達にも何かの土產を私より岩波君にお託けしました。萬望宜しい樣に御計ひ下さい。豫めその御禮を申上げておきます。

シュミット樣から伯林よりの葉書を頂きました。あの方は今度は長らくあちらへ御逗留のつもりでせうか。孰れにせよ、あなたが當然と御考へになる人々にみなよろしく御傳言下さい。

もう隨分長い手紙になりました。これ以上の手數をおかけしては濟みません。ではお寢みなさい。時折私に御便りを下さるのを忘れてはいけません。あなたは私に缺くことの出來ない方です、あなたは私を慰め、宥め、激勵して下さるのです。御便りをあてもなく待たせない樣に御願します。この前の手紙に封じ込められて來た香菫！御手紙を披いたとき、云ひやうもない香りがまづ最初の挨拶をつたへてくれました――あなたの心情のやさしさが。御地では、この便りの屆く頃には、もう殆んど夏になりかゝつてゐる事と存じます。その頃にあなたの樂園はどんなに美事でせう。ベルリンのK君は如何ですか。あなたとK君がいつも御達者で、いよ〳〵御交情の濃かであらむことを心より祈つてゐます。

再伸、次便で日本の郵便切手を御送りしませう。

## 東京麴町より――同年七月十八日（書簡）

あなたの手紙と數通にも及ぶ御端書にも御返事を上げなかつたとは、隨分私も怠け者です。けれどもそれを、あなたの追憶が薄れてゆく爲だとお考へになつてはいけません。全くその反對です。あなたは前に「時間はその役目を果すだらう」と仰つた事があります。成程その通りです、がその意味はあなたの豫期なさつたのとは全然異つたものです。よく何彼につけて私は部屋の一隅にある文机に仕方なく對ふことがあります。その机上には歐洲旅行の記念のものが並べてある、それを暫くはぢつと眺めこんでゐると、その一つ〳〵が生き〳〵と思ひ出を喚び起して、胸打ちの昂まるのを覺え、時には

感動のあまり涙を誘はれる事さへもあります。私達の發つ前日にあなたが書いて下さつた晩餐のメニウさへも丁寧にとつてあります。御宅にやつと辿り着いたのは、寒々とした冬の日の夕方でしたね。あの階段を昇つてゆくとあなたが握手をして下さつた、その打ち解けた飾り氣のないあなたの樣子に、すぐとあなたは私にとつて親しみ深い方だと思ひました。それが始まりでした。それからといふものは私のあなたに對する敬愛といふものは些しも變りません。それを信じて下さい。

この前の御手紙は詩と牧歌であふれてゐましたね。一寸燕にでも化(な)つた印度洋を一飛びさへすればもう此處へ來られます。日本にも晩春から初夏の好い氣候の頃には燕が澤山居ます。菫靑(コバルト)の翼と赤味のさした頸筋をして、樂しさうな可愛い奴ですね。それからそちらの御病人達は一日々々と御恢復の由を伺つて本當に嬉しく思ひました。けれども其の爲に音樂の勉强を長らく廢めておいでだつたとは惜しい事でしたね。燕さんにも似合はないことではありませんか。

扨て此方の事ですが、何から始めたら良いでせうか。あなたは私の喜びも悲みも親しく頒けて下さると書いて下さいましたね、何うも有難う。今日本の國民は米國や朝鮮の人々と大騷ぎをやつてゐる樣です。或る人々は米國人の卑劣な野心を深く疑つて直ぐにも劍戟に見える事も辭せぬと云つてゐます。亞米利加人の中にも同樣な見解をもつてゐる人もある樣です。ティルディ樣、これがいつも國民同士が互に睨みあふ遣り方なのです。噂が噂を生む丈のことで、實際には何も兩國民間に重大な懸隔はないのです。それを惡い奴等が捏ち上げて「今にこれを見ろ」といふ。それから嘲笑、流血、死者、孤兒、寡婦、そんな事にはもう既に我々は飽きあきしました。私は心の底から其樣な政治家や愛國家を憎惡します。あなたの國は永い間平和でしたから、……るものゝ刑罰は如何に恐ろしいか御解りにならないでせう。吾々があのけちな愛國主義――それも實際は國民的偏見に過ぎないのですが――を破り去るまでは、世界同胞といふ事は決して望まれません。我國の朝鮮に對する關係に就ては其の詳細を申上げるのも恥かしく思ひます。日本は……けるといふ名目の下に、確固たる權力を掌握して、自分の內閣その者は人形同樣になつて終つたのです。勿論朝鮮にも非常に多くの科(とが)はあります。長い間その國民の統一を忘れ、國民としての品位を失つて、その現狀はさながら荒廢その者で、今となつては自ら救ふ術も見込もない

位です。誰か他からそれを助けなければならぬ事には議を挾む可くもありません。たゞその問題となるのは、如何にそれを救濟するかといふ事です。日本は朝鮮を助けようといふ、それは結構です。然も日本は實はこれを……すのです。その存亡は危急を告げてゐるのです。此の事實は汎く認められて居て、歐洲諸國の内には、疑惑の眼を睜つて日本の擧動を監視してゐる國も澤山あります。然も此等の國に日本を監督する權利がどうしてあるでせうか。西班牙が如何に太洋洲を遇したか、英國が印度をあしらつたか、又露西亞が波蘭を、佛國がマダガスカルを、獨逸がスダンを、又歐洲諸國が一樣に、あなたの御國を除く外は――ことに此の點で私はあなたの國が好きです――如何に目下の自分より卑しい者をあしらつたかを御覽なさい。彼等には日本に對つて石を投げる丈けの度胸があるでせうか。決してありません。如何に劣者を遇す可きかを敎へたのは先づ彼等なのです。若し私が、この侵略的な人達に、他國の獨立を侵すのは宜くないと訓へようとしても、得る答は、現代の第一等國民に皆さう遣るのだといふので、私は沈默を餘儀なくされて終ひます。何處に一體基督の敎を遵る國民が、何處に正義、寛大、同情、同胞としての感情があるでせう。

強い者、もつと切に云へば、野蠻なものが正しいとされる。力は正義だ、それ切りです。私は眼前に、人性の最も恐ろしい、悲劇的な有樣を見せつけられてゐます。人生の悲しむ可き皮肉！　吾々の内にある人間らしさをこえて動物性が164出るのを御覽なさい。

とんだ世迷言をお聞かせしましたね、然し人間のこの弱點を思ふと厭惡の情を抑へる事が出來ません。彼等は各自に假面を被つて、天使か極く優しい戀人でなければ言ひ得ない樣な神聖な美しい言葉を平然として口にしてゐるのです。ティルディ樣、少くも吾々だけはこんな卑む可き路を進まない樣に爲たいものです、そしてお互に信實な愛によつて結ばれませう。此の世界の虛僞に戰慄を感ずるにつけ一層私は信實のこもつた胸に愛着を感じます。それこそ私の全生命の隱れ家とも云ふ可きものです。何うか私を確かりと摑へてゐて下さい。

私はあなたに悲しい事を御打ち明けしませう。私が米國へ行く前の知己に一人の少女がありました。其の人は隨分氣の

毒な身分だつたので、私は心から同情を捧げてゐました。年も若く、また無邪氣な人でした。そして私も出來るだけの事はその少女とお母さんとの難儀を救ふために盡したのです。それから此の方、私はその少女を自分の愛する妹のやうに思つてゐたのでした。今度歸國して見るとその人はもう一人前の若い婦人となつて、人柄も確かりとし、文學の知識も相當に心得てゐました。方々から縁談の申込もあつたのですが、不思議な事には、もつと勉强したいといふ口實の下に、皆斷つて終ひました。

或日のこと、偶々私と二人で腹藏のない話の折柄、もしやと危んでゐたことながら、私にその意中を打ち明けてくれました。然し私はそれを斷つたのです。何うしてでせうか、それは此處で云ふ可き事ではありません。その人を拒絶した罪を負ふ丈けの力は私にもあると信じます。けれども許す可くはその人を憐れと思つてあげて下さい。それは誰彼といはず世間の人皆にある事でせうから。あなたにもお覺えがありませう、人の一生の中には、自分の上にある不思議な力を及ぼすやうな人に幾人か（私は、本當の浪漫主義者がよく云ふやうに特に一人とは云ひません）出遇ふことがあります。そしてその人々を忘れかねて、その思ひ出に胸を絞るやうな憧憬や、或は涙さへもきまつて誘はれる。確かに私にはさういふ人が何人かあります。私はこの憧憬の感をよく知つてゐます。それ故私は彼女を可哀さうに思ふのです。この人生は苦しいものです。何卒出來るなら彼女を憐んで下さい。

今度は嬉しい事を云ひませう。それは私の生れたのは無駄ではなかつたといふ事です。私は愚か者で力も弱く、得意とす可き何の取柄もありませんが、唯々有難い事には心（ハート）を持つてゐます。それを頼りにやつて行きませう。私は今男らしく一心に働いてゐます。同胞に何か少くとも寄與する處がなくてはなりません。この良心を以て、幸福を感じてゐます。この事を私と共に欣（よろこ）んで下さい。私には又總ての悲みを心の中におし隱して微笑み得る丈けの力があります。この事を私と共に欣んで下さい。前にも申上げたとほり、私は只今トゥルゲニエフの「父と子」を日本語に譯してゐます。御讀みになつた事がありますか。未だでしたらその爲に時間を御割きになるやうに御勸めします。私がそれを譯す理由は、多くの點に於て

それが日本の人々を訓へる處があるからです。もう隨分長い手紙になりました。いつもあなたに手紙を書くと長くなります。樂しい夢とよい日を祈りつゝ筆を擱きます。

追伸、私の笑つてゐる寫眞を送れといふお話でしたが、とてもとても！　カメラのレンズの前では笑ふことなんか出來ません。レンズは硝子で、しかも冷たいものですから。

K君がお達者でミュンヘンにおいでの由を伺つて嬉しく思ひます。あなたの一心を捧げてK君をよく優しく御愛しなさい。私はいつもK君の成功と幸福とを祈つて止みません。御宅の方々、「富士山倶樂部」の人々にもよろしく。

私の弟は御地を訪ねたかも知れません。行きませんでしたか。可哀想な人です。今は鬱いでゐるのでせう。弟が若いながらに愛情を捧げてゐた女の人が最近に歿くなつたのです。「あなたの歌はまだ着きませんが、豫め御志づくしに御禮を申上げておきます。「勿忘草」を有難う。あなたは馬鹿ですね、何うしてあなたが忘れられるでせうか！　私は寶石のやうにあなたからの御便りを受取つてゐます。私に手紙を書いて下さる時間は決して無駄にはならないといふ事を確りと申上げておきます。それ丈けの事はあるのです（もし洋鬼（ヤンキー）風の云ひ方を使ふのを許して下さるなら）だから、長い手紙を書いて下さい。「これが私達のなつかしい湖水ですか」と仰るのですね。さうです。取り分け私達に。さよなら。

日本の切手を送れといふ御話でしたが、もう暫く待つて下さい。きつと御送りします。

## 東京より――同年十二月三日　（書簡）

御手紙を心から嬉しく拜見しました。私の兵役服務もお終ひになつたのを共々喜んで下さい。今こそまた平和な自由な市民に歸れたのです。處でまづ御返事から始めませう。その「きもの」を御着になつて、若し長過ぎたら次にある繪のやうにたくし上げてごらんなさい。それから小帶を、あなたの丈にあふやうに結んで、その次の繪のやうに疊んで垂らすのです。今度はもう一つの幅廣の帶をとつて次圖の如くに上の方を（略々胸の高さに）お結へなさい。帶の大きさや色からい

ふと、實のところ日本の帶はあなたには似合はないかも知れません。御存知のやうに日本婦人は隨分幅の廣い固い帶を使ふので、女の人でさへも滾してゐるほどですから、その代りに何か柔い絹の帶でも御つかひになるといゝと思ひます。一體何んな色や模樣をお勸めしていゝでせうかね。これが一番むづかしい問題で、全くのところ何と御返事していゝか分りません。むしろあなたの好みに任せた方がいゝでせう。私の記憶が過つてゐなければ、あなたの御好きな色は薄靑色だつたと思ひます。もしさうとすれば其色は着物によく映るでせう。處で次のあなたの御務めはその「きもの」を着て寫眞を寫して送つて下さることです。本當にさうして下さるでせうね。全く私は、一年の中でも一番いゝ季候にあなたを取り卷く美しい土地を見ることの出來た弟を羨ましく思ひます。先日リリエ孃からの御便りでは秋の果物(葡萄やその他)は大變によく出來て今は圍爐裡の仕度をしてゐるといふお話でした。その短い文言があなたの町を取り卷く古風な林檎や葡萄園を思ひ出させました。赤い頰をした林檎や眼を輝かせてゐる葡萄に飾られた庭の美しい姿が心中を往來しました。收穫のたのしい歌や、田舍の人の高い歡呼、とり入れ時の物語．それも過ぎて、今は爐邊が戀しく友達のなつかしい頃でせう。降誕祭、雪、それに次いで慄へかじかむ時節が來る。同時に樂しい追憶や暖かい友情や將來への希望。私自身も同じ樣な立場にあります。けれども惜しいかな此處には友人もなく、雪も足りず、たゞ寒風が肌を裂くばかりです。

次にまづ吉報としてお報せ致したいのは、今度私が北海道(日本の北端の島)にある札幌農科大學(私の母校)の敎授に任命された事です。札幌は東京から凡そ三日の行程にあります。其處で如何なる成功を收め得るかは測り得ないにしても、兎も角自分の力にあるだけは働くことの出來る地位を獲ることが出來たといふ點に就いては欣びを感じます。東京を發つのは一月の上旬になりませう。併し御便りは以前の住所へ宛てゝ下さつて差支ありません。

ガンパー君やブフマン君が御宅との交際を避ける樣にしておいでだといふのは殘念なことです。勿論その理由は全然私の想像の及ぶところではありませんが、私としてはそれも一時の誤解で直きに復た御宅を氣持のいゝ御家として尊敬する樣になる事を祈つてゐます。

ティルダへ

あなたの寫眞はいつも机の上から私を見つめてゐます。私もあなたを。本當に私の思ひ出はいつもあなたに歸つてゆくのです。あなたの優しさはいつも私を惹きつけます。どうかいつ迄も御忘れなく、親切なあなたのつまらないがそれでも忠實な友人の一人として置いて下さい。K君は近頃如何ですか。私はあの方がいつも御達者であなたに優しくしてくれるのを祈つて止みません。

寫眞をもう數葉送れとお仰るのですが、殘念ながら歸國してからは一度も寫眞を撮つた事がないのでお送り致しかねます。けれども早晩何とか御言付を果すやうに致します。唯私の笑つてゐる處といふのは果してお送り出來るか危ぶみます。前に申上げた事のある可哀さうな娘といふのは、私の家の事情が彼女との結婚を許さないので、獨身でゐることに決めました。それでいまは笑ふのも私に取つては辛いことです。詰るところ吾々はみな運命の女神の憐れな子に過ぎません。

心からの訣れと、夜の挨拶とを御送りします。

札幌にて――一九〇八年二月十日（端書）

思ひ出がなほ消えやらずに殘つてゐるといふ事を知るのは本當に嬉しいことです。あなたの寫眞のついた御端書を頂いて、何よりもあなたが其れに大變よく寫つておいでなのを喜びました。けふも長い實のある手紙を差上げる積りでしたが、四五日のうちに讓りませう。そちらからも御願ひ致します。

再伸（私の近處の景色です）

植木鉢からの花を一つ差上げます。

札幌にて――同年二月二十六日（書簡）

時折頂いた數葉の御端書につづいて、今日は御宅のクリスマストリーの小枝を同封した御手紙を嬉しく拜見しました。

どんなにあなたが同情をもつて想像をなさつても、御便りを頂いて如何に私が喜びに溢れ、また甘い哀傷の心に襲はれるかといふ事は思ひ付きもなさらないでせう。これ迄随分と長く手紙を差上げなかつたといふのは全く間違つてゐました、殊にもこの三四ヶ月といふものは、御母上や弟さん妹さん方の御病氣で苦勞をしておいでしたのに。温い心を捧げてくれる私の姉妹のあなたに對して如何なに私は情のない振舞をかさねてゐたでせうか。今迄の打ち續いた不幸に如何なにあなたは苦勞なさつたでせう。併し神樣が全くあなたを御見捨てにならなかつた許りでなく、あなたの親しい方々を健康に歸すことによつてあなたを祝福して下さつたのを思ふと心から嬉しく感じます。

何故私が此樣に長く御手紙を上げなかつたか、それを聞きたいとお思ひですか、きつと其の馬鹿らしさに笑つてお終ひでせうけれど。全く自分としても、男らしく總ての幸不幸を平然と受けてゆくことが出來ないのを恥かしく思ひます、でも本當の事を申上げませう。前にお話したと思ひますが、私は自分の兩親に、今迄も私を随分親しく思つてゐたある少女と私との結婚を許してくれる樣に願つたのです。けれども兩親は、その少女の身分が此方ほど高くないからといふので私の乞を容れてくれませんでした。そして其の少女は、今迄一度も逢つた事もない男の人の許へ無理にも嫁がせられることになりました。宛で知らない人なのですから、その男を好きか嫌ひかさへも分つてゐないのです。併し私が兩親に婚約の許を求めたときには少しも其の事をその少女に知らせませんでした。それで私には尠しも自分をもらふ積りはないのだと考へて前に申上げた申込に應じたのです。私がその少女に自分の意向を知らせなかつたといふのは事實起つた通りの成行きにしかならないだらうと危んだからです。此處までは兎も角も無事だつたのです。私は決して、兩親に結婚の許を願つたといふ事をその少女に知らすまいと決心し、今後は親身の兄妹として事態に應じて蔭となり日向となつて庇つてゆかうといふ覺悟でした。所がその少女の方の話はその中に縺れて來ました。私の方の事情がその少女に聞えて終つたのです。その歎きに私の心苦しさ、この樣な事態となつては東京に留ることは最早や許されず、何處かへ逃れて唯一人で暮す外に途はありませんでした。其處へ此の大學へ勸めてはといふ話があつたので、即座に意を決して承諾しそれからずつと此處に一

人で、荒凉とした沙漠にすむ傷ついた獸のやうに日を送つてゐます。その人は私と兄妹のやうに音信を續けてくれと賴みましたが、その妻としての立場を考へて其を全く斷り、少女の母親を通して以外には何の便りも爲ない事に致しました。實をいふと、必ずしも是が非でもといふほど、それの少女を思つてゐたといふのではありません。まるで、話は異ふのです。唯この樣な思ひも懸けぬ事がその身の上に起つてからといふもの、私のその少女に同情する心は昂じて、遂には暗い沈んだ氣持になつて終ひました。この間といふものは殆んど誰にも便りをせず、巴里に居た弟にさへも無音に過しました、これが卽ち此樣に長く御便りをしなかつた譯なのです。だが早まつてはいけません、「長い間御便りをあげなかつた」といふのは必ずしも斯樣に暗い境遇にあつてあなたを必要としなかつたといふのではありません。全然正反對です。悲しみと孤獨に送つたそれらの月日の間幾度かあなたが此處においでだつたらと心から思つたことでせうか、全く言葉にも現はせない位あなたを必要として居たのです。これが何故こんなに御便りしなかつたといふ本當の理由です。それが解つて頂けるでせうか。それなら萬望私の怠慢を咎めないでむしろ私を憐れとして下さい。

斯くして、遂に私は日本の北隅に住む事になつたのです。此處では雪が四尺ほども積り、寒暖計は華氏で零下三十度にも降ります。吾々の大學と道廳の建物がまあ目星しい物といつた位の、この古い變つた町の孤客としてこゝに日を送る身の、幸にも丁度非常に親しくしてゐた友人が居て、妻君共々一部屋を空けてくれたので、まづ落着いて心地よく慰めの中に住ふことも出來るやうになりました。それで部屋をいくらか小ざつぱりと改め、ガムバー君や（といへば妹さんが歿くなられた樣ですね、本當にお悼みの申上げやうもありません）シュミット君や弟の繪を壁間に揭げ、ゲーテとあなたと壬生馬とファニー（米國で知合ひになつた少女で私の大變好きな人）と一友人との寫眞を、エンマフォルスターさんに貰つたアルプスの高山植物の枯れた花鉢と一緒に机上に飾りつけました。この小室にこもつて、何彼につけて机に腰をかけてはよくあなたの寫眞をあちらこちらに置きかへて、あなたの思ひ出や此の頃はどうしておいでかなどと思ひに耽ることがあります。

前に送る御約束をしながらまだ果さない日本の切手のことは全く私の不注意を御詫びしなければなりません。然し近い内には何とかして屹度御送りしませう。それから何でも私の欲しい物を贈つて下さると仰るのでしたらば、あなたが自分でお作りになつた物か、大切にしてゐらした物で、日用の身に附けて持ち運びの出來る樣な物を頂き度いと思ひます。隨分我儘な勝手な願ながら御聞屆けが願へるでせうか。

私のトウルゲニエフの飜譯も可成長く抛つて置きましたが、遠からず又遣つて見ようと思つてゐます。あなたも私も隨分忙しいではありませんか。仕事が山のやうにあるのですからね、だから若い人達に追越されない樣にせかせかやらなければなりません。

この手紙がそちらへ着くのは櫻の花が咲き始める頃だらうと思ひます。心からあなた共々今年は昨年よりもずつと御都合がよく運んで喜びと生命に溢れた心で春を御迎へになるのを祈つて止みません。伯林のK君は如何ですか。いつも御達者であなたに優しくして下さるやうに祈つて居ます。御母上や弟さんによろしく、時々は思ひ出して御樣子を知らせて下さるやうに御願ひ致します。

## 東北帝國大學にて――同年四月十六日（書簡）

あなたからの御便りを頂いたと同時に先日申上げた少女の結婚の通知狀を受取りました。例へ私に對してその少女が如何に眞情を捧げてゐてくれたにしても遂に一面識もない人に嫁ぐ外には仕樣もなかつたのです。いふ迄もなく此事は私にとつての大打擊でした。その間にあつてあなたの溫い同情と御心付けとが私にとつてどんなに大切なものであつたでせう。「大風にあつて强木を知る」といふ日本の諺にある通り、悲みや不幸にあつて始めて友情の尊さといふものが解ります。ティルディさん、あなたと私とは人種も異り距離や時間その他すべての物が間を隔てゝゐるにも拘らず、あなたに斯く迄の愛着を覺えるといふのはいかにも不思議な、時には全く會得のゆかないことゝ思はれます。私はことに女の人に對しては內

氣なのですが、あなたにはすつかり打ち解けた感じがもてゝ、私の長所も短所も知りつくしてゐながら、なほ私を蔑まない許りでなく、私の短所といふものの爲にいよいよ優しく愛を注いでくれる人の前にゐるやうな氣がします。私には本當に尊い大切な方です。日本の銀貨をおなくしださうですが、ちつとも構ひません。それをなくしたといふお知らせで私のあなたを思ふ心が改めて深められる位のものです。いま目のあたり御眼にかゝつて御宅の階段の降り口で御會ひした時のやうにしつかりと溫い握手をすることが出來たら如何に嬉しいでせう。でもそんな空想は果しがないから止めにしませう。結局今度の私の職業も決して惡いことはありません。教室の授業も漸々面白くなつて行き、學生の方でも亦私に興味をもつてゐるやうです。私の氣分には何か若々しいものがあつて靑年の心に訴へ、すらすらと働きかけてゆくところがあると見えます。今住つてゐるのは寄宿舍の一室で、子供のやうに無邪氣で、ジプシーの樣に慣習を無視した元氣な靑年の間に混つてゐます。今はまだはつかな春の初まりの美しさに、空は藍をためきつてゐます。揚げ雲雀の歌も聞え始め、燕もそろそろ來出しました。蕾も芽も日にふくよかに、樹々が大地の胸から乳を吸ふもの音も聞えない許り、櫻の花の開いたといふ報せを迎へるのも遠くはないでせう。昨夜は滿月でした。寒からず暑からず和やかな空氣は如何なる胸の深傷も癒し得ようかと思はれるほどに、暫らくは獨り戶外に佇んで、彼の薄倖な少女を嘆き、また私を思つてゐてくれるといふ、瑞西の少女を思ひ出して、夜の更けるまで眠られませんでした。

ゲーテの「ゲッツ」を夏に上演なさらうといふ御企ては嬉しいことです。私もその劇は前に米國にゐた時によんだので、あなたとK君との演技がどんなによく調和するだらうかなどゝ想つてゐます。唯それを眼のあたり觀て樂むことの出來ないのは殘念です。でも萬望その寫眞でも御送り下さるやゝ是非御願ひして置きます。いま手許にある繪葉書に、あなたの、又私の古雅なシャフハゥゼンの町の道端にある林檎の花が滿開に寫つてゐるのがあります。此の手紙が御手許に屆く頃にはそちらは花の芳香でむせ返る許りだらうと思ひます。この一年中でも一番樂しい季節に、樂しいづくめのあなたをこの手紙が見つけるやうに。

弟の壬生馬は相變らず巴里に居て可成よく便りをくれます、健康も大變恢復していよいよ仕事に出精してゐるさうです。御蔭で兩親も達者です。御母上や、K君や外の御近付を願つた方々によろしく御傳へ下さい。

又御便り願上げます。

## 札幌にて――同年五月八日 （書簡）

今夜もまたこの前の御手紙を繰返し讀んで、御會ひしたい、あなたの眼をみつめて湖の邊でのやうにかたい握手を交したいといふふかい憧憬に襲はれました。いま一體何をして何を考へておいでゞせうか。いまどんな幻が御心に浮んでゐるでせうか。ティルディさん、白狀すればあなたを友達だとか親友だとか親身の妹だとか申上げてゐたのは、長い間あなたをも私自らをも詐してゐたのです。知らず知らずに僞を言つてゐたのでした。私はあなたが好きなのでも、いゝ方だとも思つてゐたのではないのです。あなたを愛してゐたのだし、今もあなたを愛してるのです。此樣な事をいふ私を笑つて、御憤りにさへなるかも知れません。ほんの數日しか御近付になつたことのない詰らない、よくも知らない者が愛するといふのですから馬鹿げた事です。それは何とでも御考へに任せる許りです。唯申上げないではすみません。あなたはもう私の命から分ち得ないものとして、氣が鬱いだり、淋しいと思ふ時にはいつも幻に現れて、母親が胸に嬰兒を抱き慰めるやうに私を慰めて下さるのです。たつた一度でもあなたの胸にとり縋つて思ひの丈を泣き盡すことが出來たら！　シヤフハゥゼンを去る汽車の中でひどく泣いたといふ事を知つておいでですか。ガンパー君がブフマン君に訊いてごらんなさい。又チユリヒでお訣れした晩一睡も出來なかつたのは御存知ですか。その時は親切な友だちに訣れるのが惜しいからだと思つてゐました。でも今こそその間違ひが解ります。その時もあなたを愛して（知らず知らずにも）ゐたからこそ、云ひやうのない悲みをしたのです、私を蔑むとも憫むとも御心のまゝに任せます。

勿論あなたにはもう御婚約があり、夢にも私の愛に報いて下さらう等と考へた事はありません。斯う申上げるのは、あ

なたに萬事をあからさまに申上げなければならぬといふ神聖な義務を感ずるからです。私の心底をすつかり申上げたからには、あなたとの音信を斷つのが道と思はれます。もしあなたも、さう御考へになるならほんの一言もう手紙を寄越すなと仰つて下さい。この瞬間から私達の關係は變つて終つたのであなたには自身を私から護るといふ務があります。自分の感情を抑へられない私は罪深い者です。それにしても運命は殘酷です。私達は違つた人種、國民に生れついたのです。お互に知りあふといふ機も果敢ないものでした、あなたには御自分の愛情の神聖な宮があります。それでも私には何うしてもこの感情を抑へきれないのです。いつ迄も御達者に、御幸せを祈ります。

## 札幌にて――同年十一月十五日（書簡）

手紙を差上げるのを控へてからもう長い、長いことになります。此頃は私のことを憤つておいでせうか。それも尤もな事です。この前の御手紙は深い悲みと感謝の念を以て拜見しました。私の向う見ずな狂氣じみた宣言に對して優しい御心遣の見える御返事の一言一言に私の胸は鋭い刃物でつかれるやうに覺えました。そして深い感動に打たれ乍らも、そんな告白をしても何にもならないといふ事を十分に識り別け乍らあんな無茶な事を申上げた自分の淺はかさを恥ぢ入りました。仰ることは瞭きりと解りました。又私の無躾な言葉をゆるして下さつた許りでなくこれからも交誼を許して下さつてこの一時の中絶の後で一層親しさをますだらうと言つて下さる御親切を心から有難く存じます。本當に御禮を言ひます。御心はよく分りました。あなたの親切に甘えて復た友達の中で一番好きな人と思つてゐませう。萬望あまり御憤りになることなく氣の向いた時折に御便りを下さい。これ迄のやうな感情をもうあなたに對して抱いてゐないといふのを御見せするよすがとして、此の夏に私もある令孃と婚約を取り結んだといふ事を御報せ申上げます。式は大體次の五月に擧げることになつてゐます。その人に就いてもつと委細を申上るのも或は一興でせうか。年は二十一で安子といふ名です。年のわりには子供つぽいのですが優しい人なつこい純潔な人です。その上に私を大變に思つてゐてくれるのです。今は兩親と東京に住

んでゐるので昨年の夏私が東京へ戻つた時に會つたのですが、何日か往來をしてゐるうちに二人の間には深い緣が結ぼれて終つたのです。その人の優しい心遣ひに命の限りは誓ひを變へまいと堅く決心しました。何卒この事を慶んで下さい。此の前に申上げた可哀さうな少女は、結婚後體をすつかり痛めて今は海岸に病氣の母親と一緒に暮してゐます。その人の事を考へるといつも胸も裂ける樣な氣がします。

でも下らない事です。運命が確りと私達を摑んで身動きもさせないのに、もがいたとて何の役に立つでせうか。從ふ外ないのでせう。此の夏に演出された「ゲッツ」の繪葉書や寫眞は間違ひなく手許に屆きました。厚く御禮申上げます。本當にそれを見られなかつたのは殘念でした。地上で此上なく愛しておいでの人の傍で、ゲーテのあの傑作を上演したその時のあなたの樂しさは如何でしたでせう。その折の衣裳を着けた一人の御寫眞はお持ちにならないでせうか。若しあつたら一葉萬望送つて下さい。

私の寫眞を御送りする約束をしてから隨分になりますから御叱りを受けるのは當然ながら、何卒惡くおとりにならない樣にお願ひ致します。御申付を忘れたのでは決してないのです。但私は非常に不精なのです。その外にはないのです。然し早晩いくつか纏めて御約束を果しませう。

札幌は今冬です。いづこも雪に被はれて、此の手紙も雪を戴せた屋根の下で書いてゐるのです。外は酷い寒さでも、私の心は暖かです。今頃あなたは一體何を思ひ、何をしておいでせう。日記をつけておいでだつたら頁を返して十一月十五日のところを開いて御覽なさい。今は十時です。私の想像では今し方あなたは煖爐の傍に坐つて家の方やお友達と話に油がのつてゐらつしやる頃でせう。でも何となない寂しさが時折心に忍び入つて來るのでせう。これが今のあなたの御樣子と思ふのですが違つたでせうか。

こちらはいつも丈夫で元氣よく始終仕事を樂んでゐます。今年は此の大學に瑞西の方が獨逸語の先生に見えました。チユリヒ――あのチユリヒ――の方なのです。瑞西のもの、瑞西の人は全く私の心を奪ひます。その方の名はハンス・コレ

ルといふので、二十九になる快活な素朴な人です。若しや御存知かとも思ひますが。

いくら書いても限がありませんから、𡢳におなりの前に早く止めませう。さよなら。御達者で仕合せに御暮し下さい。幸福の頂上においでの時も御忘れなく、時々思ひ出して下さい。いつもあなたの健康と幸福な生涯を祈つてゐる憐れな者がゐるのを。

御母上や弟さんやあなたの愛するK君によろしく。

## 札幌にて——一九一〇年十二月二十五日（書簡）

あなたはまだ私の事を忘れずにゐて下さいました。二通の端書、それに添へて私にも覺えのある懷かしいあなたのお部屋の繪、あなたのあんな親切なお言葉、私は心から感謝します。私の筆不精の爲めに手紙を書かなくなつてから本當に久しい事です。けれどもそれは筆不精の罪で、あなたを忘れた爲めではないと信じて下さい。いいえ、忘れる所ではありません。あなたの想ひ出は千一夜の物語のやうに樣々の形をとつて私の心に蘇生つて來ます。或時はあなたの家に於けるあなたであり、又或時はデイーセンホーフエンからの汽車の中の姿であり、さうして最も繁く描かれるものは、チユーリッヒ湖畔を一緒に散歩したあなたの姿です。併し私達の幸福な時は遠く過ぎ去つてしまひました。しかも尙かく新しい生々した想ひ出！

あなたは別れて以來の私の境涯に興味を持つて下さるかと思ひ、先づ第一にそれを申上げませう——何と云ふ自惚れかと微笑されるかも知れませんが——私は引きつゞき舊の學校で英文學の講義をしてゐます。妻はいつも渝らず忠實にその仕事を立派にやつてゐます。而して來年は赤坊が生れる筈です。私が父になると云ふ事を考へる。それは不可能の事のやうに見えますが、事實です。私はあなたが他の人々のやうにそれを皮肉だとは思はず、私の爲めに、喜んで下さる（私に同情を持つて下さると言ひ度い）と思ふから、こんな事を申上げるのです。

學校での授業の外に、私は壬生馬や他の友人達と「白樺」と云ふ月刊文學雜誌を去る四月から創めてゐます。それは、一般から比較的好評を受けてゐます。十一月にはロダン誕生七十年の祝賀に特別號を發行しました。貧弱ながらも西洋文化の眞髓を日本に紹介する道をかうして開かうと試みつゝあります。その特別號が世界から壓倒的の賞讃を以て迎へられたと云ふことを西洋文明の爲めに、又日本人の同化力の爲めにこゝにお傳へすることを喜びます。

私はツルゲーネフの「父と子」の飜譯に就いて私の誤算を説明しておかねばなりません。それは既に私の仕事が完成する以前、或作家によつて飜譯されてゐました。私は私の妻と協力して他の作家の作で、もつと小さいものを飜譯し、親しい人達の間に頒布して熟讀してもらふと云ふことを計畫してゐます。もしさういふものが出來たなら、あなたが日本語をお讀みにならなくとも必ず一部お送り致しませう。

今や年の暮が迫つて一年の出來事を省みる人々の凡ては或寂しい思ひ出を抱いてゐるでせう。私達の住む小さな町は全く雪で鎖され私達は寒氣と戰つてゐます。而も冬はその魅力を持つてゐます。私は毎日氷滑に出掛け、運動で身體を暖めます。さう云ふ時に冬と雪とに關聯して瑞西の想ひ出が私の心に蘇生つて來ます。あなたの事が強く私の心を捉へ私は傍にあなたがゐられるやうにさへ感じます。ティルダー、この名はどんなに親しいなつかしいものでせう。あなたは今何をしてゐるの？　と私は囁きます。時として涙が頰を傳はることさへあります。時は過去つて取り返すべくもない。過去は過去です。私達が再び逢へるかどうかは分りません。併し現在あなたに逢へようと云ふ望はありません。さうして私を嘗つて逢つた人、なつかしい友と思つた人が、永久に離れて行くと云ふ考は心を怪しくも顫はせます。

扨お端書によれば來春はイタリー旅行の御計畫とか。素敵ですね。あなたが宛も隣家のにでも行かれる樣にドイツとか、イタリーとかに行かれるのを聞く度、地球上の遠い端に住む吾々に比べると、極めて僅かな努力であらゆる文明の諸相を完全に知り得る特權を持つヨーロッパ人を羨まずにゐられません。イタリーは何處へ行かれるでせう。もしローマへ行かれるか、ヴエネチアへ行かれるか、又はミラノか、ナポリか、アッシジか、何れへ行かれても、私や弟が嘗てその地に行

つたと云ふこと、而して嘗て私達が熱狂的な讃美の心でそれ等を眺めたのだと云ふことを忘れずにいらして下さい。どうか旅行中度々お便り下さい。私達の思ひ出もそこに逍遙つてゐるのですから。

それから又（こんなことを露骨にお尋ねしてよいかどうか。けれどもあなたの友情を信じて許して下さい）あなたの身の振方、結婚の事ですがそれはどうなつたのですか。私は屢〻あまりにも屢〻祈つてゐます。あなたの彼に對する深い愛と獻身とがあなたの他の自己と一緒になることによつて、正當の酬いを見出されんことを。その日が私にどんなにか喜ばしい日でせう。もし來るならばその日の早く來ることを。

それからガムパー君が來年日本へ來ると云ふことはどうなりましたか。あなたはその計畫に加はらないのですか。もしその計畫に加はつてゐないのなら、あなた自身で計畫なさる事を望みます。而して再びあなたの手を取る日を私に與へて下さい。私の胸には常に一つの野心が燃えてゐます。それは今一度ヨーロッパに渡つて二三年の滯在によつて知識と見聞とを擴めたいと云ふことです。もしこの夢が實現されたなら、その時こそ私は目前にあなたを見ることが出來ます。

語りつゞければ際限はありません。次の便りに讓つてこれで止めませう。あなたの母君や御兄弟はいかゞですか。どうぞよろしくお傳へ下さい。あなたの御手をしつかりと握りしめて樂しいクリスマス、又イタリーの御旅行の愉快ならんことを祈ります。

## 鎌倉にて――一九一五年五月七日（書簡）

隨分長い間お便りを怠りました。併しあなたを想ふ毎に、胸の中で心臟は丁度彈んだ鞠のやうに高鳴るのです。私達を距てる絶望的な時空のうちにあなたを徒らに求めて。あなたの溫かい、同情の溢れた友情を今も尙私は心の中に愛撫しつつ、時と共にそれが益々強く私の肉に喰ひ入り骨に染み込むのを感じてゐます。いつも御機嫌は如何です、御丈夫ですか。さうして幸福にお暮しですか。そんなに數多い試練と惱みとを持たれたあなたは普通人以上の大きな幸福によつて酬いら

れなければなりません。

御結婚はまだ？　いゝや、さうだとは思ひません。少くとも既にあなたがこの世で最も幸福な主婦である事を望ませて下さい。それが幸福であるやうに、もし又（不幸にして）悲みであるならば、あなたと同じ心を私にも感じさせて下さい。

常に微笑む夏があなたの國を訪れ、隣國の血腥い戰亂の唯中にもあなたの國は微風に心和ぎ青葉に心樂しまれる事を想像します。一體人類は何んと云ふ恐ろしい殘虐を行ふのでせう。最も進歩した文明の冠を頂くと思はれてゐる人々の手によつて、私の生涯中にこんな恐ろしい事實が實現されようとは夢にも想像しませんでした。この罪業が一刻も早く過ぎ去つて、數十萬の無辜の民が流した血によつて、凡ての怒、全能の神の裁が與へた、この怒を拭ひ去られることを願つてゐます。凡ての生きとし生けるものは悲哀から逃れる事は出來ません。私自身もこの試練を避け得ませんでした。去九月末に妻が突然病氣にかゝりました。一月程札幌の病院に入つてゐましたが、北國の嚴しい冬を送る事が出來ないので、十一月に彼女を東京に移し保養地平塚の病院に入れる事に決めました。それ以來全く床に就いた切りで、肺結核と診斷を下されました。三人の兒達、五歳と四歳と三歳になりますが、三人とも私の許に居ります。何と云ふ淋しい空漠な生活でせう。私は凡ての仕事を棄てゝ、子供達の養育に從つてゐます。これは可成の痛手だと云ふ事を御分り下さるでせう。併し有りがたい事に、私はそれに直面する事の出來る强さを持つてゐます。私の獻身と友人達の親切とが彼女の病氣を癒し、遂には前にも增して丈夫な彼女となす事が出來ると云ふ確信を持つてゐます。又この不幸によつて何處かに病弱な點のある人類と云ふものに對して、よりやさしい同情と愛とを感じ得る樣になつた事を私は神に感謝してゐます。快樂のみが唯一の幸福でないと云ふ事、又、幸福とは人々が漠然と想像する樣なものでは無いと云ふ事を知りました。あゝ最愛なティルダよ。愛は隱れた小徑に橫はり、同情は隅つこに蔽はれて隱れてゐます。深い心と純眞な心とを持つ人のみが、それを發見する事が出來ます。今私は前にも增してあなたに對する友情と愛とを感じ、あなたと同じやうな地上に立つてゐる事を感じます。あなたを私の側近く私はあなたの使ふ香水の香をかぎあなたの深碧の眼を見るやうに感じます。

御機嫌ようティルダ。決して私達はそんなに遠く離れてはゐないのです。あなたが私の事を思ふ限り、さうして私があなたの事を想ふ限り、少くともそこにこの世の凡ての僞と僞善とを打ち破るに足る、神聖な友情が存在してゐます。

二伸　もし御返事を下さるなら東京麹町に宛てゝ下さい。

## 東京より――同年十一月十七日（書簡）

九月八日附の御手紙はどんなに私を驚かせたでせう。さうして人間の運命を悲しく感じます。あれ程希望に充ちたあなたの婚約がどうして突然破約されるやうになつたのです。勿論私は今度の悲劇が如何して起つたなどと云ふ事をあなたにお尋ねしてあなたの心の中の傷に血をぬる樣な事は致しません。併し一人の友として、特に關係の深い一人の友として、あなたの惱みの全てを知り度い。さうして出來るならばあなたの苦みを如何にもしてお慰めしたいと願ふのです。併し心を安めて下さい。私は心からなる同情をこの手紙と共にあなたの許に送ります。あなたの爲めに、あなたと共に、あなたの心の中に私は泣きます。全能の神があなたの思ひ遣り深いやさしい美しい心を支持し、人類の正しさと貴さと、信ずる力とを與へ、遙か離れたこの世の一隅に常に愛と同情とを持つ一つの魂の存在を信じて下さい。あなたが野戰病院に赴き、人類の敵なる野蠻性の爲めに傷き苦む哀れな人々に慰安を與へられようとするのは、あなたにも大きな慰めでありませう。苦しめるものゝ爲めにあなたの全力をお盡しなさい。與へるものは與へらるゝものより幸福です。而してあなたの悲みは一つの泉となり、假令憂鬱で暗くとも、そこから湧き出る清淨な水は、あなたの隣人が最も求めてゐる同情と尊敬となつて灑がれるでせう。

あなたの二葉のお寫眞は私を喜ばせました。私は一見あなたを見分けました。三人の中の眞中に坐つて居られるのがあなたですね。而してあなたの微笑み、それは私があなたと共にある時にあなたが私に微笑みかけられたその微笑みです。

別の包で幾つかの小さな人形をお送りします。それは豆の樣に小さいので豆人形と呼ばれてゐます。その一つ〳〵があ

なたへ私の友情を齎して具れるように。これで筆を擱きます。あなたの御元氣で苦しい試練から雄々しく立ち直られん事を祈りつゝ。

二伸　先日シャツフハゥゼン宛に人形のお禮のお手紙を書きました。お受取り下さいましたか。若しまだなら該地の郵便局にてお問合せ下さい。（註。當時ティルダは墺國野戰病院に働いてゐた。）

妻は幾分良好に向ひ、滿足に思つて居ります。我國は目下御大典で大變な賑はひです。氣の毒な〳〵ティルダよ、私はあなたを胸に抱く。

## 東京より——一九一八年六月二十九日（書簡）

あなたの事をなつかしみながら、こんなに長く手紙を書かなかつたのは私の誤りです。何年も前にお別れした切りで、しかも尙かく強い愛着を覺えるとは唯々不思議です。貴女は私の最も愛する最も價値ある友の一人として、常に私の心の中に生きてゐる事を信じて下さい。長い間の御無沙汰で書き度い事は山程あります。この前のお手紙で貴女がK氏との婚約を破棄された事を知りました。その報知はどんなにか私の心を顚倒させましたらう。許婚者に對して、あれ程誠實で愛情深くあつた貴女は、この世でたつた一人を愛すべきでした。併し過ぎ去つた悲みをこゝに繰返しますまい。現世はあまりにも苦惱に滿ちてゐます。過去の不幸を繰返して、現在の悲みを更に增すやうな事は致しますまい。併し純潔な堪忍を以て悲みを忍ばねばならぬ者はあなた一人でないと云ふ事を告白させて下さい。私自身癒しがたい不幸に遭遇しました。即ち一昨年妻は肺の病から世を去りました。前にも書きました通り、妻は一九一三年の秋以來肺結核を患ひ、遂に一九一五年の八月二日、私を始め彼女の兩親等の悲みを後に、三人の遺兒を悲嘆と寂しい父の手もとに殘して永遠に逝つたのです。あなたから贈られた人形は死の床に間に合ひました。彼女は死ぬ前にその人形を愛撫し、あなたの御厚意を心から謝してゐました。私の生涯はこの世の樂園を輝かしい火の下から悲哀の奈落に落ちてしまひました。しかし私は人生は結局

情あるものだと云ふ確信を以てこの不幸を切り拔けて行きませう。鬪ひ躓き戰つて遂に私は勝利を得ました。私は教職を退き、一圖の決心と苦い經驗とを以て、文筆の境涯に飛び込みました。私の仕事は文壇に認められて來ました。私は知識階級の生活の進歩と善の爲めに良き努力を盡す事が出來るでせう。三人の子供も立派に育つて來ました。私は確實な歩を續け、全精力を傾けて、人類生活の成長進歩の爲めに盡しませう。

あゝ、私はあまりにも思ひ上つてゐます。恕して下さい。私はあなたの前にそんなにまで高振る必要はありません。貴女は私を愛して下さる。私は貴女を愛する。それで十分です。私達の心が時間と空間との距を越えて、固く結ばれてゐると云ふ事は如何に不思議な併し又如何に美しい事でせう。愛するティルダよ。私達の間が國籍、國、血、教育、生活、習慣の差異、その他凡ての相違にも不拘、私達はお互に人間であると云ふ事で理解し合ひ、何ものもその間を距てる事の出來ぬ程完全に理解しあつてゐるのです。それは實に嬉しい、又美しい事です。

現在ヨーロッパを襲つてゐる恐ろしい戰禍の犧牲たる傷病者の看護に一身を獻げてゐると云ふあなたの態度に私は敬服します。それはあなたの樣な女性にとつて、最も適はしい仕事です。あなたは親切な愛情と注意深い思慮に富んだ方です。あなたの看護を受けた人々が、人類愛に目覺め、お互に殺し合ふと云ふ事を憎む樣になるのは疑ひもない事です。あなたのやさしい影響によつて現在ヨーロッパに魔手を伸してゐる恐ろしい戰爭を中絶せしめて下さい。併し貴女の御健康にも呉々も氣を付けて下さい。こんなに互が遠く離れてゐると云ふだけで十分に淋しい事です。その上もし萬一、私達が幽明界を異にする場合にでもなつたら、どんなにそれは大きな淋しさでせう。もし私達が現實に手を握り、唇を接する事が出來ないならば、せめて手紙の中にそれを交しませう。

度々お便りを下さい。お閑のある度に書いて下さい。私も間違なく書きます。母君によろしく。

あなたに告げるといふより、要求する。この手紙が着き次第、返事を下さい。それを約束して下さいますか。あなたは常に私の愛の奥深くに住んでゐる事を信じて下さい。淋しがらないで下さい。私も淋しがりますまい。愛のある所、人生

は生甲斐があります。あゝ、ティルダよ。どんなに私はあなたを愛するか。

## 輕井澤にて——同年八月十八日　（書簡）

妻の死、その他の報道を書いた手紙を御受取り下さいましたか。その後如何お暮しですか。病者、傷者の看護に御努めの事と思ひます。さうしてあなた自身御丈夫で御元氣ですか。いつも〳〵幸福で居られるように。あなたにそれを望む價値があります。既に耐へがたい様々の不幸を耐へて來られました。今や慰安を享けられてよい時です。私自身は依然元氣で夏をこの避暑地に送つてゐます。こゝには實に澤山の外人が居ます。此地は三千呎の高原で非常に涼しく、全ての人が夏の長い事を願つてゐる位涼しい土地です。三人の子供達も極めて元氣です。淺ましい戰爭の事は噂を書くさへ忌しい事です。が日本も、今度その戰爭に參加したらしいのです。さうして一部軍隊のシベリア出兵の準備をしてゐます。私も國民軍の一人として（この事はあなたに知つて貰ひ度いのですが）出征簿に載せられてゐます。何と××な事でせう。それは實に何の意味もない事です。

もうそんな事は止めませう。あなたに對する溫かい友情、それこそこの手紙を書く第一の目的なのですから。誠の友情を心に懷くものこそ、國家別、皮膚の色の相違などを忘れて、固く結ばれませう。心と心とが深く結ばれようとする願のみ、世界の眞の平和を齎すでせう。あなたもさうお思ひになりませう。さ、ならば假令小さいながらも、あなたと私とはこゝに眞の平和の締結の楔となる事が出來ます。

こんな難かしい理窟はさておいて、あなたの事を想ふ度に、私の心は波立ちます、それは不思議な位です。神が常に凡ての罪惡からあなたを守つて下さるように、さうして慰めを與へて下さるように。

私は著作に忙しく働いて居ります。第六番目の著作集か出かゝつてゐます。それは九月初に出版の豫定です。あなたが私の書くものを讀んで下さる事が出來たらと思ひます。假令あなたがお讀みになれなくとも、一部送りませう。さうして

假令外觀だけでも、あなたの興味を惹くかも知れません。その本の裝幀は壬生馬の手になるものです。弟は美しい家內と、可愛い娘と共に、幸福に暮してゐる事を序でながら申し上げておきます。

出來るだけ度々お手紙を下さい。互に文通する事によつて互の距たりを縮めませう。距離を忘れ、宛かも顏と顏と向き合ふやうな通信を交しませう。あなたのなさる事、あなたの健康、あなたの將來の計畫、希望、心配、それ等に關する凡てを一々知り度く思ひます。言葉の差と云ふものが嫌はしく思はれます。私達が考へ感ずる所のものを、そのまゝに傳へる事の出來ない言葉の相違と云ふことです。若し全世界を通じて同一の言葉であるならば、どんなに良いでせう。さうすれば私達の感情をそのまゝ知る事が出來ます。國別と國語別の不必要な障壁、こんな呪はしいものはありません。

母君は御機嫌いかゞです。ガムペルや、シュミットや、ブウフマンは？　それらの人々の消息を御存じですか。それからエンマ、フォルスターは？　リリエンスカヤは？　私達が無邪氣な小兒の群のやうに一緒に遊んだ日の事を想ふと、樂しい夢のやうです。物事は移り行きます。しかしティルダよ。私は變りません。私はいつもあなたの心からなる友で、いつも貴女の幸福を祈つてゐます。心からなる接吻を以てこの慌たゞしい手紙を閉ぢます。

よき夢と、よき珂寶と共にあなたを見舞はん事を祈ります。

二伸　恐らく一月後に私は東京に歸ります。御手紙はどうぞ東京宛に下さい。

## 東京より——一九一九年一月十五日　（書簡）

御心の籠つた長いお手紙を頂きました。感謝と感動とを以て讀み了りました。何よりも先づあなたが御丈夫で常に渝らぬ愛と熱心とをもつて貴い仕事を續けられてゐる事を喜びます。最近のお姿を寫したお寫眞を送つては下さいませんか。同封にて私と三兒の寫眞をお送りします。私も隨分年をとりましたらう？　しかし私の心は老いず、若い羊のやうに、ときめき躍つてゐます。

血醒い歐洲の天地に平和の訪れた事は何といな喜ばしい願はしい事でせう。平和克復の聲を聞かれた時、あなたの胸はどんなに踊つた事でせう。この恐ろしい國際間の鬪爭から遠く離れてゐた日本人でさへ、平和成立の聲を聞いては「萬歲」を叫ばずにはゐられませんでした。この大事件の結果として、よし「黃金時代」を期待する事は出來なくとも、これを轉期とし、世界文明の潮流は全く新しい方向を取つて進んで行かねばなりません。「國家」と云ふものがその限られた領域に退き、これに代ふるに人類と人格の威嚴とが進步の原動力として立たねばなりません。ドイツ帝國の專制政治の末路と共に、我國にも亦民主主義の精神が入つて來ました。さうしてそれは舊弊な偏見者から不當に排斥せられてゐます。併し時がその解決をするでせう。さうして新しい精神は愚かな傳統を滅し、やがて取り入れられるでせう。あなたの祖國が旣に數世紀以前に近代思想を體得せられた事は、如何に幸福な又先見の明でしたらう。

私達がシヤフハウゼン滯在中に會つた人々の上に、かゝつてゐる運命は私の氣になり、又私を悲しませる事です。ベシユリンはもうこの世にはゐないでせうか。あまりにも意外な又悲しい事ですね、あなたの母君は尙御元氣ですか。あなたの許婚者の心が再び歸つて來るのを、殆ど絕望に近いその事を今も尙待つて居られるのですか。何んと慘ましい悲しい事です。運命は如何にしてかくあなたに酷なのでせう。貴女はいつか日本を訪れると云はれましたね。それはいい。僞でないやうに。私の生ける限り心からの誠をもつてあなたをお迎へします。

私は文筆の仕事に一生懸命勵んでゐます。旣に七種の出版が市場に出、何れも十版以上を重ねてゐます。之は日本の書物としては珍らしい成功と云はねばなりません。私はそれを英語に譯して、ヨーロツパの人々の間に讀者を得られたらと思ひます。いつかはこの望を實現したいと思つてゐます。壬生馬は家族と今、海邊に住つて繪筆に親しんで居ます。少しく健康を損してゐるので、海岸にゐる事が彼の健康を回復するに最も良いと思ひます。

ティルダ！　手紙を下さい。澤山書いて下さる程良い。あなたの消息はいつも私に力を齎します。人生に力を與へるものは溫かい心のみです。あなたの心、それは私に無くてならないものです。忘れないで下さい。どうか、ティルダよ。

心からあなたの御健康と御幸福とを祈ります。

東京より――同年三月十五日（書簡）

元日に書かれた御手紙が温かい愛と友情とを以て屆きました。心からなる感謝さうして更に〳〵大きな悦！　私達の心がかくも結ばれて、時の距たり、場所の距たりも、之を妨げる事のないのは不思議です。私が軍隊名簿に登錄され戰線に送られるかも知れないと云ふ心配は無駄でした。私は召集されませんでした。さうして今や戰爭も終結を告げました。それのみならず、停年で今は全く軍籍から退いたのです。さう云へば年を老つたものですね、然も私の心は靑年の心です。仕事は之から始まるのです。畢生の仕事を完成させる爲めに私は長く生きなければならない。あなたも長生きをして下さい。而して日本來遊と云ふあなたの夢が實現されるように。貴女が日本へ來られるようになつたら、どんなに私は嬉しいでせう。貴女が一生に一度日本を訪ねられる事は意味のある事です。

私は尙著述に勵んでゐます。私の著作（今までに七册出たのですが）は特に若い人々の間に評判が良く、私はその爲めに勇氣を得ます。或著作は一萬部から賣れました。それは日本の出版界には稀有の事です。私は同胞の爲に何事かをしてゐると思ふと喜ばしいのです。唯あなたがそれを讀んで下さることが出來ない。

母君が尙御健全な事を知つて喜ばしく存じます。私の家族も皆丈夫です。子供達も立派に育ちました。三人の中二人は小學校に通つてゐます。寫眞をお送り出來ると良いのですが。その中に一枚寫してお送りしませう。どうかあなたのも御送り下さい。

日本は今×××が起り兼ねまじき危機に立つてゐます。民主的の傾向は今や一般人の心に沁み亙り、社會生活の改造に對する何等かの方法が講ぜられないならば滿足しない狀況です。我々は六十年以前に所謂維新を經驗しました。それは單に西洋文明を（特に物質方面に於ける）鵜呑みにしたに過ぎません。今や西洋の思想が國內に充ちわたり、國民思想を

××から××せしめようとしてゐます。その結果はどうなり行くか。誰にも分りません。しかしそれは興味のあると同時に××すべき事柄です。

無用な理論は扨おき、今一度あなたの手を取り、今一度なつかしいあなたの聲を聞き度いと云ふのが私の願です。なつかしい〳〵ティルダよ、私が日本への歸途あなたは幾度あなたの誠を認めて送つて下さつたのを御記憶ですか。港々で私はあなたのお便りを受け取り、大きな〳〵慰めを受けたのでした。私がチューリッヒを立ち、ドイツに向ふ時でしたね。私達はゲーテ通を停車場の方へ歩いて行きました。私達は別れの最後の瞬間までお互の目と目でやさしい語らひをつゞけたのです。それ以來私達は一つ心です。心で固く結ばれてゐます。これ程強い友情がこの世に二つと他にありませうか。ティルダ！　この友情を大事に持ちつゞけて行きませう。私達の墓場までも。最愛のティルダよ。この手紙に托して私の熱い〳〵接吻と、抱擁とを送ります。私の貧しい英語では私の心は表はす事が出來ません。兎に角言葉を以ては人の心の最も深い所を傳へる事は出來ません。字と字、句と句の間にあなたは私の愛を讀み取つて下さるでせう。私の愛する、誰にも増して愛するティルダよ。

## 東京より——一九二二年一月十四日　（書簡）

露の如くにあなたのお便りは私の眼を潤しました。三度まで私は悉しい便りを書かうとして、いつも書き度い事がありあまつて筆が進みません。あなたの嬉しい友情に對しいつも私が感謝してゐる事は御想像以上です。ティルダよ、湖畔の散歩を覺えてゐますか。その時は月が美しかつた。空氣は冷く肌ざはりがよかつた。他の人々も私達の前を歩いてゐました。私はあなたに寄り添ひ、あなたのポケットに手を入れてあなたの手を握りしめようとしましたが、あなたはそれを許されなかつた。その筈です。あなたは婚約中だつたのですもの。惡く取らないで下さい。その時のあなたに對する私の感は最愛の妹に對するそれでした。私は自分の行爲を恥かしいとは思ひません。私は親しくあなたに觸れないでは、私の

感情を傳へる事が出來ないと思つたのです。併し、お別れに際して停車場であなたの眼が私の眼を射、他の何物にも比べられない數多の愛撫の意味を傳へられた時、私は全く滿足し、私達の生命のある限り、二人は隔てる事の出來ない友だと云ふ事を知りました。しかしそれは實際に證せられました。數年の長い年月の後、私達はかうして心からの友情を抱いて相對してゐます。ヨーロッパの旅行中の友人の追憶も凡て失はれました。たゞ一人あなたのみが殘つてゐます。あなたは私を忘れない唯一の人、さうして私が忘れない唯一の人です。これは偶然な併し又必然な事です。

お手紙には書いてないが、御元氣の事と喜んでゐます。併しあなたが野戰病院の仕事を止められてから、何をして居られるか分りません。今でも母君と一緒にお住ひですか。さうして母君の御機嫌はいかがですか。シヤハゥゼンにゐた時の友はどうしてゐますか。ガムペルは？　リリエンスキーは？　シユミットは？　エンマは？　一度それらの人々に就て知らせて下さいまし、その後の消息を知り度いものです。

私は相不變元氣で、文筆の仕事に勵んでゐます。小說、脚本、紀行その他の諸篇を含めて既に十三の著作集を公にしました。私がヨーロッパの旅に就いて、ナポリからアッシジまでの印象を記した旅行記を一部贈呈します。私の物した小さなスケッチが、あなたの興味を惹くかも知れません。字はお讀みになれなくとも、少くとも繪はお分りでせう。

來る可き春に私の胸に長い間抱いてゐた望を實現しようと思つてゐます。即ち父から受けた全ての財產を棄てゝ、一介の文筆勞働者として生きて行かうと云ふ事です。社會的の地位とか、物質上の財產とかは、唯私の生涯を妨げるだけです。何等か價値あるものを生み出す前に裸一貫の人間であらねばなりません。さうでなければ、次の時代の正しい位置を算定する事が出來ません。あなたは私を馬鹿らしい、急進派だとお取りになるかも知れません。が、さうではありません。私は唯近い將來の日本に於て、凡ての人がなさねばならぬ事をするだけです。この試練に自分はよく耐へ得ると信じます。あなたも同じ意見であつて下さる事を願ひます。三人の子供達も立派に成長しました。私は大きな興味をもつて彼等の將來を樂みに見て行きませう。壬生馬は少なからず健康を損してゐるので、家族と共に東京から三十哩ばかり離れた海邊に

住んでゐます。しかし今では一日々々快くなつてゐますから間もなく全快するでせう。或る婦人に託して、お送りした荷物は無事に着いたさうで安心しました。その婦人の夫は日本で私が教鞭を取つたと同じ學校でドイツ語の教授をしてゐます。その名前はハンスコラーと云ひます。コラー夫妻は實に良い人です。特にコラー夫人のやさしい思ひ遣りのある性質が好きです。もしコラー夫人の住所を御存じで訪ねられるやうな事がありましたなら、貴女は非常に良い友を得られるでせう。

最愛のティルダよ。こんな風に書きつゞけてゐては際限がありません。もう止めなければなりません。筆を擱く前にもつと度々手紙を下さる事を約束しませう。私も亦もつとお便りを送ります。私の事を想ひ出されたなら端書なりと下さい。あなたの事に就て書いて下さる事が、どんな喜びを私に與へるか想像なさる事も難いでせう。あなたも同じ心持でゐて下さると思ひます。

幸福な平和な生活をお送り下さい。一度で良いから、僅かの期間でも良いから、日本へ來られるといふ夢をお棄てにならぬよう、最愛のティルダ！　抱擁と接吻とを以て。

## 東京より——同年三月四日　（書簡）

今日は私の第四十四回の誕生日で、あなたにお便りを書くに最も適はしい日だと思ひます。御機嫌如何ですか。變らず御元氣である事を祈ります。春は來ましたものゝ未だ淺く、梅や桃の花盛りでも、大分寒いです。先達、さうですね、一月も前ですか、オイゲン・ヱールリといふ瑞西人の醫學博士が、私を訪ねて來られました。その人はシヤフハゥゼンでの親しい友達の寫眞を澤山持つて來て下さいました。日本に有島と云ふ兄弟がゐるから、行つたら是非逢つて來いとあなた方に云はれたのださうですね。けれどもヱールリ氏はアドレスを失つてどうして私達を探したらいゝか分りませんでした。所がアメリカから日本へ來る太平洋の船中で、最初に話しかけた一人の若い日本人があつたのです。それが（不思議な縁にも）私の二番目の弟だつたのです。その弟の性は佐藤と云ひますが、その佐藤が私共の住所を教へたので、閑をみて直

ぐ私の所を訪ねて來られました。どんなに喜んで氏を迎へたかはあなたの想像に任せます。その寫眞の一枚に、壬生馬がガムペルやブフマン等とライン河の畔で、倚り添つて立つてゐるのがありました。勿論私が氏に尋ねた最初の言葉に貴女に就いてでした。博士は嘗て「白鳥ホテル」の直ぐ近所に住んでゐた事があつて、貴女の家族とはよく知つてゐると云はれました。さうして貴女が、今ホテルの近所に本屋の店を開いて居られる事を語られました。それだけの事を知つたのでも私は非常に喜びました。世界といふものも結局は何と小さいのでせう。

私は目下新しい小說に全力を盡して居ります。隨分長くかゝりますが、その完成を樂んでゐます。それは私の若い時の學生々活をモデルとしたものです。そこには私が默しては居られない位澤山の喜ばしい又悲しい、追憶があります。

同時に私は亡き父から讓り受けた財產を凡て拋棄し、全く裸一貫にならうと云ふ計畫を眞面目に企てつゝあります。あなたはそれを度外れの事と思はれるかも知れない。けれどもかくする事によつて、私は過去の仕事とは比較にならないいい仕事を作り出して行けると確信してゐるのです。私の過去の仕事は云はゞ遊戲でした。今著作と云ふ一事に私の生涯を限定してこそ、讀者の心の深い〳〵所まで訴へる事が出來ると信じます。私の變化を喜んで下さい。僅かの人だけが私の決心を理解して吳れます。さうして貴女がその中の最初の人でなければならない。今後私の書翰紙は次第に粗末なものとなつて行くでせう。もしあなたが日本へ來られたとしても、私の家であなたを十分におもてなしは出來ないかも知れません。しかしそれにも不拘、あなたは私の中によりよき人間を見出して下さるでせう。私は有產階級の生活といふものに全く望を失ひました。その種の生活は危機に瀕してゐます。その中から望のある出口はありません。行きつまりの道同然です。より新鮮な、より淨化された空氣を呼吸する爲めには、それから先づ脫け出なければなりません。

あなた自身のことを倦て語つて下さい。御仕事はどうですか。母君は？　その他色々の事を。リリイ、ペシュリンの寫眞を見ました。今友達と幼稚園を開いて居られるのださうですね。隨分變つた樣に見受けます。嘗ての愛らしさがなくなつて寧ろいかめしい樣子に變りましたね。それは現在の職業のせゐでせうか。それとも何か不幸にでもあつたのですか。

又エンマ嬢の寫眞も見ました。所々皺を見かける他あまり變らない樣です。兎に角皆が年をとつて行くのですね。しかし、しかしティルダよ。私の心は決して年をとりません。少くとも私は嘗つて私の胸の中に鼓動したと同じ火のやうな心を持つてゐます。それは奇妙な位です。而して私の心の最も神聖な場所に、あなたはいつも渝らず、若く、やさしく、愼み深く藏されてゐます。

## 東京より――同年四月十八日（書簡）

二月七日附御手紙約一週間程前に頂きました。音樂にそんなに秀でて居られるディスラー氏（註、ティルダは目下その妹にあたる人と共同してホテル經營をしてゐる。）をお迎へするのは非常に喜ばしい事です。日本の若い人達は西洋音樂の傑作を優秀な音樂家を聽く爲めにあらゆる機會を待つてゐる有樣です。しかし、經濟的には少しも惠まれてゐません。唯經濟的後援がないと云ふだけの理由で、若い人達の音樂に對する憧憬も滿されないのです。それ故に良い音樂を聽き度いと云ふ燃えるやうな望がありながら、吾國にはまだ一箇の管絃樂團もありません。かゝる狀況ですから、ディスラー氏の來朝も、非常な困難を見越さねばなりません。東京に一つ國立の音樂學校があります。そこに數人の獨逸人の教師がゐます。しかしその學校は頗る官僚的で、本國政府によつて資格あり、權威ありと認められたもの丶他は、絕對に採用しません。それのみでなく、それらの教師連は來朝當時はその本國でも何れも一流の人々だつたと云ふ話ですが、時と共にその技倆は著しく落ちて、數年後歸國する頃には本國の音樂家に伍してその名も技倆も非常に低いものとされ、殆ど存在さへ認められないやうになるさうです。此大きな缺點と技倆の退步とは日本の音樂界に競爭者がないと云ふ事に基因してゐるらしく思はれます。ディスラー氏が日本へ來る事を決心される前に、この事情を十分よく考慮される必要があると思ひます。私の考へる最も良い方法は東洋をざつと旅行してまはつて、日本、支那、印度、濠洲の大都市で演奏會を催される事です。既に我國はエルマン、シューマンハインクなどを迎へ、之等有名な人々の技を聽きました。近く六月にはヂンバリストを

迎へる筈です。之等の人々の技倆は聽衆によく感ぜられ、その仕事は十分酬いられたと思ひます。もしディスラー氏がこの種の旅行を望まれるならば、その興行に日本で一番適した帝國劇場の支配人に話し合つて見ませう。日本以外の國々の事は何等か他の方法で契約されなければなりますまい。この方法が一番安全でせう。どうかディスラー氏に萬事を相談して下さい。その上あなたからお指圖で凡てを取計らひませう。

先達あなたとコラー夫人ディスラー夫人（ディスラー氏の奧さんだと思ひますが）の寄せ書のお端書を頂きました。貴女方の御厚意を有りがたく存じます。コラー夫人の愛すべき性格をお分りになつたに違ひありません。私はコラー夫人を本當に高貴な人だと思ひます。あなた方お二人がお互に親密な友となられる事を祈つてゐます。その端書にその中長い手紙を下さるとお書きでした。心からお待ちしてゐます。若しこの手紙を御覽になつて未だその約を果して居られなかつたなら凡てを措いて直ぐ書いて下さい。あなたのお手紙を開く時、いつも、神祕な喜が私の心に忍び寄ります。この世界の廣さと狹さを痛切に感じます。私達の知り合ひになつてからの長い年月も、たつた一瞬に縮まつてしまひます。その時私は私の傍に貴女を感じます。（ここに私の寫眞を入れておきます）ああ、私は前にそれを送つたのでした。何と云ふ馬鹿でせう。

コラー夫人にお逢ひの節はどうぞよろしくお傳へ下さい。それから夫人の住所をお知らせ下さい。ディスラー夫人には「私の最も親しい友の友は又私の最も親しい友である」事をお傳へ下さい。

最愛の少女よ。我が心からの祝福を受けられよ。

## 東京より――同年六月二十日（書簡）

五月四日附のなつかしいお便りを數日前頂きました。どんなに心から喜んだでせう。今度は特別に長いお便りを下さいました。

何よりも貴女の親しい友の一人が近々日本へ來られると云ふ事を知つて喜ばしく思ひます。さうして最近の消息を色々

伺へる事を樂しみにしてゐます。その方が見えたら、私はあなたに關して、あらゆる細かしい端々まで聞き出さずには置きません。

私は相變らず元氣で、最近二册出版をしました。何れも相當眞率な賞讃を受けました。同時に財産處分の仕事にかゝります。全部片附くまでには相當長い時間がかゝりさうです。それは重大な仕事で、私は自分だけで靜かになさねばなりません。私は銀行株の他に幾らかの不動産を持つてゐます。その値段は大變廉くなつて來て、恐らく合衆國を除く外、他の凡ての國に於ても同樣である樣に適當な買手を求める事が困難です。集積した文明は急速に崩壞しつゝあるやうです。それは或意味に於てゞはありますが良い兆候でせう。

あなたのお友達の音樂家に關しての私の手紙はお受取でせう。殘念ながら日本で滿足な地位を見出すのは不可能ではないかと思ひます。

なさねばならぬ、差し迫つた仕事がありますから、今日は短信ながらこれで筆を擱きます。短くとも、長い手紙にも表はし切れない心からの愛をお送りします。ティルダよ。信じて下さい。お互の心を結ぶ愛の奇しき事よ。貴女に呼びかける毎に私は心の高鳴りを覺えます。常に私の心の奥深く貴女が若々しく、思ひやり深く生きてゐて下さる事を祈ります。

—第八卷了—

# 書簡集人名索引

## （ア）



## （カ）

昭和四年九月五日印刷
昭和四年九月十五日發行

非賣品

監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮

印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番